

議事録公表時まで対外非公表

&lt;不開示情報：有（種類：審議・検討）&gt;

&lt;配布先：金融政策決定会合関係者限り&gt;

&lt;作成局における保管期間満了時期：2039年12月&gt;

2009.8.5  
金融市場局

## 金融調節の運営実績

## 1. 無担O/Nレートの動向と金融調節

金融調節については、前回会合（7月14～15日）で決定された方針（「無担保コールレート（オーバーナイト物）を、0.1%前後で推移するよう促す。」）に従って運営した。無担O/Nレートは、誘導目標水準近傍で推移した。

この間、引き続き積極的な資金供給を行ったことから、準備預金の積み増しが前倒しで進捗し、無担O/Nレートは、0.098%～0.115%の狭いレンジで推移した。

金融調節運営面では、国債買現先オペ、CP現先オペの積極的活用を図る等、引き続き、金融市場の安定にも一層配慮しつつ、市場におけるレート形成状況等を踏まえた機動的な運営を行った。また、CP買入オペ、社債買入オペ、企業金融支援特別オペ、米ドル資金供給オペによる資金供給を引き続き実施した。

## 2. 当座預金・準備預金の動向

前回会合以降の準備預金残高（除くゆうちょ銀行）は、（7月積み期の所要準備額<除くゆうちょ銀行>： ）で推移した（7月16日： →7月31日： →8月5日： ）。

この間、当座預金残高は、12～13兆円台で推移した（7月16日：13.0兆円→7月31日：12.3兆円→8月5日：12.5兆円）。

以 上

(図表1)

## 金融調節の実績の推移

(億円、%)

	無担 コール レート (O/N) 加重 平均値	日銀当座預金残高(実績値)						補完 貸付 残高	<参考> 日銀当座預金残高見込み		
		準備預金残高(含むゆうちょ銀行)				非準備先 残高	朝方 即日オペ前		9:20 定例調節後	全即日オペ 実施後	
		準備預金残高(除くゆうちょ銀行)		超過 準備	残り所要額 (1日平均)						
		準備預金残高	超過 準備								
7月13日(月)	0.104	115,400	105,300		49,600	39,100	10,100	48.0	116,000	-	-
7月14日(火)	0.107	119,000	107,700		49,900	33,500	11,300	48.0	119,000	-	-
7月15日(水)	0.108	129,400	120,000		67,600	-	9,400	44.0	129,000	-	-
7月16日(木)	0.115	130,200	118,200		16,300	49,800	12,000	47.0	130,000	-	-
7月17日(金)	0.101	128,400	114,200		32,400	47,500	14,200	48.0	128,000	-	-
7月21日(火)	0.102	129,300	114,600		33,300	46,800	14,700	48.0	130,000	-	-
7月22日(水)	0.103	122,600	107,600		37,800	46,500	15,000	49.0	123,000	-	-
7月23日(木)	0.100	125,900	112,700		40,900	46,100	13,200	48.0	126,000	-	-
7月24日(金)	0.099	124,700	112,200		38,000	44,500	12,500	48.0	125,000	-	-
7月27日(月)	0.104	127,700	112,500		33,800	43,900	15,200	48.0	128,000	-	-
7月28日(火)	0.104	122,200	109,400		35,800	43,300	12,800	49.0	123,000	-	-
7月29日(水)	0.104	121,200	105,300		35,100	42,700	15,900	38.0	122,000	-	-
7月30日(木)	0.100	130,200	109,500		38,700	42,200	20,700	198.0	130,000	-	-
7月31日(金)	0.105	122,700	110,500		37,900	40,000	12,200	48.0	122,000	-	-
8月3日(月)	0.100	124,200	111,800		40,700	39,600	12,400	45.0	125,000	-	-
8月4日(火)	0.098	127,100	116,700		46,800	39,300	10,400	49.0	127,000	-	-
8月5日(水)	0.100	125,400	116,100		44,300	38,600	9,300	48.0	125,000	-	-

(注1)準備預金残高(除くゆうちょ銀行)は、対外非公表。

(注2)8月5日分は、5時同時処理終了時点。

## 日銀当座預金の保有状況

対外非公表

(単位:億円)

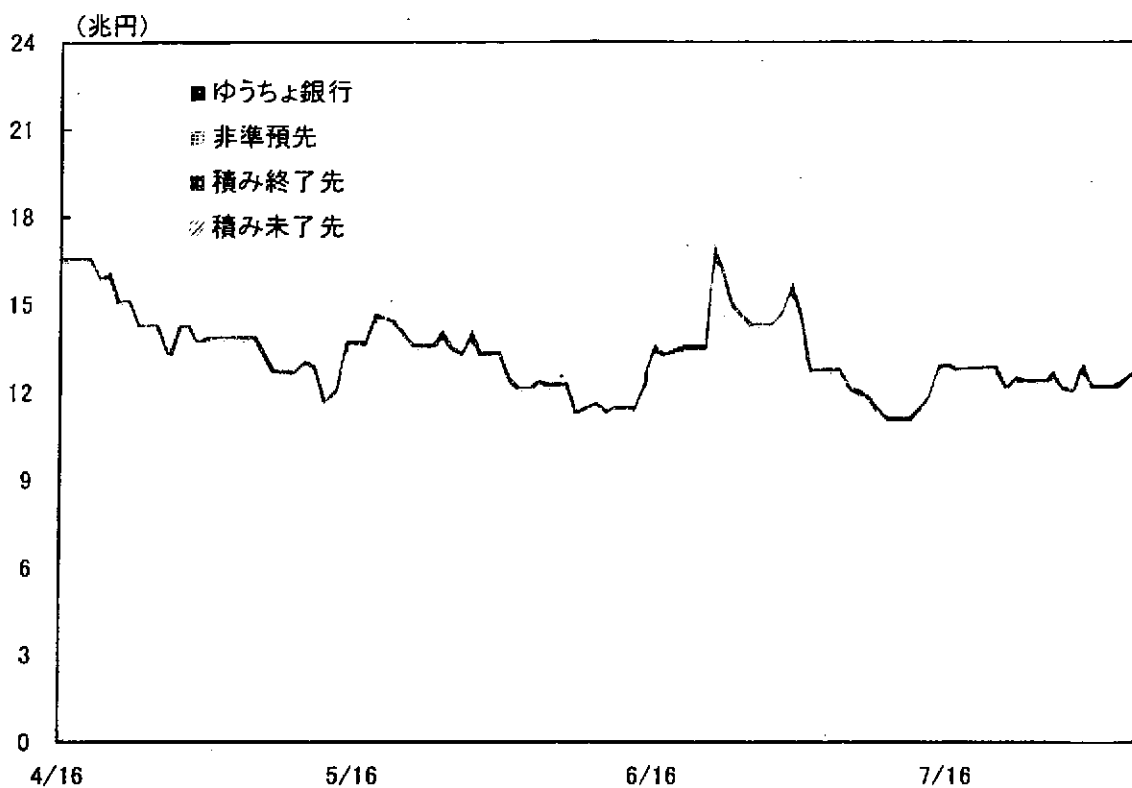
	4月積み期	5月積み期	6月積み期	7月積み期	8/5日	7月積み期 所要準備額
準預先	126,731	117,428	120,493	112,345	116,091	<72,627>
除くゆうちょ銀行						< >
都銀	31,407	31,585	31,498	33,298	30,514	<31,222>
地銀	19,560	18,157	19,148	18,164	14,210	<11,791>
地銀Ⅱ	5,257	3,673	4,220	3,360	2,883	<1,474>
外銀	24,079	21,247	22,029	19,187	26,190	<281>
ゆうちょ銀行						< >
非準預先	15,413	11,939	13,250	13,437	9,267	
短資	5,783	4,533	5,308	5,704	2,783	
一部系統	1,086	420	426	631	399	
政府系	365	535	575	522	271	
証券会社等	8,179	6,451	6,941	6,580	5,814	
当預残高	142,143	129,367	133,743	125,782	125,358	

(注1)「証券会社」は、金融商品取引法上の有価証券関連業を行う第一種金融商品取引業者。

(注2)7月積み期の計数は、7/16~8/5日の平均。8/5日は、5時同時処理終了時点。

### 09/4月積み期以降の当座預金残高

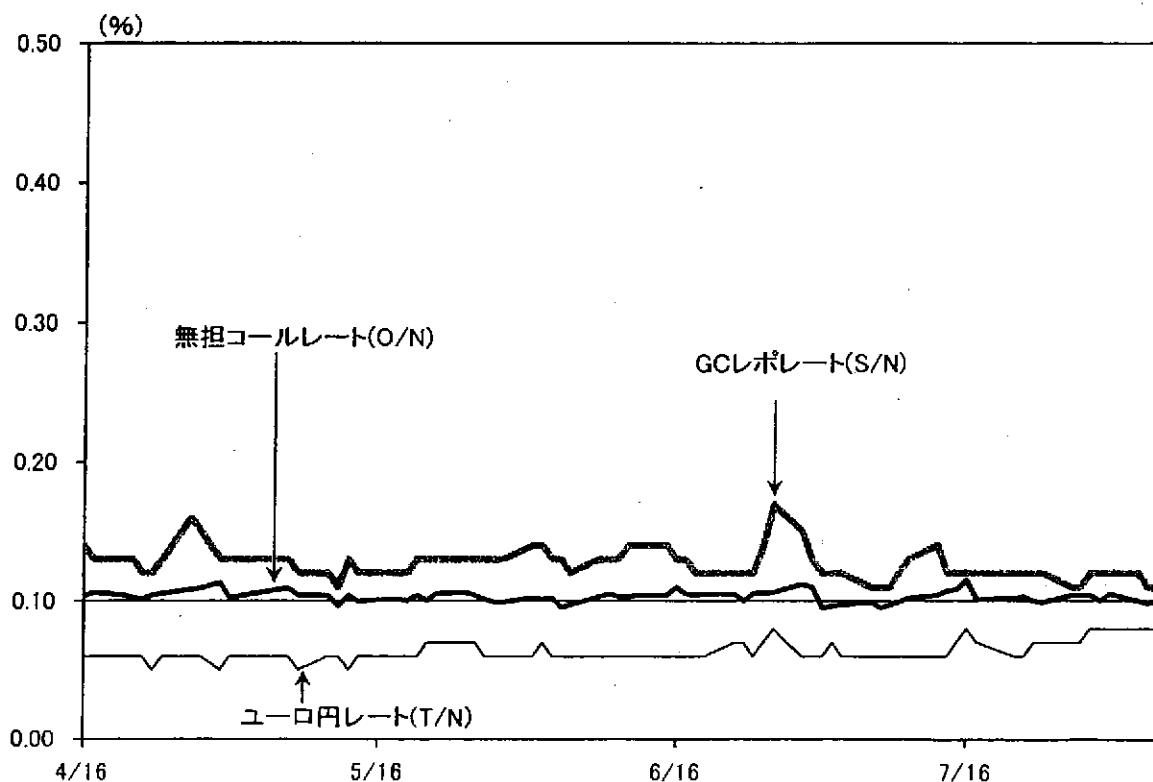
対外非公表



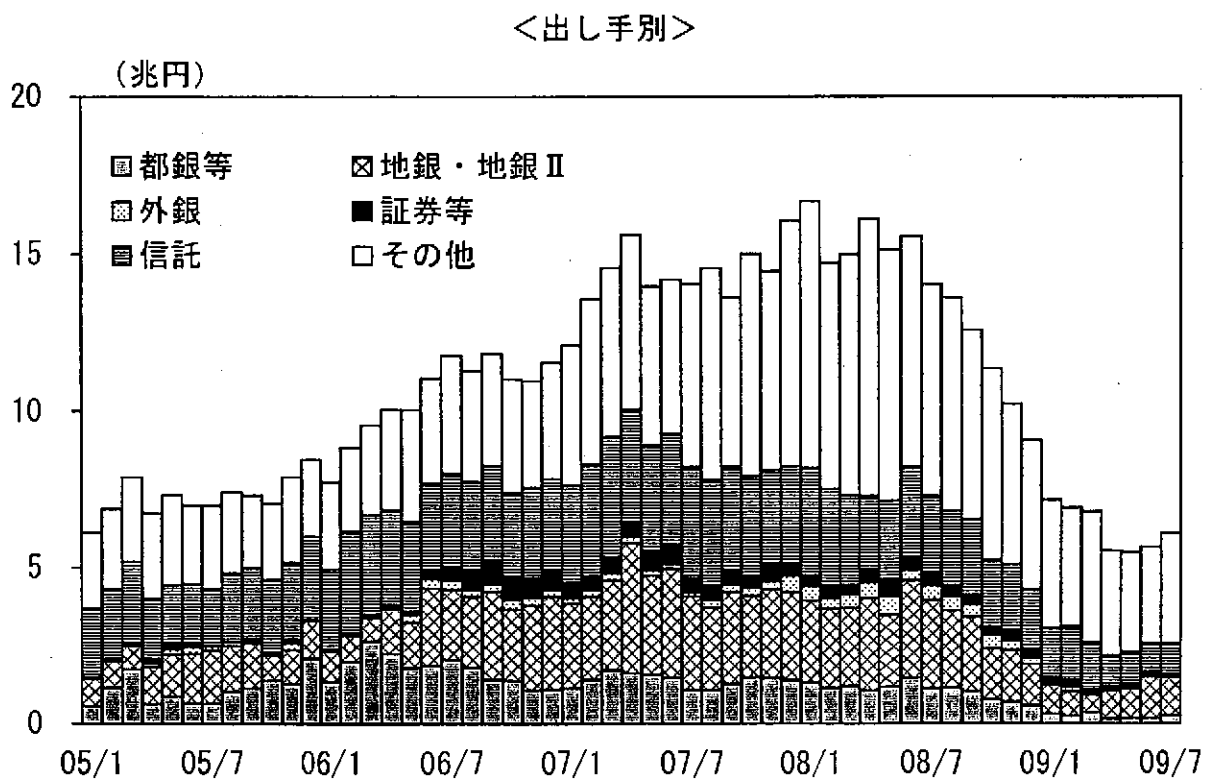
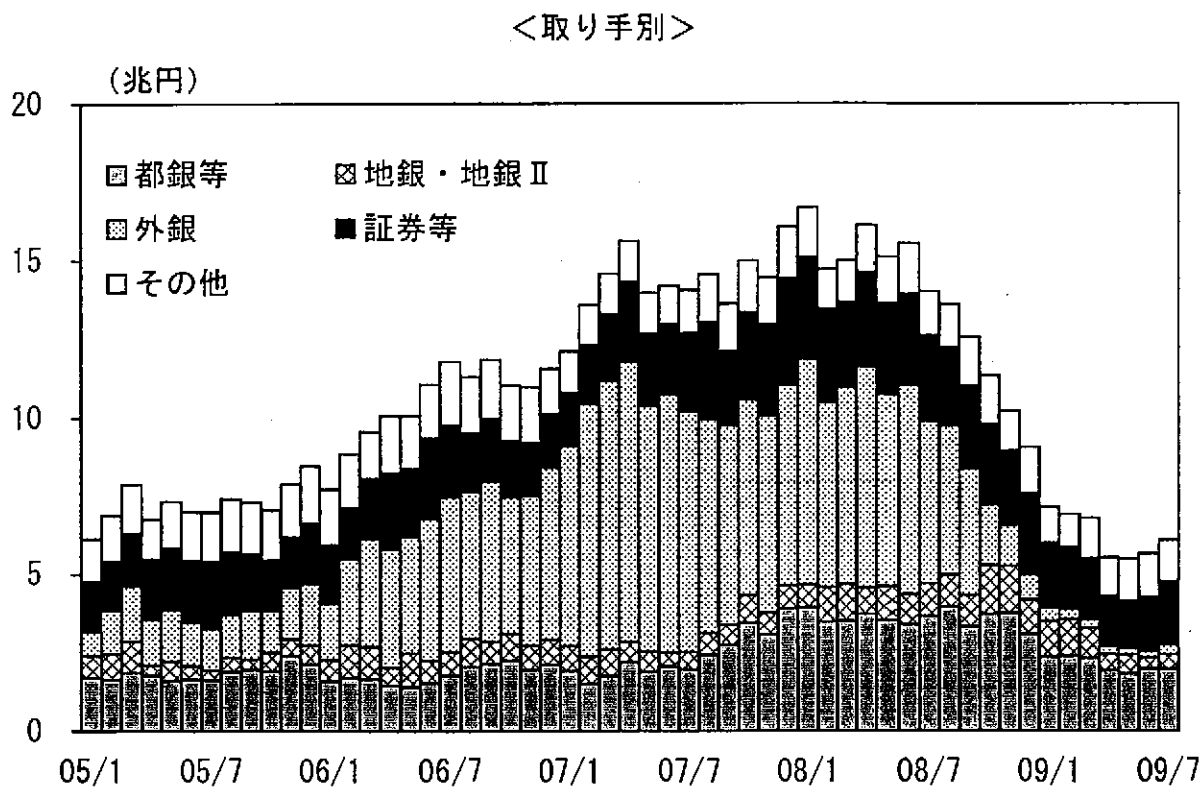
(注) 積み終了先、積み未了先及び一日当たり残り所要(前日終了時点)には、ゆうちょ銀行の計数を含まない。

### 09/4月積み期以降の短期金利

対外非公表



### 無担コール市場残高



(注1) 月中平残。09年7月分(暫定値)は、対外非公表。

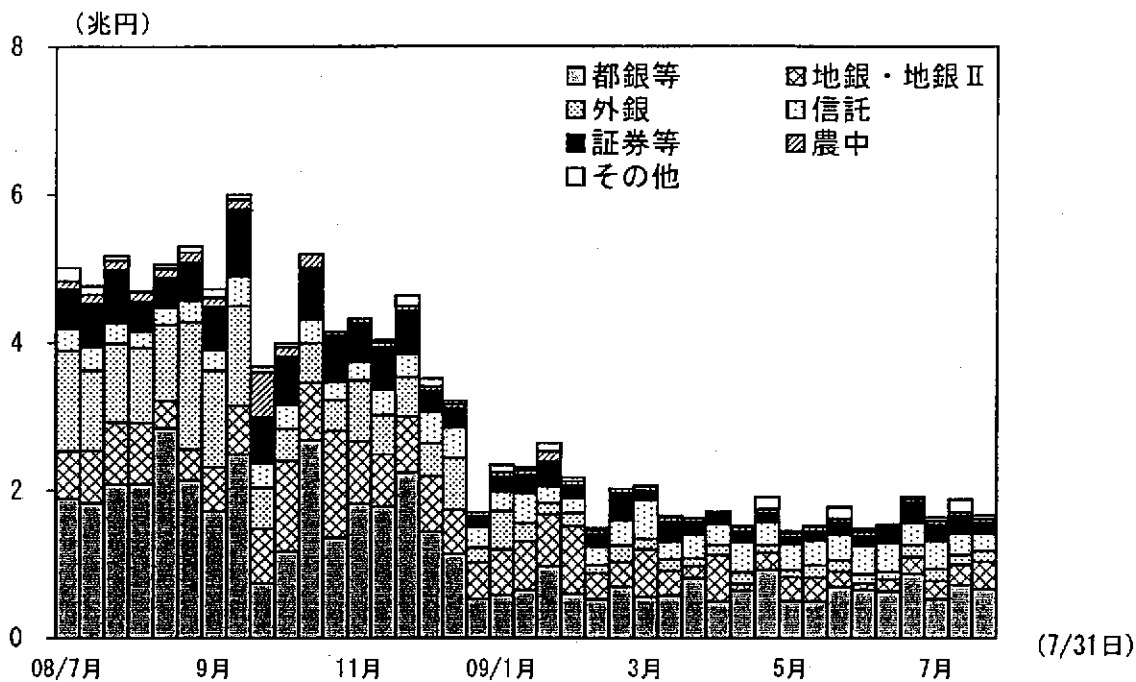
(注2) 無担コール市場残高における「都銀等」は都銀、新生銀行、あおぞら銀行。「証券等」は金融商品取引業者(他の区分に属するものを除く)および証券金融会社。

(図表5)

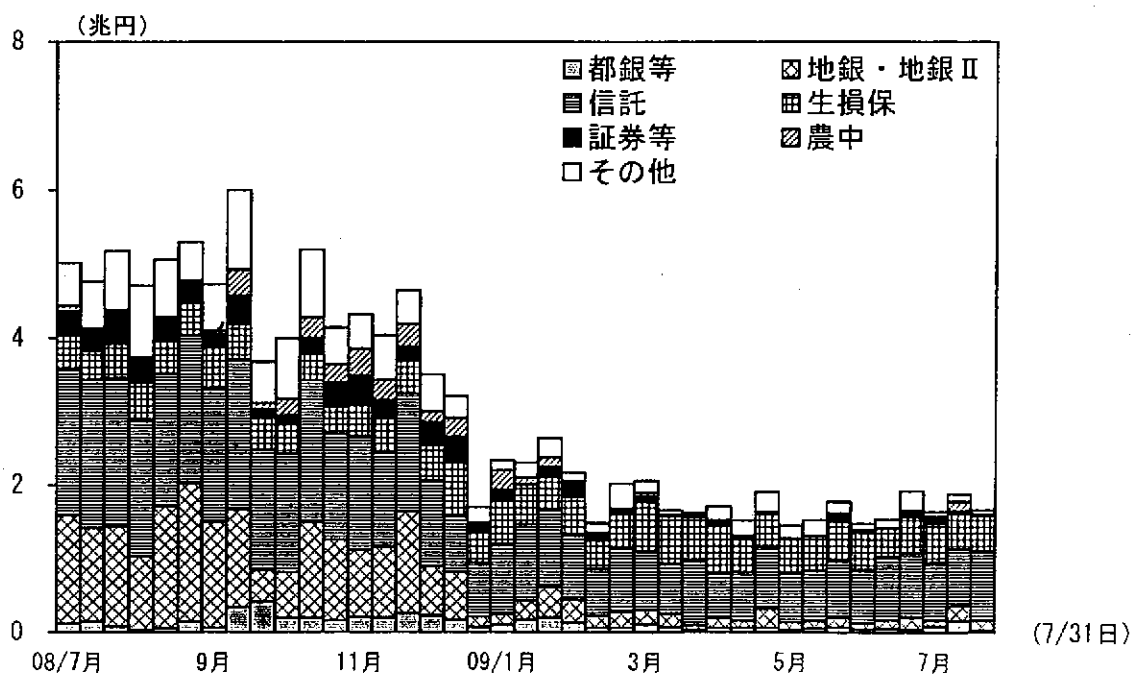
### 無担コール市場残高 (O/N、T/N、S/N計)

<取り手別>

対外非公表



<出し手別>



(注) 各旬末残高。

## 最近のオペ結果の推移(1)

(資金供給オペ)						(億円、%)		
オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札レート	落札決定レート
共通担保(全店)	98,076	7/17	T+1	3W	10,000	3.27	0.123	0.12
		7/17	T+2	3M	8,000	3.36	0.142	0.14
		7/24	T+1	1W	10,000	3.09	0.118	0.11
		7/24	T+2	3M	8,000	3.16	0.139	0.13
		7/30	T+2	3M	8,000	3.50	0.133	0.13
共通担保(本店)	122,039	7/14	T+1	2W	6,000	2.79	0.127	0.12
		7/14	T+1	3W	8,000	2.82	0.128	0.12
		7/15	T+1	1M	8,000	3.42	0.124	0.12
		7/16	T+1	2W	6,000	2.60	0.119	0.11
		7/16	T+2	2M	8,000	3.66	0.124	0.12
		7/21	T+1	1W	6,000	3.13	0.117	0.11
		7/21	T+1	1M	6,000	3.23	0.120	0.12
		7/22	T+1	1W	4,000	4.25	0.110	0.11
		7/23	T+1	3W	4,000	6.26	0.120	0.12
		7/23	T+2	2M	8,000	3.74	0.120	0.12
		7/27	T+1	1W	6,000	3.92	0.120	0.11
		7/28	T+1	1W	4,000	5.08	0.120	0.12
		7/28	T+2	2M	8,000	2.81	0.131	0.13
		7/29	T+1	2W	8,000	2.73	0.118	0.11
		7/31	T+1	1W	6,000	3.34	0.117	0.11
		7/31	T+1	1M	8,000	2.71	0.120	0.12
		8/3	T+1	2W	6,000	3.11	0.117	0.11
		8/3	T+1	1M	8,000	2.43	0.118	0.11
		8/4	T+1	1W	4,000	4.40	0.110	0.11
		8/5	T+1	3W	8,000	3.01	0.110	0.11
8/5	T+2	2M	8,000	3.08	0.125	0.12		
CP等買現先	27,912	7/14	T+2	2W	4,000	1.58	0.113	0.11
		7/16	T+2	1M	4,000	1.21	0.107	0.10
		7/21	T+2	1M	4,000	1.37	0.106	0.10
		7/23	T+2	2W	4,000	1.44	0.109	0.10
		7/28	T+2	2W	4,000	1.51	0.107	0.10
		7/30	T+2	1M	4,000	2.02	0.107	0.10
国債買現先	50,031	7/14	T+2	1D	15,000	1.99	0.130	0.13
		7/14	T+2	1W	8,000	2.65	0.125	0.12
		7/15	T+2	4D	15,000	1.96	0.117	0.11
		7/15	T+2	1W	8,000	2.63	0.123	0.12
		7/16	T+2	1D	15,000	2.18	0.123	0.12
		7/16	T+2	1W	8,000	2.93	0.120	0.12
		7/17	T+2	1D	12,000	2.90	0.121	0.12
		7/17	T+2	1W	8,000	2.60	0.120	0.12
		7/21	T+2	1D	12,000	2.66	0.121	0.12
		7/21	T+2	1W	8,000	2.52	0.120	0.12
		7/22	T+2	3D	12,000	2.30	0.118	0.11
		7/22	T+2	1W	8,000	2.48	0.121	0.12
		7/23	T+2	1D	12,000	2.41	0.118	0.11
		7/23	T+2	1W	8,000	2.57	0.123	0.12
		7/24	T+2	1D	10,000	2.51	0.115	0.11
		7/24	T+2	1W	8,000	2.98	0.120	0.12
		7/27	T+2	1D	10,000	2.63	0.113	0.11
		7/27	T+2	1W	8,000	2.95	0.120	0.12
		7/28	T+2	1D	10,000	2.64	0.115	0.11
		7/28	T+2	1W	8,000	2.67	0.120	0.12
		7/29	T+2	3D	10,000	3.00	0.120	0.12
		7/29	T+2	1W	8,000	2.52	0.120	0.12
		7/30	T+2	1D	10,000	3.36	0.120	0.12
		7/30	T+2	1W	8,000	2.68	0.118	0.11
		7/31	T+2	1D	10,000	3.05	0.120	0.12
		7/31	T+2	1W	8,000	3.35	0.119	0.11
		8/3	T+2	1D	10,000	2.88	0.120	0.12
		8/3	T+2	1W	8,000	3.02	0.114	0.11
		8/4	T+2	1D	10,000	2.30	0.111	0.11
		8/4	T+2	1W	6,000	3.25	0.115	0.11
8/5	T+2	3D	10,000	2.15	0.110	0.10		
8/5	T+2	1W	6,000	2.91	0.114	0.11		

(注1) オペ直近残高は2009/8/5日現在(実行日ベース)。

(注2) 国債買現先オペによる買入国債・受入担保国債のうち、変動利付債は4,134億円、物価連動債は3,511億円、30年債は119億円(2009/8/5日現在&lt;実行日ベース&gt;、対外非公表)。

(図表6-2)

## 最近のオペ結果の推移(2)

(資金供給オペ) (億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	平均落札レート		落札決定レート
						応札倍率	平均落札レート	
国庫短期証券買入	94,541	7/16	T+3	-	4,000	6.79	0.011	0.010
		7/24	T+3	-	4,000	4.31	0.002	0.001
		7/31	T+3	-	4,000	4.37	0.004	0.003
CP等買入	1,778	7/17	T+3	-	3,000	0.06	0.000	0.000
		7/24	T+3	-	3,000	0.05	0.000	0.000
		7/31	T+3	-	3,000	0.04	0.000	0.000
社債買入	2,218	8/5	T+4	-	1,500	0.23	0.001	0.000
国債買入	-	7/17	T+3	-	3,100	1.57	0.003	0.002
		7/17	T+3	-	2,500	3.20	0.003	0.001
		7/27	T+3	-	2,500	3.15	0.009	0.008
		7/27	T+3	-	400	2.43	0.434	0.680
		8/5	T+3	-	3,100	3.02	0.010	0.010
		8/5	T+3	-	2,500	3.02	0.001	0.000

(米ドル資金供給オペ) (百万ドル、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日 (米国東部時間)	期間	落札額	貸出利率 (固定金利)	
						応札倍率	貸出利率
米ドル資金供給	8,113	7/14	7/16	3M	220	-	1.210
		7/28	7/30	1M	2,020	-	1.200

(企業金融支援特別オペ) (億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日	期間	落札額	当初貸付利率	
						応札倍率	当初貸付利率
企業金融支援特別	73,168	7/16	7/22	3M	10,284	-	0.100
		7/22	7/27	3M	4,351	-	0.100
		7/27	7/30	3M	2,536	-	0.100
		8/3	8/6	3M	4,877	-	0.100

(注1) オペ直近残高は2009/8/5日現在(実行日ベース)。

(注2) 国庫短期証券買入・CP等買入・社債買入・国債買入の平均落札レート及び落札決定レートは、利回り較差(変動利付債・物価連動債については、価格較差)。

(注3) 国庫短期証券買入の直近残高は、繰上償還等を控除していない。



(図表7)

## 資金需給の推移

(単位：兆円)

	資金需給 (国庫短期証券調整済)			金融調節 (国庫短期証券調整済)	当預残高 (末残)	
		銀行券	財政等 (国庫短期証券調整済)			
09/2月	▲2.1	▲0.1	▲2.0	+4.3	13.6	
3月	+3.0	+0.0	+3.0	+5.6	22.1	
4月	▲1.2	▲1.4	+0.3	▲7.2	13.8	
5月	▲6.0	+1.9	▲7.9	+5.6	13.4	
6月	+8.1	▲0.3	+8.5	▲5.8	15.7	
7月	▲9.8	+0.3	▲10.2	+6.3	12.3	
8月	(-5日)	+0.2	+0.5	▲0.2	+0.0	12.5
	(6日-)	▲4.5	▲0.2	▲4.3	▲18.0	N.A.

(注1) ここでの資金需給は、各月の表面上の計数に、本行が買入れた国庫短期証券の償還額を加えたもので、実ベースの資金需給。金融調節は、国庫短期証券の償還分も含めた計数で、短期オペ残高の増減に国債買入額を加えたものに一致する。

(注2) 8月(6日-)の資金需給は、現時点での予想。金融調節は、8/5日までにオファーしたオペのスタート・期落ち分に国債買入(1.3兆円)を加えたもの。

(注3) 四捨五入の関係で、資金需給の内訳と合計は必ずしも一致しない。



(図表9)

(\*)は対外非公表

## 本行受入担保残高の推移

末残、単位：表内=兆円、括弧内=億円

担保種類	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
総計	104.9	107.2	100.1	105.5	103.1	105.9
国債	71.3	70.1	65.9	70.0	65.6	70.6
利付国債等 <sup>(注1)</sup>	51.5	49.8	46.0	48.4	47.7	<sup>(注2)</sup> 50.4
変動利付国債(*)	12.0	12.6	12.2	12.0	11.7	11.9
物価連動国債(*)	2.4	2.1	2.0	2.3	2.1	2.1
国庫短期証券	19.8	20.3	19.9	21.6	17.8	20.1
社債等 <sup>(注3)</sup>	1.4	1.4	1.4	1.4	1.5	1.5
短期社債等 <sup>(注4)</sup>	2.0	2.8	2.2	2.6	3.3	3.3
その他債券 <sup>(注5)</sup>	6.5	6.4	6.0	5.8	5.9	6.0
手形 <sup>(注6)</sup>	1.9	1.5	1.8	1.8	1.3	1.3
証貸	21.6	24.7	22.5	23.6	25.3	23.0
企業向け等 <sup>(注7)</sup>	2.8	4.3	4.7	4.8	4.9	5.1
政府向け等 <sup>(注8)</sup>	18.7	20.3	17.8	18.7	20.4	17.9
うち民間債務分	8.3	10.3	10.3	10.8	11.1	11.4

ABS	427	426	418	419	421	424
ABCP <sup>(注9)</sup>	2,959	5,140	5,090	5,155	2,810	2,780
(うち特則分)(*)	(129)	(15)	(15)	(34)	(17)	(9)
社債特則分(*)	613	737	658	613	689	554
企業向け証貸特則分(*)	1,610	3,195	4,377	4,412	4,789	4,433
不動産投資法人債	0	36	40	30	41	46
不動産投資法人CP <sup>(注10)</sup>	0	0	0	0	0	0
不動産投資法人向け証貸	0	0	0	0	0	0
政府保証付短期債券	0	0	0	0	0	0
政府(特別会計含む)向け証貸	176,039	191,031	164,532	173,984	190,462	165,103
政府保証付証貸	11,764	12,849	13,761	13,865	14,153	14,257
地方公共団体向け証貸	-	-	0	0	0	116
外貨建外国債券	-	-	-	-	-	0

(参考) 現先オペでの買入残高

末残、単位：表内=兆円、括弧内=億円

オペ種類	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
国債買現先オペでの国債買入残高	8.0	8.9	7.8	7.4	6.3	4.9
CP等買現先オペでのCP買入残高	2.7	2.9	2.6	2.7	2.7	2.7

ABCP買入残高	4,661	5,999	3,579	4,011	4,650	5,621
(うち特則分)(*)	(4,412)	(5,477)	(3,030)	(3,478)	(3,949)	(4,893)
不動産投資法人CP買入残高	0	0	0	0	0	0
政府保証付短期債券買入残高	0	520	600	380	900	400

(注1) 利付国債、割引国債、承継国債および分離国債。

(注2) 分離国債は、183億円。(\*)

(注3) 不動産投資法人債を含む。

(注4) 短期社債、保証付短期外債、資産担保短期債券、短期不動産投資法人債および政府保証付短期債券。

(注5) 外貨建外国債券を含む。

(注6) CPを含む。

(注7) 不動産投資法人向け証貸を含む。

(注8) 政府(特別会計含む)向け証貸、政府保証付証貸および地方公共団体向け証貸。

(注9) 資産担保短期債券を含む(以下同じ)。

(注10) 短期不動産投資法人債を含む(以下同じ)。

(図表10)

対外非公表

## 共通担保使用状況

単位：兆円

	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
共通担保使用額合計 <sup>(注1)</sup>	39.3	40.6	32.2	35.1	27.3	31.5
うち共通担保オペ使用額 <sup>(注1)</sup>	30.4	32.6	26.6	31.2	24.2	29.7
当座貸越残高 日中ピーク <sup>(注2)</sup>	5.4	5.3	5.3	4.8	5.2	5.3

(注1) 末残。企業金融支援特別オペを含む。

(注2) 平残（ITC口を除く）。

(\*)は対外非公表

## 信用判定・適格審査の状況

## 1. ABCP、J-REITの担保適格審査状況

	件数	発行枠	受入残高 <sup>(注1)</sup>
担保適格ABCP (特則分) (*)	14件	9兆5,500億円	4,902億円
担保適格ABCP (本則分) (*)	6件	1兆1,025億円	3,498億円
市中ABCP計 <sup>(注2)</sup>	42件	16兆6,993億円	—
担保適格J-REIT	10件 (*)	—	46億円

(注1) 「受入残高」は7月末時点（共通担保受入額とCP等買現先オペでの買入残高の合計）。

(注2) 「市中ABCP計」は2009年3月末の計数。

## 2. 信用判定の状況

	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月 <sup>(注)</sup>
新規適格化先数 (*)	11	3	0	3	0	3	0
取下げ・抹消先数 (*)	2	3	1	3	1	3	0
信用判定適格先数	371	371	370	370	369	369	369

(注) 8月5日時点。

議事録公表時まで対外非公表

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>  
<配付先：金融政策決定会合関係者限り>  
<作成局における保管期間満了時期：2039年12月>

2009.8.5

金融市場局

## 最近の金融・為替市場の動向

### 1. 概況

前回の政策決定会合以降の市場動向をみると、短期金融市場では、日本銀行の積極的な資金供給などを背景に、足もと資金余剰感が強まっており、金利は低位で安定的に推移している。しかし、一方で、取引の薄い市場も残されており、なお神経質な地合いが続いている。すなわち、無担保コールレート（O/N）は、誘導目標水準近傍で推移しているほか、レポレートも、0.1%台前半で推移している。また、短国レートは、1年物も含め、0.1%台で安定的に推移している。一方、長めのタームの銀行間取引金利は、小幅低下したものの、取引の薄い状況が続く中、短国レートやOISレートに比べ、なお高めの水準となっている。

国内資本市場をみると、景気の先行きに対する慎重な見方が幾分後退したことなどをを受けて、長期金利（10年新発債流通利回り）が、1.4%台半ばまで上昇している。また、株価（日経平均株価）も、10千円台前半まで上昇している。一般債流通利回りの対国債スプレッドについては、高格付け銘柄に対する需要には底堅さがみられるものの、これまでのスプレッドの縮小により、割安感の解消が相当程度進んできたこともあり、横ばい圏内の動きとなっている。この間、低格付け銘柄については、特定業種を中心に、投資家の先行きに対する不透明感が根強く、スプレッドが拡大する動きもみられている。

為替市場をみると、円の対ドル相場は、米企業の企業業績を巡る懸念がやや後退する中で、幾分円安化し、足もと95円前後で推移している。

## 2. 市場別の動向

### (1) 短期金融市場

わが国の短期金融市場をみると、日本銀行の積極的な資金供給などを背景に、足もと資金余剰感が強まっており、金利は低位で安定的に推移している。しかし、一方で、取引の薄い市場も残されており、なお神経質な地合いが続いている（図表1）。翌日物金利については、無担保コールレート（O/N）が、誘導目標水準（0.1%）の近傍で推移している。GCレポレート（S/N）は、預貸バランスの改善を受けて都銀が比較的安定的に資金を放出していることなどから、0.1%台前半で推移している。ターム物金利については、短国レートは、短国の高水準の発行が続くなかでも、都銀などが資金運用を増やしていることから、1年物も含め、0.1%台で安定的に推移している。一方、銀行間取引金利（ユーロ円レート）は、小幅低下したものの、長めのタームでは取引の薄い状況が続いており、短国レートやOISレートに比べ、なお高めの水準となっている。

	前回決定会合 直前（7/13日）	期間中ピーク （終値ベース）	期間中ボトム （終値ベース）	直近終値 （8/5日）
無担コールレート （O/N、加重平均）	0.104%	0.115% （7/16日）	0.098% （8/4日）	0.100%
GCレポレート （出合い、S/N）	0.140%	0.140% （7/13日）	0.110% （8/4-5日等）	0.110%
短国レート （3M）	0.150%	0.160% （7/17-21日）	0.145% （8/5日）	0.145%
短国レート （6M）	0.155%	0.170% （8/4-5日）	0.155% （7/13-7/15日）	0.170%
短国レート （1Y）	0.180%	0.180% （7/13-8/5日）	0.180% （7/13-8/5日）	0.180%
ユーロ円金先レート （2009/12月限）	0.460%	0.515% （7/31,8/4日）	0.460% （7/13日）	0.510%

—— 銀行間取引における9月末越えの資金に対するプレミアムについて、TIBOR-OISスプレッド（1か月物フォワードレート）をみると（図表2）、限定的であり、期越えに対する警戒感はさほど強くない。

—— CP市場については、日本銀行の企業金融支援措置の効果や企業の資金需要の低下を背景に、比較的落ち着いた発行環境が維持されている（図表2）。a-1格以上の発行レートは、リーマン・ブラザーズ破綻前の時期のように、銀行貸出金利のベースレートとなるTIBORを下回って推移しているほか、低格付けのa-2格の発行レートも、概ね横ばい圏内で推移している。なお、CPの9月末越え発行については、発行レートの特段の上昇はみられ

ておらず、例年並のペースで発行が行われている。

—— この間、主要通貨の調達環境に関して、LIBOR-OISスプレッドをみると、縮小傾向が続いており、2007年8月のパリバ・ショック以前の水準は上回っているものの、リーマン・ブラザーズ破綻前を下回る水準まで低下している（図表3）。

ユーロ円金利先物レートをみると、先行き1年程度は、金利は横ばい圏内で推移することが見込まれている（図表4）。

—— OISレートから、日本銀行の政策運営に対する市場参加者の見方を窺うと、政策金利は当面据え置かれることが予想されている（図表4）。

## （2）債券市場

債券市場をみると、わが国の長期金利（10年新発債流通利回り）は、景気の先行きに対する慎重な見方が幾分後退したことなどを受けて、上昇に転じ、1.4%台半ばの水準となっている。ただし、銀行の預貸バランスの改善が続くもとで、7月から増額された国債入札が無難に消化され、需給悪化懸念が後退していることもあり、金利上昇ペースは緩やかなものとなっている（図表5）。

	前回決定会合 直前（7/13日）	期間中ピーク （終値ベース）	期間中ボトム （終値ベース）	直近終値 （8/5日）
2年新発債 利回り	0.245%	0.275% （8/3日等）	0.245% （7/13日）	0.265%
5年新発債 利回り	0.660%	0.720% （8/3日）	0.660% （7/13日）	0.705%
10年新発債 利回り	1.300%	1.450% （8/4日）	1.300% （7/13日）	1.430%
20年新発債 利回り	1.985%	2.165% （8/4日）	1.985% （7/13日）	2.145%

—— イールドカーブは、前回会合以降、長期・超長期ゾーンを中心に上昇している（図表6）。

—— 債券利回りの変動要因をみると、「景気動向」に対する注目度が高まっている（図表6）。

債券相場の先行きについては、景気見通しに関する不確実性が強い中で、財政赤字の拡大懸念も引き続き意識されており、神経質な展開を見込む向きが多い。

—— インプライド・ボラティリティは、概ね横ばい圏内の推移となっている（図表7）。この間、国債の市場流動性も、一頃に比べ改善してきているが、なお低い状態が続いており、内外の経済動向に関する材料に反応しやすい展開が見込まれる。

### （3）クレジット・スプレッド等

わが国のクレジット市場をみると、高格付け銘柄（地方債、銀行社債、電力債など）に対する需要には底堅さがみられる。しかし、一般債流通利回りの対国債スプレッドは、これまでのスプレッドの縮小により、割安感の解消が相当程度進んできたこともあり、横ばい圏内の動きとなっている（図表8）。一方、低格付け銘柄では、投資家の選別姿勢が根強くみられ、特定業種（不動産・建設、消費者金融など）の社債を中心に、スプレッドが拡大する動きもみられている。CDSプレミアムは、全体としては縮小傾向を辿ったが、消費者金融などの特定銘柄では、先行き不透明感の強まりなどから、拡大する展開となっている（図表9）。

	前回決定会合 直前 (7/13日)	期間中ピーク (終値ベース)	期間中ボトム (終値ベース)	直近終値 (8/4日)
A格社債の対国債 スプレッド (5年)	1.169%	1.219% (7/28日)	1.159% (8/3日)	1.167%
BBB格社債の対国債 スプレッド (同)	4.253%	4.481% (7/23日)	4.116% (7/24日)	4.220%
CDSプレミアム (iTraxx Japan 5年)	242.0bps	242.0bps (7/13日)	150.8bps (8/4日)	150.8bps

クレジット・スプレッドの先行きについては、当面、神経質な展開を見込む向きが多い。

—— 足もとは、企業決算が総じて底堅い内容であったことなどを背景にひとまず企業業績に対する懸念が後退しているように窺われるが、先行きの不透明感は払拭されていないとの見方が多い。クレジット・スプレッドは、当面は、市場流動性がまだ十分回復していないもとので、特定業種の動向や企業業績の動向に応じて振れやすい地合いが続くとみられる。

### （4）株式市場

株式市場をみると、底堅い企業決算発表により、企業業績を巡る懸念がやや後退したことなどを背景に、米欧の株価が上昇するなかで、わが国の株価（日経平均株価）も上昇し、足もとは10千円台前半で推移している（図表



10)。

	前回決定会合 直前 (7/13日)	期間中ピーク (終値ベース)	期間中ボトム (終値ベース)	直近終値
日経平均株価	9,050円	10,375円 (8/4日)	9,050円 (7/13日)	10,252円 (8/5日)
TOPIX	852pts	959pts (8/4日)	852pts (7/13日)	949pts (8/5日)
NYダウ平均	8,331ドル	9,320ドル (8/4日)	8,331ドル (7/13日)	9,320ドル (8/4日)
NASDAQ 総合指数	1,793pts	2,011pts (8/4日)	1,793pts (7/13日)	2,011pts (8/4日)

— わが国株式の主体別売買動向をみると、外国人が7月半以降、買い越しに転じたほか、4月以降売り越し基調を継続してきた金融機関（年金資金を含む）も売り買いを交錯させている（図表11）。

— REIT価格については、業界再編期待や政府支援を背景に持ち直しの動きがみられたが、足もとは、上昇傾向に一服感がみられている（図表11）。

株式相場の先行きについては、世界景気や金融システムに対するセンチメントの変化に応じ、振れやすい地合いが続くとの見方が多い。

— 株価のインプライド・ボラティリティは、引き続き低下傾向を辿っている（図表11）。

## (5) 為替市場

為替市場をみると、円の対ドル相場（NY市場16時時点ベース<以下同じ>）は、米企業の企業業績を巡る懸念がやや後退する中で、幾分円安化し、足もとは、95円前後で推移している（図表12）。

	前回決定会合 直前 (7/13日)	期間中ピーク (終値ベース)	期間中ボトム (終値ベース)	直近終値 (8/4日)
円の対ドル相場	92.92円	92.92円 (7/13日)	95.45円 (7/30日)	95.27円
円の対ユーロ相場	130.06円	130.06円 (7/13日)	137.39円 (8/3日)	137.17円
ユーロの対ドル相場	1.3997ドル	1.4412ドル (8/3日)	1.3939ドル (7/14日)	1.4398ドル

— ユーロの対ドル相場は、ユーロ独自の材料が乏しい中、海外投資家のリスク・アペタイトの改善から、ドルや円が売られるなかで、足もとは、1.44ドル前後での推移となっている。

— この間、クロス円相場は、海外投資家のリスク・アペタイトの改善を背景に上昇したが、総じてみると、新年度入り後のレンジ内で推移している（図表14）。

— IMM先物取引ポジションをみると、ドル/円、ユーロ/ドルともに、足もとドルのショート・ポジションが幾分拡大している（図表13）。一方、外為証拠金取引では、豪ドルなど一部通貨に対し、相場に対して逆張りのなポジションの造成やその巻き戻しといった動きが続いており、一方的にポジションが積み上がる傾向はみられていない（図表14）。

為替相場の先行きについては、市場流動性は緩やかな回復傾向にあるが、なお、不安定な地合いが続くとみる向きが多い。

— ドル/円オプションのインプライド・ボラティリティ（1M）は、横ばい圏内で推移している（図表13）。

以 上

「最近の金融・為替市場の動向」参考計表

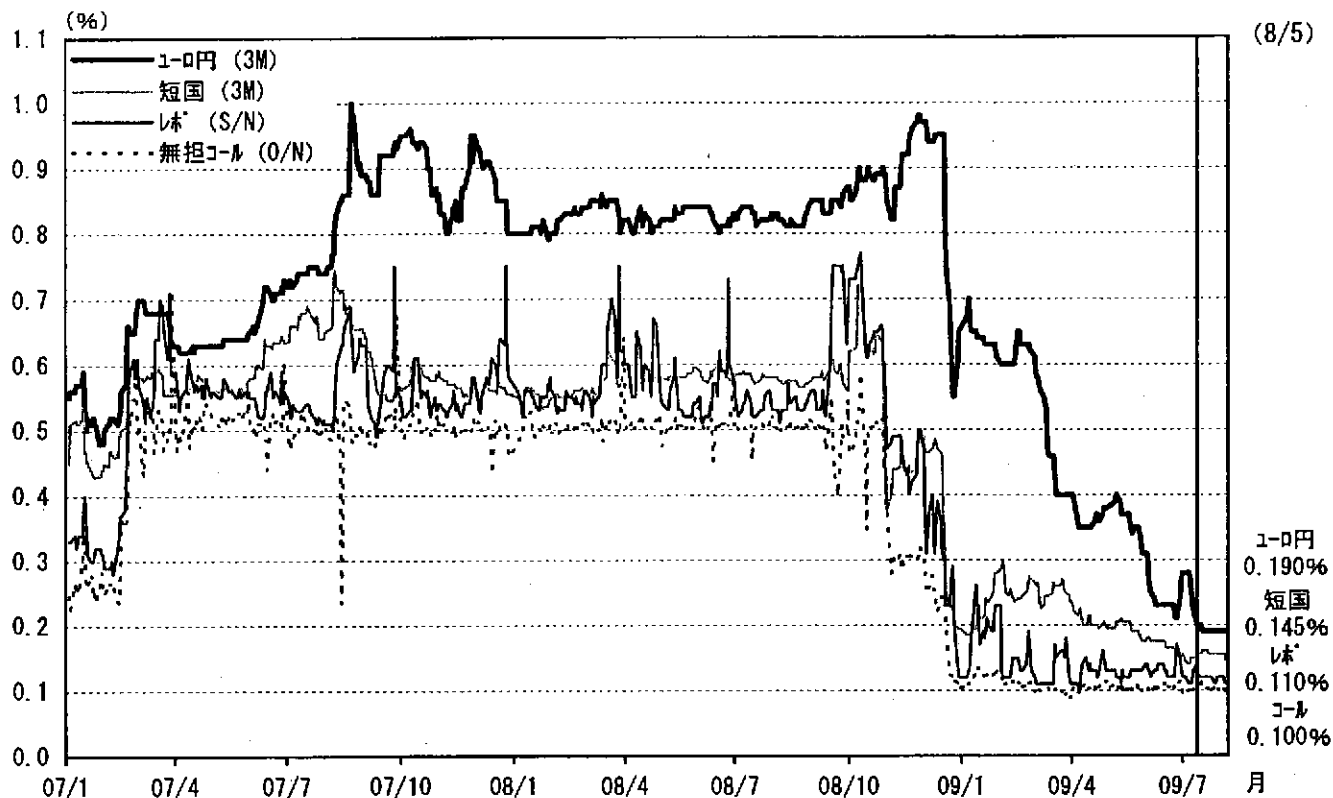
- (図表 1) 短期金利の推移
- (図表 2) ターム物レートの推移 (1)
- (図表 3) ターム物レートの推移 (2)
- (図表 4) フォワードレートの動向
- (図表 5) 長期金利の推移
- (図表 6) イールド・カーブの動向  
市場参加者が注目する債券利回り変動要因
- (図表 7) インプライド・ボラティリティの推移  
長国先物の値幅・出来高比率の推移
- (図表 8) 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移
- (図表 9) CDS プレミアムの推移
- (図表 10) 株式相場の推移
- (図表 11) 主体別売買動向等
- (図表 12) 主要為替相場の推移
- (図表 13) 通貨オプション、先物市場の動向
- (図表 14) クロス円取引の動向
- (図表 15) エマージング、コモディティ市場の動向

(注) 図表中の縦線は、特に断りのない限り前回会合の前営業日 (7/13 日) を表す。

(図表1)

## 短期金利の推移

## (1) 短期金利の推移



## (2) ターム物レート等の推移

(%)

	無担コール	レポ	TIBOR	ユーロ円			短国		
	0/N	S/N	3M	1M	3M	6M	3M	6M	1Y
09/7/13	0.104	0.140	0.564	0.140	0.200	0.500	0.150	0.155	0.180
7/14	0.107	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.155	0.180
7/15	0.108	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.155	0.180
7/16	0.115	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.160	0.180
7/17	0.101	0.120	0.564	0.140	0.190	0.500	0.160	0.160	0.180
7/21	0.102	0.120	0.563	0.140	0.190	0.500	0.160	0.165	0.180
7/22	0.103	0.120	0.562	0.140	0.190	0.500	0.155	0.165	0.180
7/23	0.100	0.120	0.561	0.140	0.190	0.500	0.155	0.165	0.180
7/24	0.099	0.120	0.561	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/27	0.104	0.110	0.561	0.140	0.190	0.480	0.155	0.165	0.180
7/28	0.104	0.110	0.561	0.140	0.190	0.480	0.155	0.165	0.180
7/29	0.104	0.120	0.560	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/30	0.100	0.120	0.559	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/31	0.105	0.120	0.557	0.140	0.190	0.450	0.155	0.165	0.180
8/3	0.100	0.120	0.556	0.140	0.190	0.440	0.155	0.165	0.180
8/4	0.098	0.110	0.556	0.140	0.190	0.440	0.155	0.170	0.180
8/5	*0.100	0.110	0.556	0.140	0.190	0.430	0.145	0.170	0.180
8/6									
8/7									

\* 速報値

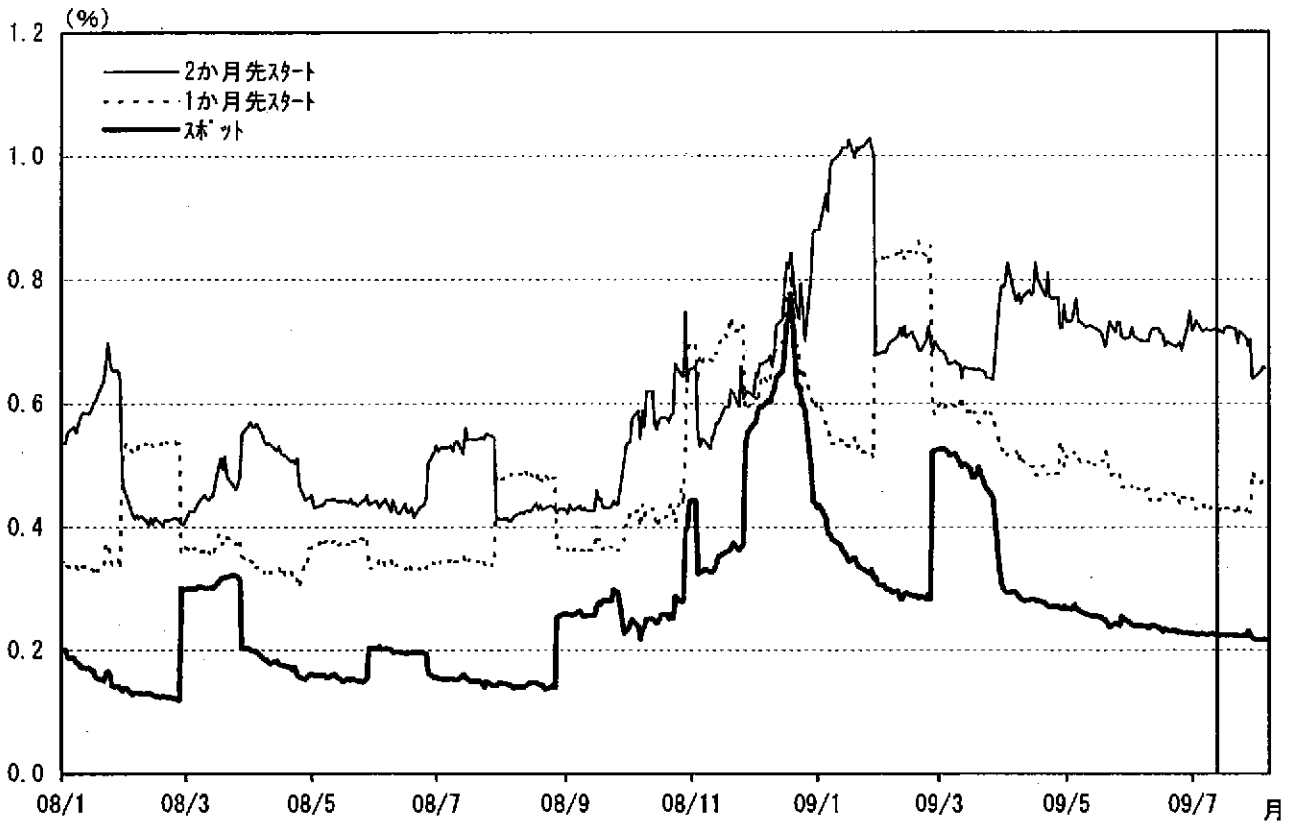
(注) 1. レポレート、ユーロ円レートはヒアリングベース (対外非公表)。

2. 短国レートはT-Bill利回り。ただし、09/2月の統合発行以前はFB/TB利回り。

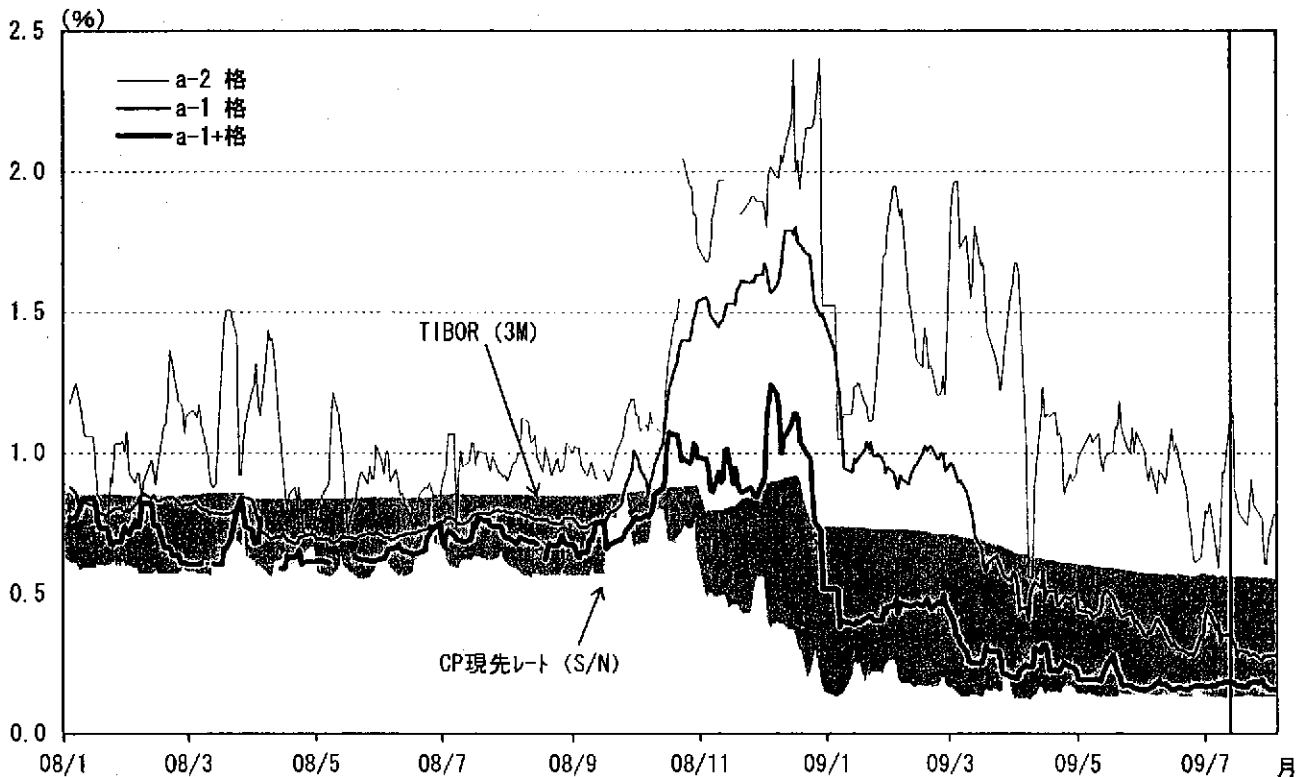
(出所) 全国銀行協会、日本相互証券、日本銀行

### ターム物レートの推移 (1)

(1) TIBOR-OISスプレッド (1か月物フォワードレート) の推移



(2) CP発行レート (3か月物) の推移



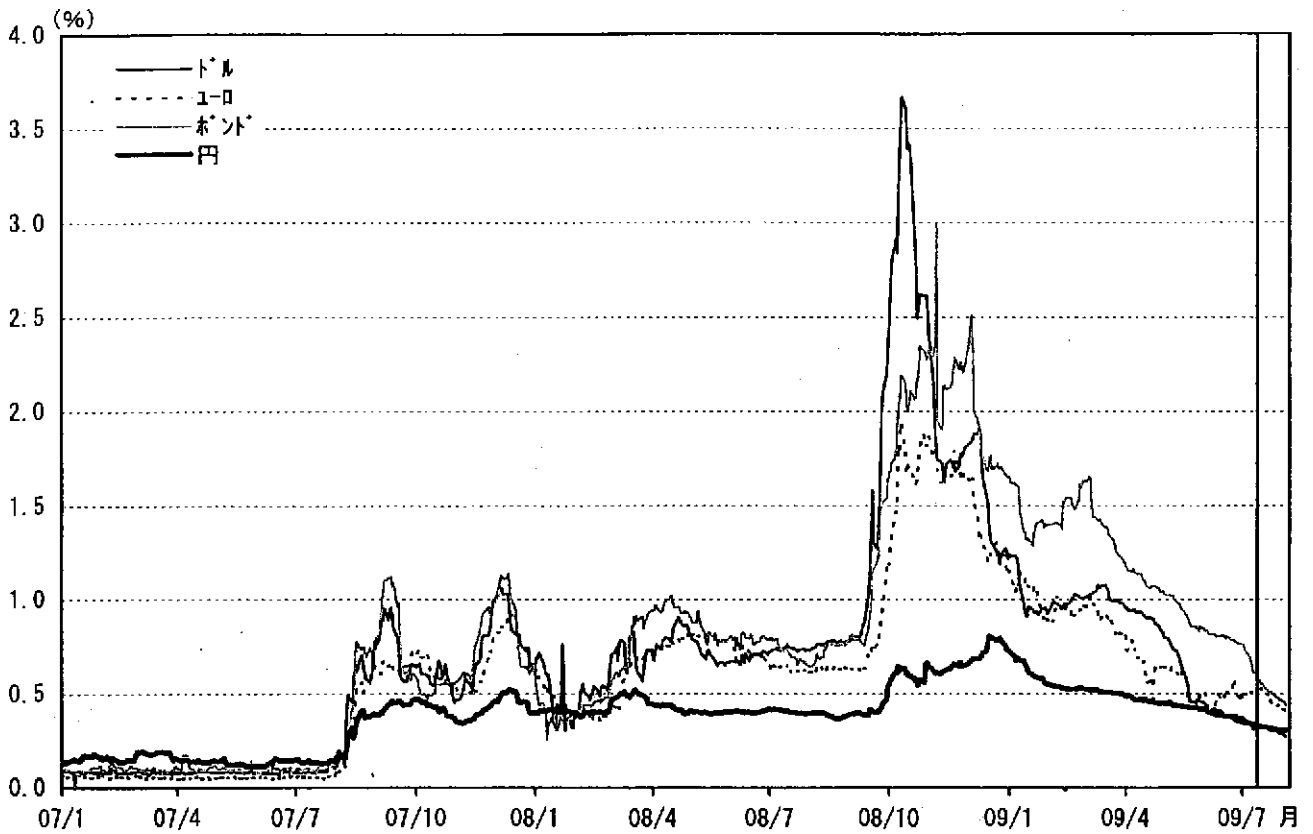
(注) 1. (2)は対外非公表。CP発行レート (5日移動平均) の集計対象は、CP等買現先オペの対象先による引受分、格付けは基本的にR&Iによる。金融機関発行分およびABCPIは除く。

2. 直近は、(1)は8/5日、(2)は8/4日。

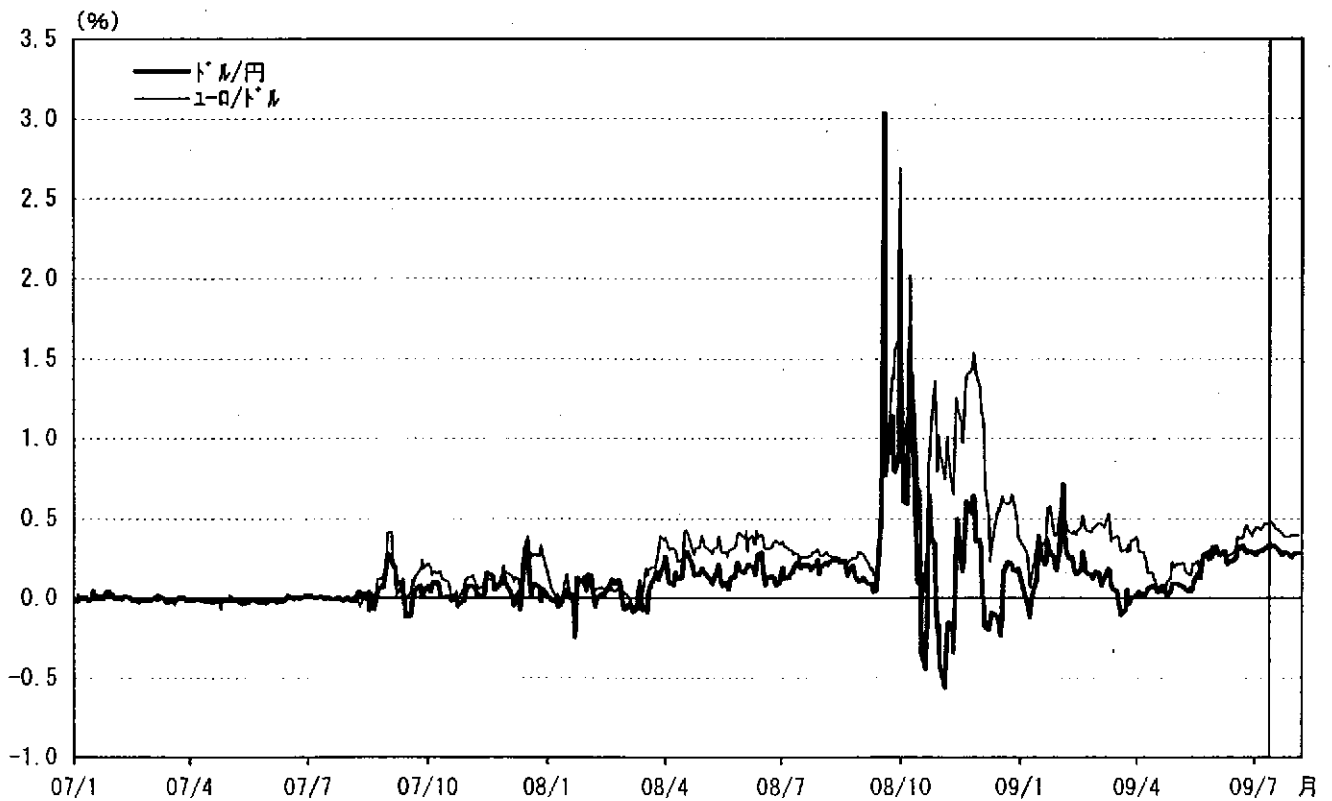
(出所) Bloomberg、全国銀行協会、日本銀行

### ターム物レートの推移 (2)

(1) LIBOR-OISスプレッド (3か月物) の推移



(2) ドル転コスト対ドルLIBORスプレッド (3か月物) の推移

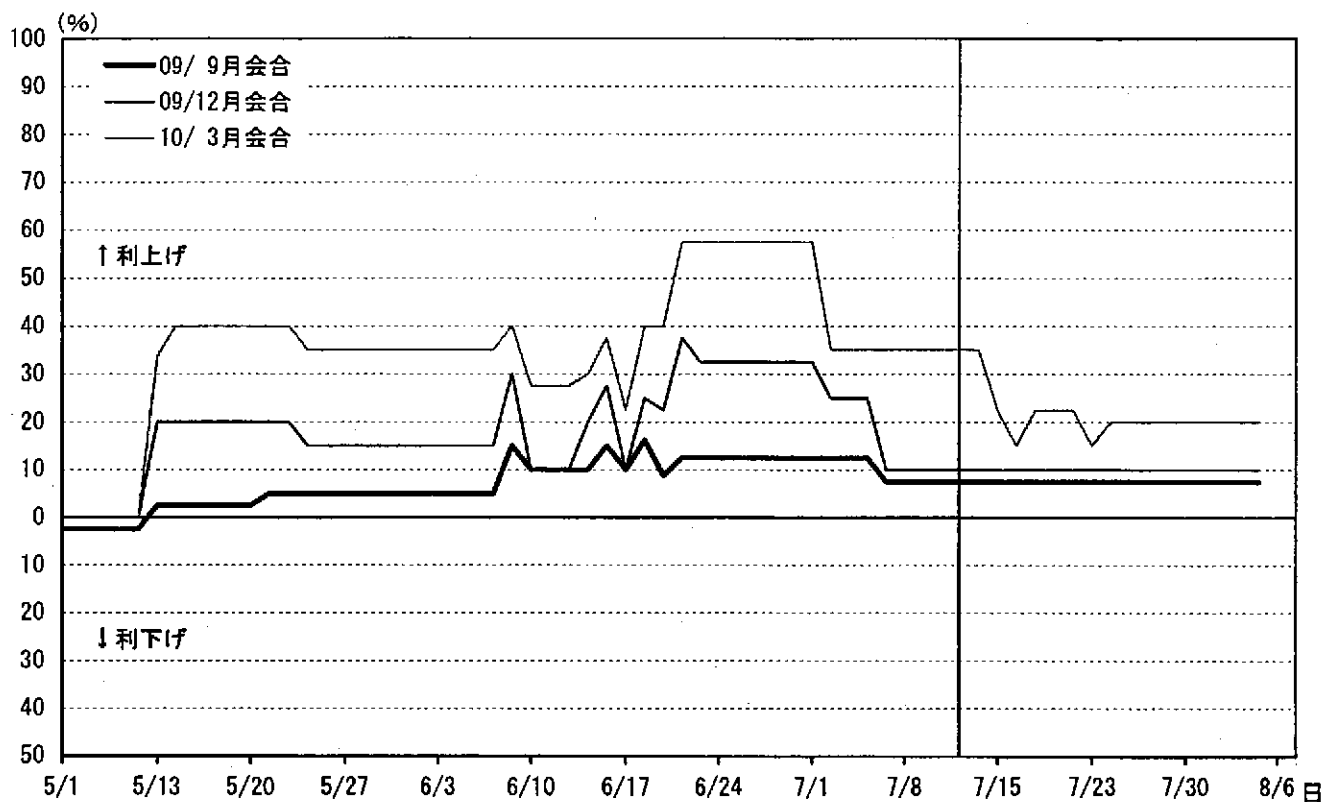


(注) 直近は8/4日。  
(出所) Bloomberg

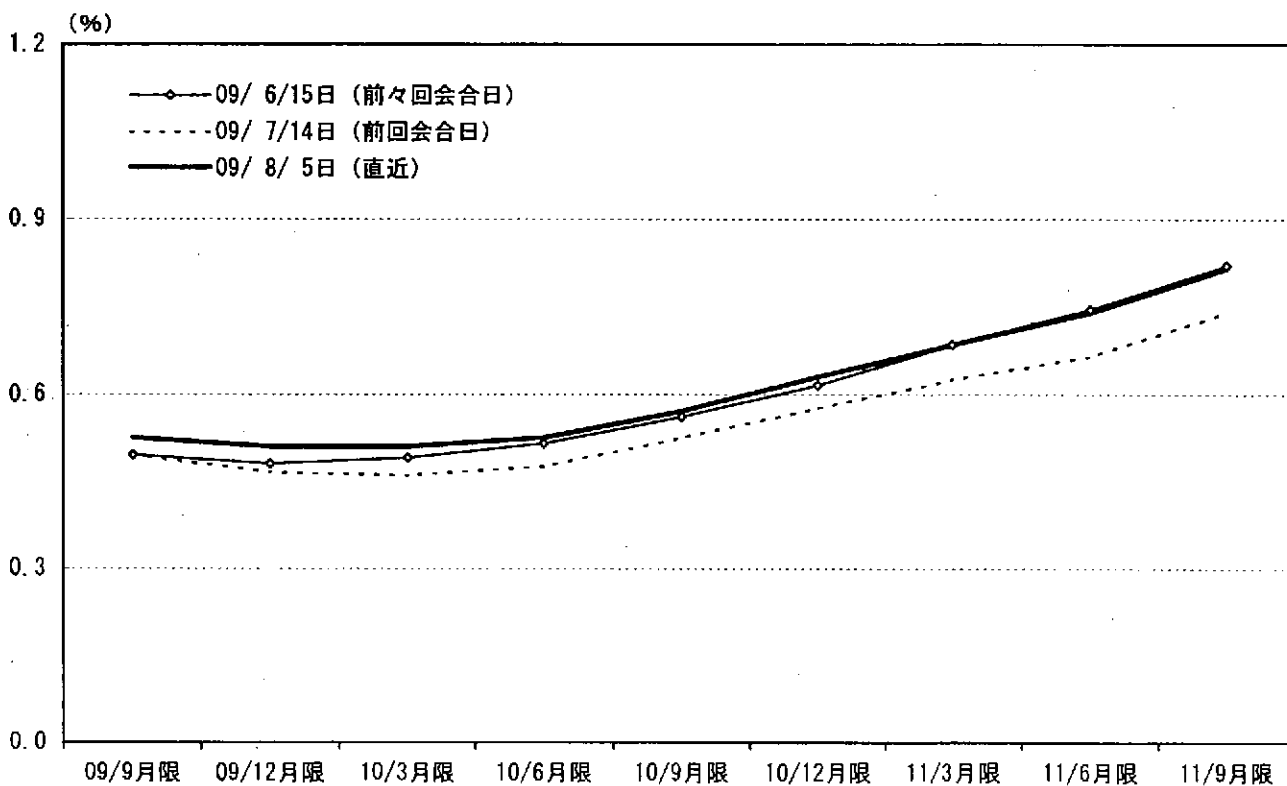
(図表4)

### フォワードレートの動向

(1) OISレートからみた政策変更(±10bps)の織り込み度合い



(2) ユーロ円金利先物からみたフォワードレート・カーブ

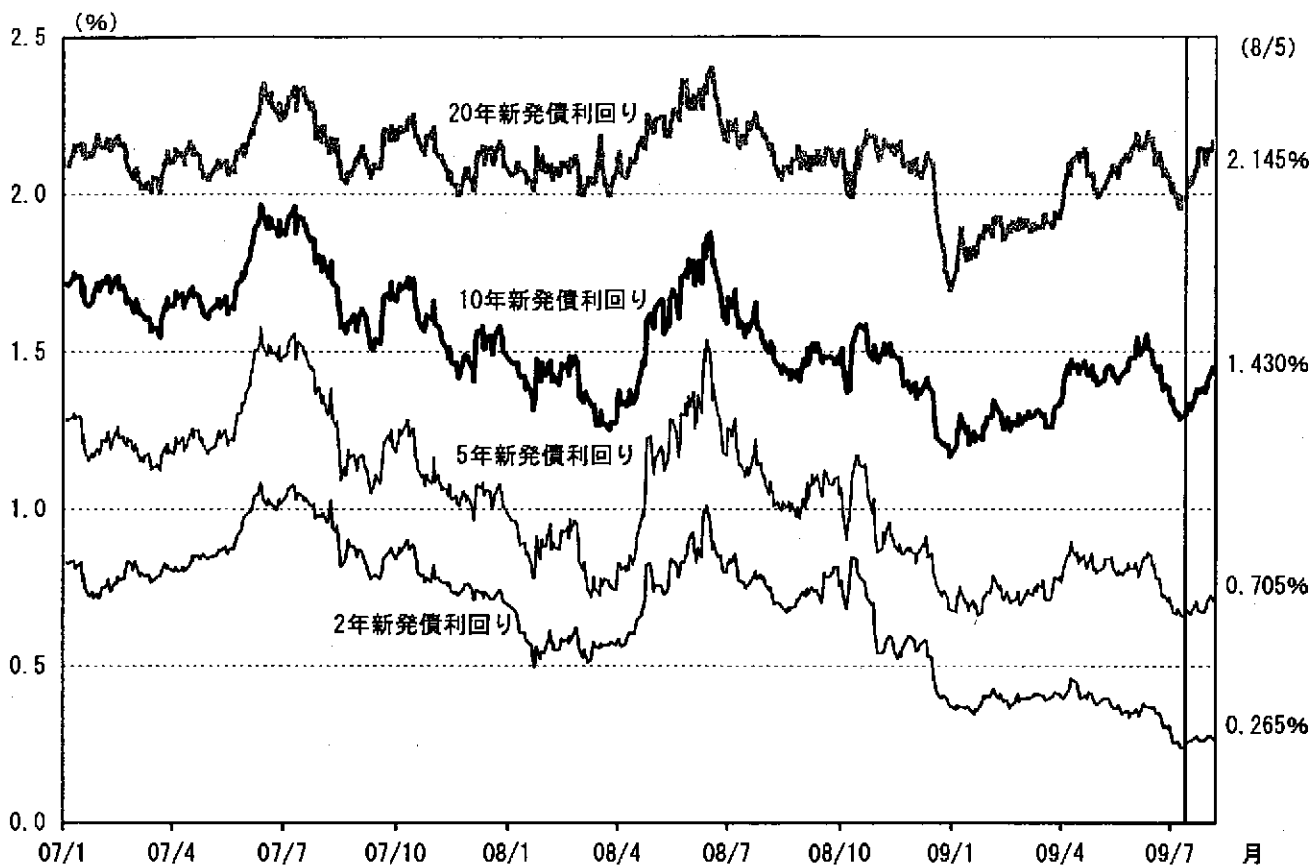


(注) (1)は会合間取引レートの仲値から算出。直近は8/5日。  
(出所) トムソン・ロイター、メイタン・トラディション、東京金融取引所

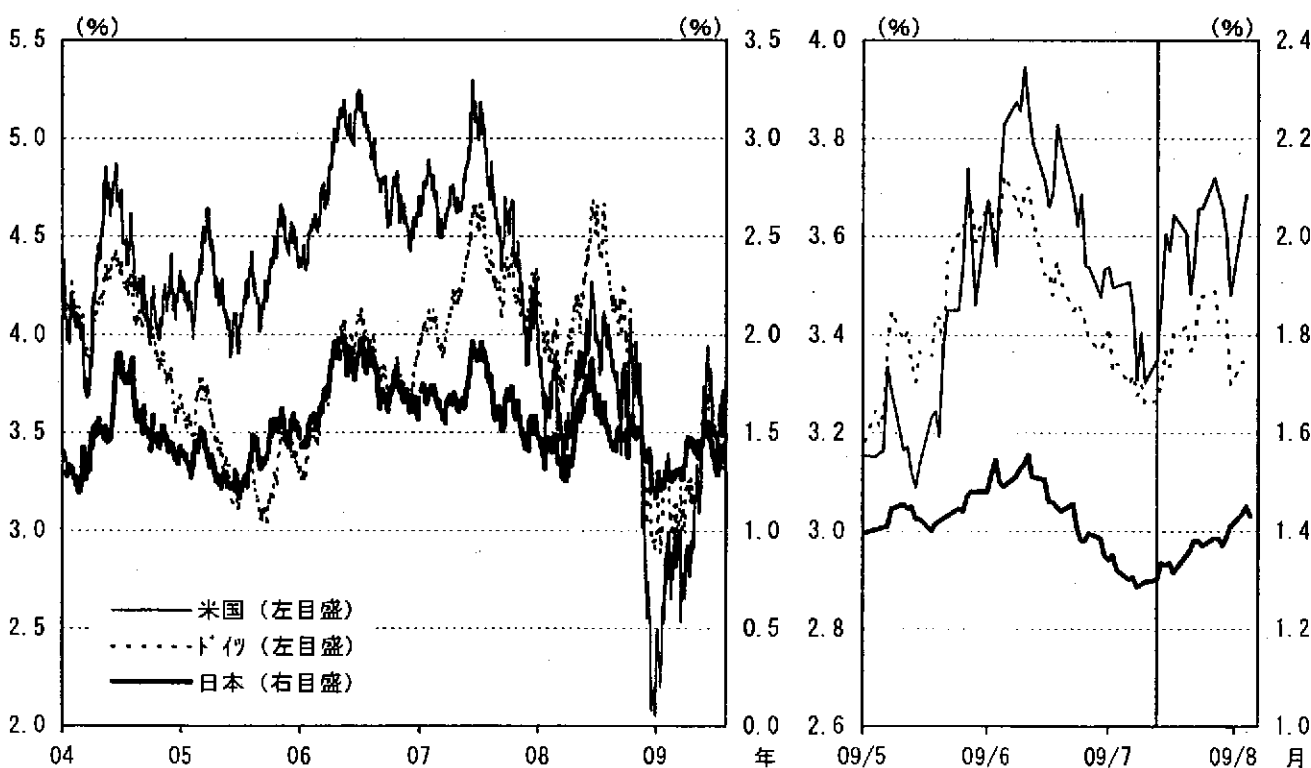
(図表5)

### 長期金利の推移

#### (1) 国内年限別の推移



#### (2) 10年国債利回りの推移



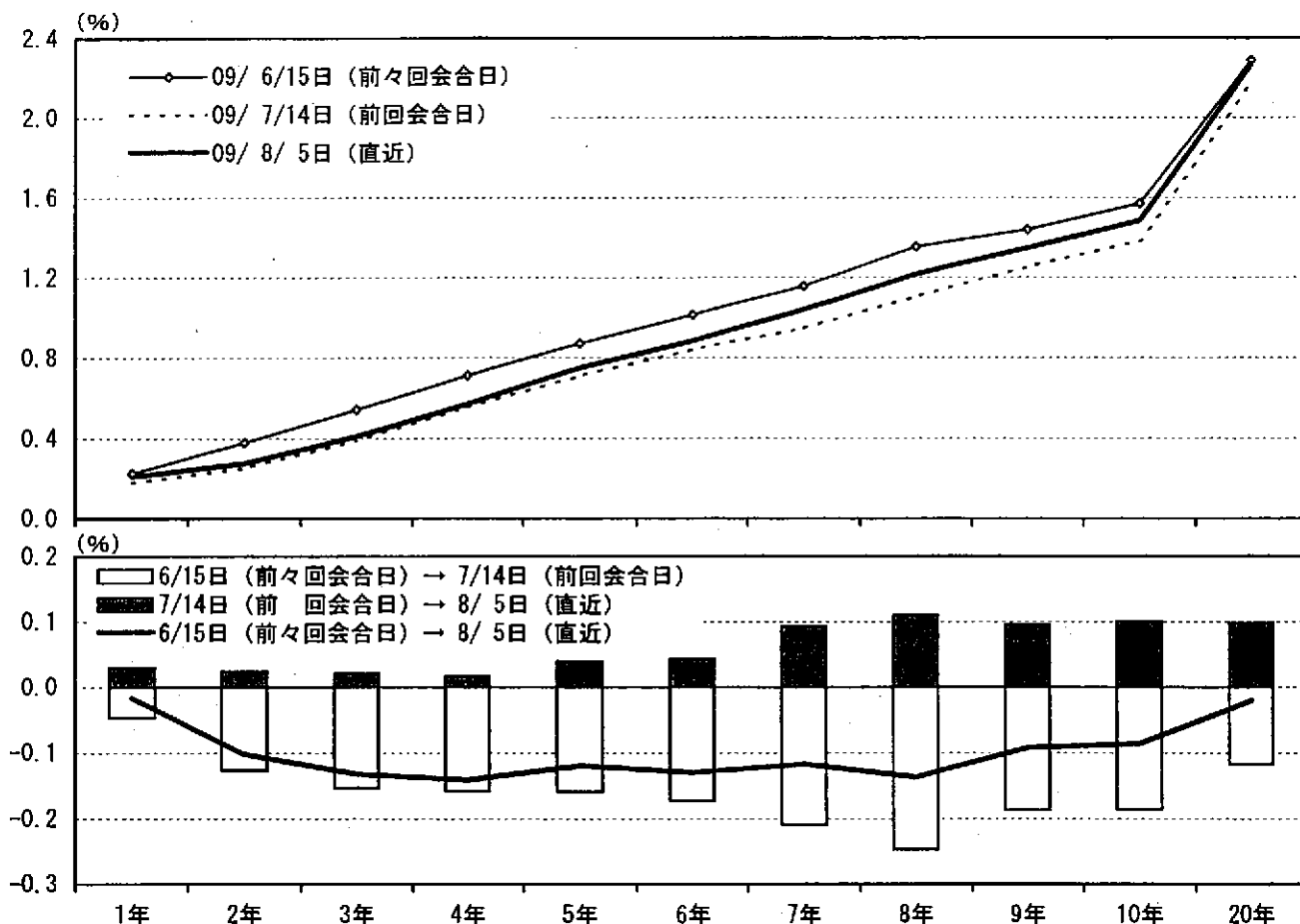
(注) 直近は、日本は8/5日、その他は8/4日。

(出所) Bloomberg、日本相互証券



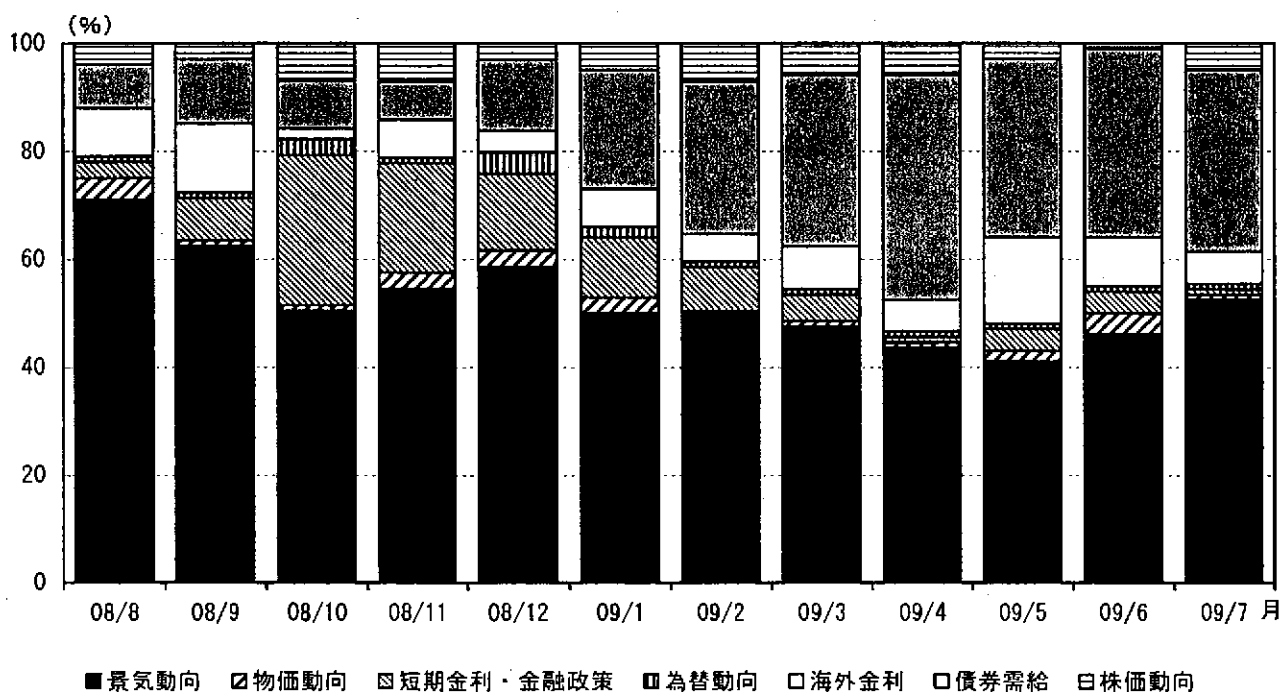
(図表6)

### イールド・カーブの動向



(出所) 日本証券業協会、日本銀行

### 市場参加者が注目する債券利回り変動要因

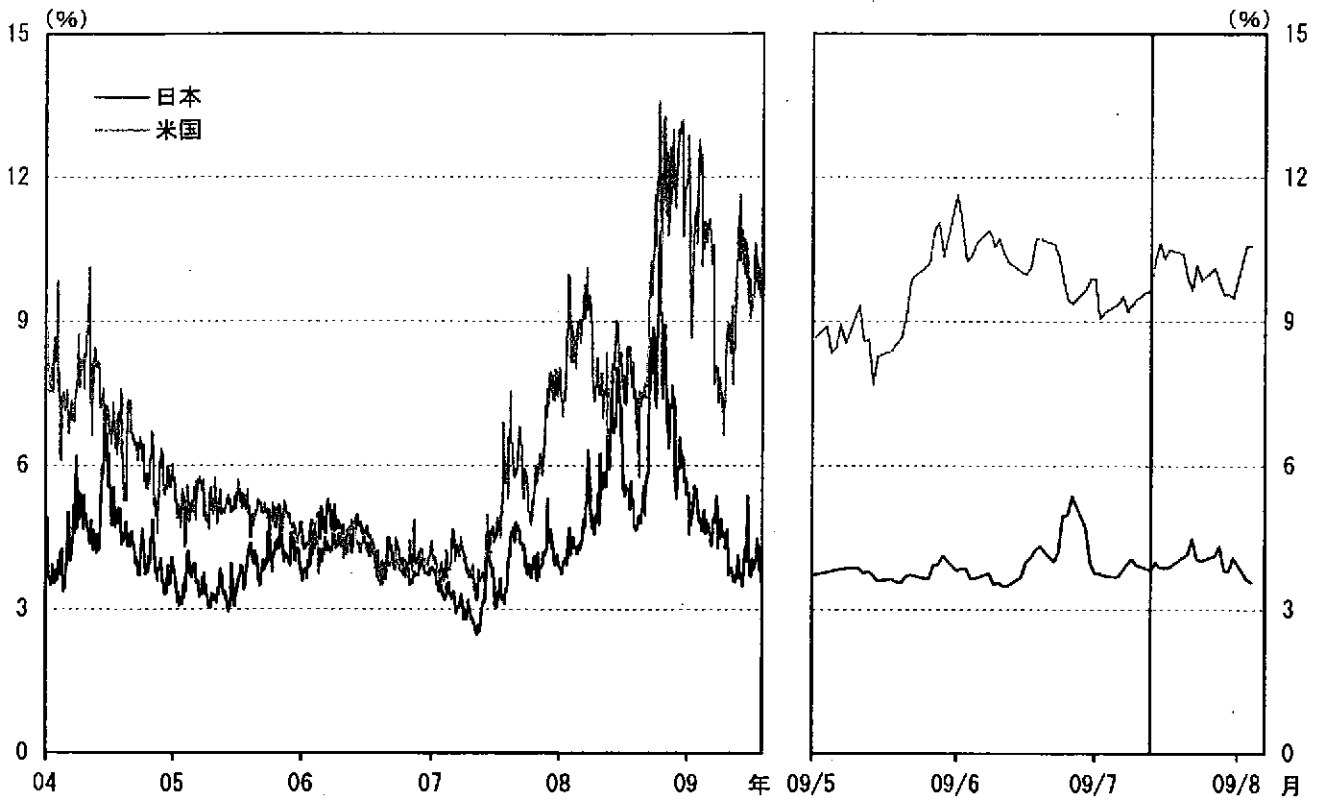


(注) 調査期間は09/7/28日～09/7/30日。期間中の10年新発債利回りは1.365～1.390%。

(出所) 「QSS債券月次調査」

(図表7)

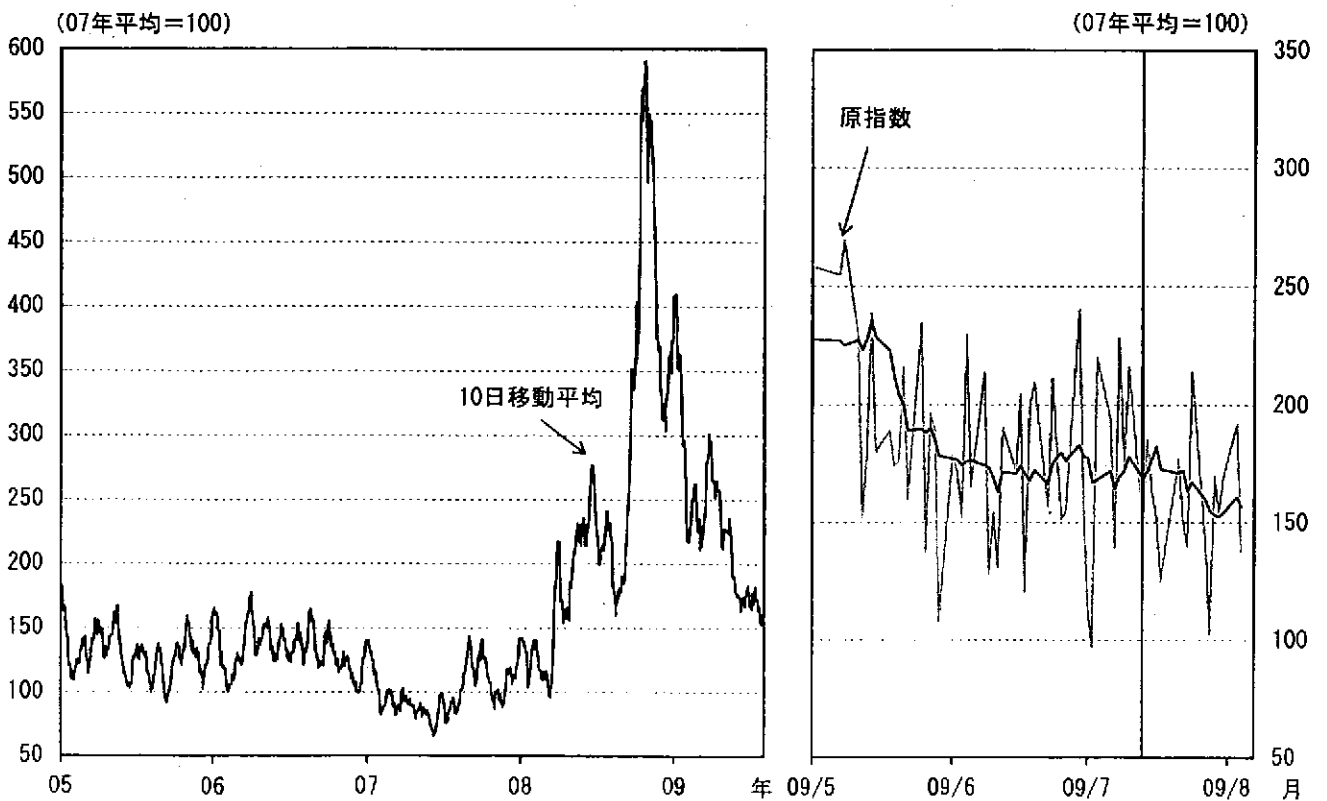
### インプライド・ボラティリティの推移



(注) 直近は8/4日。

(出所) Bloomberg、三菱UFJ証券

### 長国先物の値幅・出来高比率の推移

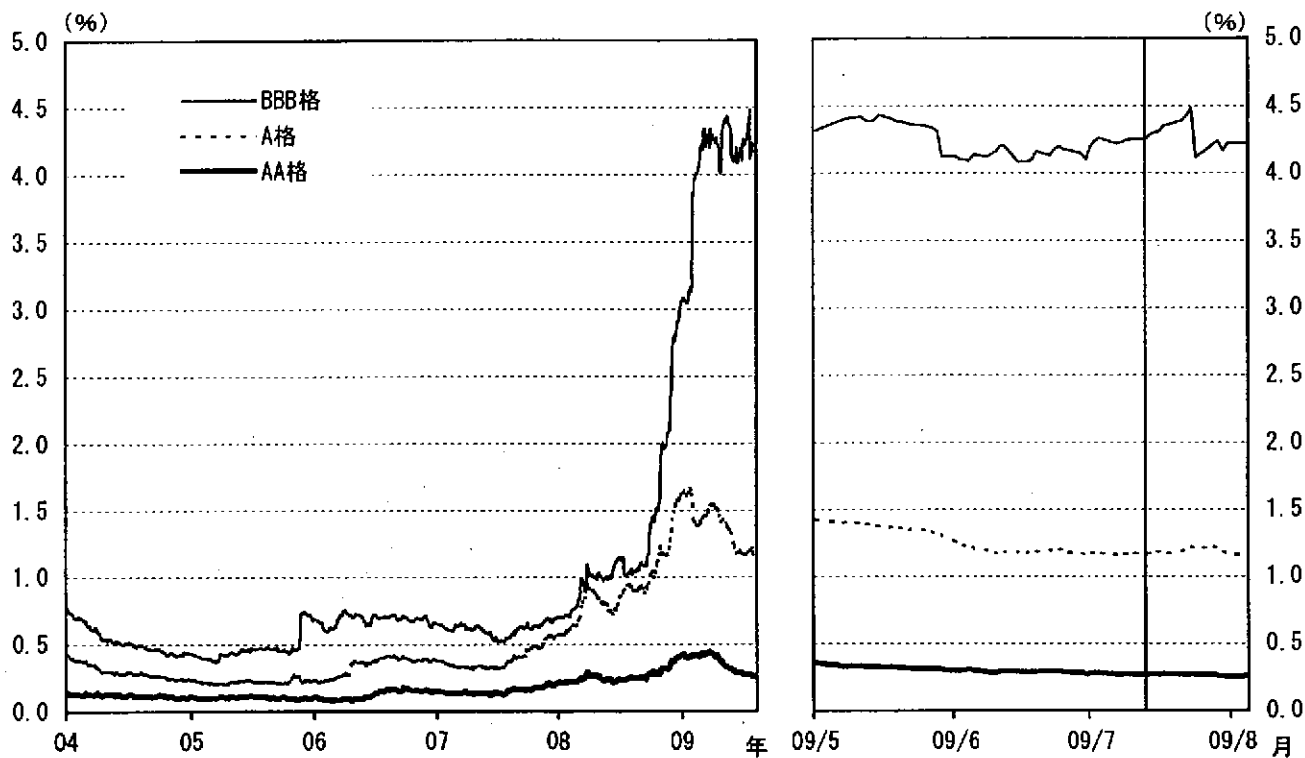


(注) 直近は8/4日。

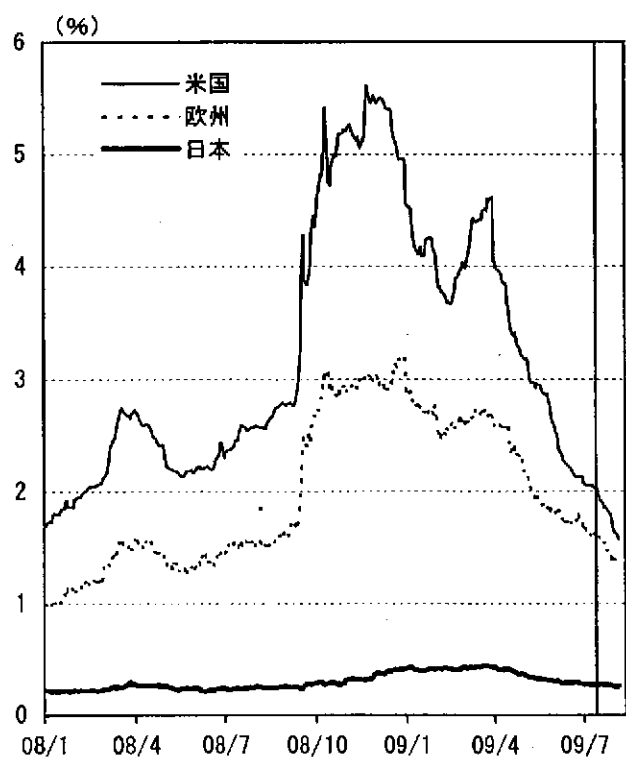
(出所) QUICK

### 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移

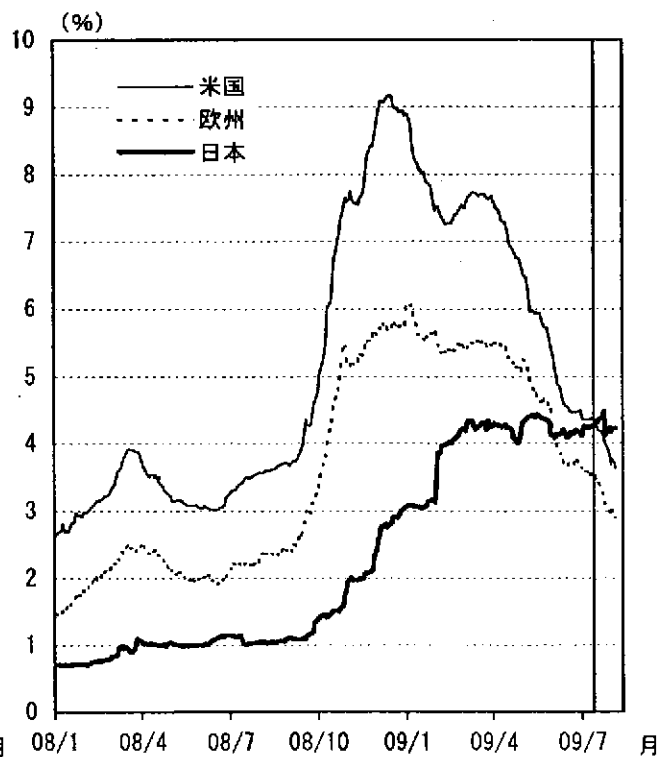
#### (1) 国内社債の動向



#### (2) 高格付社債 (AA格) の動向



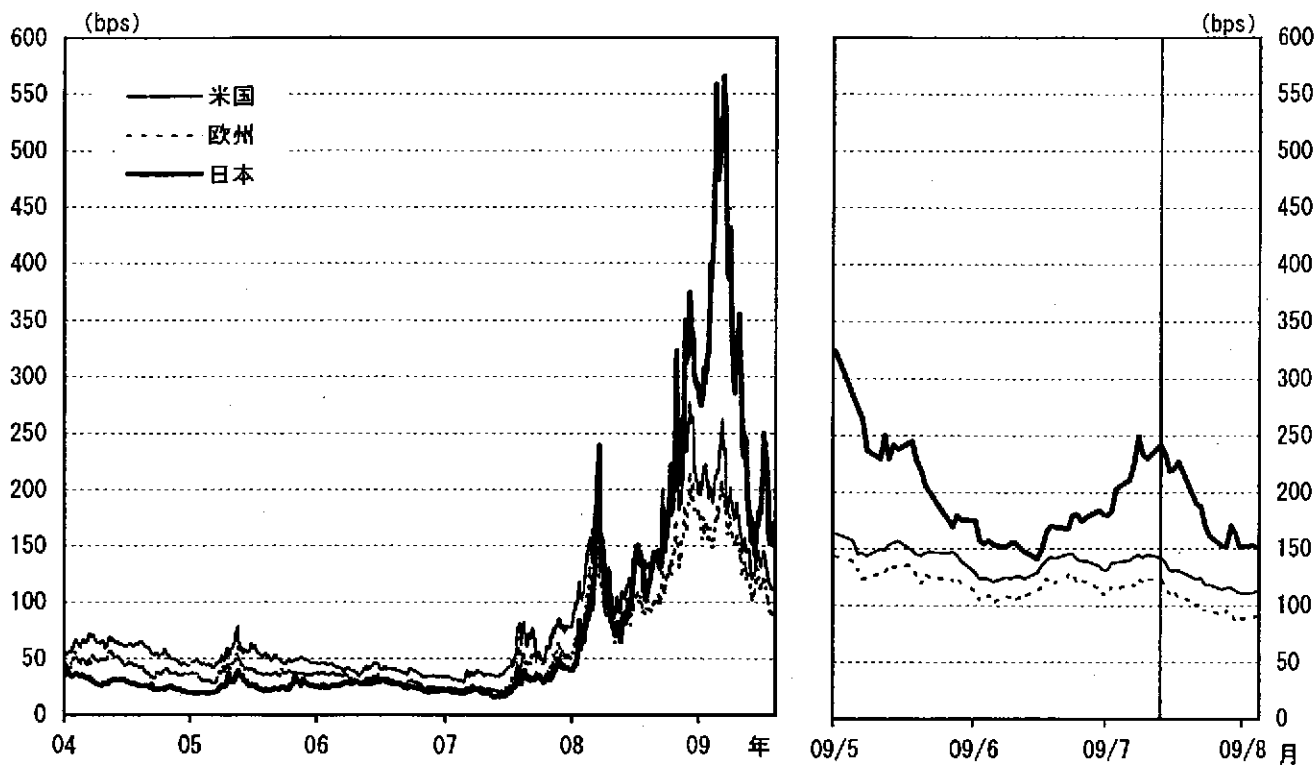
#### (3) 低格付社債 (BBB格) の動向



(注) 1. 日本の社債流通利回りは売買参考統計値、格付けはR&Iによる。集計対象は、残存3年以上7年未満の銘柄。  
2. 米欧はメリルリンチ算出、格付けはMoody's、S&P、Fitchによる。集計対象は、残存3年以上5年未満の銘柄。  
3. 直近は8/4日。

(出所) Bloomberg、日本証券業協会、日本銀行

### CDSプレミアムの推移

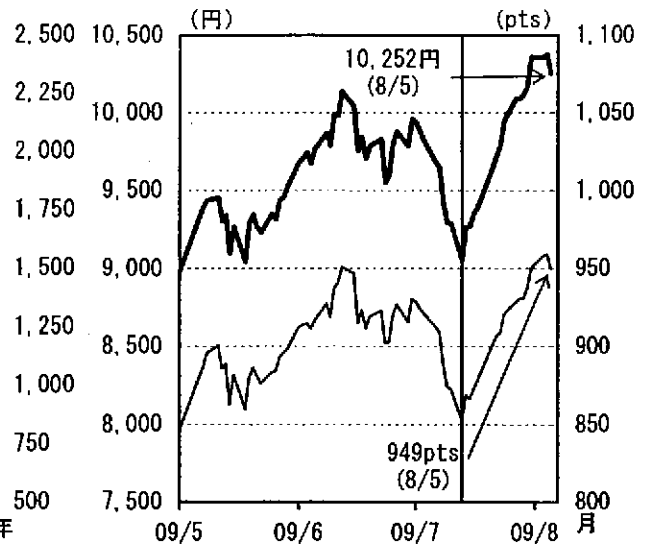


(注) 1. 以下の各インデックス。年限は5年。  
日本：iTraxx Japan、米国：CDX.NA.IG、欧州：iTraxx Europe。  
2. 対外非公表。直近は8/4日。  
(出所) Markit、JPモルガン

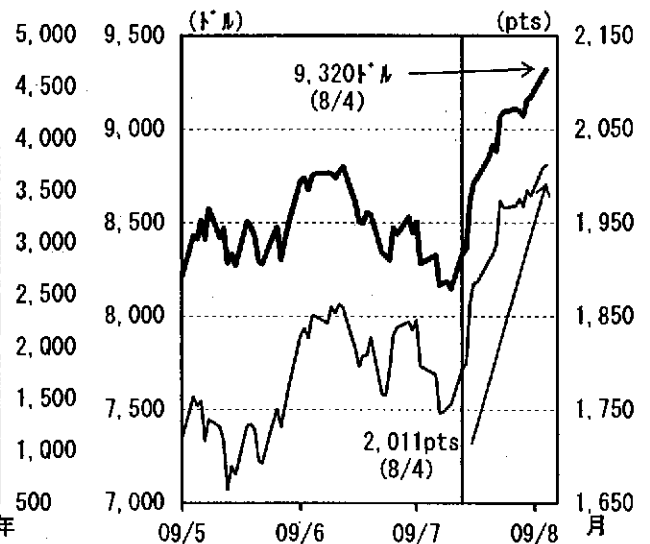
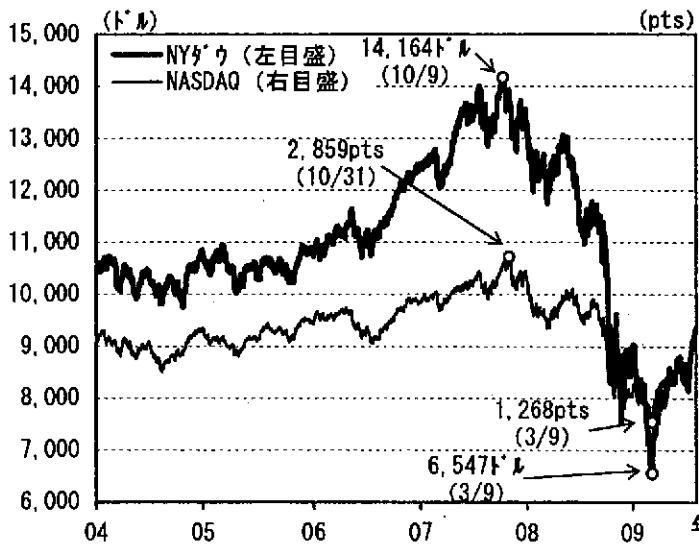
(図表10)

### 株式相場の推移

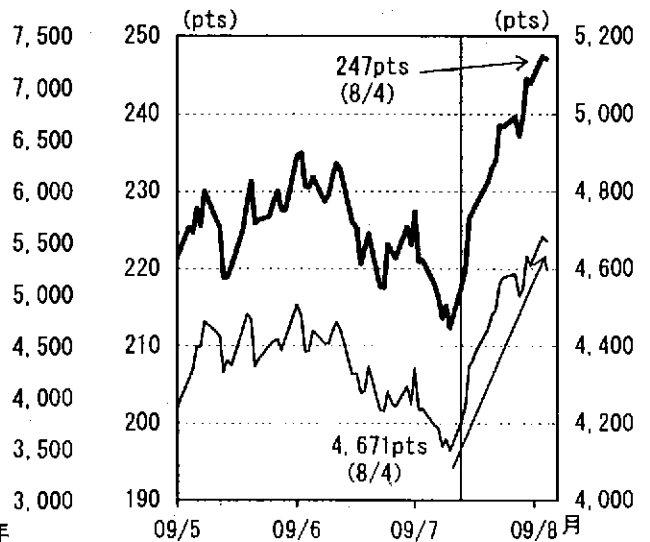
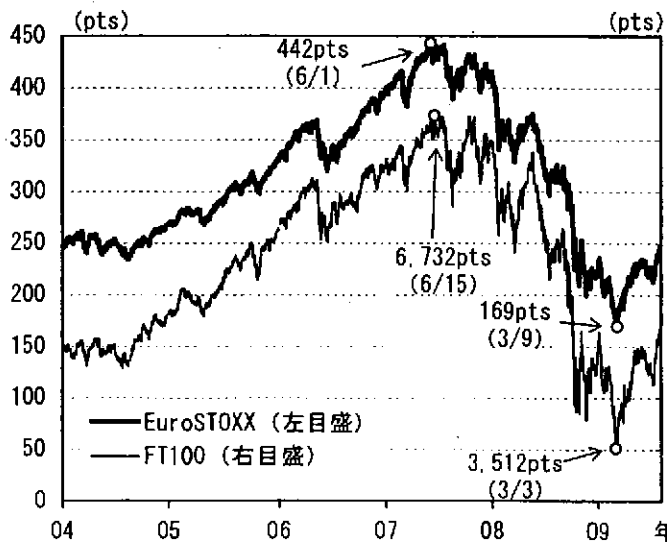
#### (1) 国内株価の推移



#### (2) 米国株価の推移



#### (3) 欧州株価の推移



(注) 直近は、TOPIX、日経平均は8/5日、その他は8/4日。

(出所) Bloomberg、QUICK

(図表11)

## 主体別売買動向

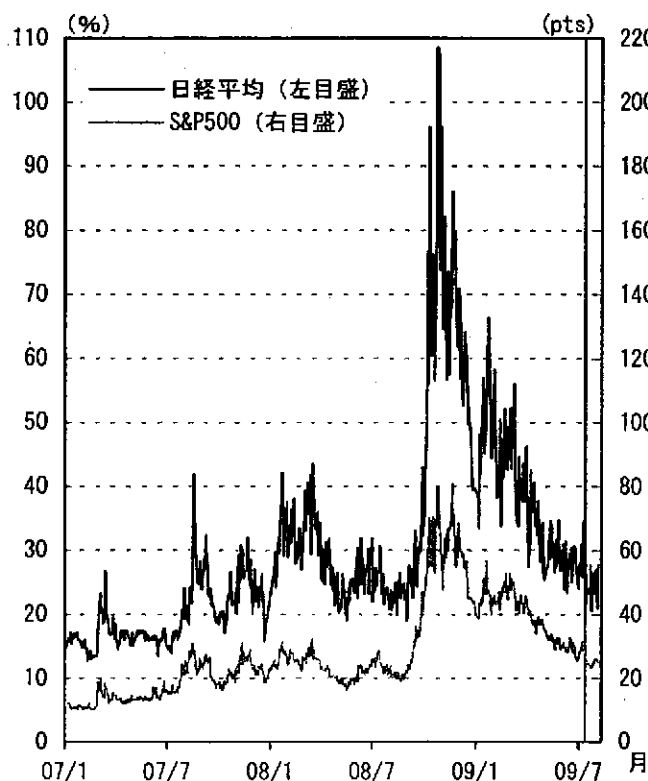
(▲は売り越し、億円)

	個人		事業法人	投 信	金融機関			外国人
		うち 信用				うち 信託	うち 生・損保	
06年	▲43,811	18,380	20,190	17,073	▲40,369	▲33,176	▲1,499	55,288
07年	▲32,288	14,152	15,555	▲5,448	▲17,953	▲16,834	678	54,234
08年	9,820	▲897	16,321	3,013	39,434	45,026	▲3,289	▲37,085
08/10 ~ 12月	10,045	▲1,239	5,369	1,217	32,534	33,379	▲699	▲28,943
09/1 ~ 3月	3,514	117	1,163	1,616	25,800	25,473	▲65	▲25,378
4 ~ 6月	2,884	5,711	▲313	▲1,756	▲6,132	▲2,654	▲1,209	7,886
09/4月	170	1,153	15	▲363	▲1,775	▲827	▲105	4,100
5月	99	1,409	▲84	▲636	▲2,438	▲1,035	▲656	3,740
6月	2,613	3,147	▲244	▲755	▲1,918	▲792	▲447	45
09/6/22 ~ 6/26	▲431	50	▲243	▲77	775	818	53	▲1,077
6/29 ~ 7/3	207	347	▲65	▲59	▲320	34	▲251	1,241
7/6 ~ 7/10	1,767	789	46	▲254	▲299	▲325	41	▲285
7/13 ~ 7/17	▲408	▲516	▲135	381	▲278	▲139	▲147	1,166
7/21 ~ 7/24	▲4,139	▲1,169	▲294	▲29	295	516	▲119	3,526

(注) 三市場(東京・大阪・名古屋)合計。金融機関は、都銀・地銀等、その他金融、信託、生・損保。

(出所) 東京証券取引所

## ボラティリティの推移



(注) 日経平均はインプライド・ボラティリティ。

S&amp;P500はVIX指数。直近は8/4日。

(出所) Bloomberg

## 東証REIT指数の推移



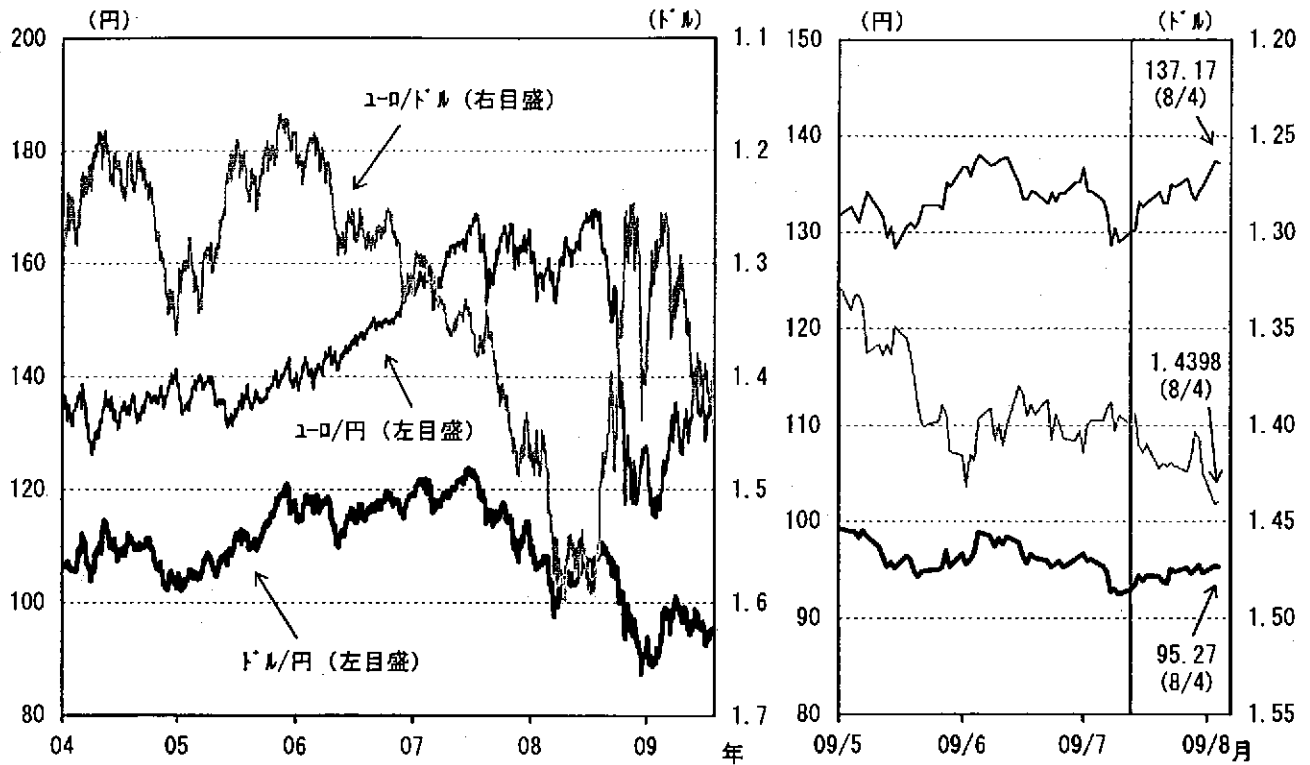
(注) 直近は8/5日。

(出所) Bloomberg

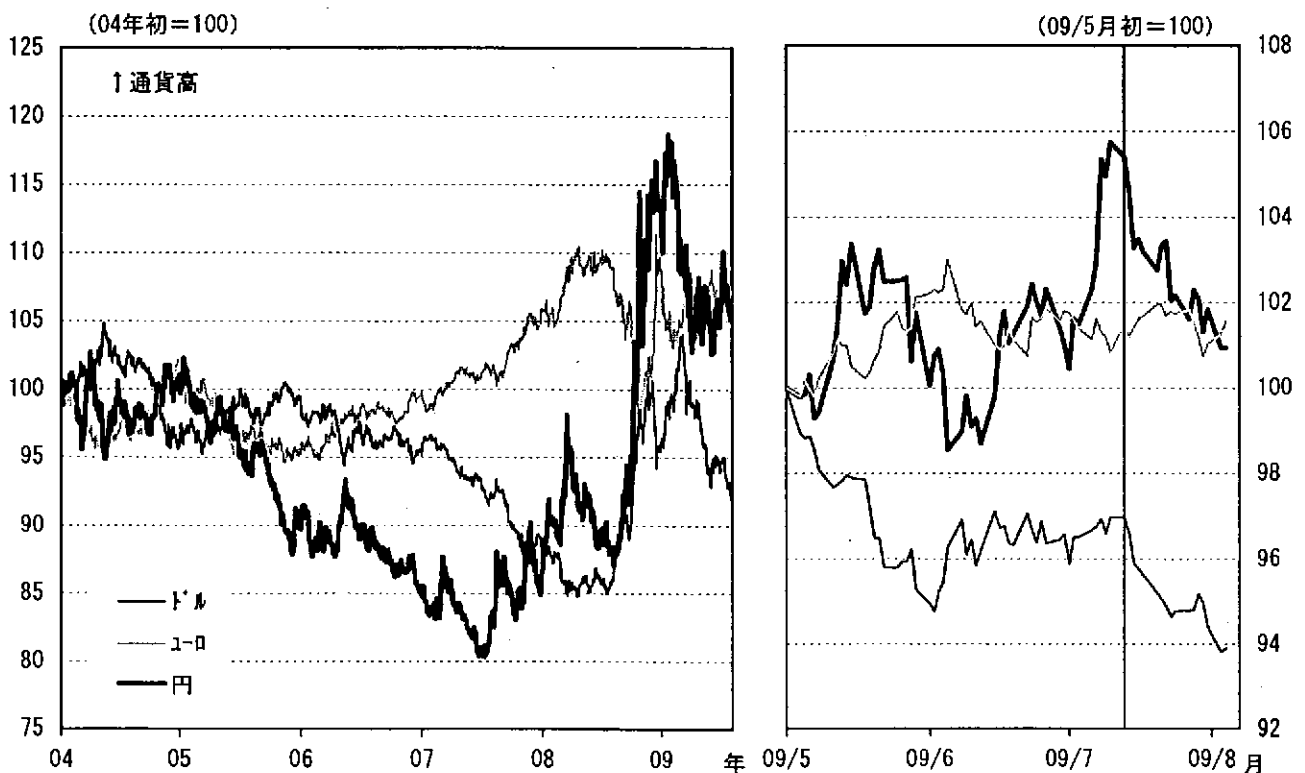
(図表12)

主要為替相場の推移

(1) ドル/円、ユーロ/円、ユーロ/ドル相場の推移



(2) 名目実効為替レートの推移



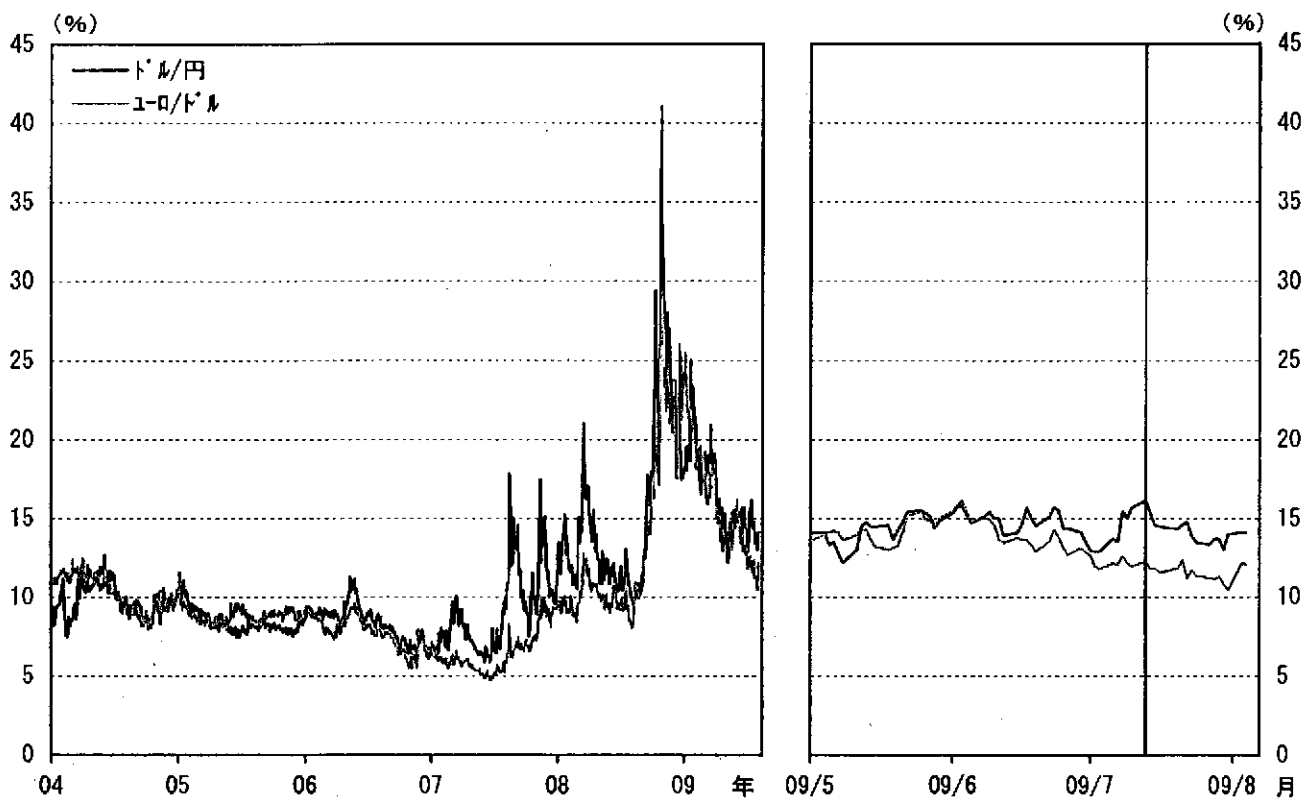
(注) 1. (1)は原則NY市場16時時点。

2. 直近は8/4日。

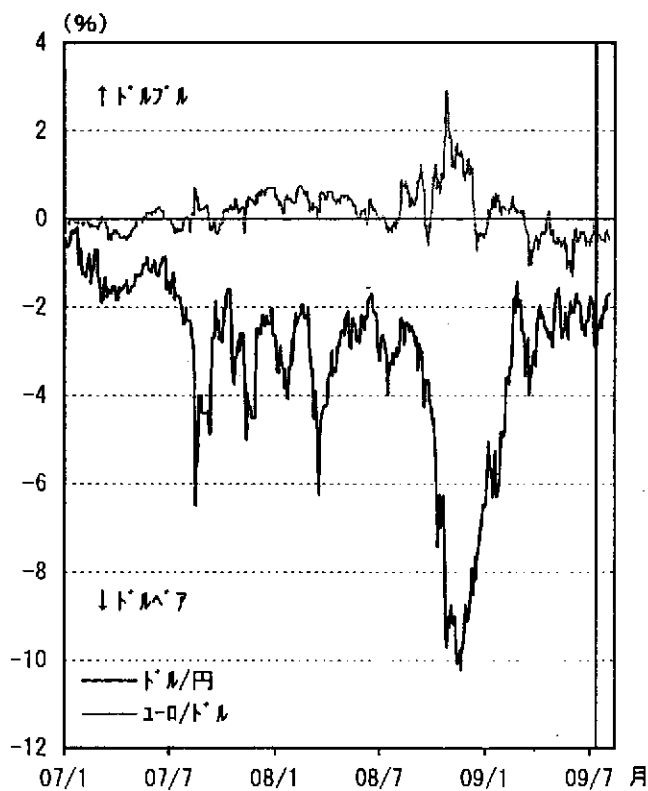
(出所) JPモルガン、トムソン・ロイター、ECB、日本銀行

### 通貨オプション、先物市場の動向

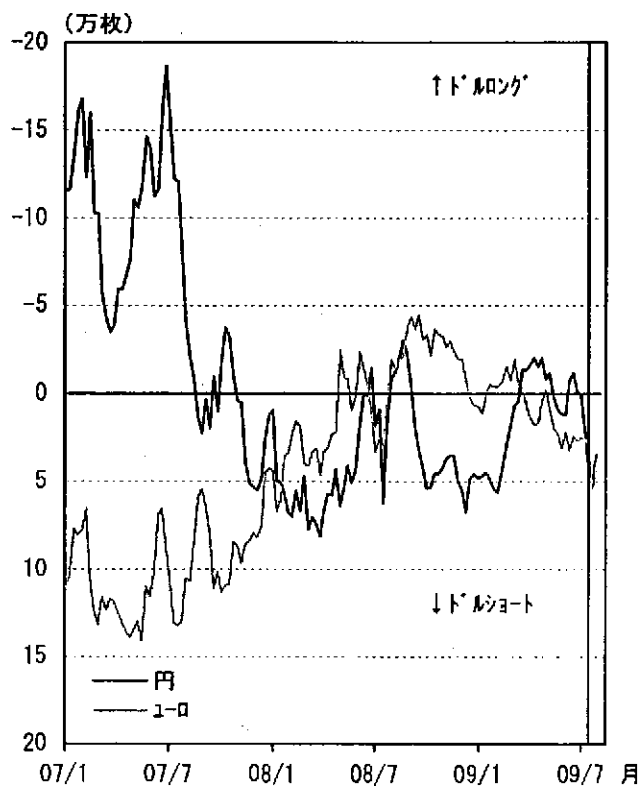
(1) インプライド・ボラティリティ (1か月) の推移



(2) リスクリバーサル (1か月) の推移



(3) IMMネットポジションの推移



(注) 1. (3)は通貨先物取引における非商業目的および目的別計数非報告分のネット建玉の合計。

2. 直近は、(1)(2)は8/4日、(3)は7/28日。

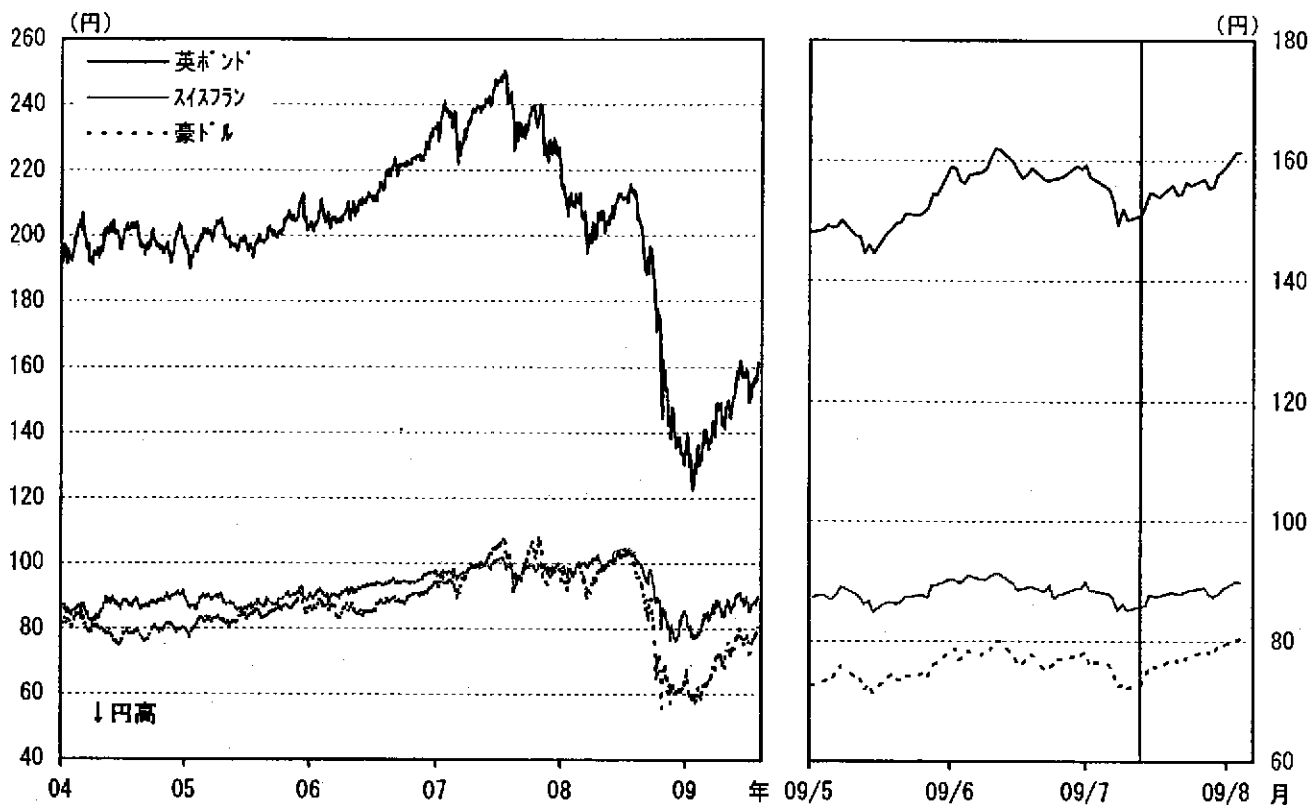
(出所) Bloomberg



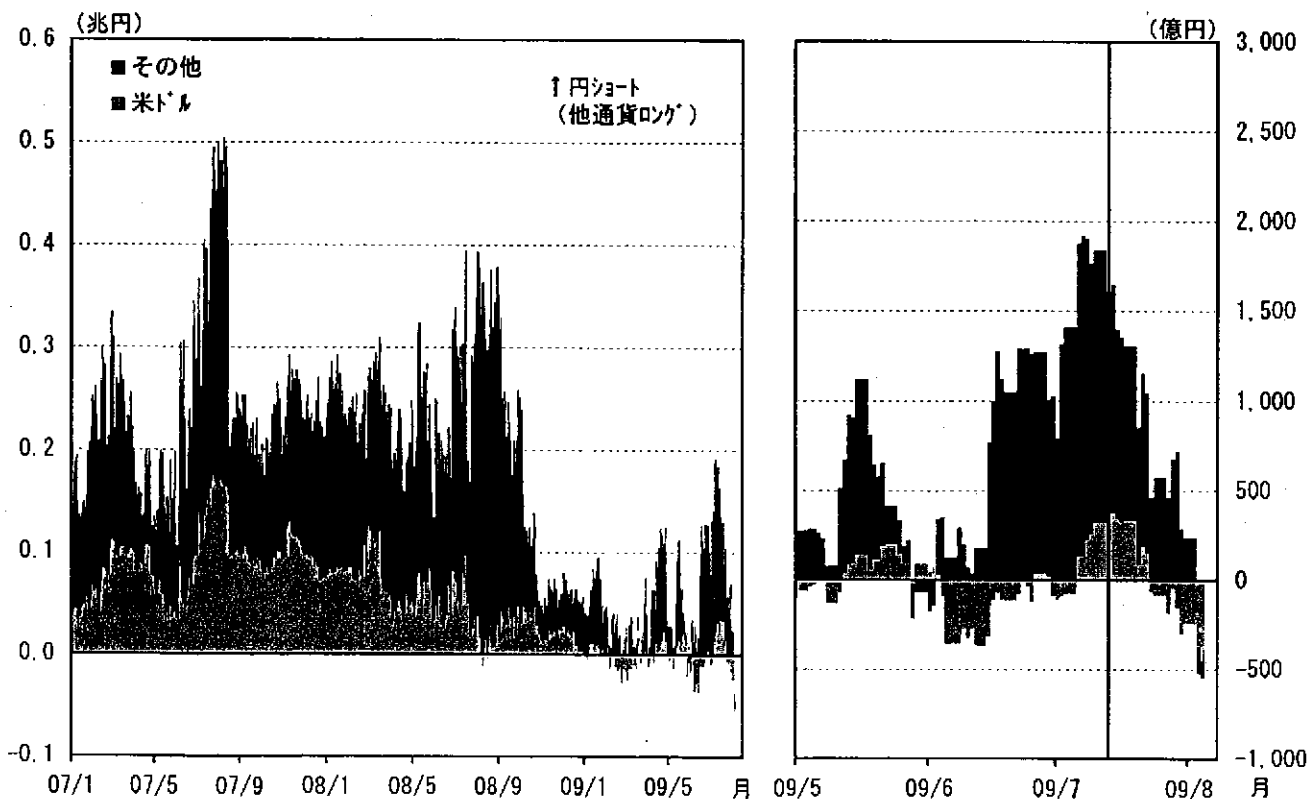
(図表14)

### クロス円取引の動向

#### (1) クロス円相場の推移



#### (2) 外為証拠金取引の動向



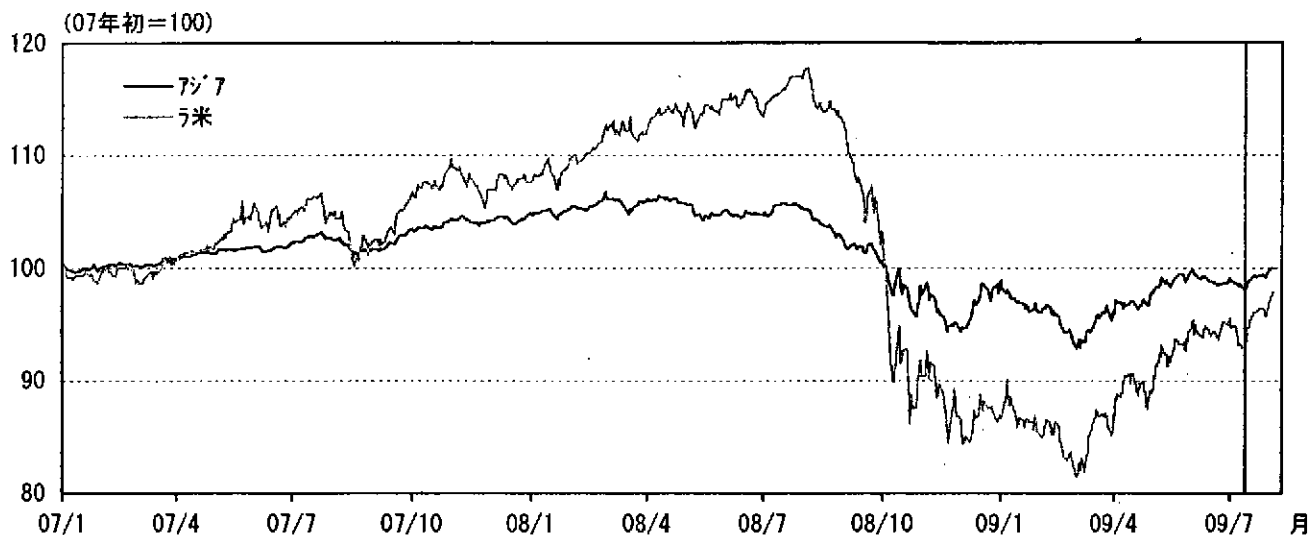
(注) 1. (2)は、円に対する他通貨のネットロングポジション (マーケット・メーカーを除く)。

2. 直近は8/4日。

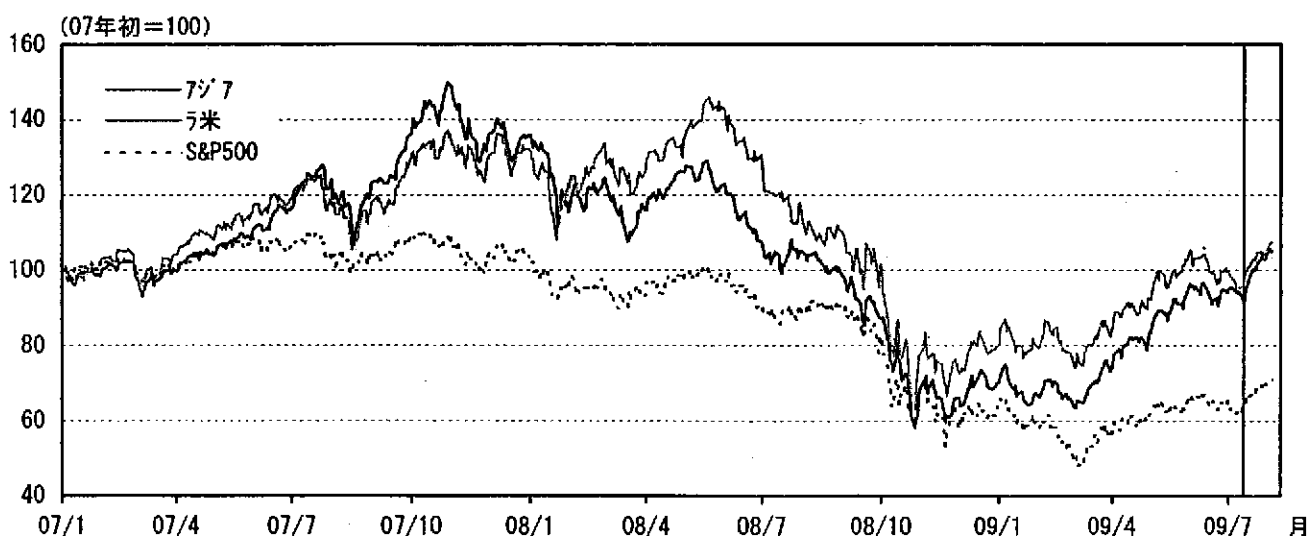
(出所) Bloomberg、東京金融取引所

### エマージング、コモディティ市場の動向

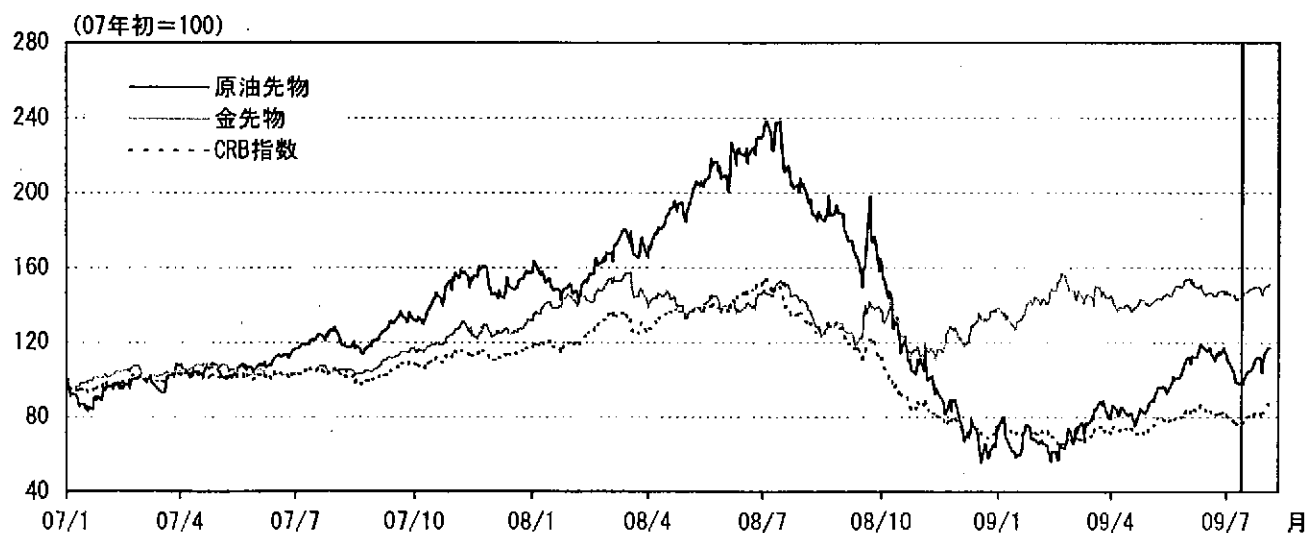
#### (1) エマージング通貨指数の推移



#### (2) MSCIエマージング株価指数の推移



#### (3) コモディティ価格の推移



(注) 1. (1)は対ドル指数。(2)は現地通貨建て。(3)のコモディティ先物はNYMEX期近物。

2. 直近は8/4日。

(出所) Bloomberg

## 1. 金融調節の運営実績（資料－1 関連）

- （図表 1－1） 金融調節の実績の推移
- （図表 1－2） 日銀当座預金の保有状況
- （図表 1－3） 09/4月積み期以降の当座預金残高  
09/4月積み期以降の短期金利
- （図表 1－4） 無担コール市場残高
- （図表 1－5） 無担コール市場残高（O/N、T/N、S/N 計）
- （図表 1－6） 最近のオペ結果の推移
- （図表 1－7） 資金需給の推移
- （図表 1－8） 本行受入担保残高の推移
- （図表 1－9） 共通担保使用状況  
信用判定・適格審査の状況

## 2. 最近の金融・為替市場の動向（資料－2 関連）

- （図表 2－1） 短期金利の推移
- （図表 2－2） ターム物レートの推移（1）
- （図表 2－3） ターム物レートの推移（2）
- （図表 2－4） ターム物レートの推移（3）
- （図表 2－5） フォワードレートの動向
- （図表 2－6） 長期金利の推移
- （図表 2－7） イールド・カーブの動向  
市場参加者が注目する債券利回り変動要因
- （図表 2－8） インプライド・ボラティリティの推移  
長国先物の値幅・出来高比率の推移
- （図表 2－9） 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移
- （図表 2－10） CDS プレミアムの推移
- （図表 2－11） 株式相場の推移
- （図表 2－12） 主体別売買動向等
- （図表 2－13） 主要為替相場の推移
- （図表 2－14） 通貨オプション、先物市場の動向
- （図表 2－15） クロス円取引の動向
- （図表 2－16） エマージング、コモディティ市場の動向
- （図表 2－17） 内外金融市場の局面比較

（注）図表中の縦線は、特に断りのない限り前回会合の前営業日（7/13日）を表す。

(図表1-1)

## 金融調節の実績の推移

(億円、%)

	無担 コール レート (O/N) 加重 平均値	日銀当座預金残高(実績値)						補完 貸付 残高	<参考> 日銀当座預金残高見込み		
		準備預金残高(実績値)	準備預金残高(含むゆうちょ銀行)				非準備預金 残高		朝方 即日オペ前	9:20 定例調節後	全即日オペ 実施後
			準備預金残高(除くゆうちょ銀行)	超過 準備		残り所要額 (1日平均)					
				超過 準備	残り所要額 (1日平均)						
7月13日(月)	0.104	115,400	105,300		49,600	39,100	10,100	48.0	116,000	-	-
7月14日(火)	0.107	119,000	107,700		49,900	33,500	11,300	48.0	119,000	-	-
7月15日(水)	0.108	129,400	120,000		67,600	-	9,400	44.0	129,000	-	-
7月16日(木)	0.115	130,200	118,200		16,300	49,800	12,000	47.0	130,000	-	-
7月17日(金)	0.101	128,400	114,200		32,400	47,500	14,200	48.0	128,000	-	-
7月21日(火)	0.102	129,300	114,600		33,300	46,800	14,700	48.0	130,000	-	-
7月22日(水)	0.103	122,600	107,600		37,800	46,500	15,000	49.0	123,000	-	-
7月23日(木)	0.100	125,900	112,700		40,900	46,100	13,200	48.0	126,000	-	-
7月24日(金)	0.099	124,700	112,200		38,000	44,500	12,500	48.0	125,000	-	-
7月27日(月)	0.104	127,700	112,500		33,800	43,900	15,200	48.0	128,000	-	-
7月28日(火)	0.104	122,200	109,400		35,800	43,300	12,800	49.0	123,000	-	-
7月29日(水)	0.104	121,200	105,300		35,100	42,700	15,900	38.0	122,000	-	-
7月30日(木)	0.100	130,200	109,500		38,700	42,200	20,700	198.0	130,000	-	-
7月31日(金)	0.105	122,700	110,500		37,900	40,000	12,200	48.0	122,000	-	-
8月3日(月)	0.100	124,200	111,800		40,700	39,600	12,400	45.0	125,000	-	-
8月4日(火)	0.098	127,100	116,700		46,800	39,300	10,400	49.0	127,000	-	-
8月5日(水)	0.100	125,400	116,100		44,300	38,600	9,300	48.0	125,000	-	-
8月6日(木)	0.105	125,300	114,100		41,000	38,100	11,200	49.0	125,000	-	-
8月7日(金)	0.097	120,000	105,000		42,500	38,100	15,000	48.0	120,000	-	-

(注1)準備預金残高(除くゆうちょ銀行)は、対外非公表。

(注2)8月7日分は、5時同時処理終了時点。

## 日銀当座預金の保有状況

対外非公表

(単位:億円)

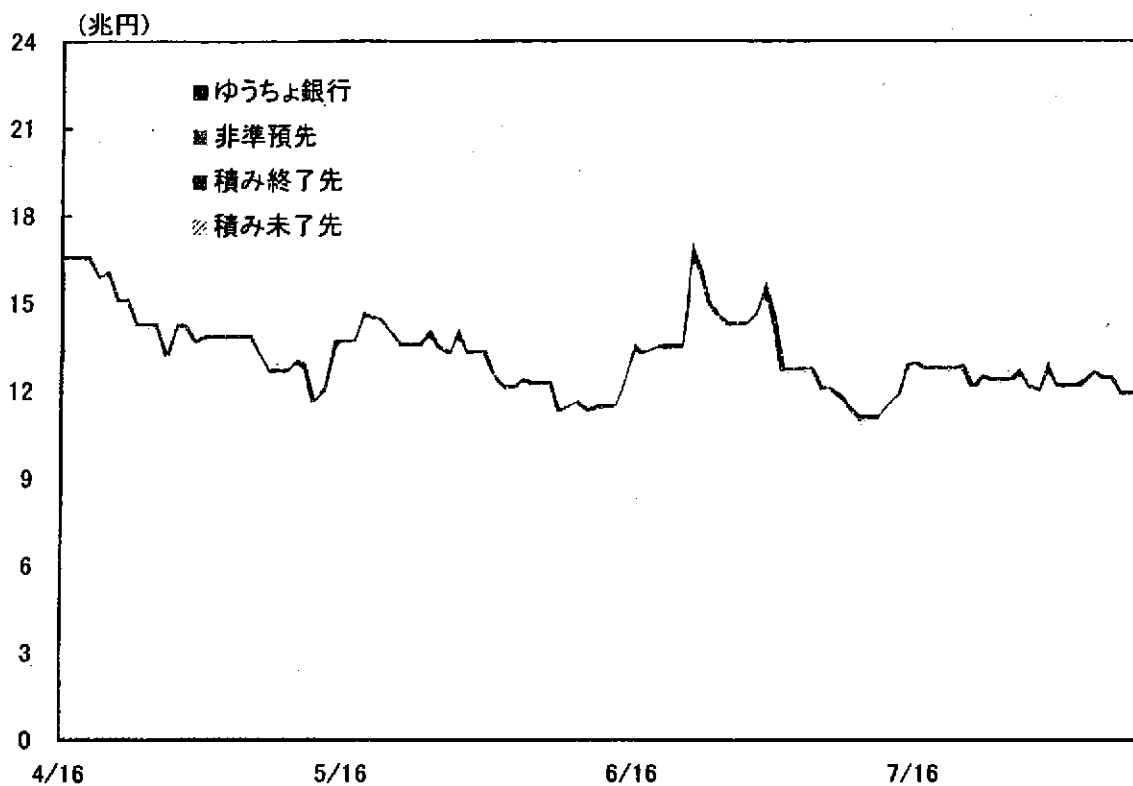
	4月積み期	5月積み期	6月積み期	7月積み期	8/7日	7月積み期 所要準備額
準預先	126,731	117,428	120,493	111,538	105,045	<72,675>
除くゆうちょ銀行						< >
都銀	31,407	31,585	31,498	32,029	24,395	<31,262>
地銀	19,560	18,157	19,148	17,246	12,405	<11,827>
地銀Ⅱ	5,257	3,673	4,220	3,255	2,686	<1,485>
外銀	24,079	21,247	22,029	19,926	24,315	<279>
ゆうちょ銀行						< >
非準預先	15,413	11,939	13,250	13,535	14,968	
短資	5,783	4,533	5,308	5,636	5,672	
一部系統	1,086	420	426	549	129	
政府系	365	535	575	629	1,501	
証券会社等	8,179	6,451	6,941	6,721	7,666	
当預残高	142,143	129,367	133,743	125,072	120,013	

(注1)「証券会社」は、金融商品取引法上の有価証券関連業務を行う第一種金融商品取引業者。

(注2)7月積み期の計数は、7/16~8/9日の平均。8/7日は、5時同時処理終了時点。

### 09/4月積み期以降の当座預金残高

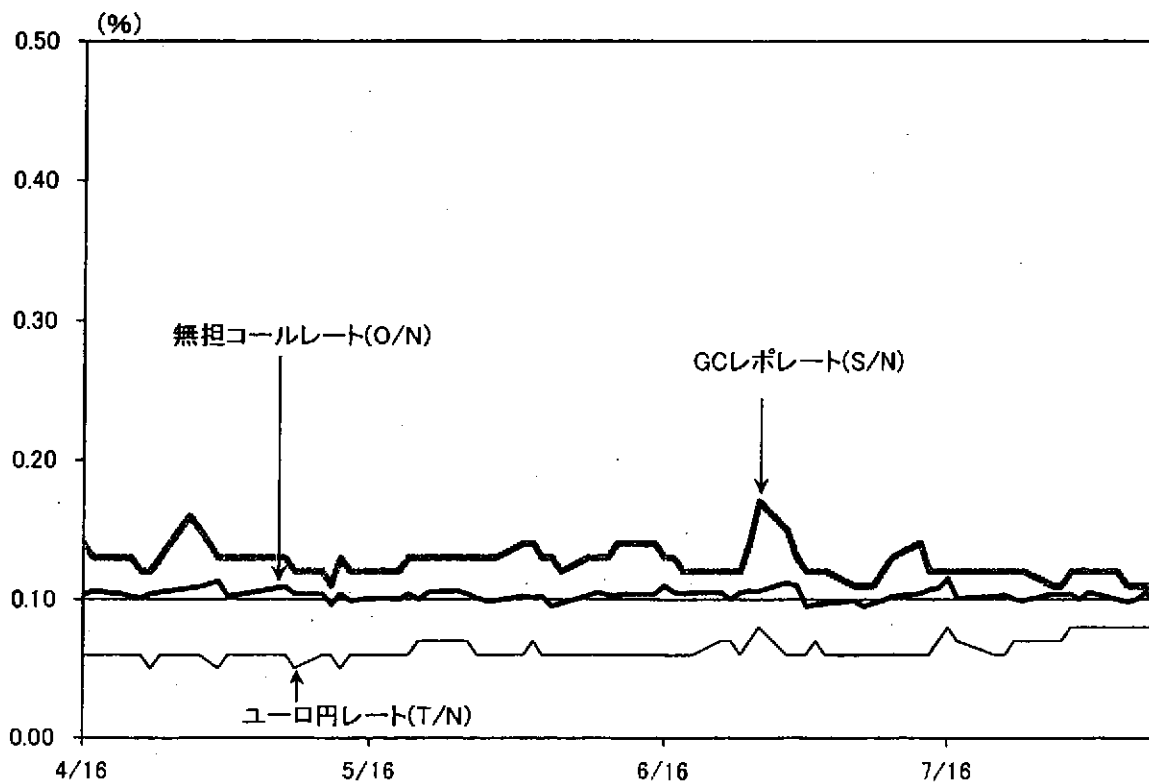
対外非公表



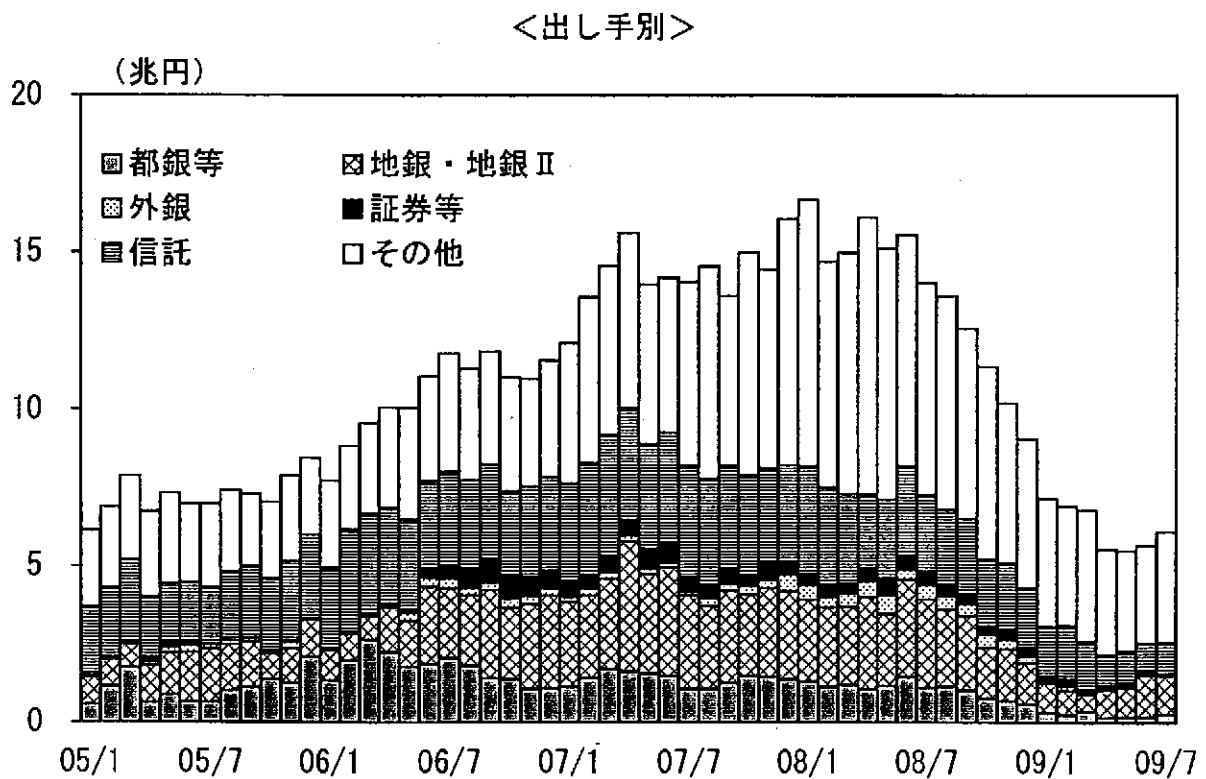
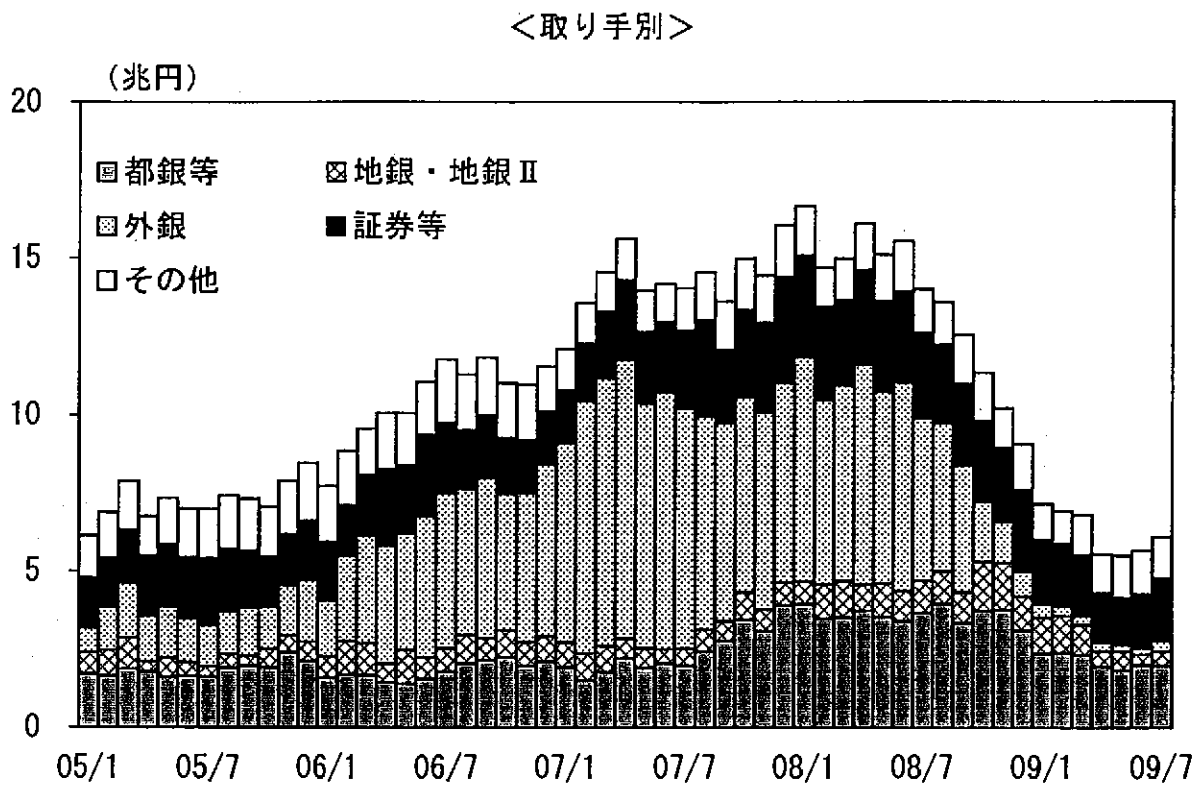
(注)積み終了先、積み未了先及び一日当たり残高(前日終了時点)には、ゆうちょ銀行の計数を含まない。

### 09/4月積み期以降の短期金利

対外非公表



### 無担コール市場残高



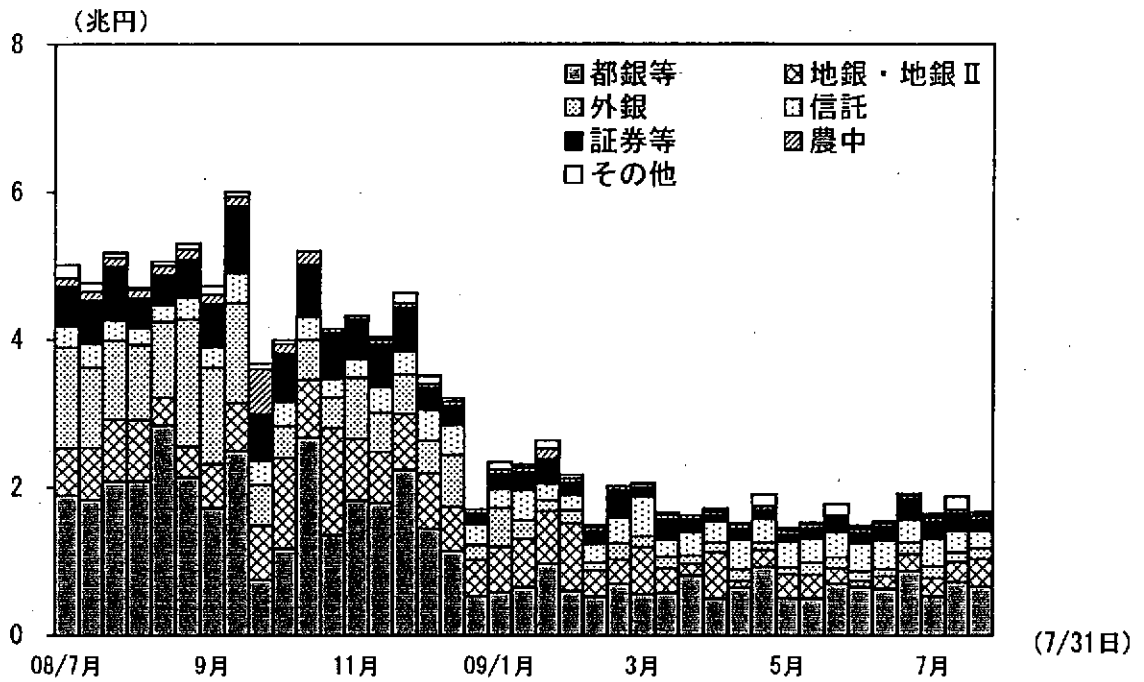
(注1) 月中平残。

(注2) 無担コール市場残高における「都銀等」は都銀、新生銀行、あおぞら銀行。「証券等」は金融商品取引業者(他の区分に属するものを除く)および証券金融会社。

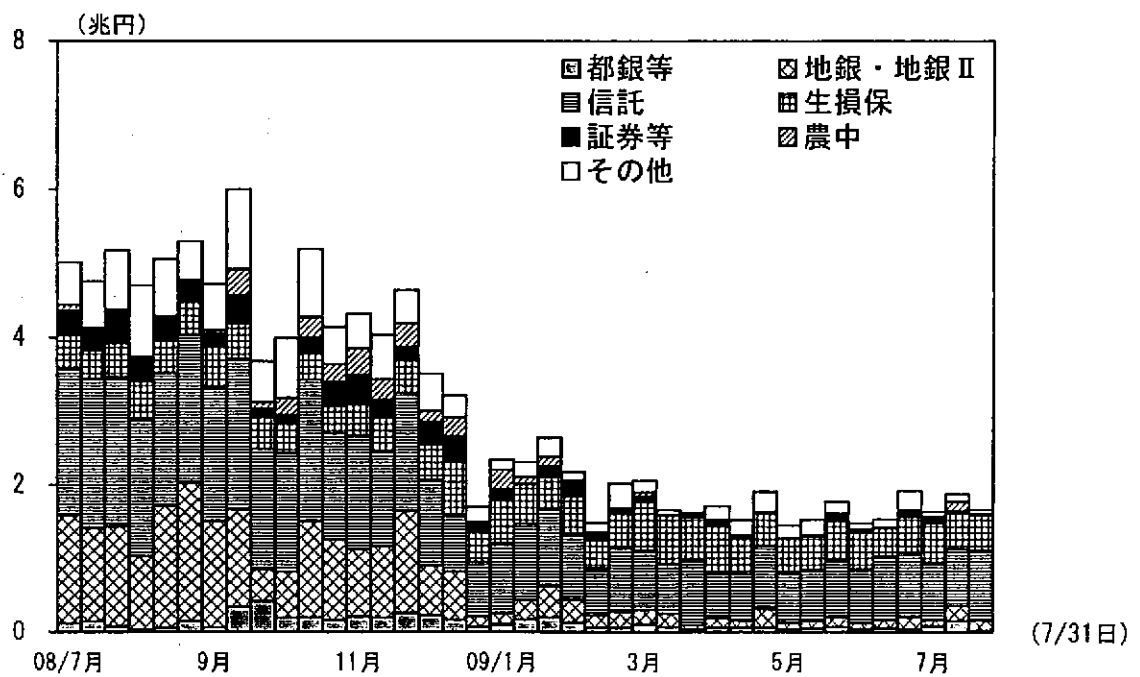
### 無担コール市場残高 (O/N、T/N、S/N計)

<取り手別>

対外非公表



<出し手別>



(注) 各旬末残高。



(図表1-6)

## 最近のオペ結果の推移(1)

(資金供給オペ)

(億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札 レート	落札決定 レート
共通担保(全店)	98,076	7/17	T+1	3W	10,000	3.27	0.123	0.12
		7/17	T+2	3M	8,000	3.36	0.142	0.14
		7/24	T+1	1W	10,000	3.09	0.118	0.11
		7/24	T+2	3M	8,000	3.16	0.139	0.13
		7/30	T+2	3M	8,000	3.50	0.133	0.13
		8/7	T+1	1M	8,000	2.86	0.111	0.11
		8/7	T+2	3M	8,000	3.66	0.123	0.12
		共通担保(本店)	150,054	7/14	T+1	2W	6,000	2.79
7/14	T+1			3W	8,000	2.82	0.128	0.12
7/15	T+1			1M	8,000	3.42	0.124	0.12
7/16	T+1			2W	6,000	2.60	0.119	0.11
7/16	T+2			2M	8,000	3.66	0.124	0.12
7/21	T+1			1W	6,000	3.13	0.117	0.11
7/21	T+1			1M	6,000	3.23	0.120	0.12
7/22	T+1			1W	4,000	4.25	0.110	0.11
7/23	T+1			3W	4,000	6.26	0.120	0.12
7/23	T+2			2M	8,000	3.74	0.120	0.12
7/27	T+1			1W	6,000	3.92	0.120	0.11
7/28	T+1			1W	4,000	5.08	0.120	0.12
7/28	T+2			2M	8,000	2.81	0.131	0.13
7/29	T+1			2W	8,000	2.73	0.118	0.11
7/31	T+1			1W	6,000	3.34	0.117	0.11
7/31	T+1			1M	8,000	2.71	0.120	0.12
8/3	T+1			2W	6,000	3.11	0.117	0.11
8/3	T+1			1M	8,000	2.43	0.118	0.11
8/4	T+1			1W	4,000	4.40	0.110	0.11
8/5	T+1			3W	8,000	3.01	0.110	0.11
8/5	T+2			2M	8,000	3.08	0.125	0.12
8/6	T+1			2W	10,000	2.31	0.105	0.10
8/6	T+1			2M	10,000	3.02	0.110	0.11
CP等買現先	27,737			7/14	T+2	2W	4,000	1.58
		7/16	T+2	1M	4,000	1.21	0.107	0.10
		7/21	T+2	1M	4,000	1.37	0.106	0.10
		7/23	T+2	2W	4,000	1.44	0.109	0.10
		7/28	T+2	2W	4,000	1.51	0.107	0.10
		7/30	T+2	1M	4,000	2.02	0.107	0.10
		8/4	T+2	1M	4,000	1.83	0.107	0.10
		8/6	T+2	2W	4,000	1.35	0.105	0.10
国債買現先	45,885	7/14	T+2	1D	15,000	1.99	0.130	0.13
		7/14	T+2	1W	8,000	2.65	0.125	0.12
		7/15	T+2	4D	15,000	1.96	0.117	0.11
		7/15	T+2	1W	8,000	2.63	0.123	0.12
		7/16	T+2	1D	15,000	2.18	0.123	0.12
		7/16	T+2	1W	8,000	2.93	0.120	0.12
		7/17	T+2	1D	12,000	2.90	0.121	0.12
		7/17	T+2	1W	8,000	2.60	0.120	0.12
		7/21	T+2	1D	12,000	2.66	0.121	0.12
		7/21	T+2	1W	8,000	2.52	0.120	0.12
		7/22	T+2	3D	12,000	2.30	0.118	0.11
		7/22	T+2	1W	8,000	2.48	0.121	0.12
		7/23	T+2	1D	12,000	2.41	0.118	0.11
		7/23	T+2	1W	8,000	2.57	0.123	0.12
		7/24	T+2	1D	10,000	2.51	0.115	0.11
		7/24	T+2	1W	8,000	2.98	0.120	0.12
		7/27	T+2	1D	10,000	2.63	0.113	0.11
		7/27	T+2	1W	8,000	2.95	0.120	0.12
		7/28	T+2	1D	10,000	2.64	0.115	0.11
		7/28	T+2	1W	8,000	2.67	0.120	0.12
		7/29	T+2	3D	10,000	3.00	0.120	0.12
		7/29	T+2	1W	8,000	2.52	0.120	0.12
		7/30	T+2	1D	10,000	3.36	0.120	0.12
		7/30	T+2	1W	8,000	2.68	0.118	0.11
		7/31	T+2	1D	10,000	3.05	0.120	0.12
		7/31	T+2	1W	8,000	3.35	0.119	0.11
		8/3	T+2	1D	10,000	2.88	0.120	0.12
		8/3	T+2	1W	8,000	3.02	0.114	0.11
		8/4	T+2	1D	10,000	2.30	0.111	0.11
		8/4	T+2	1W	6,000	3.25	0.115	0.11
		8/5	T+2	3D	10,000	2.15	0.110	0.10
		8/5	T+2	1W	6,000	2.91	0.114	0.11
8/6	T+2	1D	8,000	3.53	0.109	0.10		
8/6	T+2	1W	6,000	3.15	0.115	0.11		
8/7	T+2	1D	8,000	2.72	0.107	0.10		
8/7	T+2	1W	6,000	3.40	0.111	0.11		

(注1) オペ直近残高は2009/8/7日現在(実行日ベース)。

(注2) 国債買現先オペによる買入国債・受入担保国債のうち、変動利付債は4,058億円、物価連動債は4,502億円(2009/8/7日現在&lt;実行日ベース&gt;、対外非公表)。

(図表1-6)

## 最近のオペ結果の推移(2)

(資金供給オペ) (億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札 レート	落札決定 レート
国庫短期証券買入	94,541	7/16	T+3	-	4,000	6.79	0.011	0.010
		7/24	T+3	-	4,000	4.31	0.002	0.001
		7/31	T+3	-	4,000	4.37	0.004	0.003
		8/7	T+3	-	4,000	3.92	-0.004	-0.005
CP等買入	1,649	7/17	T+3	-	3,000	0.06	0.000	0.000
		7/24	T+3	-	3,000	0.05	0.000	0.000
		7/31	T+3	-	3,000	0.04	0.000	0.000
		8/7	T+3	-	3,000	0.05	0.000	0.000
社債買入	2,213	8/5	T+4	-	1,500	0.23	0.001	0.000
国債買入	-	7/17	T+3	-	3,100	1.57	0.003	0.002
		7/17	T+3	-	2,500	3.20	0.003	0.001
		7/27	T+3	-	2,500	3.15	0.009	0.008
		7/27	T+3	-	400	2.43	0.434	0.680
		8/5	T+3	-	3,100	3.02	0.010	0.010
		8/5	T+3	-	2,500	3.02	0.001	0.000

(米ドル資金供給オペ) (百万ドル、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日 (米国東部 時間)	期間	落札額	応札倍率	貸出利率 (固定金利)
米ドル資金供給	8,113	7/14	7/16	3M	220	-	1.210
		7/28	7/30	1M	2,020	-	1.200

(企業金融支援特別オペ) (億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日	期間	落札額	応札倍率	当初貸付利率
企業金融支援特別	74,826	7/16	7/22	3M	10,284	-	0.100
		7/22	7/27	3M	4,351	-	0.100
		7/27	7/30	3M	2,536	-	0.100
		8/3	8/6	3M	4,877	-	0.100

(注1) オペ直近残高は2009/8/7日現在(実行日ベース)。

(注2) 国庫短期証券買入・CP等買入・社債買入・国債買入の平均落札レート及び落札決定レートは、利回り較差(変動利付債・物価連動債については、価格較差)。

(注3) 国庫短期証券買入の直近残高は、繰上償還等を控除していない。

(図表 1-7)

## 資金需給の推移

(単位：兆円)

	資金需給 (国庫短期証券調整済)			金融調節 (国庫短期証券調整済)	当預残高 (末残)	
		銀行券	財政等 (国庫短期証券調整済)			
09/2月	▲2.1	▲0.1	▲2.0	+4.3	13.6	
3月	+3.0	+0.0	+3.0	+5.6	22.1	
4月	▲1.2	▲1.4	+0.3	▲7.2	13.8	
5月	▲6.0	+1.9	▲7.9	+5.6	13.4	
6月	+8.1	▲0.3	+8.5	▲5.8	15.7	
7月	▲9.8	+0.3	▲10.2	+6.3	12.3	
8月	(-7日)	▲2.8	+0.4	▲3.2	+2.5	12.0
	(10日-)	▲1.5	▲0.2	▲1.3	▲17.5	N.A.

(注1) ここでの資金需給は、各月の表面上の計数に、本行が買入れた国庫短期証券の償還額を加えたもので、実力ベースの資金需給。金融調節は、国庫短期証券の償還分も含めた計数で、短期オペ残高の増減に国債買入額を加えたものに一致する。

(注2) 8月(10日-)の資金需給は、現時点での予想。金融調節は、8/7日までにオファーしたオペのスタート・期落ち分に国債買入(1.3兆円)を加えたもの。

(注3) 四捨五入の関係で、資金需給の内訳と合計は必ずしも一致しない。

(\*)は対外非公表

## 本行受入担保残高の推移

末残、単位：表内=兆円、括弧内=億円

担保種類	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
総計	104.9	107.2	100.1	105.5	103.1	105.9
国債	71.3	70.1	65.9	70.0	65.6	70.6
利付国債等(注1)	51.5	49.8	46.0	48.4	47.7	(注2) 50.4
変動利付国債(*)	12.0	12.6	12.2	12.0	11.7	11.9
物価連動国債(*)	2.4	2.1	2.0	2.3	2.1	2.1
国庫短期証券	19.8	20.3	19.9	21.6	17.8	20.1
社債等(注3)	1.4	1.4	1.4	1.4	1.5	1.5
短期社債等(注4)	2.0	2.8	2.2	2.6	3.3	3.3
その他債券(注5)	6.5	6.4	6.0	5.8	5.9	6.0
手形(注6)	1.9	1.5	1.8	1.8	1.3	1.3
証貸	21.6	24.7	22.5	23.6	25.3	23.0
企業向け等(注7)	2.8	4.3	4.7	4.8	4.9	5.1
政府向け等(注8)	18.7	20.3	17.8	18.7	20.4	17.9
うち民間債務分	8.3	10.3	10.3	10.8	11.1	11.4

ABS	427	426	418	419	421	424
ABCP(注9)	2,959	5,140	5,090	5,155	2,810	2,780
(うち特則分)(*)	(129)	(15)	(15)	(34)	(17)	(9)
社債特則分(*)	613	737	658	613	689	554
企業向け証貸特則分(*)	1,610	3,195	4,377	4,412	4,789	4,433
不動産投資法人債	0	36	40	30	41	46
不動産投資法人CP(注10)	0	0	0	0	0	0
不動産投資法人向け証貸	0	0	0	0	0	0
政府保証付短期債券	0	0	0	0	0	0
政府(特別会計含む)向け証貸	176,039	191,031	164,532	173,984	190,462	165,103
政府保証付証貸	11,764	12,849	13,761	13,865	14,153	14,257
地方公共団体向け証貸	-	-	0	0	0	116
外貨建外国債券	-	-	-	-	-	0

(参考) 現先オペでの買入残高

末残、単位：表内=兆円、括弧内=億円

オペ種類	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
国債買現先オペでの国債買入残高	8.0	8.9	7.8	7.4	6.3	4.9
CP等買現先オペでのCP買入残高	2.7	2.9	2.6	2.7	2.7	2.7

ABCP買入残高	4,661	5,999	3,579	4,011	4,650	5,621
(うち特則分)(*)	(4,412)	(5,477)	(3,030)	(3,478)	(3,949)	(4,893)
不動産投資法人CP買入残高	0	0	0	0	0	0
政府保証付短期債券買入残高	0	520	600	380	900	400

(注1) 利付国債、割引国債、承継国債および分離国債。

(注2) 分離国債は、183億円。(\*)

(注3) 不動産投資法人債を含む。

(注4) 短期社債、保証付短期外債、資産担保短期債券、短期不動産投資法人債および政府保証付短期債券。

(注5) 外貨建外国債券を含む。

(注6) CPを含む。

(注7) 不動産投資法人向け証貸を含む。

(注8) 政府(特別会計含む)向け証貸、政府保証付証貸および地方公共団体向け証貸。

(注9) 資産担保短期債券を含む(以下同じ)。

(注10) 短期不動産投資法人債を含む(以下同じ)。

(図表1-9)

対外非公表

## 共通担保使用状況

単位：兆円

	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月
共通担保使用額合計 <sup>(注1)</sup>	39.3	40.6	32.2	35.1	27.3	31.5
うち共通担保オペ使用額 <sup>(注1)</sup>	30.4	32.6	26.6	31.2	24.2	29.7
当座貸越残高 日中ピーク <sup>(注2)</sup>	5.4	5.3	5.3	4.8	5.2	5.3

(注1) 末残。企業金融支援特別オペを含む。

(注2) 平残（ITC口を除く）。

(\*)は対外非公表

## 信用判定・適格審査の状況

## 1. ABCP、J-REITの担保適格審査状況

	件数	発行枠	受入残高 <sup>(注1)</sup>
担保適格ABC P (特則分) (*)	14件	9兆5,500億円	4,902億円
担保適格ABC P (本則分) (*)	6件	1兆1,025億円	3,498億円
市中ABC P計 <sup>(注2)</sup>	42件	16兆6,993億円	—
担保適格J-REIT	10件 (*)	—	46億円

(注1) 「受入残高」は7月末時点（共通担保受入額とCP等買現先オペでの買入残高の合計）。

(注2) 「市中ABC P計」は2009年3月末の計数。

## 2. 信用判定の状況

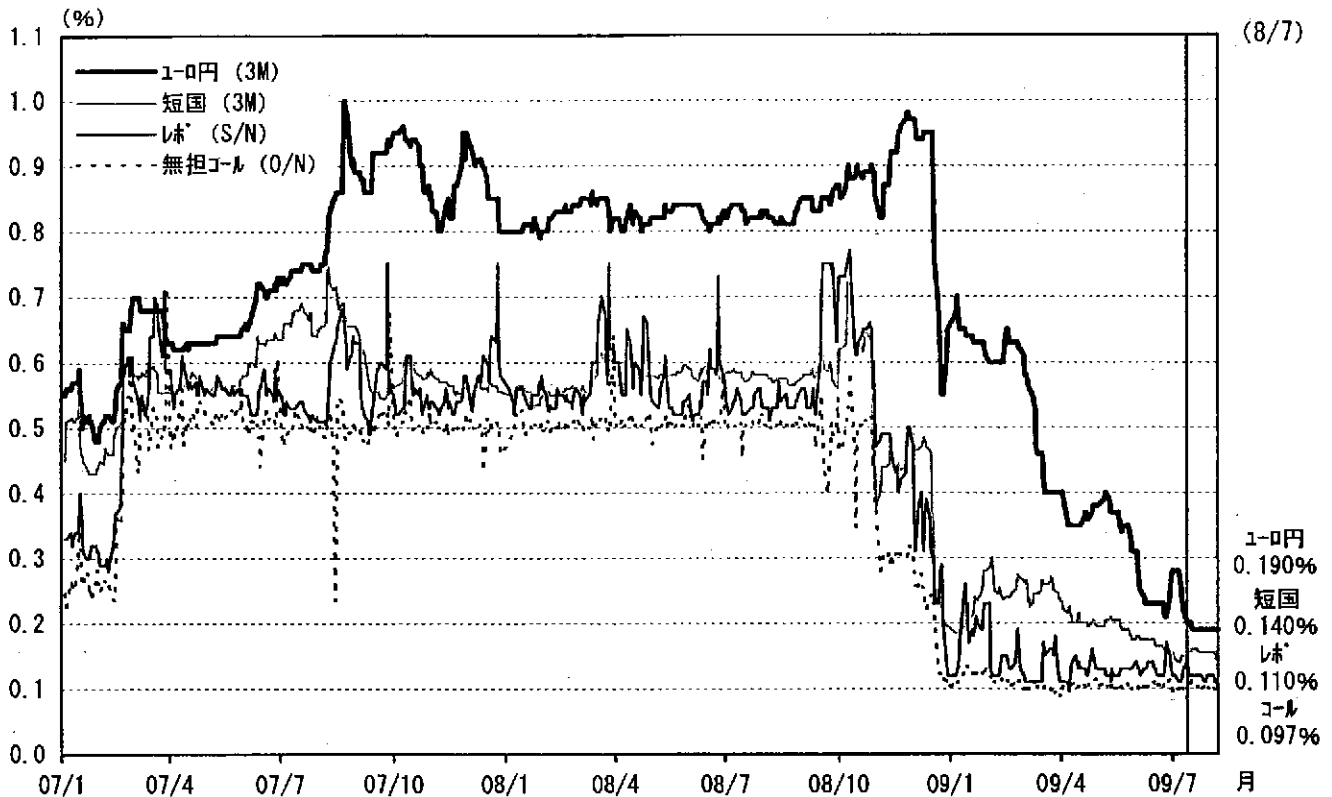
	2009/2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月 <sup>(注)</sup>
新規適格化先数 (*)	11	3	0	3	0	3	0
取下げ・抹消先数 (*)	2	3	1	3	1	3	0
信用判定適格先数	371	371	370	370	369	369	369

(注) 8月5日時点。



## 短期金利の推移

## (1) 短期金利の推移



## (2) ターム物レート等の推移

(%)

	無担コール	レポ	TIBOR	ユーロ円			短国		
	0/N	S/N	3M	1M	3M	6M	3M	6M	1Y
09/7/13	0.104	0.140	0.564	0.140	0.200	0.500	0.150	0.155	0.180
7/14	0.107	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.155	0.180
7/15	0.108	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.155	0.180
7/16	0.115	0.120	0.564	0.140	0.200	0.500	0.155	0.160	0.180
7/17	0.101	0.120	0.564	0.140	0.190	0.500	0.160	0.160	0.180
7/21	0.102	0.120	0.563	0.140	0.190	0.500	0.160	0.165	0.180
7/22	0.103	0.120	0.562	0.140	0.190	0.500	0.155	0.165	0.180
7/23	0.100	0.120	0.561	0.140	0.190	0.500	0.155	0.165	0.180
7/24	0.099	0.120	0.561	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/27	0.104	0.110	0.561	0.140	0.190	0.480	0.155	0.165	0.180
7/28	0.104	0.110	0.561	0.140	0.190	0.480	0.155	0.165	0.180
7/29	0.104	0.120	0.560	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/30	0.100	0.120	0.559	0.140	0.190	0.470	0.155	0.165	0.180
7/31	0.105	0.120	0.557	0.140	0.190	0.450	0.155	0.165	0.180
8/3	0.100	0.120	0.556	0.140	0.190	0.440	0.155	0.165	0.180
8/4	0.098	0.110	0.556	0.140	0.190	0.440	0.155	0.170	0.180
8/5	0.100	0.110	0.556	0.140	0.190	0.430	0.145	0.170	0.180
8/6	0.105	0.110	0.556	0.140	0.190	0.430	0.145	0.165	0.175
8/7	0.097	0.110	0.556	0.140	0.190	0.430	0.140	0.160	0.170

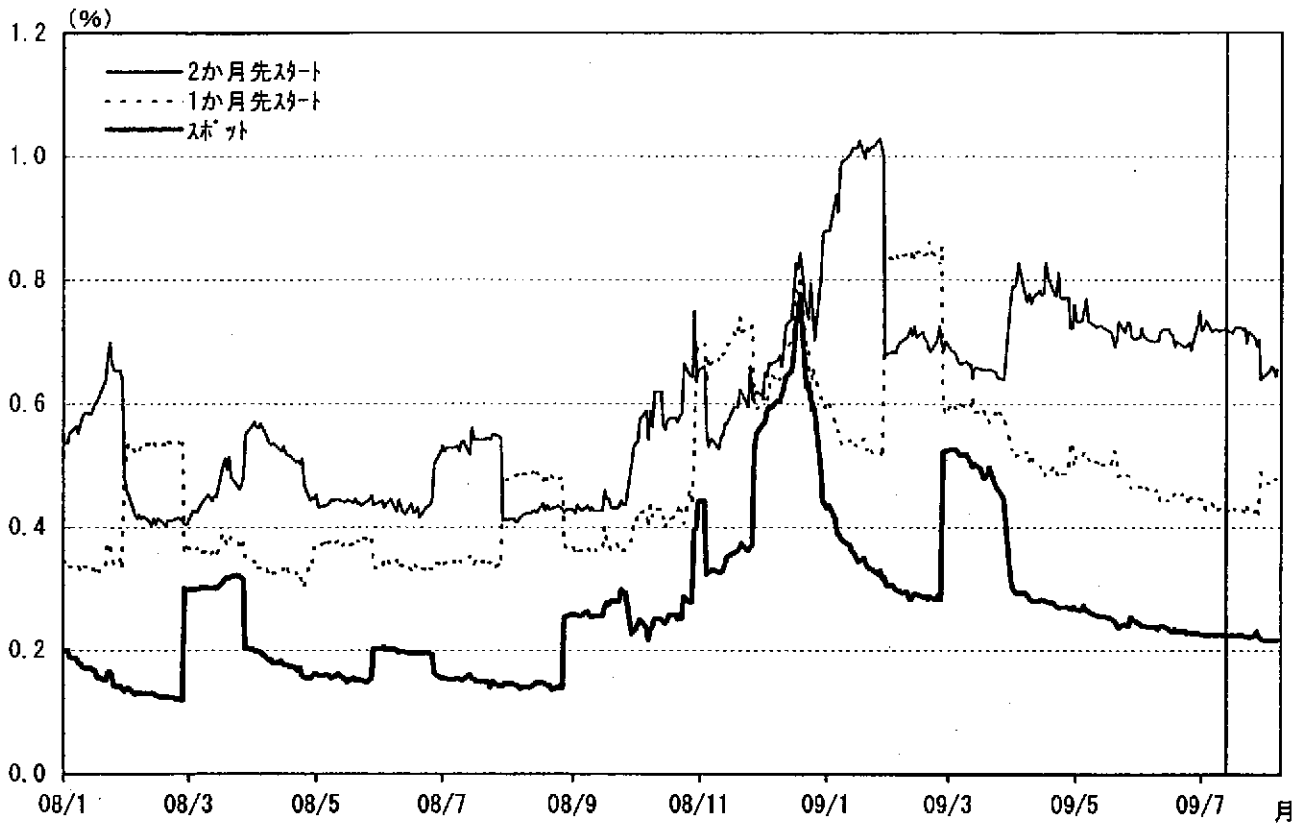
(注) 1. レポレート、ユーロ円レートはヒアリングベース (対外非公表)。

2. 短国レートはT-Bill利回り。ただし、09/2月の統合発行以前はFB/TB利回り。

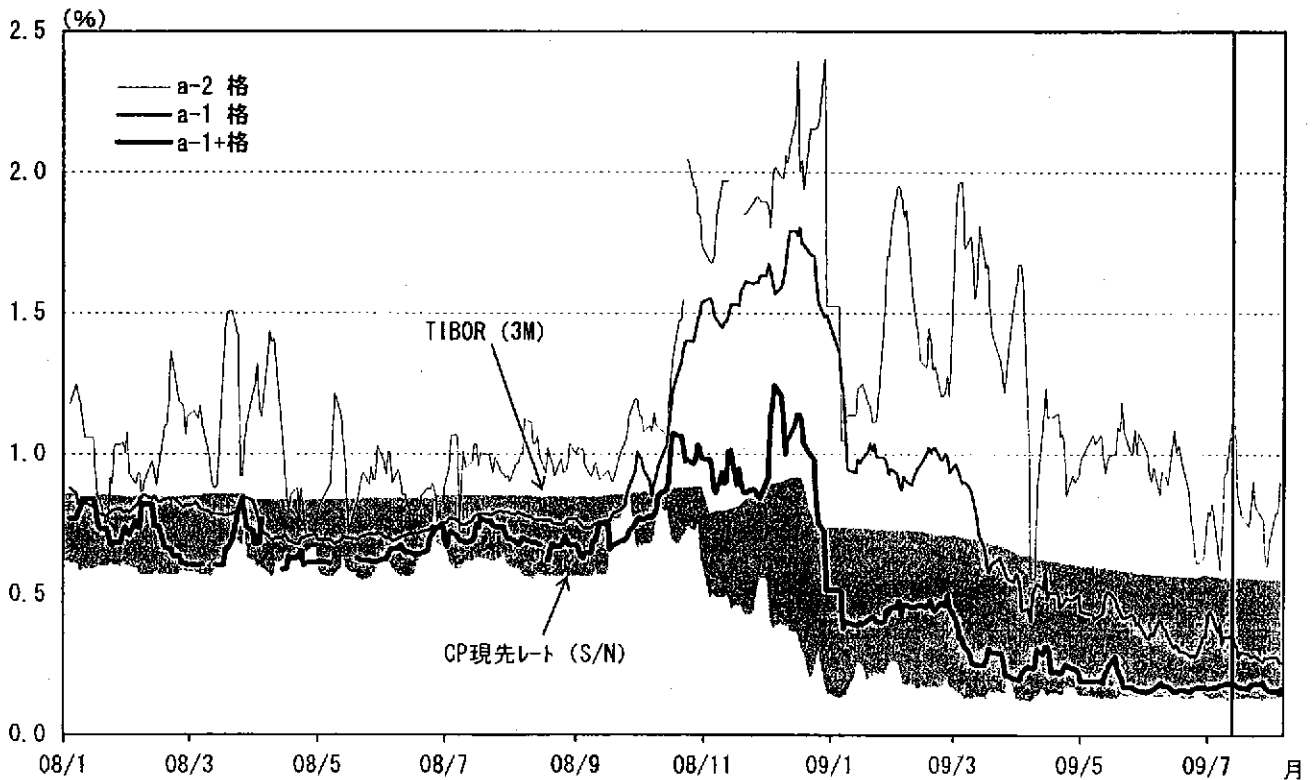
(出所) 全国銀行協会、日本相互証券、日本銀行

### ターム物レートの推移 (1)

(1) TIBOR-OISスプレッド (1か月物フォワードレート) の推移



(2) CP発行レート (3か月物) の推移



(注) 1. (2)は対外非公表。CP発行レート (5日移動平均) の集計対象は、CP等買現先オペの対象先による引受分、格付けは基本的にR&Iによる。金融機関発行分およびABCPは除く。

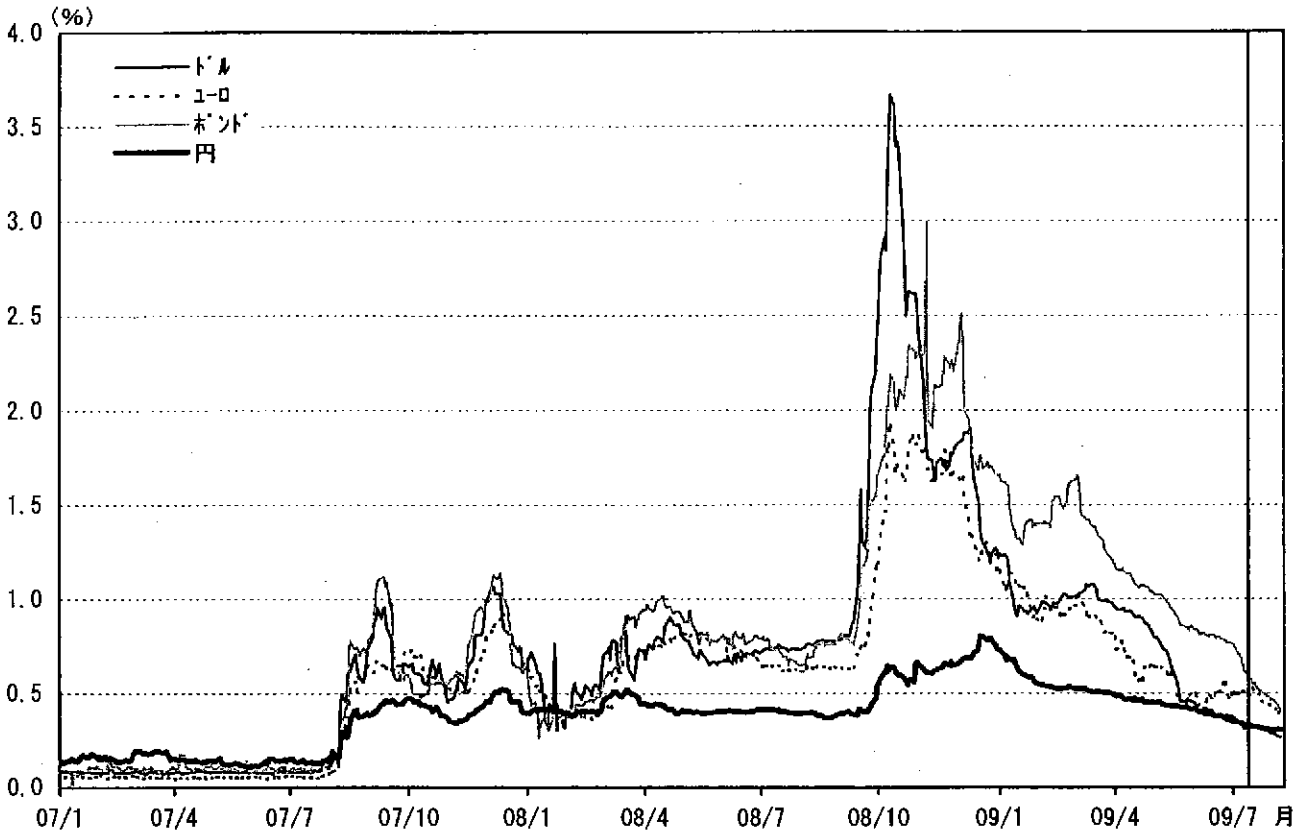
2. 直近は、(1)は8/7日、(2)は8/6日。

(出所) Bloomberg、全国銀行協会、日本銀行

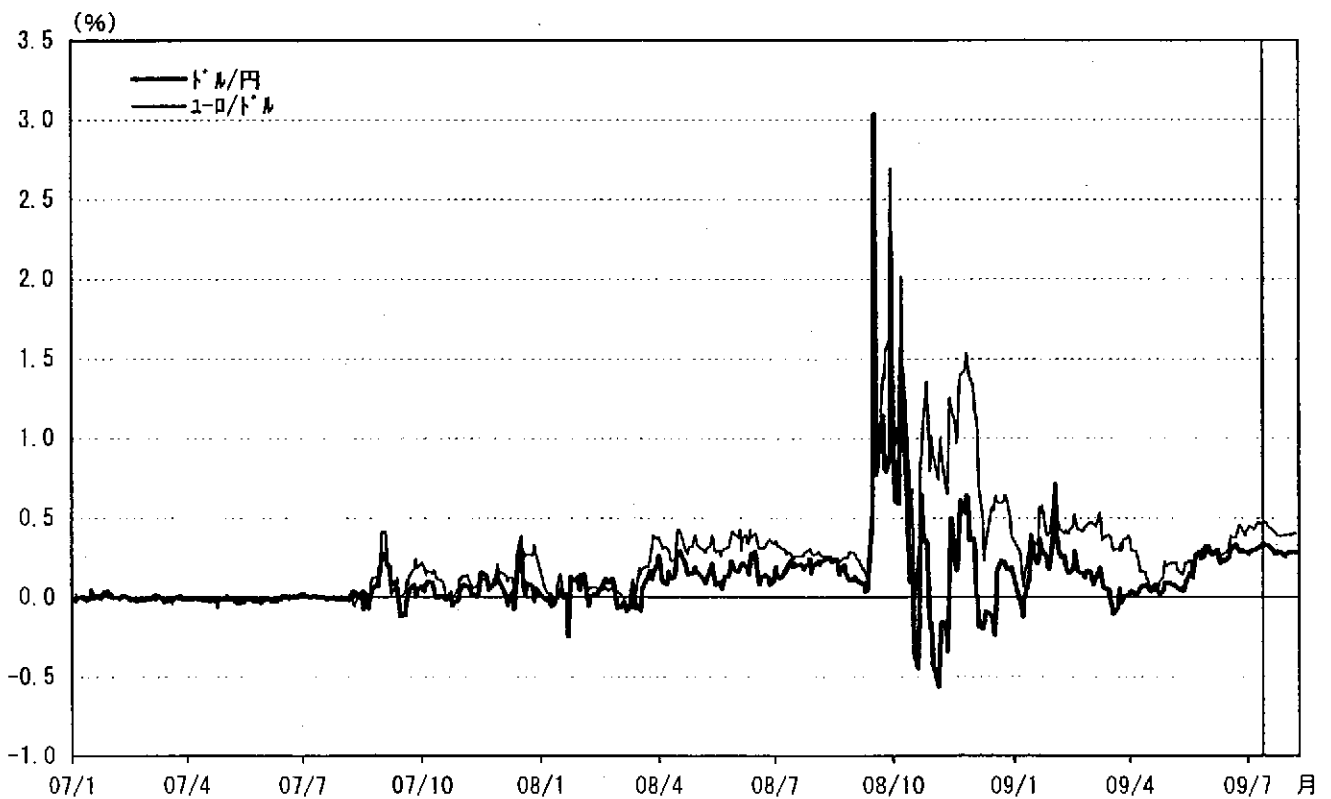


### ターム物レートの推移 (2)

(1) LIBOR-OISスプレッド (3か月物) の推移



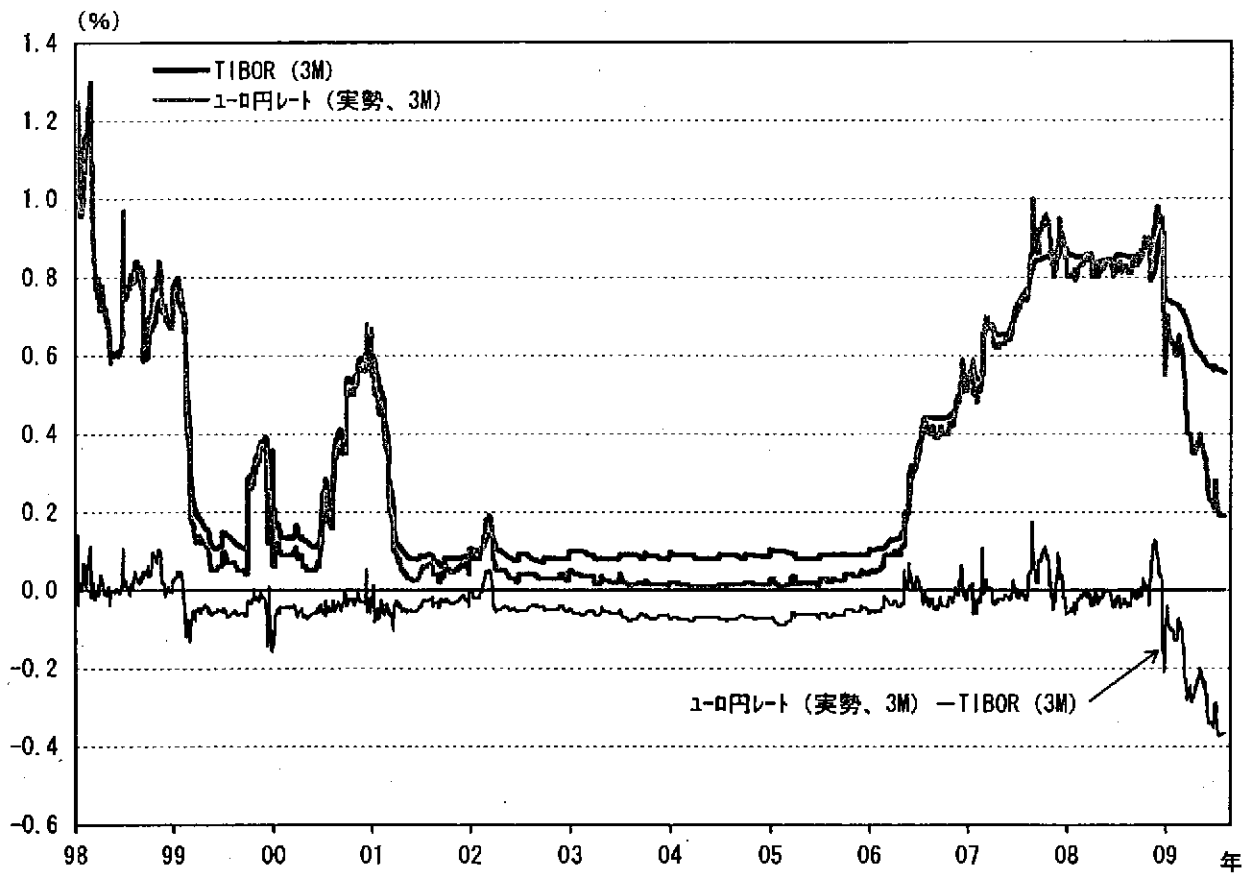
(2) ドル転コスト対ドルLIBORスプレッド (3か月物) の推移



(注) 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg

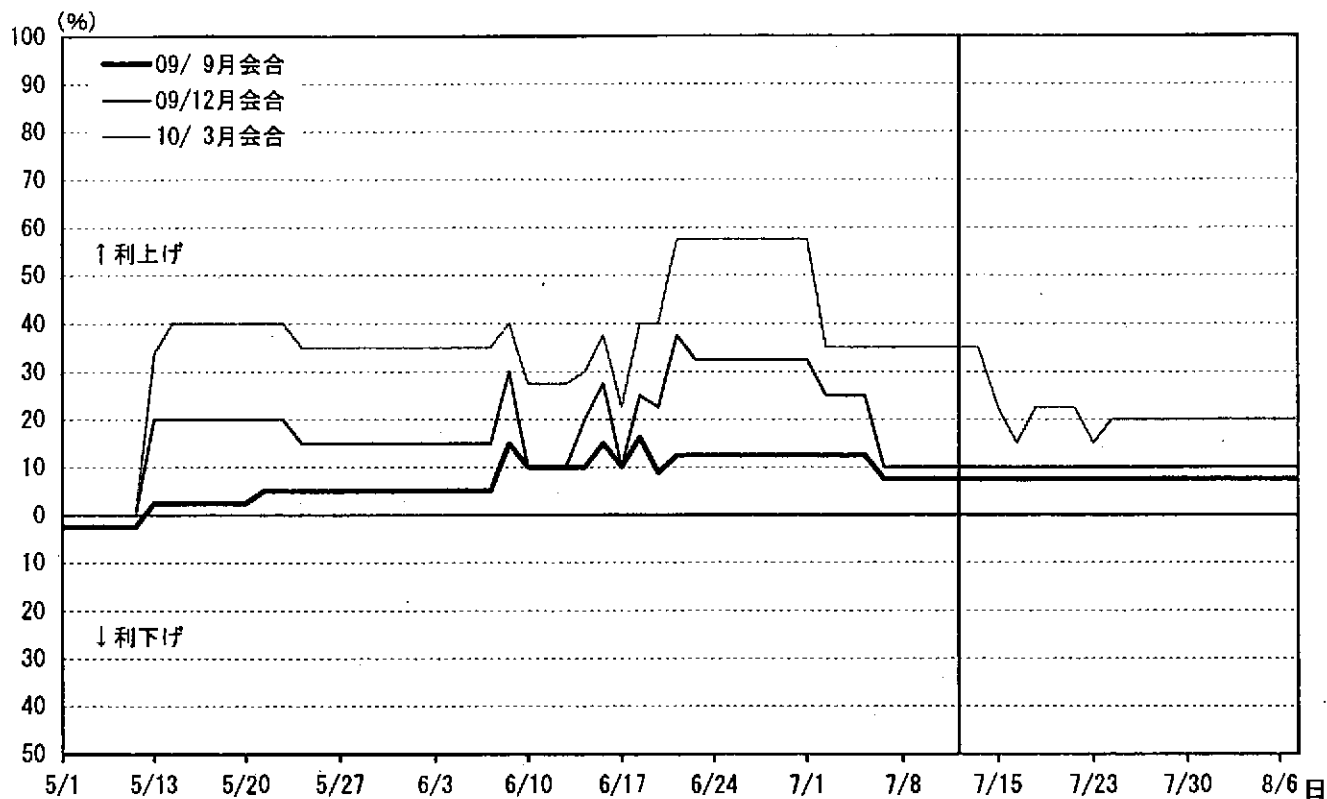
ターム物レートの推移 (3)



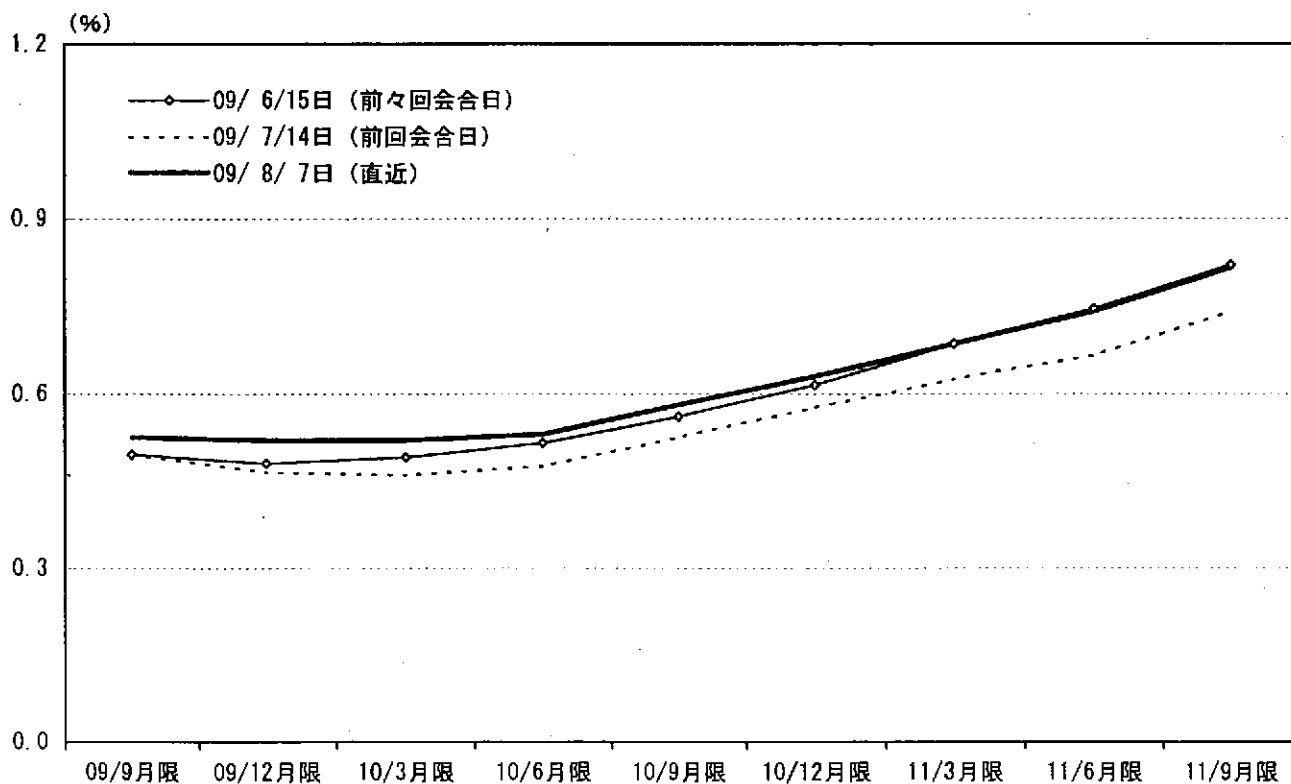
(注) 対外非公表。直近は8/7日。  
(出所) Bloomberg、日本銀行

### フォワードレートの動向

(1) OISレートからみた政策変更(±10bps)の織り込み度合い



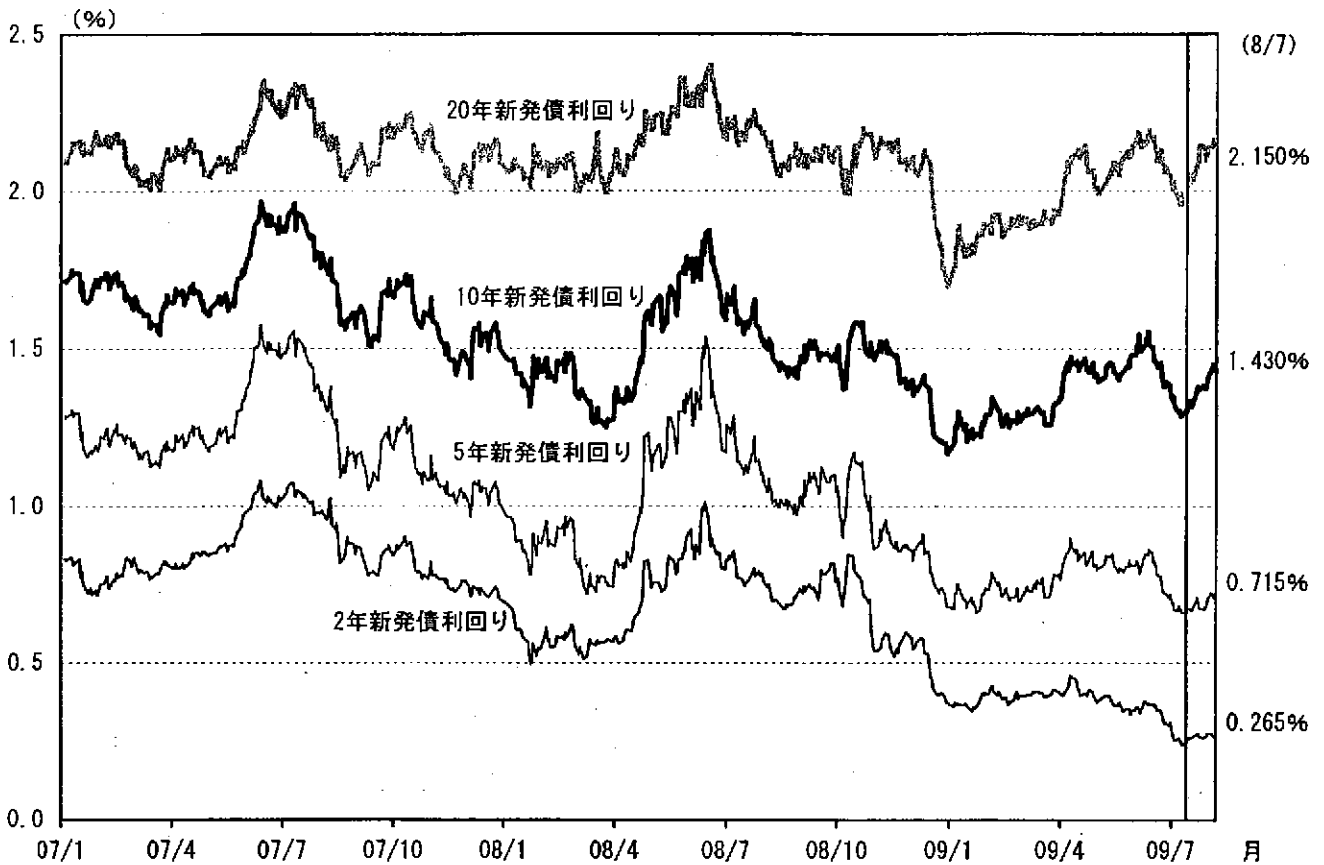
(2) ユーロ円金利先物からみたフォワードレート・カーブ



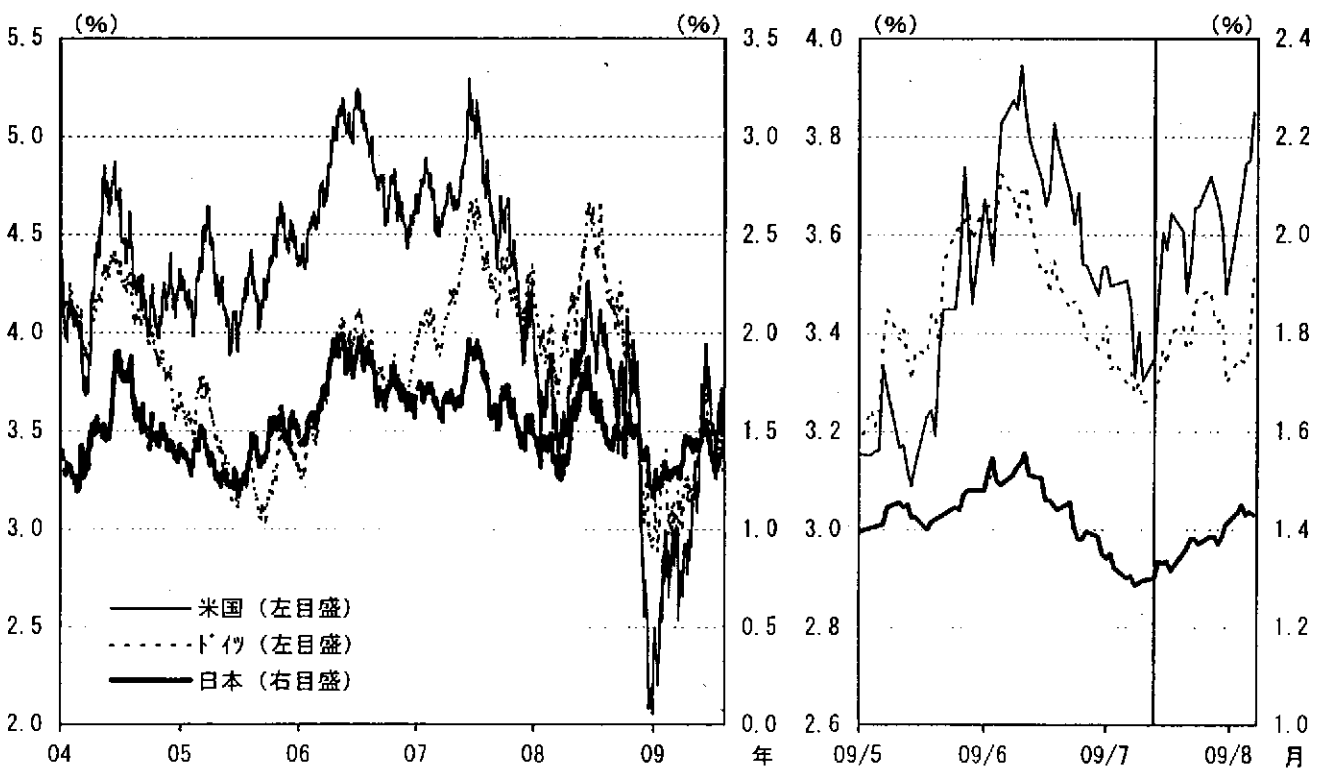
(注) (1)は会合間取引レートの仲値から算出。直近は8/7日。  
(出所) トムソン・ロイター、メイタン・トラディション、東京金融取引所

### 長期金利の推移

#### (1) 国内年限別の推移



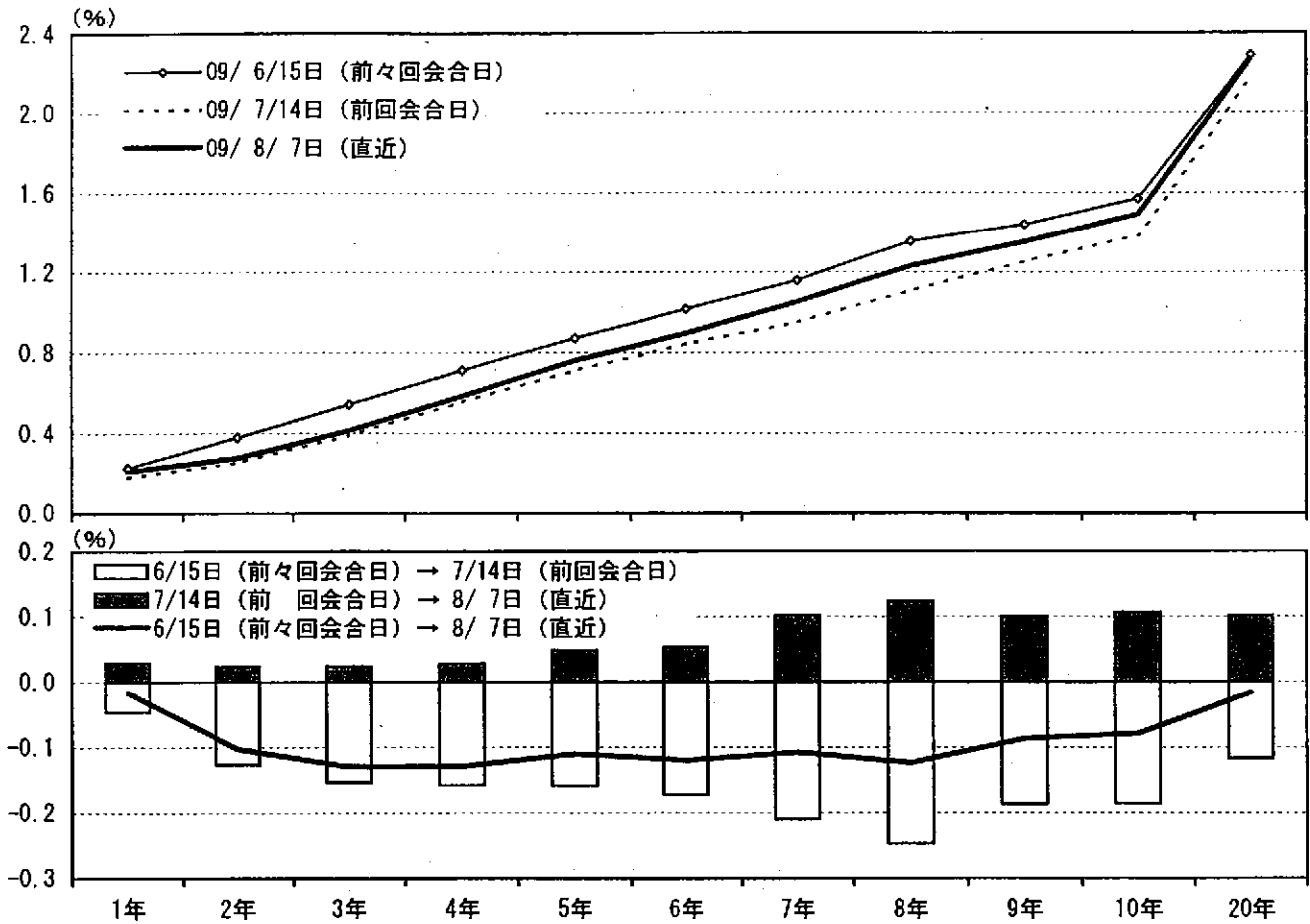
#### (2) 10年国債利回りの推移



(注) 直近は8/7日。

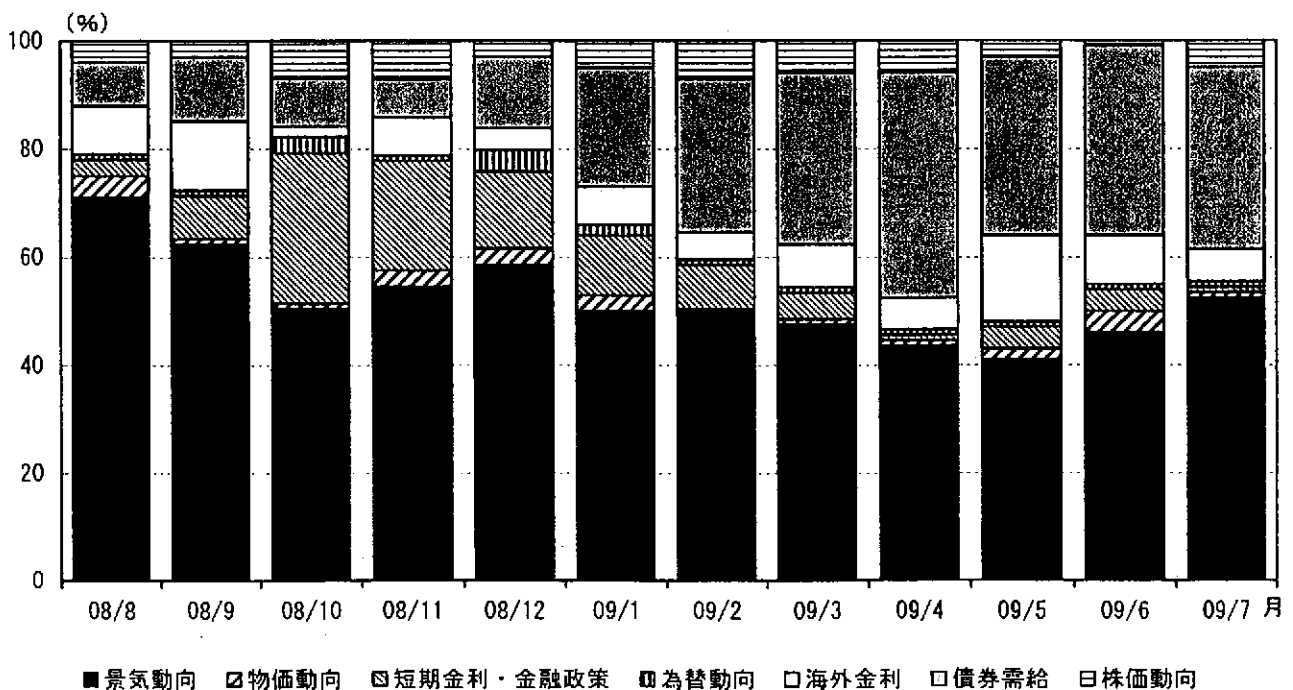
(出所) Bloomberg、日本相互証券

### イールド・カーブの動向



(出所) 日本証券業協会、日本銀行

### 市場参加者が注目する債券利回り変動要因

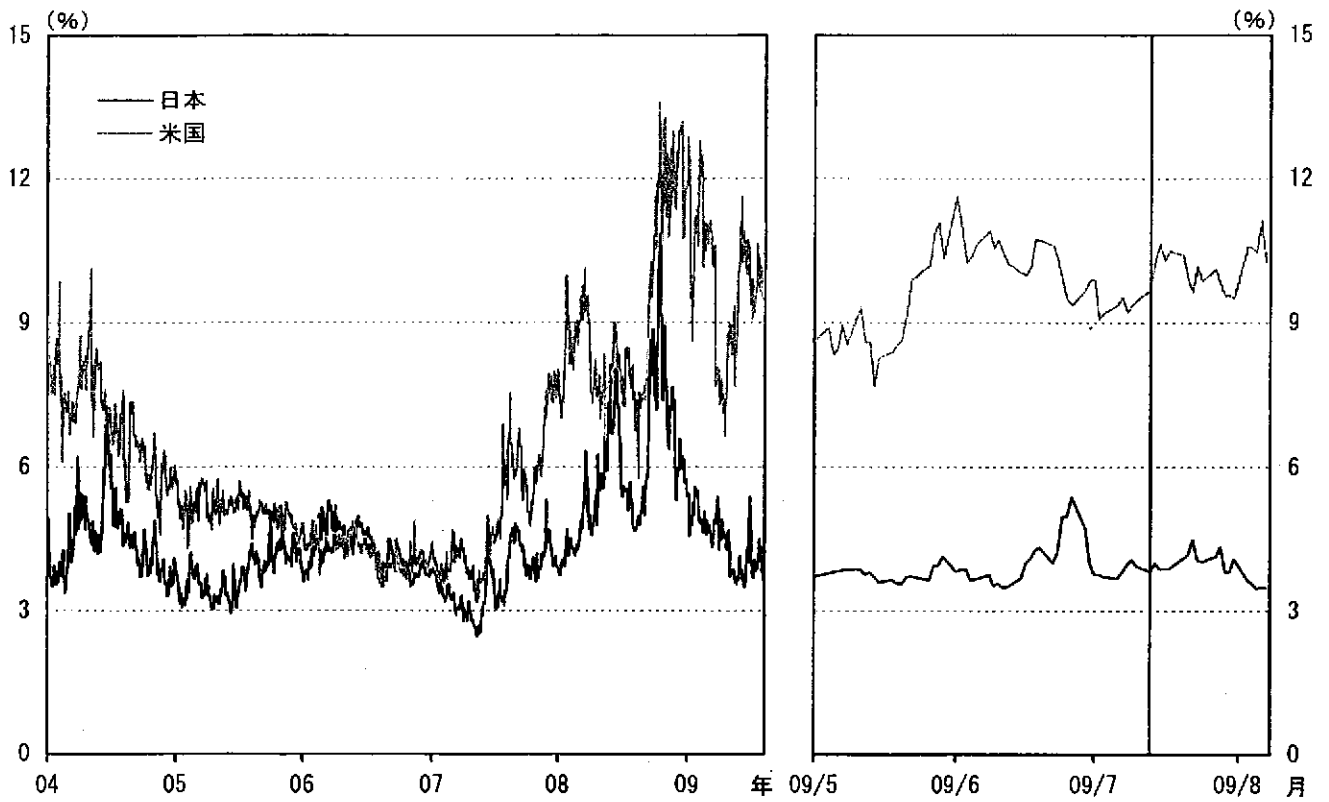


(注) 調査期間は09/7/28日～09/7/30日。期間中の10年新発債利回りは1.365～1.390%。

(出所) 「OSS債券月次調査」

(図表 2-8)

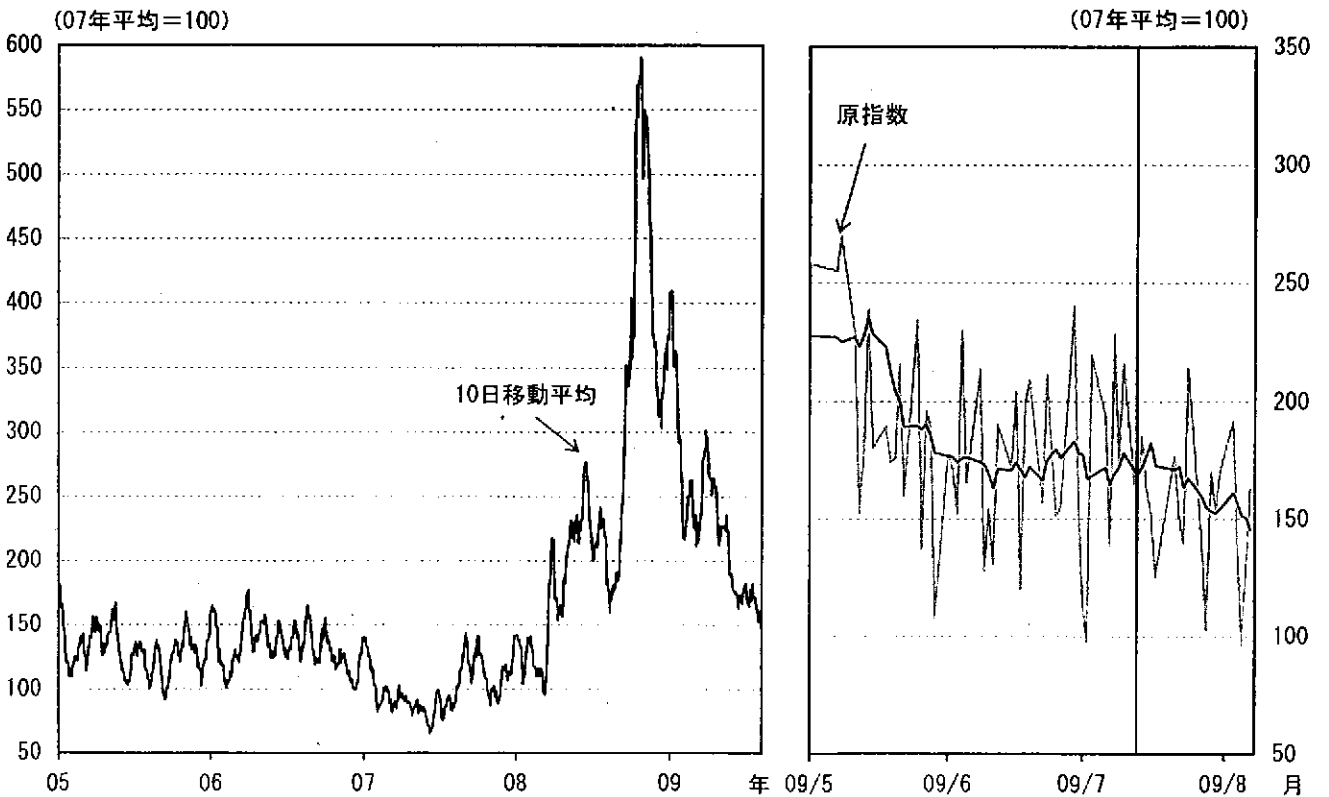
### インプライド・ボラティリティの推移



(注) 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg、三菱UFJ証券

### 長国先物の値幅・出来高比率の推移

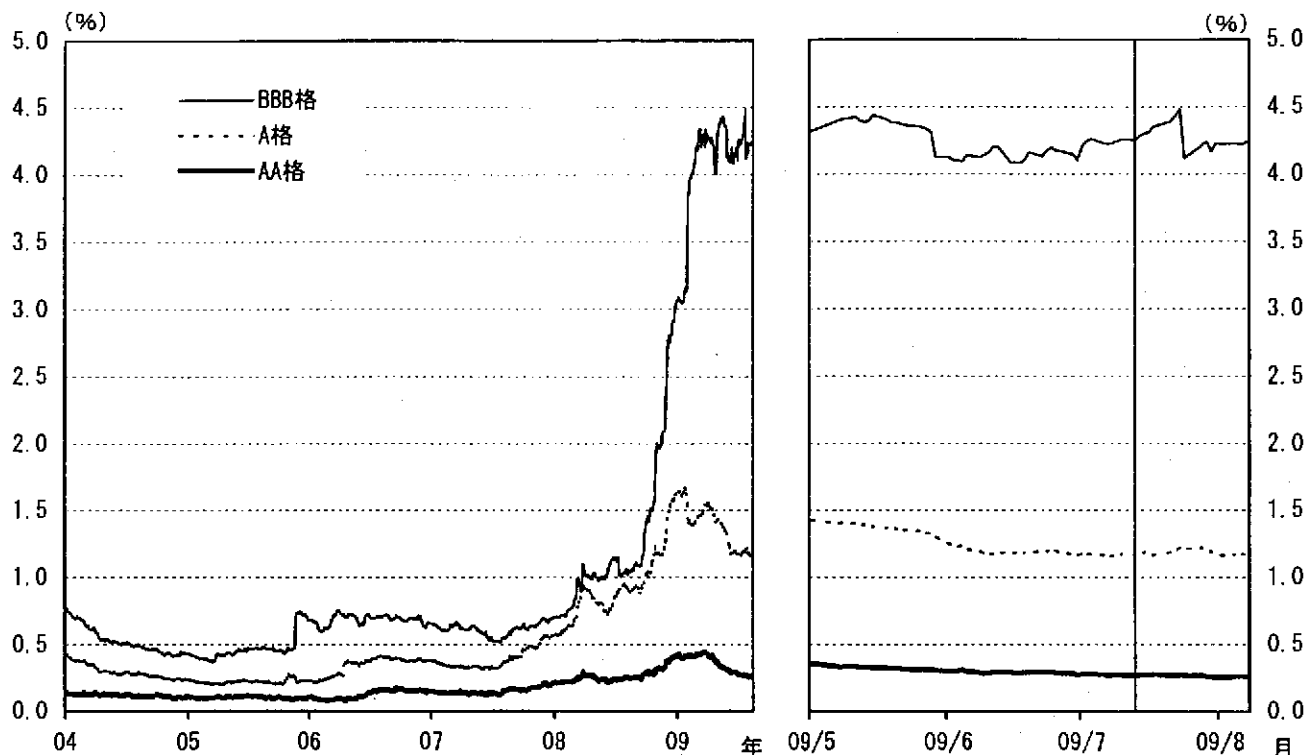


(注) 直近は8/7日。

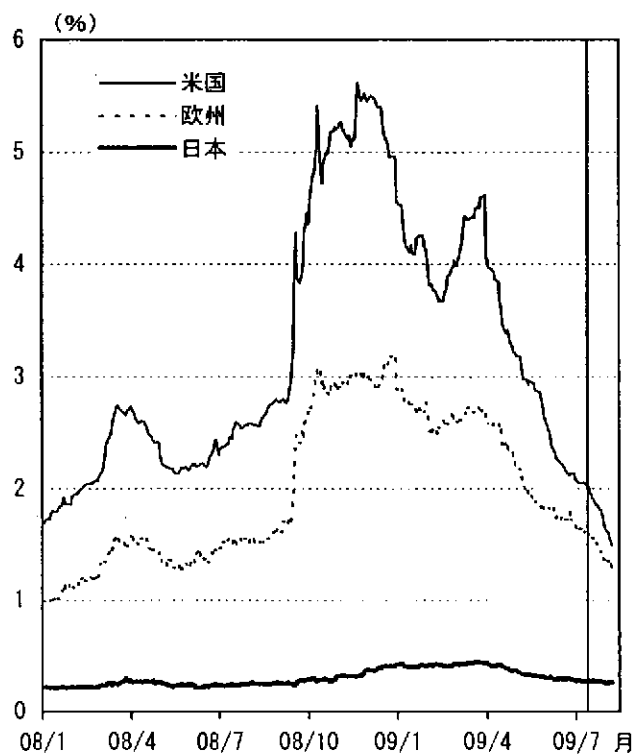
(出所) QUICK

### 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移

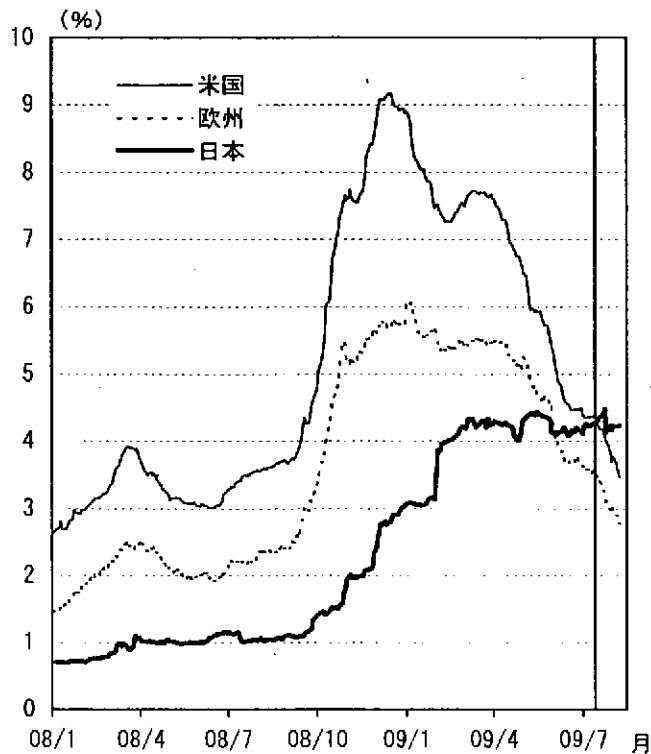
#### (1) 国内社債の動向



#### (2) 高格付社債（AA格）の動向



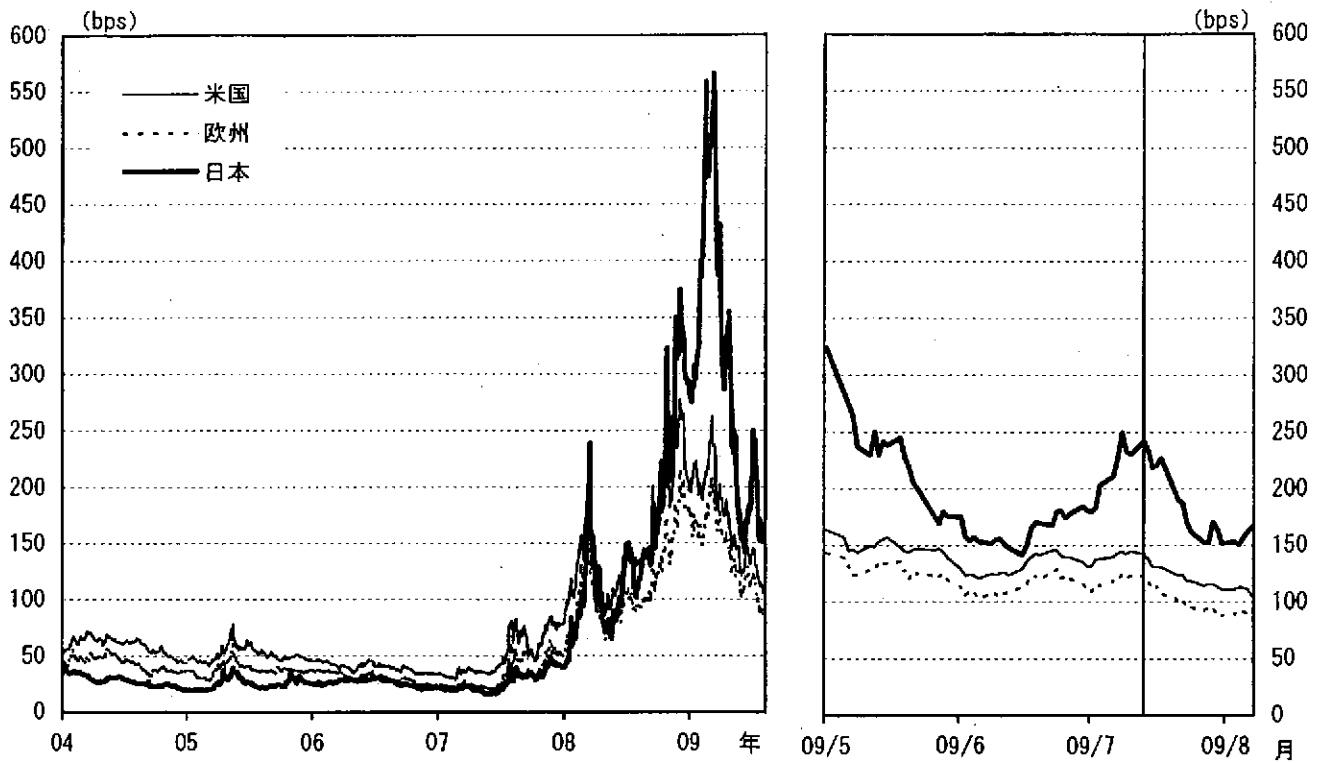
#### (3) 低格付社債（BBB格）の動向



(注) 1. 日本の社債流通利回りは売買参考統計値、格付けはR&Iによる。集計対象は、残存3年以上7年未満の銘柄。  
2. 米欧はメリルリンチ算出、格付けはMoody's、S&P、Fitchによる。集計対象は、残存3年以上5年未満の銘柄。  
3. 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg、日本証券業協会、日本銀行

### CDSプレミアムの推移

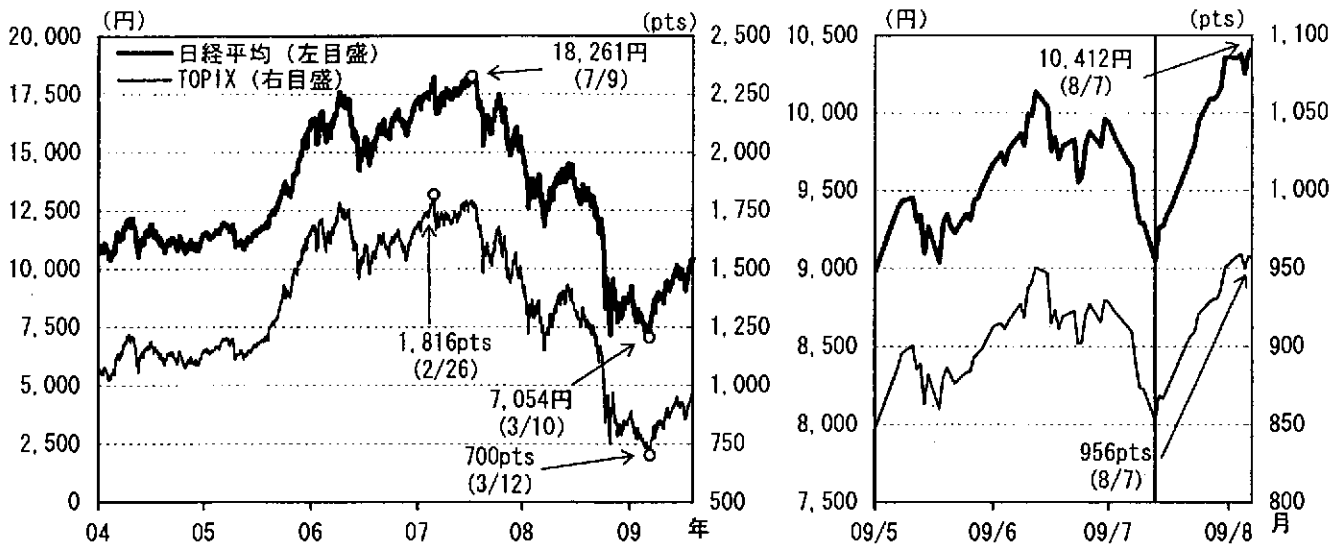


(注) 1. 以下の各インデックス。年限は5年。  
日本：iTraxx Japan、米国：CDX.NA.IG、欧州：iTraxx Europe。  
2. 対外非公表。直近は8/7日。  
(出所) Markit、JPモルガン

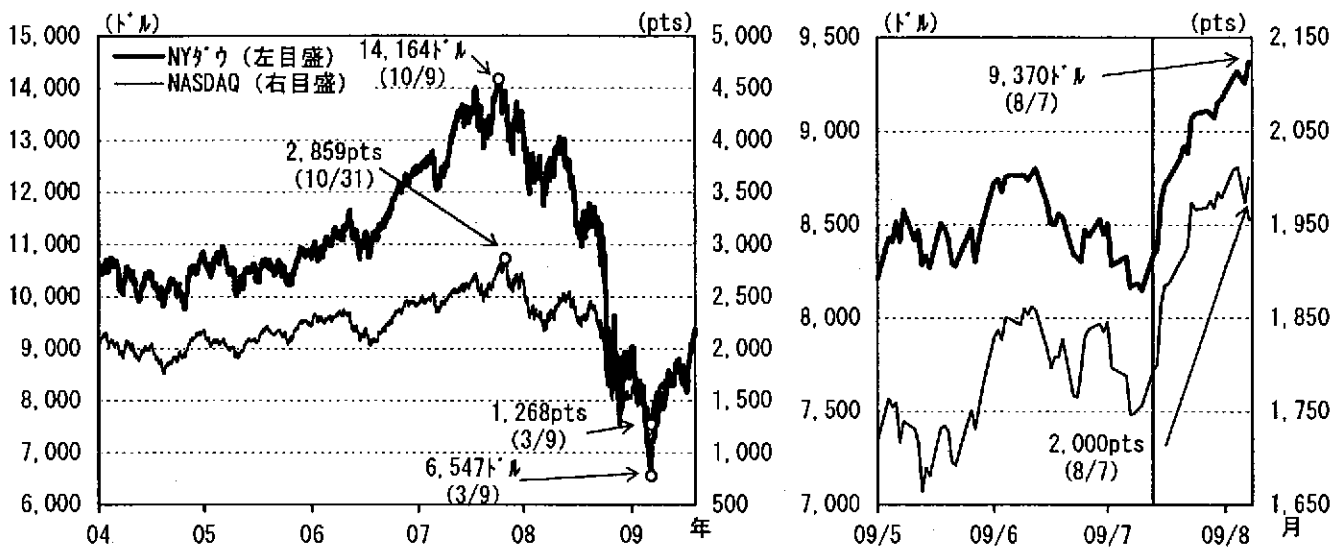


### 株式相場の推移

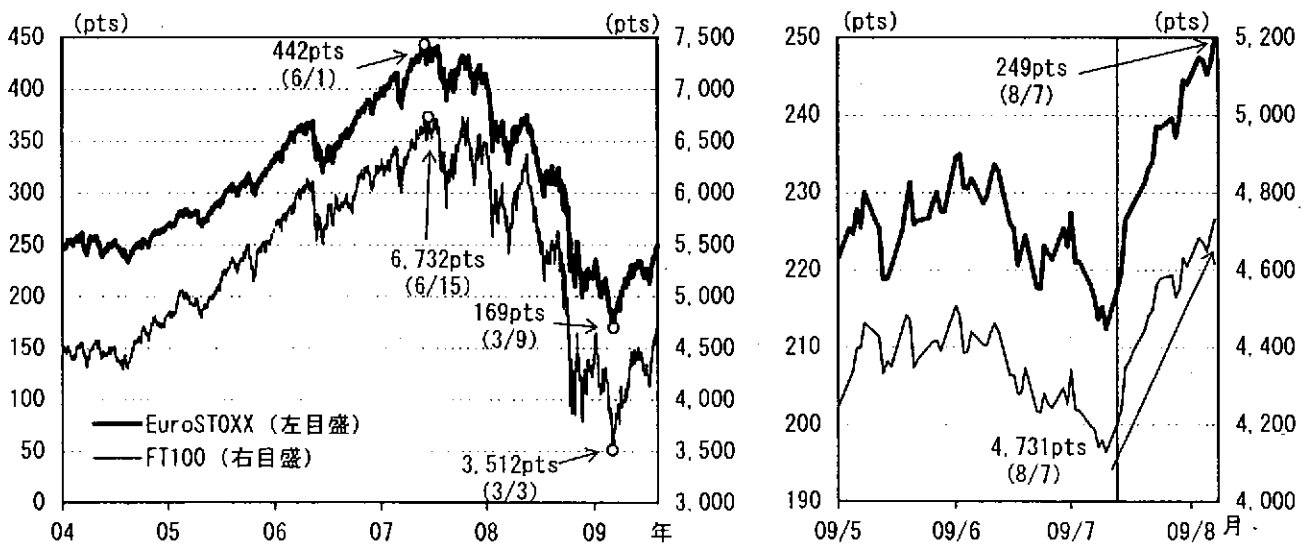
#### (1) 国内株価の推移



#### (2) 米国株価の推移



#### (3) 欧州株価の推移



(注) 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg、QUICK

(図表2-12)

## 主体別売買動向

(▲は売り越し、億円)

	個人		事業法人	投 信	金融機関			外国人
		うち 信用				うち 信託	うち 生・損保	
06年	▲43,811	18,380	20,190	17,073	▲40,369	▲33,176	▲1,499	55,288
07年	▲32,288	14,152	15,555	▲5,448	▲17,953	▲16,834	678	54,234
08年	9,820	▲897	16,321	3,013	39,434	45,026	▲3,289	▲37,085
08/10 ~ 12月	10,045	▲1,239	5,369	1,217	32,534	33,379	▲699	▲28,943
09/1 ~ 3月	3,514	117	1,163	1,616	25,800	25,473	▲65	▲25,378
4 ~ 6月	2,884	5,711	▲313	▲1,756	▲6,132	▲2,654	▲1,209	7,886
09/5月	99	1,409	▲84	▲636	▲2,438	▲1,035	▲656	3,740
6月	2,613	3,147	▲244	▲755	▲1,918	▲792	▲447	45
7月	▲6,057	▲1,083	▲661	▲92	▲1,680	▲610	▲693	10,101
09/6/29 ~ 7/3	207	347	▲65	▲59	▲320	34	▲251	1,241
7/6 ~ 7/10	1,767	789	46	▲254	▲299	▲325	41	▲285
7/13 ~ 7/17	▲408	▲516	▲135	381	▲278	▲139	▲147	1,166
7/21 ~ 7/24	▲4,139	▲1,169	▲294	▲29	295	516	▲119	3,526
7/27 ~ 7/31	▲3,482	▲534	▲211	▲131	▲1,077	▲696	▲216	4,452

(注) 三市場(東京・大阪・名古屋)合計。金融機関は、都銀・地銀等、その他金融、信託、生・損保。

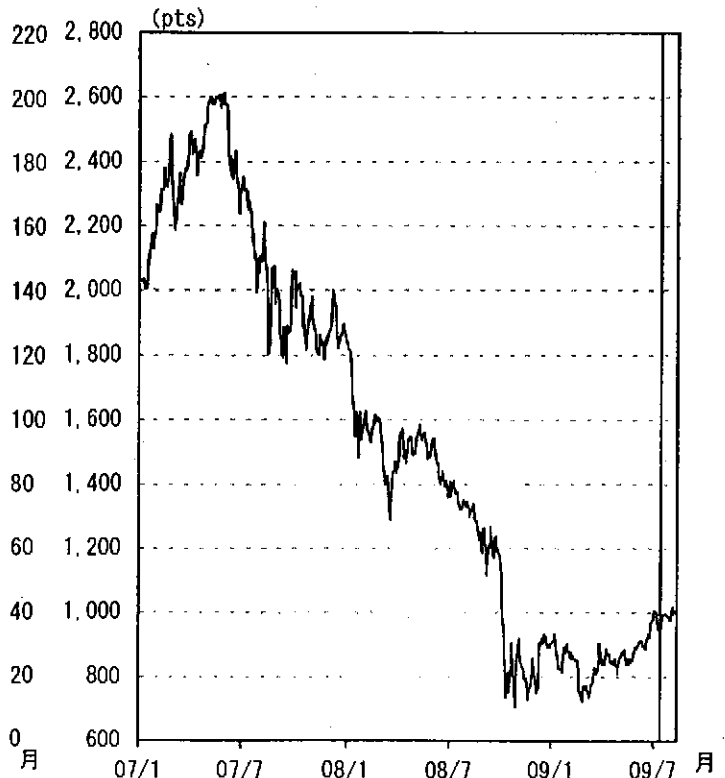
(出所) 東京証券取引所

## ボラティリティの推移

(注) 日経平均はインプライド・ボラティリティ。  
S&P500はVIX指数。直近は8/7日。

(出所) Bloomberg

## 東証REIT指数の推移

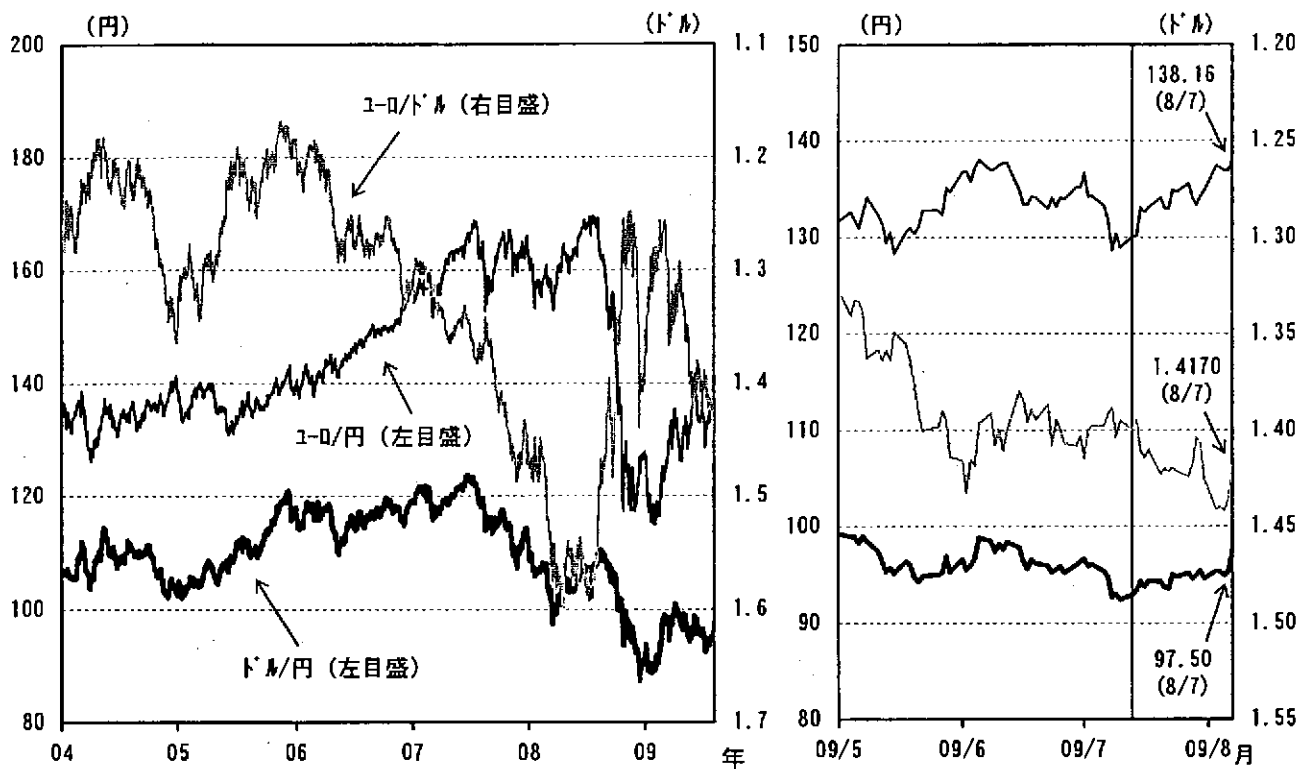


(注) 直近は8/7日。

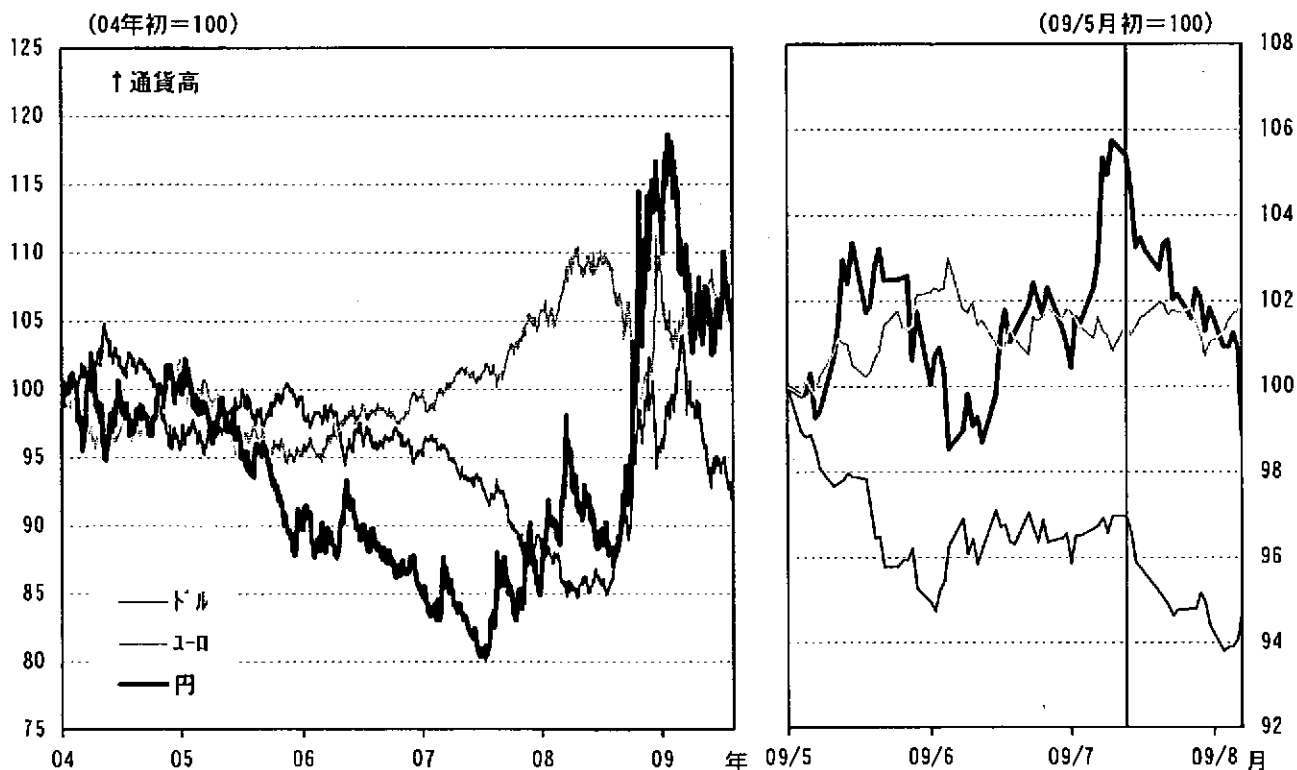
(出所) Bloomberg

### 主要為替相場の推移

#### (1) ドル/円、ユーロ/円、ユーロ/ドル相場の推移



#### (2) 名目実効為替レートの推移



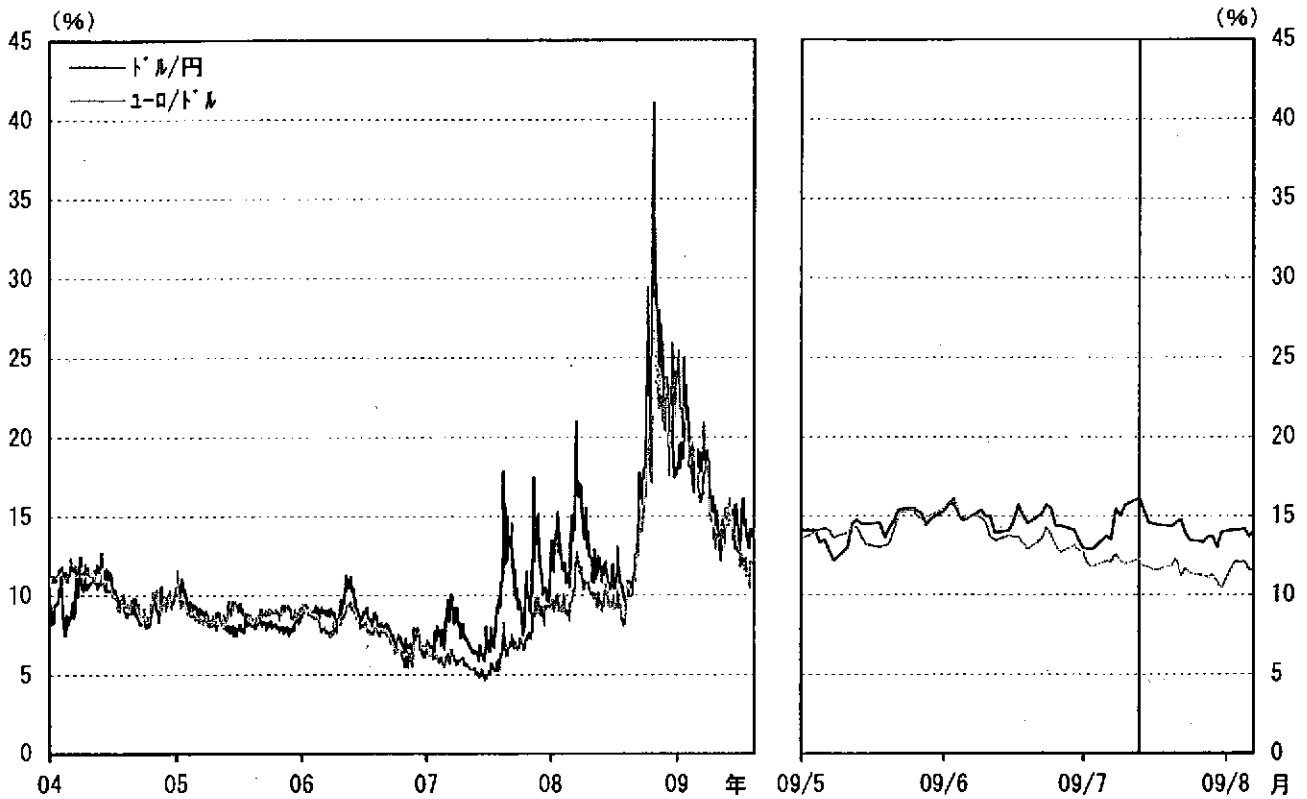
(注) 1. (1)は原則NY市場16時時点。

2. 直近は8/7日。

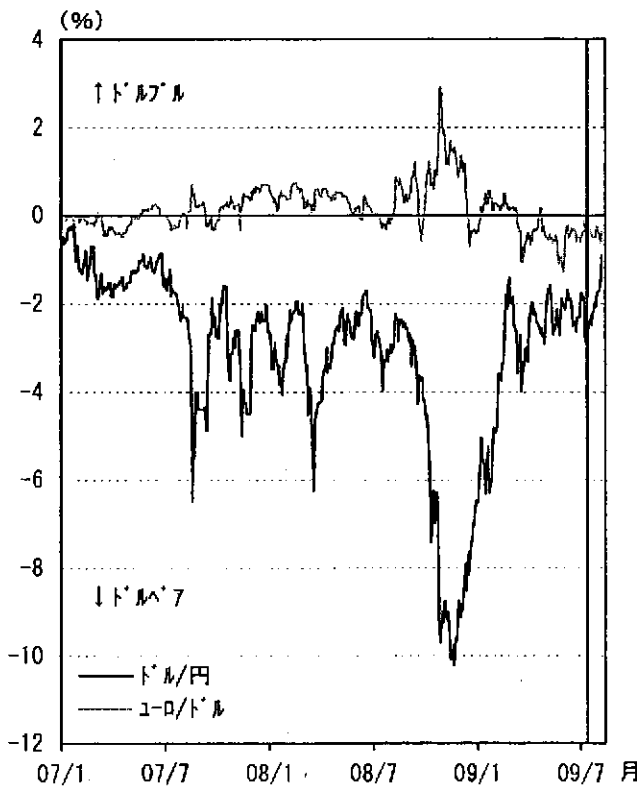
(出所) JPモルガン、トムソン・ロイター、ECB、日本銀行

### 通貨オプション、先物市場の動向

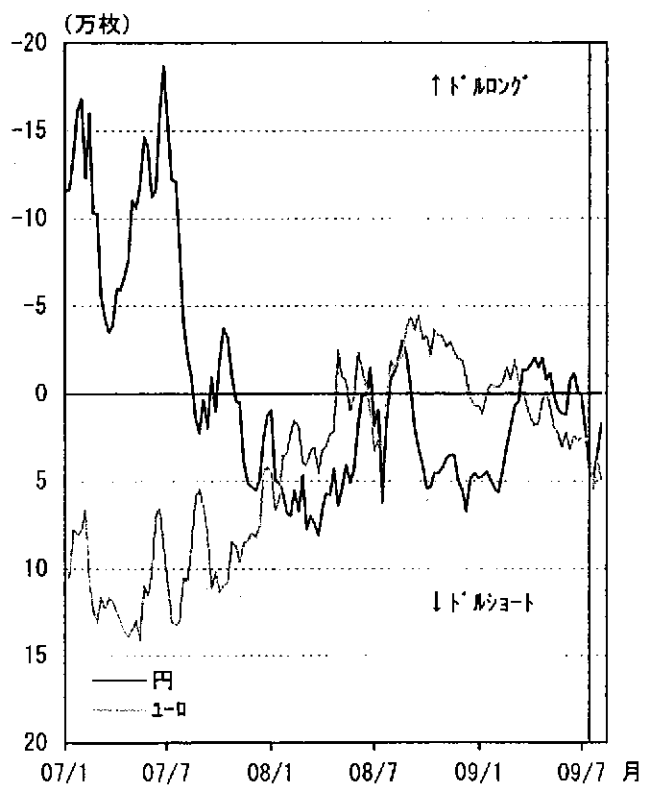
(1) インプライド・ボラティリティ (1か月) の推移



(2) リスクリバーサル (1か月) の推移



(3) IMMネットポジションの推移



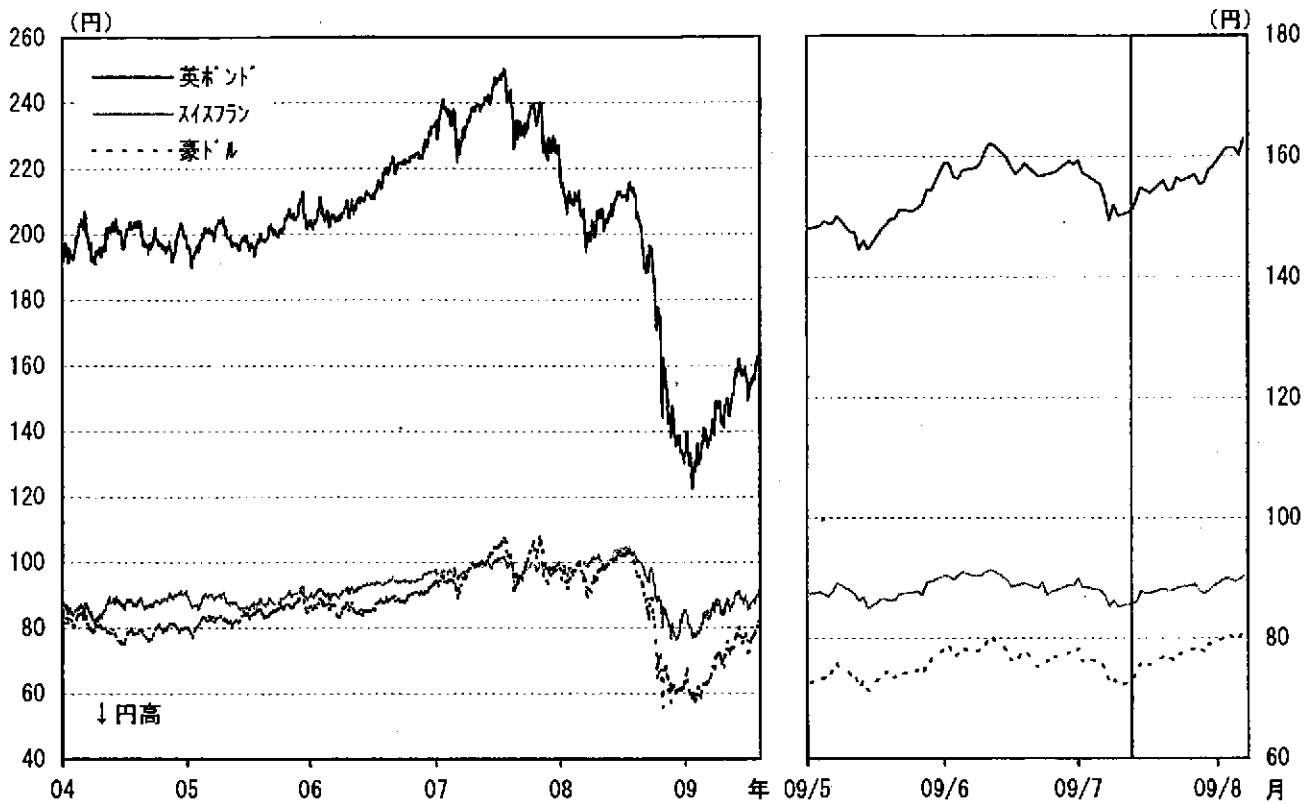
(注) 1. (3)は通貨先物取引における非商業目的および目的別計数非報告分のネット建玉の合計。

2. 直近は、(1)(2)は8/7日、(3)は8/4日。

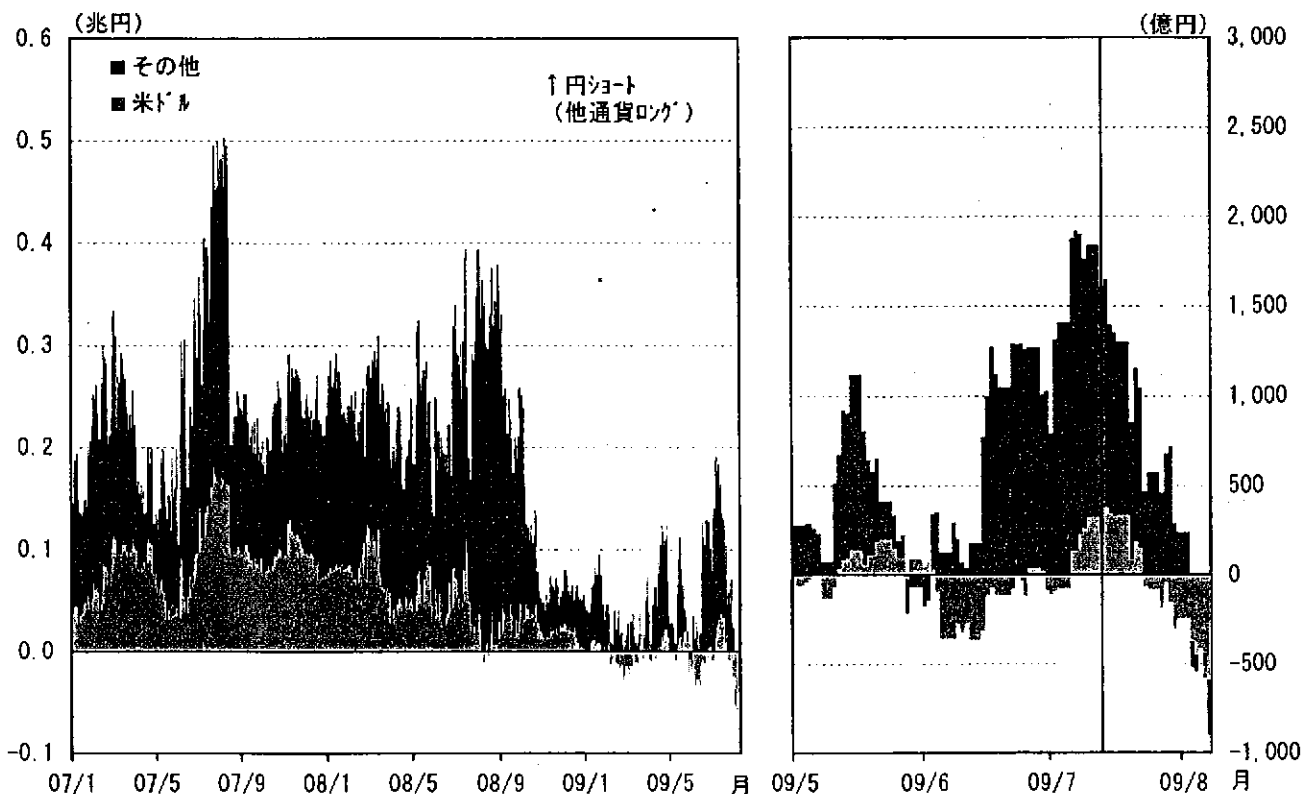
(出所) Bloomberg

### クロス円取引の動向

#### (1) クロス円相場の推移



#### (2) 外為証拠金取引の動向



(注) 1. (2)は、円に対する他通貨のネットロングポジション (マーケット・メーカーを除く)。

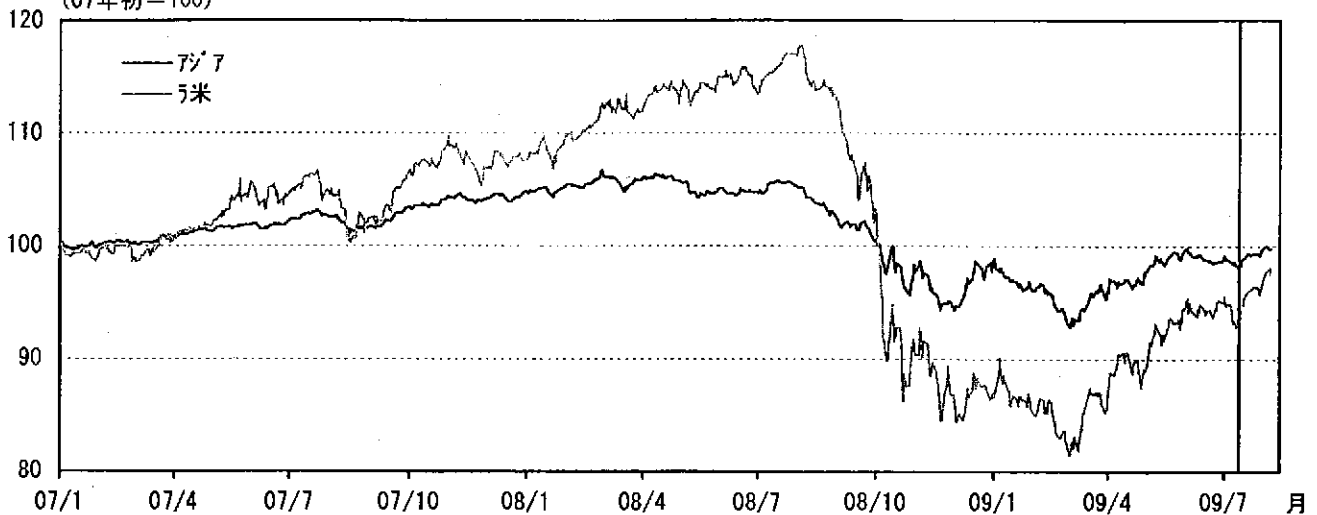
2. 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg、東京金融取引所

### エマージング、コモディティ市場の動向

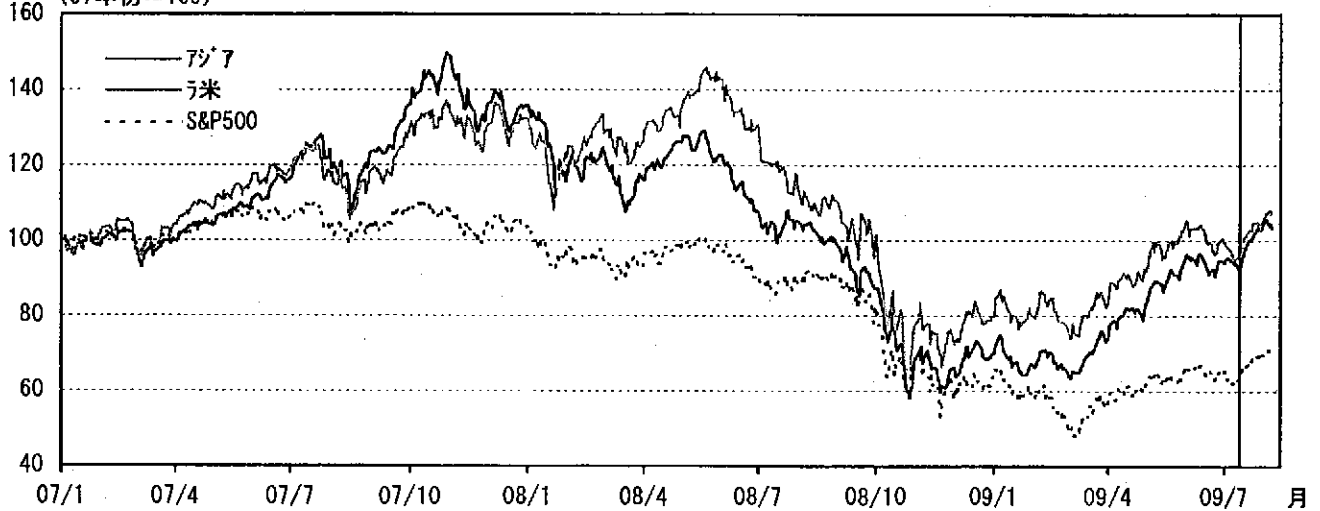
#### (1) エマージング通貨指数の推移

(07年初=100)



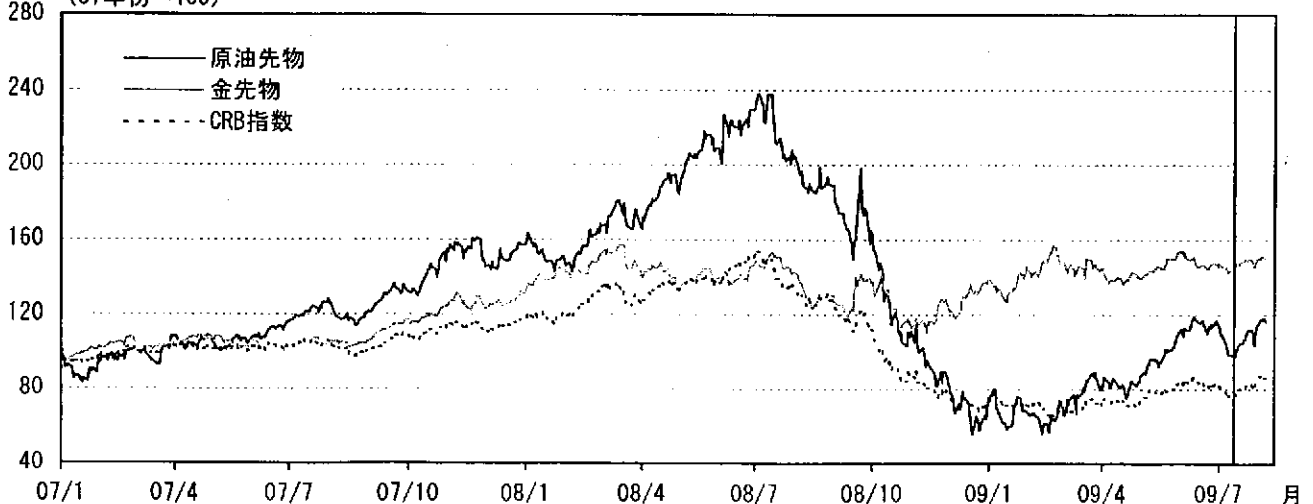
#### (2) MSCIエマージング株価指数の推移

(07年初=100)



#### (3) コモディティ価格の推移

(07年初=100)



(注) 1. (1)は対ドル指数。(2)は現地通貨建て。(3)のコモディティ先物はNYMEX期近物。

2. 直近は8/7日。

(出所) Bloomberg

## 内外金融市場の局面比較

## (1) 短期金融市場

		07/8/8 (a)	08/9/12 (b)	直近 (c)	(c)-(a)*	(c)-(b)*
LIBOR-01Sワレット (3M、%)	円	0.16	0.39	0.30	<0.15>	<-0.08>
	ドル	0.13	0.88	0.26	<0.13>	<-0.61>
	ユーロ	0.11	0.63	0.40	<0.29>	<-0.23>
TIBOR-01Sワレット (3M、%)		0.08	0.35	0.45	<0.36>	<0.10>

## (2) 国債市場

		07/8/8 (a)	08/9/12 (b)	直近 (c)	(c)-(a)*	(c)-(b)*
10年国債利回り (%)	日本	1.77	1.53	1.43	<-0.34>	<-0.10>
	米国	4.88	3.72	3.85	<-1.03>	<0.13>
	ドイツ	4.43	4.19	3.51	<-0.92>	<-0.68>
インフライト・ホライティ (%)	日本	4	6	3	<0>	<-2>
	米国	5	9	10	<5>	<2>

## (3) 長短クレジット市場

		07/8/8 (a)	08/9/12 (b)	直近 (c)	(c)-(a)*	(c)-(b)*
CP-01Sワレット (%)	日本a-1+	0.08	0.16	0.06	<-0.02>	<-0.11>
	日本a-1	0.10	0.26	0.15	<0.05>	<-0.10>
	日本a-2	0.43	0.41	0.62	<0.19>	<0.21>
社債ワレット (%)	日本AA	0.16	0.25	0.26	<0.10>	<0.01>
	日本BBB	0.55	1.08	4.24	<3.69>	<3.16>
CDSポイント (pts)	日本	28	131	166	<139>	<35>
	米国	62	152	105	<44>	<-47>
	欧州	44	103	87	<43>	<-16>

## (4) 株式市場

		07/8/8 (a)	08/9/12 (b)	直近 (c)	(c)-(a)*	(c)-(b)*
株価	日経平均 (円)	17,029	12,214	10,412	<-39>	<-15>
	NYダウ (ドル)	13,657	11,421	9,370	<-31>	<-18>
	EuroSTOXX (pts)	419	309	249	<-41>	<-19>
インフライト・ホライティ (%)	日経平均 (%)	19	22	25	<6>	<3>
	VIX (pts)	21	26	25	<3>	<-1>

## (5) 外国為替市場等

		07/8/8 (a)	08/9/12 (b)	直近 (c)	(c)-(a)*	(c)-(b)*
主要通貨	ドル/円 (円)	119.69	107.90	97.50	<-22.19>	<-10.40>
	ユーロ/ドル (ドル)	1.3795	1.4215	1.4170	<0.0375>	<-0.0045>
	ユーロ/円 (円)	165.11	153.38	138.16	<-26.95>	<-15.22>
インフライト・ホライティ (%)	ドル/円	9	13	14	<5>	<1>
	ユーロ/ドル	6	12	12	<6>	<-1>
エマージング コモディティ (pts)	アジア通貨	112	111	109	<-3>	<-2>
	ラ米通貨	115	119	108	<-7>	<-9>
	アジア株	644	493	551	<-14>	<12>
	ラ米株	69,603	61,879	63,099	<-9>	<2>
	CRB指数	313	360	265	<-15>	<-26>

(注) 1. \*印の欄は変化幅。ただし、株価、エマージング通貨・株価、コモディティ価格は変化率 (%)。

表中のシャドーは、直近の水準が比較時点の水準を回復していることを表す。

2. (3)は対外非公表。直近は、CPは8/6日、その他は8/7日。

(出所) Bloomberg、Markit、QUICK、トムソン・ロイター、日本証券業協会、日本相互証券、三菱UFJ証券、日本銀行

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>  
<配付先：金融政策決定会合関係者限り>  
<作成局における保管期間満了時期：2039年12月>

2009. 8. 5

国際局

## 海外経済・国際金融の現状評価

### 1. 概況

#### 〔海外経済の現状〕（図表1～3）

実体経済面をみると、世界経済は下げ止まっている。

米国経済は、悪化を続けているが、悪化のテンポは和らいでいる。個人消費は、財政面での景気刺激策の効果にも下支えされ、横這い圏内の動きとなっている。住宅投資の減少幅は縮小し、住宅価格の下落テンポも緩やかになっている。また、設備投資の減少も小幅になっている。こうしたもとで、生産も、在庫調整の進捗を映じて、減少幅が縮小している。労働市場では、雇用者数が大幅な減少を続け、失業率は上昇しているが、雇用者数の減少ペースには緩和の兆しが窺われる。

ユーロエリア経済も、悪化を続けているが、悪化のテンポは徐々に和らいでいる。設備投資や住宅投資は減少を続けているが、個人消費は、財政面での景気刺激策の効果もあって、減少幅が縮小している。また、輸出や生産の減少テンポも緩やかになっている。英国経済も、同様に、悪化のテンポは和らいでいる。個人消費は減少傾向にあるが、住宅市場の調整が引き続き進捗しているほか、生産活動も横這い圏内の動きとなっている。

中国経済は、内需を中心に、成長率を高めている。政府による景気刺激策の効果から、個人消費が堅調に推移しているほか、固定資産投資も高い伸びを続けている。輸出の減少基調は続いているが、減少テンポは緩やかになり、生産の増加幅も拡大している。インド経済も、成長率を高めつつある。NIEs・ASEAN経済は、持ち直してきている。輸出が増加し、設備投資の減少幅も縮小しているほか、個人消費にも改善の動きがみられている。こうしたもとで、生産は、在庫調整の進捗を映じて増加している。



物価面をみると、エネルギー価格が一頃に比べ低水準で推移する中、昨年半ばまで上昇していた食料品価格が横這い圏内の動きとなっていることもあり、多くの国・地域で、総合ベースの消費者物価の前年比は低下傾向を辿っている。コアベースの消費者物価の前年比は、米国では+1%台後半で、ユーロエリアでは+1%台半ばで推移している。

### [国際金融の現状]

欧米の金融市場の状況は、改善傾向にあるものの、ストレスの程度はなお高めである。すなわち、短期金融市場では、ターム物短期金利のスプレッドや低格付け物CPのスプレッドが概ね2007年8月前後の水準で推移するなど、落ち着きを取り戻す方向にある。一方、長期のクレジット市場では、社債の対国債スプレッド（除く金融）が、一頃に比べれば縮小しているが、低格付け物を中心に依然高めの水準で推移している。資金調達面をみると、社債の発行額は引き続き堅調に推移しているが、IPOは低調な状況が続いている。

米国の株価は、住宅関連など一部の経済指標が事前予想を上回ったことや、この間公表された企業決算の多くが事前予想ほど悪化しなかったことを受け、上昇した。長期金利は、FRBによる緩和的な金融政策スタンスの維持が再認識されるもとの低下する動きもみられたが、経済指標の予想比上振れなどから小幅上昇した。欧州でも、米国と同様に、株価が上昇した。長期金利は、米国に連れる動きが目立ったが、ドイツは前回会合対比ではほぼ横這いとなり、英国では若干上昇した。

エマージング諸国・地域の金融市場をみると、株価は、米欧の動きに連れて上昇し、国債金利の対米スプレッドは縮小した。この間、通貨も、多くの国で上昇した。

原油価格（WTI スポット、1 バレル当たり）は、前回会合対比で上昇した。他の国際商品市況についても、中国による需要も意識された金属を中心に、上昇した。

### [先行きの展望]

世界経済は、先行き、緩やかに持ち直していくとみられる。

米国では、先行きも、財政面での景気刺激策の押し上げ効果が続く見込みであるほか、政府・FRBによる金融面の対策のもとで、クレジット環境は緩やかな改善傾向を辿るとみられる。そうしたもとで、足もと横ばい圏内で推移している個人消費が改善し、景気は下げ止まりから持ち直しに転じていくと考えられる。もっとも、個人消費は、厳しい雇用・所得環境や債務返済負担のもとで、回復に向かうモメンタムは弱い状況が続くとみられる。また、設備投資は、稼働率が低下したもとで、減少傾向を辿るとみられる。住宅市場についても、一部に持ち直しの兆候があるもの

の、なお調整が続く可能性が高い。このため、下げ止まった後の米国経済の回復ペースは、緩やかなものに止まる可能性が高い。

米国経済に関する先行きの不確実性やダウンサイド・リスクは、一頃に比べれば低下したとはいえ、なお高い。家計部門のレバレッジ比率が高く、住宅価格が依然下落傾向にある中で、金融機関のバランスシートには不良債権が残存している。雇用・所得環境の悪化などを背景に、貸出債権の劣化が引き続き進んでおり、仮に景気が下振れし、金融機関の経営改善を後戻りさせるような状況になれば、金融機関の自己資本の水準に対する不安が再浮上する可能性も否定できない。この場合、金融と実体経済の負の相乗作用が再び強まることになる。

ユーロエリア経済は、当面悪化を続けるが、そのテンポは外需や財政刺激策を受けた個人消費を中心に和らいでいくと考えられる。もともと、厳しい雇用・所得環境やなおタイトな金融機関の与信姿勢は、企業や家計の支出活動を抑制する方向に作用することから、景気の下振れリスクは大きい。また、主要輸出先の一つである欧州周辺国からの資金流出が再加速し、同地域経済が一層悪化することに伴う外需の下振れリスクも依然存在する。

中国経済は、政府による景気刺激策の効果もあって、当面、内需を中心に、高い成長率を維持するとみられる。インド経済も、成長率が高まっていくとみられる。NIEs・ASEAN経済については、設備投資の減少は続くと考えられるが、輸出が緩やかに増加を続け、消費も徐々に改善するに連れて、景気も回復していくと考えられる。また、資源国（ロシア、中東など）の経済は、資源価格が年初に比べれば高い水準で推移していることもあって、悪化幅が縮小していくと考えられる。

新興国経済のリスクとしては、先進国経済の下振れや国際金融資本市場の動揺を通じた景気のダウンサイド・リスクがなお存在する。一方、アジア地域などでは、拡張的な金融財政政策による景気刺激効果が予想以上に大きくなる可能性も出てきている。

この間、物価面では、世界各国で需給ギャップのマイナス幅が大きく拡大したことで、コアベースでみたインフレ率の低下傾向が続くとみられる。一方、総合ベースでみたインフレ率は、資源価格が年初に比べれば上昇していることから、先行き、上昇に転じる可能性がある。

## 2. 米国の経済・金融動向

### 2-1. 米国の実体経済（図表4）

○ 米国経済は、悪化を続けているが、悪化のテンポは和らいでいる。

—— 4～6月の実質GDP（事前（第1回）推計値）は、前期比年率▲1.0%と、1～3月（同▲6.4%）に比べ、マイナス幅を大きく縮小した。内訳をみると、設備投資、在庫投資、住宅投資がマイナス幅を縮小したほか、政府支出が拡大に転じた。一方、個人消費は、前期に3期振りに増加した後、再び減少したほか、純輸出はプラス幅を縮小した。

○ 住宅投資の減少幅は縮小し、住宅価格の下落テンポも緩やかになっている。

—— 住宅着工件数（6月）は、2か月連続で増加し、四半期で均してみても小幅の増加に転じた（5月前月比+17.3%→6月同+3.6%、1～3月前期比▲19.8%→4～6月同+2.5%）。

—— 住宅販売件数（6月）は3か月連続で増加し、四半期で均してみても増加に転じた（新築一戸建て：5月前月比+2.4%→6月同+11.0%、1～3月前期比▲13.5%→4～6月同+5.2%、中古：5月前月比+1.3%→6月同+3.6%、1～3月前期比▲3.3%→4～6月同+3.8%）。

—— このように、住宅着工件数や住宅販売は、足もとで増加しているが、在庫は、差し押さえ物件の流入から、引き続き高水準となっている<sup>1</sup>。

—— ケース・シラー住宅価格指数（10大都市、5月）は、引き続き下落幅が縮小している（前月比：3月▲1.9%→4月▲1.0%→5月▲0.2%、前年比：同▲18.7%→▲18.0%→▲16.8%）。FHFA住宅価格指数（リファイナンスを除くベース、5月）は、前月比でみて上昇に転じた（前月比：3月▲1.3%→4月▲0.3%→5月+0.9%、前年比：同▲7.5%→▲7.0%→▲5.6%）。

○ 個人消費は、財政面での景気刺激策の効果にも下支えされ、横這い圏内の動きとなっている。

—— 実質個人消費（6月）は、実質可処分所得が大きく減少したこともあり、減少した（消費：5月前月比+0.0%→6月同▲0.1%、所得：同+1.5%→▲1.8%）。実質可処分所得は、前月、オバマ政権の景気刺激策の一環である

<sup>1</sup> 在庫率は、依然高水準にあるが、新築でこのところ低下する一方、差し押さえ物件が流入する中古は横這い圏内の動きを続けており、両者の差が明確になっている（新築：5月10.2か月分→6月8.8か月分、中古：同9.8か月分→9.4か月分）。

社会保障受給者向け一時給付金の支払いにより増加していたため、その反動を主因に減少した。この結果、貯蓄率（同）も、単月では低下したが（5月6.2%→6月4.6%）、均してみれば、上昇傾向が続いているとみられる。

—— 新車販売台数（7月）は、自動車買い替え促進策の実施を受けて大幅に増加し、2008年9月（1,280万台）以来の水準を回復した（6月年率987万台→7月同1,142万台）<sup>2</sup>。

—— 消費者コンフィデンス（コンファレンス・ボード指数、7月）は、2か月連続で低下し、既往ボトム（2月25.3）記録後の改善傾向に一服感が窺われる（6月49.3→7月46.6）。

—— 小売売上高（6月、名目、除く自動車・ガソリン・建築資材）は、若干ながら減少を続けたが、均してみれば横這い圏内の動きとなっている（5月前月比▲0.1%→6月同▲0.1%、1～3月前期比+0.5%→4～6月同▲0.7%）。

○ 設備投資の減少は、小幅になっている。

—— 非国防資本財受注（除く航空機、6月）は2か月連続で増加し、均してみても、3期連続で減少した後、横這いとなった（5月前月比+4.3%→6月同+1.4%、1～3月前期比▲13.6%→4～6月同+0.1%）。

○ 対外収支を財・サービス貿易収支で見ると、赤字幅は縮小傾向を辿っている。

—— 財・サービス貿易収支（5月）をみると、輸出、輸入ともに減少傾向にあるが、後者の減少幅が大きいことから、赤字幅は縮小傾向を辿っている（4月▲287.9億ドル→5月▲259.6億ドル、1～3月▲304.0億ドル→4～5月▲273.8億ドル）<sup>3</sup>。

○ 製造業の生産は減少を続けているが、在庫調整の進捗を映じて、減少幅は縮小している。非製造業の生産活動も減退しているが、サーベイ・データは減退幅の縮小を示唆している。

—— 鉱工業生産（6月）は、減少幅が縮小し、均してみても、幅広い品目で減少幅が縮小している（5月前月比▲1.2%→6月同▲0.4%、1～3月前期比▲5.2%

<sup>2</sup> 7月1日以降11月1日まで、中古車を下取りに出し、一定の性能基準を満たす新車を購入した場合、3,500ドルあるいは4,500ドルの補助金が支給される。既に財源の10億ドルはほぼ使い切ったと伝えられており、現在、議会では20億ドルの追加が審議されている（下院は7月31日に可決済）。

<sup>3</sup> 価格変動の影響を除いた実質ベース（財）でも、輸入が輸出を上回って減少している（輸出：1～3月前期比▲11.6%→4～5月の1～3月対比▲2.8%、輸入：同▲11.8%→▲5.8%）。

→4～6月同▲3.0%)。

— ISM指数・製造業 (7月)は、7か月連続で上昇し、改善・悪化の分岐点である50に近付いている(6月44.8→7月48.9)。内訳をみると「生産」と「新規受注」が上昇傾向を辿る中、「雇用」も2か月連続で上昇した(生産:同52.5→57.9、新規受注:同49.2→55.3、雇用:同40.7→45.6)。

○ 労働市場では、雇用者数が大幅な減少を続け、失業率は上昇しているが、雇用者数の減少ペースには緩和の兆しが窺われる。

— 新規失業保険申請件数 (7月25日週まで)をみても、依然高水準ながら、均してみれば緩やかに減少している。

○ 物価面では、昨年まで上昇していた食料品価格が横這い圏内の動きとなる中、エネルギー価格が一頃に比べ低水準で推移していることから、総合ベースの消費者物価の前年比はマイナスとなっている。一方、コアベースの前年比は+1%台後半で推移している。期待インフレ率は横這い圏内で推移している。

— 消費者物価 (6月)は、ガソリン価格が大幅に上昇したため、上昇した(5月前月比+0.1%→6月同+0.7%)<sup>4</sup>。前年比でみると、引き続きマイナス幅を拡大した(5月▲1.3%→6月▲1.4%)。コアベースの前月比は、振れの大きいアパレルのプラス転化などを映じて、若干拡大した(5月+0.1%→6月+0.2%)。前年比は2か月連続で低下した(4月+1.9%→5月+1.8%→6月+1.7%)<sup>5</sup>。

## 2-2. 米国の金融市場 (図表5)

○ 金融政策面をみると、FRBのバーナンキ議長は、7月21日の議会証言において「FOMCは、非常に緩和的な金融政策スタンスを長期間に亘って続けることが適当と信じている」と述べた。市場の政策金利観をみても、FF金利先物市場では、年内の据え置きが予想されている。

○ 株価は、住宅関連指標(販売、着工など)やISM製造業指数が予想を上回ったことや、この間公表された企業決算の多くが事前予想ほど悪化しなかったことを

<sup>4</sup> ガソリン小売価格(レギュラー、1ガロン当たり、米国エネルギー省調査)は年初に比べれば高い水準で推移している(8月3日週2.6ドル)。

<sup>5</sup> 期待インフレ率について、ミシガン大学による家計向けサーベイ(7月)をみると、均してみれば横這い圏内の動きとなっている(1年先:6月+3.1%→7月+2.9%、5～10年先:同+3.0%→+3.0%)。

受け、上昇した。長期金利は、FRB の緩和的な金融政策スタンスの維持が再認識されるもとで低下する動きもみられたが、経済指標の予想比上振れなどから小幅上昇した。

- TED スプレッド (ユーロドル 3 か月物-TB3 か月物) は、パリバ・ショック (2007 年 8 月) 以前の水準で推移している。また、ターム物金利の対 OIS スプレッド は、2007 年 8 月頃の水準で推移している。一方、社債の対国債スプレッド (除く金融) は、一頃に比べれば縮小しているが、低格付け物を中心に、依然高水準で推移している。
- 資金調達動向をみると、銀行貸出残高 (7 月 22 日週まで) の前年比は、商工業向けが減少幅を拡大したほか、個人向け、不動産向けはいずれも引き続き伸びが低下した。社債発行 (7 月、政府保証債を除くベース) は、堅調に推移している。IPO (7 月) は、4 件に止まった。

### 3. 欧州の経済・金融動向

#### 3-1. 欧州の実体経済 (図表 6)

##### (1) ユーロエリア経済

- ユーロエリア経済は、悪化を続けているが、悪化のテンポは徐々に和らいでいる。
- 輸出の減少テンポは、緩やかになっている。
  - ユーロエリアの域外輸出 (5 月) は、2 か月連続で減少したが、均してみれば減少幅は縮小している (4 月前月比▲0.7%→5 月同▲2.7%、1~3 月前期比▲15.2%→4~5 月の 1~3 月対比▲1.4%)。4~5 月の内訳をみると、アジア向けが増加に転じているほか、他の地域向けも減少幅が縮小している。
- 個人消費は、厳しい雇用・所得環境などを受けて減少しているが、各国の自動車買い替え促進策もあって、減少幅が縮小している。設備投資は減少を続けている。住宅投資は、スペインなどでの調整から、全体でも減少を続けている。
  - ユーロエリアの消費者コンフィデンス (7 月) は、4 か月連続で改善した (6 月▲25→7 月▲23)<sup>6</sup>。
  - ユーロエリアの新車登録台数 (6 月) は、5 か月連続で増加した。ドイツ、

<sup>6</sup> 1985 年 1 月の統計開始以来の最低水準は、3 月の▲34。

フランス、イタリア、スペイン、オーストリアなどで実施されている買い替え促進策が押し上げ要因となっている（5月前月比+5.3%→6月同+2.4%、1～3月前期比+0.7%→4～6月同+12.3%）。

—— ユーロエリアの失業率（6月）は11か月連続で上昇し、1999年6月（9.4%）以来の水準となった（5月9.3%→6月9.4%）。ドイツの失業率（7月）は、5月以降、職業訓練が失業に区分されなくなったこともあり、このところ横這い圏内の動きとなっている（6月8.3%→7月8.3%）。

○ 製造業の生産は、在庫調整の進捗から、減少テンポが緩やかになっている。非製造業の生産活動も減退しているが、サーベイ・データは減退幅の縮小を示唆している。

—— ユーロエリアのPMI（7月）は、製造業が大幅に上昇し、サービス業も小幅上昇した（製造業：6月42.6→7月46.3、サービス業：同44.7→45.6）<sup>7</sup>。製造業の内訳をみると、「受注」が上昇を続けるもとの、「生産」も上昇を続けている。

—— ユーロエリアの鉱工業生産（除く建設、5月）は、小幅ながらも、2008年8月以来の増加となった（4月前月比▲1.4%→5月同+0.5%）。均してみると、幅広い財で減少幅が縮小している（1～3月前期比▲7.4%→4～5月の1～3月対比▲2.6%）。

○ 消費者物価の前年比は、低下している。

—— 消費者物価（7月速報、内訳未公表）の前年比は、マイナス幅を拡大した（6月▲0.1%→7月▲0.6%）。前年同月における価格上昇の影響一巡と本年の価格下落の双方が寄与している。コアベース（6月確報）の前年比は、2か月連続でプラス幅を縮小した（5月+1.5%→6月+1.3%）。

## （2）英国経済

○ 英国経済は、悪化を続けているが、悪化のテンポは和らいでいる。個人消費は減少傾向にあるが、住宅市場の調整が引き続き進捗しているほか、生産活動も横這い圏内の動きとなっている。

—— 4～6月の実質GDP（速報値）は、前期比年率▲3.2%となり、1～3月の同▲9.3%に比べ減少幅を縮小した。現時点で公表されている生産別内訳をみると、農林水産業を除く各部門（鉱工業、建設業、サービス業）で減少幅が縮

<sup>7</sup> ここでのサービス業の調査対象には金融仲介業（金融機関）も含まれる。

小している。

- 住宅価格（ネーションワイド指数、7月）は、3か月連続で上昇した（5月前月比+1.3%→6月同+0.9%→7月同+1.3%）<sup>8</sup>。住宅ローン承認件数（6月）は、低水準ではあるが、増加を続けている。
- 小売売上数量（6月）は、好天を受けた夏物衣料を中心に増加し、均してみても増加している（5月前月比▲0.9%→6月同+1.2%、1~3月前期比+0.3%→4~6月同+0.7%）。但し、小売売上数量は、このところ、GDPベースの個人消費との乖離が大きくなっており、割り引いてみる必要がある（GDP個人消費：10~12月前期比▲1.1%→1~3月同▲1.3%）。消費者コンフィデンス（7月）は、改善の動きが一服している（5月▲28→6月▲25→7月▲25）。
- 失業率（失業保険ベース、6月）は、13か月連続で上昇し、1997年11月（4.8%）以来の水準となった（5月4.7%→6月4.8%）。
- 消費者物価（6月）の前年比は、前年における食料品・エネルギー価格上昇の影響が剥落してきていることなどから、4か月連続でプラス幅が縮小した（5月+2.2%→6月+1.8%）。

### 3-2. 欧州の金融市場（図表7）

- 株価は、米国に連れる動きとなる中、欧州でも一部の経済指標（ユーロ圏 PMI など）や企業決算が予想を上回ったことから、上昇した。長期金利（国債10年物利回り）も、米国に連れる動きが目立ったが、ドイツは、前回会合対比ではほぼ横這いとなった。英国では、MPC議事要旨7月分で、資産買い入れファシリティの資金枠据え置きが全会一致で決定されていたことが判明し、若干上昇した。
- 短期金融市場におけるターム物金利の対OISスプレッドは、2007年8月頃の水準で推移している。一方、社債の対国債スプレッド（除く金融）は、縮小しているが、依然高水準で推移している。
- 資金調達動向をみると、銀行貸出（6月）は、前年比プラス幅が引き続き縮小している。企業向けの伸びが引き続き低下し、消費者信用もマイナス幅を拡大したほか、住宅取得向けも均してみれば低下傾向にある。

### 4. エマージング諸国・地域の経済・金融動向

<sup>8</sup> ハリファクス指数（7月）も上昇した（5月前月比+2.6%→6月同▲0.4%→7月同+1.1%）。



#### 4-1. アジア諸国・地域の実体経済（図表8）

##### （1）中国経済

○ 中国経済は、内需を中心に、成長率を高めている。政府による景気刺激策の効果から、個人消費が堅調に推移しているほか、固定資産投資も高い伸びを続けている。輸出の減少基調は続いているが、減少テンポは緩やかになり、生産の増加幅も拡大している。

—— 実質 GDP（4～6月）の前年比は、プラス幅を拡大した（1～3月+6.1%→4～6月+7.9%）。前期比（国際局試算）ベースでは、大幅にプラス幅を拡大した（1～3月前期比年率+9.5%→4～6月同+18.6%）。

—— 工業生産（6月）の前年比は、2か月連続でプラス幅を拡大した（4月+7.3%→5月+8.9%→6月+10.7%）。四半期で均してみても、前年比がこれまでの縮小傾向から拡大に転じたほか、前期比（国際局試算）では2期連続の増加となった（前年比：1～3月+5.1%→4～6月+9.0%、前期比：同+1.9%→+6.3%）。内訳をみると、鉄鋼・非鉄金属、化学、通信・電気機械、輸送用機器などの伸びが高まっている。

—— 製造業 PMI（7月）は、ほぼ前月並みとなり、5か月連続で改善・悪化の分岐点である50を上回った（6月53.2→7月53.3）。

—— 小売売上（6月）について、前年比をみると、本年入り後、ほぼ等速で推移している（5月+15.2%→6月+15.0%）。価格変動を調整すると、引き続き伸びが拡大しており、政府による購入促進策が寄与しているとみられる<sup>9</sup>。

—— 固定資産投資（6月）は、高い伸びが続いている（5月+38.7%→6月+35.2%、1～3月+28.6%→4～6月+35.9%）。四半期の内訳をみると、不動産、鉄道、道路などの伸びが拡大している。

—— 輸出（6月）は、前年比のマイナス幅を縮小した（5月▲26.5%→6月▲21.3%）。前期比（国際局試算）でも、減少幅が縮小している（前期比：1～3月▲17.6%→4～6月▲2.6%）。輸入（6月）も、前年比のマイナス幅を縮小した（5月▲25.2%→6月▲13.2%、1～3月▲31.0%→4～6月▲20.5%）。前年比の内訳をみると、鉱物や金属関連が増加に転じたほか、一般機械・電気機械などで減少幅が縮小している。なお、前期比ベースでは、輸入は大幅な増加に転じている（1～3月▲18.9%→4～6月+18.1%）。

<sup>9</sup> 自動車販売（6月）の伸びも、政府による購入促進策を受け、引き続き拡大した（5月前年比+34.0%→6月同+36.5%）。

- 消費者物価（6月）は、前年の食料品・エネルギー価格上昇の影響剥落に伴い、前年対比マイナスで推移している（総合：5月▲1.4%→6月▲1.7%、食料品：同▲0.6%→▲1.1%、除く食料品：同▲1.7%→▲1.9%）。
- 貸出とM2（6月）は、前年比のプラス幅が更に拡大し、高い伸びを続ける姿となった（貸出：5月+30.6%→6月+34.4%、M2：同+25.7%→+28.5%）。

## （2）インド経済

○ インド経済も、成長率を高めつつある。

- 鉱工業生産（5月）は、前年比プラス幅を拡大した（4月+1.2%→5月+2.7%）。四半期ベースで均してみても、前年比プラス幅が拡大している（1～3月前年比+0.1%→4～5月同+1.9%）。
- 製造業PMI（7月）は、改善・悪化の分岐点である50を4か月連続で超えて推移している（6月55.3→7月55.3）。内訳項目である「雇用」は50近傍で推移している（同50.6→49.8）。
- 卸売物価（6月）は、前年対比でマイナスに転化した（5月+1.2%→6月▲1.4%）。昨年の燃料価格上昇の前年比に対する影響が剥落してきていることが影響している。
- 貸出（5月）は、高い伸びを続けている（4月前年比+18.0%→5月同+15.8%）。

## （3）NIEs・ASEAN 経済

○ NIEs・ASEAN 経済は、持ち直してきている。

- 韓国の実質GDP（4～6月）は、前期比年率+9.7%と、1～3月（同+0.5%）に比べ伸び率が大幅に高まった。輸出が中国向けを中心に大幅な増加に転じたほか、民間消費が、自動車販売刺激策を受けて増加幅を拡大させた<sup>10</sup>。総固定資本形成も、設備投資の増加などから増加した。
- シンガポールの実質GDP（4～6月）も、前期比年率+20.4%と大幅に増加した。生産面の内訳をみると、製造業が、IT関連需要の回復や医薬品の増加などから大幅な増加となっている。

<sup>10</sup> 1999年末以前の登録車を買換える際、消費税、取得税、登録税を、計250万ウォン（約19万円）を上限として70%免除する措置。

○ 輸出が増加し、設備投資の減少幅も縮小しているほか、個人消費にも改善の動きがみられている。

— NIEs・ASEANの輸出合成指数<sup>11</sup> (4~6月)は増加している(1~3月前期比▲13.2%→4~6月同+7.7%)。各国統計をみると、韓国(7月)とタイ(6月)が、それぞれ2か月連続で増加した。韓国の輸出増加については、中国向け需要の増加など所得効果に加え、ウォン安による価格効果も寄与していると考えられる(4~6月前期比+13.4%→7月の4~6月対比+9.1%)。また、インドネシア(6月)の輸出も、均してみると、増加している(1~3月前期比▲17.3%→4~6月同+9.9%)。シンガポールの新規輸出受注D.I.(7月)は、ほぼ横這いとなったが、改善・悪化の分岐点である50を上回って推移している(全体:6月50.9→7月50.5、IT関連:同53.8→53.5)。

— 韓国では、小売数量指数(6月)が、5月初に始まった自動車販売刺激策から、前月に大幅に増加した後、更に増加した(5月前月比+4.9%→6月同+1.8%)。消費者信頼感指数(7月)も、4か月連続で上昇した(6月106.0→7月109.0)。また、機械投資推計指数(6月)は、4月に8か月振りに増加に転じた後、増加を続けている(5月前月比+7.3%→6月同+9.5%)。

— 台湾では、小売指数(6月)が、前月に前年比プラスに転じた後、更にプラス幅を拡大した(5月前年比+0.4%→6月同+3.3%)。消費者コンフィデンス(7月)も、株式投資に対する見方の改善などから、上昇した(6月51.4→7月56.2)。

— タイでは、民間消費指数(6月)が増加に転じ、民間投資指数(同)は減少幅を縮小させた(民間消費指数:1~3月前期比▲4.7%→4~6月同+1.1%、民間投資指数:同▲12.0%→▲4.2%)。

○ 生産は、在庫調整の進捗や内外需の動きを映じて増加している。

— NIEs・ASEANの生産合成指数<sup>12</sup> (4~5月)は、増加に転じている(1~3月前期比▲5.9%→4~5月の1~3月対比+9.6%)。韓国、台湾の生産(6月)は、増加している(韓国:1~3月前期比▲2.7%→4~6月同+11.4%、台湾:同▲8.0%→+17.3%)。内訳をみると、金属製品や電気機械が、中国関連需要などを背景に増加している。タイの生産(6月)も、5か月連続で増加し、

<sup>11</sup> 輸出合成指数は、NIEs・ASEAN8か国・地域(韓国、台湾、シンガポール、香港、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン)の輸出金額を合算したもの(国際局試算、対外非公表)。

<sup>12</sup> 生産合成指数は、NIEs・ASEAN6か国・地域(香港、インドネシアについては利用可能な統計がない)の生産指数を各国GDPウェイトで加重平均したもの(国際局試算、対外非公表)。

四半期で均してみると大幅な増加に転じた（1～3 月前期比▲9.0%→4～6 月同+10.1%）。韓国の企業景気実査指数（7 月）は、国内景気に対する見方の改善などから、8 か月連続で上昇した（6 月 97.9→7 月 101.9）。改善・悪化の分岐点である 100 を上回ったのは 17 か月振り。

- エネルギー価格が一頃に比べ低水準で推移する中、昨年まで上昇していた食料品価格が横這い圏内の動きとなっていることもあり、多くの国・地域で消費者物価の前年比は低下傾向を辿っている。

—— 韓国、タイ、インドネシアの消費者物価（7 月）の前年比は、総合ベース、コアベースともに低下した（韓国：総合 6 月+2.0%→7 月+1.6%、コア同+3.5%→+3.2%、タイ：総合同▲4.0%→▲4.4%、コア同▲1.0%→▲1.2%、インドネシア：総合同+3.7%→+2.7%、コア同+5.6%→+4.9%）。昨年の燃料・食料品価格の上昇の反動などが影響している。

#### 4-2. エマージング諸国・地域の金融市場（図表 9）

- 株価は、米欧の株価に連れて上昇した。国債金利の対米スプレッドは縮小した。この間、通貨も、多くの地域で上昇した。

- この間におけるエマージング金融市場の動向のうち、個別国で目立ったものは以下の通り。

—— 中国では、大手国有商業銀行（工商銀行、建設銀行）が 2009 年の人民元新規貸出目標額に上限を設定したとの報道を受け、株価が一時下落する場面もみられた。もっとも、その後、人民銀行副行長が「適度に緩和した金融政策の継続」を改めて強調したこともあり、株価は上昇傾向を続けている。

—— 韓国、台湾では、大手 IT 企業の 4～6 月期決算が予想対比上振れしたこともあり、株価が上昇した。

—— ロシア、ブラジル、南アフリカでは、資源価格の上昇を受けて、株価、通貨ともに上昇した。南アフリカについては、ソブリン格付けの引き上げ（ムーディーズによる外貨建て長期債務格付け：Baa1→A3）も通貨高の要因となった。

—— ポーランド、ハンガリーでは、通貨が上昇した。ラトビアと IMF との間で財政赤字の削減幅に関し合意が成立し、追加融資が実施される見通しとなったことから、ラトビアの通貨（ラツ）の切り下げ観測が後退した。

- また、金融政策面をみると、追加利下げの動きが引き続きみられた。但し、一

頃に比べれば利下げを行う先は減少しているほか、地域的にはアジア以外が中心となっている。

- チリ中銀は、7月9日、25bpsの利下げを行った（0.75%→0.5%、事前予想通り）。利下げは7か月連続。
- ペルー中銀は、7月9日、100bpsの利下げを行った（3%→2%、事前予想は50bpsの利下げが大勢）。利下げは6か月連続。
- フィリピン中銀は、7月9日、25bpsの利下げを行った（4.25%→4%、事前予想通り）。利下げは12月以来、6会合連続。
- ロシア中銀は、7月10日、50bpsの利下げを行った（11.5%→11%）。利下げは4か月連続。
- トルコ中銀は、7月16日、50bpsの利下げを行った（8.75%→8.25%、事前予想通り）。利下げは9か月連続。
- メキシコ中銀は、7月17日、25bpsの利下げを行った（4.75%→4.5%、事前予想通り）。利下げは7か月連続。メキシコ中銀は、この利下げにより「現在の金融緩和サイクルの休止を決定した」との声明を発表している。
- ブラジル中銀は、7月22日、50bpsの利下げを行った（9.25%→8.75%、事前予想通り）。利下げは1月以来、5会合連続。
- ハンガリー中銀は、7月27日、100bpsの利下げを行った（9.5%→8.5%、事前予想は50bpsの利下げが大勢）。利下げは6か月振り。
- インドネシア中銀は、8月5日、25bpsの利下げを行った（6.75%→6.5%、事前予想通り）。利下げは9か月連続。

以 上

2009.8.5

国際局

## 「海外経済・国際金融の現状評価」図表一覧

(図表1)	米国の主要経済指標	1
(図表2)	欧州の主要経済指標	2～3
(図表3)	アジア諸国・地域の主要経済指標	4～6
(図表4)	米国の実体経済	7～13
(図表5)	米国の金融市場	14～20
(図表6)	欧州の実体経済	21～26
(図表7)	欧州の金融市場	27～30
(図表8)	アジア諸国・地域の実体経済	31～38
(図表9)	エマージング諸国・地域の金融市場	39～45
(図表10)	国際機関及び民間の海外経済・物価見通し	46



## 米国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合（7月14日）以降に判明したもの。

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ＜前期比年率、％＞	2.1	0.4	▲ 6.4	<7/31公表> ▲ 1.0				
2. 実質可処分所得 ＜前期比、％＞	2.2	0.5	0.3	0.8		1.5	<8/4公表> ▲ 1.8	
3. 実質個人消費 ＜前期比、％＞	2.6	▲0.2	0.2	▲ 0.3		0.0	<8/4公表> ▲ 0.1	
4. 家計貯蓄率 ＜対可処分所得比、％＞	1.7	2.7	4.0	5.2		6.2	<8/4公表> 4.6	
5. 小売売上高 (除く自動車、ガソリン、建築資材) ＜前期比、％＞	4.5	2.3	0.5	▲ 0.7		▲0.1	<7/14公表> ▲0.1	
6. 自動車販売 (年率、万台) ＜前期比、％＞	1,646 ▲ 3.5	1,349 ▲ 18.0	968 ▲ 9.9	975 0.8	1,142 17.0	1,002 6.9	987 ▲ 1.6	<8/4公表> 1,142 15.7
7. 消費者コンフィデンス指数	103.3	57.9	29.9	48.3	46.6	54.8	49.3	<7/28公表> 46.6
8. 住宅着工 (年率、千戸) ＜前期比、％＞	1,355 ▲ 24.8	906 ▲ 33.2	528 ▲ 19.8	541 2.5		562 17.3	<7/17公表> 582 3.6	
9. ケース・シー住宅価格指数 (10大都市) ＜前期比、％＞ (前年比、％)				▲ 5.7 ▲ 19.0	▲ 3.0 ▲ 17.4	<7/28公表> ▲ 0.2 ▲ 16.8		
10. 非国防資本財受注 (除く航空機) ＜前期比、％＞ (前年比、％)			▲ 13.6 ▲ 23.3	0.1 ▲ 24.1		4.3 ▲ 24.2	<7/29公表> 1.4 ▲ 21.1	
11. 財・サービス貿易収支 (億ドル)	▲ 584.5	▲ 579.9	▲ 304.0	▲ 273.8		▲ 259.6		
12. ISM 製造業指数 非製造業指数	51.1 53.5	45.5 47.4	35.9 41.8	42.6 44.9	48.9	42.8 44.0	44.8 47.0	<8/3公表> 48.9
13. 鉱工業生産 ＜前期比、％＞ (前年比、％)			▲ 5.2 ▲ 11.5	▲ 3.0 ▲ 13.8		▲ 1.2 ▲ 13.8	<7/15公表> ▲ 0.4 ▲ 13.7	
14. 失業率 (除く軍人、％)	4.6	5.8	8.1	9.2		9.4	9.5	
15. 非農業部門雇用者数 (増減数、千人/月) うち民間部門	96 72	▲257 ▲270	▲ 691 ▲ 695	▲ 436 ▲ 440		▲ 322 ▲ 312	▲ 467 ▲ 415	
16. CPI ＜前期比、％＞ (前年比、％)			▲ 0.6 ▲ 0.0	0.3 ▲ 1.2		0.1 ▲ 1.3	<7/15公表> 0.7 ▲ 1.4	
コア＜前期比、％＞ (前年比、％)			0.4 1.7	0.6 1.8		0.1 1.8	<7/15公表> 0.2 1.7	
17. 非農業部門労働生産性 ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)			1.6 1.9					
18. ユニット・レーパー・コスト ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)			3.0 2.2					

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均を用いて算出。

(注) ・前期(月)比は季調済みベース。

・財・サービス貿易収支の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・雇用者増減数(期末差)の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・CPIコアは食料品、エネルギーを除いたベース。



## ユーロエリアの主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したもの。

※

	2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/4月	5月	6月	7月
1. 実質GDP <前期比年率、%>	2.7	0.7	▲6.9	▲9.7					
独 実質GDP <前期比年率、%>	2.5	1.3	▲8.6	▲14.4					
仏 実質GDP <前期比年率、%>	2.3	0.3	▲5.7	▲4.8					
2. 輸出 <前期比、%>			▲8.2	▲15.2	▲1.4	▲0.7	<7/17公表> ▲2.7		
(前年比、%)	11.0	3.8	▲4.9	▲21.3	▲25.2	▲26.4	▲23.9		
3. 独 海外受注(域外) <前期比、%>			▲14.8	▲20.8	7.6	▲0.1	8.2		
(前年比、%)	10.2	▲5.5	▲23.0	▲38.7	▲33.4	▲37.5	▲29.1		
4. 独 国内投資財受注 <前期比、%>			▲14.9	▲8.8	0.1	▲2.6	6.5		
(前年比、%)	8.6	▲6.9	▲22.7	▲27.4	▲26.6	▲30.6	▲22.4		
5. 輸入 <前期比、%>			▲9.5	▲14.0	▲5.0	▲2.8	<7/17公表> ▲2.8		
(前年比、%)	8.4	7.4	▲2.3	▲20.8	▲27.3	▲27.2	▲27.5		
6. 小売売上数量 <前期比、%>			▲0.8	▲1.0	▲0.3	0.1	▲0.4		
(前年比、%)	1.4	▲0.8	▲1.9	▲3.4	▲2.9	▲2.5	▲3.3		
7. 新車登録台数 (年率、万台)	1,164	1,071	991	998	1,121	1,075	1,131	<7/15公表> 1,158	
<前期比、%>	▲0.9	▲8.0	▲7.4	0.7	12.3	3.9	5.3	2.4	
8. 消費者コンフィデンス (DI、%)	▲5	▲18	▲27	▲33	▲28	▲31	▲28	▲25	<7/30公表> ▲23
9. 鉱工業生産(除く建設) <前期比、%>			▲6.2	▲7.4	▲2.6	▲1.4	<7/14公表> 0.5		
(前年比、%)	3.7	▲1.8	▲8.9	▲18.2	▲18.8	▲20.5	▲17.0		
10. 製造業PMI(購買担当者指数)(DI、%)	54.3	46.5	36.8	34.0	40.0	36.8	40.7	42.6	<8/3改訂> 46.3
サービス業PMI(事業活動指数)(DI、%)	56.6	48.5	43.4	40.8	44.4	43.8	44.8	44.7	<7/24公表> 45.6
11. 失業率 (%)	7.5	7.6	8.0	8.8	9.3	9.2	9.3	<7/31公表> 9.4	
12. 消費者物価 (前年比、%)	2.1	3.3	2.3	1.0	0.2	0.6	0.0	<7/15改訂> ▲0.1	<7/31公表> ▲0.6
コア (前年比、%)	2.0	2.4	2.2	1.6	1.5	1.7	1.5	<7/15公表> 1.3	

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) 欧州委員会 (Eurostat)、ECB、Deutsche Bundesbank、Statistisches Bundesamt、INSEE、Datastream、Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)

- (注) ・ユーロエリアに関する計数・図表のうち、消費者物価・M3・貸出は各時期のユーロ構成国ベース。  
 ・実質GDPの年率換算値は、当局計算による。なお、ユーロエリアとドイツの暦年の計数は、未季調ベース。  
 ・前期(月)比は季調済みベース。  
 ・消費者物価コアは、エネルギー、非加工食料品を除いたベース。  
 ・サービス業PMI(事業活動指数)の直近7月は、速報値。  
 ・消費者物価の直近7月は、速報値。また全体以外は未公表。



## 英国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したもの。

		※								
		2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/4月	5月	6月	7月
1. 実質GDP	<前期比年率、%>	2.6	0.7	▲7.0	▲9.3	▲3.2				
										<7/24公表>
2. 小売売上数量	<前期比、%>			0.6	0.3	0.7	0.8	▲0.9	1.2	
	(前年比、%)	4.2	2.7	2.0	0.8	1.3	2.6	▲2.0	2.9	<7/23公表>
3. 消費者コンフィデンス	(DI、%)	▲7	▲29	▲34	▲35	▲27	▲27	▲28	▲25	▲25
4. サービス業PMI事業活動指数	(DI、%)	56.3	47.6	40.9	43.7	50.7	48.7	51.7	51.6	
5. 失業率(失業保険ベース)	(%)	2.7	2.8	3.4	4.2	4.7	4.6	4.7	4.8	<7/15公表>
6. CPI	(前年比、%)	2.3	3.6	3.9	3.0	2.1	2.3	2.2	1.8	<7/14公表>
7. 住宅価格(Nationwide指数)	(前年比、%)	9.2	▲6.7	▲14.8	▲16.7	▲11.9	▲15.0	▲11.3	▲9.3	▲6.2
										<7/30公表>

※直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) ONS、Datastream、Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)

(注) 実質GDPの年率換算値と、消費者コンフィデンスの季調値は、当局計算による。



(図表3-1)

## アジア諸国・地域の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したものの。

## 1. 中国

(前年比、%)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ◇内は季調済前期比年率	13.0	9.0	6.1 < 9.5 >	7.9 < 18.6 >				
2. 工業生産 <>内は前期比	18.5	12.9	5.1 < 1.9 >	9.0 < 6.3 >		8.9 < 2.3 >	10.7 < 2.9 >	
3. 製造業PMI*	55.0	50.2	48.9	53.3	53.3	53.1	53.2	53.3
4. 消費財小売売上総額	16.8	21.6	15.0	15.0		15.2	15.0	
5. 固定資産投資	25.8	26.1	28.6	35.9		38.7	35.2	
6. 輸出 <>内は前期比	25.8	17.4	▲ 19.8 < ▲ 17.6 >	▲ 23.5 < ▲ 2.6 >		▲ 26.5 < 6.0 >	▲ 21.3 < ▲ 1.4 >	
7. 輸入 <>内は前期比	20.8	18.5	▲ 31.0 < ▲ 18.9 >	▲ 20.5 < 18.1 >		▲ 25.2 < 6.0 >	▲ 13.2 < 8.2 >	
8. CPI	4.8	5.9	▲ 0.6	▲ 1.5		▲ 1.4	▲ 1.7	
9. M2	16.7	17.8	25.5	28.5		25.7	28.5	
10. 人民元貸出	16.1	18.8	29.8	34.4		30.6	34.4	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M2、人民元貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDP、工業生産、輸出入の季調値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注3) \*印は、50を上回れば前月比拡大、下回れば縮小。中国物流購買連合会が公表するデータを使用。

(注4) 固定資産投資は、都市部、当期の値。中国国家统计局が公表する年初来累計値と同前年比伸び率を用いて当局で試算。

## 2. インド

(前年比、%)

	2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ◇内は季調済前期比年率	9.3	7.5	5.8 < 2.4 >	5.8 < 6.6 >				
個人消費 ◇内は季調済前期比	7.7	4.4	2.3 < 3.7 >	2.7 < 6.6 >				
総固定資本形成 ◇内は季調済前期比	14.5	8.8	5.1 < ▲ 10.9 >	6.4 < 1.2 >				
2. 鉱工業生産	9.9	4.4	0.8	0.1	1.9	2.7		
3. 製造業PMI*	56.4	55.5	47.4	47.7	54.8	55.7	55.3	55.3
雇用*	51.0	50.9	49.2	48.8	50.1	50.3	50.6	49.8
4. 卸売物価	4.8	9.1	8.6	3.2	0.4	1.2	▲ 1.4	
5. M3	22.8	19.7	19.7	18.8	20.6	20.6	20.6	
6. 貸出	21.4	23.2	23.2	17.5	15.8	15.8		

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M3、貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDPの季調値は、X-11による当局算出値。

(注3) \*印は、50を上回れば前月比拡大、下回れば縮小。

(注4) 貸出は指定商業銀行ベース。

(出所) CEIC, Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)



(図表3-2)

## 3. NIEs、ASEAN諸国・地域

## (1) 実質GDP

(季調済前期比年率、( )内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008年	2008/2Q	3Q	4Q	2009/1Q	2Q
韓国	5.2	5.1	2.2	1.7 (4.3)	1.0 (3.1)	▲18.8 (▲3.4)	0.5 (▲4.2)	9.7 (▲2.5)
台湾	4.8	5.7	0.1	0.3 (4.6)	▲10.5 (▲1.0)	▲24.7 (▲8.6)	▲3.6 (▲10.2)	
香港	7.0	6.4	2.4	▲3.9 (4.1)	▲3.2 (1.5)	▲7.4 (▲2.6)	▲16.1 (▲7.8)	
シンガポール	8.4	7.8	1.1	▲7.7 (2.5)	▲2.1 (0.0)	▲16.4 (▲4.2)	▲12.7 (▲9.6)	20.4 (▲3.7)
タイ	5.2	4.9	2.6	1.3 (5.3)	1.9 (3.9)	▲22.1 (▲4.2)	▲7.3 (▲7.1)	
インドネシア	5.5	6.3	6.1	7.5 (6.4)	6.2 (6.4)	0.6 (5.2)	3.4 (4.4)	
マレーシア	5.8	6.2	4.6	2.3 (6.6)	0.4 (4.8)	▲9.0 (0.1)	▲17.0 (▲6.2)	
フィリピン	5.3	7.1	3.8	7.1 (4.2)	3.0 (4.6)	1.1 (2.9)	▲8.9 (0.4)	

(注1) 季節調整値は、韓国、香港、シンガポール、タイ、フィリピンが現地統計。その他はX-11による当局算出値。

(注2) 実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

## (2) 輸出

(名目米ドルベース、季調済前期比、( )内は前年比、%)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
輸出合成指数	11.5	11.5	▲13.2	7.7				
うちIT関連寄与度			▲1.5	3.6				
韓国 <29.5>	14.1	13.6	▲13.7 (▲25.0)	13.4 (▲20.4)	9.1 (▲20.1)	▲8.7 (▲28.6)	15.9 (▲12.4)	2.1 (▲20.1)
台湾 <17.9>	10.1	3.6	▲13.1 (▲36.7)	8.9 (▲32.0)		0.1 (▲31.4)	8.5 (▲30.4)	
タイ <12.5>	17.2	16.9	▲9.1 (▲20.6)	▲0.2 (▲26.2)		4.5 (▲26.6)	4.1 (▲25.9)	
インドネシア <9.6>	13.2	20.1	▲17.3 (▲31.8)	9.9 (▲26.4)		2.8 (▲28.7)	▲1.0 (▲27.2)	

## (参考)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
シンガポール 新規輸出受注D.I.*	53.7	47.6	43.7	49.9	50.5	50.3	50.9	50.5
うちIT関連*	56.3	51.0	42.6	53.1	53.5	53.0	53.8	53.5

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は4~6月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の前年比で横置きしている。

(注3) 輸出の季節調整値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 輸出の&lt; &gt;内は、合成指数に占めるシェア(%, 2008年)。

(注5) 輸出、輸出合成指数はともに金額ベース。

(注6) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注7) \*印は、50を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(出所) CEIC



(図表3-3)

## (3) 生産関連

(季調済前期比、( )内は前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
生産合成指数		6.2	1.7	▲ 5.9	9.6				
うちIT関連寄与度				▲ 1.3	5.2				
韓国	鉱工業生産指数	6.9	3.0	▲ 2.7 (▲ 15.5)	11.4 (▲ 6.2)		1.5 (▲ 9.0)	5.7 (▲ 1.2)	
	企業景気実査指数 <sup>†</sup> (季調済)	99.8	82.0	70.5	92.7	101.9	94.0	97.9	101.9
台湾	鉱工業生産指数	7.8	▲ 1.8	▲ 8.0 (▲ 32.4)	17.3 (▲ 16.6)		1.6 (▲ 18.4)	5.0 (▲ 11.4)	
タイ	製造業生産指数	8.2	5.3	▲ 9.0 (▲ 18.5)	10.1 (▲ 9.1)		0.1 (▲ 9.8)	3.0 (▲ 7.8)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は4~5月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の値で横置きしている。

(注3) 生産指数の季節調整値は、現地統計またはX-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 生産、生産合成指数はともに数量ベース。

(注5) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注6) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

## (4) 内需関連

(季調済前期比、( )内は前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
韓国	小売数量指数	5.0	1.0	0.4 (▲ 4.9)	4.9 (1.6)		4.9 (1.6)	1.8 (7.3)	
	消費者信頼感指数 <sup>†</sup>	107.3	91.8	84.3	103.0	109.0	105.0	106.0	109.0
	機械投資推計指数	8.2	▲ 4.4	▲ 11.6 (▲ 17.7)	6.3 (▲ 13.6)		7.3 (▲ 16.2)	9.5 (▲ 5.6)	
台湾	小売指数	1.8	▲ 4.3	(▲ 4.2)	(0.3)		(0.4)	(3.3)	
	消費者コンフィデンス <sup>†</sup>	66.2	58.7	48.8	51.1	56.2	52.1	51.4	56.2
タイ	民間消費指数 (PCI)	1.5	3.5	▲ 4.7 (▲ 5.3)	1.1 (▲ 4.2)		▲ 0.8 (▲ 4.7)	2.6 (▲ 2.7)	
	民間投資指数 (PII)	▲ 0.5	3.5	▲ 12.0 (▲ 13.3)	▲ 4.2 (▲ 16.0)		▲ 0.5 (▲ 16.1)	1.1 (▲ 15.5)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

## (5) 消費者物価指数 (CPI)

(前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
韓国	( )内はコア	2.5 (2.3)	4.7 (4.3)	3.9 (5.0)	2.8 (3.9)	1.6 (3.2)	2.7 (3.9)	2.0 (3.5)	1.6 (3.2)
台湾	( )内はコア	1.8 (1.4)	3.5 (3.1)	▲ 0.0 (1.2)	▲ 0.8 (▲ 0.0)		▲ 0.1 (0.1)	▲ 2.0 (▲ 0.6)	
タイ	( )内はコア	2.2 (1.0)	5.5 (2.3)	▲ 0.2 (1.6)	▲ 2.8 (▲ 0.1)	▲ 4.4 (▲ 1.2)	▲ 3.3 (▲ 0.3)	▲ 4.0 (▲ 1.0)	▲ 4.4 (▲ 1.2)
インドネシア	( )内はコア	6.4 (5.9)	9.8 (N/A)	8.6 (7.3)	5.6 (6.4)	2.7 (4.9)	6.0 (6.6)	3.7 (5.6)	2.7 (4.9)

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 韓国のCPIコアは、CPI総合から穀物以外の農産物、石油関連製品を控除。台湾のCPIコアは、CPI総合から生鮮食品およびエネルギーを控除。タイのCPIコアは、CPI総合から非加工食品、エネルギーを控除。インドネシアのCPIコアは、CPI総合から、政府の規制価格の影響がある項目および生鮮食品を控除。

(注3) タイは、2009年以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。

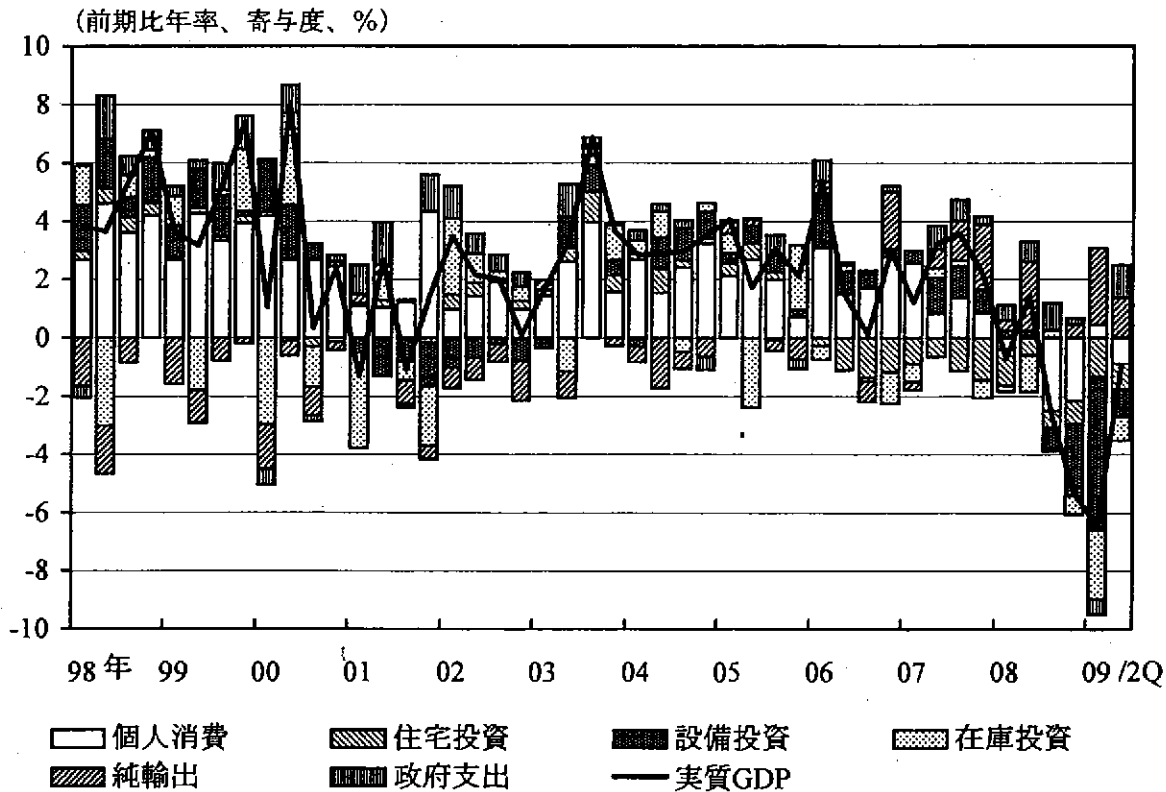
(注4) インドネシアは、2008年以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。2007年基準のCPIコアは、一部未公表。

(出所) CEIC

# 米国の実体経済

## ① 米国の実質GDP

### (1) 実質GDPの需要項目別寄与度



### (2) 需要項目別計数

実質・年率、% ( ) 内は前期比増減、10億ドル

	2008年 ウエイト	寄与度分解				前期比年率			
		2008年 通年	2008年 4Q	2009年		2008年 通年	2008年 4Q	2009年	
				1Q	2Q			1Q	2Q
実質GDP	100	0.4	▲ 5.4	▲ 6.4	▲ 1.0	0.4	▲ 5.4	▲ 6.4	▲ 1.0
個人消費	70	▲ 0.2	▲ 2.2	0.4	▲ 0.9	▲ 0.2	▲ 3.1	0.6	▲ 1.2
住宅投資	3	▲ 1.0	▲ 0.8	▲ 1.3	▲ 0.9	▲ 22.9	▲ 23.2	▲ 38.2	▲ 29.3
設備投資	12	0.2	▲ 2.5	▲ 5.3	▲ 0.9	1.6	▲ 19.5	▲ 39.2	▲ 8.9
在庫投資	▲ 0	▲ 0.4	▲ 0.6	▲ 2.4	▲ 0.8	(▲ 45.4)	(▲ 7.7)	(▲ 76.5)	(▲ 27.2)
純輸出	▲ 4	1.2	0.5	2.6	1.4	( 153.4)	( 8.3)	( 84.4)	( 47.2)
輸出	12	0.6	▲ 2.7	▲ 4.0	▲ 0.8	5.4	▲ 19.5	▲ 29.9	▲ 7.0
輸入	16	0.6	3.1	6.6	2.1	▲ 3.2	▲ 16.7	▲ 36.4	▲ 15.1
政府支出	19	0.6	0.2	▲ 0.5	1.1	3.1	1.2	▲ 2.6	5.6
最終需要	100	0.8	▲ 4.7	▲ 4.1	▲ 0.2	0.8	▲ 4.7	▲ 4.1	▲ 0.2

%

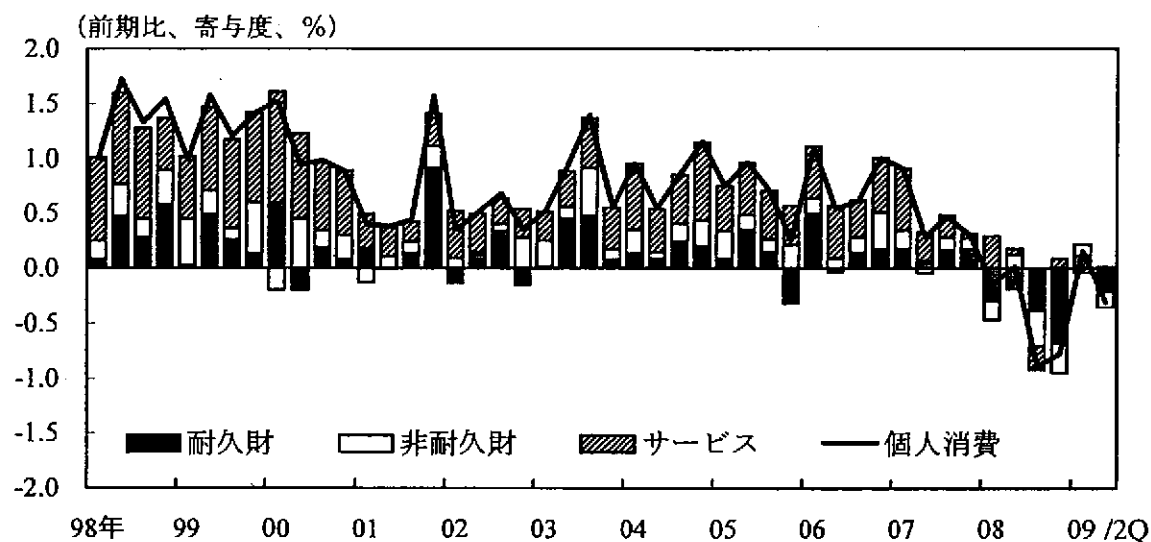
個人消費デフレーター	前年比				前期比年率			
	2008年 通年	2008年 4Q	2009年		2008年 通年	2008年 4Q	2009年	
			1Q	2Q			1Q	2Q
総合	3.3	1.7	0.4	▲ 0.2	3.3	▲ 5.0	▲ 1.5	1.3
コア	2.4	2.0	1.7	1.6	2.4	0.8	1.1	2.0

(注) 最終需要は、実質GDPから在庫投資を除いたもの。

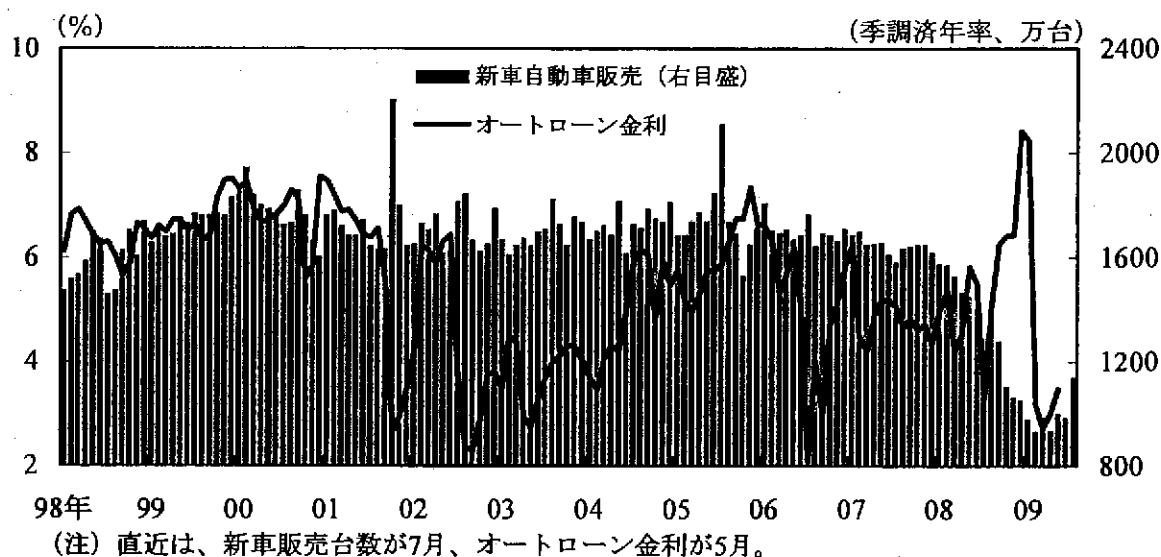
② 米国の個人消費関連

(図表4-2)

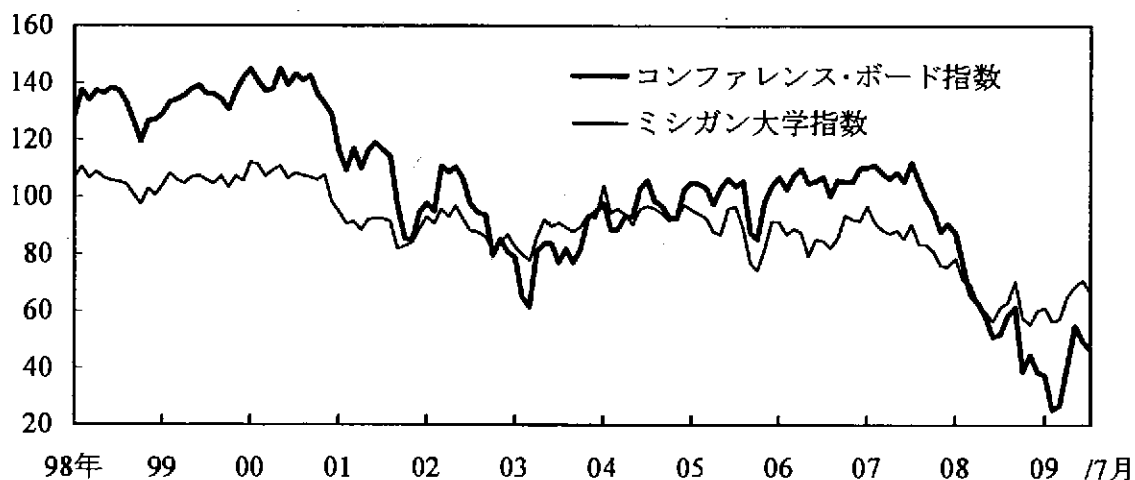
(1) 個人消費



(2) 自動車販売



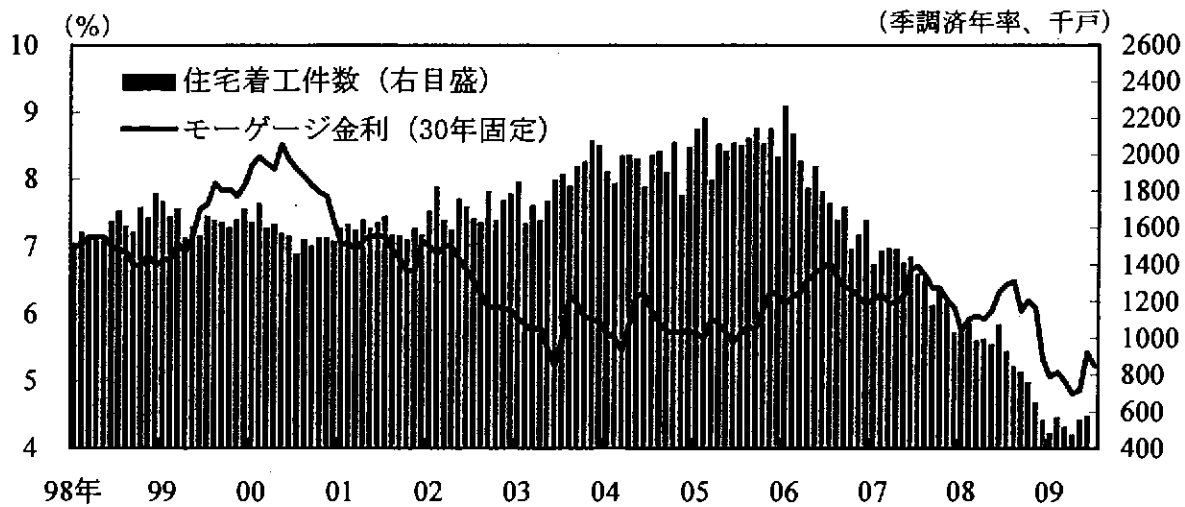
(3) 消費者コンフィデンス



③ 米国の住宅投資

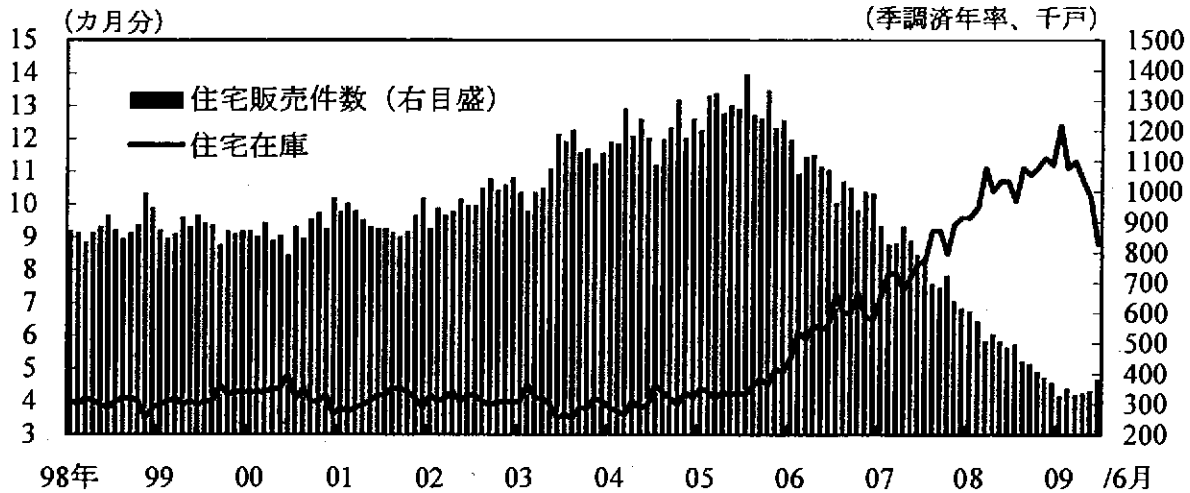
(図表4-3)

(1) モーゲージ金利と住宅着工



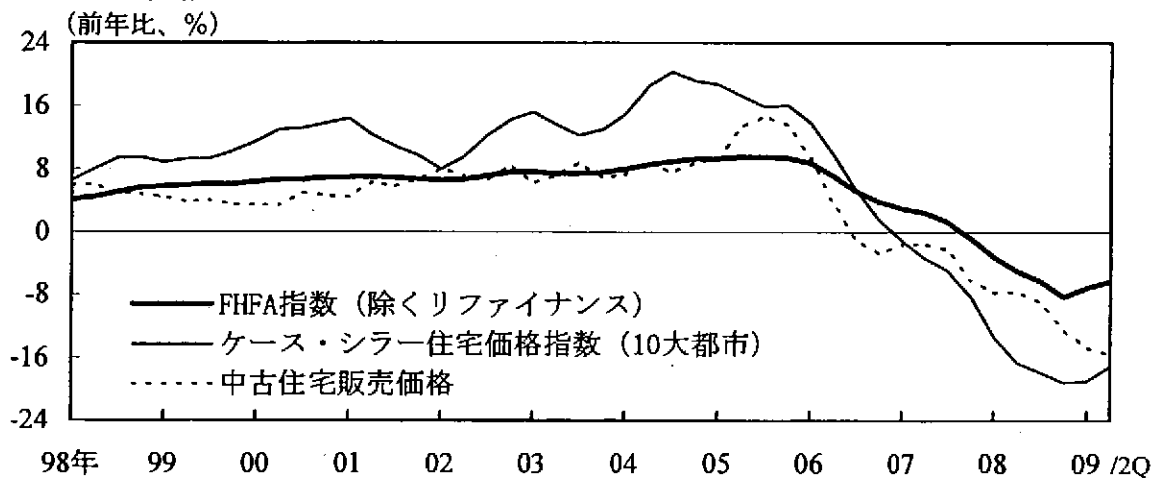
(注) 直近は、住宅着工件数が6月、モーゲージ金利が7月。

(2) 新築一戸建て住宅販売と住宅在庫



(注) 住宅在庫は、月末の在庫戸数を月間の販売数で除したものの。

(3) 住宅価格



(注1) 除くリファイナンスは、FHFA指数の対象物件のうち、リファイナンスに伴い再評価された物件を除き、実際に購入された物件のみを対象とした価格指数。

(注2) 中古住宅販売価格は、不動産業者から報告された中古一戸建て住宅の販売物件の平均単価を集計したもの(中央値)。

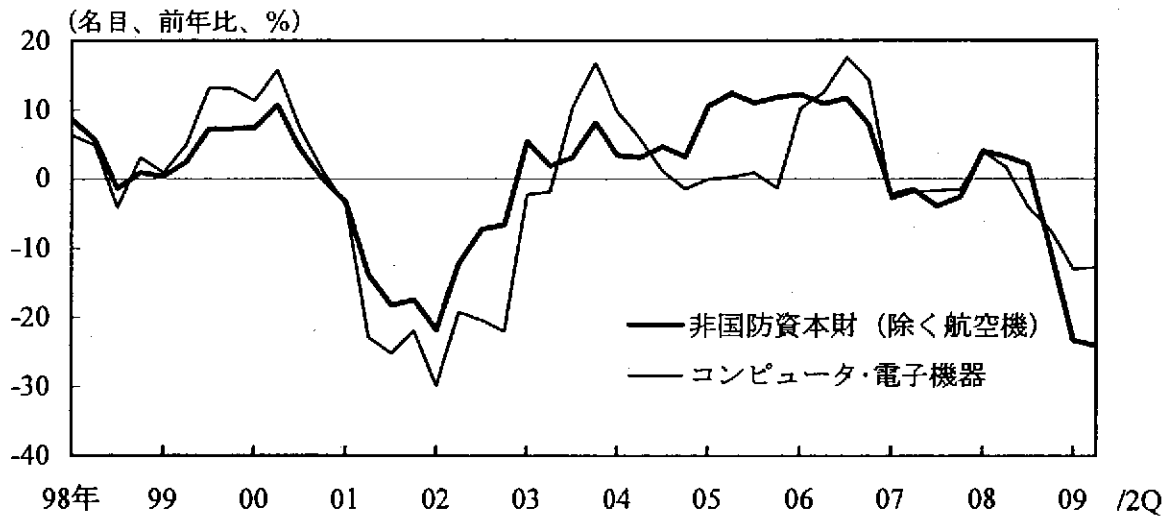
(注3) 直近は、FHFA指数(除くリファイナンス)、ケース・シラー住宅価格指数(10大都市)が4-5月の平均値、中古住宅販売価格が4-6月の平均値。



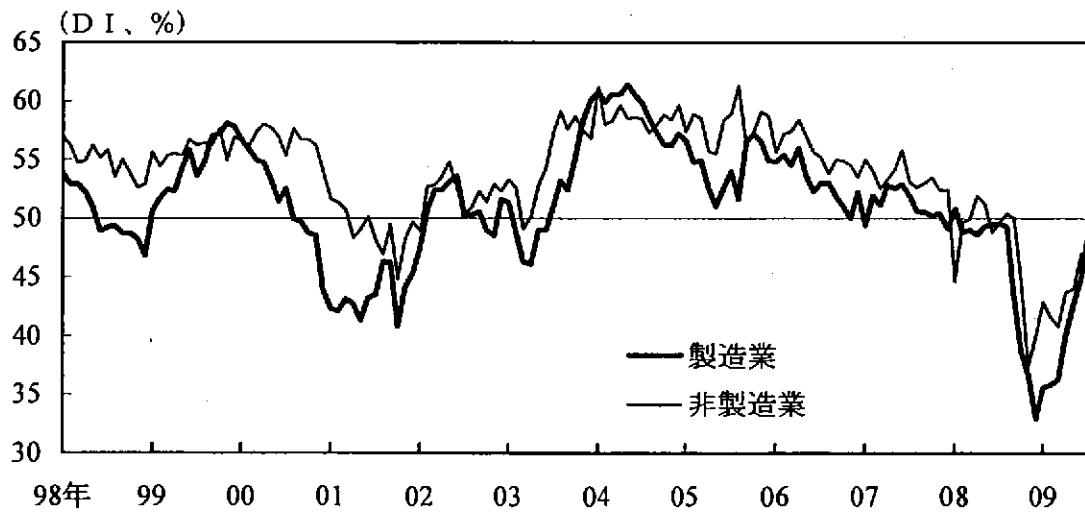
④ 米国の設備投資と生産

(図表4-4)

(1) 非国防資本財(除く航空機)とコンピュータ・電子機器受注

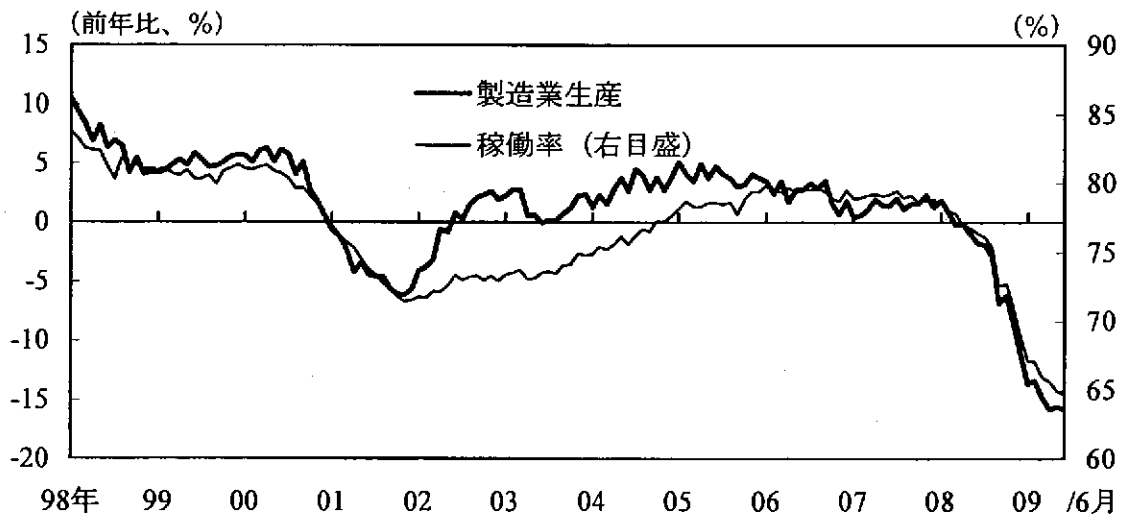


(2) 企業コンフィデンス (ISM指数)



(注) 直近は、製造業が7月、非製造業が6月。

(3) 製造業生産・稼働率



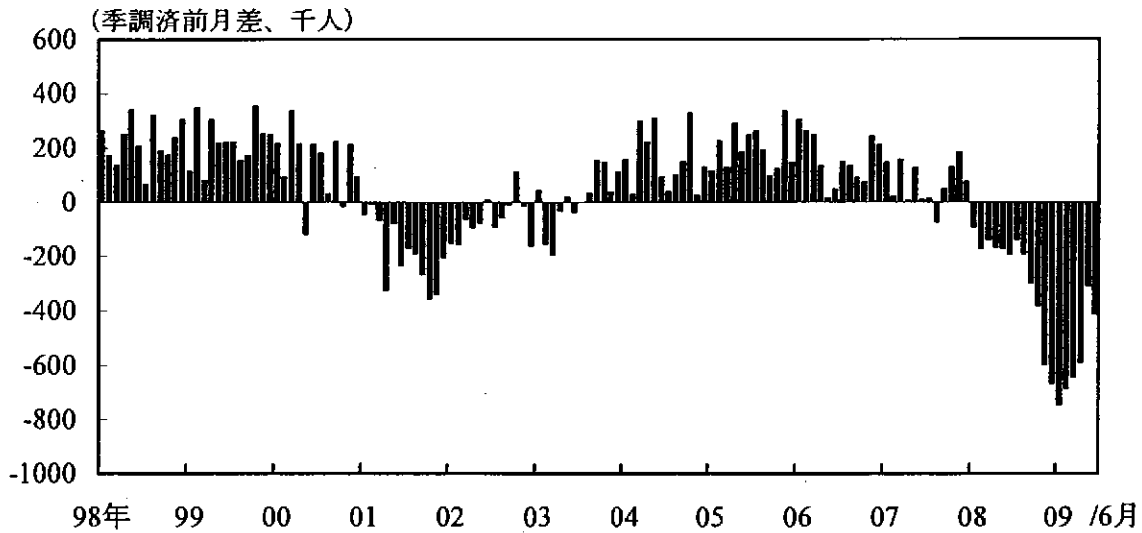


⑤ 米国の雇用

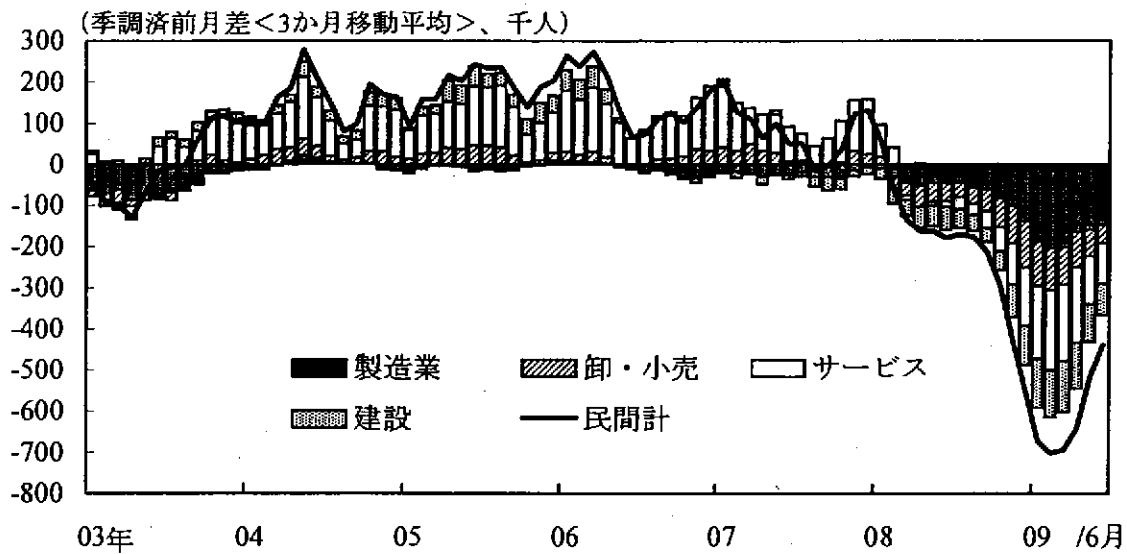
(図表4-5)

(1) 民間部門雇用者数

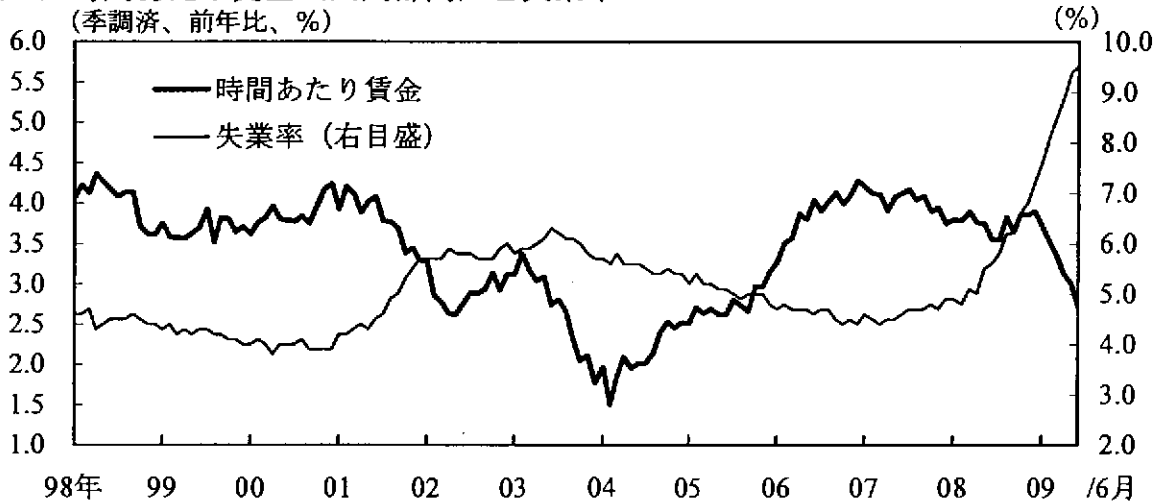
① 全体



② 業種別



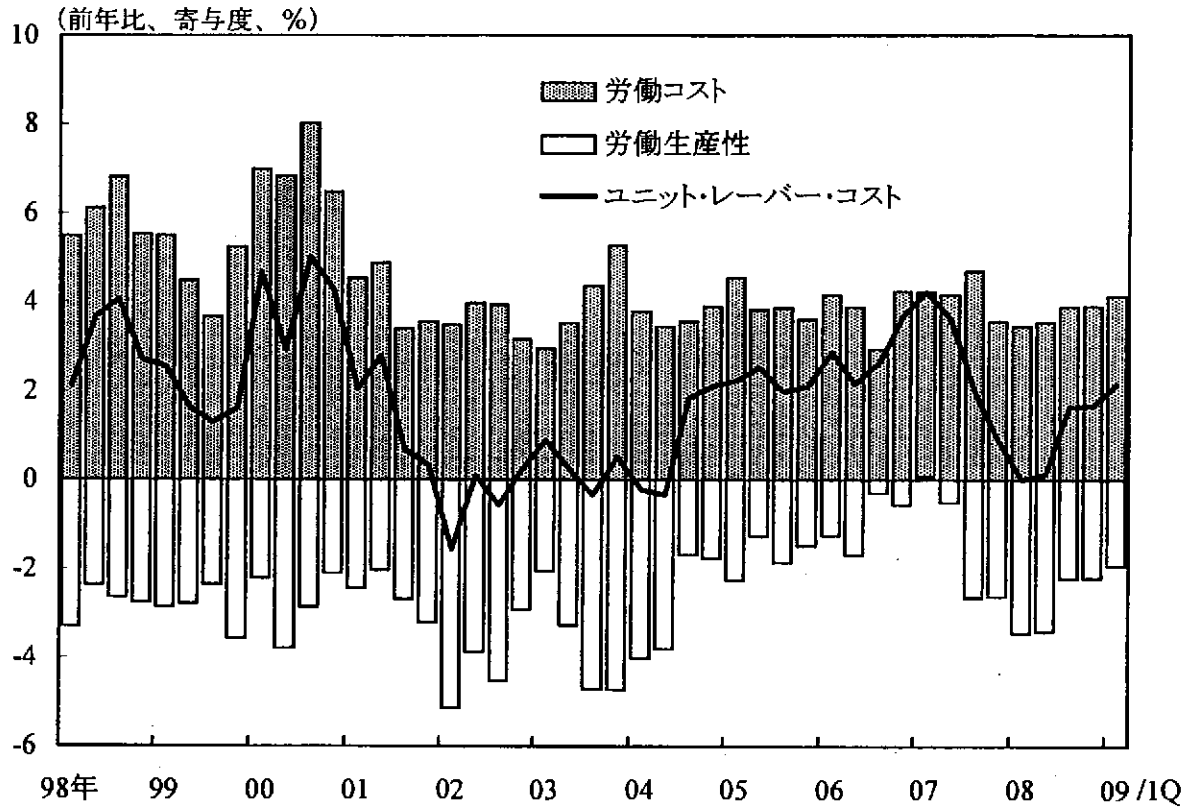
(2) 時間あたり賃金(民間部門)と失業率



⑥ 米国の労働コスト、物価

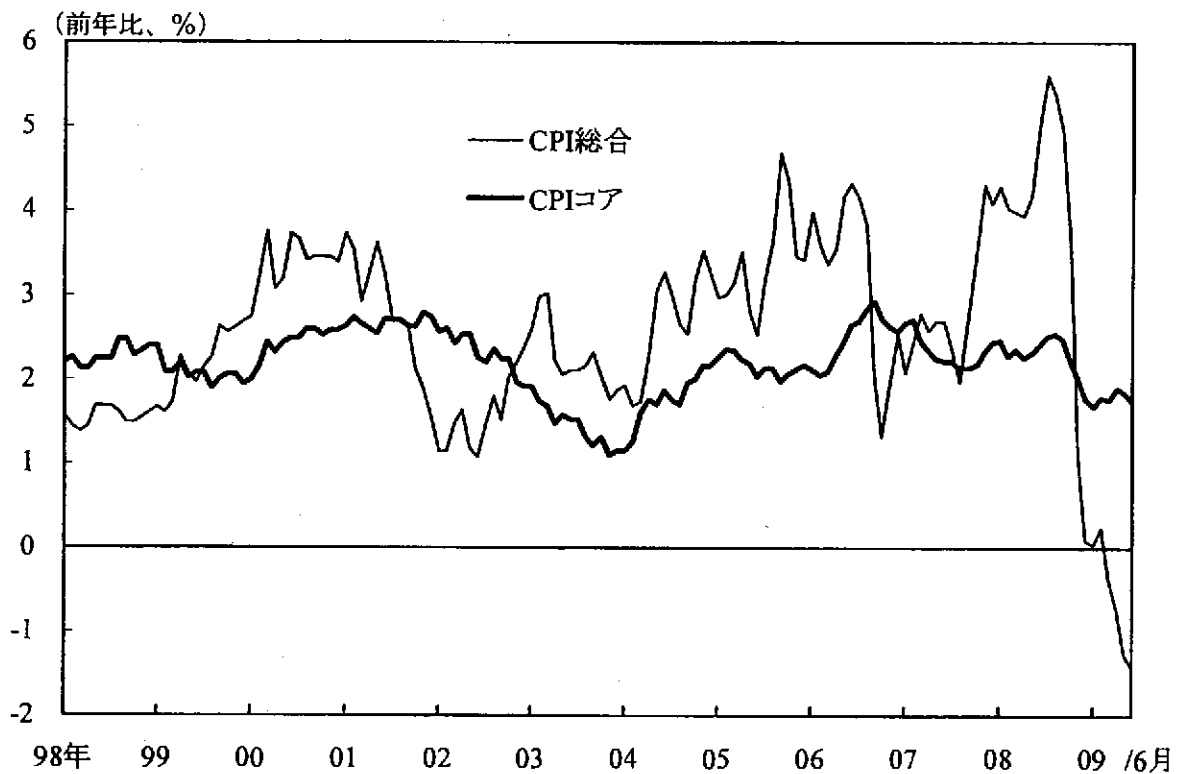
(図表4-6)

(1) ユニット・レーバ・コスト



(注) 労働コストは、賃金と福利厚生費の合計。

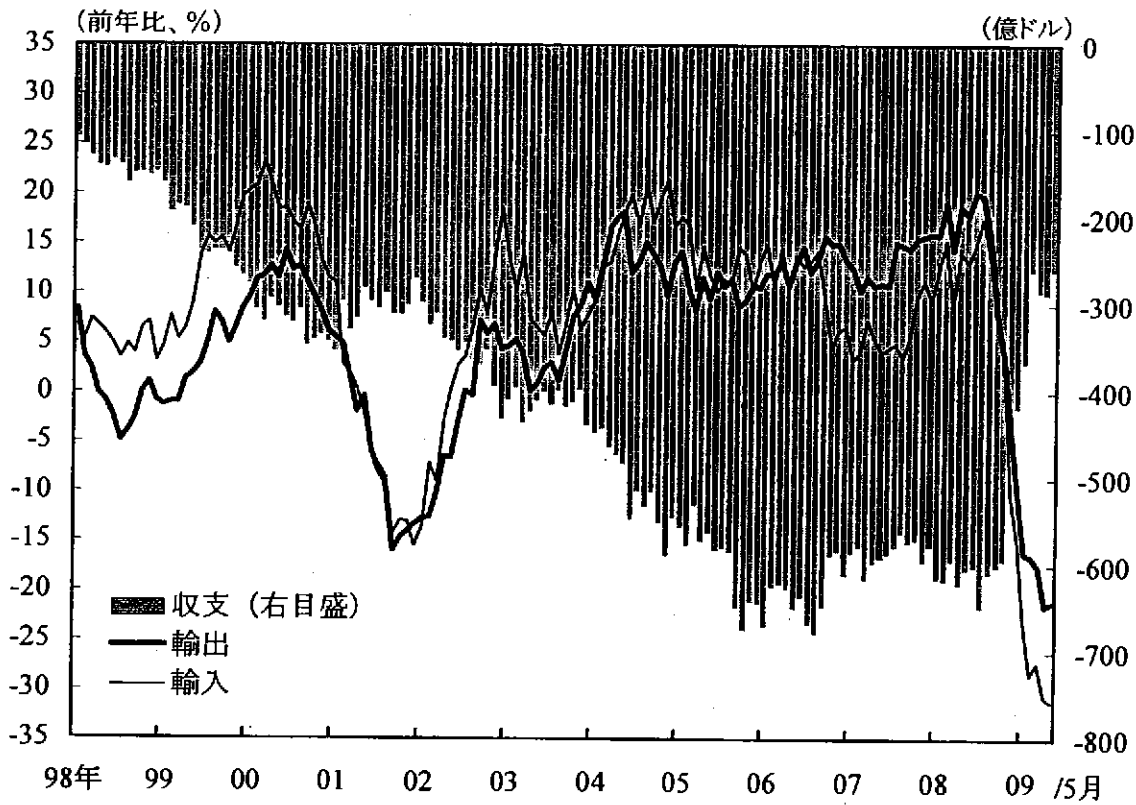
(2) CPI



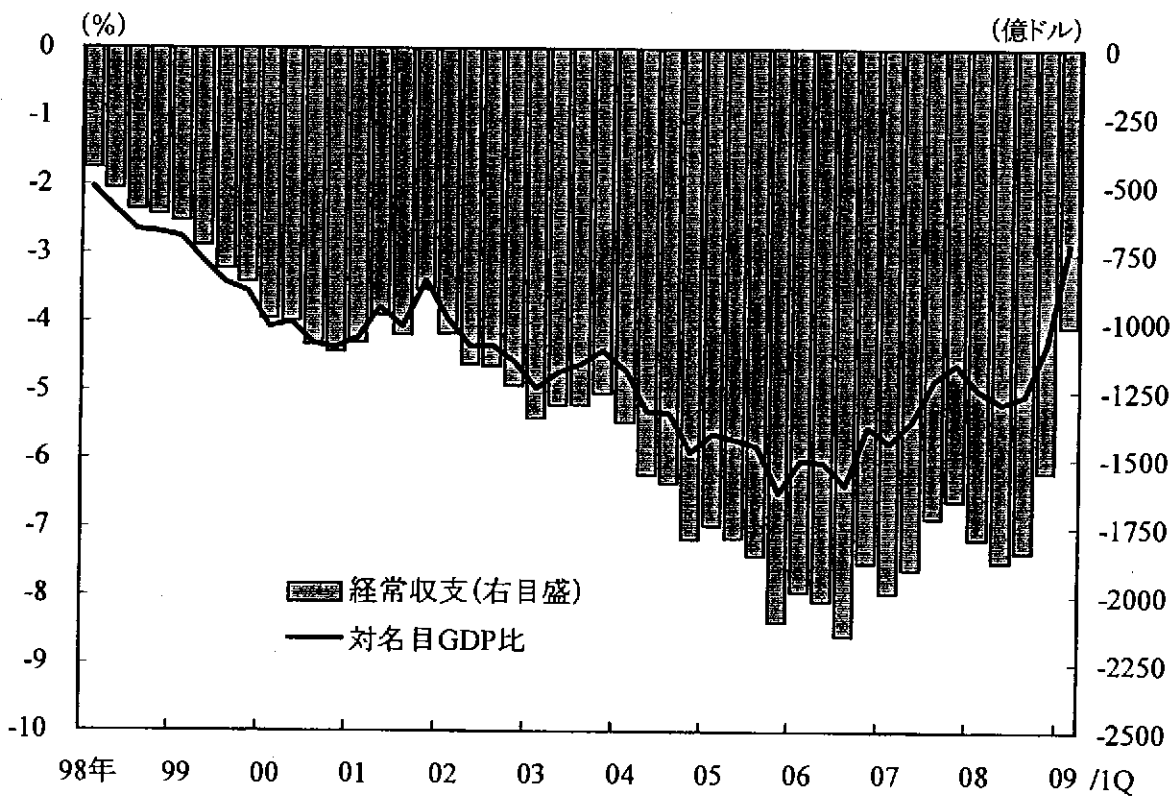
⑦ 米国の対外バランス

(図表4-7)

(1) 財・サービス収支



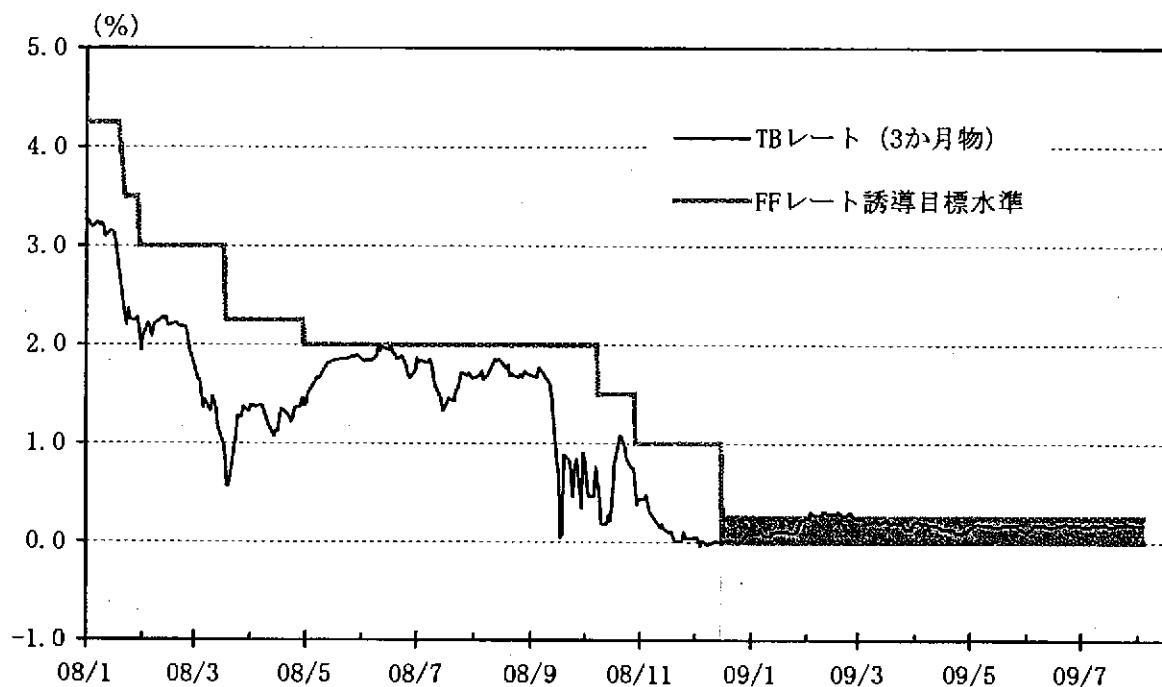
(2) 経常収支



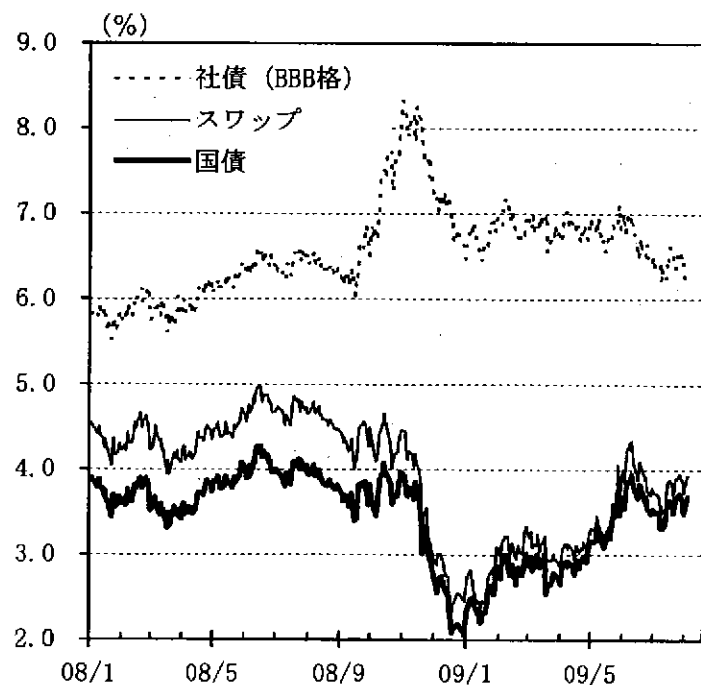
# 米国の金融市場

## 金利 (米国)

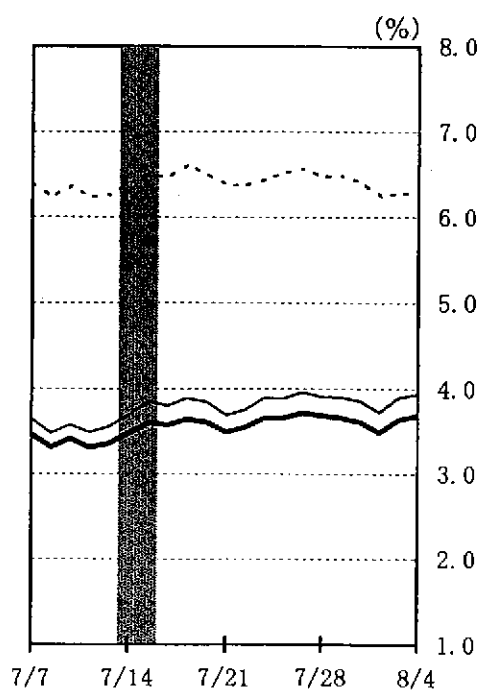
### (1) 政策金利・短期金利



### (2) 長期金利 (10年物)



### <最近の動き>



(注1) シャドーは前回会合。

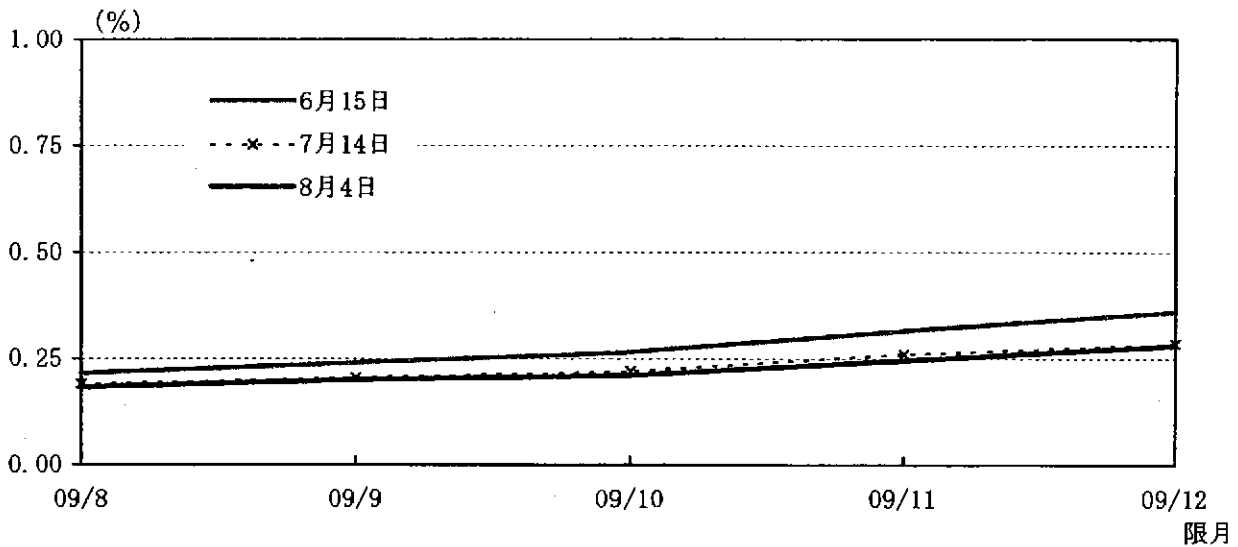
(注2) 社債金利は、BloombergがMoody's、S&Pの格付けを基に合成したBBBを使用。  
因みに、BloombergのBBBは、Moody'sのBaa2、S&PのBBBに対応。

(出所) Bloomberg

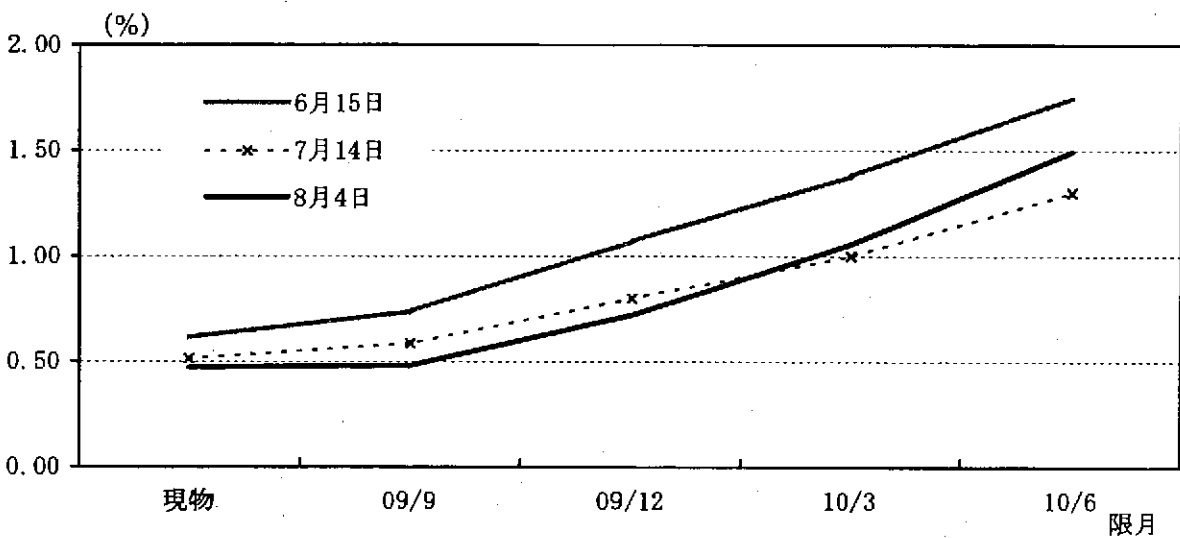
いずれも直近は8月4日

### 先行きの金利観 (米国)

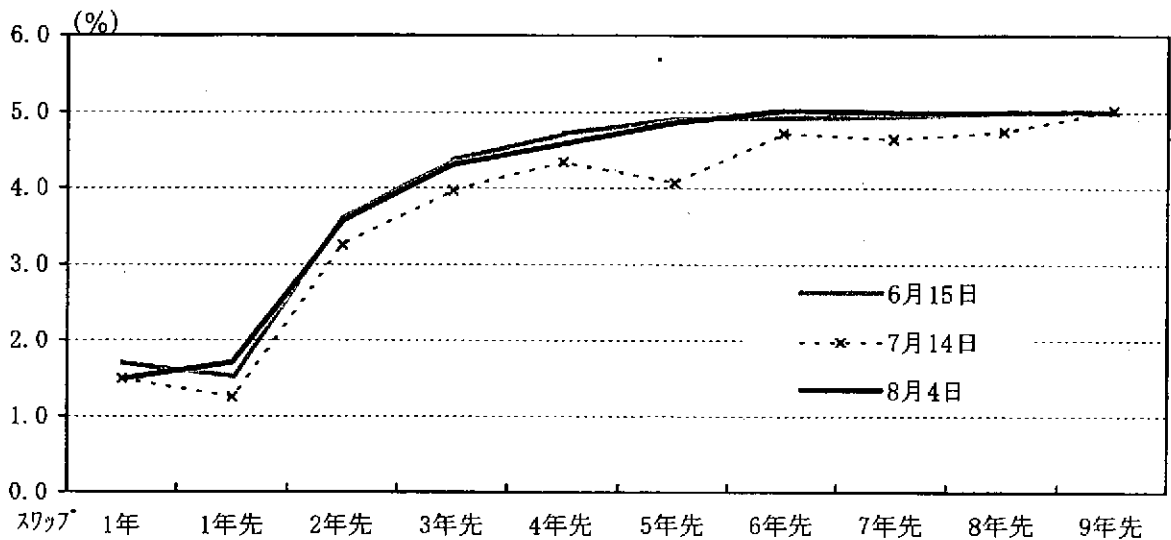
#### (1) FF先物金利



#### (2) ユーロドル先物金利 (3か月物)



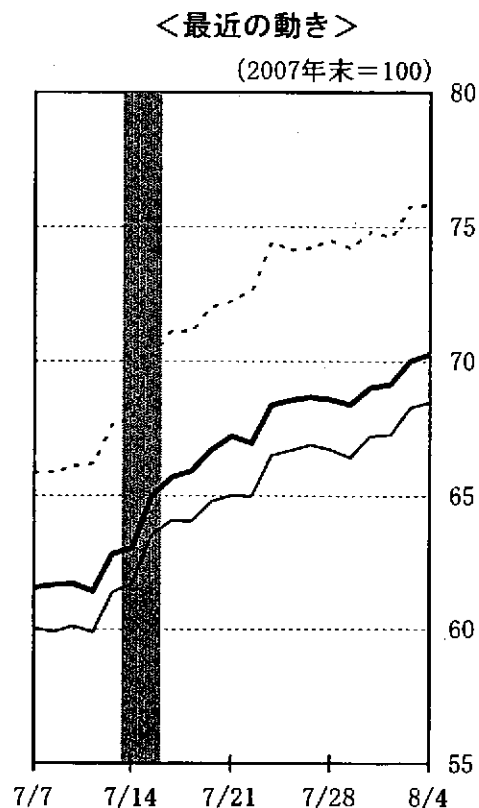
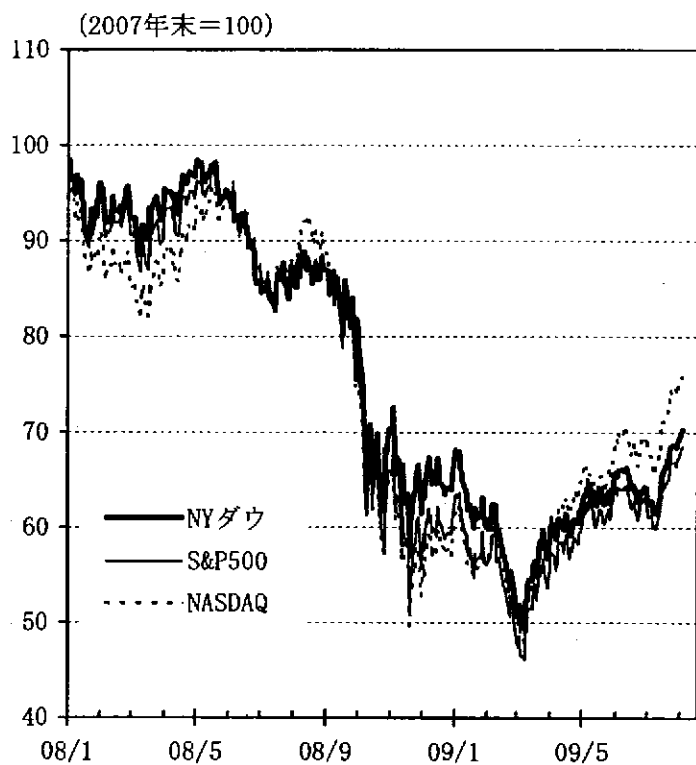
#### (3) インプライド・フォワード・レート (米ドル・スワップ、1年物)



(出所) Bloomberg

### 株価 (米国)

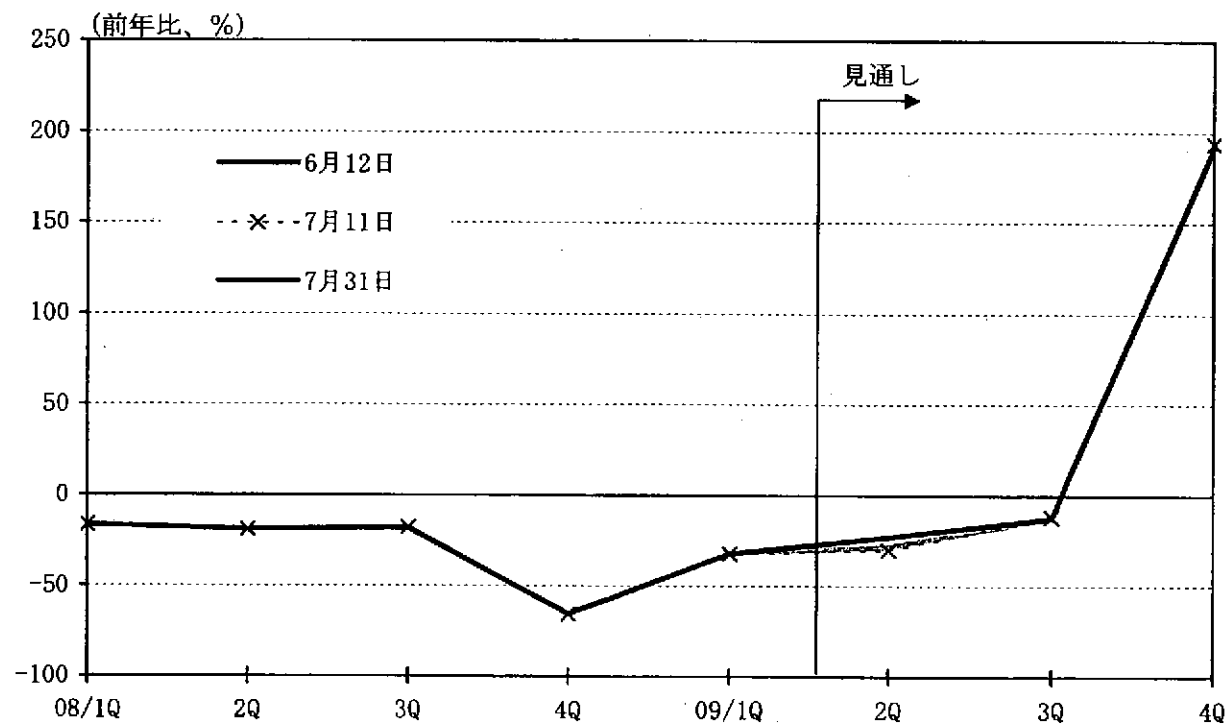
(1) 株価 (NYダウ・S&P500・NASDAQ)



(注) シャドーは前回会合。  
(出所) Bloomberg

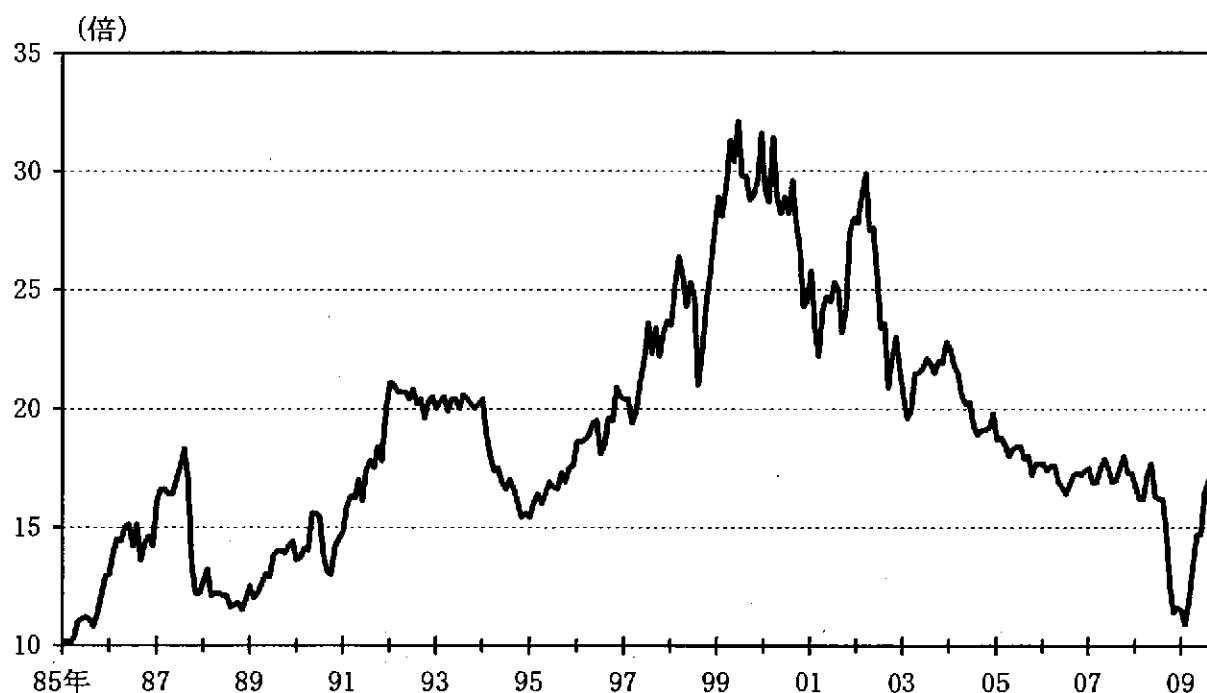
いずれも直近は8月4日

(2) アナリストのEPS (一株当たり利益) 成長率見通し (S&P500社ベース)



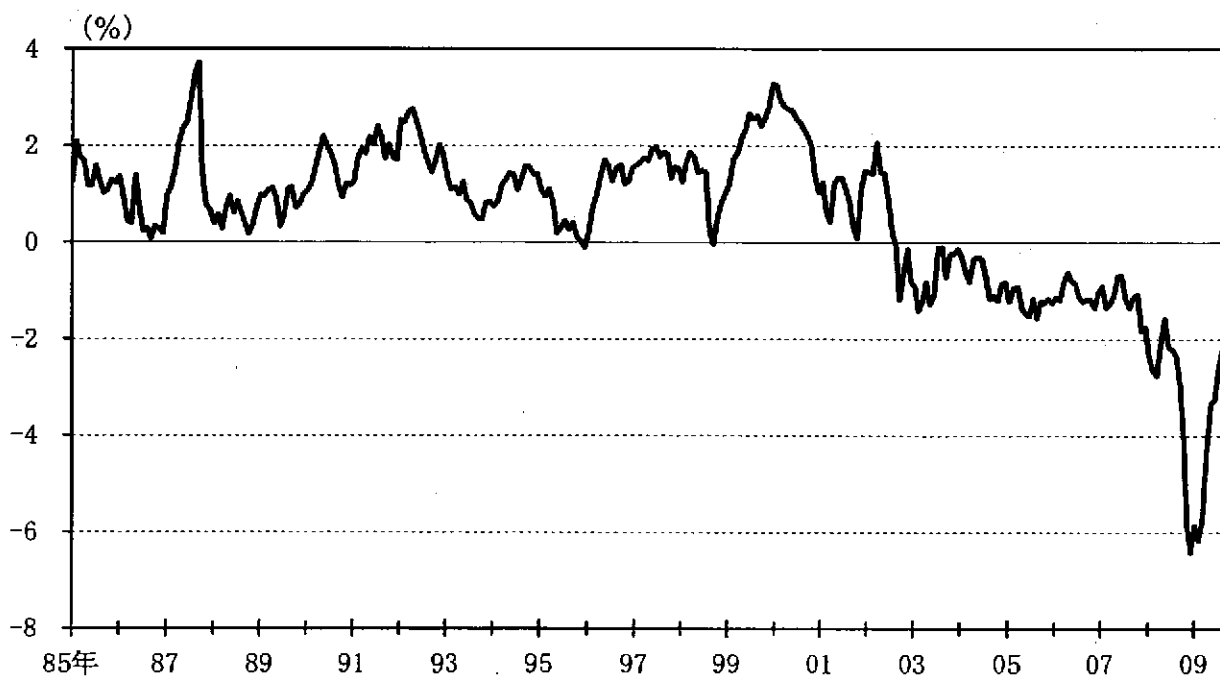
(出所) Thomson ONE Analytics

(3) 株価収益率 (PER、S&P500)



(注) 株価収益率 (PER) = 株価 / 一株当たり利益 (EPS)。  
S&P500実績利益ベース。

(4) イールド・スプレッド (S&P500ベース)



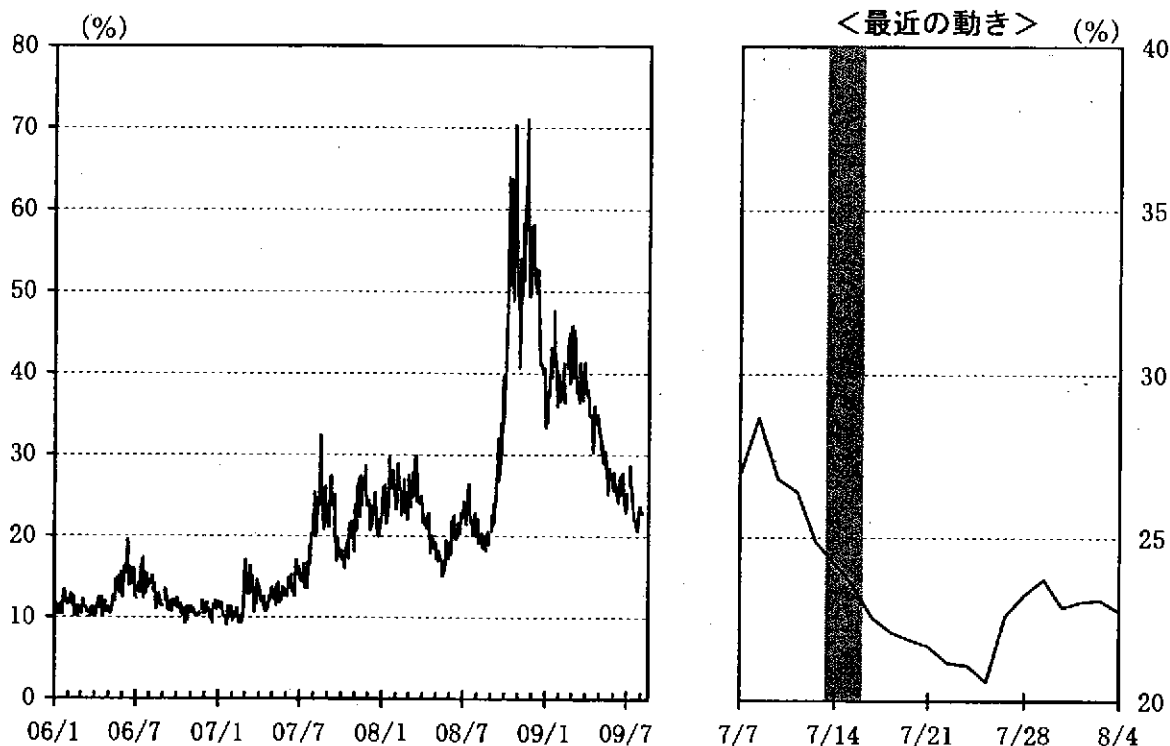
(注) イールド・スプレッド = 国債10年物利回り - 株式益回り (=1/PER)。

(出所) Thomson Reuters Datastream

いずれも直近は8月4日

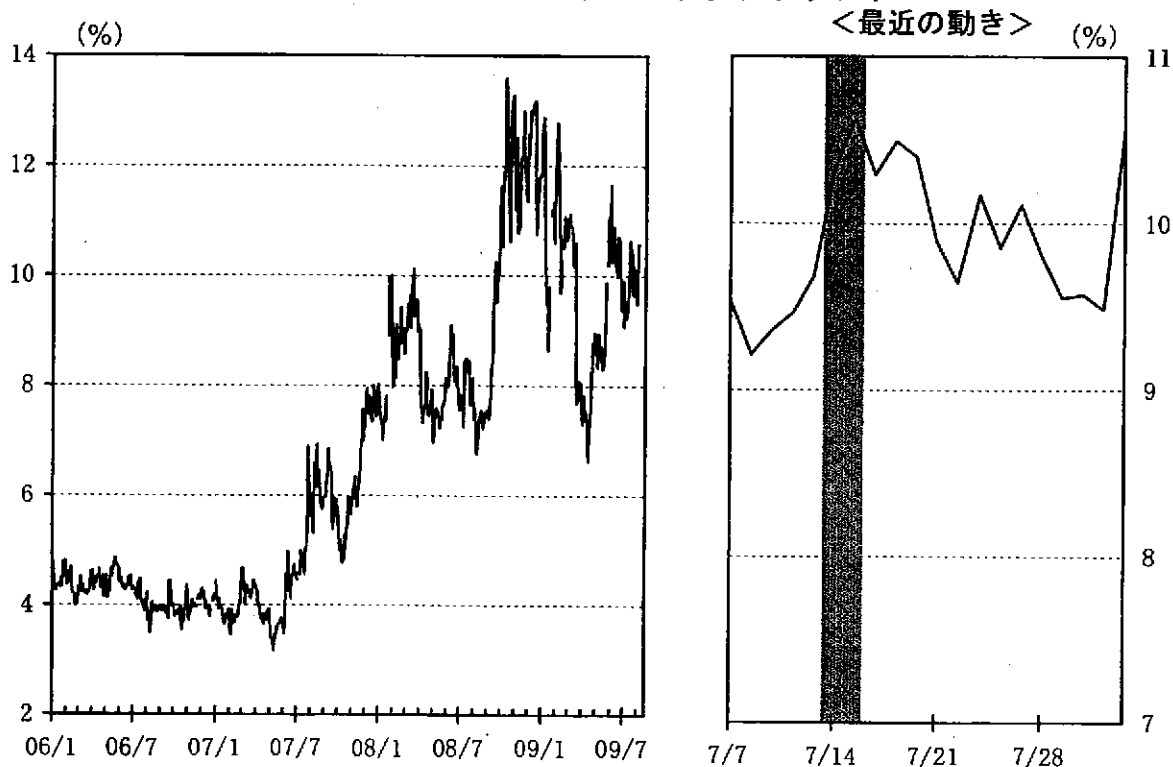
### 金融市場のリスク関連指標 (米国)

#### (1) 株価オプションのインプライド・ボラティリティ (S&P500)



直近は8月4日

#### (2) 米国債先物オプションのインプライド・ボラティリティ

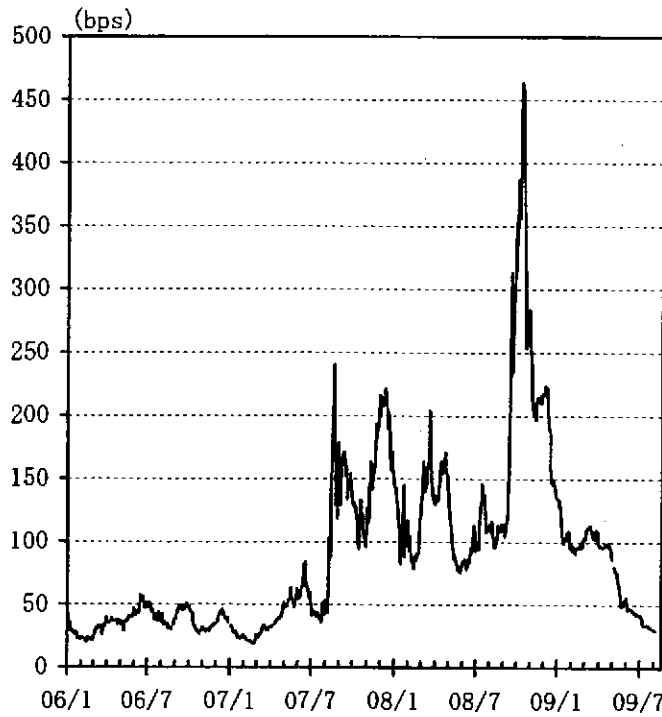


直近は8月3日

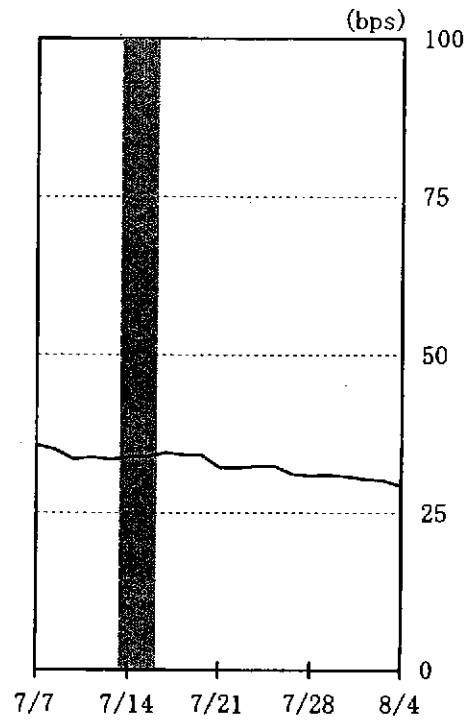
(出所) Bloomberg



(3) TEDスプレッド

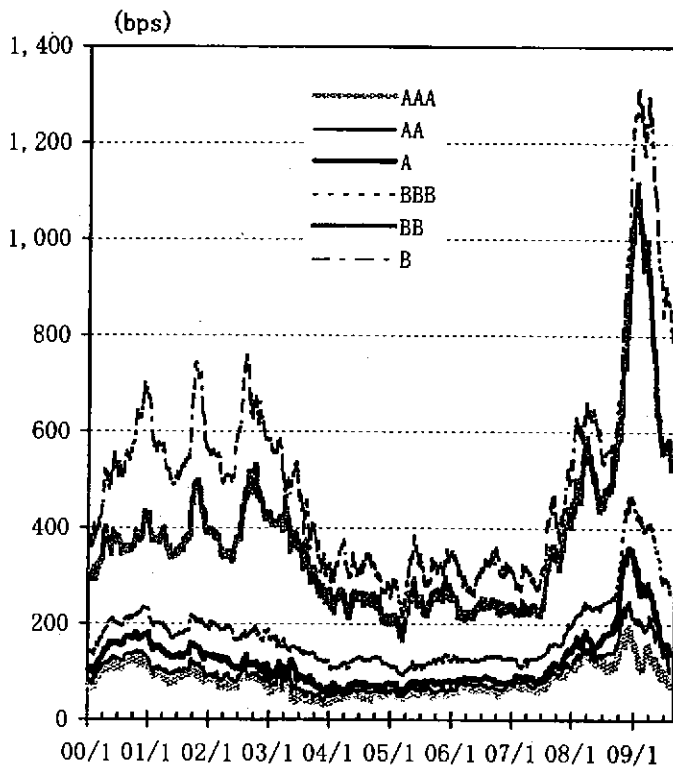


<最近の動き>

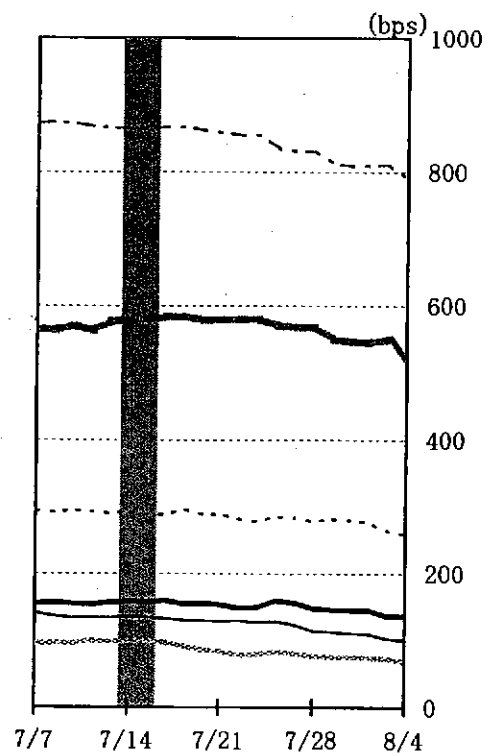


(注) ユーロドル3か月物-TB3か月物。

(4) 米国社債の対国債スプレッド (10年物)



<最近の動き>



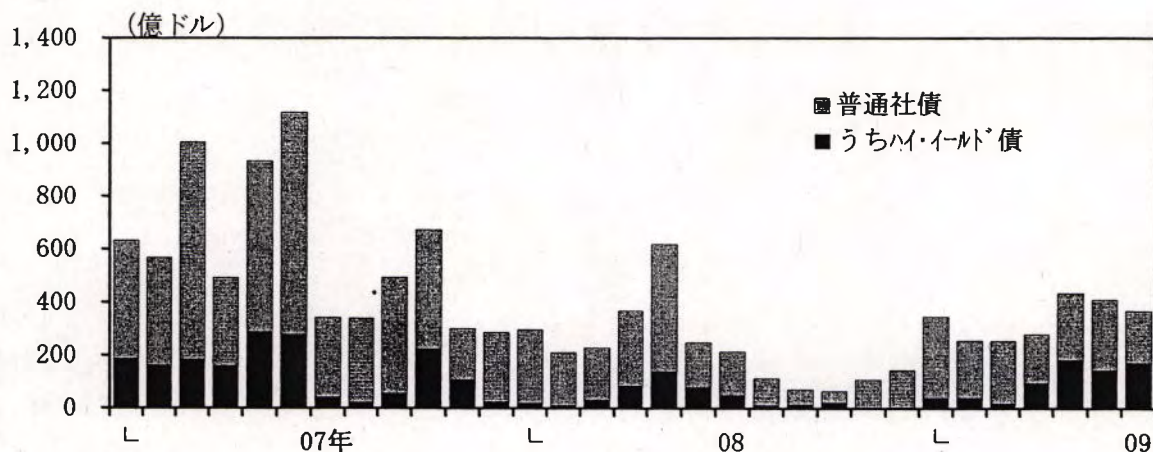
(注) 社債金利は、BloombergがMoody's、S&Pの格付けを基に合成。例えば、AAはMoody'sのAa2、S&PのAAに対応。

(出所) Bloomberg

いずれも直近は8月4日

### 企業の資金調達 (米国)

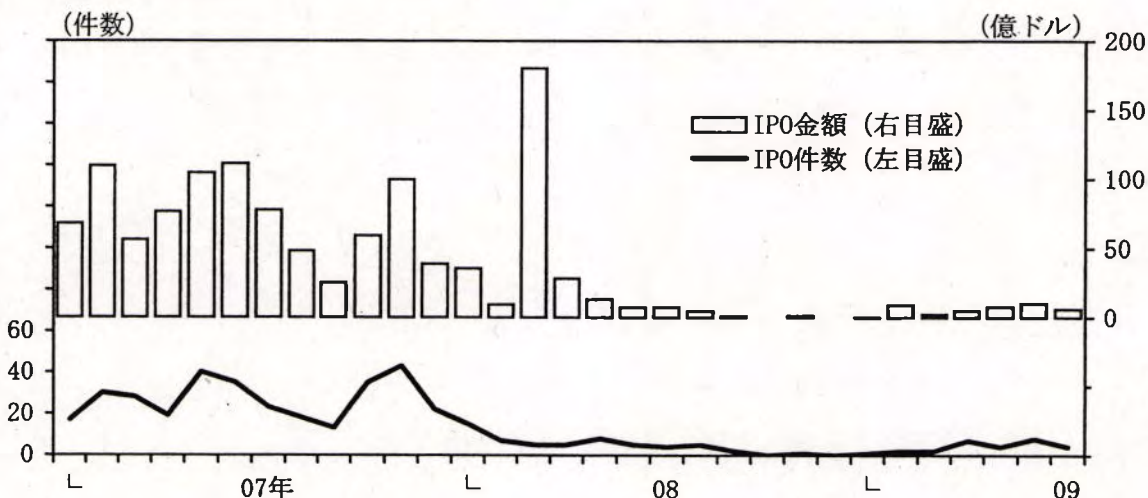
#### (1) 社債発行額 (普通社債)



(出所) Thomson ONE Banker

直近は7月

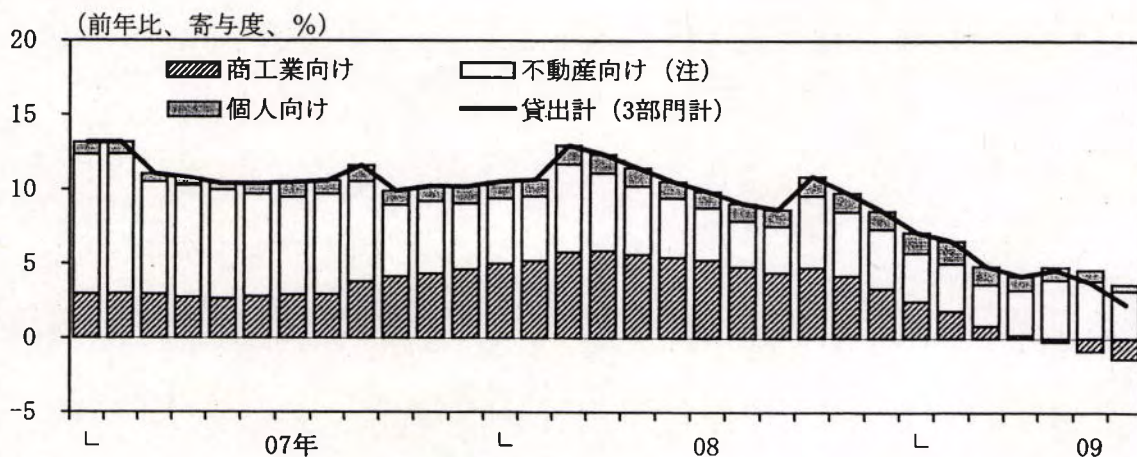
#### (2) IPO金額・件数



(出所) Bloomberg

直近は7月

#### (3) 銀行貸出



(注) 商銀+外銀ベース。不動産向けはホームエクイティ・ローンを含む。

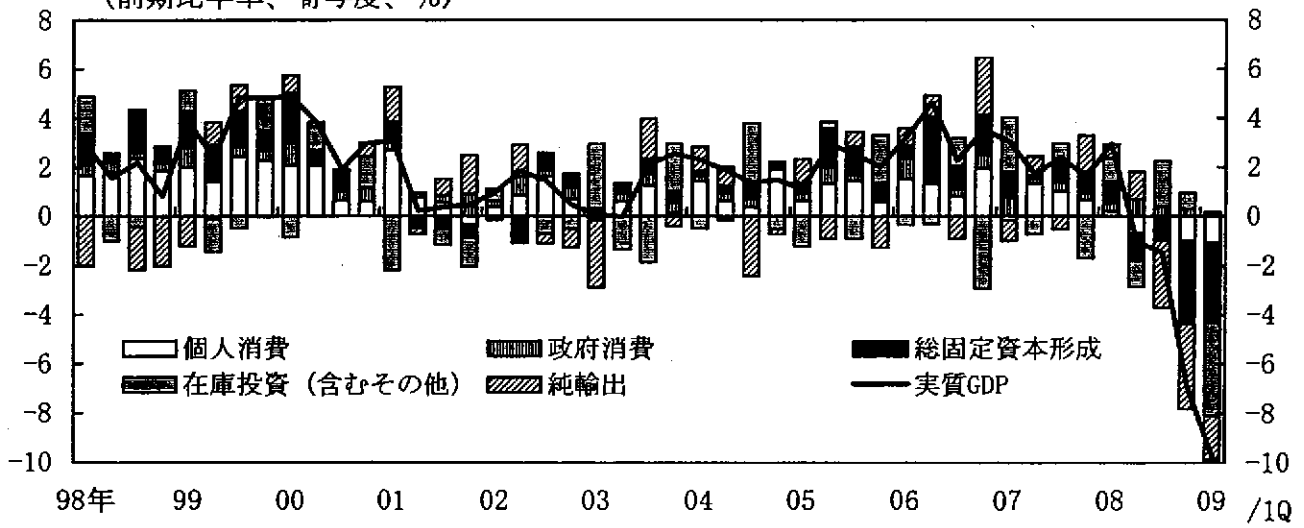
貸出計は、商工業、不動産、個人の3部門向け貸出の合計。「その他」(レポ取引等)は含まない。

(出所) FRB

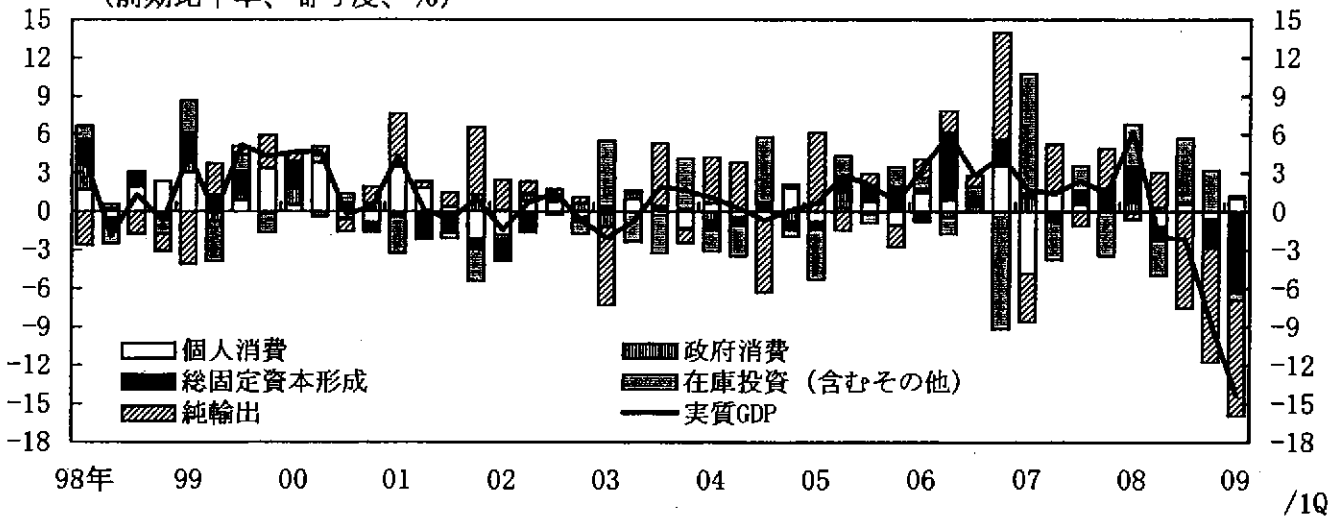
直近は7月22日週

### 欧州の実体経済

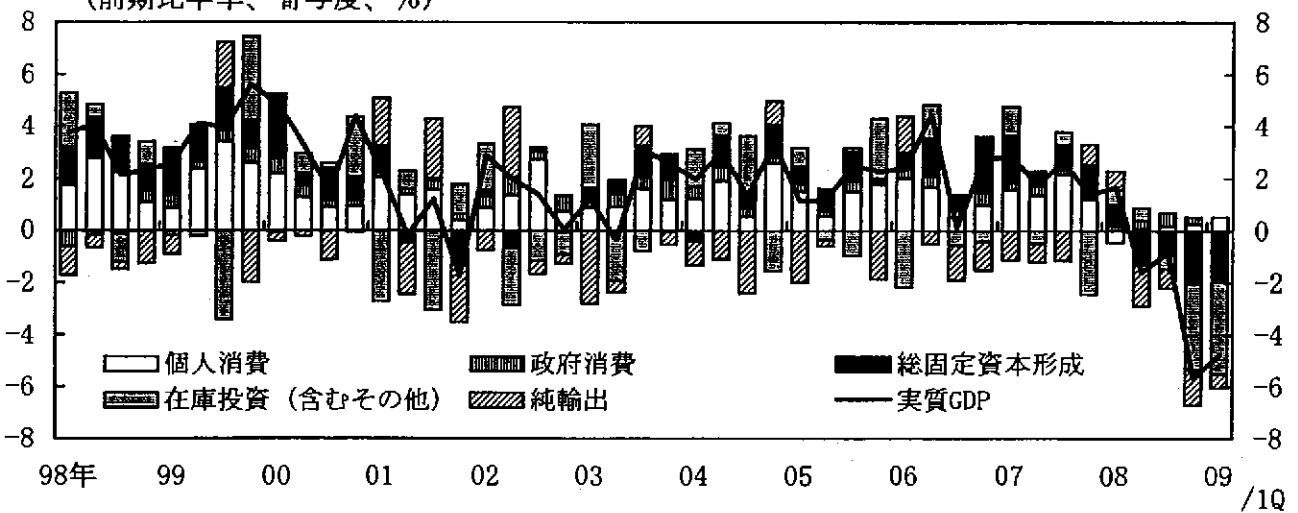
(1) ユーロエリアの実質GDP成長率  
(前期比年率、寄与度、%)



(2) ドイツの実質GDP成長率  
(前期比年率、寄与度、%)

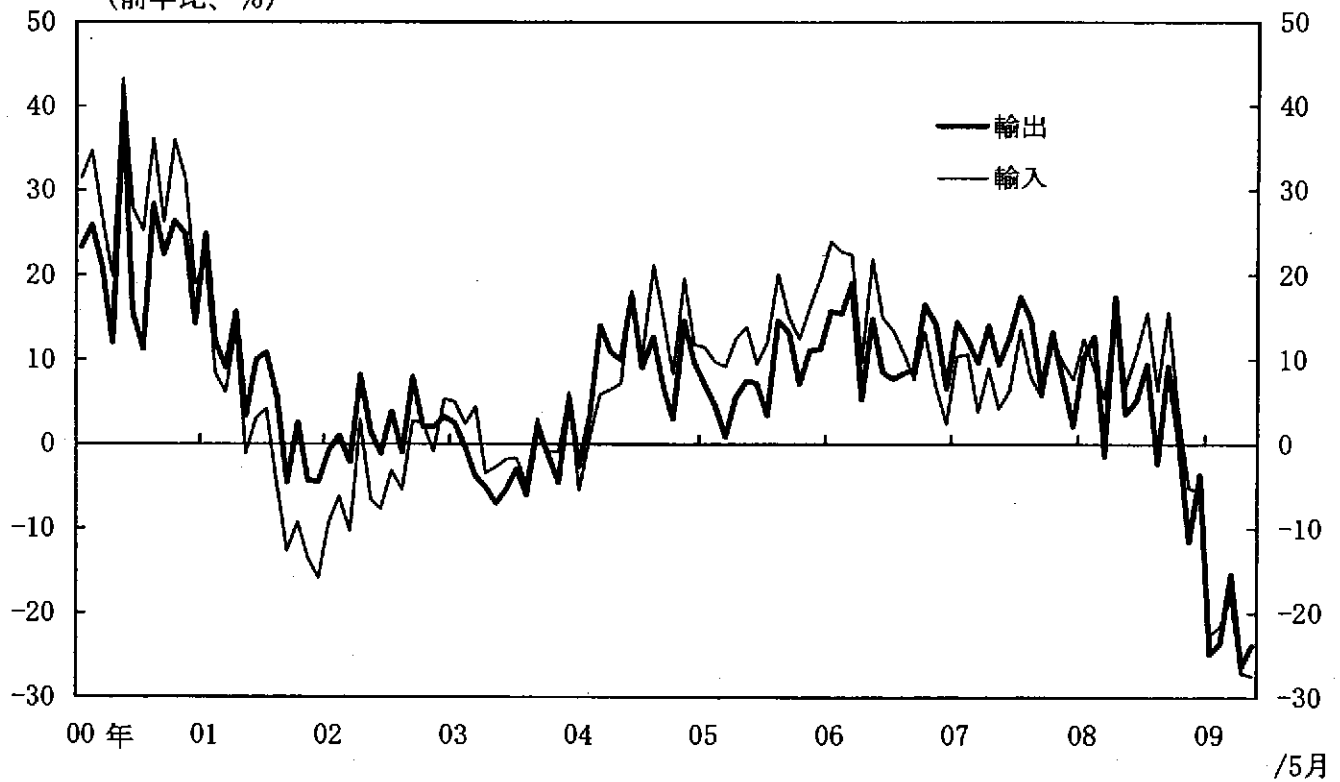


(3) フランスの実質GDP成長率  
(前期比年率、寄与度、%)



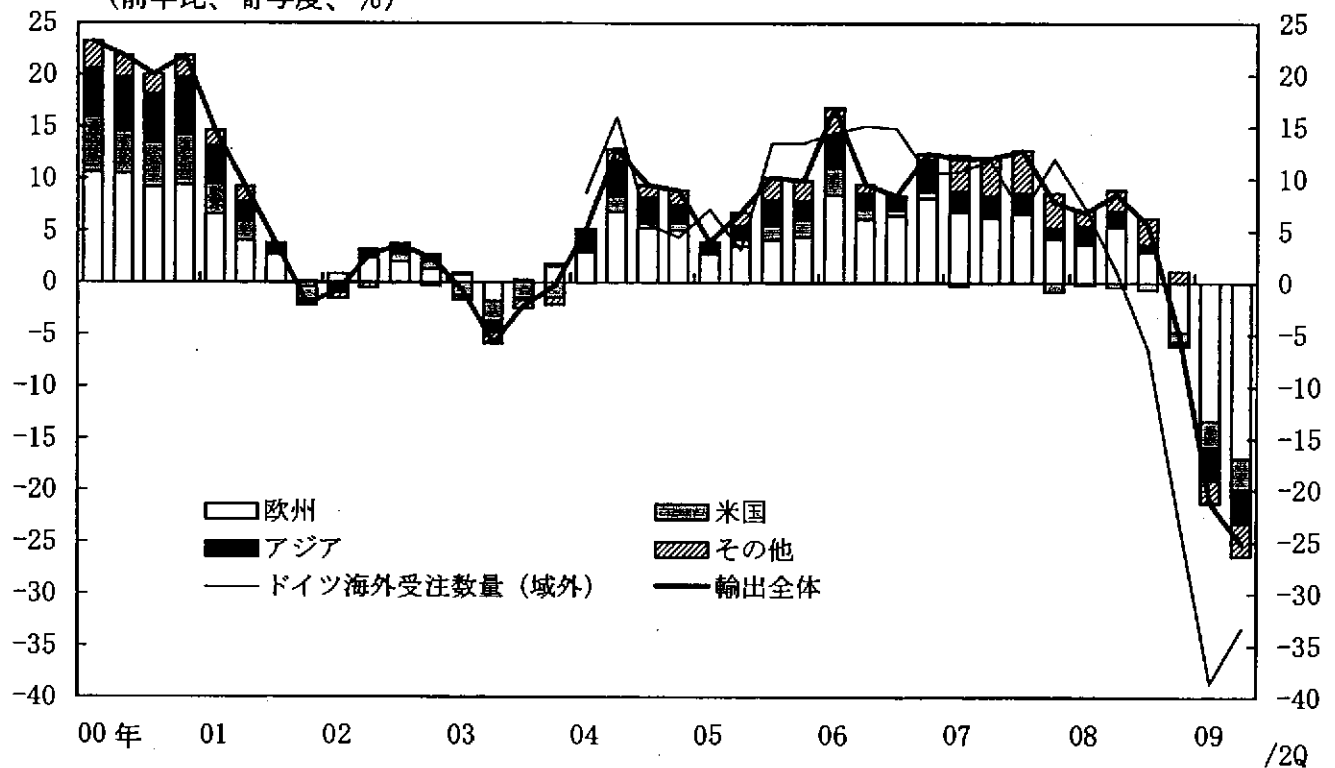
(4) ユーロエリアの域外貿易

(前年比、%)



(5) ユーロエリア域外輸出 (地域別寄与度) とドイツ海外受注数量 (域外)

(前年比、寄与度、%)



(注1) 欧州はトルコ、ロシアなど、アジアは中東などを含む。

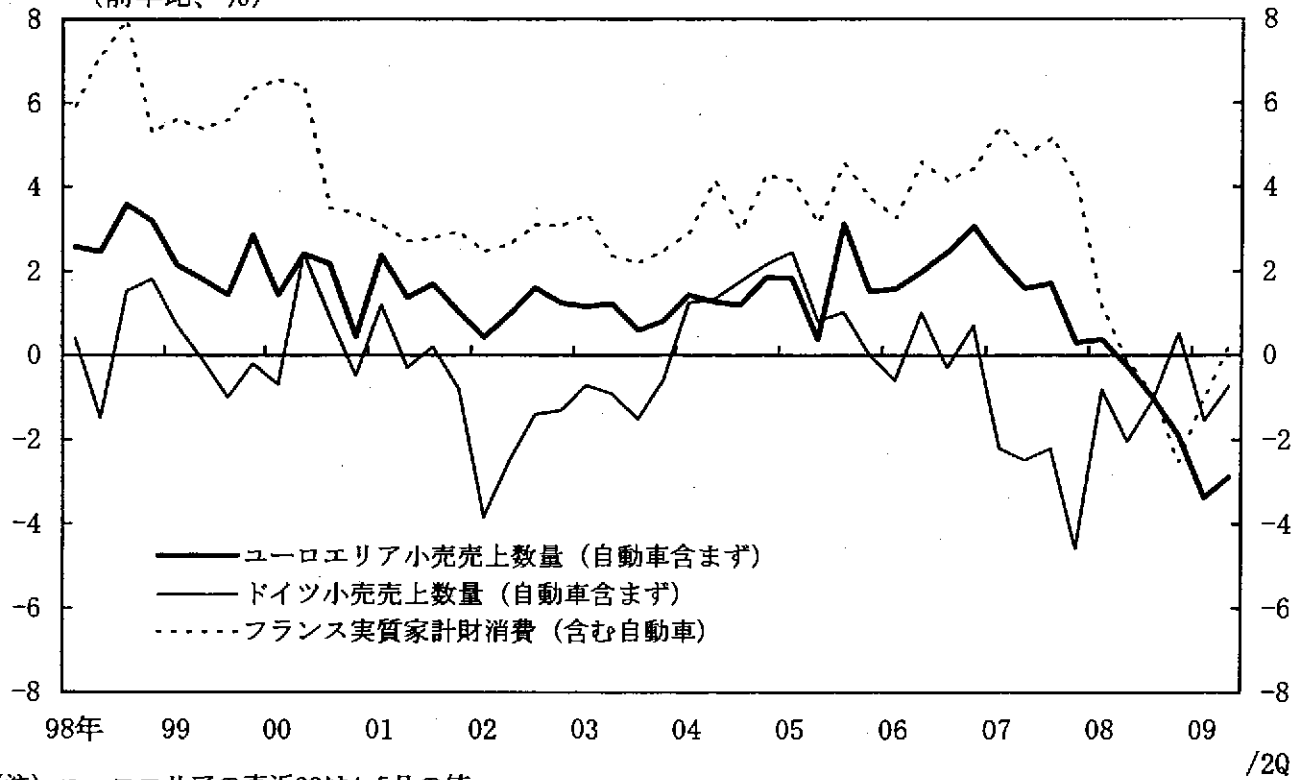
(注2) ドイツ海外受注数量は、2006年1Q以降は2005年基準、それ以前は2000年基準。

(注3) 直近2Qは、ドイツ海外受注数量、輸出全体は4-5月の値。

輸出の地域別寄与度は4月の値であり、積み上げと全体が一致しない。

(6) 小売関連指標

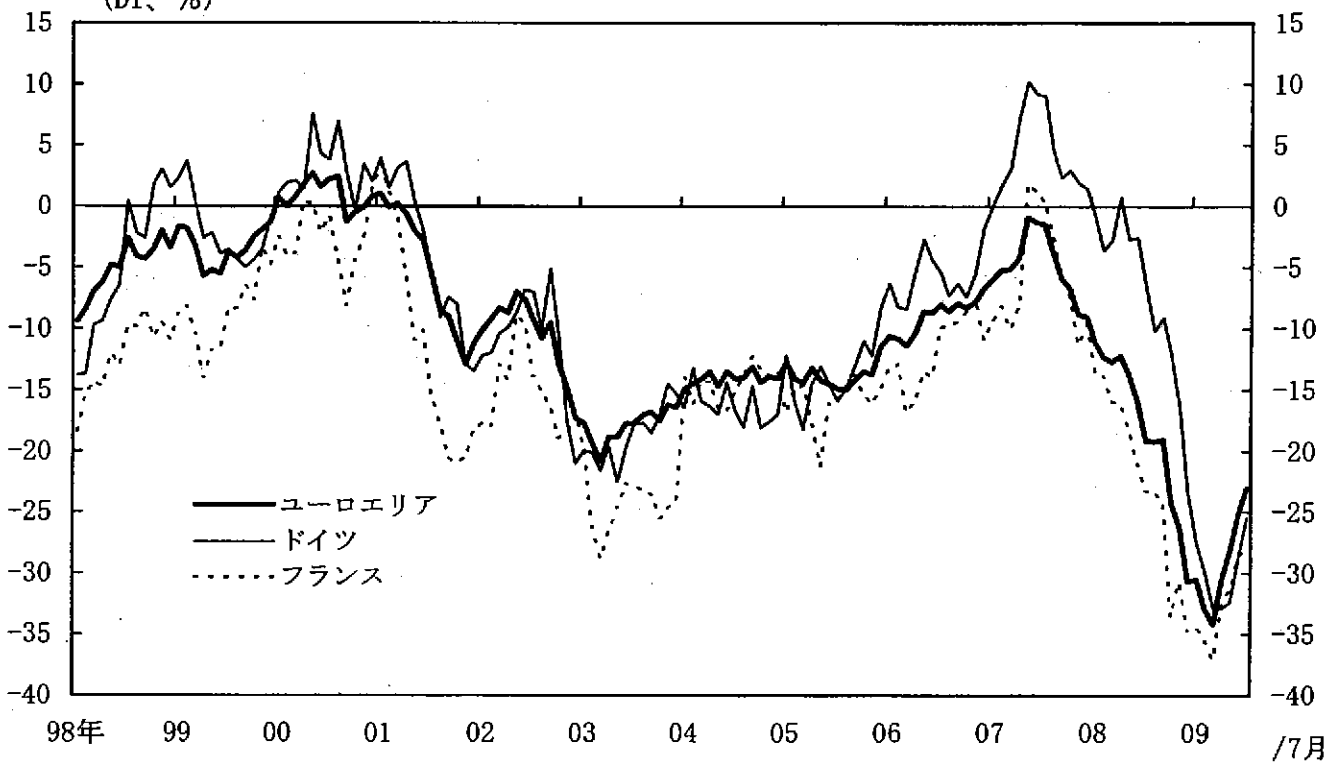
(前年比、%)



(注) ユーロエリアの直近2Qは4-5月の値。

(7) 消費者コンフィデンス

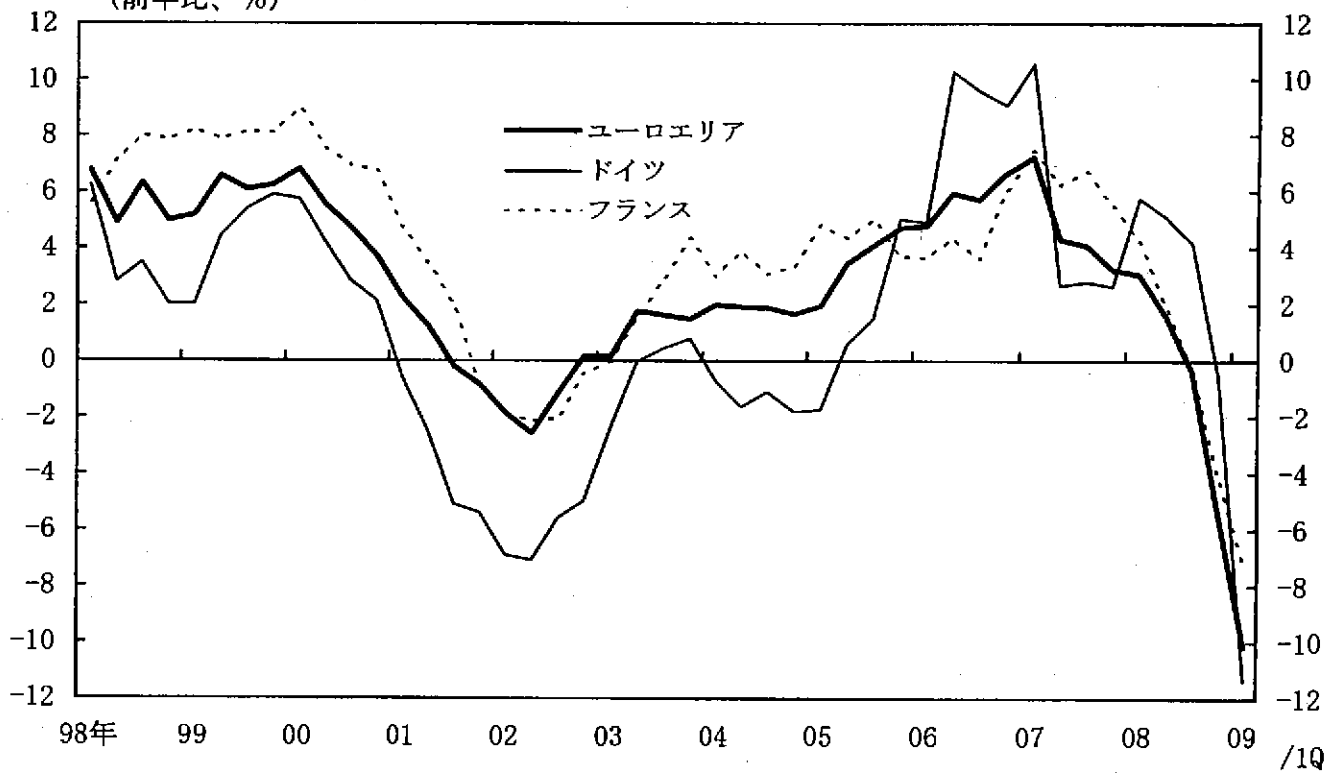
(DI、%)



(注) フランスでの調査方法の変更の影響で、フランス、ユーロエリアの2004年1月以降の計数は2003年12月以前と連続しない。

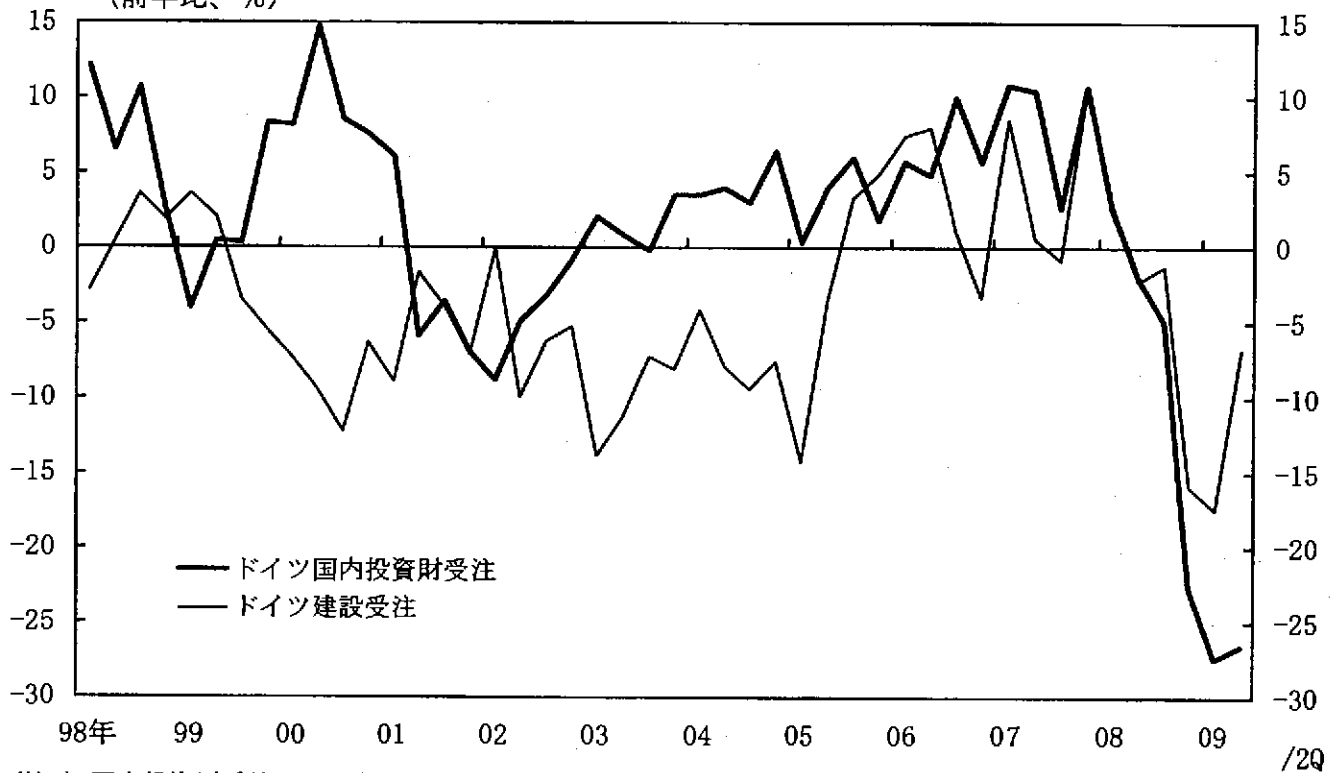
(8) 総固定資本形成

(前年比、%)



(9) ドイツの国内投資財受注、建設受注

(前年比、%)

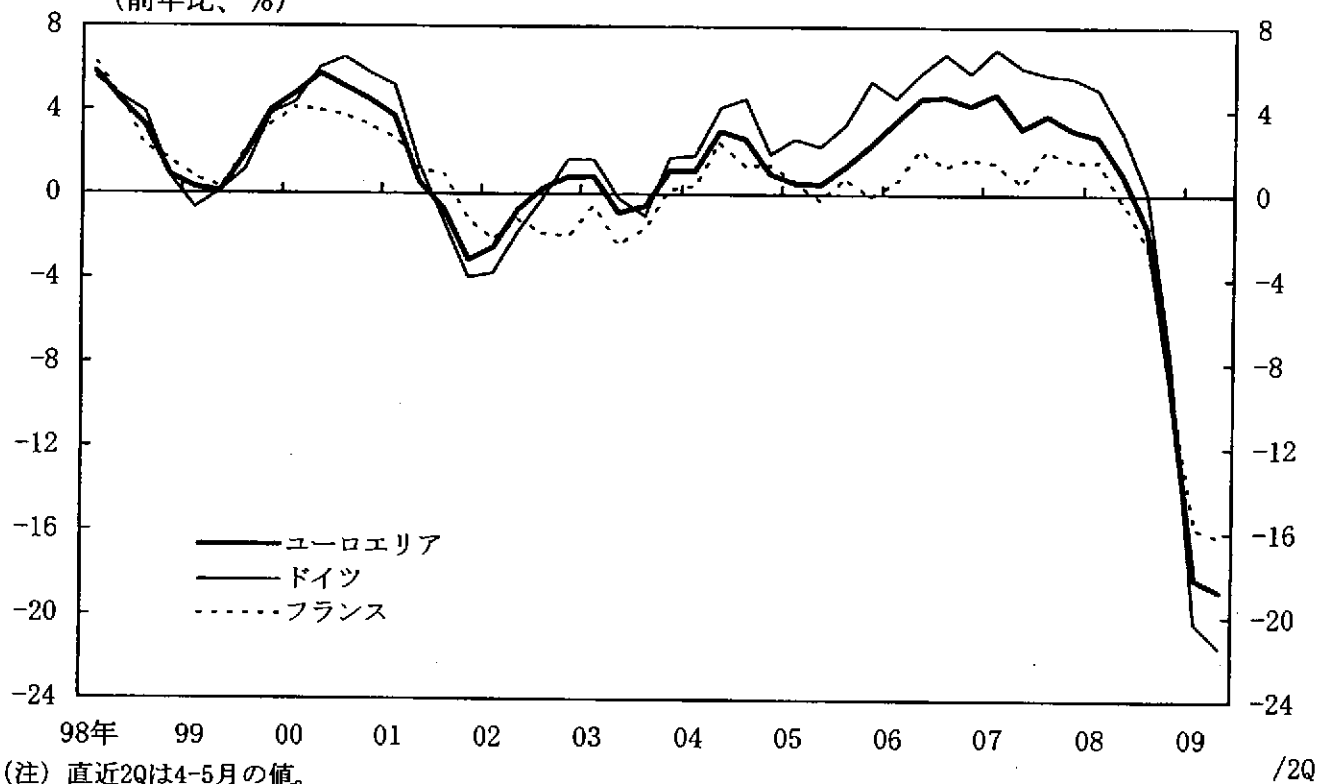


(注1) 国内投資財受注の2005年1Q以降は2005年基準、それ以前は2000年基準。

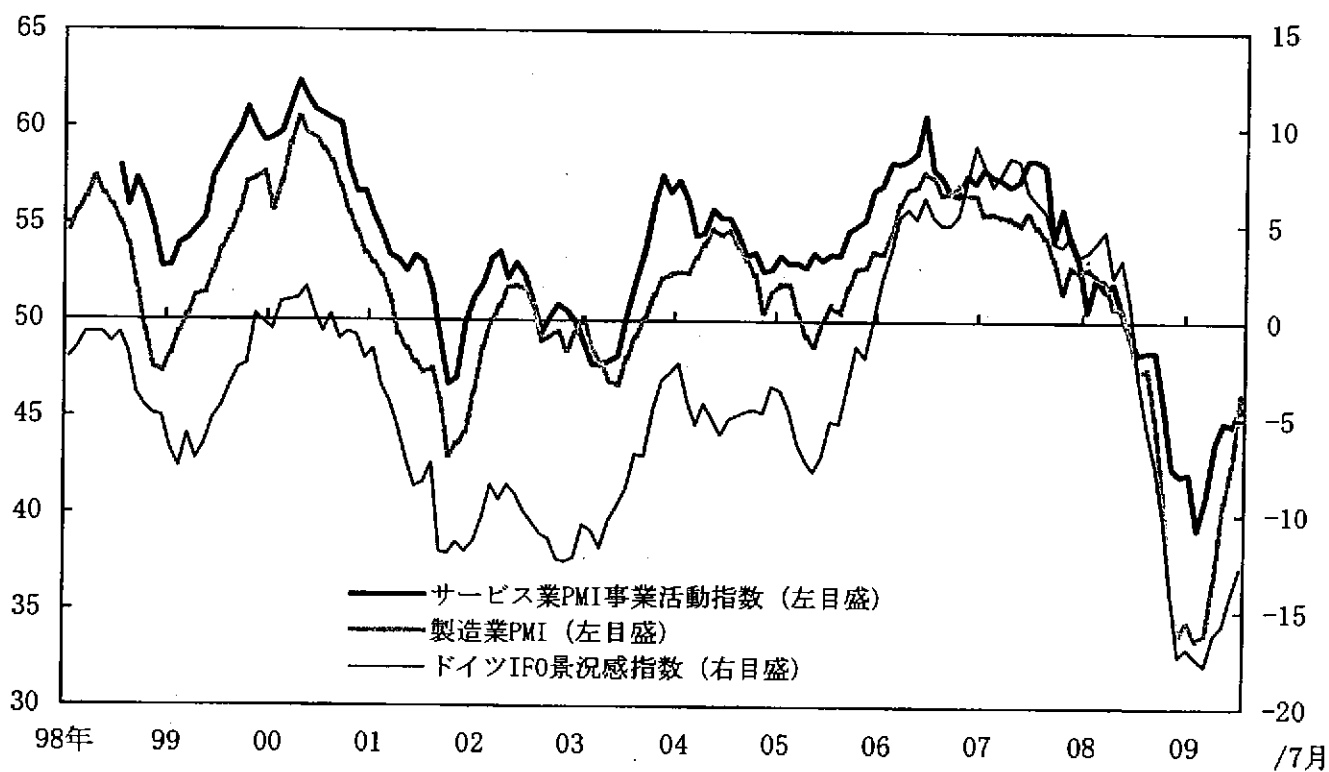
(注2) 直近2Qは4-5月の値。

(10) 鉱工業生産

(前年比、%)



(11) PMI (購買担当者指数) と企業コンフィデンス



(出所) IFO, Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)

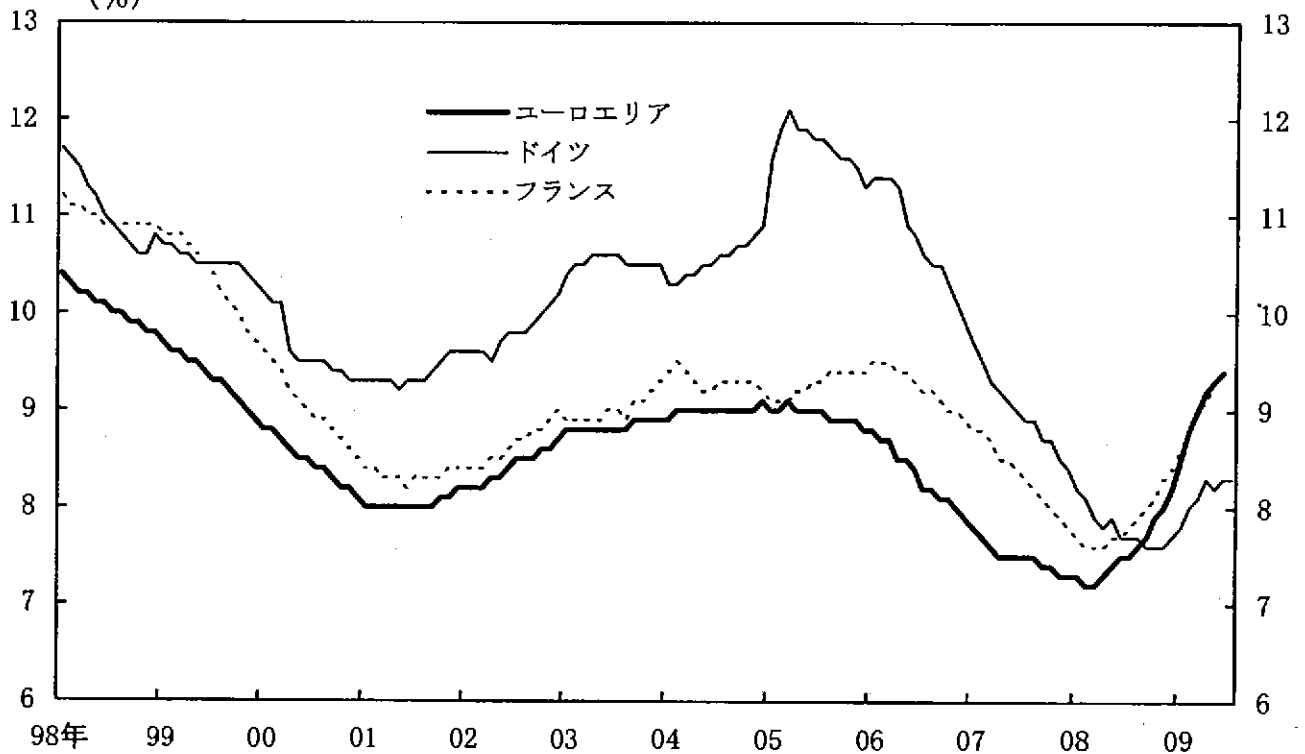
(注1) ドイツIFO景況感指数は、公表系列 (2000年平均=100) から100を引いた計数を使用。

(注2) サービス業PMI事業活動指数の直近7月は速報値。

(図表6-6)

(12) 失業率

(%)

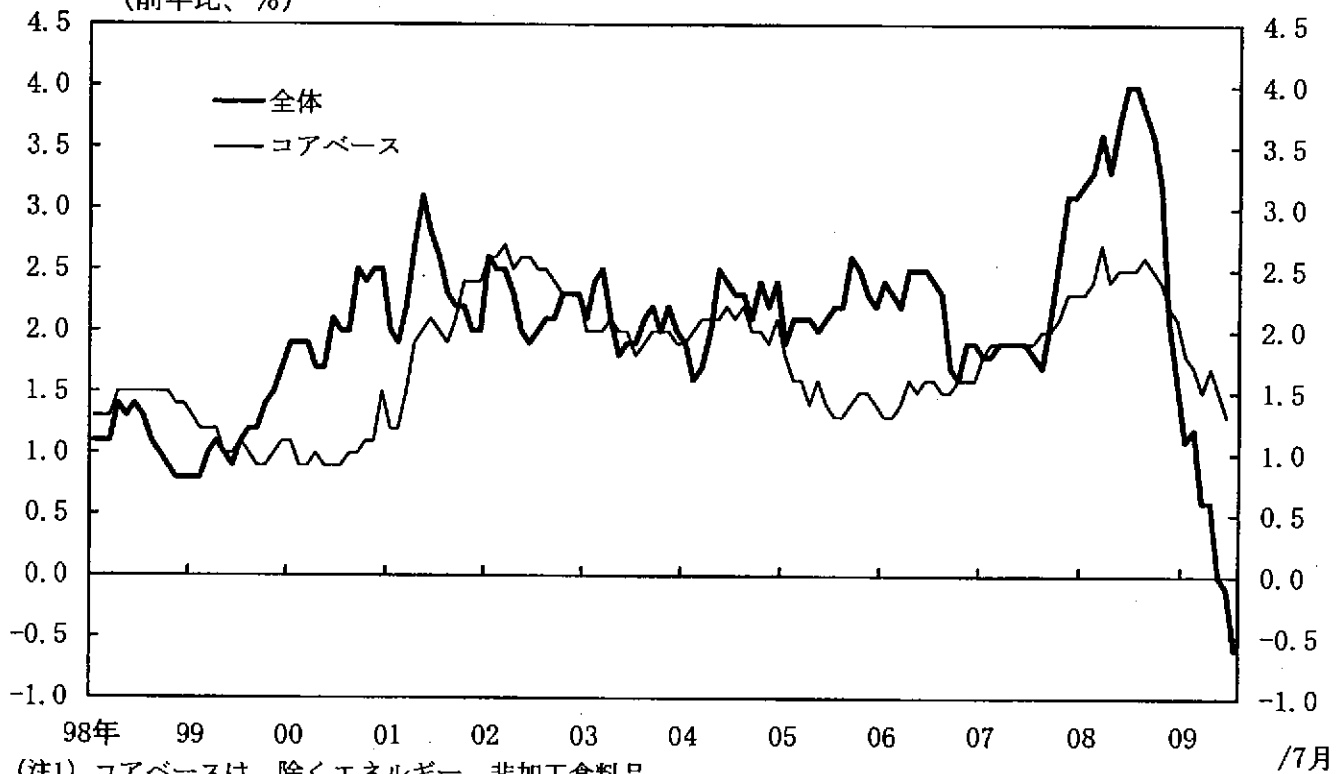


(注) ユーロエリアとフランスの直近は6月。

/7月

(13) 消費者物価 (HICP)

(前年比、%)



(注1) コアベースは、除くエネルギー、非加工食料品。

(注2) コアベースの直近は6月。なお、7月の全体は速報値。

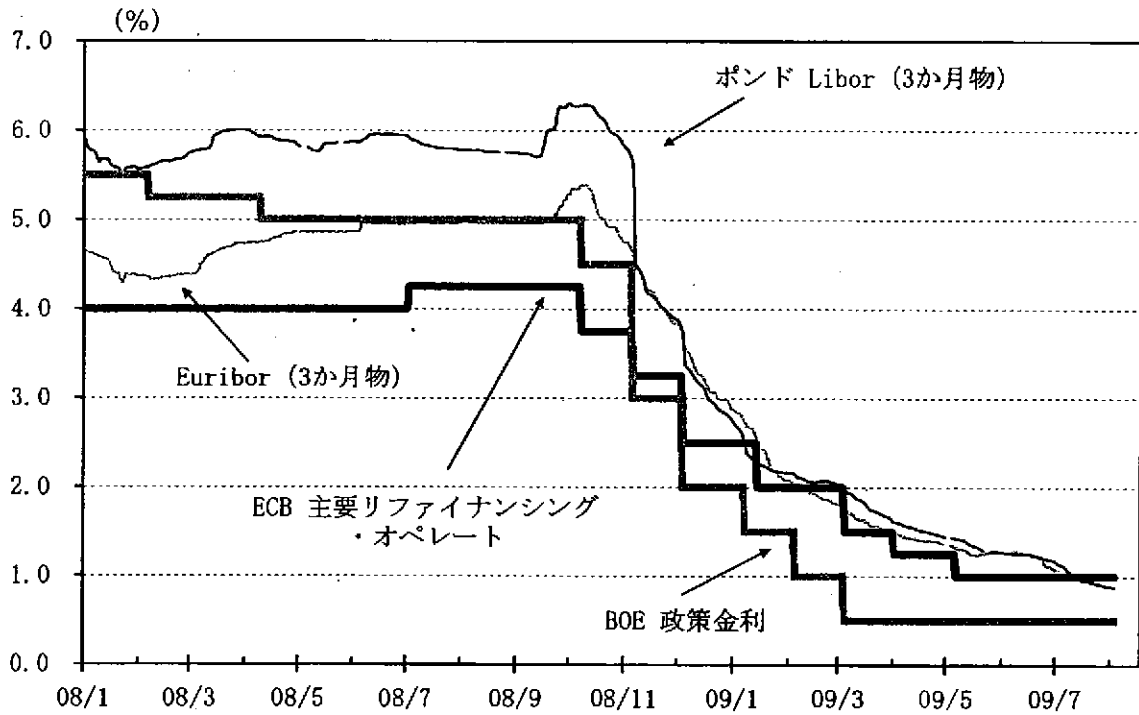
/7月



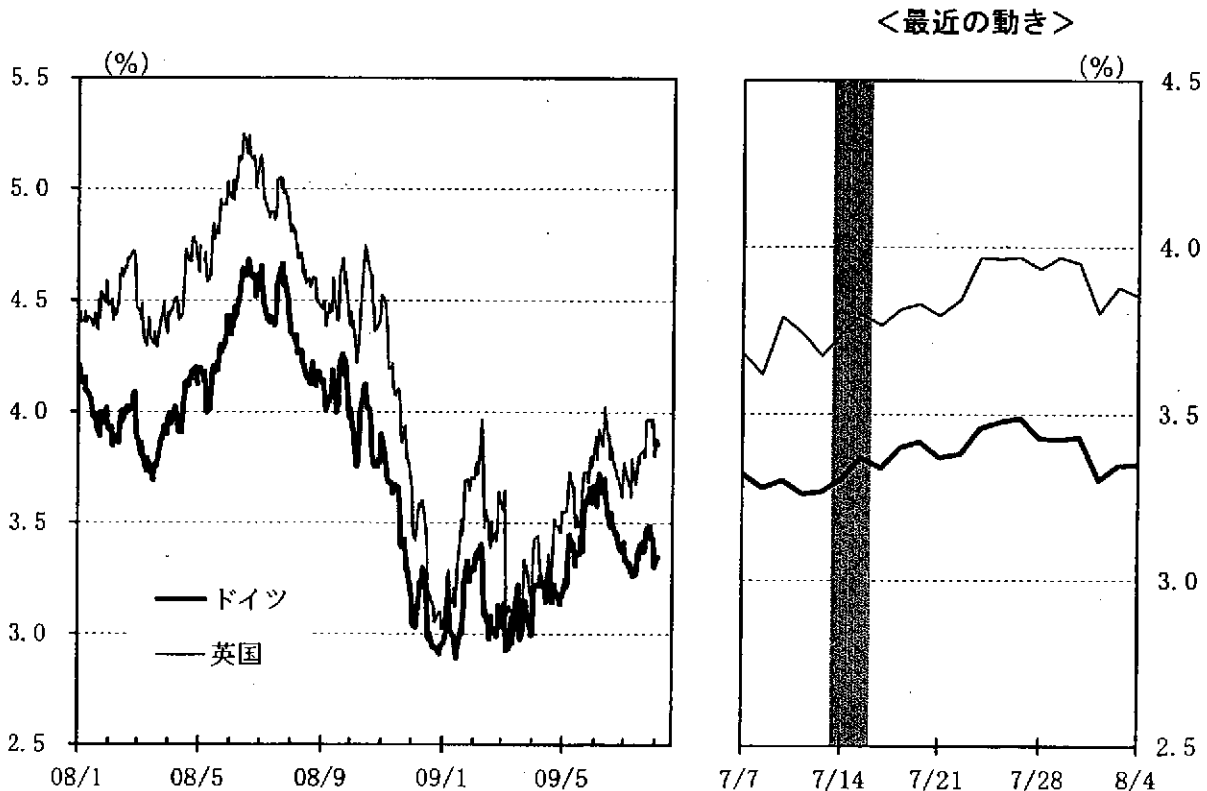
# 欧州の金融市場

## 金利 (欧州)

### (1) 政策金利・短期金利 (ユーロエリア・英)



### (2) 長期金利 (10年物国債利回り、独・英)



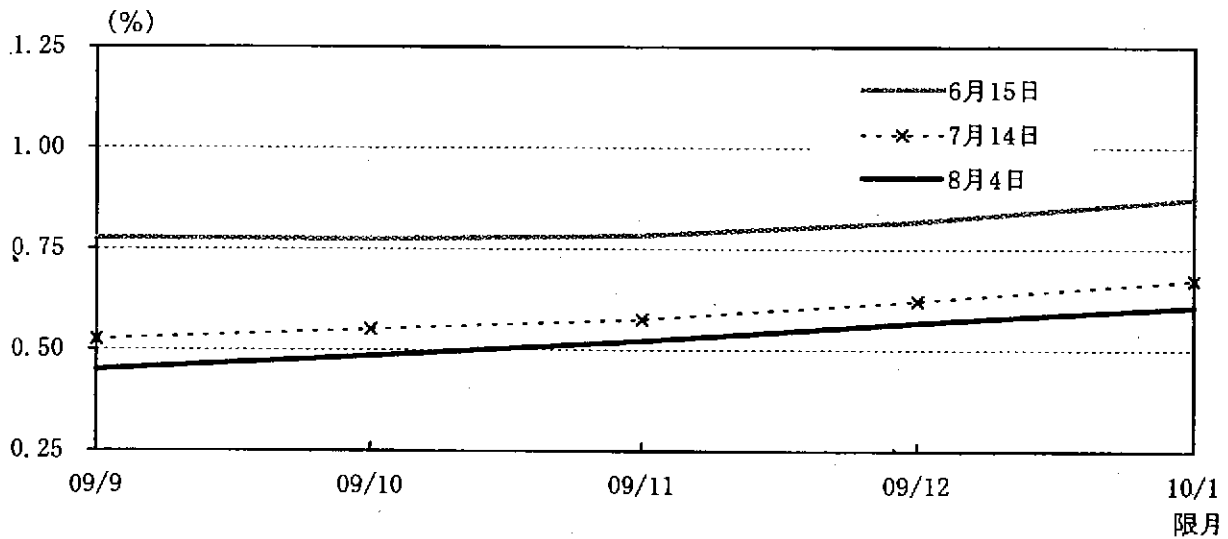
(注) シャドーは前回会合。

(出所) Bloomberg

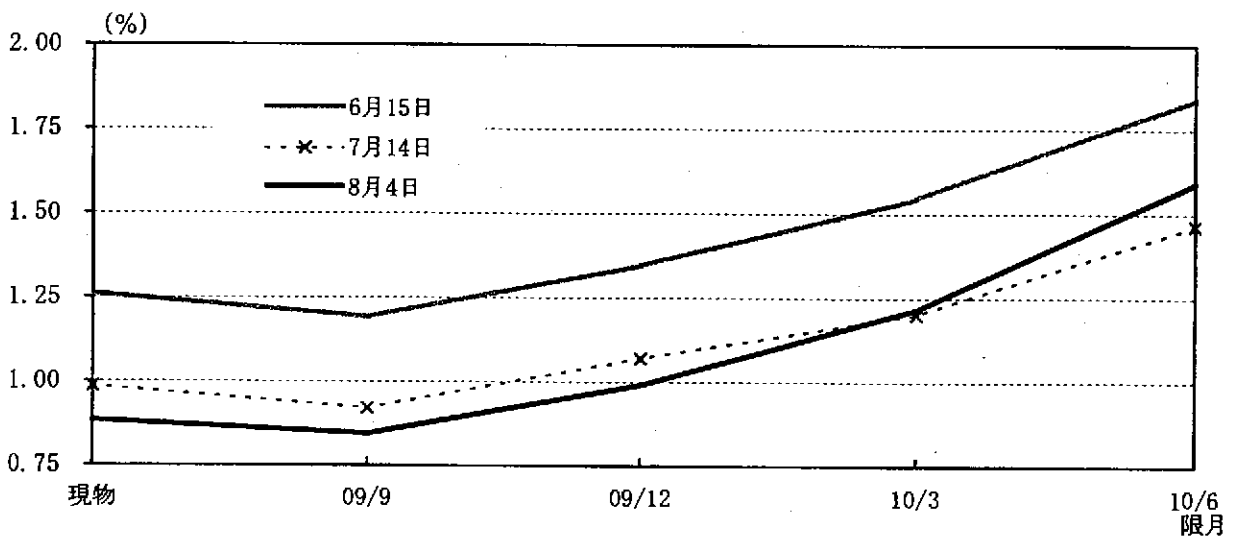
いずれも直近は8月4日

### 先行きの金利観 (ユーロエリア)

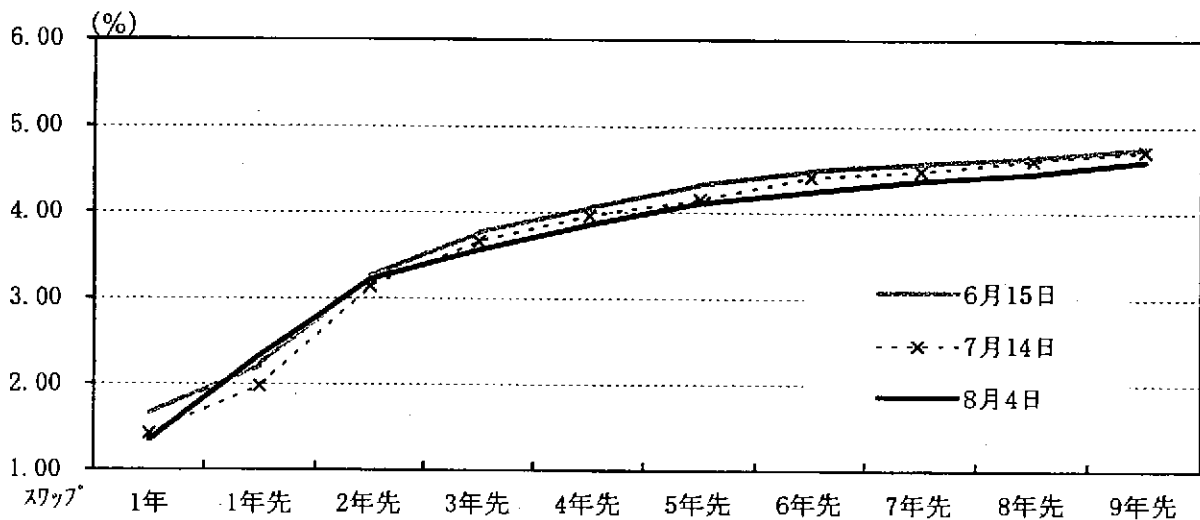
(1) EONIAスワップのインプライド・フォワード・レート (1か月物)



(2) Euribor先物金利 (3か月物)



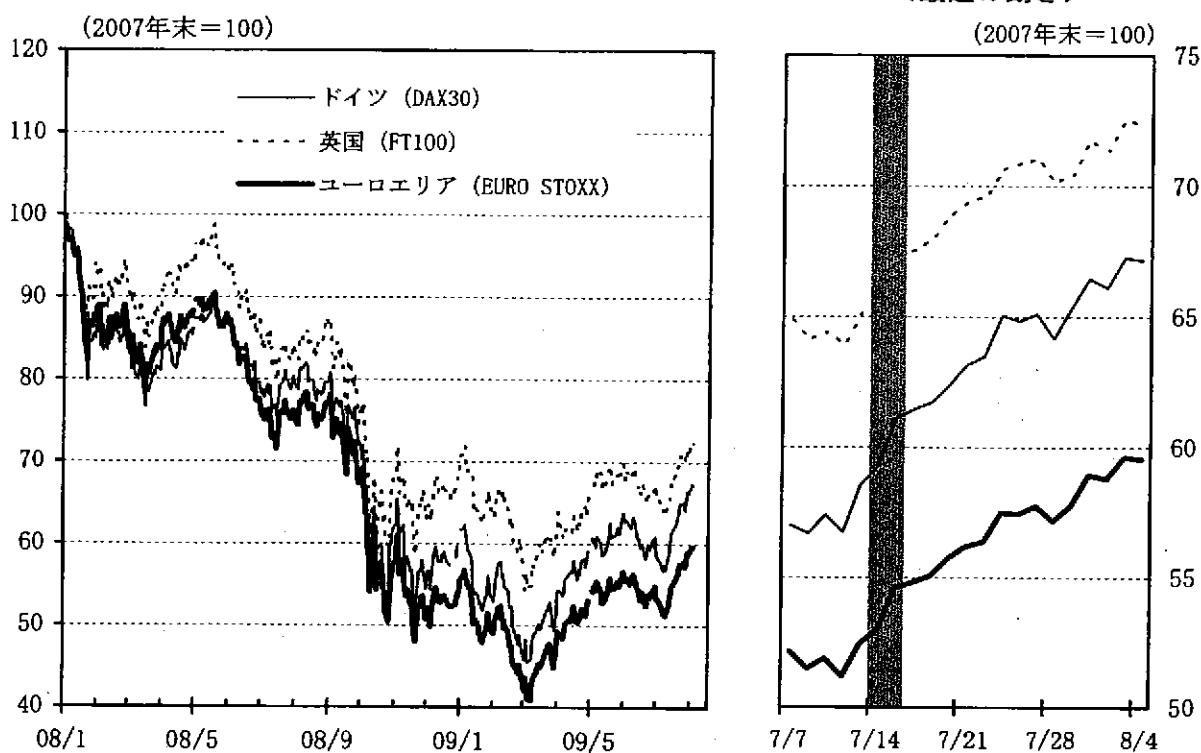
(3) インプライド・フォワード・レート (ユーロ・スワップ、1年物)



(出所) Bloomberg

### 株価 (欧州)

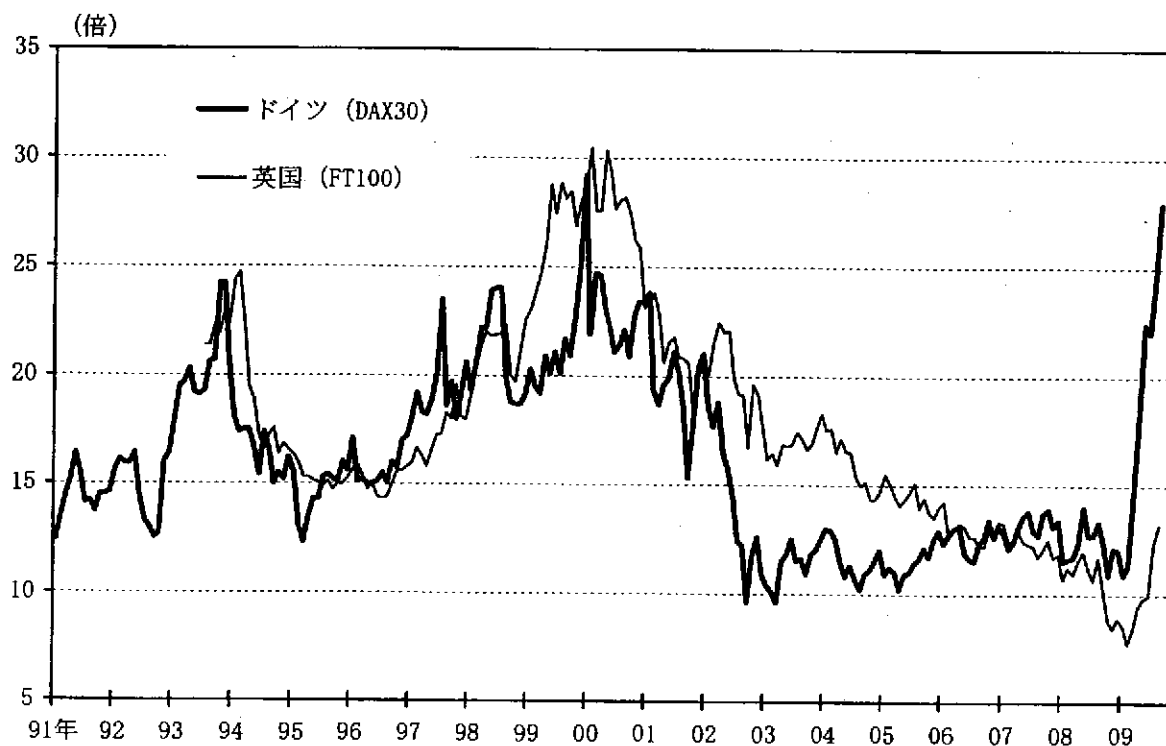
#### (1) 株価 (ユーロエリア・独・英)



(注) シャドーは前回会合。

(出所) Bloomberg

#### (2) 株価収益率 (PER、DAX30・FT100)



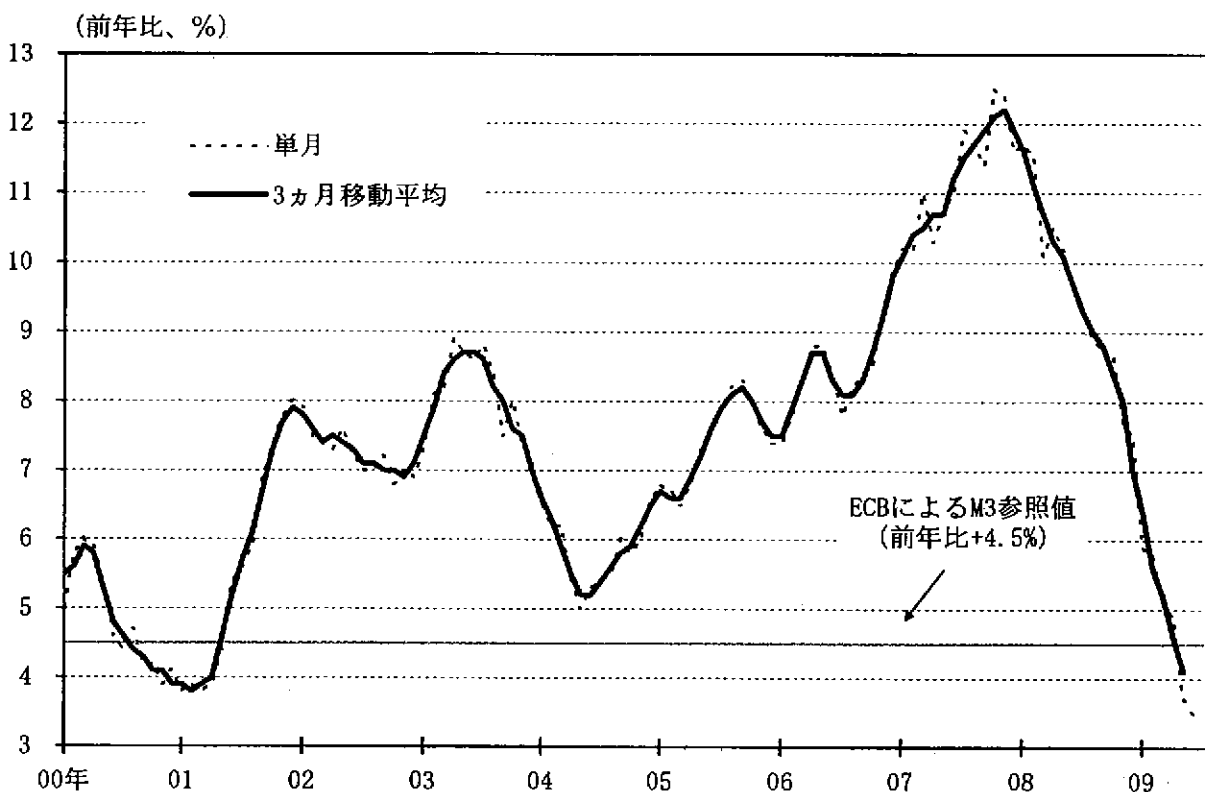
(注) DAX30のPERは予想収益ベース、FT100のPERは実績収益ベース。

(出所) Thomson Reuters Datastream

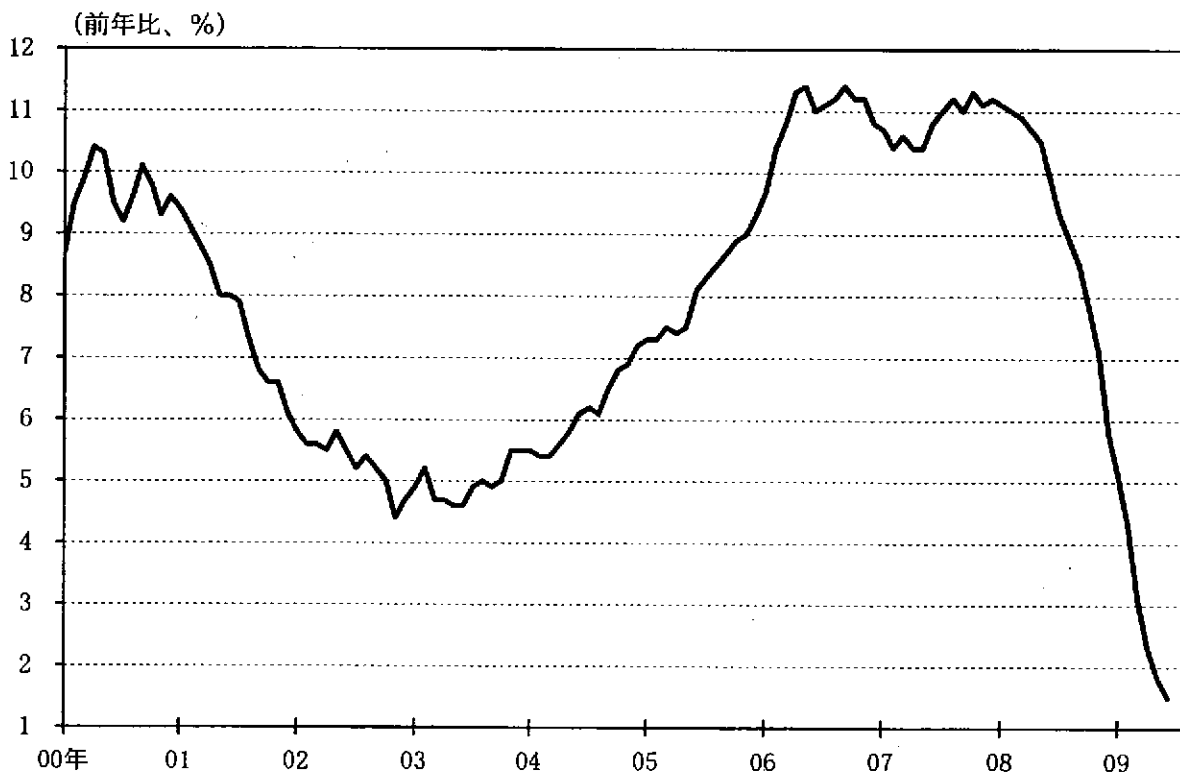
いずれも直近は8月4日

### M3・貸出 (ユーロエリア)

#### (1) M3伸び率



#### (2) 対民間貸出伸び率



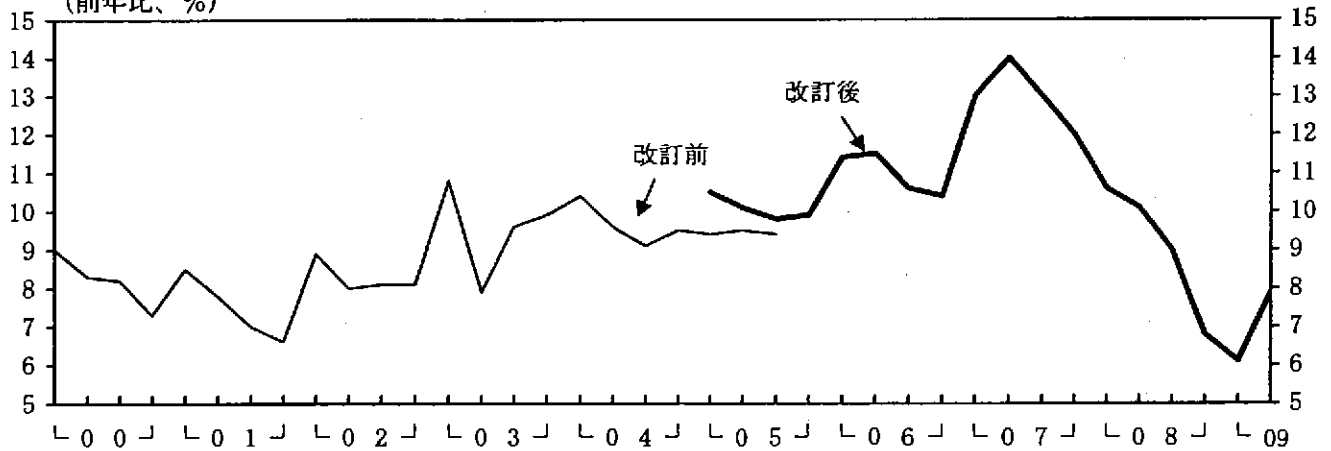
(出所) ECB

いずれも直近は6月

### アジア諸国・地域の実体経済 中国(1)

#### (1) 実質GDP

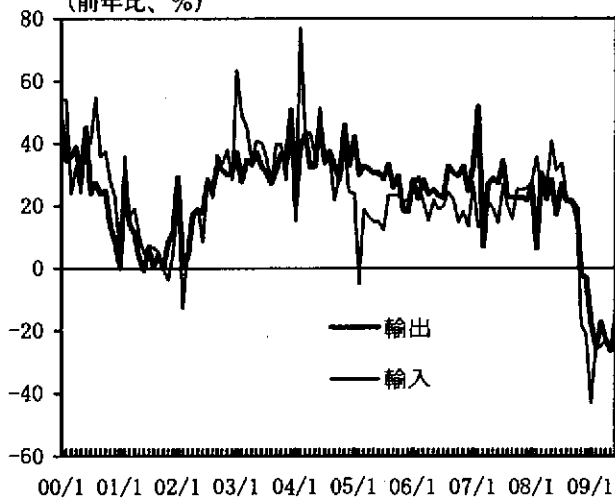
(前年比、%)



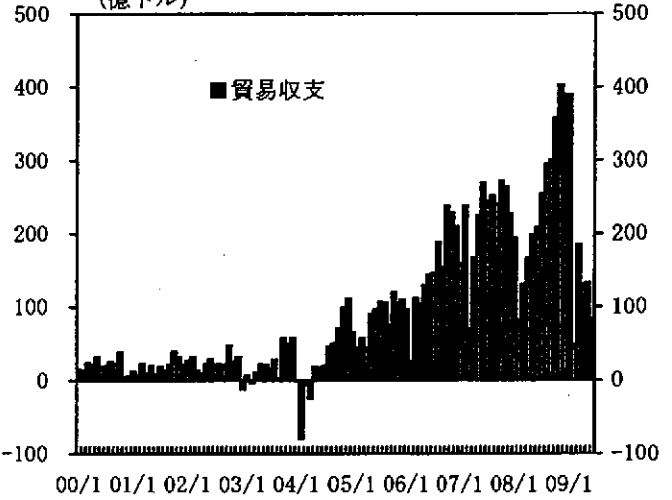
直近: 2Q

#### (2) 貿易

(前年比、%)



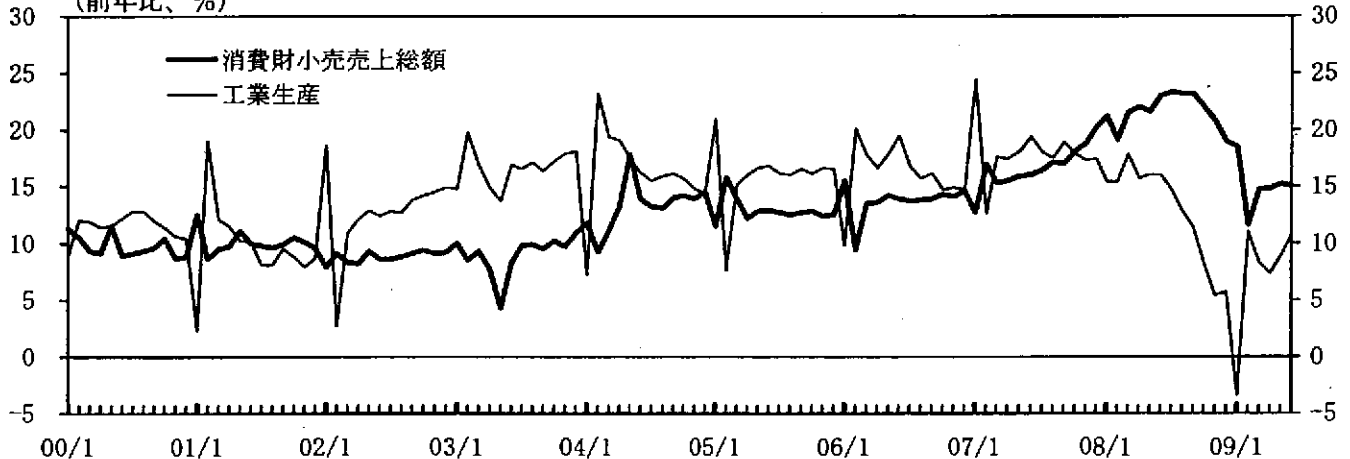
(億ドル)



直近: 6月

#### (3) 生産、個人消費

(前年比、%)



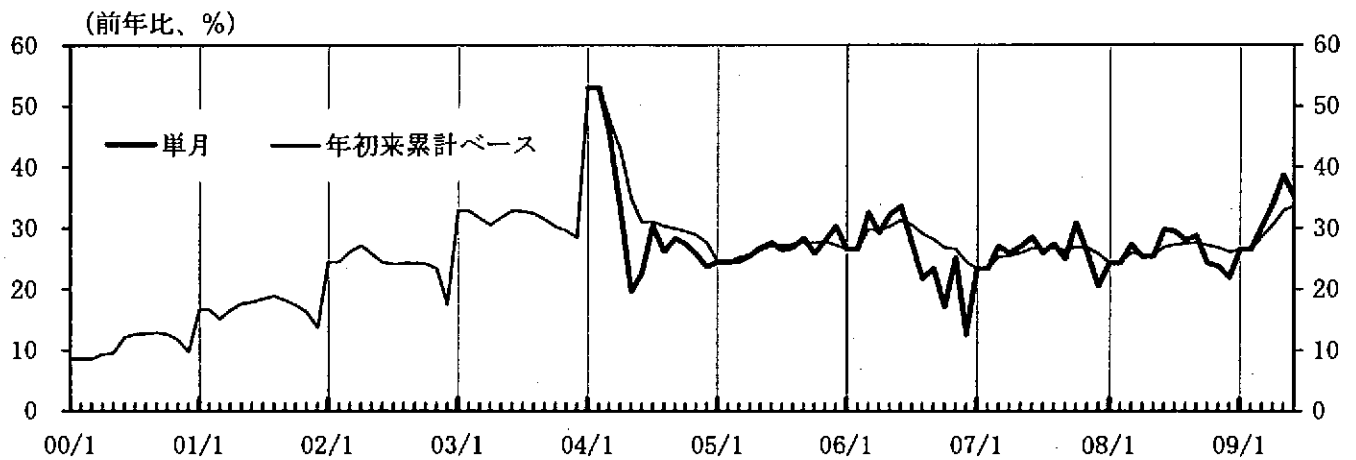
(注1) 1、2月の工業生産が大きく変動しているのは、旧正月要因。

直近: 6月

(注2) 工業生産の2007年以降の1月は、中国国家統計局が公表する1-2月累計値の前年比伸び率と2月の前年比伸び率を用いて当局で試算。

## 中国(2)

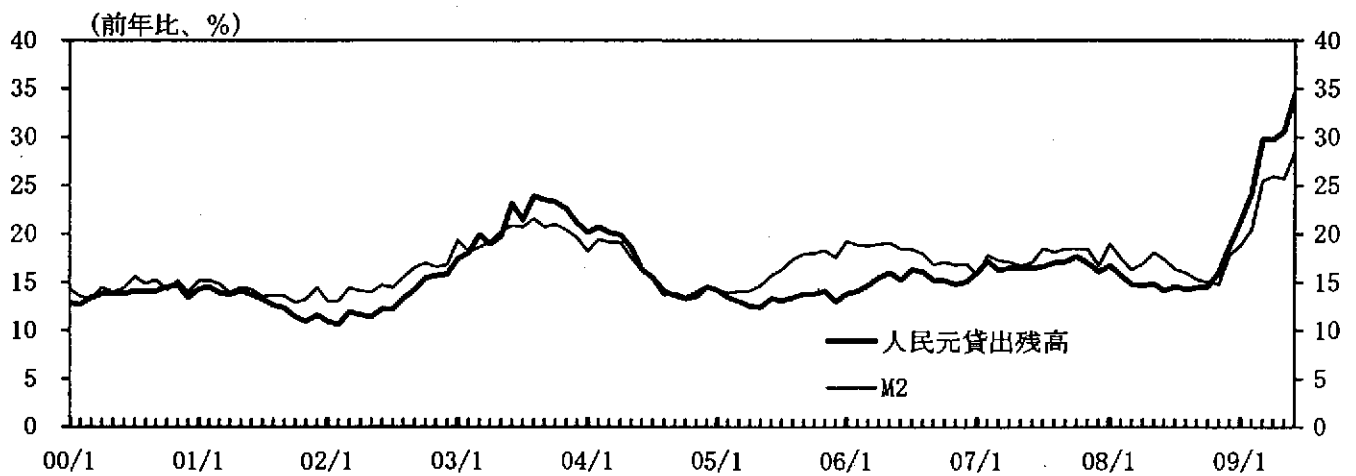
### (1) 固定資産投資



直近：6月

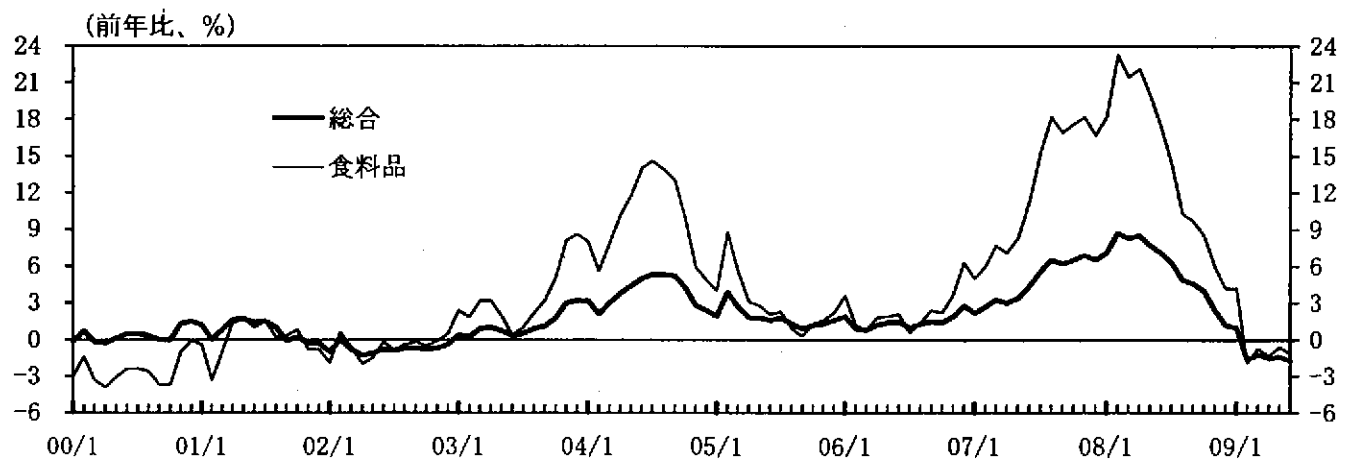
(注) 固定資産投資は、都市部。2003年までは、不動産開発を除き、都市部及び農村部の集団所有制企業と個人による投資を除外している。2004年以降は、都市部における50万元以上の全ての投資、不動産開発投資、都市の鉱工業区における民間住宅建設を含む。なお、1月単月の数値は公表されていないため、1~2月は等速と仮定している。

### (2) M2と貸出



直近：6月

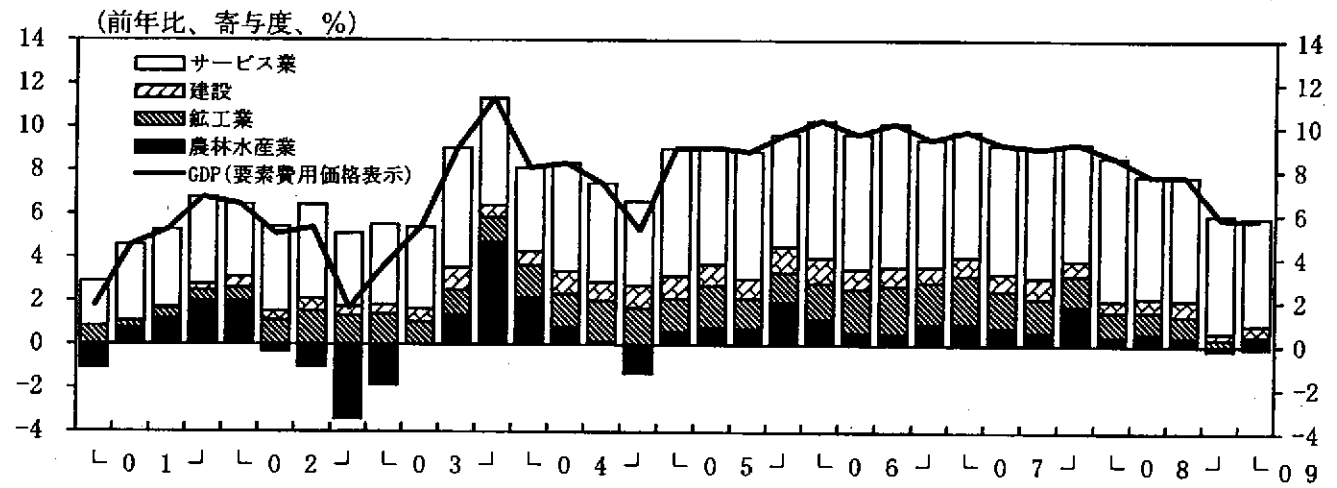
### (3) 消費者物価



直近：6月

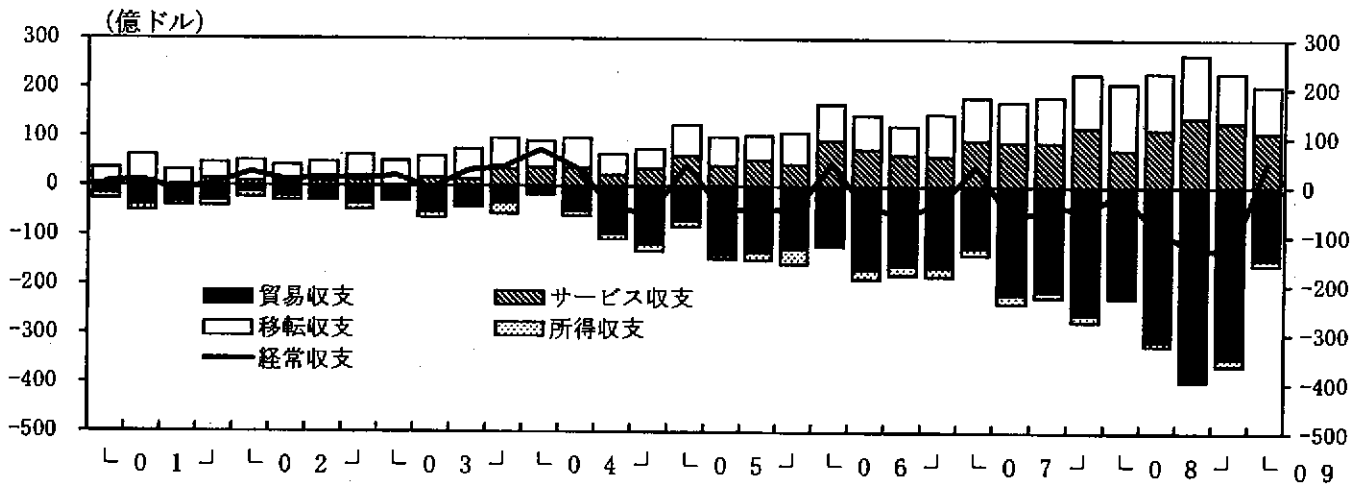
# インド

## (1) 実質GDP (産業別寄与度)



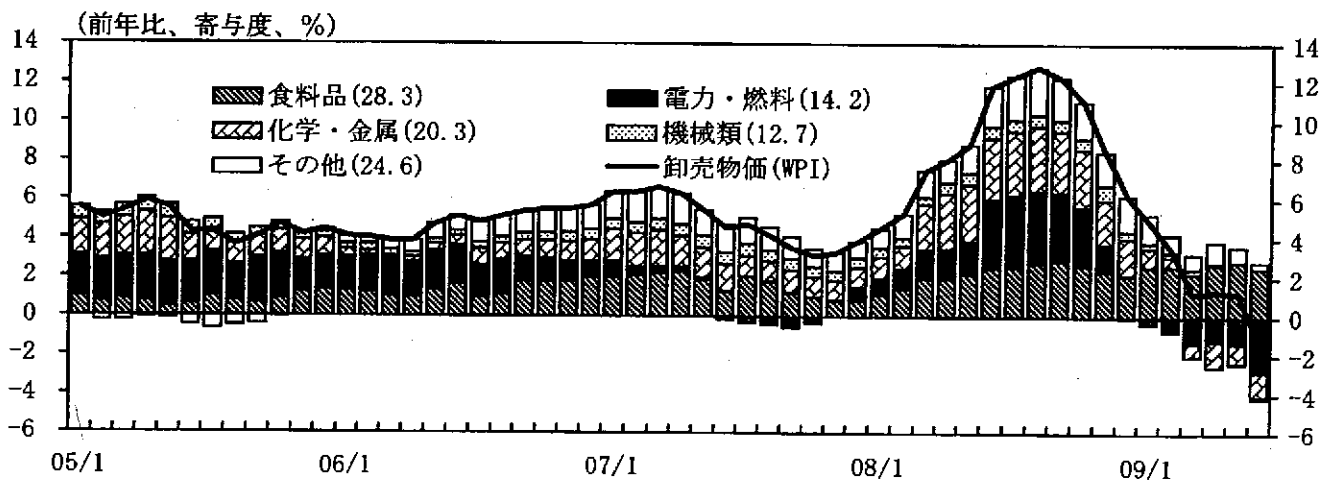
直近：1Q

## (2) 経常収支



直近：1Q

## (3) 卸売物価 (WPI)

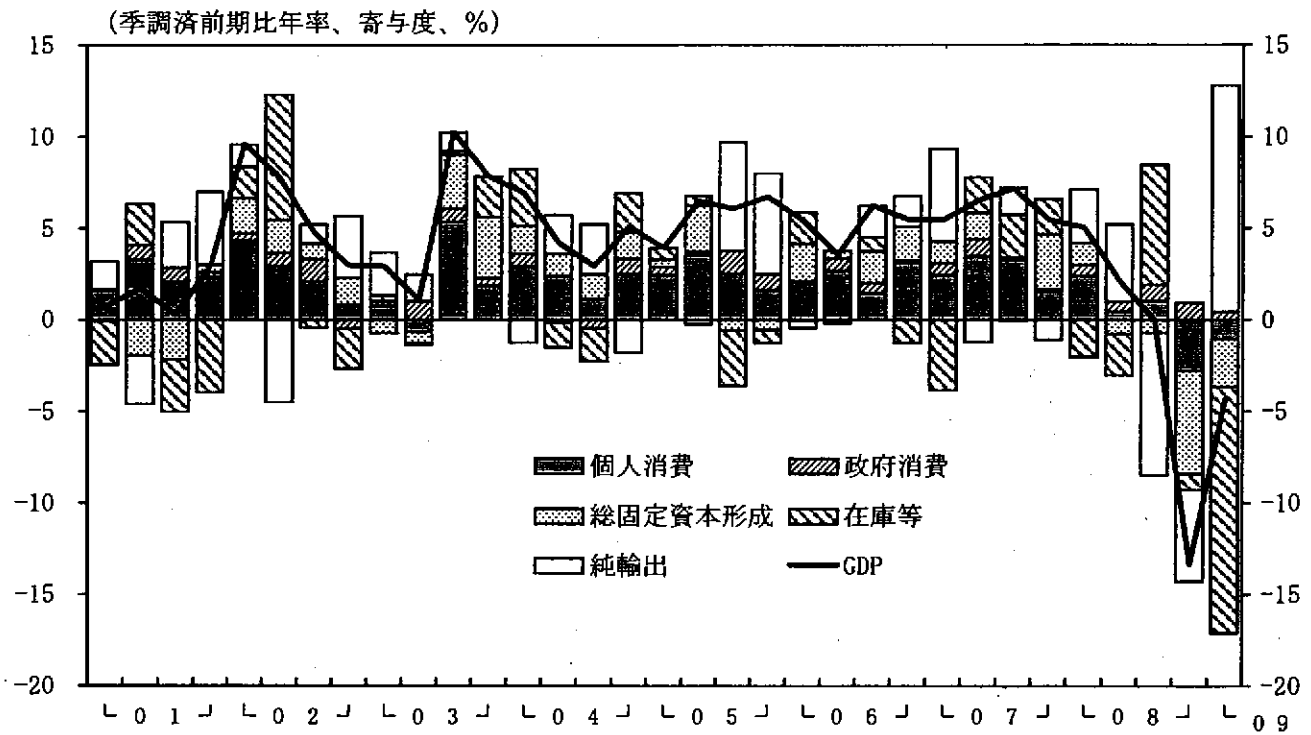


(注) 食料品には加工食品、飲料・タバコを含む。カッコ内はウェイト。

直近：6月

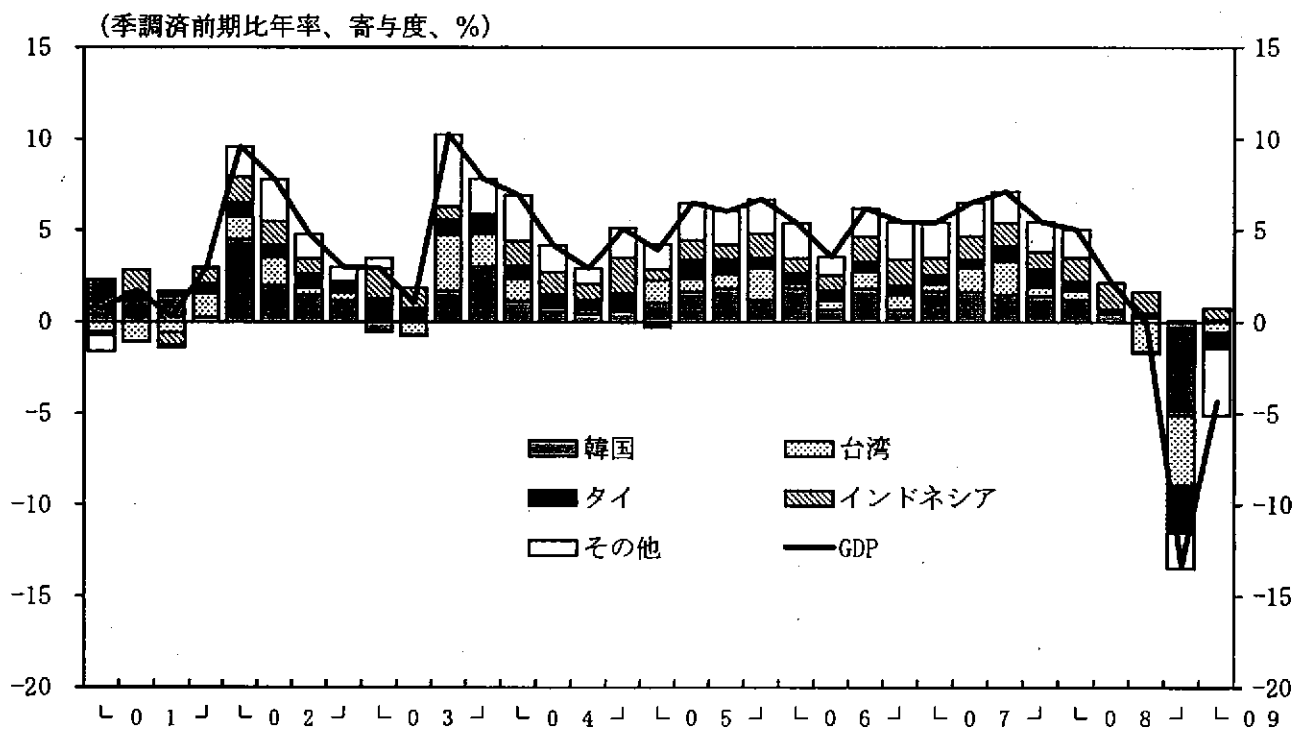
### NIEs、ASEAN諸国・地域の実質GDP成長率

#### (1) NIEs、ASEAN (需要項目別寄与度)



直近: 1Q

#### (2) NIEs、ASEAN (国・地域別寄与度)



直近: 1Q

(注1) 全体の前期比年率は、各国・地域の季調済前期比年率を購買力平価換算 (IMF算出) によるGDPウェイトで加重平均した値。

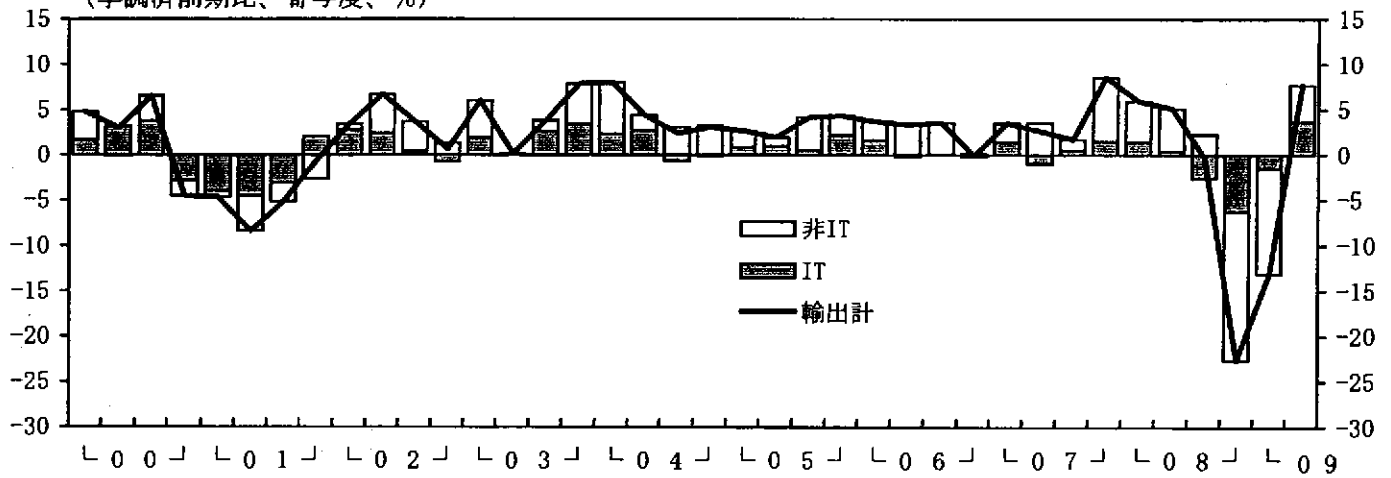
(注2) 図表(1)の在庫等には、統計誤差を含む。



### NIEs、ASEAN諸国・地域の輸出合成指数 (NIEs4・ASEAN4)

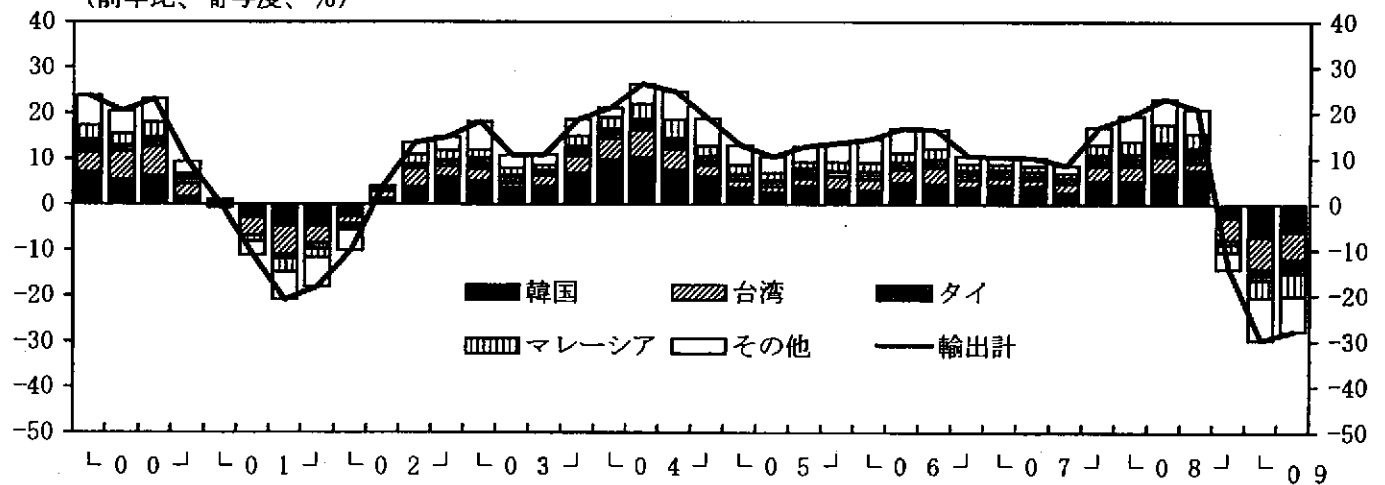
#### (1) 輸出全体 (前期比)

(季調済前期比、寄与度、%)



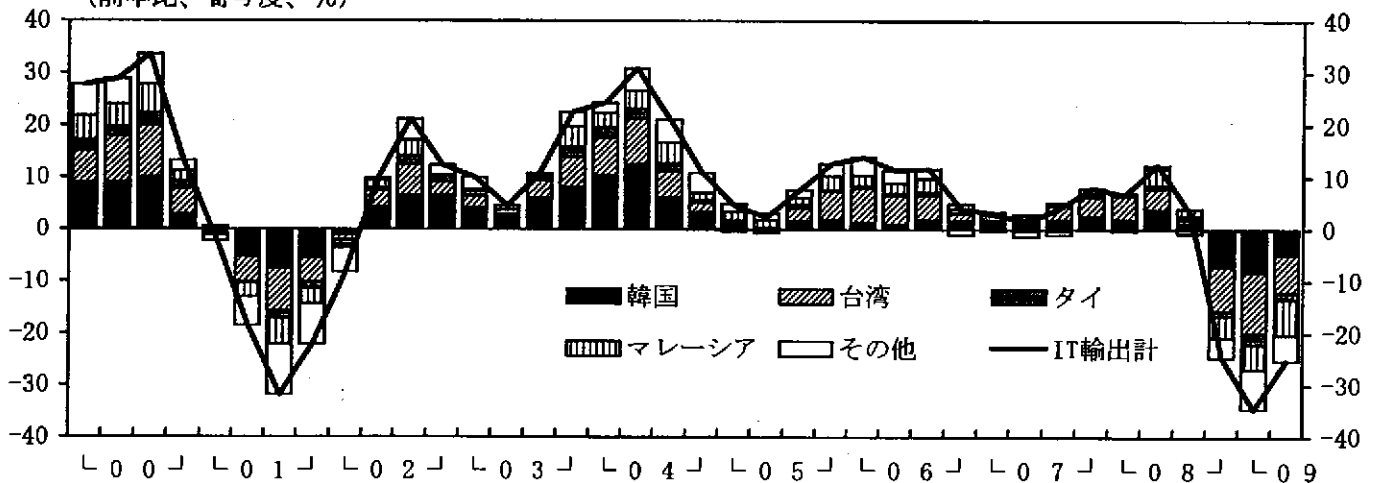
#### (2) 輸出全体 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



#### (3) IT関連輸出 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(注1) 直近2Qは、4~6月の値。なお、直近月まで公表されていないデータに関しては、前月の前年比で横置きしている。

(注2) NIEs4は、韓国、台湾、シンガポール、香港、ASEAN4は、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン。

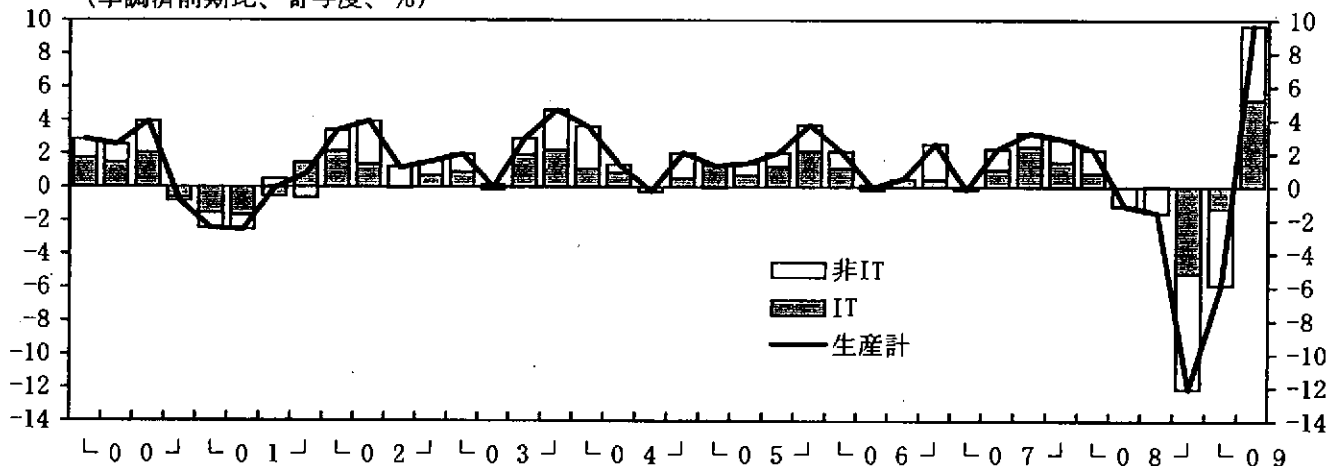
(注3) 季調済前期比は、X-12-ARIMAによる。IT輸出の寄与度は、X-12-ARIMAによる季調済のIT輸出金額を用いて算出し、非ITは輸出全体からIT輸出の寄与度を差し引いて算出した。

(注4) 全て金額ベース。

### NIEs、ASEAN諸国・地域の生産合成指数 (NIEs3・ASEAN3)

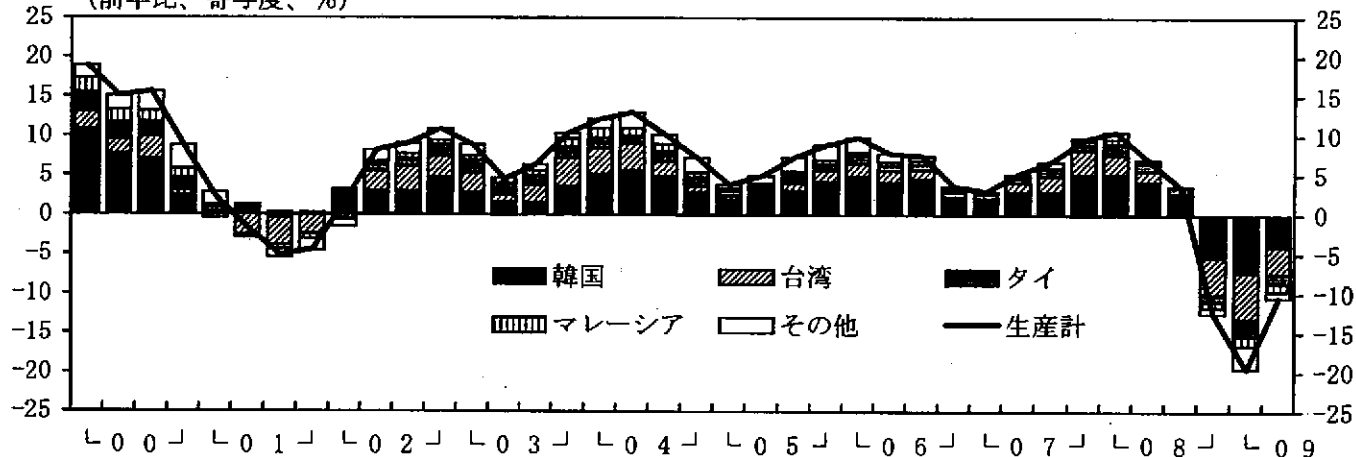
#### (1) 生産全体 (前期比)

(季調済前期比、寄与度、%)



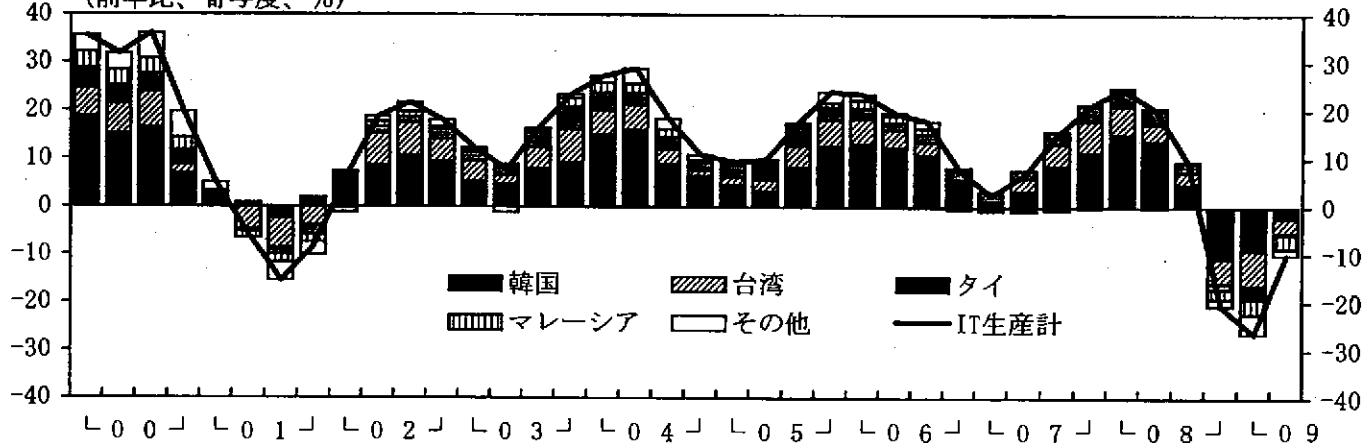
#### (2) 生産全体 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



#### (3) IT関連生産 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(注1) 直近2Qは、4～5月の値。なお、直近月まで公表されていないデータに関しては、未季調値は前月の前年比、季調値は前月の値で横置きしている。

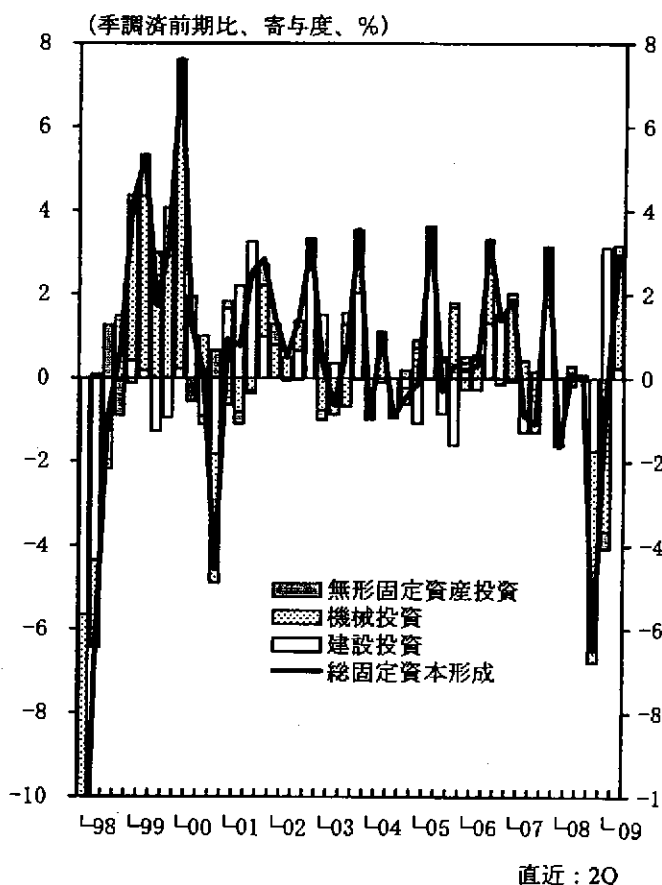
(注2) NIEs3は、韓国、台湾、シンガポール、ASEAN3は、タイ、マレーシア、フィリピン。

(注3) 全体の前期比は、各国・地域の季調済前期比を名目GDPウエイト(ドル建名目GDPの世界計に対する各国シェアの後方3年移動平均を用いて算出)で加重平均した値。現地統計で季調値が公表されていないデータは、X-12-ARIMAによる当局算出値。生産全体に対するITの内訳寄与度は、各国・地域の生産指数のIT関連品目の伸び率およびウエイトを用いて寄与度を計算し、それを名目GDPウエイトで加重平均して算出した。

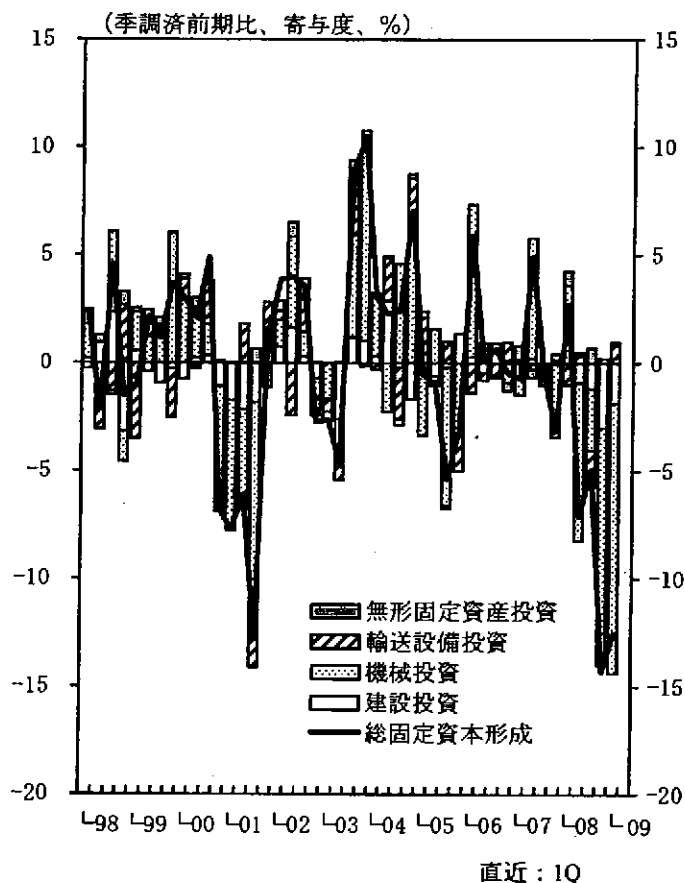
(注4) 全て数量ベース。

### NIEs、ASEAN諸国・地域の総固定資本形成、家計支出関連指標

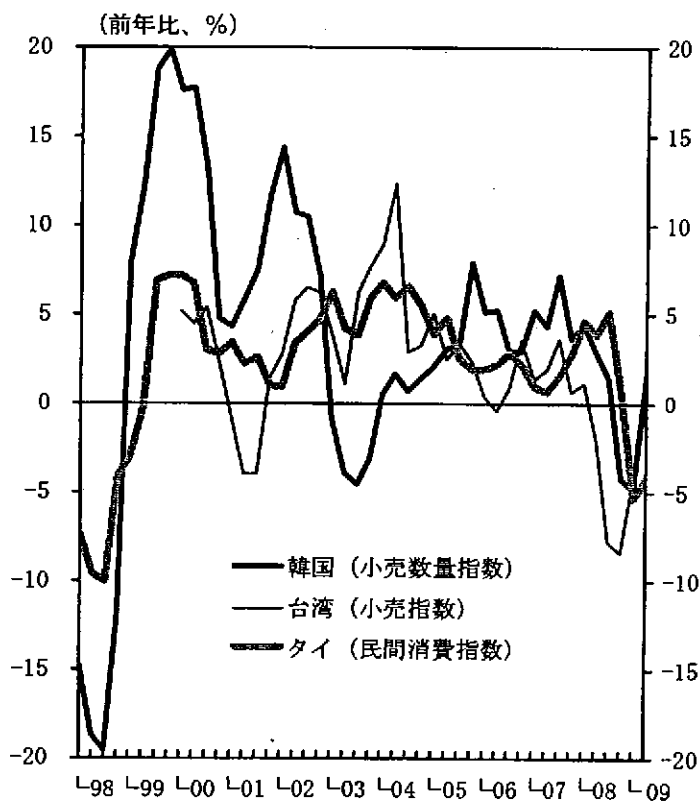
(1) 韓国の総固定資本形成



(2) 台湾の総固定資本形成

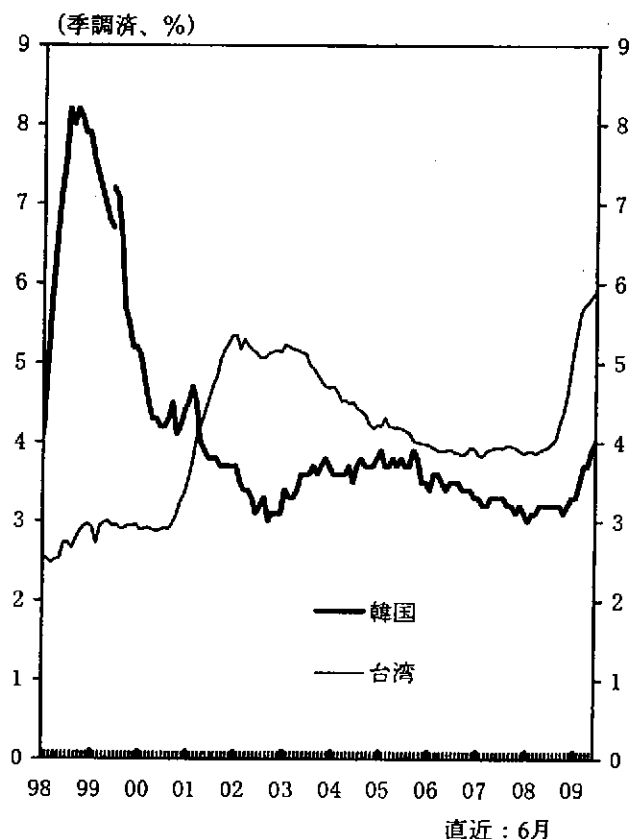


(3) 個人消費関連指標



(注) 直近は、6月。

(4) 失業率



(注1) 季節調整値は、台湾の総固定資本形成はX-11を用いて当局で算出、その他は現地統計。

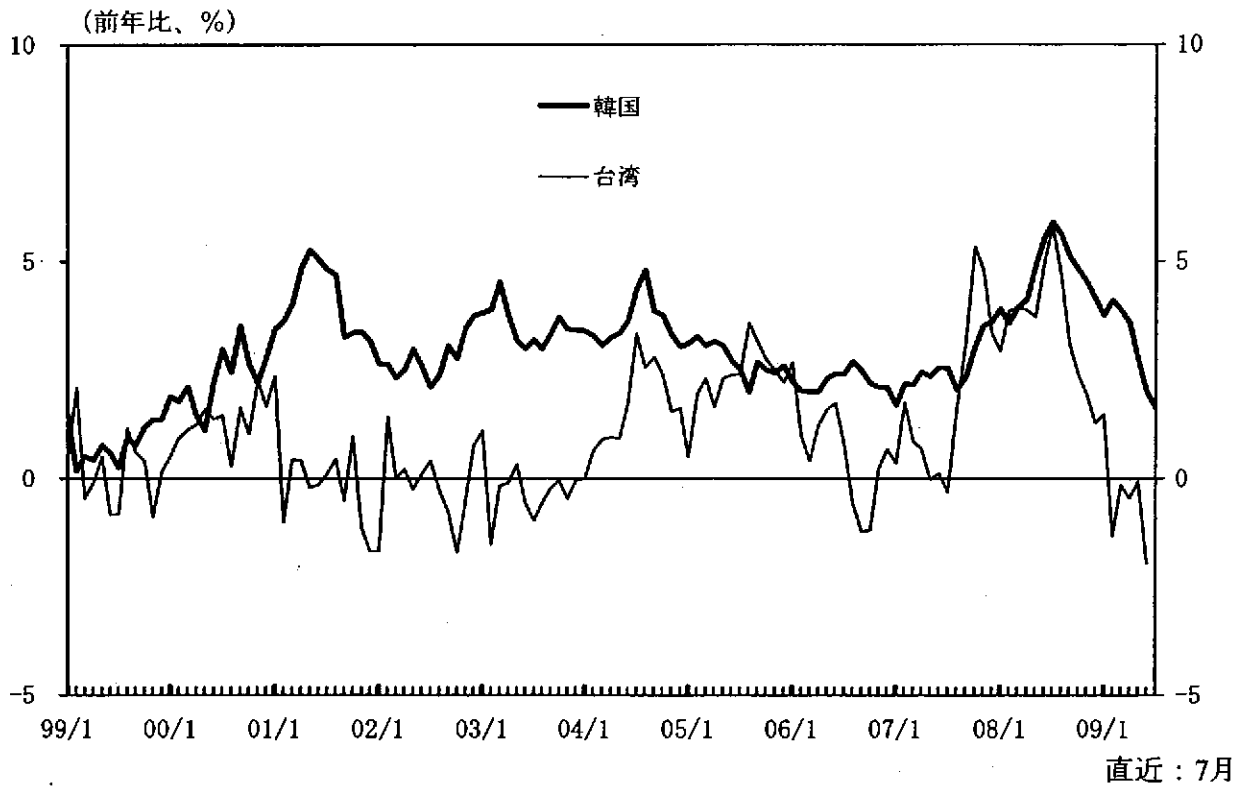
(注2) 韓国の総固定資本形成は、2000年1Qまでは2000年基準値、それ以降は2005年基準値。

(注3) 韓国の失業率は、調査内容の変更により、1999/5月時点で不連続となっている。1999/5月までは調査日から過去1週間の、それ以降は過去4週間の求職活動の有無について調査している。

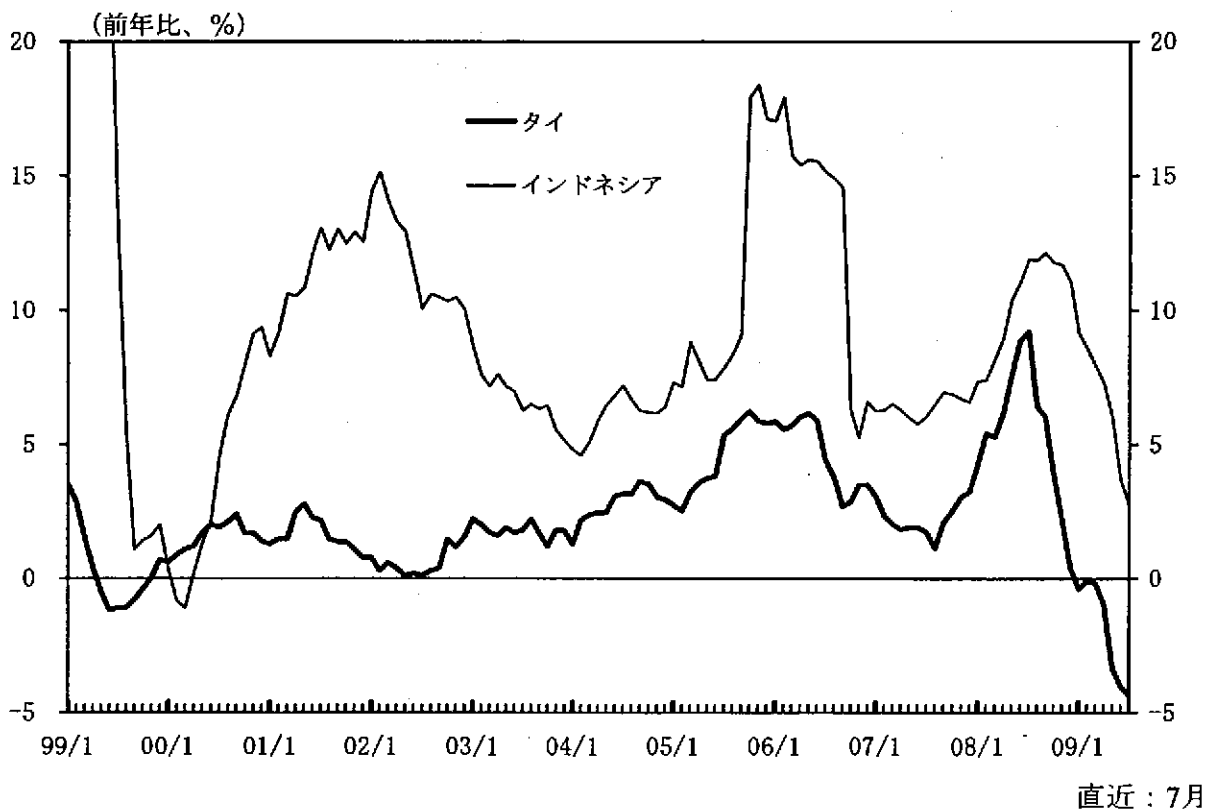
(注4) タイの個人消費は、1999年までは1995年基準値、2000年以降は2000年基準値。

### NIEs、ASEAN諸国・地域の消費者物価

#### (1) NIEs (韓国・台湾)

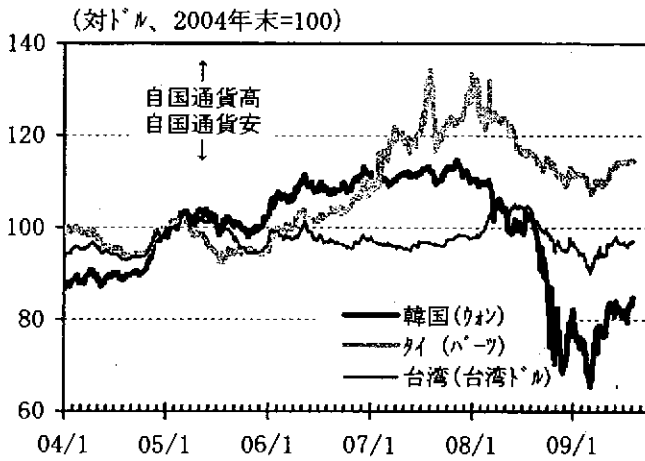


#### (2) ASEAN (タイ・インドネシア)

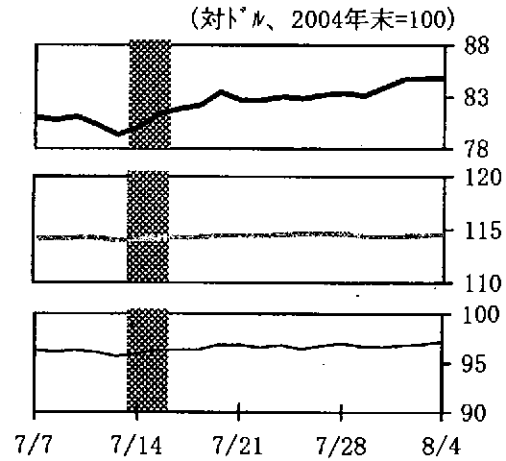


### エマージング諸国・地域の金融市場 通貨(1)

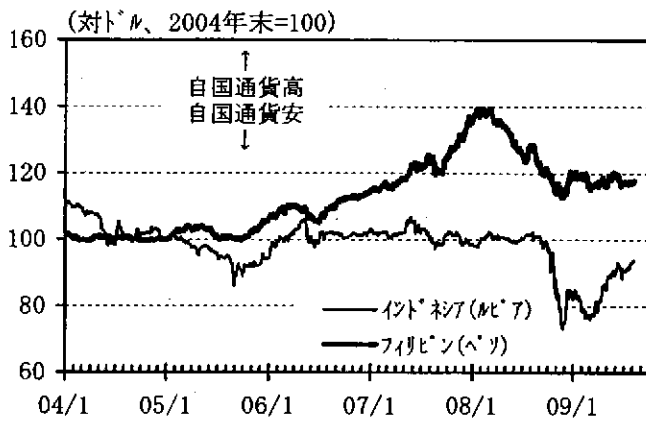
#### (1) 韓国、台湾、タイ



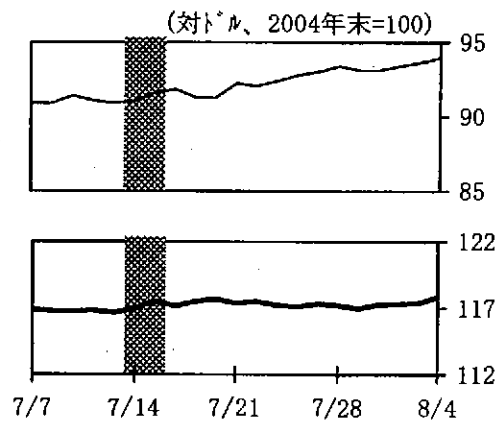
#### <最近の動き>



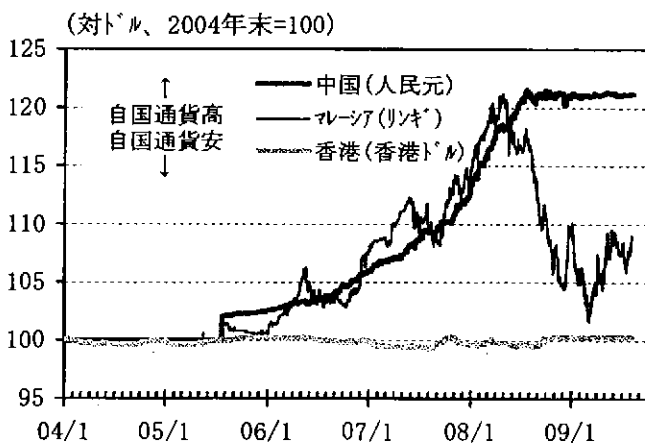
#### (2) インドネシア、フィリピン



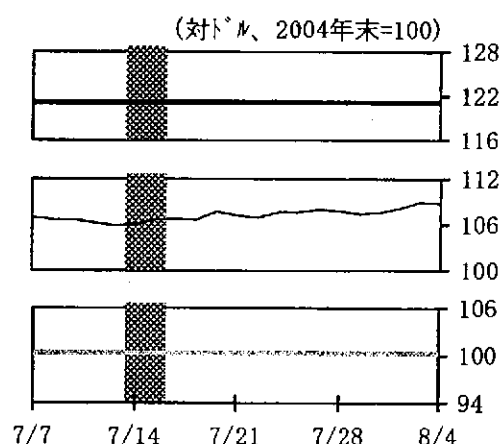
#### <最近の動き>



#### (3) 中国、香港、マレーシア



#### <最近の動き>



(出所) Bloomberg

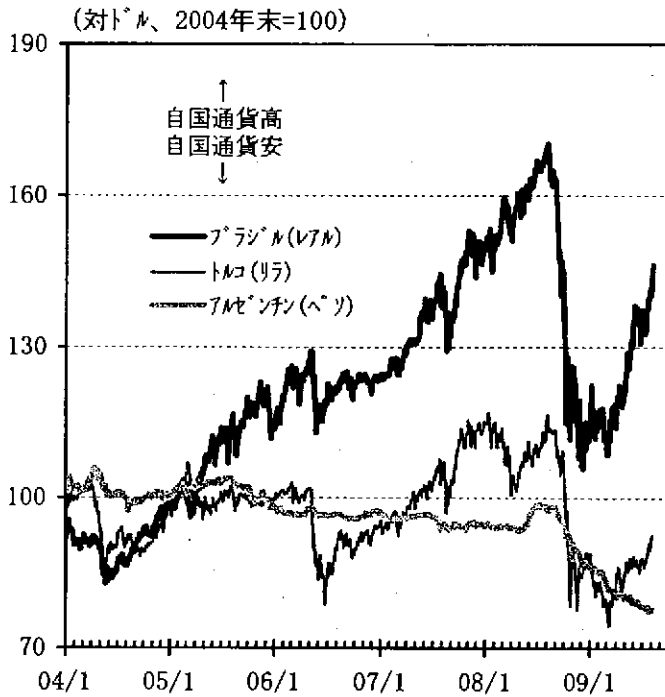
(注1) シャドーは前回会合。

(注2) タイ・バーツは07年1月31日よりオフショア市場でのレートを用いている。

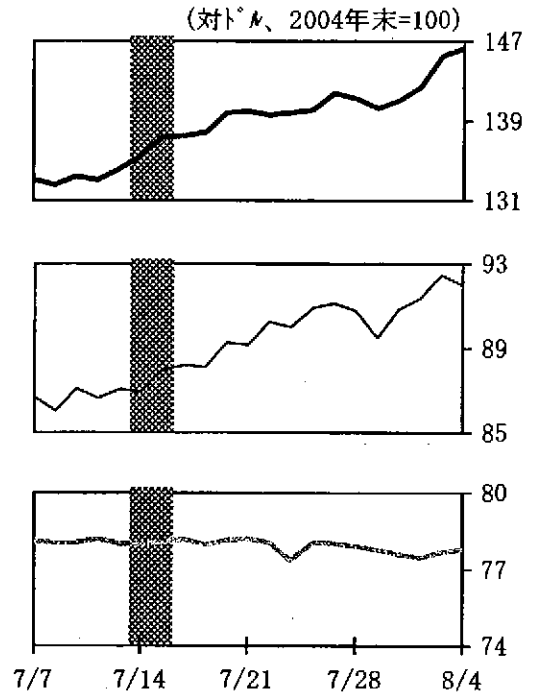
いずれも直近は8月4日

### 通貨(2)

#### (4) ブラジル、アルゼンチン、トルコ



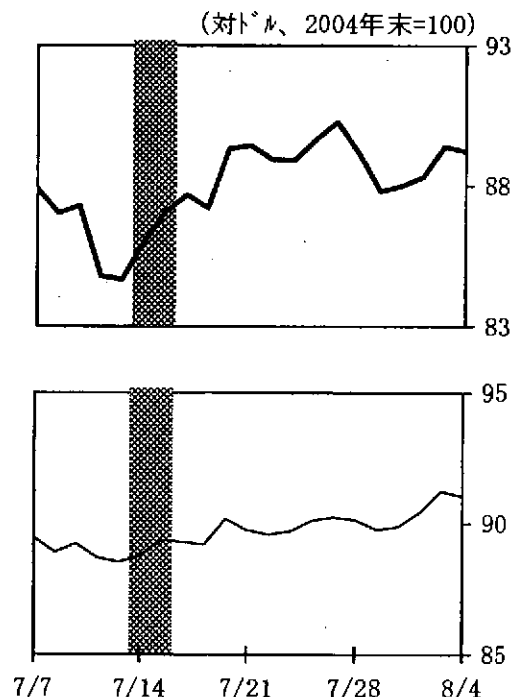
#### <最近の動き>



#### (5) ロシア、インド



#### <最近の動き>

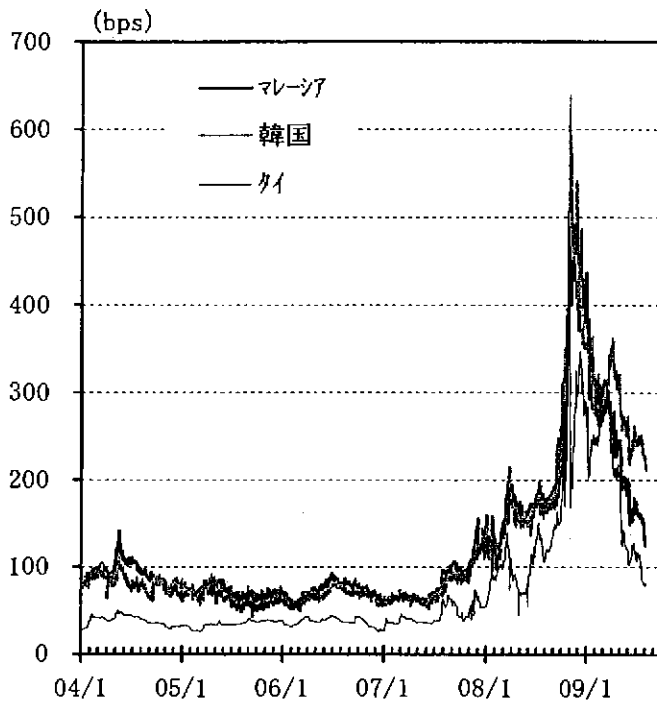


(出所) Bloomberg (注) シャドーは前回会合。

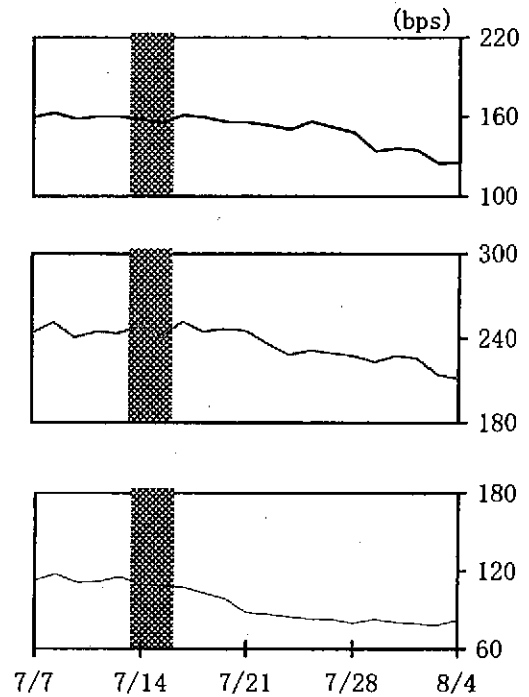
いずれも直近は8月4日

### 対米国債スプレッド (1)

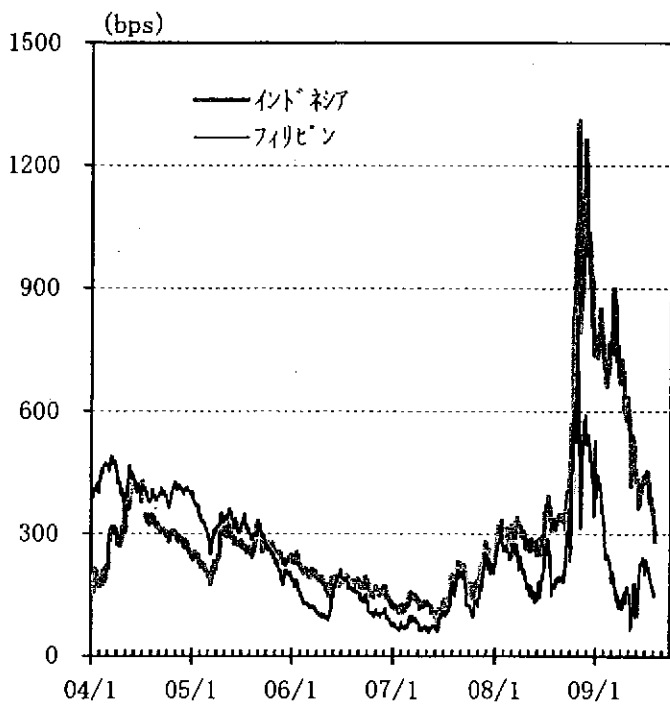
#### (1) 韓国、タイ、マレーシア



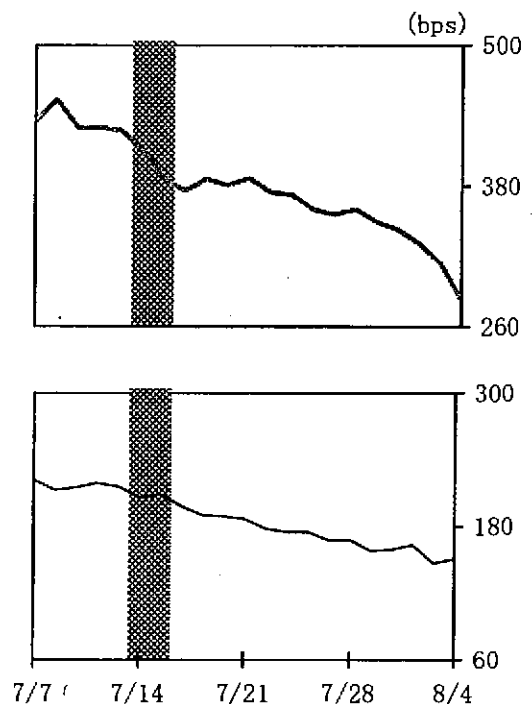
#### <最近の動き>



#### (2) インドネシア、フィリピン



#### <最近の動き>



(出所) Bloomberg

いずれも直近は8月4日

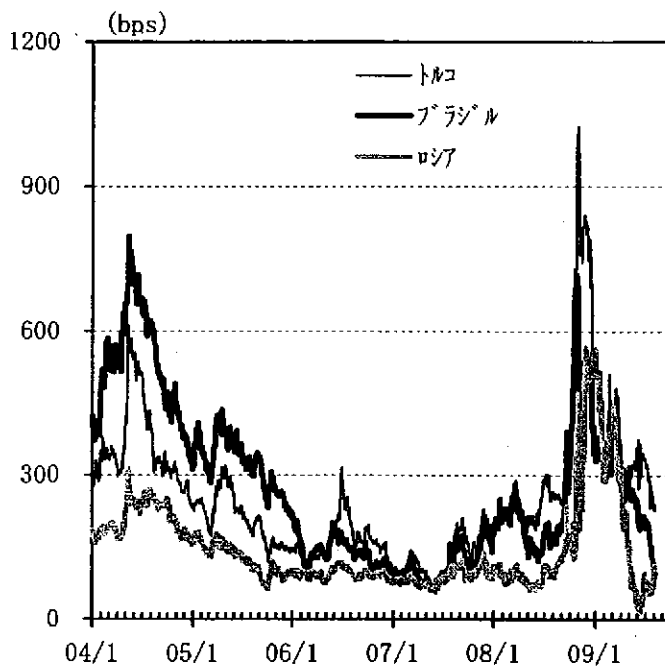
(注1) シャドーは前回会合。

(注2) 04年1月1日～04年3月2日までのインドネシア国債利回りはメリルリンチ社のデータによる。

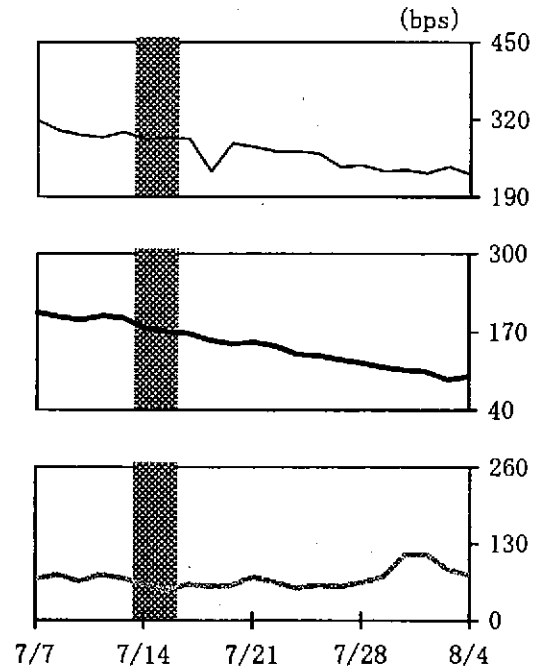
(注3) タイは5年物CDSで代用。

### 対米国債スプレッド (2)

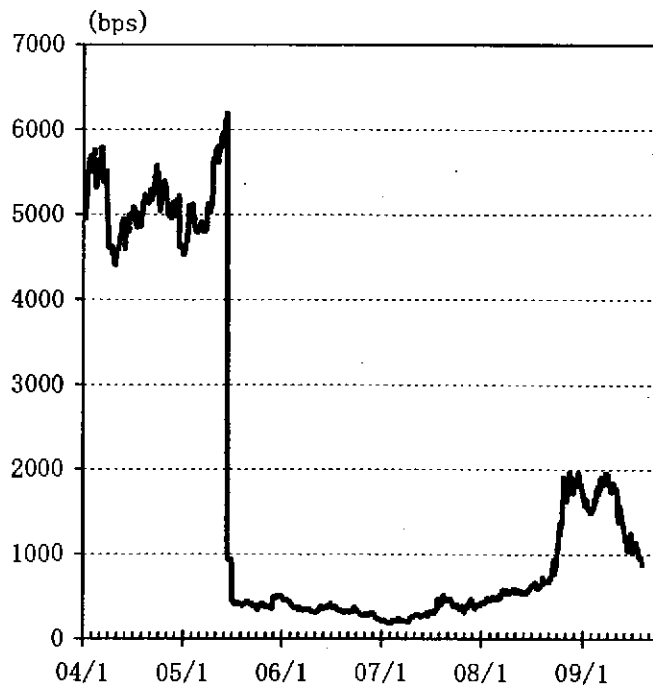
#### (3) ブラジル、ロシア、トルコ



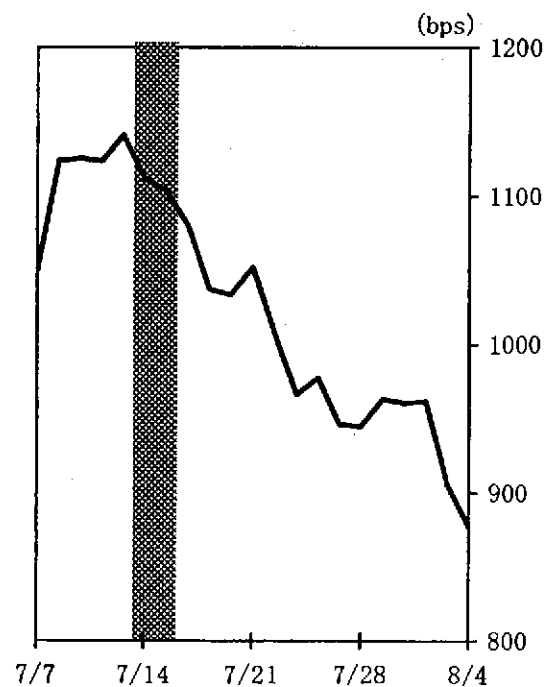
#### <最近の動き>



#### (4) アルゼンチン



#### <最近の動き>



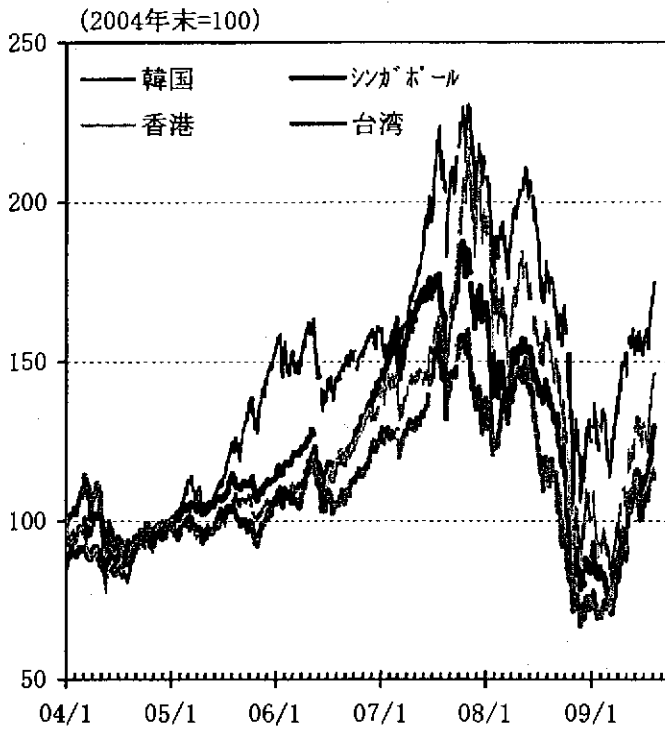
(出所) Bloomberg、J.P. Morgan  
(注1) シャドーは前回会合。  
(注2) アルゼンチンはEMBI Global。

いずれも直近は8月4日

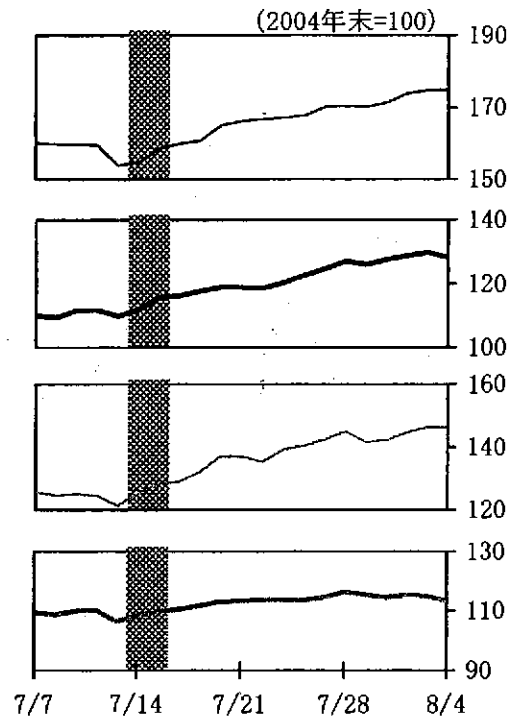


### 株価(1)

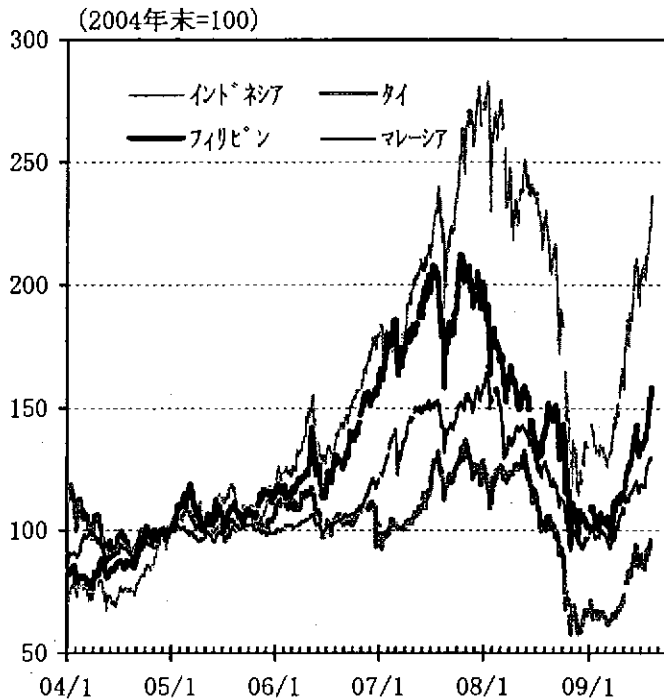
#### (1) NIEs



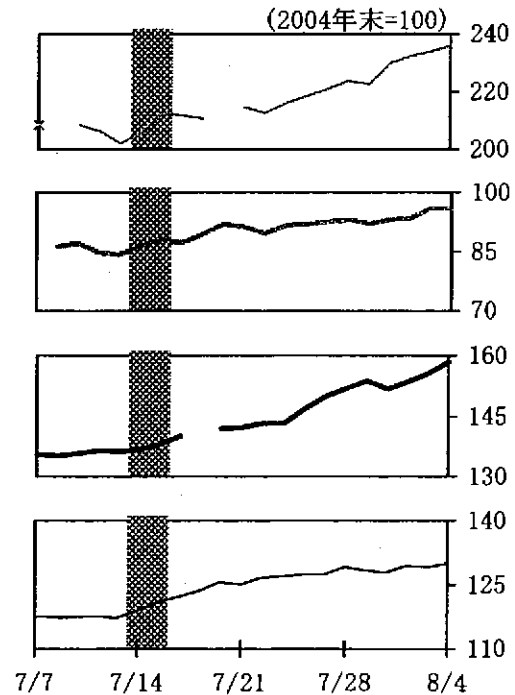
#### <最近の動き>



#### (2) ASEAN



#### <最近の動き>



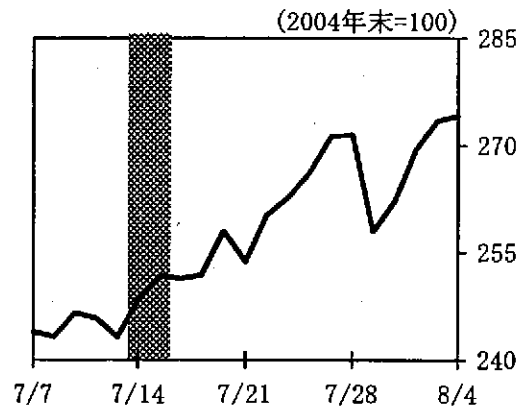
(出所) Thomson Reuters Datastream    (注) シャドーは前回会合。    いずれも直近は8月4日  
(休場: タイ7/7、インドネシア7/8、20、フィリピン7/17)

株価(2)

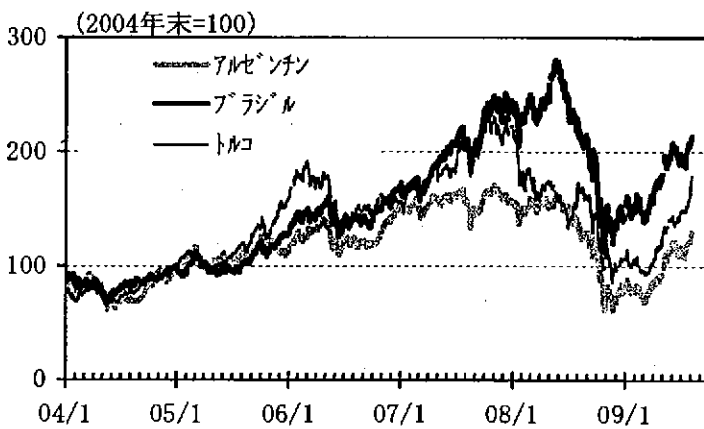
(3) 中国(上海総合)



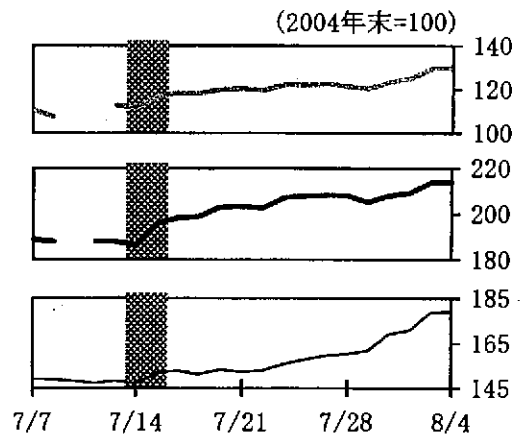
<最近の動き>



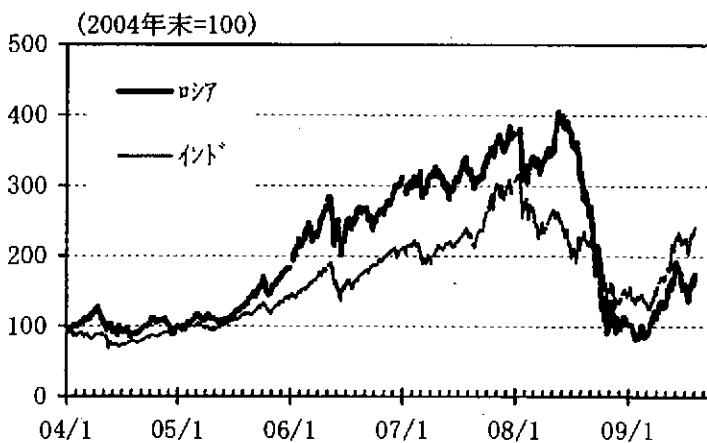
(4) ブラジル、アルゼンチン、トルコ



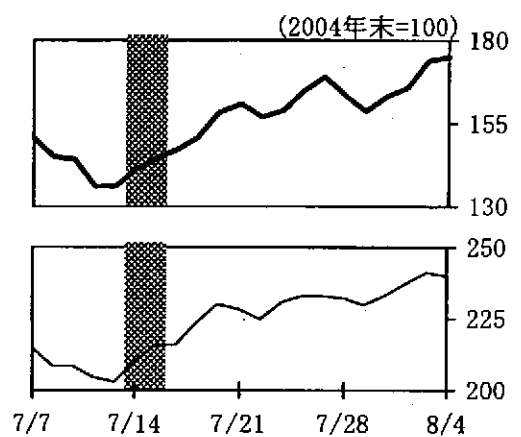
<最近の動き>



(5) ロシア、インド



<最近の動き>

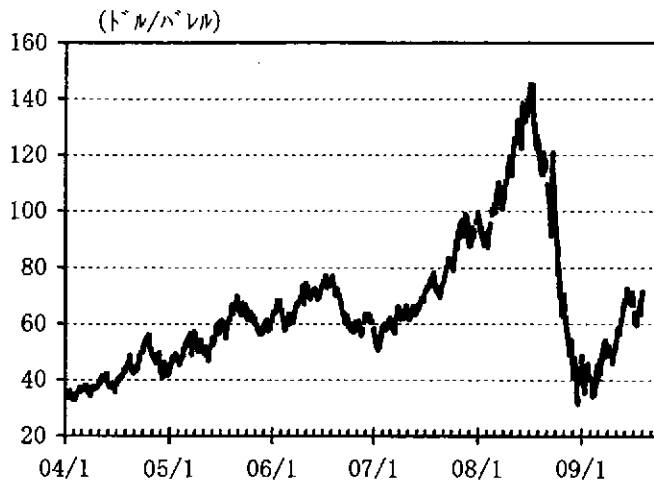


(出所) Thomson Reuters Datastream (注) シャドーは前回会合。

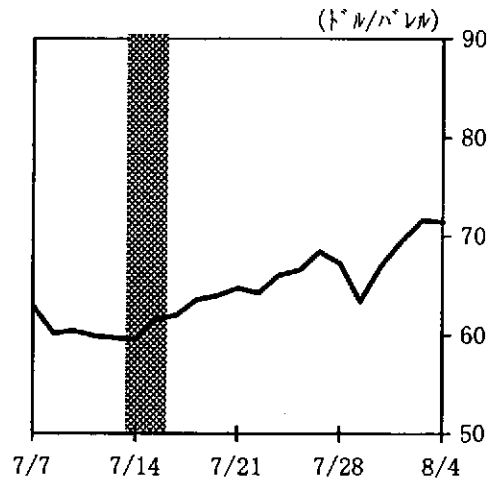
いずれも直近は8月4日  
(休場: アルゼンチン7/9-10、ブラジル7/9)

商品

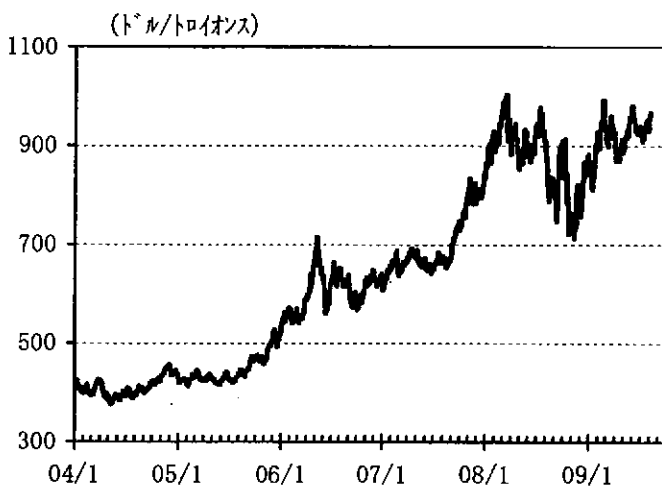
(1) 原油 (WTI)



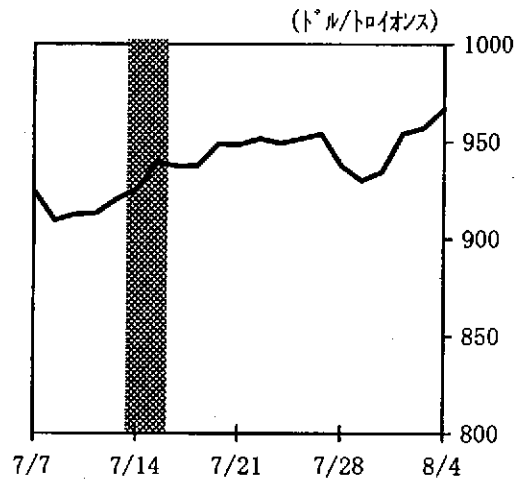
<最近の動き>



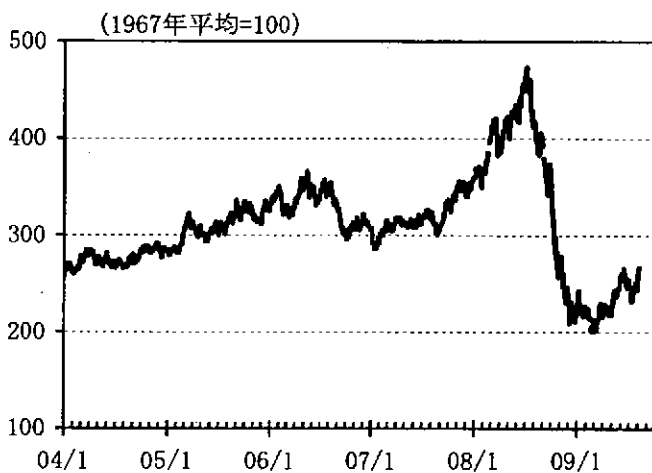
(2) 金



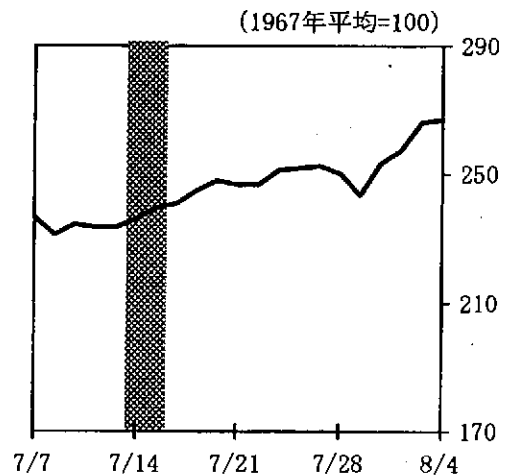
<最近の動き>



(3) CRB商品先物指数



<最近の動き>



(出所) Bloomberg (注) シェドーは前回会合。

いずれも直近は8月4日

ブルームバーグ、コンセンサス・フォーキャストの計数は転載不可

## 国際機関及び民間の海外経済・物価見通し

## (1) 実質GDP

(前年比、%)

	2008年 実績	2009年			2010年		
		IMF 見通し (2009/7月)	民間 見通し		IMF 見通し (2009/7月)	民間 見通し	
			4月時点	7月時点		4月時点	7月時点
米 国	0.4	▲2.6	▲2.6	▲2.6	0.8	1.8	2.0
E U	0.9	▲4.7	▲3.2	▲4.3	▲0.1	0.3	0.3
ユーロエリア	0.7	▲4.8	▲3.4	▲4.4	▲0.3	0.3	0.4
ドイツ	1.3	▲6.2	▲4.5	▲5.9	▲0.6	0.5	0.5
フランス	0.3	▲3.0	▲2.5	▲2.9	0.4	0.3	0.3
英 国	0.7	▲4.2	▲3.3	▲4.0	0.2	0.3	0.8
NIEs	1.5	▲5.2	▲4.5	▲3.6	1.4	3.0	3.3
ASEAN	4.6	▲0.3	0.3	0.1	3.7	3.8	4.1
中 国	9.0	7.5	7.0	7.7	8.5	8.3	8.7
日 本	▲0.7	▲6.0	▲6.3	▲6.2	1.7	0.8	1.4

## (2) 消費者物価指数

(前年比、%)

	2008年 実績	2009年			2010年		
		IMF 見通し (2009/4月)	民間 見通し		IMF 見通し (2009/4月)	民間 見通し	
			4月時点	7月時点		4月時点	7月時点
米 国	3.8	▲0.9	▲0.7	▲0.6	▲0.1	1.6	1.8
E U	3.7	0.8	1.1	0.8	0.8	1.7	1.3
ユーロエリア	3.3	0.4	0.4	0.4	0.6	1.3	1.2
ドイツ	2.8	0.1	0.4	0.3	▲0.4	1.1	1.0
フランス	3.2	0.5	0.3	0.1	1.0	1.2	1.0
英 国	3.6	1.5	1.4	1.8	0.8	1.7	1.8
NIEs	4.5	0.4	0.9	1.2	2.0	1.6	1.9
ASEAN	7.8	3.6	3.1	2.6	4.5	4.1	4.0
中 国	5.9	0.1	▲0.1	▲0.3	0.7	1.6	1.7
日 本	1.4	▲1.0	▲1.3	▲1.2	▲0.6	▲0.5	▲0.6

(注1) IMF見通しは、WEO (World Economic Outlook) による。

(注2) 民間見通しは、米国はブルームバーグ、EU・東アジア・日本はコンセンサス・フォーキャストによる。

(注3) ASEANのIMF見通しはタイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナムの5か国ベース。その他はベトナムを除く4か国ベース。

(注4) NIEsは韓国、台湾、香港、シンガポール。

(注5) NIEs、ASEANの計数は、購買力平価換算 (IMF算出) によるGDPウェイトを使用。

2009.8.10

国 際 局

## 「海外経済・国際金融の現状評価」図表一覧（追加分）

(図表1)	米国の主要経済指標	1
(図表2)	ユーロエリア・英国の主要経済指標	2
(図表3)	アジア諸国・地域の主要経済指標	4
(図表4)	米国金融市場	7
(図表5)	欧州金融市場	8

## 米国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したもの。

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ＜前期比年率、%＞	2.1	0.4	▲ 6.4	<7/31公表> ▲ 1.0				
2. 実質可処分所得 ＜前期比、%＞	2.2	0.5	0.3	0.8		1.5	<8/4公表> ▲ 1.8	
3. 実質個人消費 ＜前期比、%＞	2.6	▲0.2	0.2	▲ 0.3		0.0	<8/4公表> ▲ 0.1	
4. 家計貯蓄率 ＜対可処分所得比、%＞	1.7	2.7	4.0	5.2		6.2	<8/4公表> 4.6	
5. 小売売上高 (除く自動車、ガソリン、建築資材) ＜前期比、%＞	4.5	2.3	0.5	▲ 0.7		▲0.1	<7/14公表> ▲0.1	
6. 自動車販売 (年率、万台) ＜前期比、%＞	1,646	1,349	968	975	1,142	1,002	987	<8/4公表> 1,142
7. 消費者コンフィデンス指数	103.3	57.9	29.9	48.3	46.6	54.8	49.3	<7/28公表> 46.6
8. 住宅着工 (年率、千戸) ＜前期比、%＞	1,355	906	528	541		562	<7/17公表> 582	
9. ケース・シー住宅価格指数(10大都市) ＜前期比、%＞ (前年比、%)	▲ 4.4	▲ 16.7	▲ 5.7 ▲ 19.0	▲ 3.0 ▲ 17.4		<7/28公表> ▲ 0.2 ▲ 16.8		
10. 非国防資本財受注(除く航空機) ＜前期比、%＞ (前年比、%)	▲2.6	▲ 0.3	▲ 13.6 ▲ 23.3	0.5 ▲ 23.8		4.3 ▲ 24.4	<8/5改訂> 2.6 ▲ 19.9	
11. 財・サービス貿易収支 (億ドル)	▲ 584.5	▲ 579.9	▲ 304.0	▲ 273.8		▲ 259.6		
12. ISM 製造業指数	51.1	45.5	35.9	42.6	48.9	42.8	44.8	<8/3公表> 48.9
非製造業指数	53.5	47.4	41.8	44.9	46.4	44.0	47.0	<8/5公表> 46.4
13. 鉱工業生産 ＜前期比、%＞ (前年比、%)	1.5	▲2.2	▲ 5.2 ▲ 11.5	▲ 3.0 ▲ 13.8		▲ 1.2 ▲ 13.8	<7/15公表> ▲ 0.4 ▲ 13.7	
14. 失業率 (除く軍人、%)	4.6	5.8	8.1	9.2	9.4	9.4	9.5	<8/7公表> 9.4
15. 非農業部門雇用者数 (増減数、千人/月) うち民間部門	96 72	▲257 ▲270	▲ 691 ▲ 695	▲ 422 ▲ 426	▲ 247 ▲ 254	▲ 303 ▲ 292	▲ 443 ▲ 395	<8/7公表> ▲ 247 ▲ 254
16. CPI ＜前期比、%＞ (前年比、%)	2.9	3.8	▲ 0.6 ▲ 0.0	0.3 ▲ 1.2		0.1 ▲ 1.3	<7/15公表> 0.7 ▲ 1.4	
コア＜前期比、%＞ (前年比、%)	2.3	2.3	0.4 1.7	0.6 1.8		0.1 1.8	<7/15公表> 0.2 1.7	
17. 非農業部門労働生産性 ＜前期比年率、%＞ (前年比、%)	1.4	2.8	1.6 1.9					
18. ユニット・レーバー・コスト ＜前期比年率、%＞ (前年比、%)	2.7	0.9	3.0 2.2					

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均を用いて算出。

(注) ・前期(月)比は季調済みベース。  
 ・財・サービス貿易収支の年計数および四半期計数は月平均に換算。  
 ・雇用者増減数(期末差)の年計数および四半期計数は月平均に換算。  
 ・CPIコアは食料品、エネルギーを除いたベース。



## ユーロエリアの主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したものの。

※

	2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/4月	5月	6月	7月
1. 実質GDP <前期比年率、%>	2.7	0.7	▲6.9	▲9.7					
独 実質GDP <前期比年率、%>	2.5	1.3	▲8.6	▲14.4					
仏 実質GDP <前期比年率、%>	2.3	0.3	▲5.7	▲4.8					
2. 輸出 <前期比、%>			▲8.2	▲15.2	▲1.4	▲0.7	▲2.7		
(前年比、%)	11.0	3.8	▲4.9	▲21.3	▲25.2	▲26.4	▲23.9		
3. 独 海外受注(域外) <前期比、%>			▲14.8	▲20.8	10.6	▲0.1	7.8	4.8	
(前年比、%)	10.2	▲5.5	▲23.0	▲38.7	▲30.5	▲37.5	▲29.3	▲24.4	
4. 独 国内投資財受注 <前期比、%>			▲14.9	▲8.8	▲0.8	▲2.6	5.9	▲4.5	
(前年比、%)	8.6	▲6.9	▲22.7	▲27.4	▲26.4	▲30.6	▲22.8	▲25.4	
5. 輸入 <前期比、%>			▲9.5	▲14.0	▲5.0	▲2.8	▲2.8		
(前年比、%)	8.4	7.4	▲2.3	▲20.8	▲27.3	▲27.2	▲27.5		
6. 小売売上数量 <前期比、%>			▲0.8	▲0.8	▲0.4	0.2	▲0.5	▲0.2	
(前年比、%)	1.4	▲0.7	▲1.9	▲3.1	▲2.4	▲1.9	▲3.0	▲2.4	
7. 新車登録台数 (年率、万台)	1,164	1,071	991	998	1,121	1,075	1,131	1,158	
<前期比、%>	▲0.9	▲8.0	▲7.4	0.7	12.3	3.9	5.3	2.4	
8. 消費者コンフィデンス (DI、%)	▲5	▲18	▲27	▲33	▲28	▲31	▲28	▲25	▲23
9. 鉱工業生産(除く建設) <前期比、%>			▲6.2	▲7.4	▲2.6	▲1.4	0.5		
(前年比、%)	3.7	▲1.8	▲8.9	▲18.2	▲18.8	▲20.5	▲17.0		
10. 製造業PMI(購買担当者指数) (DI、%)	54.3	46.5	36.8	34.0	40.0	36.8	40.7	42.6	46.3
サービス業PMI事業活動指数 (DI、%)	56.6	48.5	43.4	40.8	44.4	43.8	44.8	44.7	45.7
11. 失業率 (%)	7.5	7.6	8.0	8.8	9.3	9.2	9.3	9.4	
12. 消費者物価 (前年比、%)	2.1	3.3	2.3	1.0	0.2	0.6	0.0	▲0.1	▲0.6
コア (前年比、%)	2.0	2.4	2.2	1.6	1.5	1.7	1.5	1.3	

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) 欧州委員会 (Eurostat)、ECB、Deutsche Bundesbank、Statistisches Bundesamt、INSEE、Datastream、Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)

- (注) ・ユーロエリアに関する計数・図表のうち、消費者物価・M3・貸出は各時期のユーロ構成国ベース。  
 ・実質GDPの年率換算値は、当局計算による。なお、ユーロエリアとドイツの暦年の計数は、未季調ベース。  
 ・前期(月)比は季調済みベース。  
 ・消費者物価コアは、エネルギー、非加工食料品を除いたベース。  
 ・消費者物価の直近7月は、速報値。また全体以外は未公表。



## 英国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したもの。

		※								
		2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/4月	5月	6月	7月
1. 実質GDP	<前期比年率、%>	2.6	0.7	▲7.0	▲9.3	▲3.2				
										<7/24公表>
2. 小売売上数量	<前期比、%>			0.6	0.3	0.7	0.8	▲0.9	1.2	
	(前年比、%)	4.2	2.7	2.0	0.8	1.3	2.6	▲2.0	2.9	
3. 消費者コンフィデンス	(DI、%)	▲7	▲29	▲34	▲35	▲27	▲27	▲28	▲25	▲25
										<7/31公表>
4. サービス業PMI事業活動指数	(DI、%)	56.3	47.6	40.9	43.7	50.7	48.7	51.7	51.6	53.2
										<8/5公表>
5. 失業率(失業保険ベース)	(%)	2.7	2.8	3.4	4.2	4.7	4.6	4.7	4.8	
										<7/15公表>
6. CPI	(前年比、%)	2.3	3.6	3.9	3.0	2.1	2.3	2.2	1.8	
										<7/14公表>
7. 住宅価格(Nationwide指数)	(前年比、%)	9.2	▲6.7	▲14.8	▲16.7	▲11.9	▲15.0	▲11.3	▲9.3	▲6.2
										<7/30公表>

※直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) ONS、Datastream、Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)

(注) 実質GDPの年率換算値と、消費者コンフィデンスの季調値は、当局計算による。



## アジア諸国・地域の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(7月14日)以降に判明したものの。

## 1. 中国

(前年比、%)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ◇内は季調済前期比年率	13.0	9.0	6.1 < 9.5 >	7.9 < 18.6 >				
2. 工業生産 <>内は前期比	18.5	12.9	5.1 < 1.9 >	9.0 < 6.3 >		8.9 < 2.3 >	10.7 < 2.9 >	
3. 製造業PMI*	55.0	50.2	48.9	53.3	53.3	53.1	53.2	53.3
4. 消費財小売売上総額	16.8	21.6	15.0	15.0		15.2	15.0	
5. 固定資産投資	25.8	26.1	28.6	35.9		38.7	35.2	
6. 輸出 <>内は前期比	25.8	17.4	▲ 19.8 < ▲ 17.6 >	▲ 23.5 < ▲ 2.6 >		▲ 26.5 < 6.0 >	▲ 21.3 < ▲ 1.4 >	
7. 輸入 <>内は前期比	20.8	18.5	▲ 31.0 < ▲ 18.9 >	▲ 20.5 < 18.1 >		▲ 25.2 < 6.0 >	▲ 13.2 < 8.2 >	
8. CPI	4.8	5.9	▲ 0.6	▲ 1.5		▲ 1.4	▲ 1.7	
9. M2	16.7	17.8	25.5	28.5		25.7	28.5	
10. 人民元貸出	16.1	18.8	29.8	34.4		30.6	34.4	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M2、人民元貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDP、工業生産、輸出入の季調値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注3) \*印は、50を上回れば前月比拡大、下回れば縮小。中国物流購買連合会が公表するデータを使用。

(注4) 固定資産投資は、都市部、当期の値。中国国家统计局が公表する年初来累計値と同前年比伸び率を用いて当局で試算。

## 2. インド

(前年比、%)

	2007年	2008年	2008/4Q	2009/1Q	2Q	2009/5月	6月	7月
1. 実質GDP ◇内は季調済前期比年率	9.3	7.5	5.8 < 2.4 >	5.8 < 6.6 >				
個人消費 ◇内は季調済前期比	7.7	4.4	2.3 < 3.7 >	2.7 < 6.6 >				
総固定資本形成 ◇内は季調済前期比	14.5	8.8	5.1 < ▲ 10.9 >	6.4 < 1.2 >				
2. 鉱工業生産	9.9	4.4	0.8	0.1	1.9	2.7		
3. 製造業PMI*	56.4	55.5	47.4	47.7	54.8	55.7	55.3	55.3
雇用*	51.0	50.9	49.2	48.8	50.1	50.3	50.6	49.8
4. 卸売物価	4.8	9.1	8.6	3.2	0.4	1.4	▲ 1.4	▲ 1.4
5. M3	22.8	19.7	19.7	18.8	20.6	20.6	20.6	
6. 貸出	21.4	23.2	23.2	17.5	15.8	15.8		

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M3、貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDPの季調値は、X-11による当局算出値。

(注3) \*印は、50を上回れば前月比拡大、下回れば縮小。

(注4) 貸出は指定商業銀行ベース。

(出所) CEIC、Markit (© and database right Markit Economics Ltd 2009. All rights reserved.)



## 3. NIEs、ASEAN諸国・地域

## (1) 実質GDP

(季調済前期比年率、( )内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008年	2008/2Q	3Q	4Q	2009/1Q	2Q
韓国	5.2	5.1	2.2	1.7 (4.3)	1.0 (3.1)	▲18.8 (▲3.4)	0.5 (▲4.2)	9.7 (▲2.5)
台湾	4.8	5.7	0.1	0.3 (4.6)	▲10.5 (▲1.0)	▲24.7 (▲8.6)	▲3.6 (▲10.2)	
香港	7.0	6.4	2.4	▲3.9 (4.1)	▲3.2 (1.5)	▲7.4 (▲2.6)	▲16.1 (▲7.8)	
シンガポール	8.4	7.8	1.1	▲7.7 (2.5)	▲2.1 (0.0)	▲16.4 (▲4.2)	▲12.7 (▲9.6)	20.4 (▲3.7)
タイ	5.2	4.9	2.6	1.3 (5.3)	1.9 (3.9)	▲22.1 (▲4.2)	▲7.3 (▲7.1)	
インドネシア	5.5	6.3	6.1	7.5 (6.4)	6.2 (6.4)	0.6 (5.2)	3.4 (4.4)	
マレーシア	5.8	6.2	4.6	2.3 (6.6)	0.4 (4.8)	▲9.0 (0.1)	▲17.0 (▲6.2)	
フィリピン	5.3	7.1	3.8	7.1 (4.2)	3.0 (4.6)	1.1 (2.9)	▲8.9 (0.4)	

(注1) 季節調整値は、韓国、香港、シンガポール、タイ、フィリピンが現地統計。その他はX-11による当局算出値。

(注2) 実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

## (2) 輸出

(名目米ドルベース、季調済前期比、( )内は前年比、%)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
輸出合成指数	11.5	11.5	▲13.2	7.7				
うちIT関連寄与度			▲1.5	3.6				
韓国 <29.5>	14.1	13.6	▲13.7 (▲25.0)	13.4 (▲20.4)	9.1 (▲20.1)	▲8.7 (▲28.6)	15.9 (▲12.4)	2.1 (▲20.1)
台湾 <17.9>	10.1	3.6	▲13.1 (▲36.7)	8.9 (▲32.0)	10.8 (▲24.4)	0.1 (▲31.5)	-8.6 (▲30.4)	4.9 (▲24.4)
タイ <12.5>	17.2	16.9	▲9.1 (▲20.6)	▲0.2 (▲26.2)		4.5 (▲26.6)	4.1 (▲25.9)	
インドネシア <9.6>	13.2	20.1	▲17.3 (▲31.8)	9.9 (▲26.4)		2.8 (▲28.7)	▲1.0 (▲27.2)	

## (参考)

	2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
シンガポール 新規輸出受注D.I.*	53.7	47.6	43.7	49.9	50.5	50.3	50.9	50.5
うちIT関連*	56.3	51.0	42.6	53.1	53.5	53.0	53.8	53.5

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は4~6月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の前年比で横置きしている。

(注3) 輸出の季節調整値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 輸出の&lt; &gt;内は、合成指数に占めるシェア(%, 2008年)。

(注5) 輸出、輸出合成指数はともに金額ベース。

(注6) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注7) \*印は、50を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。



(図表3-3)

## (3) 生産関連

(季調済前期比、( )内は前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
生産合成指数		6.2	1.7	▲ 5.9	9.6				
うちIT関連寄与度				▲ 1.3	5.2				
韓国	鉱工業生産指数	6.9	3.0	▲ 2.7 (▲ 15.5)	11.4 (▲ 6.2)		1.5 (▲ 9.0)	5.7 (▲ 1.2)	
	企業景気実査指数 <sup>†</sup> (季調済)	99.8	82.0	70.5	92.7	101.9	94.0	97.9	101.9
台湾	鉱工業生産指数	7.8	▲ 1.8	▲ 8.0 (▲ 32.4)	17.3 (▲ 16.6)		1.6 (▲ 18.4)	5.0 (▲ 11.4)	
タイ	製造業生産指数	8.2	5.3	▲ 9.0 (▲ 18.5)	10.1 (▲ 9.1)		0.1 (▲ 9.8)	3.0 (▲ 7.8)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は4~5月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の値で横置きしている。

(注3) 生産指数の季節調整値は、現地統計またはX-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 生産、生産合成指数はともに数量ベース。

(注5) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注6) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

## (4) 内需関連

(季調済前期比、( )内は前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
韓国	小売数量指数	5.0	1.0	0.4 (▲ 4.9)	4.9 (1.6)		4.9 (1.6)	1.8 (7.3)	
	消費者信頼感指数 <sup>†</sup>	107.3	91.8	84.3	103.0	109.0	105.0	106.0	109.0
	機械投資推計指数	8.2	▲ 4.4	▲ 11.6 (▲ 17.7)	6.3 (▲ 13.6)		7.3 (▲ 16.2)	9.5 (▲ 5.6)	
台湾	小売指数	1.8	▲ 4.3	(▲ 4.2)	(0.3)		(0.4)	(3.3)	
	消費者コンフィデンス <sup>†</sup>	66.2	58.7	48.8	51.1	56.2	52.1	51.4	56.2
タイ	民間消費指数(PCI)	1.5	3.5	▲ 4.7 (▲ 5.3)	1.1 (▲ 4.2)		▲ 0.8 (▲ 4.7)	2.6 (▲ 2.7)	
	民間投資指数(PII)	▲ 0.5	3.5	▲ 12.0 (▲ 13.3)	▲ 4.2 (▲ 16.0)		▲ 0.5 (▲ 16.1)	1.1 (▲ 15.5)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

## (5) 消費者物価指数(CPI)

(前年比、%)

		2007年	2008年	2009/1Q	2Q	3Q	2009/5月	6月	7月
韓国	( )内はコア	2.5 (2.3)	4.7 (4.3)	3.9 (5.0)	2.8 (3.9)	1.6 (3.2)	2.7 (3.9)	2.0 (3.5)	1.6 (3.2)
台湾	( )内はコア	1.8 (1.4)	3.5 (3.1)	▲ 0.0 (1.2)	▲ 0.8 (▲ 0.0)	▲ 2.3 (▲ 0.9)	▲ 0.1 (0.1)	▲ 2.0 (▲ 0.6)	▲ 2.3 (▲ 0.9)
タイ	( )内はコア	2.2 (1.0)	5.5 (2.3)	▲ 0.2 (1.6)	▲ 2.8 (▲ 0.1)	▲ 4.4 (▲ 1.2)	▲ 3.3 (▲ 0.3)	▲ 4.0 (▲ 1.0)	▲ 4.4 (▲ 1.2)
インドネシア	( )内はコア	6.4 (5.9)	9.8 (N/A)	8.6 (7.3)	5.6 (6.4)	2.7 (4.9)	6.0 (6.6)	3.7 (5.6)	2.7 (4.9)

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 韓国のCPIコアは、CPI総合から穀物以外の農産物、石油関連製品を控除。台湾のCPIコアは、CPI総合から生鮮食料品およびエネルギーを控除。タイのCPIコアは、CPI総合から非加工食品、エネルギーを控除。インドネシアのCPIコアは、CPI総合から、政府の規制価格の影響がある項目および生鮮食料品を控除。

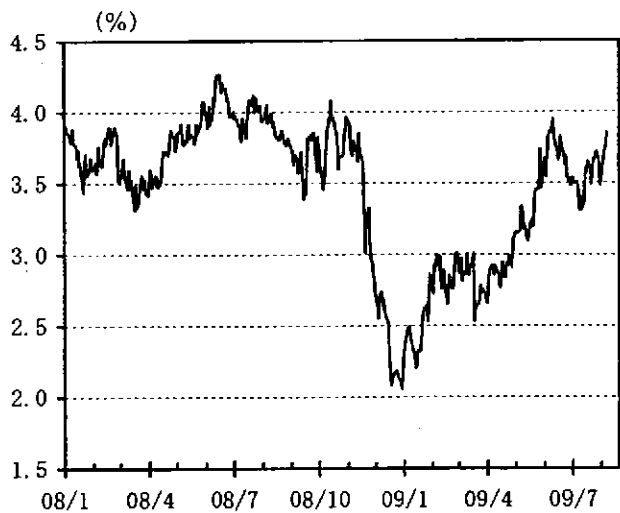
(注3) タイは、2009年以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。

(注4) インドネシアは、2008年以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。2007年基準のCPIコアは、一部未公表。

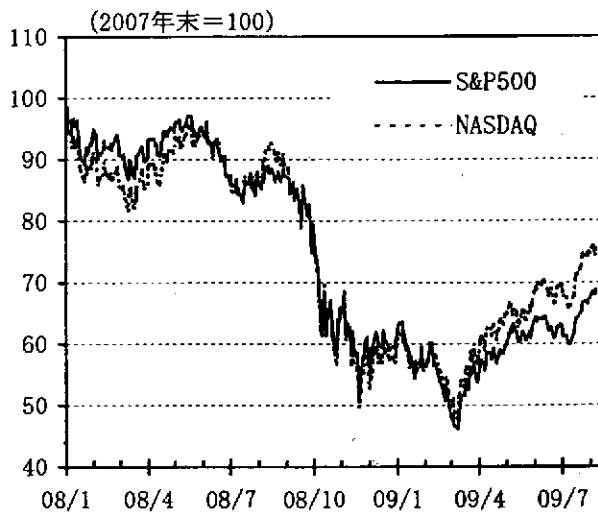
(出所) CEIC

### 米国金融市場

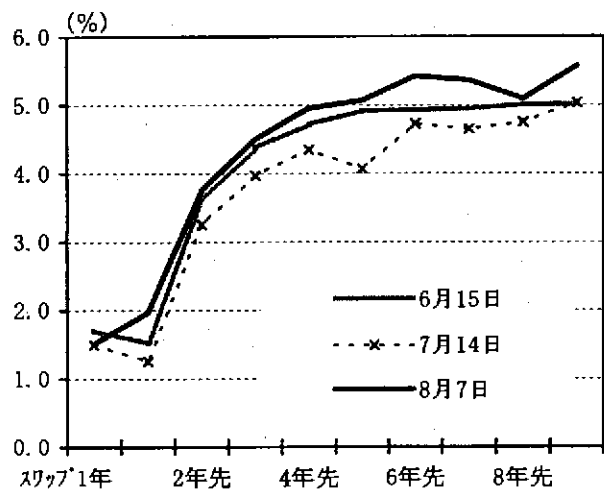
(1) 長期金利 (国債10年物利回り)



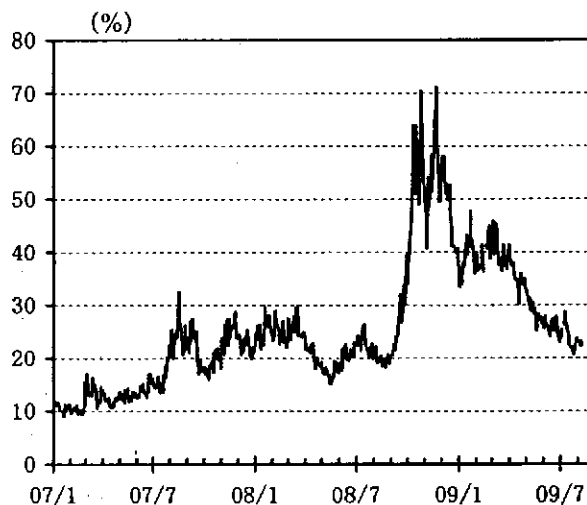
(2) 株価 (S&P500・NASDAQ)



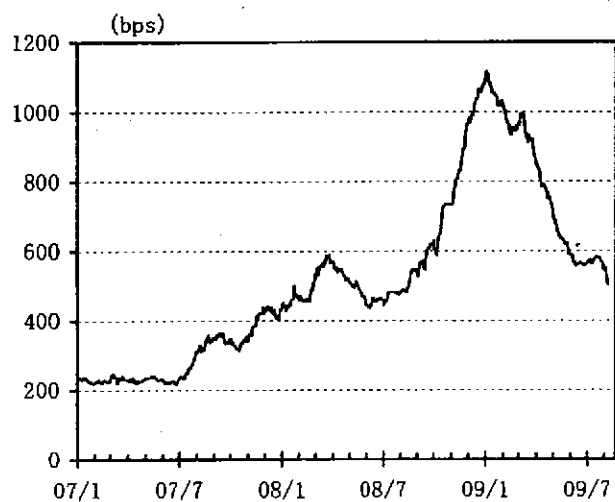
(3) インプライド・フォワード・レート



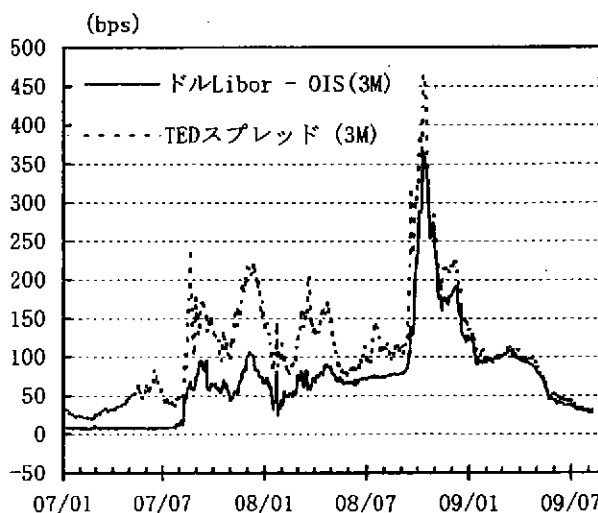
(4) 株価のインプライド・ボラティリティ (S&P500)



(5) 社債 (BB格) の対国債スプレッド



(6) 短期金利スプレッド

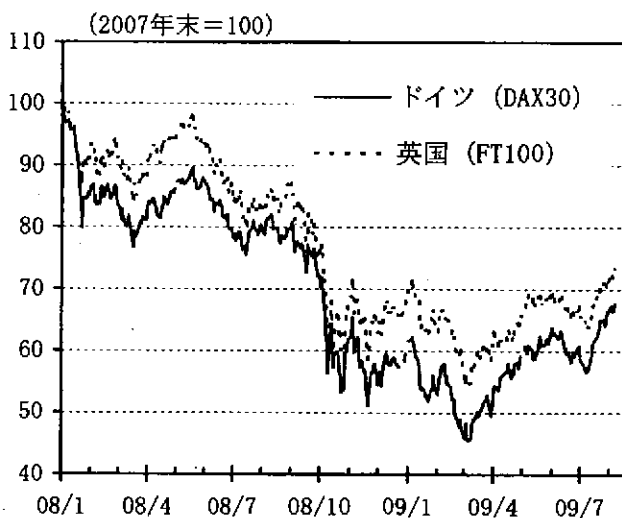
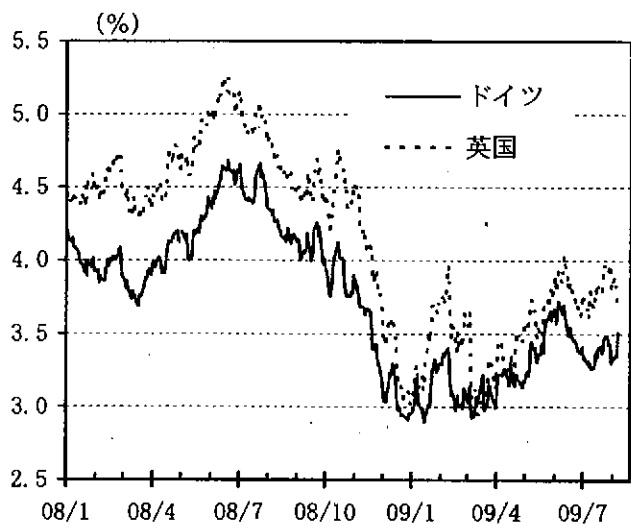


(出所) Bloomberg

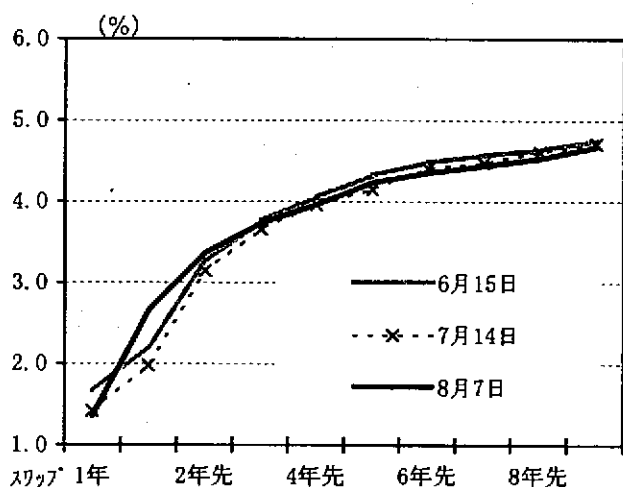
いずれも直近は8月7日

### 欧州金融市場

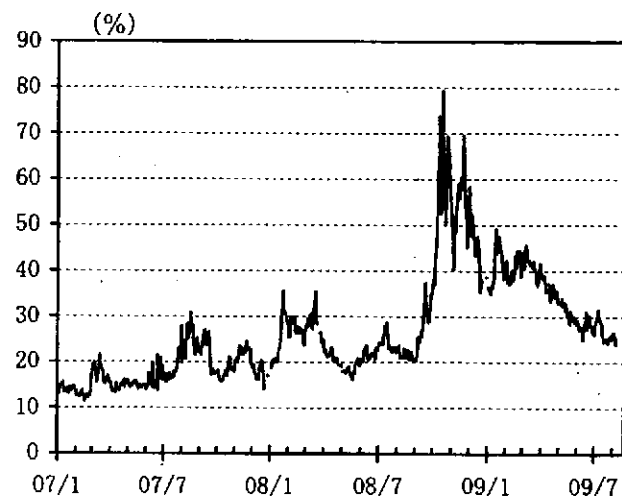
(1) 長期金利 (国債10年物利回り、独・英) (2) 株価 (独DAX30・英FT100)



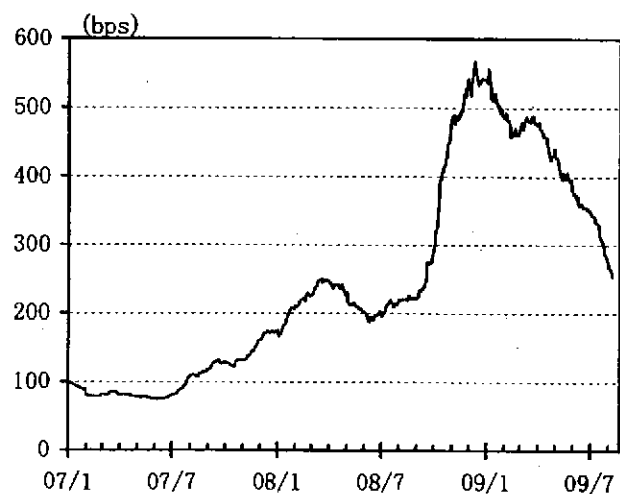
(3) インプライド・フォワード・レート



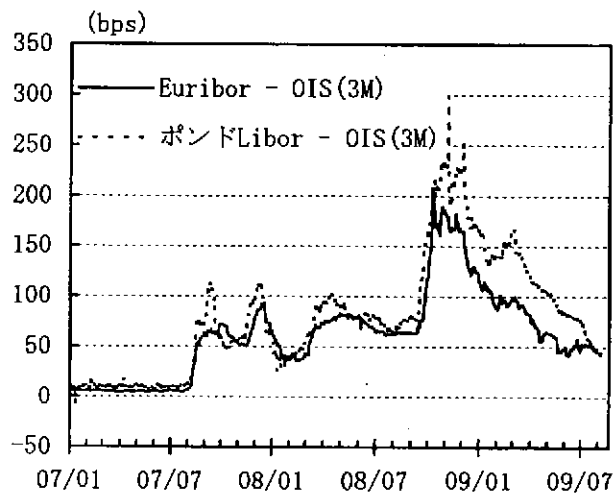
(4) 株価のインプライド・ボラティリティ (Euro Stoxx50)



(5) 社債 (BBB格) の対国債スプレッド



(6) 短期金利スプレッド



(出所) Bloomberg

いずれも直近は8月7日

2009.8.5

調査統計局

## 経済活動の現状評価

### 1. 概況

#### （現状認識）

わが国の経済をみると、公共投資は増加している。輸出や生産は、大幅に落ち込んだあと、持ち直している。一方、厳しい収益状況などを背景に、設備投資は大幅に減少している。雇用・所得環境が厳しさを増す中で、個人消費は弱めの動きとなっており、住宅投資は減少している。

以上を踏まえると、「わが国の景気は下げ止まっている」と判断される。

—— 今月は、多くの指標で6月の実績が判明し、4～6月の姿が明らかになったが、それら指標の動きは、前回会合時点の判断（「景気は下げ止まっている」）を裏付ける内容であった。すなわち、①内外の在庫調整が進捗するもとの、②公共工事や自動車・家電販売の増加など各種対策の効果も現れている。そうしたもとの、③輸出、生産は、なお低水準ながら持ち直しの動きが続いている。しかし、④設備投資関連指標は、なお減少を続けており、個人消費関連指標も、各種対策の効果が見られている部分を除けば、弱い動きが続いている。

—— なお、現時点で利用可能な統計をもとに、4～6月の実質GDP成長率（前期比）を予想すると（1次速報の公表日は8月17日）、①設備投資や在庫投資、住宅投資が大幅なマイナスとなるものの、②純輸出が大幅増加、③公共投資も増加、さらには、④個人消費も下げ止まるとみられるため、全体では比較的はっきりしたプラスとなる可能性が高い（図表1）。所得形成を示す実質GDI・GNIの前年比については、交易条件の改善が続く中、実質GDPの落ち込み幅が縮小することから、マイナス幅は縮小すると予想される（図表2）。

物価の現状について、国内企業物価の3か月前比をみると、製品需給緩和の影響などから、緩やかな下落を続けている。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、経済全体の需給が緩和した状態が続く中、前年における石油製品価格高騰の

反動などから、マイナス幅が拡大している。

- 6月の全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、石油製品のマイナス寄与拡大、食料工業製品のプラス寄与縮小などから、マイナス幅が前月より0.6%ポイント拡大し、-1.7%となった。除く食料・エネルギーの前年比は、前月より0.2%ポイント低下し、-0.7%となった。

### （先行き）

景気の先行きについて項目別にみると、輸出や生産は、内外の在庫調整の進捗や海外経済の改善などを背景に、持ち直しを続けるとみられる。また、公共投資も増加を続けると見込まれる。一方、国内民間需要は、厳しい収益・資金調達環境が続き、雇用・所得環境も厳しさを増すもとで、引き続き弱めに推移する可能性が高い。

以上を総合すると、「先行きについては、景気は次第に持ち直しに向かう」と考えられる。

- 海外経済をみると、米欧の悪化テンポが緩やかになり、中国は内需が強まるなど、全体として下げ止まっている。当面は、各国で打ち出された金融財政政策の効果が引き続き作用するもとで、景気は下げ止まりから持ち直しに転じていくと予想される。もっとも、過去数年間に蓄積された世界経済の過剰の調整には、かなりの時間を要するとみられ、改善傾向が持続するかどうかには大きな不確実性がある。

- 日本経済は、上記のとおり世界経済が徐々に持ち直しに転じ、政策効果も当面強まるもとで、「次第に持ち直しに向かう」とみられる。もっとも、グローバル経済の先行きについては、上述のとおり、下振れ方向を中心に不確実性が高い。ミクロ情報でも、企業は、年度下期以降の景気展開について、なお慎重にみている。輸出や生産が十分な回復力を持たない場合、企業や家計の中長期的な成長期待が一段と下振れるリスクに、引き続き注意が必要である。

物価の先行きについてみると、国内企業物価は、製品需給が緩和した状態が続くもとで、当面、緩やかな下落を続けるとみられる。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、前年における石油製品価格高騰の反動などから、当面、下落幅を拡大していくと予想される。

- 全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比については、石油製品のマイナス寄与拡大や食料の弱さなどから、7～9月は-2%台前半になると予想される。マイナス幅拡大の主因は前年上昇の反動であるが、経済全体の需給バランス悪化や個人消費の弱さを背景とした物価押し下げの力も、徐々に強まるとみられる。



## 2. 最終需要

### (1) 外生需要

#### (公共投資)

公共投資は増加している。先行きについては、各種経済対策が執行されていくことから、増加を続けると見込まれる。

—— 月次の指標をみると（図表3、4）、発注の動きを示す公共工事請負金額は、1～3月に前期比+3.7%と増加に転じたあと、4～6月も同+5.4%の増加となった。工事進捗を反映する公共工事出来高は、1～3月に前期比+1.7%の増加となったあと、4～5月の1～3月対比は+8.6%と高い伸びになっている。

#### (輸出入)

実質輸出は、大幅に落ち込んだあと、各国の政策措置の効果や海外現地在庫の調整進捗などを背景に、持ち直している（図表5、6(1)）。

—— 実質輸出は、10～12月（前期比-14.6%）、1～3月（同-28.9%）と、大幅に減少したあと、4～6月は前期比+12.3%と2ケタの増加となった。月次の動きをみても、4月以降はつきりとした増加が続いている。こうした動きは、各国で各種政策措置が打たれる中、自動車・電子部品等を中心に海外在庫の調整が進捗したことなどによるものとみられる。

地域別にみると（図表7(1)、8、9）、4～6月は、その他地域を除く全ての国・地域向けが増加となった。とりわけ、中国向けを中心に、東アジア向けの増加が大きい。月次ベースでみると、東アジア向けが5か月連続で前月比増加したほか、米国向けは4か月連続、EU向けも3か月連続で増加した。この間、その他地域（中東、中南米、ロシアなど）向けは、回復が遅れているが、6月は増加した。

財別にみると（図表7(2)）、4～6月は、資本財・部品以外は増加した。月次でみると、情報関連が、在庫調整の急速な進展や中国の家電需要の増加などから、5か月連続ではつきり増加し、中間財（化学製品等）も東アジア向け中心に4か月連続で増加した。自動車関連は、各国の自動車買い換え促進策の効果や<sup>1</sup>、現地在庫の順調な調整進捗を反映して、4月に増加に転じたあと、2か月連続で2ケタ増加となった。

先行きの輸出については、海外現地在庫の調整進捗や海外経済の改善を背景に、持ち直しを続けるとみられる。

---

<sup>1</sup> 自動車買い換え促進策（「スクラップ・インセンティブ」）は、フランス（2008年12月～2009年12月）、ドイツ（2009年1月～2009年12月）、イタリア（2009年2月～2009年12月）、イギリス（2009年5月～2010年3月）、米国（2009年7月初から2009年11月初）のほか、中国、韓国、マレーシアなど、幅広い国で導入されている。



- 輸出を取り巻く環境をみると、海外経済は、全体として下げ止まっている。米国や欧州では、厳しい金融環境が続くもとで景気悪化が続いているが、在庫調整の進捗や企業・家計のコンフィデンス回復などを背景に、悪化のテンポは緩やかになっている。中国では財政政策の効果を主因に内需が強まり、4～6月の実質GDPは前期比年率+18.6%（10～12月-2.3%、1～3月+9.5%〈国際局試算〉）と急拡大した<sup>2</sup>。それ以外の東アジア諸国でも景気の持ち直しを示唆するデータが増えている。今後、金融財政政策の効果が引き続き働くもとで、世界経済全体として景気は下げ止まりから持ち直しに転じていくと予想される。ただし、大幅な過剰の調整には時間がかかるとみられるため、改善傾向の持続性に関する不確実性は大きい。足もとの回復ペースが急速な中国経済についても、上下両方向にリスクがあると考えられる。
- 情報関連を取り巻く環境をみると、最終製品の世界需要は、中国の薄型テレビ需要を中心に、持ち直しつつある（図表10）。
- この間、為替相場について物価上昇率の内外格差を勘案した実質実効レートをみると、本年初にかけて大幅な円高となったが、その後は円安方向へ幾分戻している（図表11）。
- 企業ヒアリングによると、米国の自動車などで在庫調整が急速に進んでおり、息切れが懸念されていた中国の需要回復も、少なくとも7～9月まではエレクトロニクス関連を中心に堅調と聞かれている。10～12月以降についても、世界経済が全体として改善を続けるならば、これまでのリバウンドの勢いは弱まりながらも、輸出の持ち直し傾向が続くと考えられる。ただし、その点については依然として不確実性が大きく、企業の見方もなお総じて慎重である。

実質輸入は、生産が持ち直していることなどから、下げ止まってきている（図表5、6(1)）。

- 1～3月の実質輸入は、国内需要や生産が大幅に落ち込む中、前期比-17.9%と大幅に減少したが、4～6月は同-1.8%と概ね横ばい圏内の動きになった。月次の動きをみると、3月以降、小幅の増加が続いている。
- 4～6月の前期比を財別にみると（図表12(2)）、情報関連が2ケタの増加となったほか、消費財も増加した。ただし、素原料、中間財、資本財・部品、食料品は、引き続き減少した。

先行きの輸入については、国内景気が次第に持ち直しに向かうもとで、緩やかな増加に転じていくと予想される。

純輸出の動きを表す実質貿易収支をみると、上記輸出入の動きを反映して、大幅に減少したあと、最近は大きくリバウンドしている（図表5、6(2)）。実質貿易収支の先行きについては、緩やかな増加を続けると予想される。

<sup>2</sup> 4～6月の実質GDPの前年比は+7.9%。なお、中国人民銀行の試算によれば、4～6月の前期比年率は+14.9%（10～12月+3.7%、1～3月+8.5%）。

—— 名目貿易・サービス収支は、実質貿易収支の大幅悪化を背景に、10～12月、1～3月と赤字化した。4～5月は小幅ながら黒字に復した。当面は、実質貿易収支が緩やかな増加を続けることから、名目貿易・サービス収支は黒字幅が徐々に拡大していくとみられる。経常収支も、当面、黒字幅が緩やかに拡大する見通し。

## (2) 内生需要

### (設備投資)

設備投資は大幅に減少している(図表13)。先行きについては、徐々に下げ止まりに向かうとみられるが、厳しい収益・資金調達環境や強い設備過剰感を背景に、当面、弱めの動きとなる可能性が高い。

—— 機械投資の一致指標である資本財総供給(全体および除く輸送機械)や資本財出荷(同)は、大幅に減少している(図表13、14(1))。資本財出荷の内訳をみても、ほとんどの品目で大幅に減少している。

—— 機械投資の先行指標である機械受注(民需、除く船舶・電力)は、昨年4～6月以降減少を続けており、4～5月の1～3月対比も減少した(図表13、15(1))<sup>3</sup>。業種別にみると、製造業は大幅に落ち込んだあと、4～5月の1～3月対比は増加した。一方、非製造業(除く船舶・電力)は、1～3月にインフラ関連を中心に増加したあと、4～5月の1～3月対比は減少した。

建設投資の先行指標である建築着工床面積(民間非居住用)は(図表13、15(2))、1～3月は概ね横ばいの動きとなったが、4～6月は大幅に減少した。内訳をみると、非製造業は、1～3月にいったん小幅増加したあと、4～6月は、不動産、卸小売、運輸など幅広い業種で大幅に減少した。製造業は、1～3月に続き、4～6月も大幅に減少した。ただし、こうした急減には、昨年末頃からの実態的な落ち込みが統計上遅れて現れてきた面があるとみられる<sup>4</sup>。

—— 大企業(資本金10億円以上)を対象とした日本政策投資銀行による2009年度の設備投資計画(6月調査)をみると、全産業で前年比-9.2%と、2年連続で減少する計画となっている(図表13)<sup>5</sup>。業種別にみると、製造業は自動車、電気機械、一般機械を中心にほとんどの業種で減少する一方、非製造業は電力、運輸などが増加している。目的別には、能力増強の割合が大きく低下したものの、維持・補修や新製品・製品高度化、合理化・省力化などの割合が上昇している。

<sup>3</sup> ただし、5月は電力の大口受注がみられたため、船舶・電力を含む民需全体でみると、4～5月は1～3月比+1.7%となっている。

<sup>4</sup> 建築確認を申請し統計上「着工」となるまでに数か月のタイムラグがあるため、昨年秋以前に申請されていた案件が、その後も数か月間は統計上の「着工」として計上されてきた。

<sup>5</sup> 現時点では未確定な部分が多いが、2010年度計画は、前年比-3.7%の減少となっている。

—— 一方で、日本政策金融公庫（旧中小公庫）調査による中小企業の設備投資実施割合をみると（直近調査は6月中下旬）、2007年後半に30%前後から25%前後に低下したあと、昨年末からはさらに低下しており、足もとは2期連続で20%を若干割り込んでいる（図表16）。

—— 企業収益は大幅に落ち込んでいる（図表17）。大企業についてみると、7月半ば以降公表されている上場企業の2009年4～6月期決算は、ほとんどの先が前年同期との対比で大幅減益となっている<sup>6</sup>。足もとの生産・輸出のリバウンドから通期の業績予想を上方修正する先もみられる反面、先行きの不透明感も大きいため、全体として企業収益が上振れつつあるとは言えない<sup>7</sup>。野村証券調べによる大企業の2009年度経常利益見通しをみると（図表18(1)）、7月時点の見通しは、3月時点の見通しに比べて、製造業は、自動車、電機を中心に若干上方修正となっているが、非製造業は、運輸、卸・小売、住宅・不動産など、幅広い業種で下方修正されている。中小企業の収益に関するDIをみても、これまでの悪化傾向に歯止めはかかっているが、水準はきわめて低い（図表18(2)）。

### （個人消費）

個人消費は、各種対策の効果や価格の低下が下支えに作用するも、一部に持ち直しの動きがみられるものの、全体としては弱めの動きとなっている（図表19）。先行きは、雇用・所得環境が厳しさを増すも、弱めの動きが続く可能性が高い。

—— 全国百貨店売上高は（図表21(1)）、家計の節約志向の強まりを反映して、衣料品や高額商品の不振に加え、食料品も失速していることから、大幅な減少傾向が続いている。6月単月では、セールの前倒しによりやや持ち直したが、ミクロ情報によれば、7月にその反動が出た模様である。全国スーパー売上高も、緩やかな減少傾向が続いている<sup>8</sup>。コンビニエンスストア売上高は、百貨店やスーパーに比べて、底堅い動きとなっているが、足もとは幾分弱めの動きとなってきている。

—— 耐久消費財についてみると（図表20(2)）、家電販売額（実質）は、1～

<sup>6</sup> 日本経済新聞社による集計（7月31日時点）をみると、3月期決算上場企業616社（金融・新興3市場を除く）の連結経常損益は、製造業の赤字幅縮小を主因に、1～3月の1兆4,952億円の赤字から、4～6月は9,783億円の黒字に転じた。経常損益を前年比で見ると、4～6月は-78.0%の大幅減益であるが、2009年度通期では、下期にかけての持ち直しにより、-13.3%の減益にとどまる見通し。

<sup>7</sup> 新光総合研究所の集計（8月5日時点）によれば、3月期決算上場企業（東証1部、除く金融）のうち四半期決算の開示を終えた675社のうち、6月末時点の2009年度通期の経常利益予想（会社予想が未発表の場合、日本経済新聞社予想）を上方修正した企業は63社、据え置いた企業は567社、下方修正した企業は45社。

<sup>8</sup> ミクロ情報によれば、プライベートブランド（PB）商品の相次ぐ投入など、値下げ合戦が過熱する中で、単価の下落が売上高減少の一因とする声が強まっている。

3月に価格下落などを背景に高い伸びとなったあと、4～6月も増加した。マイクロ情報によると、5月15日のエコポイント制度の実施以降、対象製品（特に薄型テレビ＜地上デジタル放送対応＞）の販売はかなり増加している模様である<sup>9</sup>。乗用車の新車登録台数（除く軽自動車）は、3月まで大幅に落ち込んだが、4月以降は減税や補助金の効果などから、はっきりと回復している<sup>10</sup>。

—— サービス消費をみると（図表21(2)）、旅行取扱額は、雇用・所得環境の悪化に加えて、新型インフルエンザ流行の影響もあって、はっきりと落ち込んでいる。外食産業売上高は、振れを伴いつつも、弱めの動きとなっている<sup>11</sup>。

—— 以上の動きを、販売統計合成指数（店舗調整前）でみると、昨秋以降、弱さが目立ってきていたが、足もとは、耐久消費財の持ち直しから、概ね横ばいの動きとなっている（図表22(1)）。財について生産者段階で包括的に捉えた消費財総供給（各種財の国内向け出荷と輸入を合計したもの）をみると、耐久消費財（自動車）の動きを反映して、1～3月に大幅に減少したあと、4～6月は増加した（図表22(2)）<sup>12</sup>。

—— 需要側の統計について、家計調査の消費水準指数を、GDPの推計に利用される品目にはほぼ限定した「除く住居等」のベースでみると（図表19、20(1)）、

<sup>9</sup> エコポイント制度は、省エネルギー家電を購入する際に価格の一定割合をさまざまな商品と交換可能な「エコポイント」として還元する制度で、5月15日にスタートした（2010年3月末までの時限措置）。「エコポイント」の対象となるのは、省エネ性能を示す統一省エネラベルで「4つ星」以上の基準を満たすエアコン、冷蔵庫、テレビの三品目で、エアコンと冷蔵庫は販売価格の5%程度、地上デジタル放送対応テレビは10%程度を目安として、それぞれ出力、容量、画面の大きさに応じてポイントが設定されている。なお、エアコンについては、天候不順もあって、需要喚起にあまりつながっていないという声も少なくない。

<sup>10</sup> 2009年度税制改正により、2009～2011年度までの間、環境負荷の低い車を対象とした自動車取得税と自動車重量税の免除・減税が実施される。自動車取得税は取得時の価格に対して5%（ただし、低排出ガス車や燃費基準達成車、軽自動車は軽減措置あり）、自動車重量税は取得時と車検時に重量に応じてかかるが、4月からは、電気自動車、燃料電池車、ハイブリッド車は免除、通常のガソリン車でも環境対応の程度によって50%ないし75%の減税となっている。

また、補助金については、「スクラップ・インセンティブ」（車齢13年以上の乗用車を廃車にし、2010年度燃費基準達成車に買い換える場合、軽乗用車以外で25万円/台、軽乗用車で12.5万円/台が補助される）や「エコカー・インセンティブ」（廃車は伴わないものの、2010年度燃費基準+15%を達成している車を購入する場合、軽乗用車以外で10万円/台、軽乗用車で5万円/台が補助される）が、4月10日以降の購入分に適用されている。

<sup>11</sup> 本統計ではファーストフードのウェイトが実勢よりも高いとみられ、消費者の節約志向を反映して低価格業態へのシフトが生じている現局面では、売上高の伸び率が外食産業全体の实勢よりも強めに出ている可能性が高い。マイクロ情報によると、調査対象外も含めた実勢としては、伸び悩み傾向がさらに強い模様である。

<sup>12</sup> 消費財総供給には、流通在庫の変動分も含まれる。

4～6月は前期比概ね横ばいとなった<sup>13</sup>。一方、家計消費状況調査の支出総額（二人以上の世帯、実質ベース）は、耐久消費財の増加を主因に、4～6月の前期比がはっきりした増加となった。

—— 需要・供給両面の月次統計をGDPに近い方法で合成した消費包括指数（CCI）は、1～3月は前期比-1.2%となったあと、4～6月の前期比は+0.1%となった（図表22(3)）<sup>14</sup>。

—— 消費者コンフィデンス関連指標は、なお低水準にあるものの、小売価格の下落に加え、各種の需要喚起政策などから、総じて持ち直している（図表23）。

### （住宅投資）

住宅投資は減少している。先行きの住宅投資については、着工戸数の動きなどからみて、当面、減少を続けると予想される。

—— 先行指標である新設住宅着工戸数をみると（図表24、25(1)）、1～3月の年率90.4万戸のあと、4～6月は同76.2万戸となった<sup>15</sup>。昨秋以降、雇用・所得環境が厳しさを増したことや、不動産関連セクターを取り巻く金融環境が一段と悪化したことなどから、水準を大きく切り下げている。

—— 首都圏新築マンション販売をみると（図表24、25(2)）、全売却戸数は、1～3月は、期末に向けて大幅な値下げ販売が行われたこともあって、幾分増加したが、4～6月はその反動もあって再び減少した。在庫は減少しつつあるがなお高水準にあるうえ、先行きの雇用・所得環境にも不安が大きい。このため、多くの事業者は、慎重な姿勢を崩しておらず、用地の新規取得の動きは引き続き鈍い。着工の持ち直しにはなおかなりの時間がかかるとみられる。

## 3. 生産・出荷・在庫

鉱工業生産は、大幅に落ち込んだあと、内外の在庫調整の進捗や政策効果を背景に、持ち直している（図表26、27）。

—— 生産は、6月は前月比+2.4%と、4か月連続で増加した。四半期ベースでみると、10～12月に前期比-11.3%、1～3月に同-22.1%と大幅に減少

<sup>13</sup> 消費水準指数（除く住居等）は、消費支出合計から、住居や自動車等購入、贈与金、仕送り金を除いている。それでもなお、GDP推計に用いられない項目が残存している（例えば教育費）。

<sup>14</sup> 消費包括指数（CCI）は、「生産動態統計」、「特定サービス産業動態統計調査」、「家計調査」、「家計消費状況調査」などを用い、GDP個人消費にできるだけ近い方法で調査統計局が試算している指標（対外非公表）。ただし、CCIの供給面の試算では、在庫の変動が考慮されていない点には注意が必要である。

<sup>15</sup> 76.2万戸は、四半期計数では、1965年の現行統計開始以来最低の水準。

したあと、4～6月は同+8.3%と大きくリバウンドした(図表 27)<sup>16</sup>。前年比でみると、6月は-23.4%と、大幅なマイナスであるが、マイナス幅は一頃に比べ幾分縮小している。4～6月の前期比を業種別にみると、一般機械や精密機械は、世界的な設備投資圧縮から、引き続き減少したものの、それ以外の業種については、在庫調整の進捗や自動車の増産効果などを背景として、電子部品・デバイスや輸送機械を中心に、幅広く増加した。

—— 出荷も、10～12月に前期比-11.0%、1～3月に同-21.0%と大幅に減少したあと、4～6月は同+6.4%と増加した。4～6月の前期比を財別にみると(図表 28)、耐久消費財や生産財は、昨秋以降大きく落ち込んだあと、はっきりと増加している。一方、資本財や建設財は、大幅に減少したあと低迷が続いている。この間、非耐久消費財は、横ばい圏内で推移している。

在庫は、大幅減産の効果から減少を続けている(図表 26、29)。

—— これまでの大幅な減産により、在庫調整に一定の進捗がみられている。6月の在庫は6か月連続で減少し、直近ピークである12月末との対比で減少幅は-13.0%となった。業種別にみると、輸送機械、電子部品・デバイス、情報通信機械といった加工業種で減少幅が大きくなっているが、足もとは化学、鉄鋼など素材業種でもはっきりと減少してきている。

—— 財別に出荷・在庫バランスをみると(図表 29)、資本財(除く輸送機械)、建設財は、出荷の大幅減少を背景に、在庫調整圧力が依然大きい状態にある。一方、電子部品・デバイスは、出荷の持ち直しもあって在庫調整圧力はほとんどみられなくなっており、その他生産財(化学、鉄鋼など)も、全体として緩やかに改善している<sup>17</sup>。耐久消費財は、この統計には反映されない海外在庫も含めて、在庫調整が順調に進捗している。

先行きの生産については、引き続き内外の在庫調整の進捗や政策効果により、当面、持ち直しを続けると予想される。

—— 企業からの聞き取り調査によると、7～9月は前期比+7%台の増加と、鉄鋼、自動車、電子部品・デバイスなどの上振れにより、前月時点の計画(同+7%程度の増加)から小幅上方修正されている<sup>18</sup>。10～12月については、+1%弱の増加が一応予想されているが、前期からのゲタの影響も小さくない。え、海外経済情勢の順調な改善が前提となっており、不確実性は大きい。その先も含めて、最終需要が持続的な回復に向かうかどうかについては、企

<sup>16</sup> +8.3%は、1953年の現行統計開始以降、1953年4～6月の+8.9%に次ぐ大きさの四半期増加率。なお、これまで四半期で最大の増加率は1959年4～6月の+7.7%であったが、今回、経済産業省が、接続指数の指数値をもとに前期比を計算する方法から、各基準の指数値をもとに前期比を計算する方法に改めたことにより、1953年4～6月の+8.9%が四半期ベースで最大の増加率になった。

<sup>17</sup> 業種別には、化学で大幅に改善が進み、鉄鋼で調整が遅れるなど、差異がみられる。

<sup>18</sup> 生産予測指数をみると、7月は前月比+1.6%、8月は同+3.3%となっている。9月が8月と同水準であると想定して、7～9月の前期比を計算すると+7.4%となる。

業の見方はなお慎重である。

非製造業の動向を示す第3次産業活動指数をみると、鉱工業生産の持ち直しなどを背景に、減少に歯止めがかかりつつある（図表 26）。

#### 4. 雇用・所得

雇用・所得環境は、労働需給が大幅に緩和し、雇用者所得も大幅に減少するなど、厳しさを増している。

—— 労働需給に関連する指標をみると（図表 30、31）、有効求人倍率は低下を続けている。6月の有効求人倍率は、前月から0.01ポイント低下し、0.43倍となった。これは13か月連続の低下であり、2か月連続で既往最低を更新した<sup>19</sup>。完全失業率は、速いペースでの上昇が続いており、6月は5.4%となった。この水準は、2003年6月（5.4%）以来6年振りであり、過去最高の5.5%（2002年6月、2002年8月、2003年4月）にかなり近づいた<sup>20</sup>。この間、労働力率は、男性を中心に<sup>21</sup>、小幅の低下となっている。

—— 雇用面についてみると（図表 30、32(1)）、労働力調査の雇用者数は、2月まで前年比ゼロ%近傍で推移していたが、3月以降は減少が明確になっており、6月は前年比-2.0%となった<sup>22</sup>。内訳をみると、製造業のほか、派遣労働者の削減を反映して、サービス業の落ち込みが目立っている<sup>23</sup>。それでも、景気の悪化度合いに比べれば、雇用者数の減少はなお小幅である。これには、①雇用調整助成金の利用を通じて雇用の維持が図られていること<sup>24</sup>、

<sup>19</sup> 正社員の月間有効求人数を、パートタイムを除く常用の月間有効求職者数で除して算出した正社員有効求人倍率は、前月と同じ0.24倍となった。0.24倍は、統計開始の2004年11月以降最低。パートタイムを除く常用の有効求職者には派遣労働者や契約社員を希望する者も含まれるため、厳密な意味での正社員求人倍率より低い値となる。

<sup>20</sup> なお、「UV分析」（失業と欠員の関係から失業率の構造的な部分と循環的な部分を識別する手法）により構造的失業率を推計すると、足もと小幅の上昇が観察される（図表 31(4)）。

<sup>21</sup> 女性の労働力率は足もとも横ばい圏内の動きとなっている。景気後退期の女性の労働参加については、①雇用機会の減少を受けて労働市場から退出する動き（就業意欲喪失効果）と、②世帯主収入の低下を補うために労働市場に参加する動き（家計補助動機効果）、の双方が考えられる。1970年代以前は②の動きが支配的であった一方、1980年代以降は、女性の労働参加が上昇トレンドをたどるも、②の動きはあまり顕在化しなかった。この点、今回は、景気が急速に落ち込む中で、②の効果が強めに出て求職を押し上げている可能性がある。

<sup>22</sup> -2.0%の減少率は、接続指数でみると、1954年1月（-2.2%）以来。ただし、接続指数は、標本設計の改正や調査範囲の拡大により、厳密には指数が連続していない。現行と同じベースで遡れる1972年7月以降でみれば、過去最大の減少率。

<sup>23</sup> 厚生労働省の調査（7月21日時点、7月31日公表）によると、昨年10月から本年9月までの間に失職したか、失職が決まっている派遣社員などの非正規労働者は22.9万人と、前回調査（6月30日発表、22.3万人）から若干増加した。

<sup>24</sup> 雇用調整助成金等にかかる休業等実施計画届の受理状況を見ると、4月にかけて急増したあと、5～6月は幾分減少する動きとなっているが、依然として雇用者数の4%以上に当た

②操業日数の減少や短時間パート労働の増加などにより一人当たり労働時間が大幅に減少していること、などが寄与していると考えられる。

—— 毎月勤労統計の常用労働者数も、伸び率が急速に低下し、5月、6月は前年比マイナスとなった。なお、パート比率は緩やかに上昇している（図表32(2)）。この間、所定外労働時間は、製造業を中心に大幅に減少したあと、減少に歯止めがかかってきている（図表32(3)）<sup>25</sup>。

—— 一人当たり名目賃金は（図表30、33(1)）、前年比マイナス幅が拡大しており、6月は同一7.1%と大幅な減少となった。内訳をみると、所定内給与や所定外給与が、製造業を中心とした労働時間の減少などを背景にマイナスを続けている。そうした中で、夏季賞与の6割を占める6月の特別給与が、収益の大幅な悪化を背景に、前年比-14.5%と大幅に減少した（図表34）。賞与については単なる支給月のずれも無視しえない規模で生じうるため、本年の夏季賞与の最終的な評価は7月、8月の統計を待つ必要があるが、各種アンケート調査をみても、主要企業の夏季賞与の伸び率は昨年と比べて大幅に低下している<sup>26</sup>。

—— 雇用者所得は、以上のような雇用・賃金動向を反映し、大幅に減少している（図表33(3)）。毎月勤労統計ベースの雇用者所得は8か月連続で、SNA雇用者報酬と同様に労働力調査を用いた雇用者所得は13か月連続で、前年を下回っている。

先行きの雇用者所得については、これまでの企業収益や生産の落ち込みがラグを伴って影響することなどから、当面、大幅な減少を続ける可能性が高い。

—— 企業業績が大幅に悪化するもとの、賃金には下方圧力が強くかかっている。今後、輸出関連産業だけでなく、内需産業も含めて、事業の縮小や整理などの動きが雇用・賃金面へ及ぼす影響は、注意深くみていく必要がある。

## 5. 物価

（物価を取り巻く環境）

国際商品市況は、最近では、全体としては概ね横ばい圏内で推移している（図表36）。

—— 原油価格は、春先から7月初めにかけてかなり上昇したあと、横ばい圏内

---

る申請がみられている（4月253万人、5月234万人、6月238万人）。

<sup>25</sup> 製造業の所定外労働時間の前年比は、3か月連続でマイナス幅が縮小した（3月-48.9%、4月-45.8%、5月-42.6%、6月-40.7%）。もっとも、水準で見ると、引き続き過去の景気ボトムを大きく下回っている。

<sup>26</sup> 主要企業の夏季賞与について、日本経済新聞社（6月30日時点の最終集計）、日本経団連（7月31日時点の最終集計）のアンケート調査をみても、大幅な減少が予想されている（それぞれ前年比、-16.6%、-17.2%）。



の動きとなっていたが、足もとは再び強含んでいる。非鉄金属は、在庫調整が進捗する中、投機資金の流入もあって、上昇基調にある。液晶パネルは、中国からの引き合い増を背景に、引き続き強含んでいる。半導体(DRAM、フラッシュメモリー)は、きわめて低い水準から本年前半に回復したあと、最近はやや横ばい圏内の動きとなっている。一方、穀物は、主要産地で好天が続く中、豊作が見込まれていることなどから、最近はやや軟調となっている。

輸入物価 (円ベース) を3か月前比で見ると、ゼロ%近傍で推移している(図表 35、37)。

国内商品市況は、国際商品市況の既往の上昇が押し上げに働く一方で、国内の製品需給が引き緩んでいるため、全体として横ばい圏内で推移している(図表 38)。

—— 石油製品は、既往の原油市況の動きを受けて、上昇が一服している。一方、非鉄金属は、国際商品市況の動きを反映して、上昇基調にある。また、鋼材は、建設需要の低迷などを背景に、なお緩やかな下落傾向にある。紙・板紙も軟調に推移している。この間、化学は一進一退となっている。

#### (物価指数)

国内企業物価 (夏季電力料金調整後) を3か月前比で見ると、製品需給緩和の影響などから、緩やかな下落を続けている(図表 35、39)。先行きについては、製品需給が緩和した状態が続くもとの、当面、緩やかな下落が続けるとみられる。

—— 6月の国内企業物価は、3か月前比で-1.3%と9か月連続でマイナスとなったが、マイナス幅は一頃に比べ縮小している<sup>27</sup>。

内訳をみると(図表 39)、「為替・海外市況連動型」は石油・石炭製品や非鉄金属の動きを反映し、3か月連続で上昇している。「鉄鋼・建材関連」や「素材(その他)」は引き続き下落している。また、「機械類」は電気機器を中心に、「その他」は加工食品を中心に、小幅のマイナスが続いている。この間、「電力・都市ガス・水道」は、天然ガス価格など既往のコスト低下を反映した電力料金の引き下げなどから、マイナス幅が拡大している。

—— 輸入品を含む国内需要財全体で見ると(図表 40)、素原材料や最終財は横ばいの動きとなっているが、中間財は、電力料金や鉄鋼などの動きを反映して、なお下落が続いている。

企業向けサービス価格 (除く海外要因) の前年比は、企業の経費削減の動きなどを受けて、マイナスが続いている(図表 35、41)。

—— 主な内訳をみると、広告が、企業の抑制的な出稿スタンスを背景に大幅なマイナスを続けているほか、情報サービス、リース・レンタルなどが、マイナスとなっている。労働者派遣サービスも、6月は、単月の振れがあるとはいえ、前年比-1.2%と最近にない大幅なマイナスとなった。

<sup>27</sup> 前年における石油製品価格高騰の反動などから、前年比は-6.6%と、6か月連続のマイナスとなった。マイナス幅は1960年の統計開始以来最大。

—— 海外要因を含む総平均ベースは、外航貨物輸送を中心に、大幅な前年比マイナスが続いている。

消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、経済全体の需給が緩和した状態が続く中、前年における石油製品価格高騰の反動などから、マイナス幅が拡大している（図表 35、42）。

—— 6月の全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、前月から0.6%ポイント低下し、-1.7%となり、下落幅は2か月連続で既往最大を更新した。前年比マイナスは4か月連続。内訳について最近の傾向的な動きをみると、財価格は、石油製品のマイナス幅拡大や、食料工業製品のプラス幅縮小などから、マイナス幅が大きく拡大している。サービス価格は、外国パック旅行のマイナス幅拡大や携帯電話料金のマイナス転化、外食や家事関連サービスのプラス幅縮小などを反映して、マイナス幅が拡大している。公共料金は、電力料金の引き下げなどから、マイナスに転じている。

—— 品目別価格変動分布の両端の一定割合を機械的に控除した刈込平均指数（いわば大きな相対価格変動を除去したコア指数）の前年比は、プラス幅の縮小が続き、6月ははっきりとしたマイナスとなった（図表 43）。6月の除く食料・エネルギーの前年比は、前月から0.2%ポイント低下し、-0.7%にまでマイナス幅が拡大した。

先行きの消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、前年における石油製品価格高騰の反動などから、当面、下落幅を拡大していくと予想される。

—— 7月の東京の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、石油製品や電気代、外国パック旅行のマイナス寄与拡大、食料工業製品のマイナス寄与転化などから、前月から0.4%ポイント低下し-1.7%となった（図表 44）。除く食料・エネルギーの前年比も、日用品を多く含むその他財や外国パック旅行の下落などから、マイナス幅が拡大している（5月-0.9%、6月-1.0%、7月-1.1%）。

—— 全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比については、石油製品のマイナス寄与拡大や食料の弱さなどから、7～9月は-2%台前半になると予想される。マイナス幅拡大の主因は前年上昇の反動であるが、経済全体の需給バランス悪化や個人消費の弱さを背景とした物価押し下げの力も、徐々に強まるとみられる。

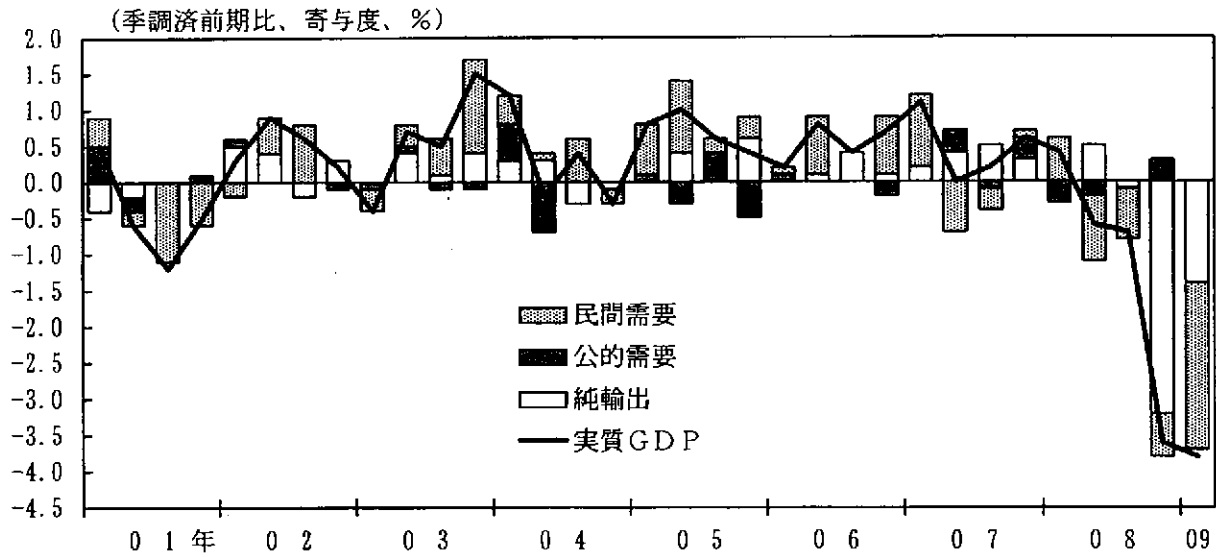
以 上

「経済活動の現状評価」 図表一覧

(図表 1)	実質GDPと景気動向指数	(図表 26)	生産・出荷・在庫関連指標
(図表 2)	GDPデフレーターと所得形成	(図表 27)	生産
(図表 3)	公共投資関連指標	(図表 28)	財別出荷
(図表 4)	公共投資	(図表 29)	在庫循環
(図表 5)	輸出入関連指標	(図表 30)	雇用関連指標
(図表 6)	輸出入	(図表 31)	労働需給（1）
(図表 7)	実質輸出の内訳	(図表 32)	労働需給（2）
(図表 8)	米国向け輸出の動向	(図表 33)	雇用者所得
(図表 9)	その他地域向け輸出の動向	(図表 34)	夏季賞与
(図表 10)	情報関連輸出の動向	(図表 35)	物価関連指標
(図表 11)	実質実効為替レート	(図表 36)	国際商品市況と輸入物価
(図表 12)	実質輸入の内訳	(図表 37)	輸入物価
(図表 13)	設備投資関連指標	(図表 38)	国内商品市況
(図表 14)	設備投資一致指標	(図表 39)	国内企業物価
(図表 15)	設備投資先行指標	(図表 40)	企業物価指数の需要段階別推移
(図表 16)	中小企業の設備投資実施企業割合	(図表 41)	企業向けサービス価格
(図表 17)	企業収益関連指標	(図表 42)	消費者物価（全国）
(図表 18)	企業収益の動向	(図表 43)	消費者物価における食料・エネルギーの影響
(図表 19)	個人消費関連指標	(図表 44)	消費者物価（東京）
(図表 20)	個人消費（1）	(図表 45)	地価関連指標
(図表 21)	個人消費（2）		
(図表 22)	個人消費（3）		
(図表 23)	消費者コンフィデンス		
(図表 24)	住宅関連指標		
(図表 25)	住宅投資関連指標		

# 実質GDPと景気動向指数

## (1) 実質GDP



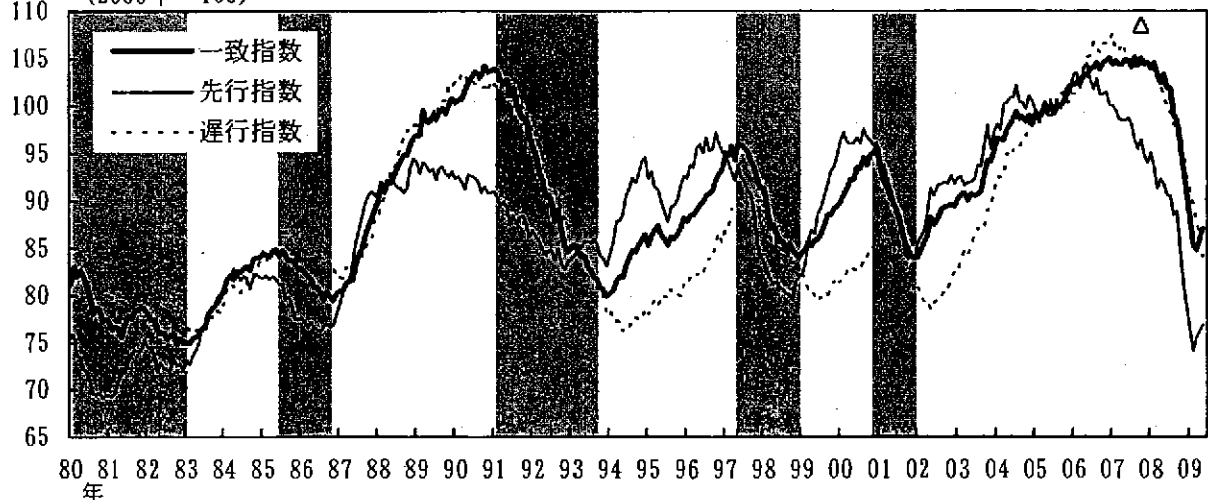
## (2) 需要項目別の動向

(季調済前期比、内訳は寄与度、%)

	2008年				2009年
	1~3月	4~6	7~9	10~12	1~3
実質GDP	0.4	-0.6	-0.7	-3.6	-3.8
国内需要	0.3	-1.1	-0.7	-0.3	-2.3
民間需要	0.6	-0.9	-0.7	-0.6	-2.3
民間最終消費支出	0.8	-0.5	0.1	-0.4	-0.6
民間企業設備	0.2	-0.5	-0.7	-1.0	-1.3
民間住宅	0.1	-0.1	0.1	0.2	-0.2
民間在庫品増加	-0.5	0.1	-0.2	0.7	-0.2
公的需要	-0.3	-0.2	-0.0	0.3	0.0
公的固定資本形成	-0.2	-0.0	0.0	-0.0	0.0
純輸出	0.0	0.5	-0.1	-3.2	-1.4
輸出	0.4	-0.2	0.2	-2.8	-4.2
輸入	-0.4	0.7	-0.2	-0.5	2.7
名目GDP	1.0	-1.8	-1.7	-1.3	-2.7

## (3) 景気動向指数 (CI)

(2005年=100)



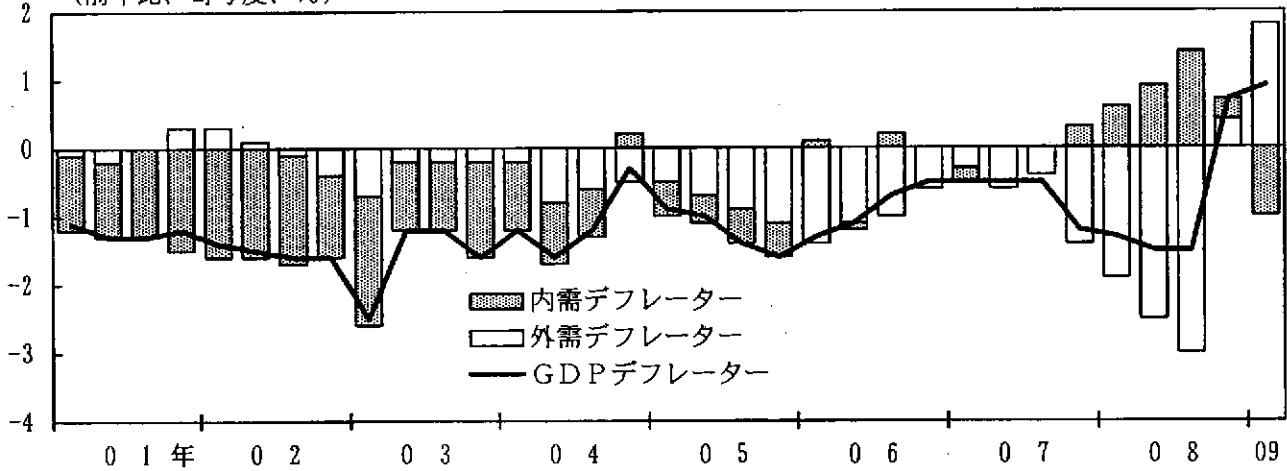
(注) シャド一部分は景気後退局面。△は直近の景気の山。

(資料) 内閣府「国民経済計算」「景気動向指数」

# GDPデフレーターと所得形成

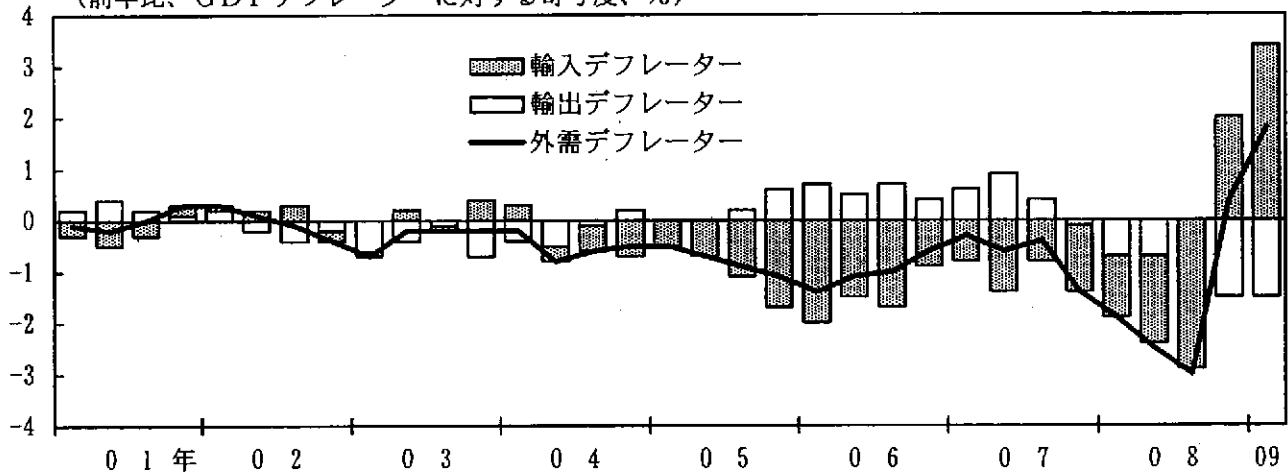
## (1) GDPデフレーター

(前年比、寄与度、%)



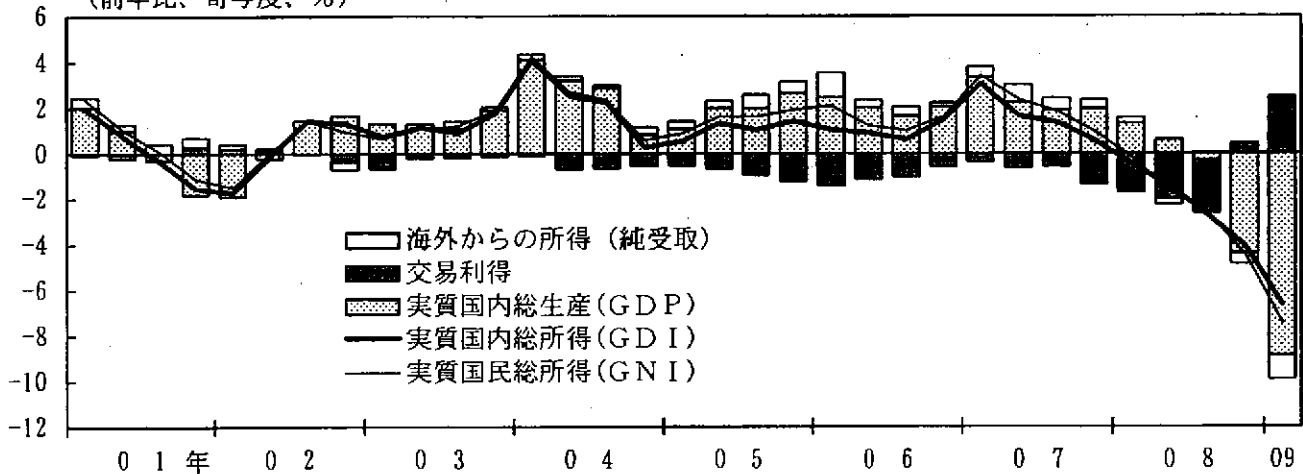
## (2) 外需デフレーター

(前年比、GDPデフレーターに対する寄与度、%)



## (3) マクロの所得形成

(前年比、寄与度、%)



(注) 内訳は実質国民総所得(GNI)に対する寄与度。  
交易利得は以下のとおり定義される。  
交易利得=名目純輸出/輸出・輸入デフレーター加重平均-実質純輸出

(資料) 内閣府「国民経済計算」

## 公共投資関連指標

### ＜公共工事出来高金額＞

— 季調済年率換算：兆円、〈 〉内は前期(月)比、( )内は前年比：％

	08年度	08/10～12月	09/1～3	4～6	09/3月	4	5
公共工事出来高金額	16.9	16.9	17.2	18.7	17.5	18.4	18.9
	( -0.4)	( -0.3)	( 2.1)	( 12.6)	( 4.5)	( 11.3)	( 14.3)
		〈 0.5〉	〈 1.7〉	〈 8.6〉	〈 2.0〉	〈 5.6〉	〈 2.4〉

(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。

3. 2009/4～6月の季調済年率換算金額は4～5月の値、季調済前期比は4～5月の1～3月対比、前年比は4～5月の前年同期比。

### ＜公共工事請負金額＞

— 季調済年率換算：兆円、〈 〉内は前期(月)比、( )内は前年比：％

	08年度	08/10～12月	09/1～3	4～6	09/4月	5	6
公共工事請負金額	11.8	11.7	12.1	12.8	13.8	12.3	12.2
	( 0.1)	( -2.8)	( 7.8)	( 13.0)	( 20.5)	( 2.5)	( 12.7)
		〈 -1.4〉	〈 3.7〉	〈 5.4〉	〈 11.8〉	〈 -10.9〉	〈 -1.0〉
うち国等の発注 〈ウエイト36.4%〉	4.3	4.3	4.5	4.5	4.9	4.6	4.1
	( 1.8)	( 4.4)	( 10.0)	( 11.8)	( 15.9)	( 10.7)	( 7.8)
		〈 1.5〉	〈 4.6〉	〈 0.1〉	〈 2.9〉	〈 -5.0〉	〈 -11.5〉
うち地方の発注 〈ウエイト63.6%〉	7.5	7.3	7.6	8.2	8.9	7.7	8.1
	( -0.8)	( -5.4)	( 5.7)	( 13.7)	( 23.4)	( -4.0)	( 15.2)
		〈 -3.0〉	〈 3.2〉	〈 8.6〉	〈 17.3〉	〈 -14.1〉	〈 5.3〉

(注) 1. 「ウエイト」は、合計に占める各発注主体別計数のウエイト(2008年度)。

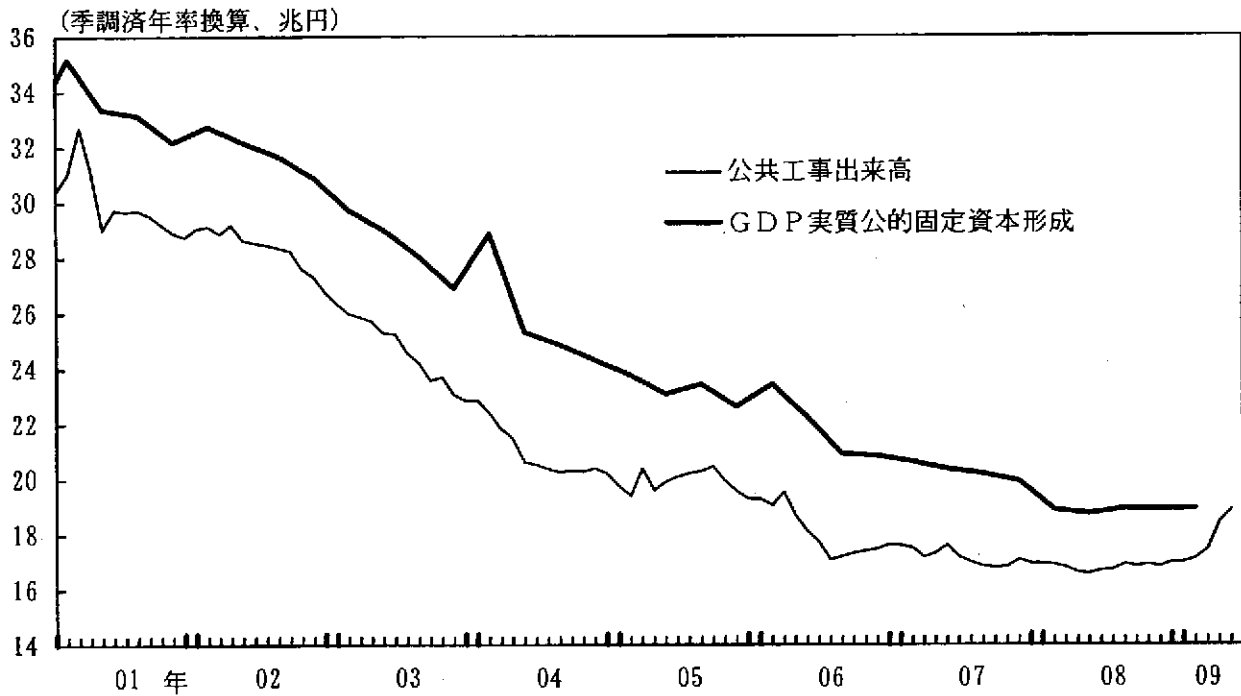
2. X-12-ARIMAによる季節調整値。

3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。  
「国等」は「国」・「独立行政法人等」・「その他」の合計。

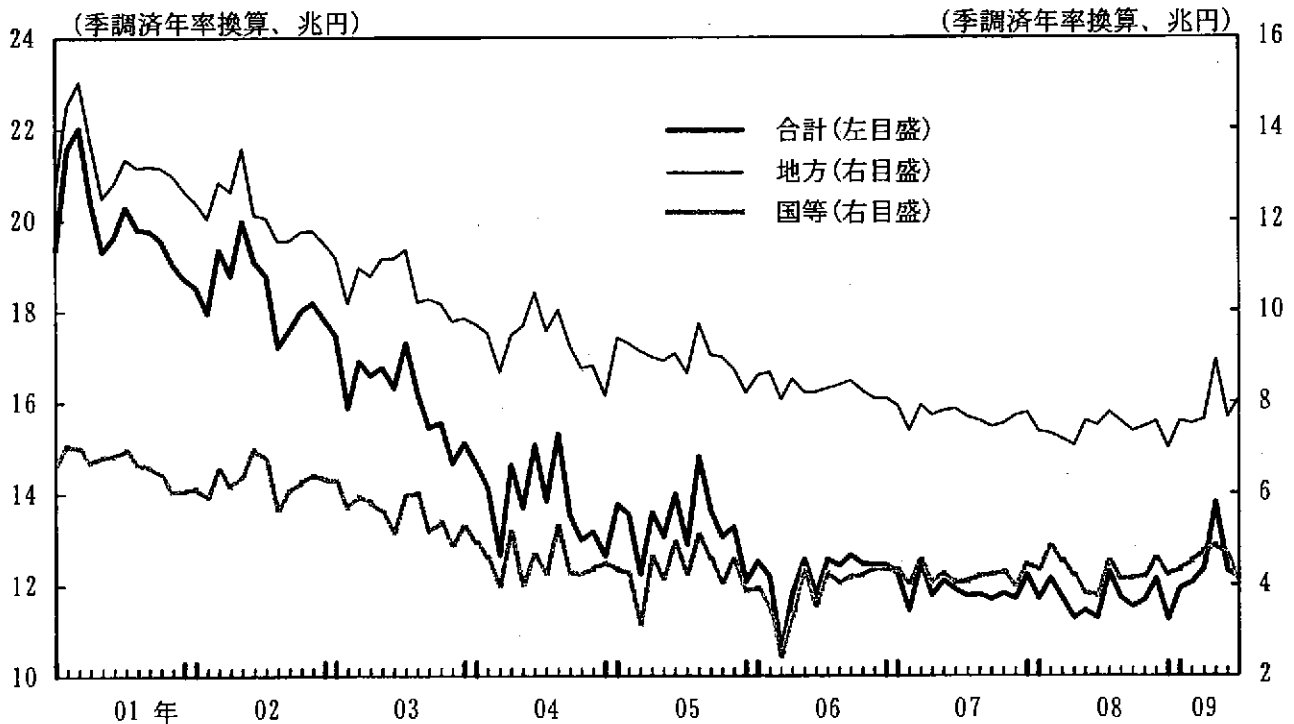
(資料) 国土交通省「建設総合統計」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」

# 公共投資

## (1) 公共工事出来高とGDP実質公的固定資本形成



## (2) 公共工事請負金額



- (注) 1. GDP実質公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。  
2. 公共工事出来高は、国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。  
3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。  
「国等」は「国」・「独立行政法人等」・「その他」の合計。  
4. 公共工事請負金額及び公共工事出来高は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 内閣府「国民経済計算」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、国土交通省「建設総合統計」

## 輸出入関連指標

## 〈実質輸出入〉

— 〈〉内は季調済前期(月)比、( )内は前年比：％  
 — 実質貿易収支は指数水準：季調済、2005年=100

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
実質輸出	(-11.5)	〈-14.6〉 (-13.8)	〈-28.9〉 (-40.7)	〈12.3〉 (-31.5)	〈7.8〉 (-34.0)	〈5.1〉 (-33.6)	〈5.7〉 (-26.9)
実質輸入	(-5.2)	〈0.7〉 (-0.4)	〈-17.9〉 (-19.3)	〈-1.8〉 (-17.9)	〈0.8〉 (-16.7)	〈2.6〉 (-20.5)	〈0.7〉 (-16.5)
実質貿易収支	187.8 (-28.5)	142.1 〈-51.3〉 (-47.9)	23.1 〈-83.7〉 (-93.5)	108.0 〈366.7〉 (-63.5)	84.3 〈100.8〉 (-73.9)	102.5 〈21.6〉 (-64.5)	137.0 〈33.6〉 (-51.8)

(注) X-12-ARIMAによる季節調整値。

## 〈国際収支〉

— 季調済金額：兆円(名目GDP比率は%)、〈〉内は前期(月)比：％

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/3月	4	5
経常収支	12.34	2.09 〈-48.4〉	1.79 〈-14.2〉	2.97 〈66.0〉	0.94 〈35.0〉	0.97 〈2.9〉	1.02 〈5.1〉
[名目GDP比率]	[2.5]	[1.7]	[1.5]				
貿易・サービス収支	-0.89	-1.21 〈-383.3〉	-1.14 〈-5.8〉	0.30 〈-126.0〉	-0.16 〈-32.2〉	0.04 〈-128.1〉	0.15 〈240.2〉

(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 2009/4~6月の季調済金額は4~5月の四半期換算値、季調済前期比は4~5月の1~3月対比。

## 〈数量指数〉

— 〈〉内は季調済前期(月)比、( )内は前年比：％

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
輸出数量	(-14.0)	〈-16.8〉 (-19.6)	〈-26.6〉 (-42.5)	〈10.8〉 (-33.2)	〈3.4〉 (-35.9)	〈5.5〉 (-36.2)	〈6.0〉 (-27.6)
輸入数量	(-5.1)	〈-4.7〉 (-6.6)	〈-13.4〉 (-19.0)	〈-1.5〉 (-20.8)	〈5.6〉 (-20.3)	〈-0.8〉 (-24.0)	〈1.4〉 (-18.2)

## 〈為替相場〉

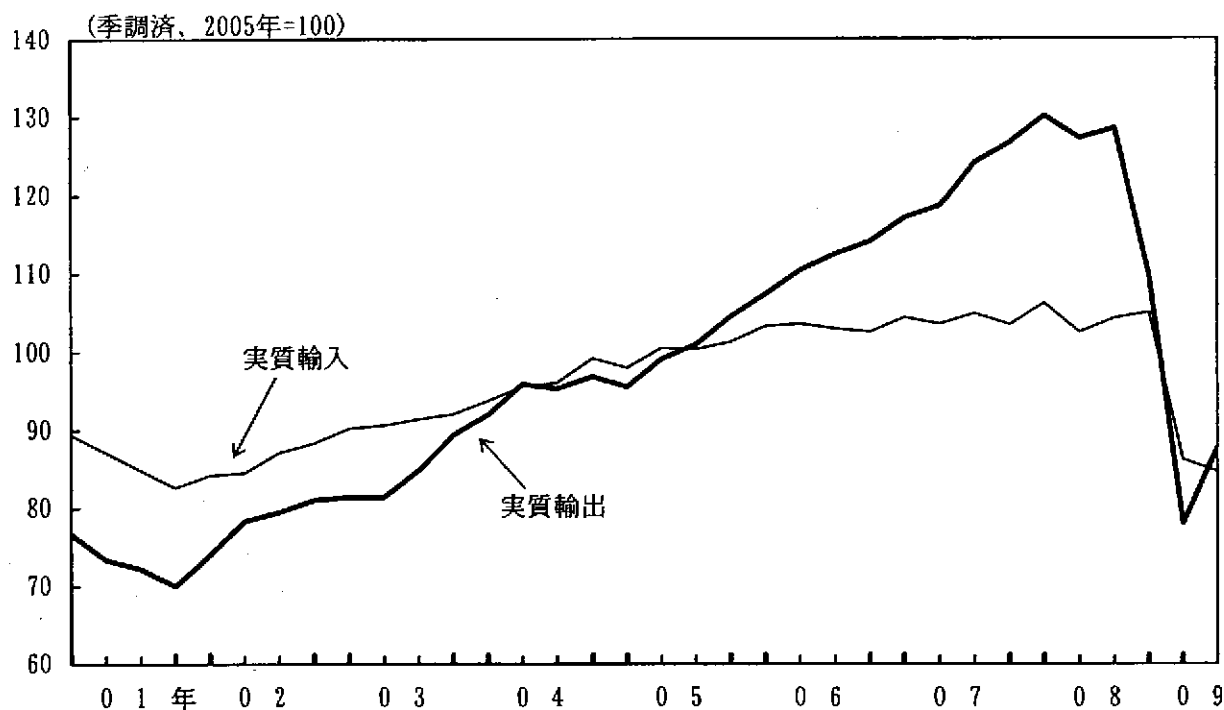
	06年末	07	08	09/3月末	4	5	6	7
ドル→円	118.92	113.12	90.28	98.31	97.67	96.45	95.56	95.61
ユーロ→円	156.69	165.70	127.20	130.52	130.64	135.04	134.84	134.95

(資料) 財務省「貿易統計」、内閣府「国民経済計算」、  
 財務省・日本銀行「国際収支状況」、日本銀行「金融経済統計月報」「企業物価指数」

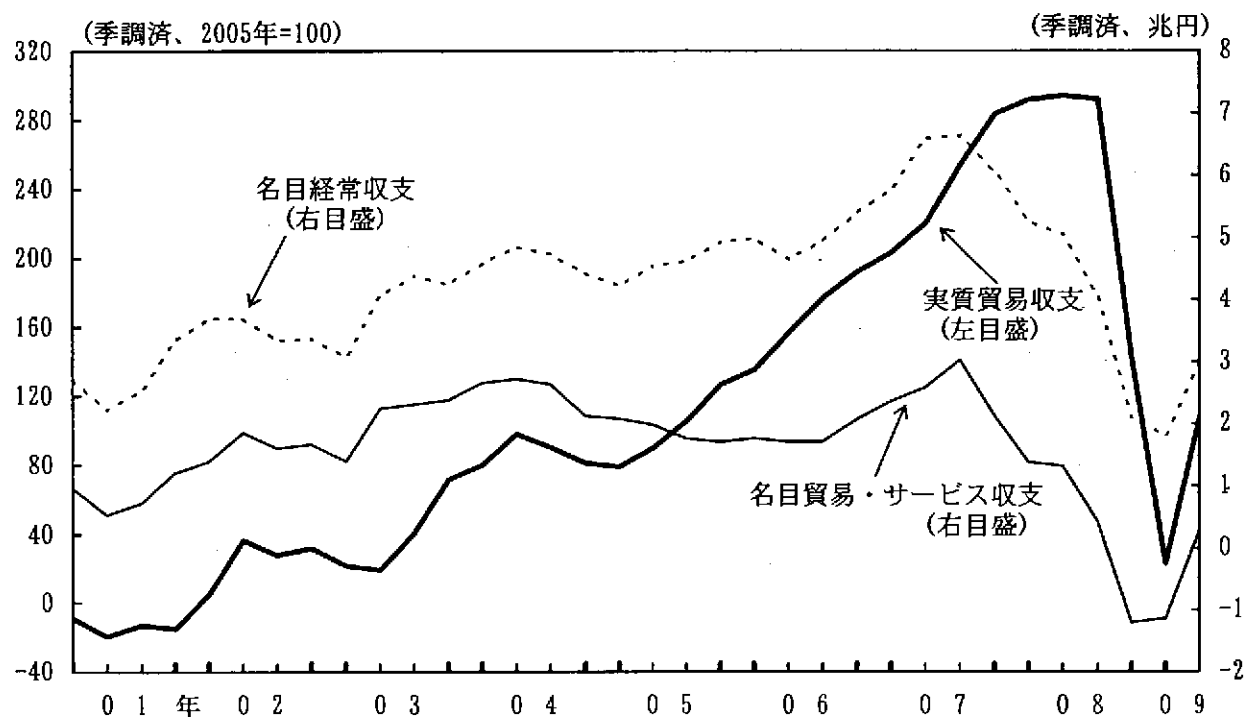


# 輸出入

## (1) 実質輸出入



## (2) 対外収支



- (注) 1. 実質輸出入は、通関輸出入金額を輸出入物価指数で各々デフレートし、指数化したもの。実質貿易収支は、実質輸出入の差を指数化したもの。
- 2. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。
- 3. 2009/2Qの名目経常収支、名目貿易・サービス収支は4~5月の四半期換算値。

(資料) 財務省「貿易統計」、財務省・日本銀行「国際収支状況」、日本銀行「企業物価指数」

(図表 7)

## 実質輸出の内訳

### (1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 2007年	2008	2008年 2Q	3Q	4Q	2009 1Q	2Q	2009年 4月	5	6
米国	<17.5>	-1.2	-8.9	-7.2	-4.9	-9.0	-35.7	11.9	0.4	11.2	8.0
EU	<14.1>	13.0	-0.1	-7.8	-2.8	-17.2	-27.0	4.9	14.8	3.1	2.3
東アジア	<46.8>	9.9	3.3	-2.5	-0.4	-15.6	-22.2	18.2	10.2	6.0	3.4
中国	<16.0>	16.8	6.7	-0.0	-1.3	-14.8	-17.1	19.7	13.0	3.1	2.9
NIEs	<22.1>	5.2	-0.1	-4.8	0.8	-18.4	-22.4	19.3	12.4	4.7	2.9
韓国	<7.6>	5.3	-0.3	-4.8	2.2	-21.6	-13.5	12.9	8.1	2.0	4.2
台湾	<5.9>	0.0	-4.4	-9.0	-2.5	-21.9	-19.7	22.2	7.4	8.8	1.6
香港	<5.2>	7.3	-2.5	-6.0	-2.7	-16.5	-23.8	21.8	24.3	4.7	-3.2
シンガポール	<3.4>	12.5	13.3	-5.8	6.8	-10.4	-31.0	13.0	11.8	-1.5	16.7
ASEAN4	<8.8>	11.4	6.3	-1.1	-1.5	-9.9	-30.7	12.2	-1.7	17.6	5.7
タイ	<3.8>	9.8	4.9	-5.4	1.2	-6.6	-36.1	12.0	7.0	11.3	9.4
その他	<21.5>	20.4	16.1	-0.9	1.9	-7.9	-30.7	-6.1	5.9	-4.3	9.1
実質輸出計		9.1	1.8	-2.2	1.0	-14.6	-28.9	12.3	7.8	5.1	5.7

(注) 1. < >内は、2008年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。  
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。  
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

### (2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 2007年	2008	2008年 2Q	3Q	4Q	2009 1Q	2Q	2009年 4月	5	6
中間財	<18.9>	5.3	0.3	-4.4	0.8	-8.2	-16.4	18.3	6.3	4.3	5.5
自動車関連	<23.8>	13.2	3.2	-3.7	-1.4	-14.5	-50.7	20.2	5.6	21.1	12.7
消費財	<4.1>	6.4	3.5	0.9	-4.4	-12.1	-26.9	8.9	14.7	-2.5	-0.1
情報関連	<10.2>	12.2	0.7	2.7	-0.3	-20.8	-25.9	35.4	20.3	6.6	6.9
資本財・部品	<28.3>	8.0	5.2	-0.7	-1.0	-9.9	-26.5	-0.8	5.3	0.9	0.4
実質輸出計		9.1	1.8	-2.2	1.0	-14.6	-28.9	12.3	7.8	5.1	5.7

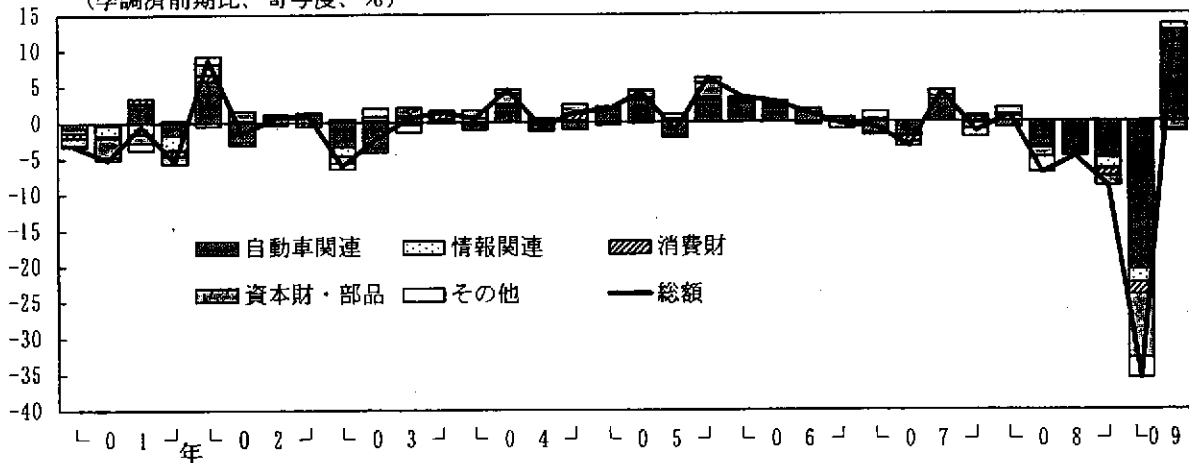
(注) 1. < >内は、2008年通関輸出額に占める各財のウェイト。  
 2. 「消費財」は、自動車を除く。  
 3. 「情報関連」は、電算機類、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。  
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。  
 5. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」

# 米国向け輸出の動向

## (1) 米国向け輸出の財別内訳

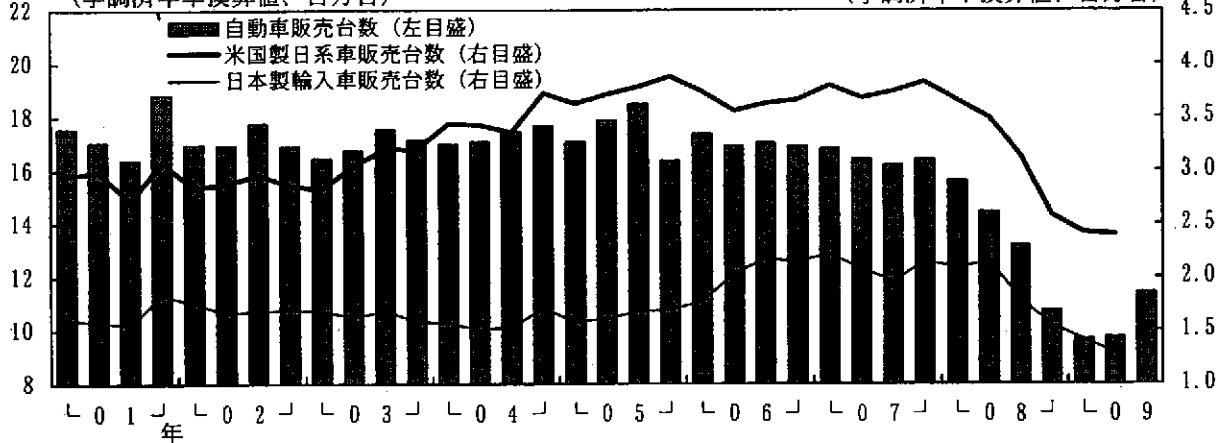
(季調済前期比、寄与度、%)



## (2) 米国の自動車販売台数

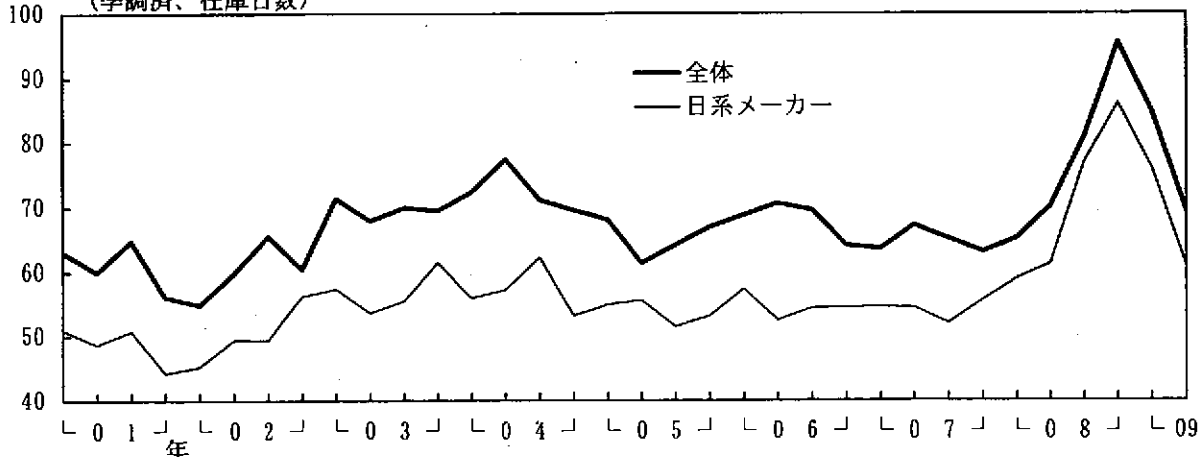
(季調済年率換算値、百万台)

(季調済年率換算値、百万台)



## (3) 米国の自動車在庫

(季調済、在庫日数)

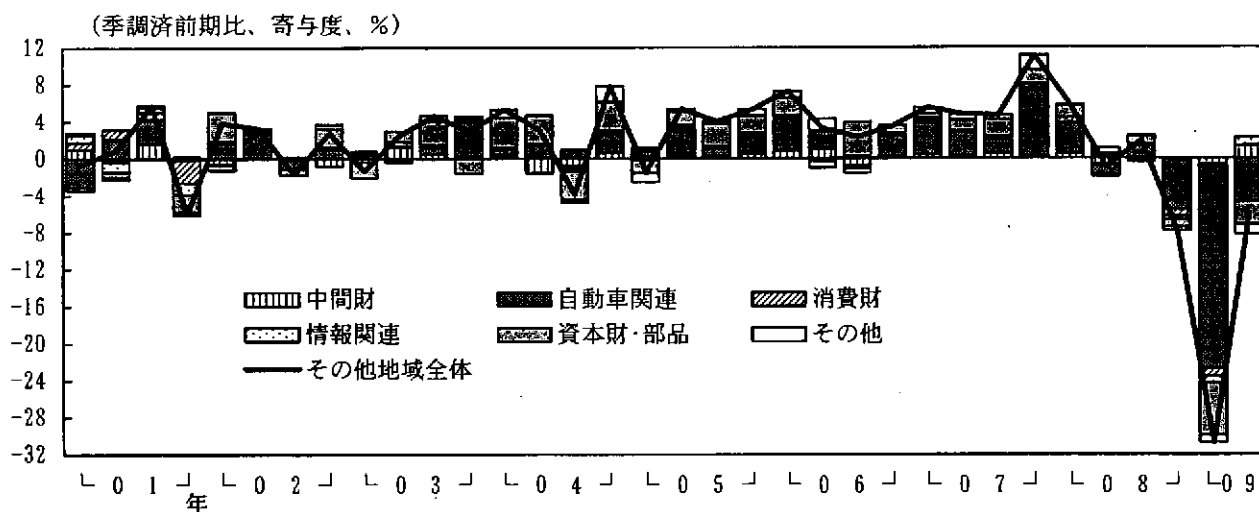


- (注) 1. (1) の各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。実質値。  
 2. (2) の米国製日系車販売台数、日本製輸入車販売台数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。自動車販売台数の2009/3Qは、7月の値。  
 3. (3) の在庫日数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。期末値。  
 在庫日数=当月末時点での在庫/当月の1日平均販売台数。

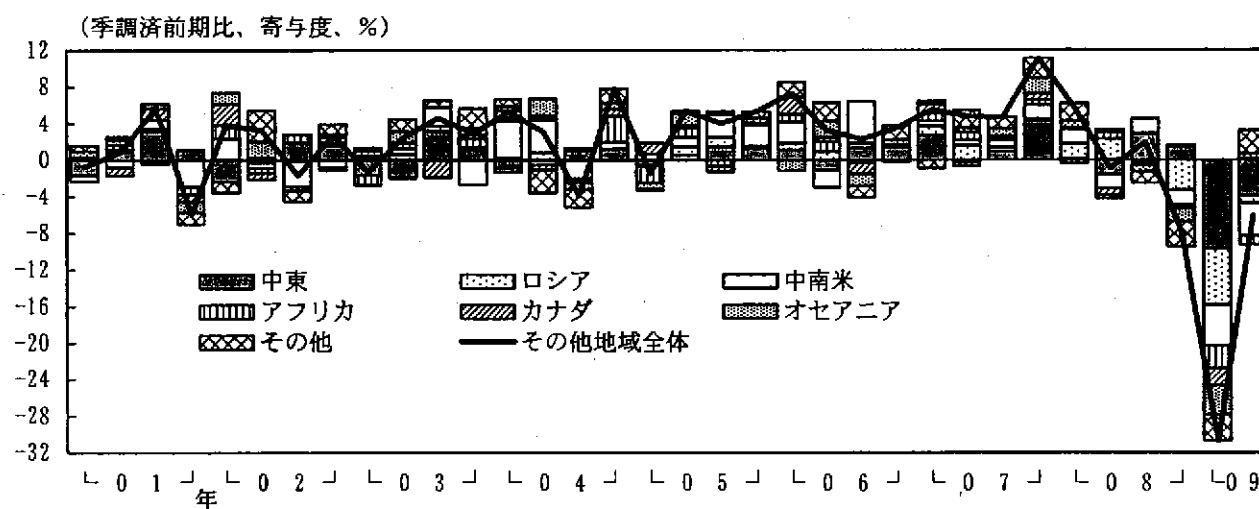
(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」、U.S. Department of Commerce, "Sales, production, imports, exports, and inventories, in units", Reuters News Service, 日本自動車工業会「自動車統計月報」、Automotive News Inc., "Automotive News"

### その他地域向け輸出の動向

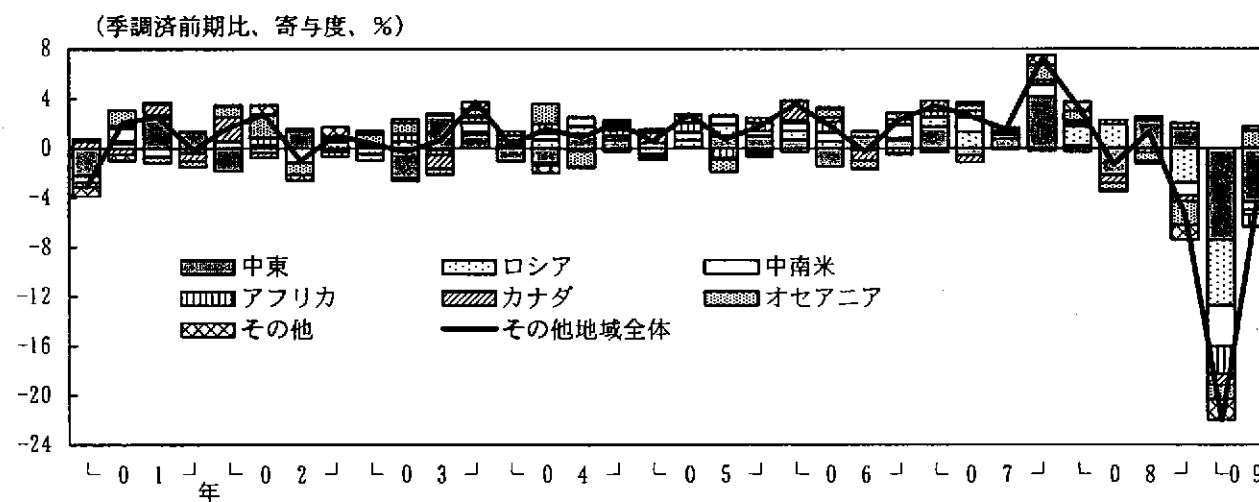
#### (1) その他地域向け輸出 (実質、財別)



#### (2) その他地域向け輸出 (実質、地域別)



#### (3) その他地域向け自動車関連輸出 (実質、地域別)



(注) 1. (1) の各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 2. (2) および (3) の地域別季調済計数は、(1) その他地域全体の季節要素を用いて計算している。

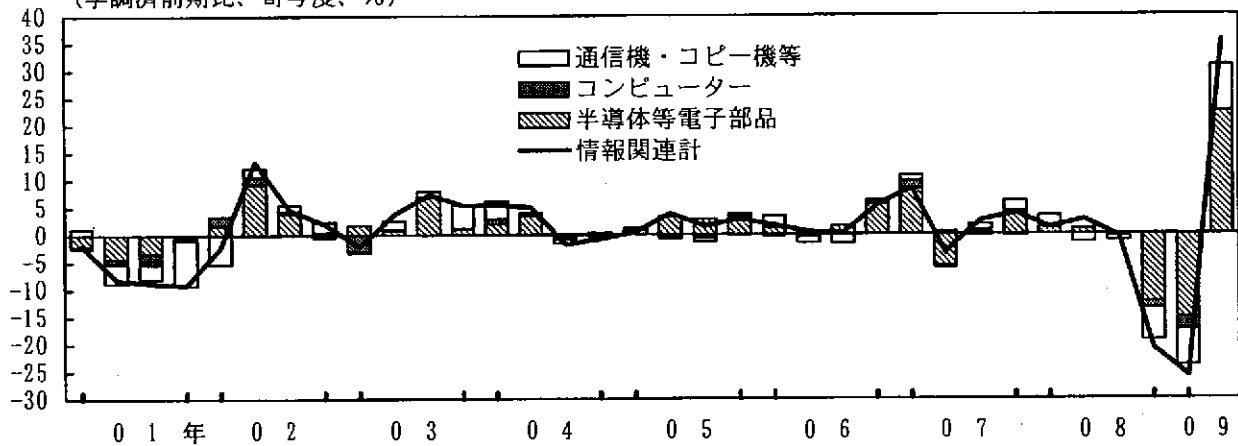
(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」

(図表10)

# 情報関連輸出の動向

## (1) 情報関連輸出 (実質、品目別)

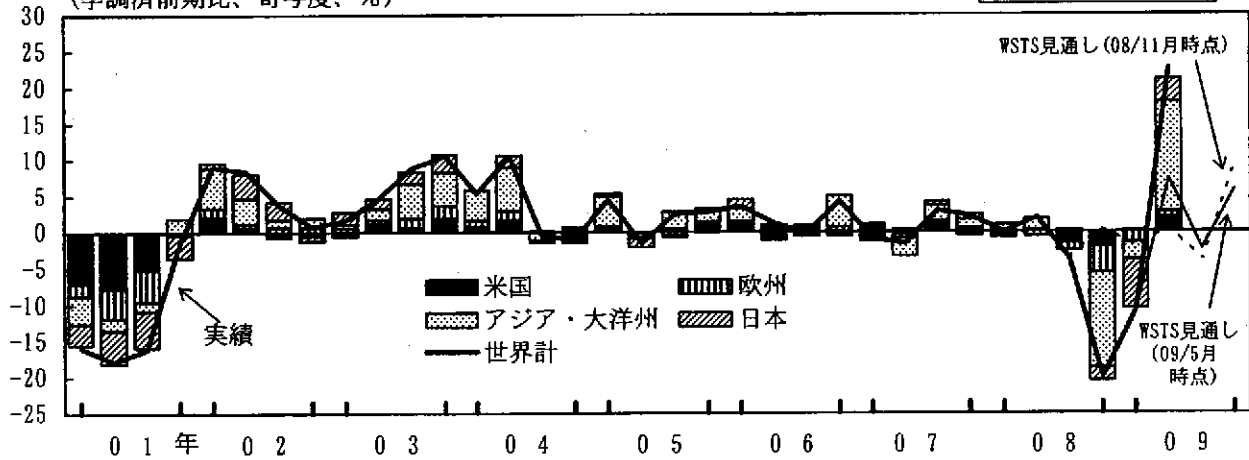
(季調済前期比、寄与度、%)



## (2) 世界半導体出荷 (名目、地域別)

(季調済前期比、寄与度、%)

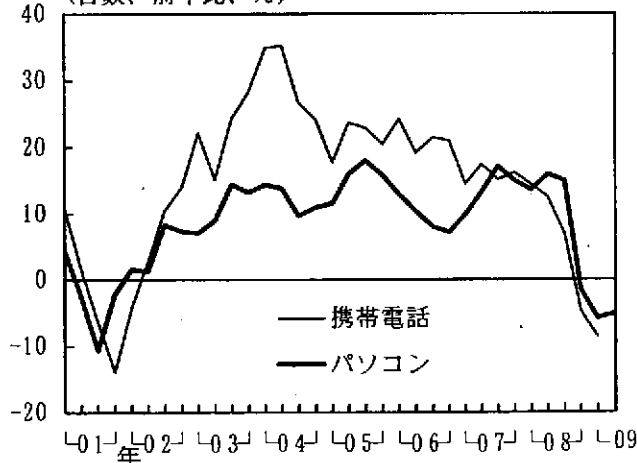
見通しは転載不可



## (3) 情報関連最終製品の世界需要

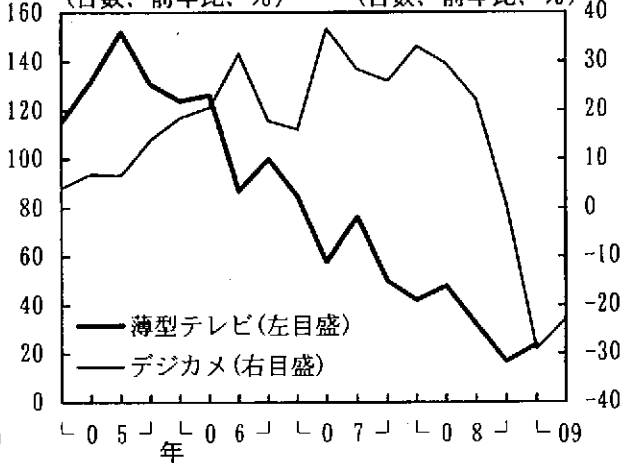
転載不可

(台数、前年比、%)



(台数、前年比、%)

(台数、前年比、%)



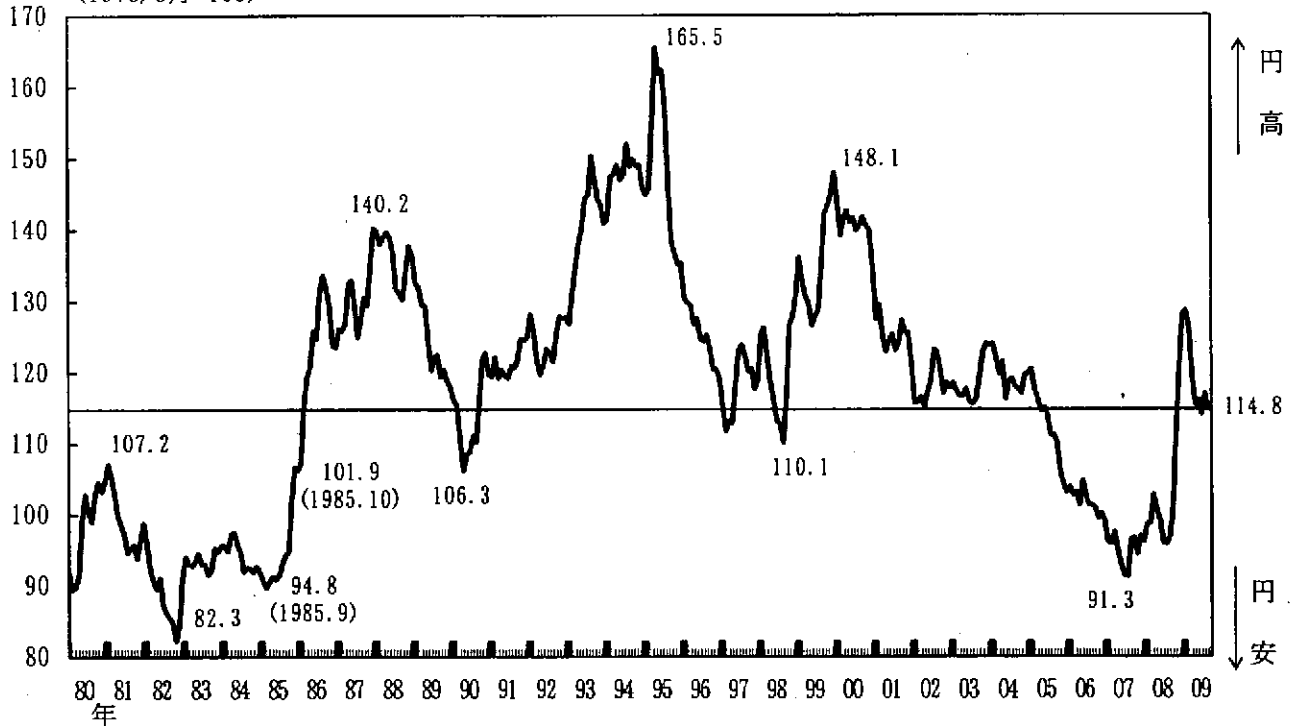
(注) 1. (1) および (2) の計数はX-12-ARIMAによる季節調整値であり、内訳の積み上げと合計の差は同調整に伴う誤差。  
 2. (3) のパソコンの2009/2Qはプレスリリースによる速報値。

(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」、WSTS「世界半導体市場予測」、  
 ガーナー・データキャスト、ガーナー・プレスリリース、ディスプレイサーチ、ディスプレイサーチ・プレスリリース、  
 カメラ映像機器工業会

# 実質実効為替レート

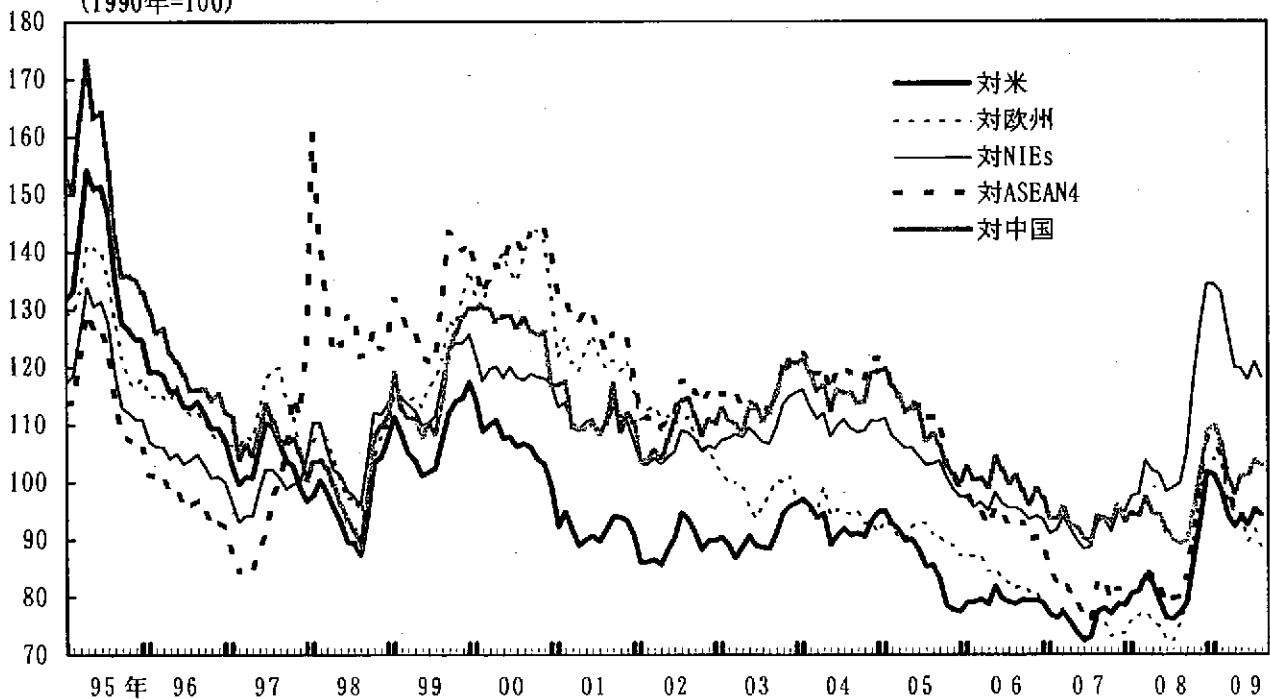
## (1) 円の実質実効レート

(1973/3月=100)



## (2) 相手地域別

(1990年=100)



(注) 1. 日本銀行調査統計局試算値。2009/8月は4日までの平均値。

2. 主要輸出相手国通貨(15通貨、30カ国・地域)に対する為替相場(月中平均)を、当該国・地域の物価指数で実質化したうえ、通関輸出金額ウェイトで加重平均したもの。また、算出の際に使用した各国の物価指数のうち実績値のない部分については、直近実績値横這いとした。

(図表12)

## 実質輸入の内訳

## (1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 2007年	2008	2008年 2Q	3Q	4Q	2009 1Q	2Q	2009年 4月	5	6
米国	<10.2>	-1.5	-2.6	-4.6	1.1	-2.7	-14.4	-7.8	-5.7	-5.4	8.5
EU	<9.2>	4.0	-3.0	-0.3	-3.4	-2.3	-10.4	-2.8	-1.5	10.6	2.2
東アジア	<37.9>	3.1	2.3	-2.3	1.1	-0.2	-17.6	0.7	1.2	2.5	2.1
中国	<18.8>	5.7	4.3	-0.7	3.1	-1.2	-15.1	-0.7	-2.4	2.6	0.9
NIEs	<8.0>	-3.8	-1.2	-4.1	-0.9	-6.3	-20.6	9.9	10.8	5.0	5.2
韓国	<3.9>	-3.3	-5.4	-9.5	-1.1	-6.6	-20.5	6.0	3.3	9.6	2.9
台湾	<2.9>	-3.0	3.5	1.2	0.2	-6.4	-22.0	14.3	12.5	11.6	4.7
香港	<0.2>	-7.7	-1.8	-5.3	-9.1	-0.0	-25.6	15.2	35.4	-33.2	23.8
シンガポール	<1.0>	-6.5	1.4	3.5	-7.9	0.3	-18.7	13.3	27.6	-17.4	27.6
ASEAN4	<11.1>	4.5	1.1	-3.9	-1.5	7.4	-20.6	-3.3	2.2	0.0	2.1
タイ	<2.7>	4.4	2.3	-3.6	2.5	-1.9	-21.8	-0.3	7.1	-0.3	0.5
その他	<42.7>	0.2	2.0	-4.1	2.0	3.1	-18.8	-4.0	4.7	4.0	-6.8
実質輸入計		0.7	0.2	-3.4	1.7	0.7	-17.9	-1.8	0.8	2.6	0.7

- (注) 1. < >内は、2008年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。  
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。  
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

## (2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)				(季調済前月比、%)			
		暦年 2007年	2008	2008年 2Q	3Q	4Q	2009 1Q	2Q	2009年 4月	5	6
素原料	<42.0>	0.7	1.0	-5.9	1.9	4.4	-20.3	-5.4	4.1	2.7	-5.6
中間財	<14.1>	2.0	1.7	1.9	0.9	4.3	-19.1	-8.1	2.3	-5.8	7.8
食料品	<7.9>	-9.5	-3.7	0.6	2.0	11.2	-2.9	-4.9	-3.9	1.7	1.0
消費財	<6.9>	-0.1	-2.7	-1.4	0.6	-2.7	-16.2	3.6	-2.1	4.4	2.3
情報関連	<9.5>	4.2	4.3	-1.5	1.0	-7.9	-17.2	12.4	14.4	-0.6	0.4
資本財・部品	<11.2>	8.5	2.8	-3.0	0.6	-9.2	-18.7	-6.3	-5.5	5.5	3.6
うち除く航空機	<10.5>	7.9	3.6	0.4	-2.4	-4.5	-23.7	-1.3	-0.9	10.3	0.1
実質輸入計		0.7	0.2	-3.4	1.7	0.7	-17.9	-1.8	0.8	2.6	0.7

- (注) 1. < >内は、2008年通関輸入額に占める各財のウェイト。  
 2. 「素原料」は、原料品、鉱物性燃料。  
 3. 「消費財」は、食料品を除く。  
 4. 「情報関連」は、電算機類・部分品、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。  
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。  
 6. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」

## 設備投資関連指標

## ＜先行指標等＞

— &lt; &gt;内は季調済前期(月)比、( )内は前年比: %

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
機械受注	(-14.1)	<-15.1>	<-9.9>	<-7.4>	<-5.4>	<-3.0>	
[民需、除く船舶・電力]		(-23.7)	(-29.4)	(-35.6)	(-32.8)	(-38.3)	
製造業	(-22.4)	<-22.4>	<-31.1>	<4.6>	<-9.4>	<5.4>	
非製造業(除く船舶・電力)	(-6.8)	<-10.0>	<4.9>	<-13.1>	<-8.8>	<-6.9>	
建築着工床面積	(-7.6)	<-10.6>	<-1.1>	<-34.9>	<-27.3>	<-9.6>	<23.5>
[民間非居住用]		(-8.4)	(-11.3)	(-41.2)	(-38.8)	(-49.7)	(-35.3)
うち鉱工業	(4.0)	<-0.2>	<-25.8>	<-41.0>	<-32.5>	<-29.0>	<35.3>
うち非製造業	(-11.6)	<-8.9>	<7.5>	<-34.5>	<-24.8>	<-8.7>	<20.6>
資本財総供給	<-15.1>	<-5.8>	<-19.8>	<-13.5>	<-11.6>	<-4.7>	<8.2>
資本財総供給(除く輸送機械)	<-15.8>	<-4.9>	<-13.3>	<-18.7>	<-19.1>	<-1.5>	<4.3>

- (注) 1. 機械受注の2009/4~6月の見通し(季調済前期比)は、民需(除く船舶・電力) -5.0%、製造業 +5.1%、非製造業(除く船舶・電力) -7.5%となっている。  
 2. 建築着工床面積は、X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 3. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。また、年度の値は季調済前年比。  
 4. 機械受注の2009/4~6月の前期比は4~5月の2009/1~3月対比、前年比は4~5月の前年同期比。

## ＜法人企業統計・設備投資＞

— &lt; &gt;内は季調済前期比、( )内は前年比: %

	06年度	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	09/1~3
全産業	(13.5)	(1.2)	<-7.1>	<-5.3>	<-7.4>	<-8.6>
うち製造業	(9.8)	(11.1)	<-1.0>	<-4.1>	<-9.3>	<-9.4>
うち非製造業	(15.7)	(-4.3)	<-10.9>	<-6.1>	<-6.0>	<-8.0>

- (注) 年度の計数は、法人企業統計年報(資本金1千万円未満を含む)、四半期の計数は、法人企業統計季報(資本金1千万円以上)を使用。金融業、保険業を除く。

## ＜設備投資アンケート調査＞

— 前年比: %、( )内は2009年3月調査時点

	2008年度実績	2009年度計画			
		修正率	修正率		
全国短観(6月調査)	全産業	-6.4 (-5.4)	-1.1 (-2.7)	-17.1 (-14.3)	-4.2 ( - )
	製造業	-7.4 (-4.3)	-3.3 (-4.3)	-28.0 (-20.0)	-12.9 ( - )
	非製造業	-5.8 (-6.0)	0.2 (-1.8)	-11.2 (-11.2)	0.1 ( - )
うち大企業・全産業	全産業	-6.6 (-3.3)	-3.4 (-3.1)	-9.4 (-6.6)	-6.3 ( - )
	製造業	-7.2 (-2.4)	-4.9 (-4.7)	-24.3 (-13.2)	-17.1 ( - )
	非製造業	-6.2 (-3.8)	-2.5 (-2.2)	-0.8 (-2.7)	-0.6 ( - )
うち中小企業・全産業	全産業	-9.8 (-12.0)	2.6 (-0.5)	-36.6 (-35.6)	0.9 ( - )
	製造業	-7.7 (-8.5)	0.9 (-1.0)	-41.5 (-42.2)	2.2 ( - )
	非製造業	-10.8 (-13.7)	3.4 (-0.3)	-34.1 (-32.1)	0.4 ( - )

- (注) 土地投資額を含み、ソフトウェア投資額は含まない。

— 前年比: %、( )内は2008年6月調査時点

	2007年度実績	2008年度実績	2009年度計画	2010年度計画
日本政策投資銀行(2009年6月調査)	7.7	-7.1 (4.1)	-9.2 (-0.9)	-3.7
うち製造業	6.6	-9.7 (6.8)	-20.7 (-8.6)	-12.2
うち非製造業	8.5	-5.6 (2.4)	-0.1 (1.4)	-1.5

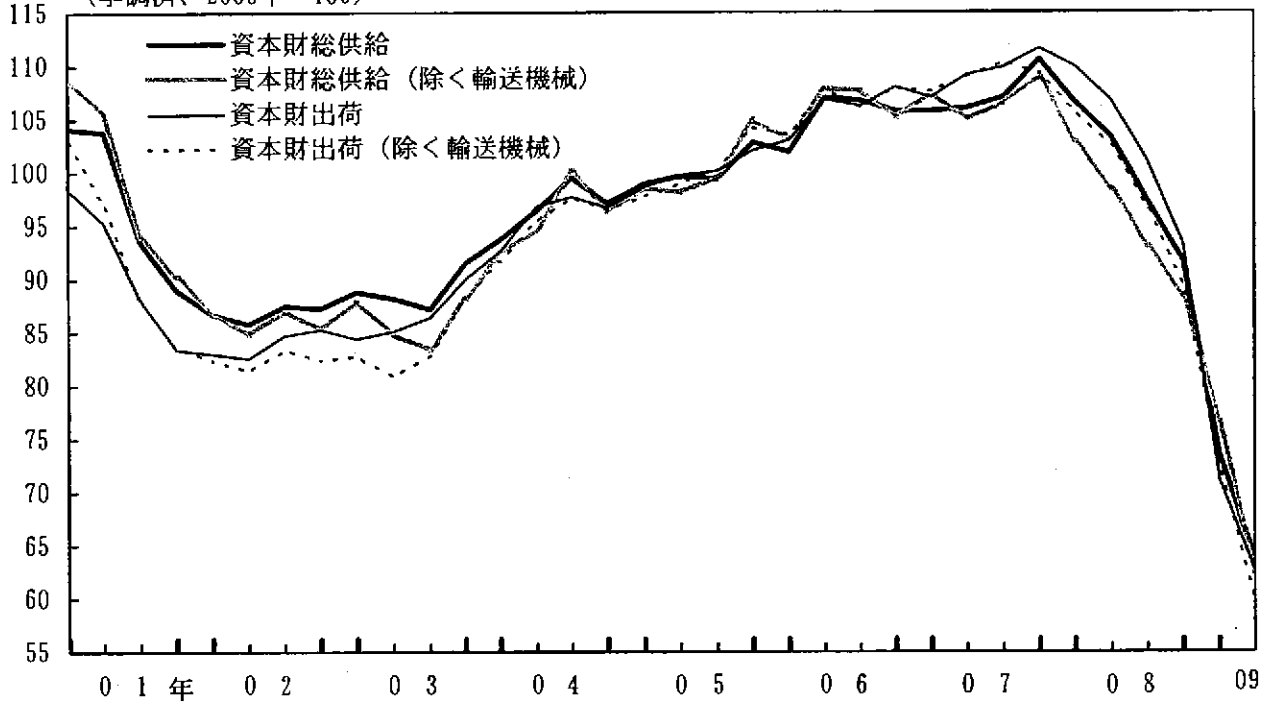
- (資料) 経済産業省「鉱工業総供給表」、内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」、財務省「法人企業統計季報」「法人企業統計年報」、日本政策投資銀行「設備投資計画調査」、日本銀行「全国企業短期経済観測調査」



# 設備投資一致指標

## (1) 資本財の総供給・出荷

(季調済、2005年=100)

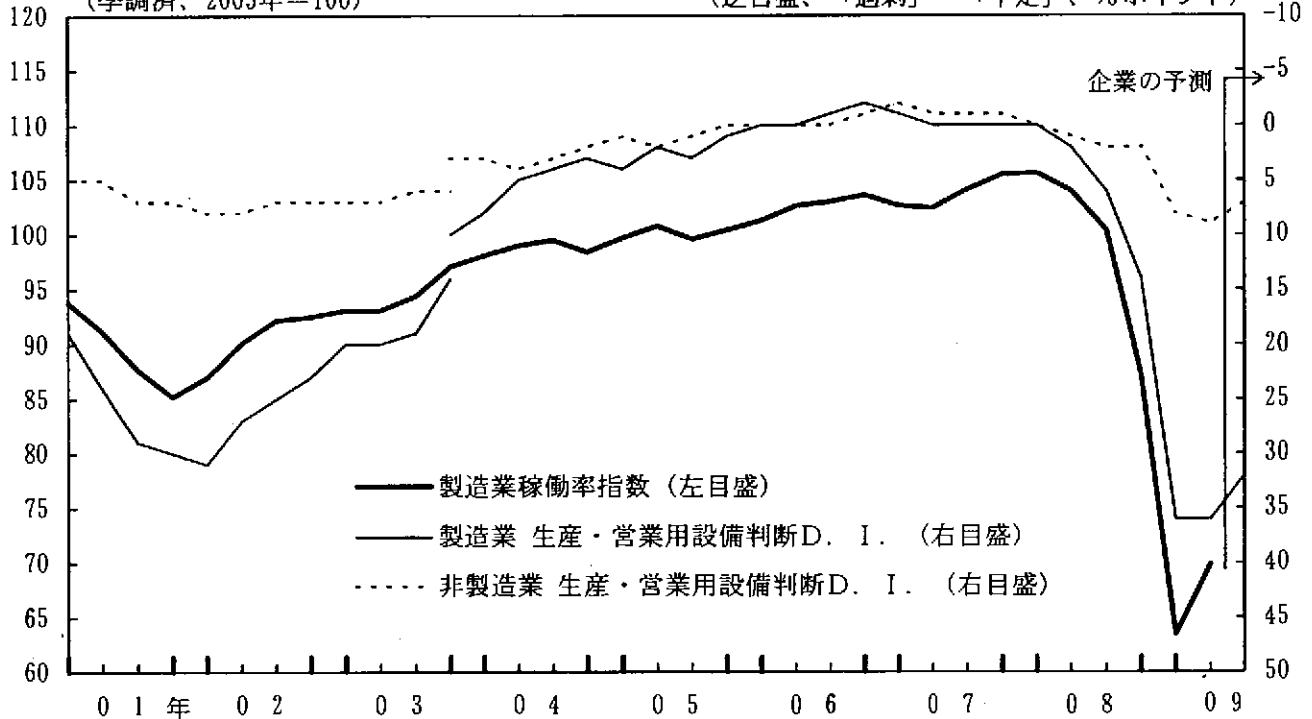


(注) 1. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。  
 2. 資本財出荷は、国内向けの国産品と輸出品を合わせたもの。

## (2) 稼働率と設備判断D. I.

(季調済、2005年=100)

(逆目盛、「過剰」-「不足」、%ポイント)

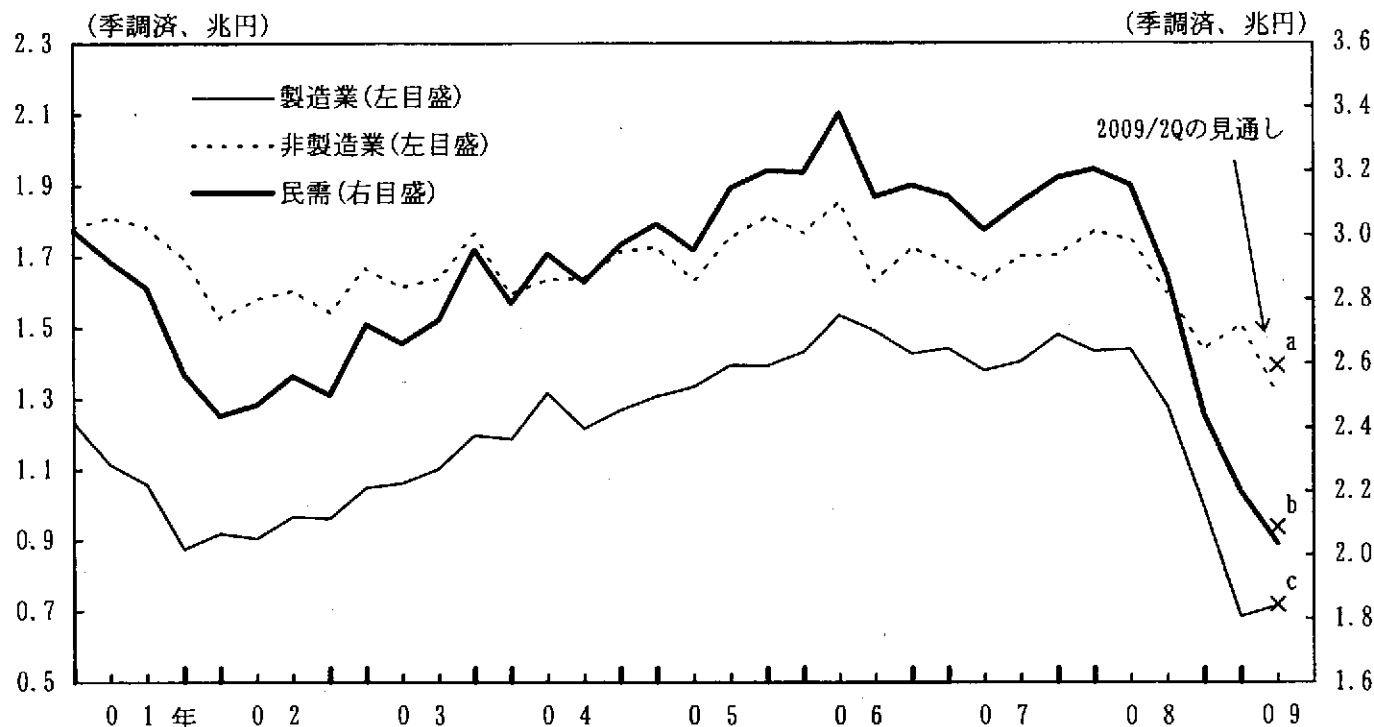


(注) 1. 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。  
 2. 生産・営業用設備判断D. I. は、2004/3月調査より見直しを実施。  
 旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から。  
 3. 製造業稼働率指数の2009/2Qは4~5月の計数。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、  
 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

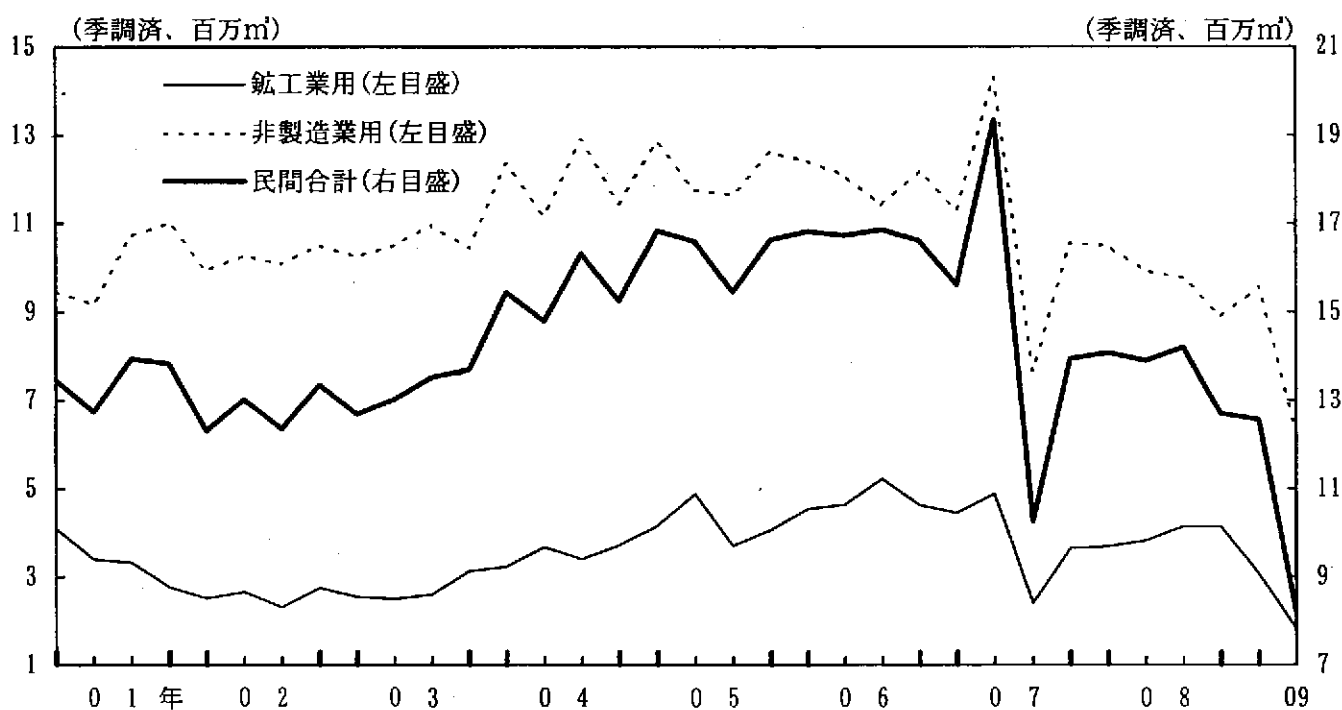
# 設備投資先行指標

## (1) 機械受注



- (注) 1. 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。  
 2. 2009/2Qの見通しは、aは非製造業、bは民需、cは製造業の見通し。  
 3. 2009/2Qは、4~5月の計数を四半期換算。

## (2) 建築着工床面積 (民間非居住用)



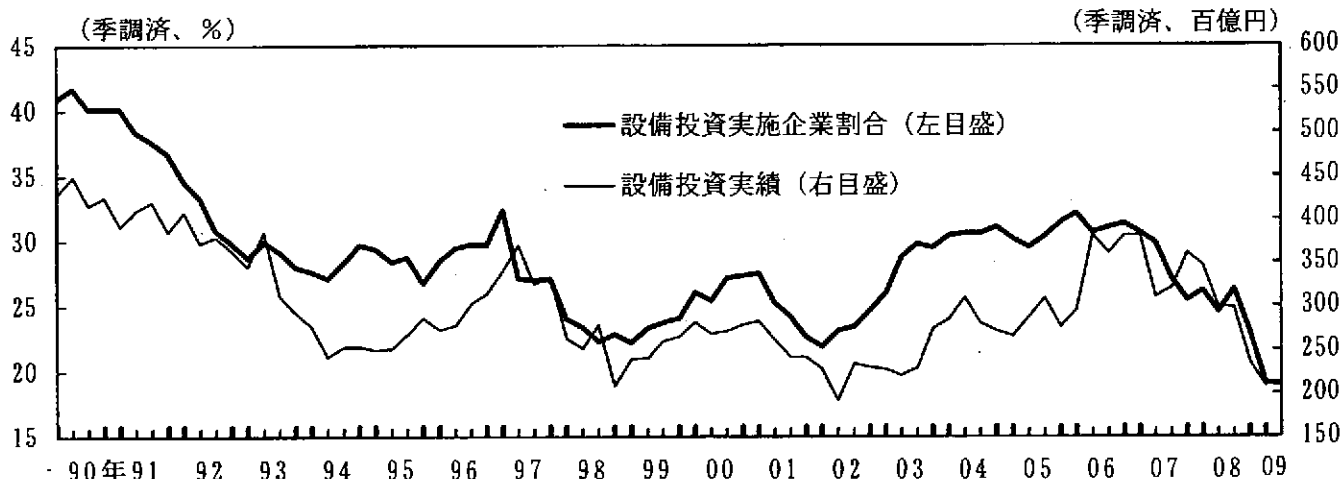
- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 2. 新産業分類に対応し、2003年度以降、新聞・出版業が鉱工業から非製造業に分類変更となった。そのため、リンク係数を算出のうえ、2002年度以前を水準調整している。

(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

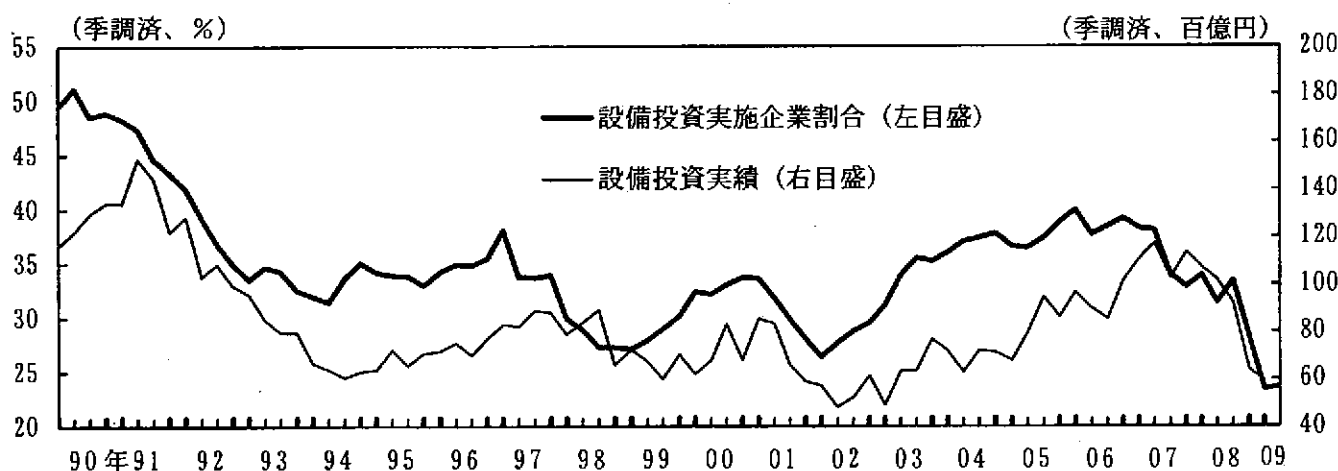
# 中小企業の設備投資実施企業割合

—日本政策金融公庫 6月中・下旬調査—

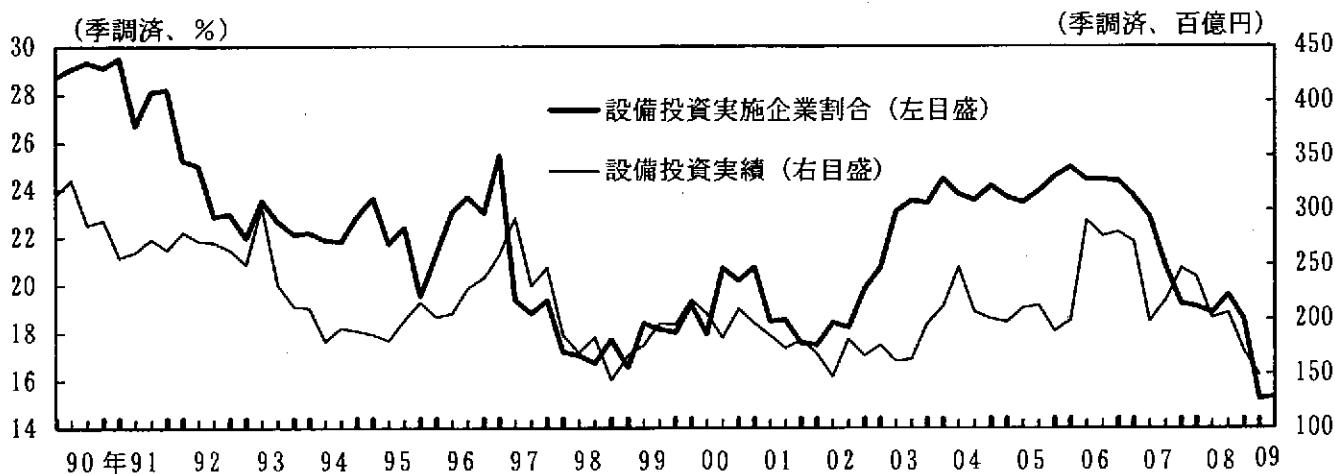
## (1) 全産業



## (2) 製造業



## (3) 非製造業



(注) 1. 設備投資実施企業割合は全国中小企業動向調査ベース (調査対象:13,229社、有効回答企業数:6,755社)。  
2. 設備投資実績は法人季報ベース (資本金1千万円～1億円未満)。X-11による季節調整値。

(資料) 日本政策金融公庫「全国中小企業動向調査」、財務省「法人企業統計季報」

## 企業収益関連指標

### 〈全国短観（6月）・大企業〉

— 売上高経常利益率、（ ）内は経常利益前年同期比、修正幅（経常利益は修正率）は3月調査比：％・％ポイント

	2008年度		2009年度		2008/上期	2008/下期	2009/上期	2009/下期
	実績	修正幅	計画	修正幅	実績	実績	計画	計画
製造業	2.70 (-61.9)	0.11 ( 2.2)	1.89 (-39.5)	-0.34 (-23.1)	5.58 (-18.3)	-0.84 (欠損)	0.25 (-96.7)	3.36 (利益)
非製造業	3.03 (-27.6)	-0.11 (- 5.8)	3.03 (- 8.6)	-0.04 (- 7.9)	3.68 (-14.6)	2.33 (-42.5)	2.73 (-36.8)	3.32 ( 39.5)

### 〈全国短観（6月）・中小企業〉

— 売上高経常利益率、（ ）内は経常利益前年同期比、修正幅（経常利益は修正率）は3月調査比：％・％ポイント

	2008年度		2009年度		2008/上期	2008/下期	2009/上期	2009/下期
	実績	修正幅	計画	修正幅	実績	実績	計画	計画
製造業	1.72 (-50.9)	-0.04 (- 2.2)	0.85 (-57.5)	-0.46 (-37.4)	2.92 (- 9.7)	0.39 (-89.8)	0.01 (-99.6)	1.62 (4.0倍)
非製造業	1.83 (-26.9)	0.07 ( 3.8)	1.94 (- 0.8)	-0.03 (- 2.9)	1.69 (-22.4)	1.97 (-30.5)	1.48 (-21.6)	2.37 ( 17.3)

(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

### 〈法人季報・売上高経常利益率〉

— 季調済、％

		2008年				2009年
		1～3月	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
全産業	全規模	3.47	3.77	2.99	1.68	1.34
製造業	大企業	5.37	5.75	4.46	-0.95	-2.13
	中堅中小企業	3.97	3.99	3.11	1.19	-2.04
非製造業	大企業	4.00	4.91	3.42	2.94	3.93
	中堅中小企業	2.01	2.53	2.31	2.00	1.51

(注) 1. 大企業は資本金10億円以上、中堅中小企業は資本金1000万円以上10億円未満。金融業、保険業は除く。  
2. 製造業、非製造業の計数は、X-11による季節調整値。

(資料) 財務省「法人企業統計季報」

### 〈民間調査機関の経常利益（連結ベース）見通し（2009年6月時点）〉

— 前年比、％、（ ）内は前回〈2009年3月時点〉

	2007年度実績	2008年度実績	2009年度予想	2010年度予想
全産業	4.6	-61.8 (-61.1)	-15.9 (-20.5)	73.8 ( 70.9)
	6.2	-64.0 (-63.4)	-15.8 (- 8.8)	74.8 ( 58.8)
製造業	7.0	-79.9 (-79.8)	-37.1 (-72.0)	239.6 (522.1)
	7.6	-80.6 (-81.3)	-45.0 (-39.8)	272.3 (226.4)
非製造業	-0.1	-22.9 (-20.8)	- 3.6 ( 8.0)	11.0 ( 6.1)
	3.1	-27.8 (-24.5)	1.2 ( 7.8)	12.2 ( 8.6)

(注) 上段は野村証券、下段は大和総研の各調べ。野村証券は全上場・公開企業(除く金融)の352社、大和総研は東証1部上場企業(除く金融)の300社を対象。

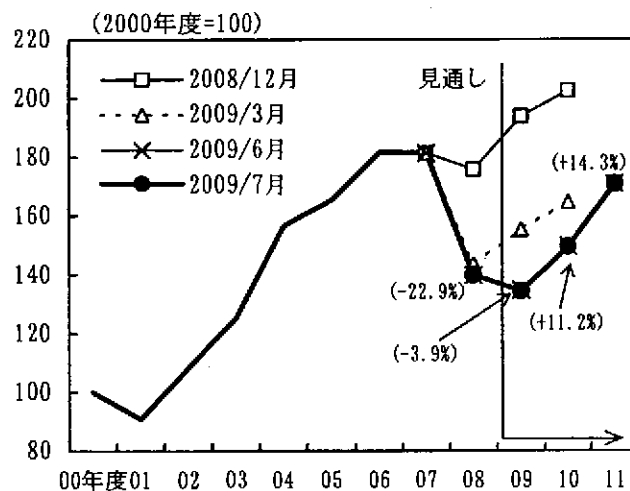
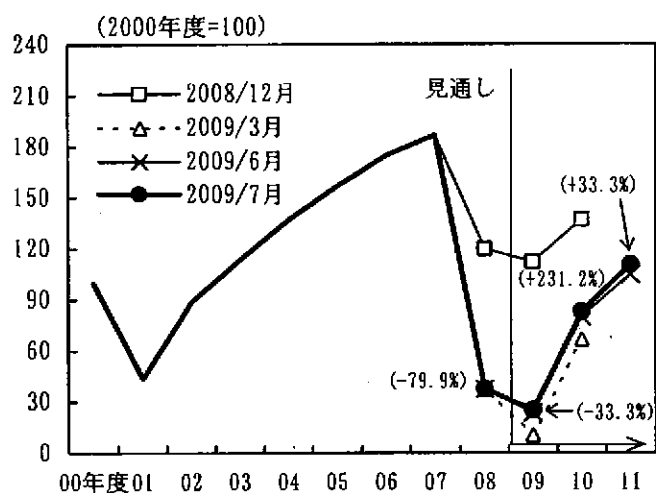
## 企業収益の動向

### (1) 大企業 (野村証券調べ)

#### ① 製造業

2009/7月の計数については、  
投資家向け情報のため、  
転載ならびに引用不可。

#### ② 非製造業 (除く金融)

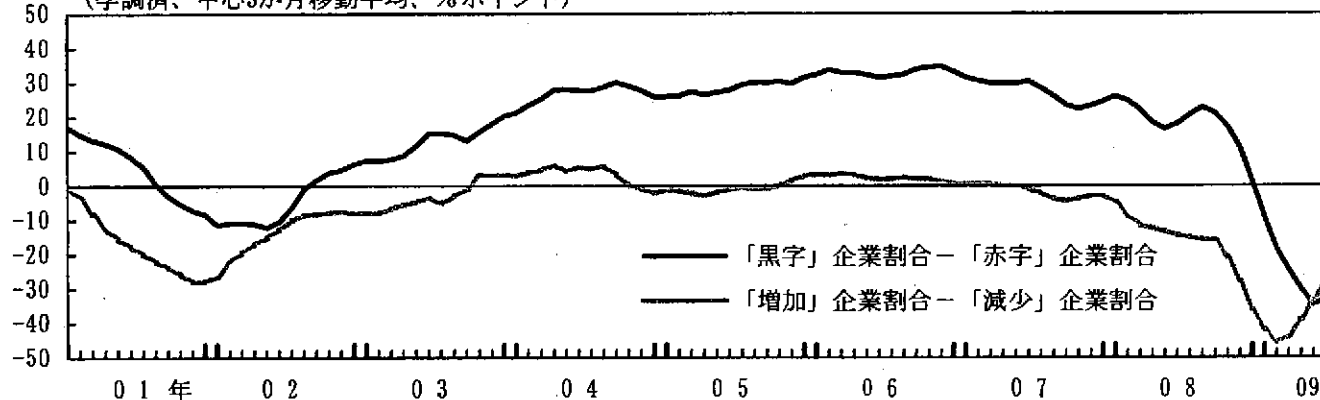


(注) ( ) 内は2009/7月時点の前年度比。連結経常利益ベース。  
2009/7月における調査対象は、上場・公開企業352社 (製造業217社、非製造業135社)。

### (2) 中小企業

#### ① 利益額D. I. (中小企業景況調査)

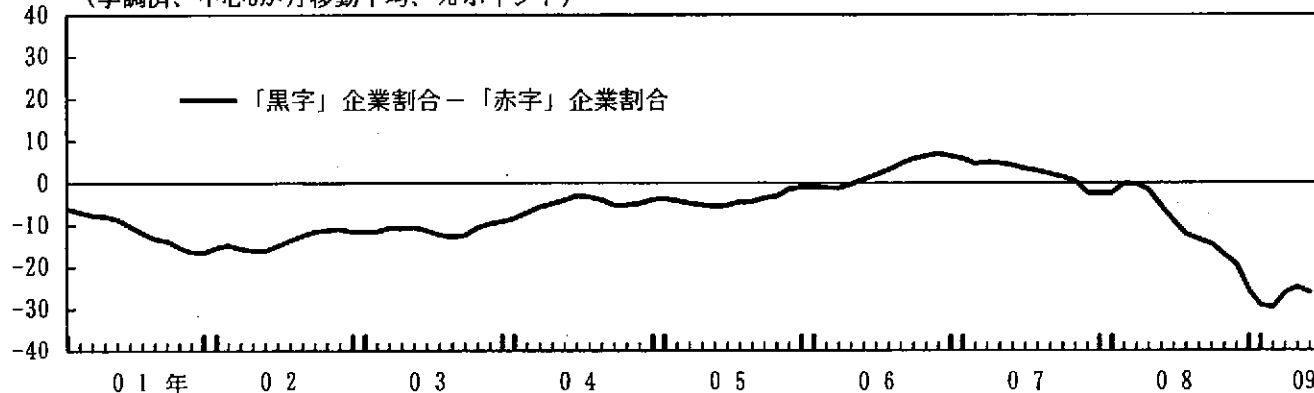
(季調済、中心3か月移動平均、%ポイント)



(注) 調査対象900社 (うち製造業 約600社)。

#### ② 採算D. I. (全国小企業月次動向調査)

(季調済、中心3か月移動平均、%ポイント)



(注) 調査対象約1,500社 (うち製造業 約300社)。

(資料) 野村証券、日本政策金融公庫「中小企業景況調査」「全国小企業月次動向調査」

## 個人消費関連指標

— ( )内は前年比、< >内は季調済前期(月)比：％  
— [ ]内の計数は2008年度売上高(名目、兆円、除く消費税)

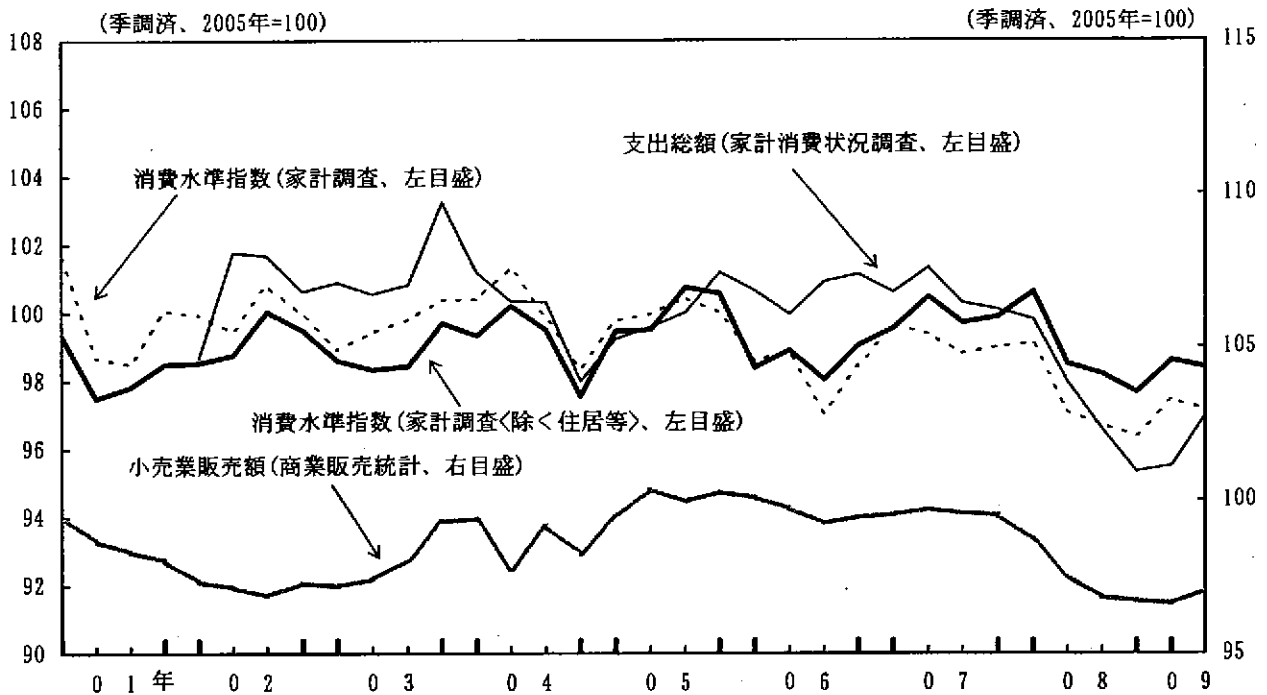
	08年度	09/1~3	4~6	7~9	09/4月	5	6	7
家計調査報告								
消費水準指数(実質)	(-2.2)	(-1.6)	(0.0)		(-0.9)	(0.5)	(0.4)	
		< 1.0>	< -0.2>		< -1.0>	< 0.5>	< 0.7>	
消費水準指数(実質・除く住居等)	(-1.9)	< 0.9>	< -0.2>		< -1.0>	< -0.7>	< 0.2>	
消費支出(実質)	(-2.8)	< 0.2>	< 0.4>		< -0.9>	< 2.2>	< -0.3>	
平均消費性向(%)	73.3	74.1	75.0		75.8	72.8	76.4	
家計消費状況調査								
支出総額(実質)	(-4.0)	(-4.2)	(-1.0)		(-1.9)	(-0.9)	(-0.2)	
		< 0.2>	< 1.6>		< 0.8>	< 1.0>	< -0.1>	
乗用車新車登録台数(含む軽)								
[ 391万台]	(-11.0)	(-23.4)	(-17.2)	(-2.8)	(-22.8)	(-17.4)	(-12.2)	(-2.8)
		< -11.5>	< 4.0>	< 14.0>	< 3.0>	< 9.6>	< 0.0>	< 10.6>
乗用車新車登録台数(除く軽)								
[ 252万台]	(-15.0)	(-30.6)	(-17.1)	(-0.6)	(-27.2)	(-16.3)	(-9.5)	(-0.6)
		< -14.4>	< 13.2>	< 16.3>	< 6.9>	< 15.1>	< 1.7>	< 10.0>
商業販売統計								
小売業販売額(実質)	(-2.7)	(-2.8)	(-0.5)		(-1.8)	(-0.4)	(0.7)	
[ 127.8]		< -0.1>	< 0.4>		< -0.3>	< 0.8>	< 1.1>	
家電販売額(実質)	(15.0)	(16.2)	(19.0)		(16.8)	(18.5)	(21.6)	
[ 7.3]		< 7.1>	< 5.1>		< -0.7>	< 4.3>	< 3.3>	
全国百貨店売上高	(-6.7)	(-11.1)	(-10.8)		(-11.3)	(-12.1)	(-8.9)	
[ 7.5]		< -3.9>	< -2.2>		< 1.2>	< -3.0>	< 4.7>	
全国スーパー売上高	(-2.5)	(-4.7)	(-4.1)		(-4.0)	(-3.0)	(-5.4)	
[ 12.2]		< -1.3>	< -1.3>		< -0.6>	< -0.7>	< -0.4>	
コンビニエンスストア売上高	(7.2)	(6.3)	(3.4)		(6.5)	(3.1)	(0.9)	
[ 7.7]		< -0.8>	< -0.5>		< 1.1>	< -1.2>	< -1.0>	
旅行取扱額								
[ 6.1]	(-5.6)	(-13.3)	(-19.4)		(-14.6)	(-23.8)		
		< -5.0>	< -10.7>		< -6.2>	< -7.2>		
外食産業売上高								
	(0.3)	(-1.0)	(0.1)		(0.8)	(2.1)	(-2.6)	
		< -0.4>	< -0.4>		< -0.1>	< 0.1>	< -1.4>	

- (注) 1. 消費水準指数は、二人以上の世帯・世帯人員及び世帯主の年齢分布調整ベース。消費水準指数(除く住居等)は、消費支出合計から「住居」、「自動車等購入」、「贈与金」、「仕送り金」を除いている。  
2. 消費支出、支出総額は、二人以上の世帯ベース。平均消費性向は二人以上の世帯のうち勤労者世帯ベース。  
3. 全国百貨店・全国スーパー売上高の前年比及び前期比は、店舗調整後。コンビニエンスストア・外食産業売上高の前年比及び前期比は店舗調整前。  
4. 支出総額、小売業販売額、家電販売額は、調査統計局において実質化。  
5. 旅行取扱額は外国人旅行を除いている。  
6. 2009/4~6月の旅行取扱額は4~5月、2009/7~9月の新車登録台数は7月の値を使用。

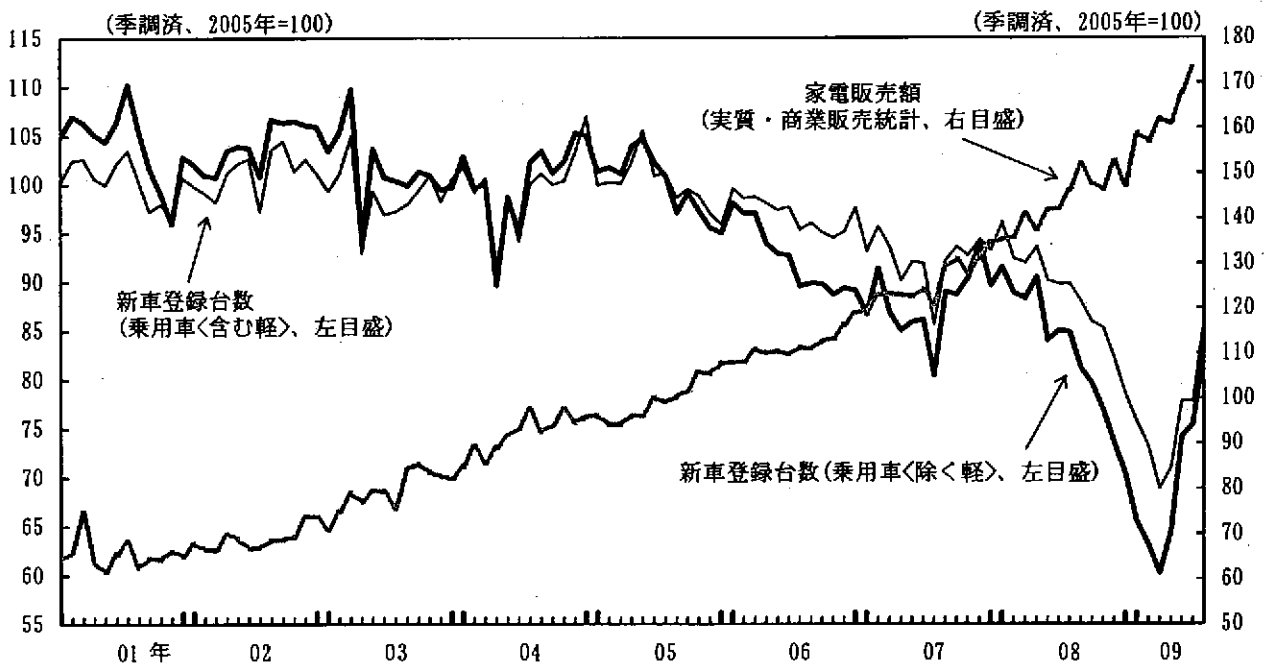
(資料) 総務省「家計調査報告」「家計消費状況調査」「消費者物価指数」、経済産業省「商業販売統計」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、観光庁「旅行業者取扱額」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

# 個人消費 (1)

## (1) 家計調査・家計消費状況調査・商業販売統計 (実質)



## (2) 耐久消費財

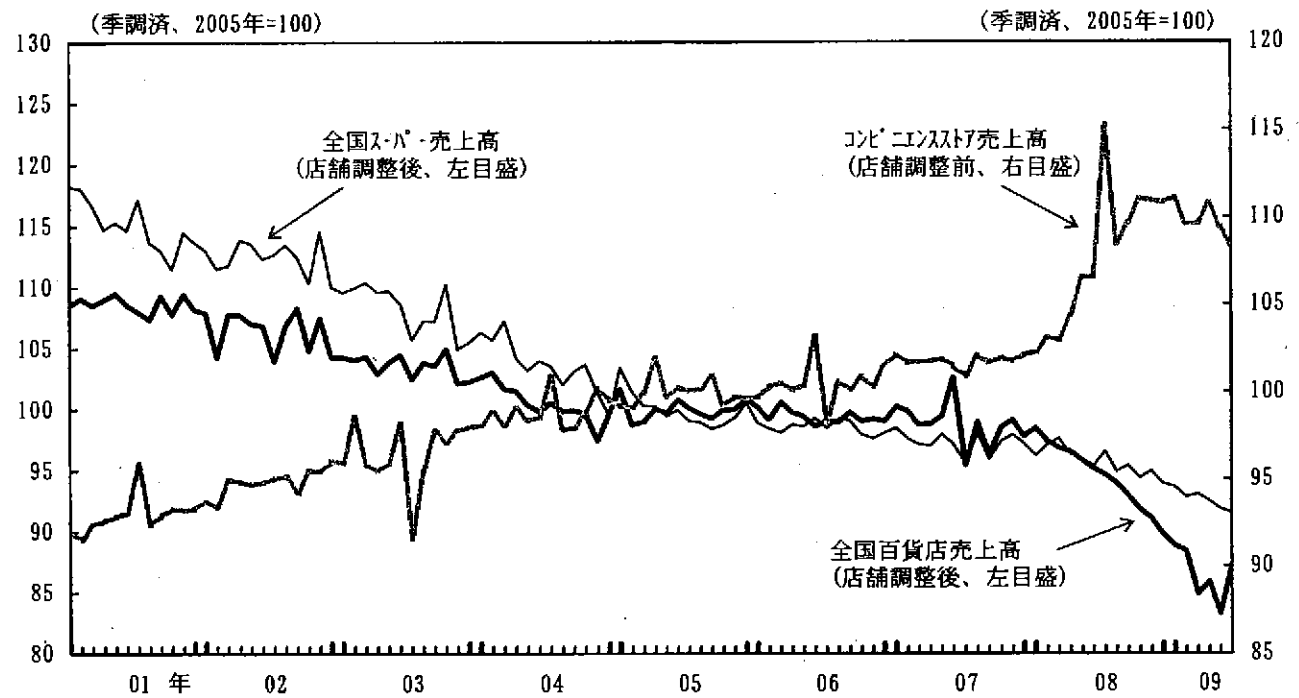


- (注) 1. 支出総額、小売業販売額、家電販売額及び新車登録台数はX-12-ARIMAによる季節調整値。  
 2. 消費水準指数は、二人以上の世帯(世帯人員及び世帯主の年齢分布調整済)ベース。  
 3. 支出総額は二人以上の世帯ベース。CPI「持家の帰属家賃を除く総合」で実質化。  
 4. 小売業販売額は、CPI(「財」から「電気・都市ガス・水道」を除いたもの)で実質化。  
 家電販売額は、商業販売統計の機械器具小売業販売額指数を、各種家電関連商品のCPI(但し、2002年以前のパソコン用プリンタはCGPIで代用)を幾何平均して算出したデフレーターで実質化。

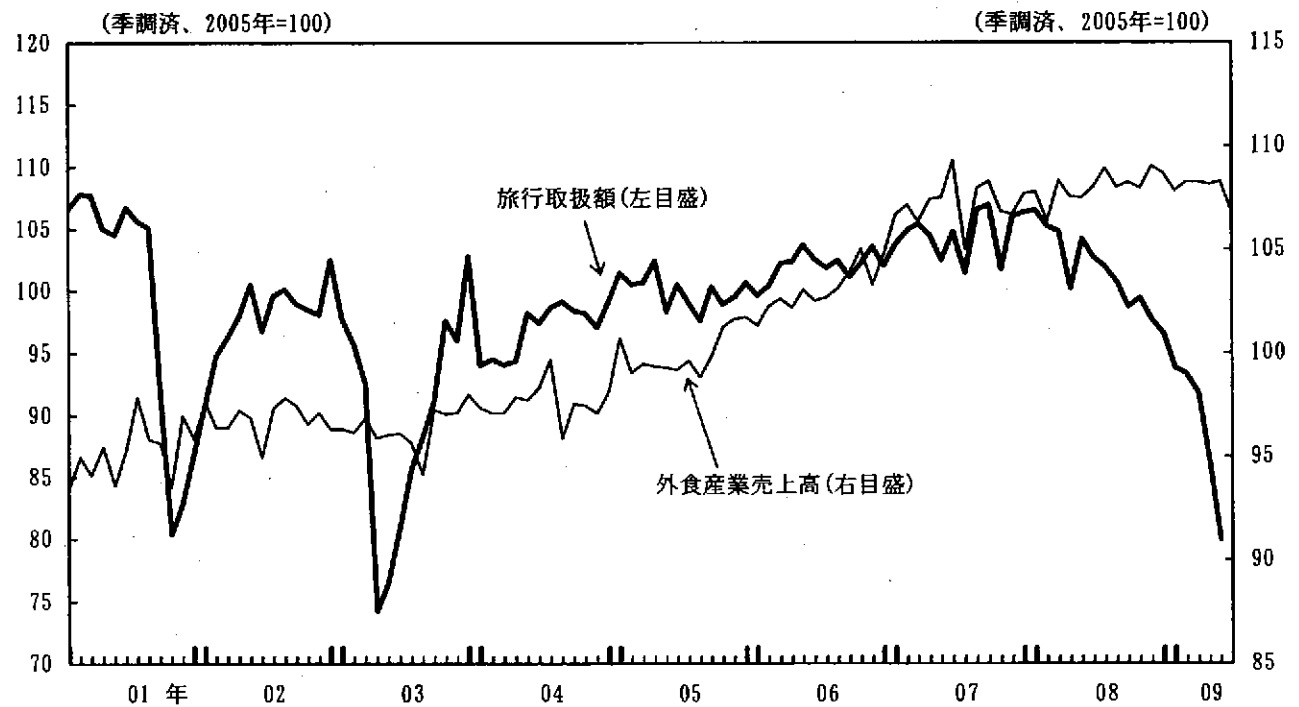
(資料) 総務省「家計調査報告」「家計消費状況調査」「消費者物価指数」、経済産業省「商業販売統計」、日本銀行「企業物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」

# 個人消費 (2)

## (1) 小売店販売 (名目)



## (2) サービス消費 (名目)



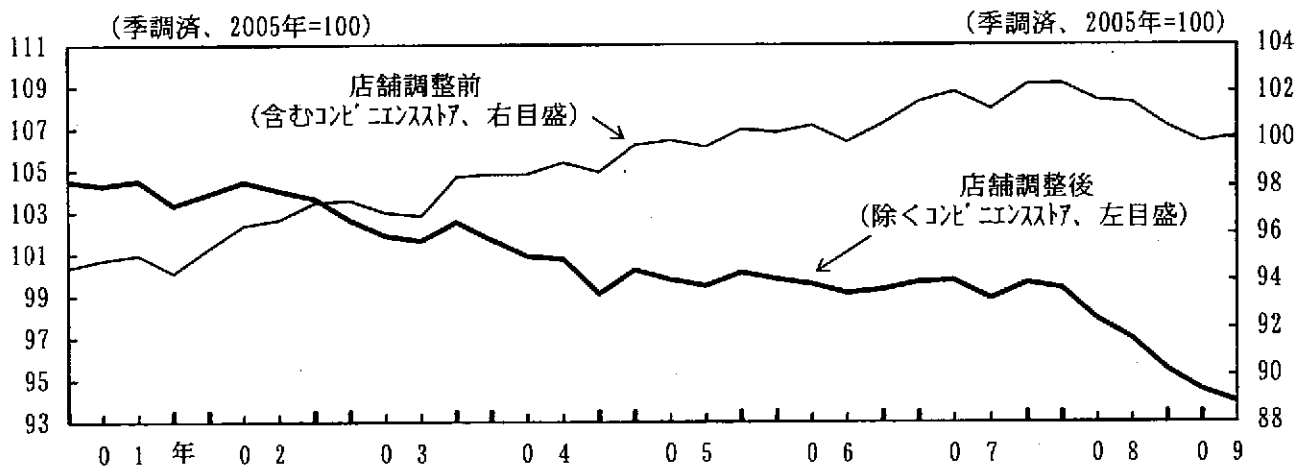
- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 2. 旅行取扱額は、外国人旅行を除いている。また、2007/4月に調査対象が変更された結果、原データに断層が生じているため、2007/4月以降の系列は、新ベースの前年比を用いて接続している。  
 3. 外食産業売上高は、1993年の外食総研のデータを基準とし、日本フードサービス協会の前年比で延長。

(資料) 経済産業省「商業販売統計」、観光庁「旅行業者取扱額」、外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

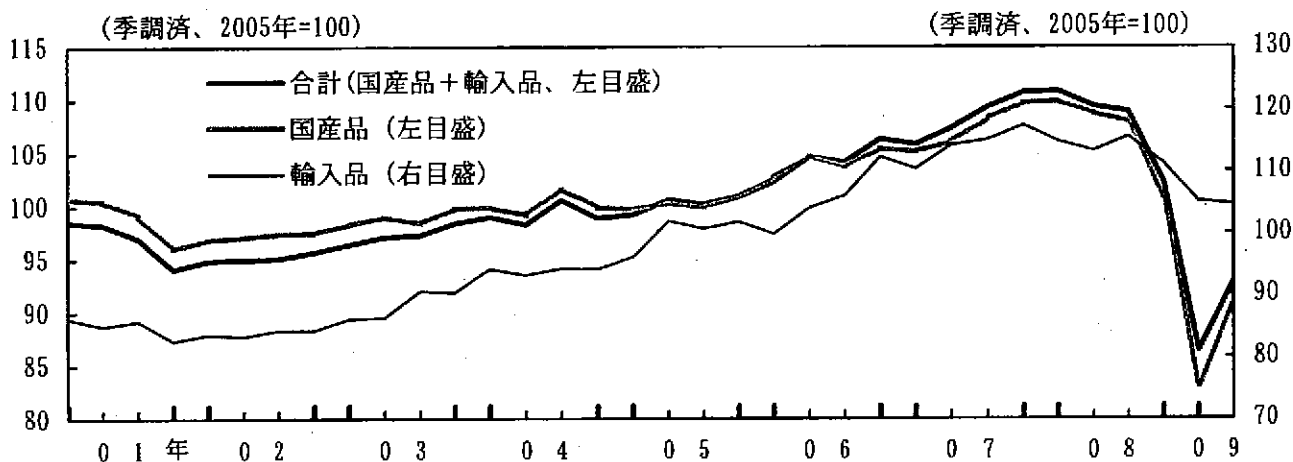


# 個人消費 (3)

## (1) 販売統計合成指数 (実質)



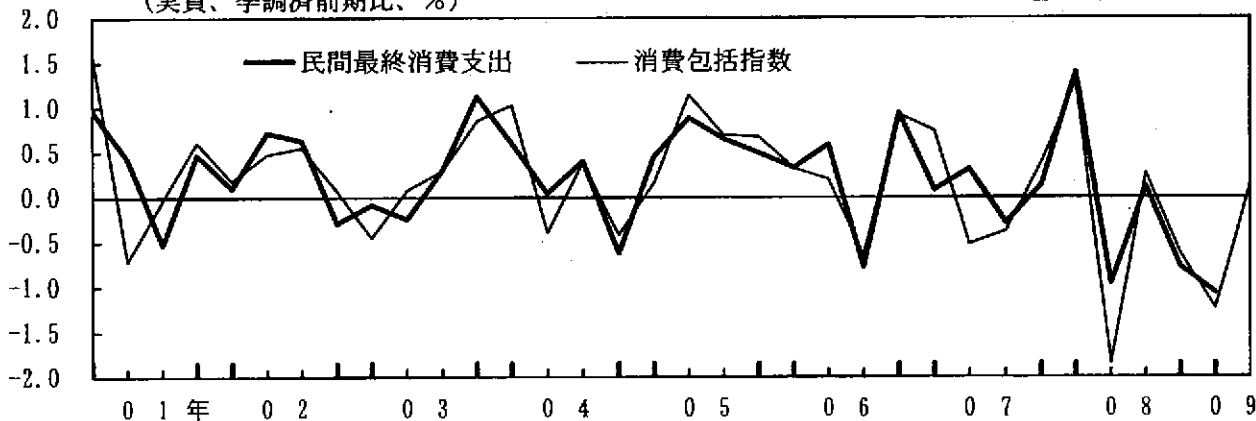
## (2) 消費財総供給



## (3) 消費包括指数とGDP消費

(実質、季調済前期比、%)

対外非公表



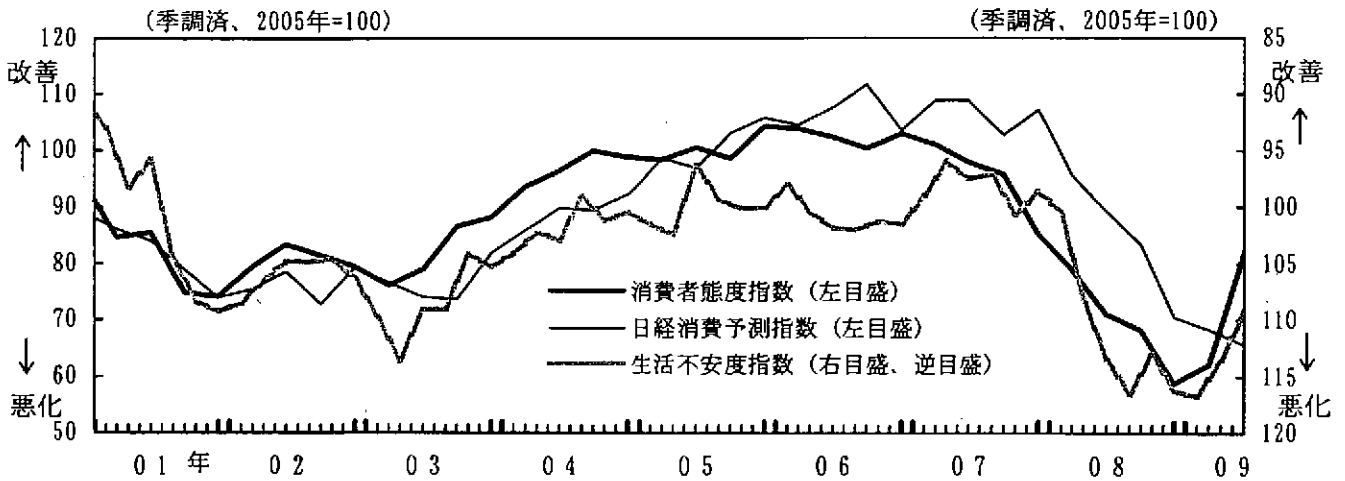
- (注) 1. 販売統計合成指数は、全国百貨店・全国スーパー売上高、新車登録台数、家電販売額、旅行取扱額、  
 2. 消費包括指数は、GDPの推計方法にならい、各種の消費関連統計を幅広く加重平均して算出  
 したものの。また、毎月季節調整替えを行うため、過去に遡って改訂される。  
 3. 消費包括指数は8/4日までに公表された統計をもとに算出。  
 4. 販売統計合成指数の2009/2Qは、4~5月の値。

(資料) 経済産業省「鉱工業総供給表」、内閣府「国民経済計算」、  
 日本銀行「販売統計合成指数」等

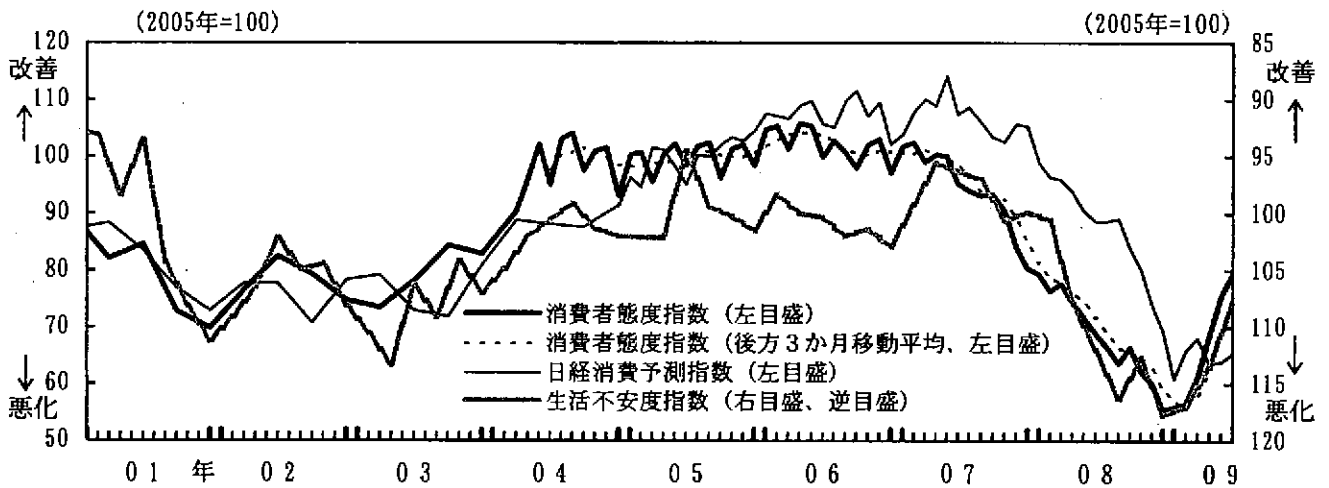
(図表23)

# 消費者コンフィデンス

## (1) 季調済系列

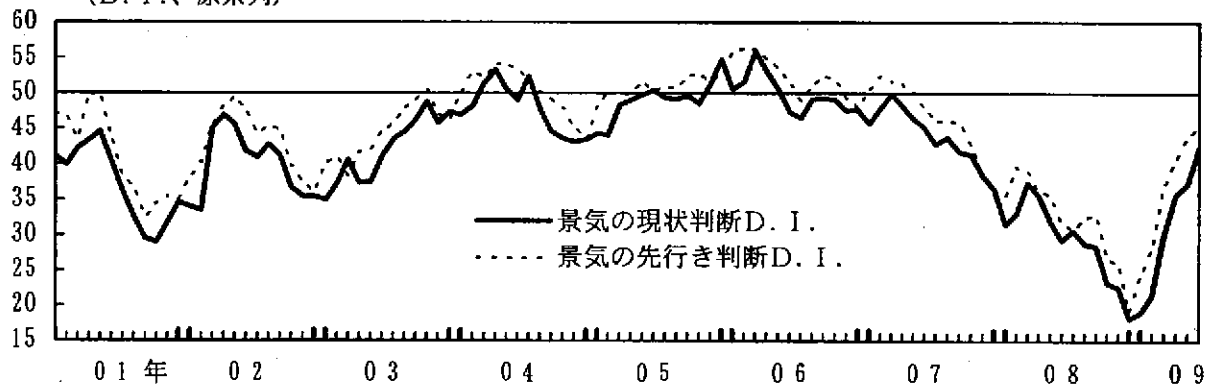


## (2) 原系列



### <参考> 景気ウォッチャー調査 (家計動向関連)

(D. I.、原系列)



- (注) 1. 消費者態度指数 (調査客体：全国・一般世帯 約4,700世帯)、日経消費予測指数 (同：首都圏600人)、生活不安度指数 (同：全国1,200人) はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。  
2. 調査が実施されていない月については、線形補間を実施。  
3. 日経消費予測指数及び生活不安度指数はX-12-ARIMAによる季節調整値。なお、日経消費予測指数は、2004年まで四半期調査であったため、四半期の値で季節調整を実施。

(資料) 内閣府「消費動向調査」「景気ウォッチャー調査」、日本経済新聞社「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」

## 住宅関連指標

## 〈新設住宅着工戸数〉

— 季調済年率換算戸数：万戸、〈 〉内は季調済前期（月）比、（ ）内は前年比：%

	08年度	08/10～12月	09/1～3	4～6	09/4月	5	6
総戸数	103.9	101.0	90.4	76.2	77.9	75.8	74.9
		〈 -8.3〉	〈 -10.6〉	〈 -15.7〉	〈 -12.3〉	〈 -2.7〉	〈 -1.2〉
	( 0.3)	( 4.1)	(-21.4)	(-31.9)	(-32.4)	(-30.8)	(-32.4)
持家	31.1	30.1	28.6	26.8	25.9	25.8	28.5
		〈 -11.6〉	〈 -5.1〉	〈 -6.3〉	〈 -5.1〉	〈 -0.2〉	〈 10.3〉
	( -0.4)	( -7.7)	(-11.3)	(-13.6)	(-15.8)	(-14.9)	(-10.5)
分譲	27.3	25.6	20.8	15.5	14.8	16.5	15.1
		〈 -17.1〉	〈 -18.6〉	〈 -25.7〉	〈 -22.0〉	〈 11.7〉	〈 -8.5〉
	( -3.5)	( 9.4)	(-34.5)	(-51.0)	(-54.3)	(-48.1)	(-50.0)
貸家系	45.6	44.6	38.8	33.8	35.8	33.3	32.4
		〈 -8.1〉	〈 -12.9〉	〈 -12.9〉	〈 -10.0〉	〈 -6.9〉	〈 -2.9〉
	( 3.3)	( 9.8)	(-18.1)	(-31.7)	(-26.7)	(-30.8)	(-36.8)

## 〈首都圏新築マンション関連指標 —不動産経済研究所調べ—〉

— 〈 〉内は季調済前期（月）比、（ ）内は前年比：%

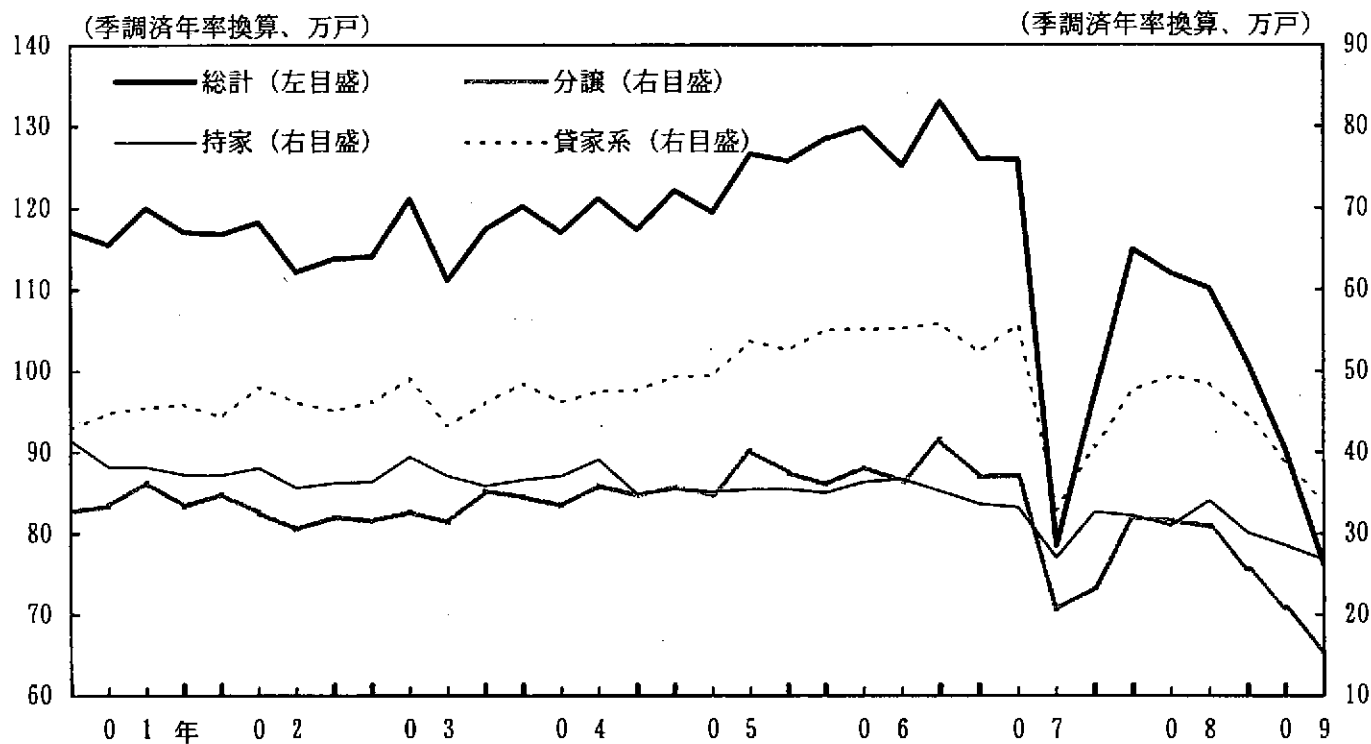
	08年度	08/10～12月	09/1～3	4～6	09/4月	5	6
全売却戸数（年率、万戸）	4.2	4.0	4.8	4.0	3.9	4.1	4.1
		〈 3.4〉	〈 20.0〉	〈 -15.0〉	〈 7.5〉	〈 5.4〉	〈 1.1〉
	(-22.4)	(-18.1)	( 0.7)	(-10.4)	(-15.4)	(-10.1)	( -6.4)
期末在庫（戸）	8,829	10,737	8,829	8,164	9,187	8,684	8,164
新規契約率（%）	64.1	62.5	68.3	68.8	64.7	70.7	70.2

(注) 全売却戸数（契約成立戸数）の月次・四半期計数および期末在庫（年度計数を含む）は、X-12-ARIMAによる季節調整値。新規契約率はすべて原計数。

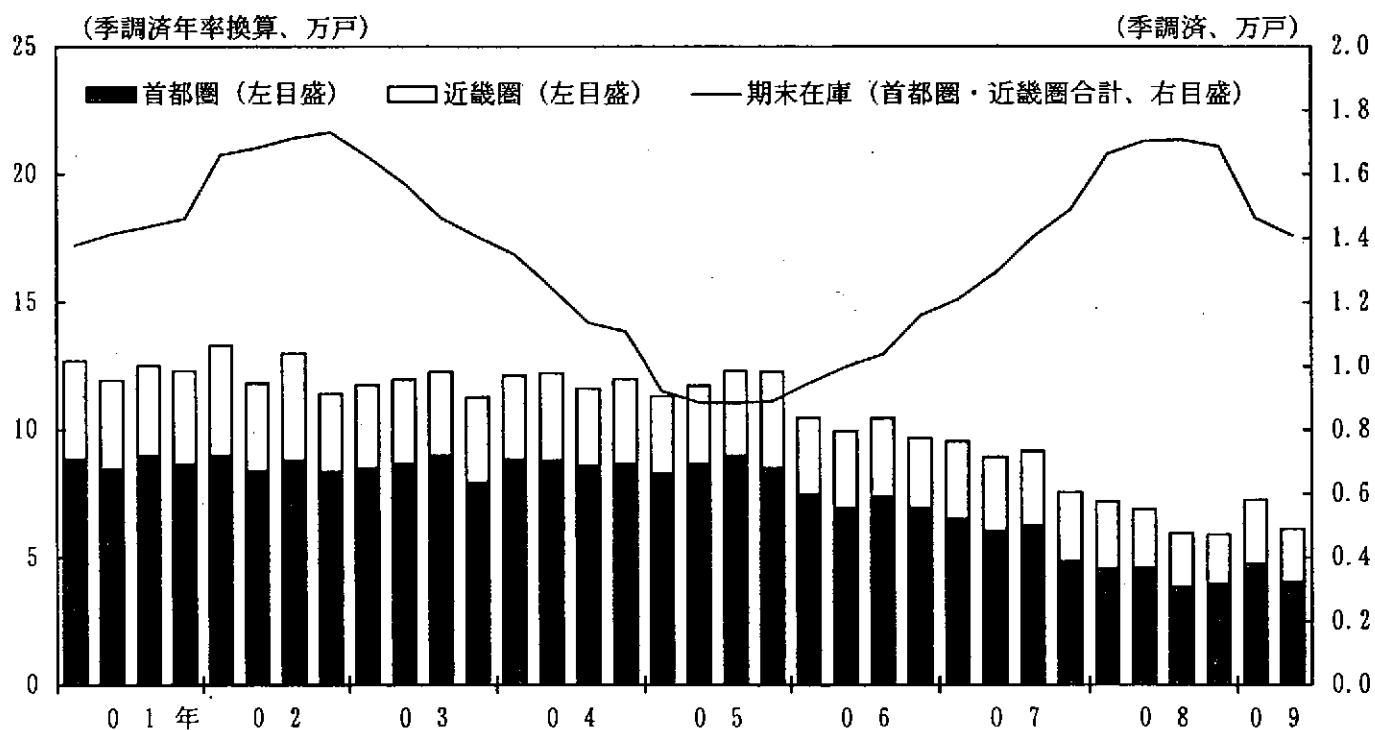
(資料) 国土交通省「建築着工統計」、不動産経済研究所「首都圏のマンション市場動向」

# 住宅投資関連指標

## (1) 新設住宅着工戸数



## (2) マンション販売動向 (全売却戸数)



(注) X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 国土交通省「建築着工統計」、不動産経済研究所「首都圏のマンション市場動向」「近畿圏のマンション市場動向」

## 生産・出荷・在庫関連指標

## 〈鉱工業指数統計〉

- 〈〉内は季調済前期(月)比、( )内は前年比：％  
 — 在庫、在庫率は期末値。  
 — 在庫率、稼働率は指数水準：季調済、2005年=100

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6	7	8
生産	(-12.7)	<-11.3> (-14.5)	<-22.1> (-34.6)	< 8.3> (-27.8)	< 5.9> (-30.7)	< 5.7> (-29.5)	< 2.4> (-23.4)	< 1.6> (-23.0)	< 3.3> (-17.9)
出荷	(-12.6)	<-11.0> (-14.9)	<-21.0> (-33.5)	< 6.4> (-27.6)	< 3.0> (-30.7)	< 4.8> (-30.0)	< 3.5> (-22.6)		
在庫	(- 5.2)	< 1.9> ( 4.8)	<- 9.0> (- 5.2)	<- 4.4> (-10.2)	<- 2.7> (- 7.2)	<- 0.7> (- 8.4)	<- 1.0> (-10.2)		
在庫率	150.1	132.1	150.1	129.1	143.0	143.1	129.1		
稼働率	88.6	87.1	63.4	69.9	67.2	72.6			

- (注) 1. 生産の2009/7、8月は予測指数。前月比は、経済産業省公表値。前年比は、経済産業省公表の予測指数の前月比から試算した指数(季調済)を本系列の季節要素で割り戻した値から計算しているため、経済産業省公表の予測指数の前年比と一致しない。  
 2. 予測指数を用いて算出した生産の2009/7~9月は、前期比 +7.4%、前年比 -20.1% (9月を8月と同水準と仮定して算出)。  
 3. 2009/4~6月の稼働率は、4~5月の値。

## 〈第3次産業・全産業活動指数〉

- 〈〉内は季調済前期(月)比、( )内は前年比：％

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/2月	3	4	5
第3次産業 活動指数	(-2.8)	<-1.7> (-3.0)	<-3.1> (-6.5)	<-0.3> (-6.4)	<-2.0> (-7.3)	<-2.7> (-7.7)	< 2.2> (-6.1)	<-0.1> (-6.8)
全産業 活動指数	(-4.7)	<-2.7> (-5.0)	<-6.2> (-11.1)	< 0.7> (-9.8)	<-3.3> (-12.4)	<-1.6> (-11.8)	< 2.6> (-9.8)	< 0.7> (-9.9)

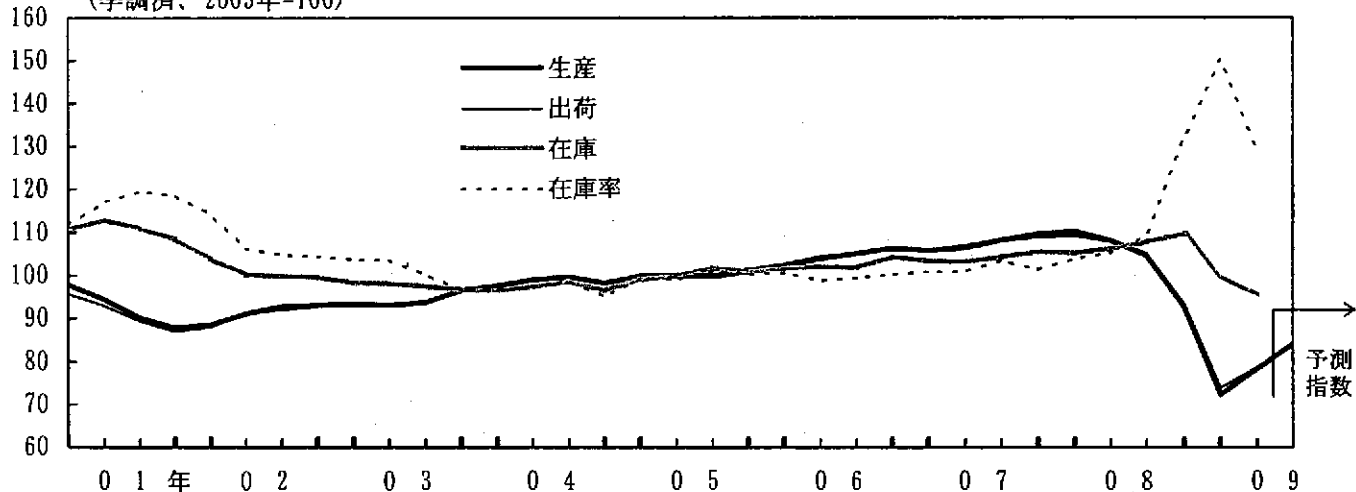
- (注) 1. 全産業活動指数は農林水産業生産指数を除いたベース。  
 2. 2009/4~6月の前期比は4~5月の1~3月対比、前年比は4~5月の前年同期比。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「第3次産業活動指数」「全産業活動指数」

# 生産

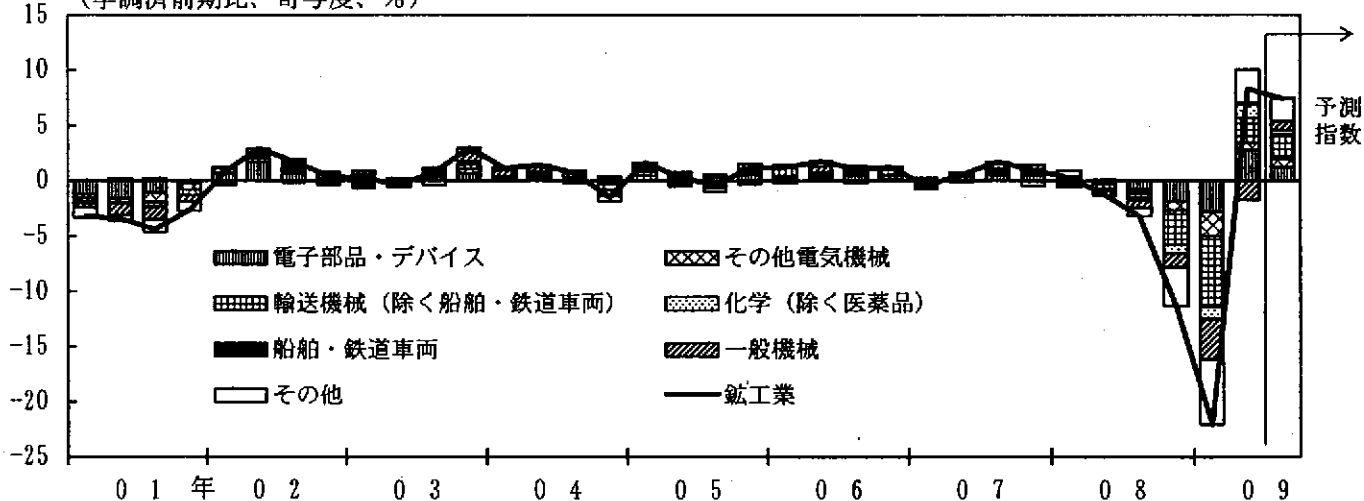
## (1) 鉱工業生産・出荷・在庫

(季調済、2005年=100)



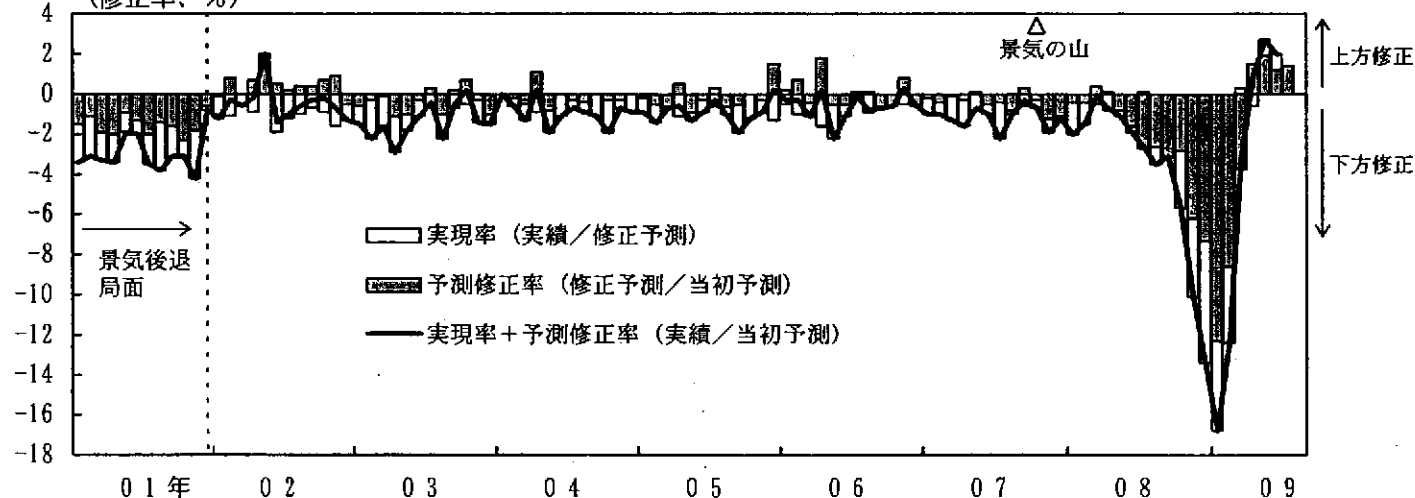
## (2) 生産の業種別寄与度

(季調済前期比、寄与度、%)



## (3) 生産予測指数の修正状況

(修正率、%)

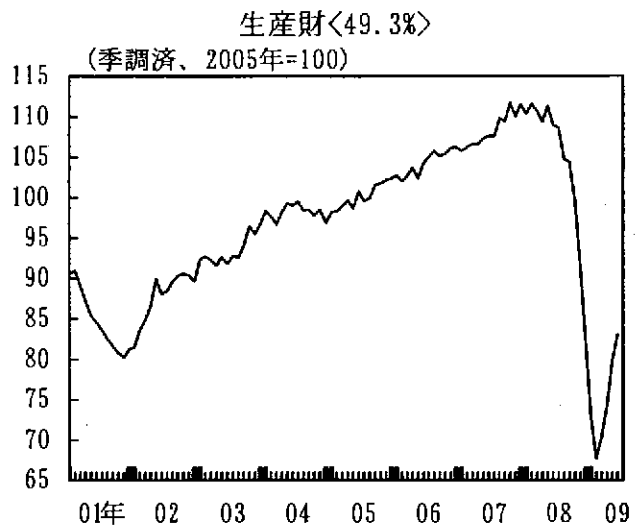
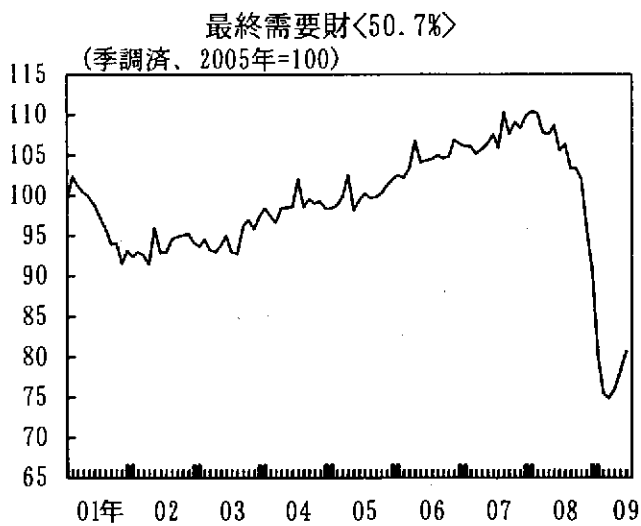


- (注) 1. その他電気機械は電気機械、情報通信機械を合成したもの。
- 2. 2009/3Qの生産は予測指数を用いて算出。なお、9月を8月と同水準と仮定して算出した値。
- 3. (2) の2003/1Q以前は、2000年基準の指数を用いて算出。  
(3) の2003年1月以前は2000年基準の値を使用。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

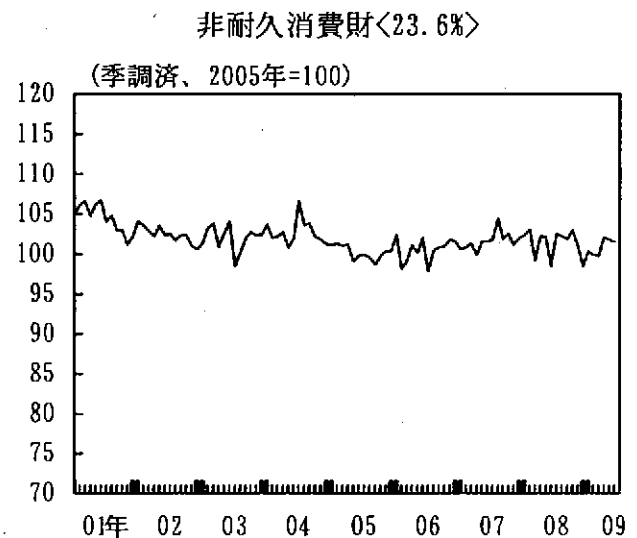
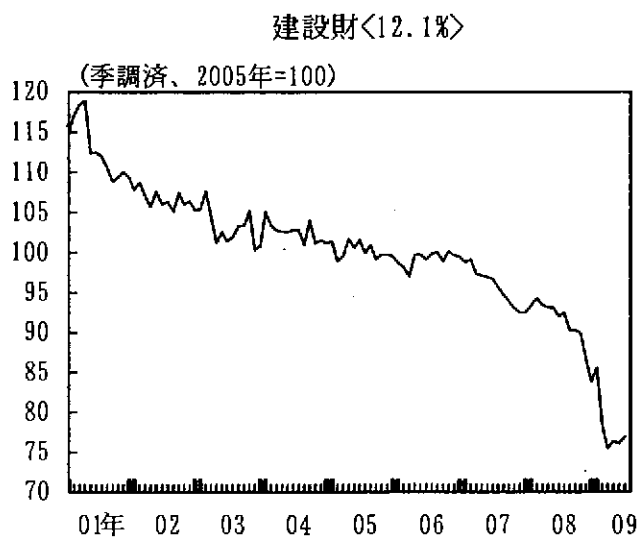
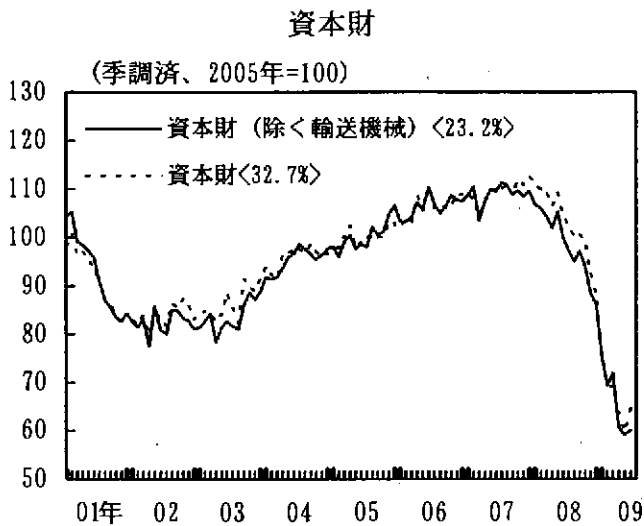
# 財別出荷

## (1) 最終需要財と生産財



(注) <>内は鉱工業出荷に占めるウェイト。

## (2) 最終需要財の内訳

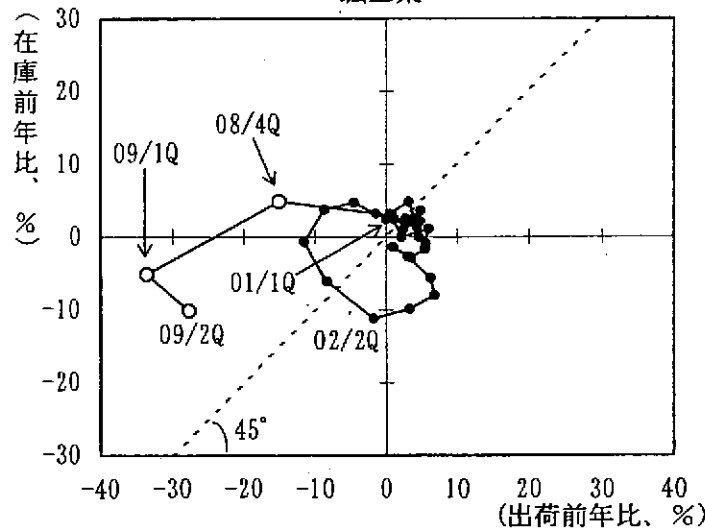


(注) <>内は最終需要財に占めるウェイト。

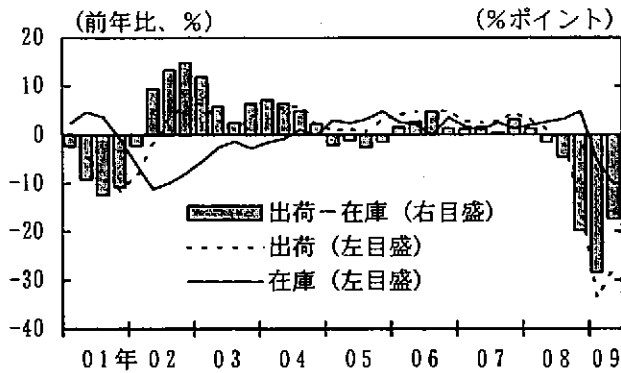
(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

# 在庫循環

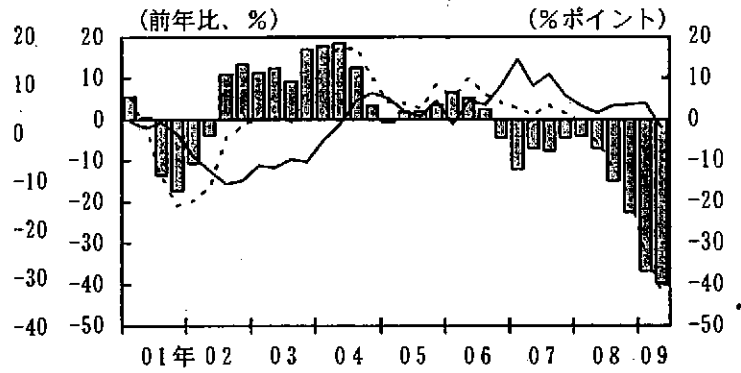
鉱工業



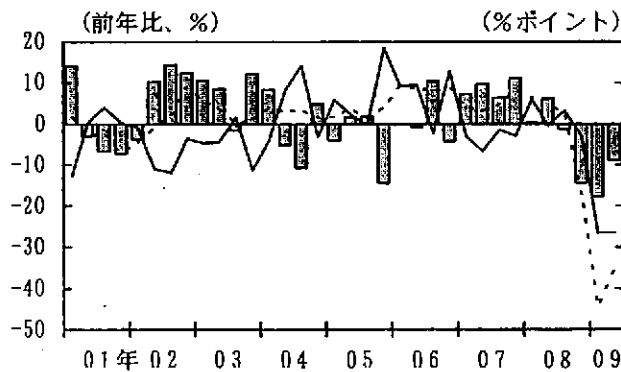
(1) 鉱工業



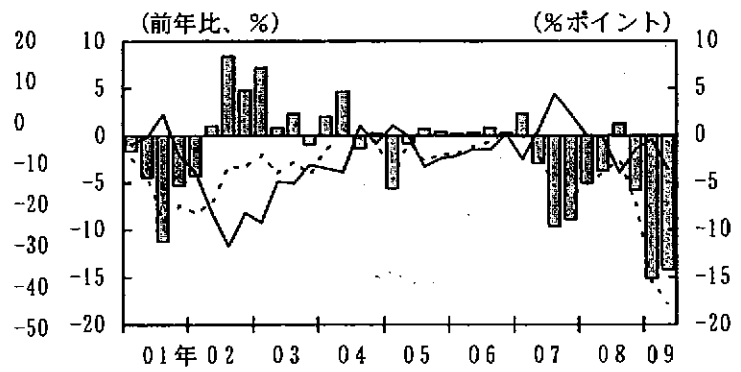
(2) 資本財 (除く輸送機械)



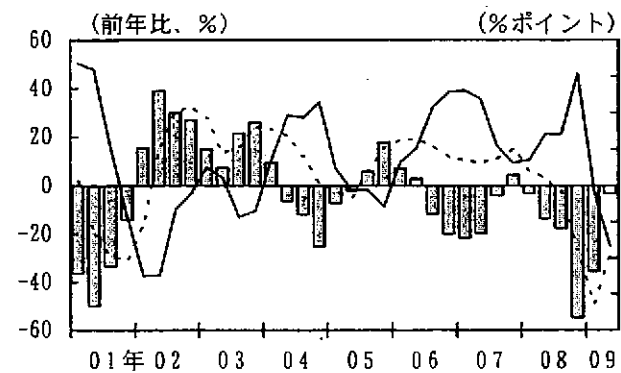
(3) 耐久消費財



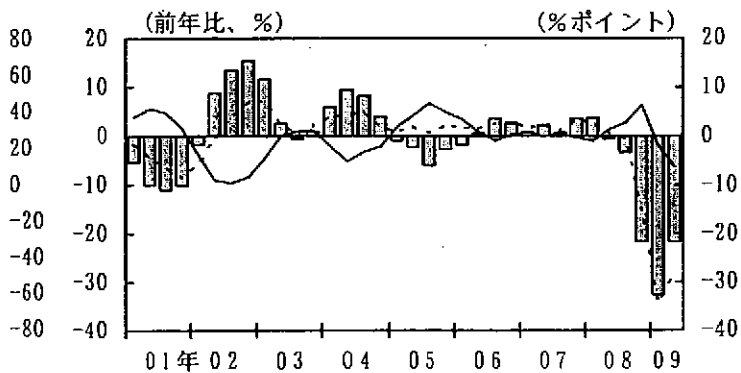
(4) 建設財



(5) 電子部品・デバイス



(6) その他生産財



(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」



## 雇用関連指標

## &lt;職業安定業務統計&gt;

— ( )内は前年比、&lt; &gt;内は季調済前期(月)比：%

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
有効求人倍率(季調済、倍)	0.77	0.76	0.59	0.45	0.46	0.44	0.43
有効求職	( 6.9)	< 4.9>	< 13.9>	< 11.4>	< 4.2>	< 2.4>	< 1.7>
有効求人	(-19.1)	< -5.9>	< -11.9>	< -15.9>	< -7.4>	< -2.2>	< -0.5>
新規求人倍率(季調済、倍)	1.08	1.07	0.81	0.76	0.77	0.75	0.76
新規求職	( 11.5)	< 9.1>	< 13.9>	< -2.5>	< -2.3>	< -2.7>	< 2.7>
新規求人	(-18.3)	< -3.3>	< -13.3>	< -8.6>	< -0.9>	< -4.9>	< 4.2>
		(-18.3)	(-23.6)	(-27.8)	(-26.5)	(-34.5)	(-22.3)
うち製造業	(-33.4)	(-38.4)	(-57.5)	(-53.3)	(-55.6)	(-55.9)	(-48.3)
うち非製造業	(-15.9)	(-15.0)	(-18.4)	(-24.0)	(-22.1)	(-31.3)	(-18.5)
パートの有効求人倍率 (季調済、倍)	1.13	1.12	0.93	0.75	0.78	0.74	0.72

## &lt;労働力調査&gt;

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
労働力人口	( -0.3)	( -0.6)	( -0.1)	( -0.8)	( -0.5)	( -0.9)	( -1.0)
		< 0.1>	< 0.3>	< -0.7>	< 0.1>	< -0.6>	< -0.3>
就業者数	( -0.6)	( -0.7)	( -0.8)	( -2.0)	( -1.7)	( -2.1)	( -2.3)
		< 0.1>	< -0.2>	< -1.5>	< -0.1>	< -0.7>	< -0.4>
雇用者数	( -0.1)	( 0.0)	( -0.3)	( -1.7)	( -1.3)	( -1.8)	( -2.0)
		< 0.2>	< -0.6>	< -1.3>	< -0.2>	< -0.5>	< -0.2>
完全失業者数(季調済、万人)	275	268	297	344	334	343	356
非自発的離職者数(季調済、万人)	97	95	119	151	143	145	165
完全失業率(季調済、%)	4.1	4.0	4.5	5.2	5.0	5.2	5.4
労働力率(季調済、%)	60.2	60.1	60.3	59.8	60.1	59.8	59.6

## &lt;毎月勤労統計&gt;

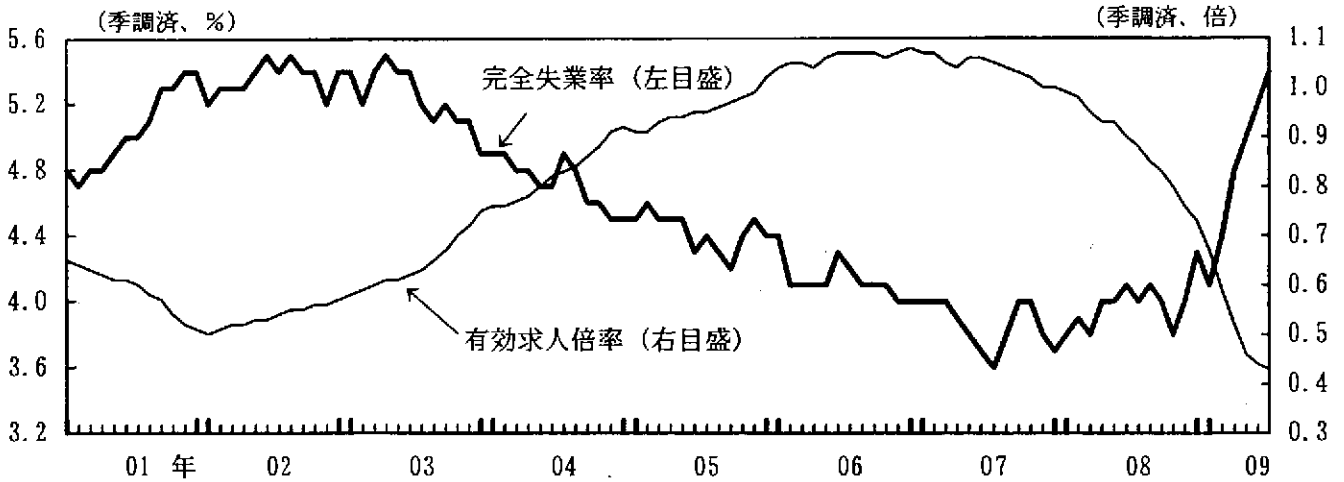
	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
常用労働者数(a)	( 1.2)	( 1.0)	( 0.6)	( 0.1)	( 0.3)	( -0.1)	( -0.1)
		< 0.3>	< -0.1>	< -0.3>	< 0.0>	< -0.3>	< 0.0>
製造業	( 0.3)	( 0.4)	( -1.0)	( -2.4)	( -1.9)	( -2.6)	( -2.7)
非製造業	( 1.4)	( 1.1)	( 1.0)	( 0.6)	( 0.8)	( 0.5)	( 0.5)
名目賃金(b)	( -1.1)	( -1.2)	( -3.0)	( -4.7)	( -2.7)	( -2.5)	( -7.1)
所定内給与	( -0.4)	( -0.5)	( -1.1)	( -1.1)	( -1.3)	( -1.6)	( -0.5)
所定外給与	( -6.7)	( -7.7)	( -16.6)	( -17.7)	( -18.3)	( -17.0)	( -17.7)
特別給与	( -1.9)	( -1.7)	( -21.5)	( -13.7)	( -10.0)	( 4.3)	( -14.5)
雇用者所得(a×b)	( 0.1)	( -0.2)	( -2.4)	( -4.6)	( -2.4)	( -2.6)	( -7.2)

(注) 毎月勤労統計の値は事業所規模5人以上。

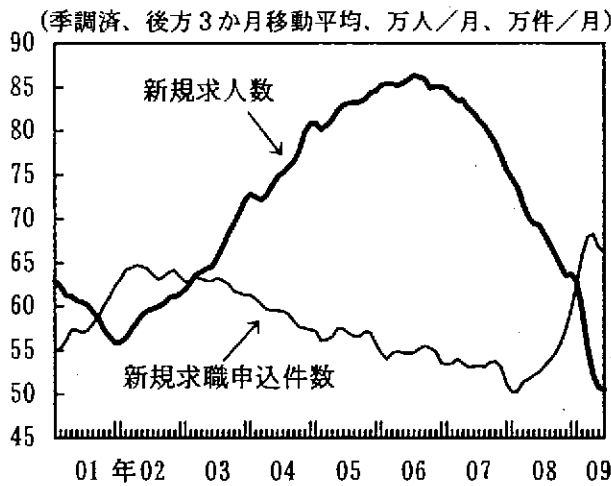
(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」「職業安定業務統計」、総務省「労働力調査」

# 労働需給 (1)

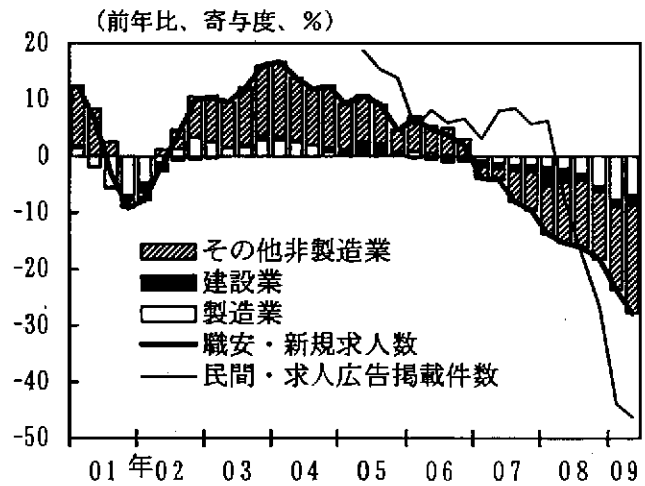
## (1) 失業率と有効求人倍率



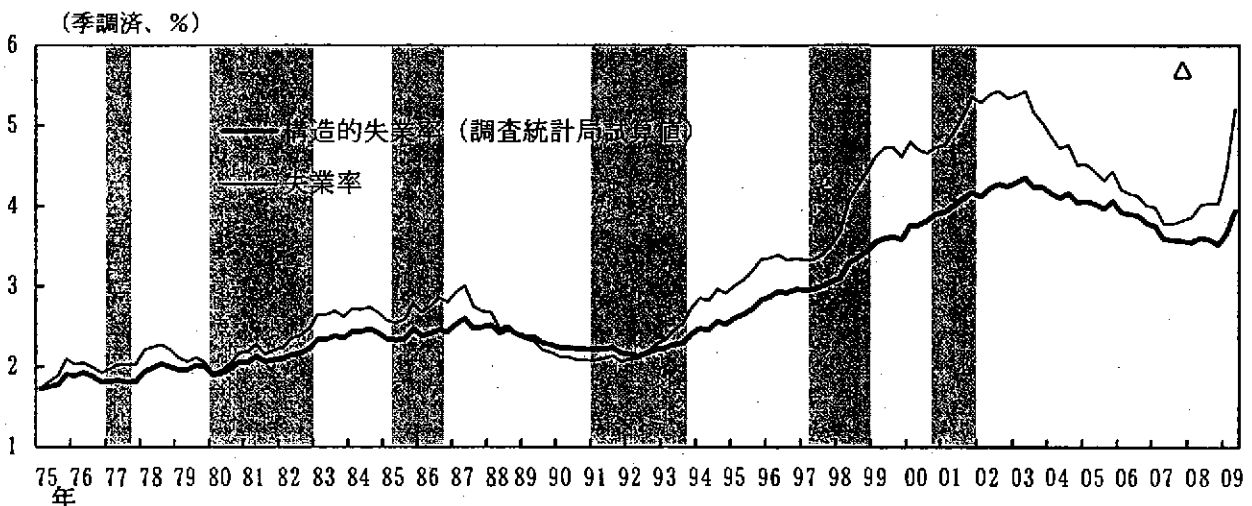
## (2) 新規求人と新規求職



## (3) 求人動向



## (4) 構造的失業率



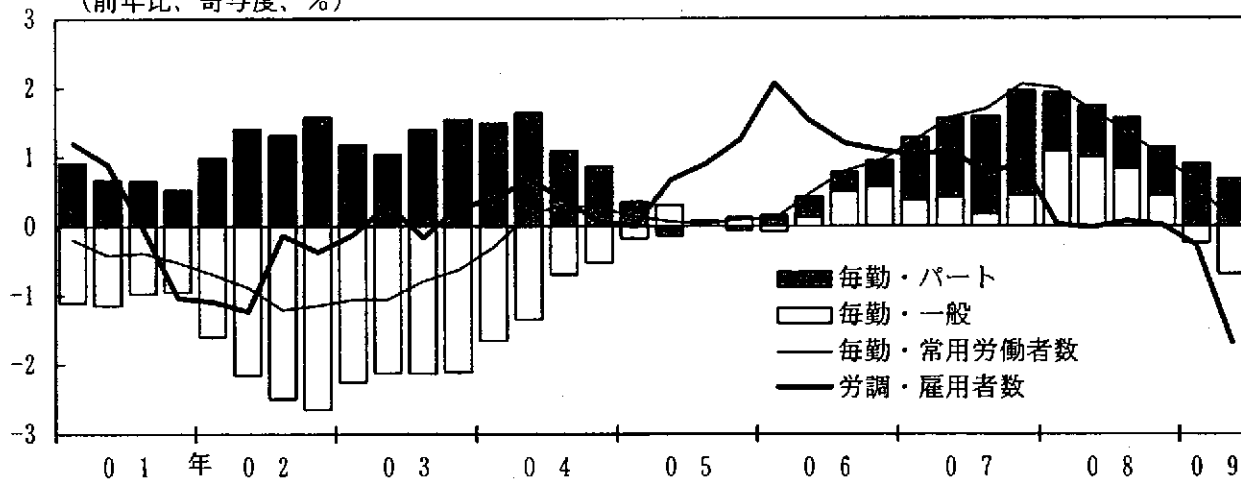
- (注) 1. 新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む。  
 2. 求人広告掲載件数は、全国求人情報協会に加盟している企業が発行している求人メディア（有料求人情報誌、フリーペーパー、折込求人紙、求人サイト）に掲載された求人広告件数の集計値。  
 3. シェード部分は景気後退局面。△は直近の景気の山。

(資料) 総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」、  
 社団法人全国求人情報協会「求人広告掲載件数」

# 労働需給 (2)

## (1) 労調・雇用者数と毎勤・常用労働者数

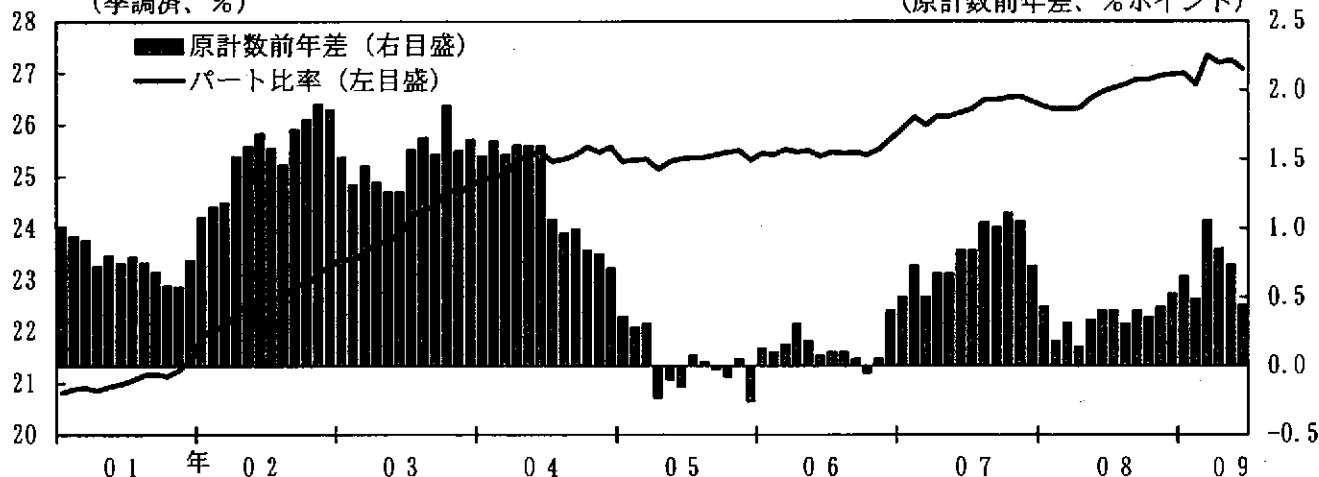
(前年比、寄与度、%)



## (2) パート比率

(季調済、%)

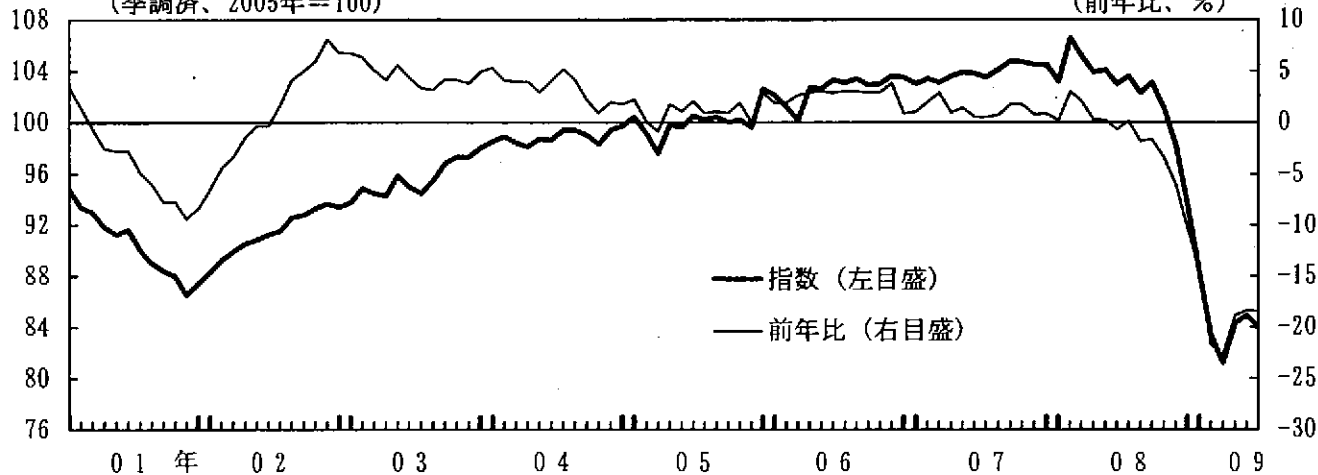
(原計数前年差、%ポイント)



## (3) 所定外労働時間

(季調済、2005年=100)

(前年比、%)



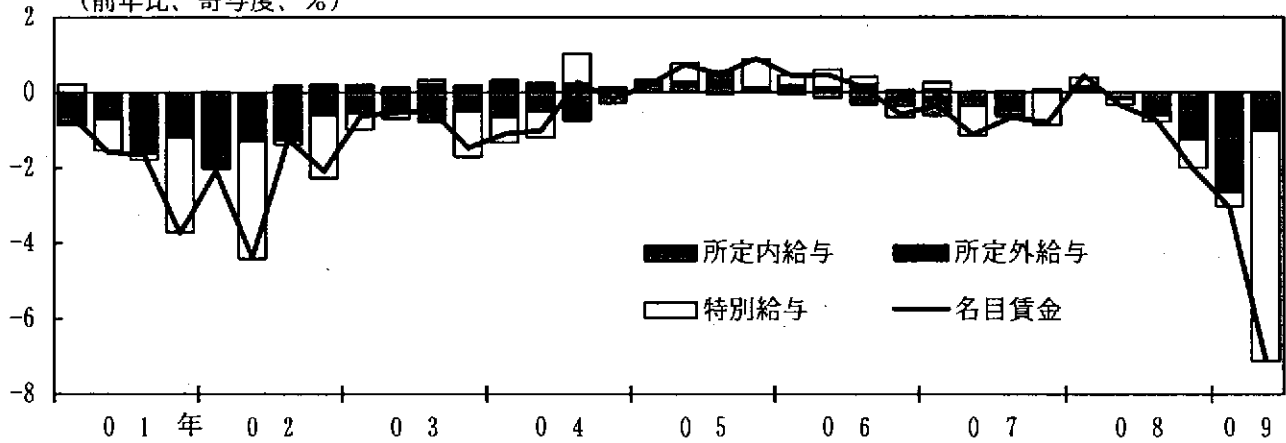
- (注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。
- 2. パート比率は、パート労働者数/常用労働者数×100として算出。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

# 雇用者所得

## (1) 名目賃金

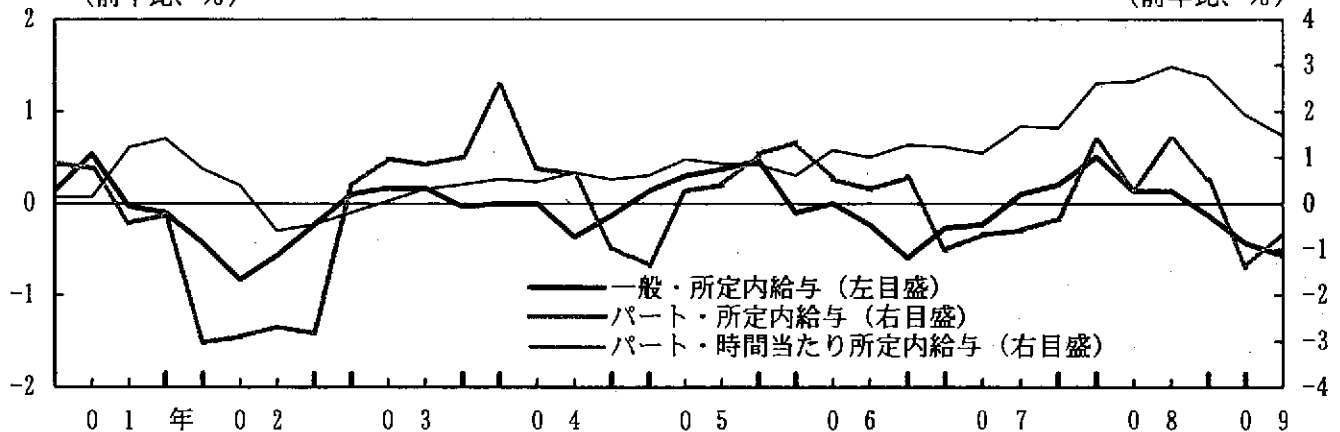
(前年比、寄与度、%)



## (2) 就業形態別・所定内給与

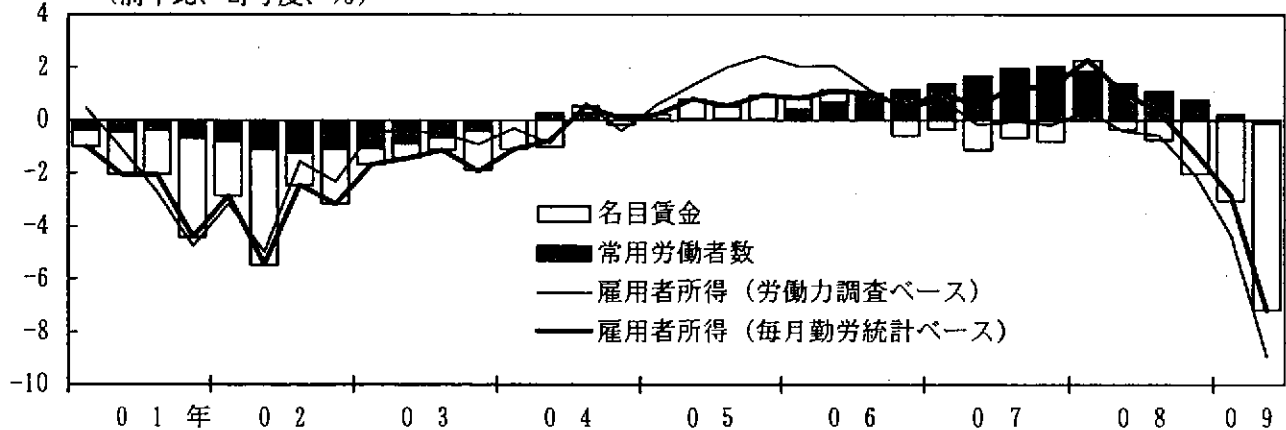
(前年比、%)

(前年比、%)



## (3) 雇用者所得

(前年比、寄与度、%)



(注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。

2. (1) および (3) の四半期は以下のように組替えている。

第1四半期：3～5月、第2：6～8月、第3：9～11月、第4：12～2月。

2009/2Qは、6月の前年同月比。

3. (3) の雇用者所得は以下のように算出。

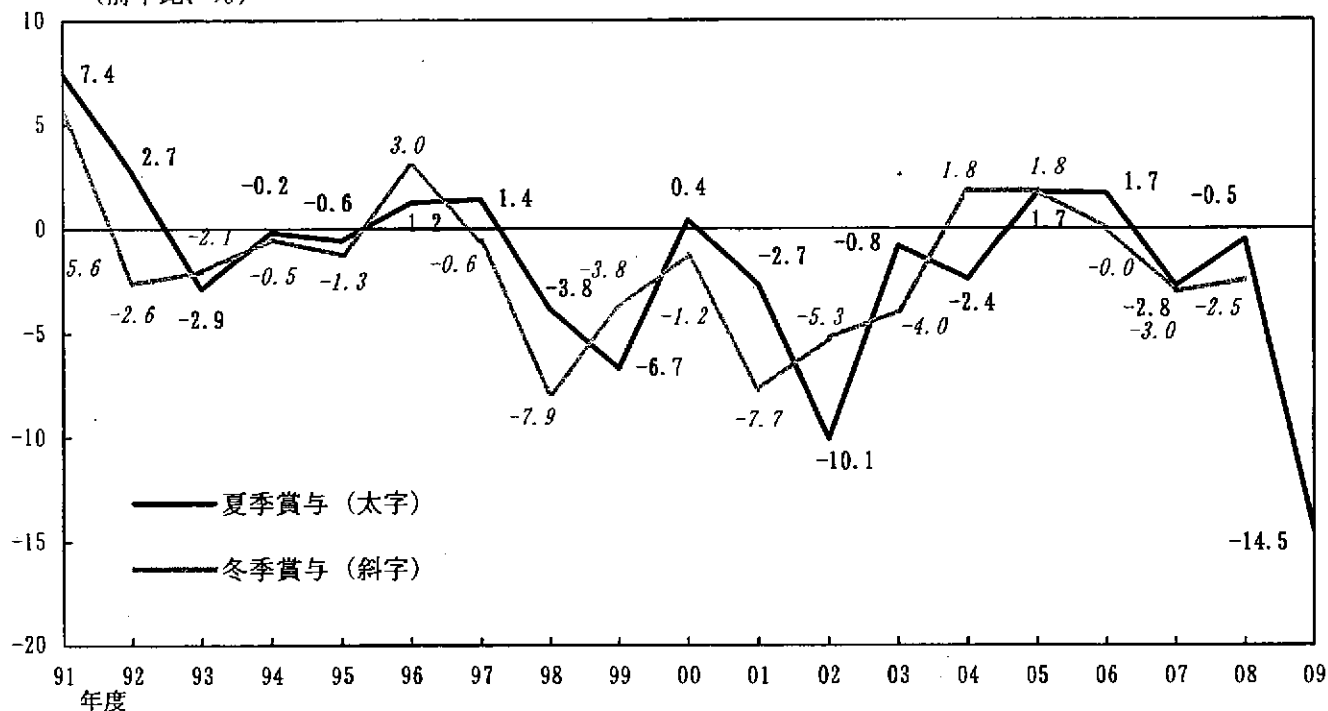
雇用者所得 (毎月勤労統計ベース) = 常用労働者数 (毎月勤労統計) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

雇用者所得 (労働力調査ベース) = 雇用者数 (労働力調査) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

## 夏季賞与

### (1) 賞与の推移

(前年比、%)



### (2) 賞与の業種別動向

(前年比、%)

	2008年度夏季	2008年度冬季	2009年度夏季
全体	-0.5	-2.5	-14.5
製造業	2.4	-2.6	-26.2
非製造業	-1.5	-2.4	-11.4

### (3) アンケート調査 (全産業)

(前年比、%)

	2008年度夏季	2008年度冬季	2009年度夏季
日本経済団体連合会	-0.1	-0.4	-17.2
日本経済新聞社	-0.3	-0.8	-16.6

- (注) 1. 毎月勤労統計は、賞与支給月の特別給与の合計の前年比(夏季:6~8月、冬季:11~翌1月)。  
 2. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。2009年度の夏季賞与は6月の前年同月比。  
 3. 日本経済団体連合会の調査対象は主要21業種、大手253社。2009年度夏季賞与は、7月31日時点の最終集計(計167社)。  
 4. 日本経済新聞社の調査対象は、上場企業と日本経済新聞社が選んだ有力な非上場企業で、合計4467社。2009年度夏季賞与は、6月30日時点の最終集計(計702社)。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、日本経済団体連合会「労働情報」、日本経済新聞社

## 物価関連指標

— ( )内は前年比、&lt; &gt;内は前期(月)比、[ ]内は3か月前比：%

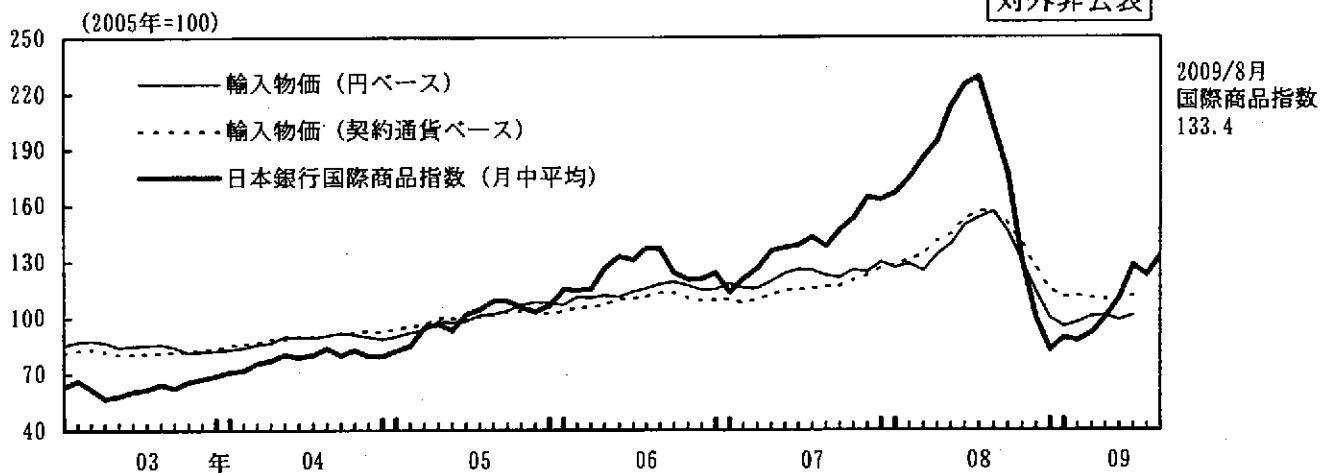
	08年度	09/1~3月	4~6	7~9	09/4月	5	6	7
輸出物価(円 <sup>レ</sup> -)	(-7.3)	(-11.5)	(-10.9)		(-8.4)	(-11.4)	(-12.8)	
		<-3.3>	<3.4>		<1.4>	<-1.6>	<1.2>	
同(契約通貨 <sup>レ</sup> -)	(1.4)	(-2.0)	(-4.6)		(-3.9)	(-4.8)	(-5.1)	
		<-1.2>	<0.0>		<0.4>	<-0.2>	<0.6>	
輸入物価(円 <sup>レ</sup> -)	(1.2)	(-22.9)	(-28.6)		(-24.1)	(-29.1)	(-32.2)	
		<-14.6>	<2.6>		<0.5>	<-2.7>	<2.5>	
					[6.3]	[1.2]	[0.3]	
同(契約通貨 <sup>レ</sup> -)	(11.2)	(-15.1)	(-24.3)		(-21.8)	(-24.5)	(-26.5)	
		<-12.6>	<-0.6>		<-0.5>	<-0.6>	<2.3>	
日本銀行国際商品指数	(-4.9)	<-3.2>	<29.3>	<11.4>	<6.4>	<20.3>	<8.7>	<-0.3>
日経商品指数(42種)	(-0.6)	<-12.0>	<1.8>	<2.0>	<2.5>	<-1.0>	<2.2>	<0.9>
国内企業物価	(3.2)	(-1.8)	(-5.3)		(-4.0)	(-5.5)	(-6.6)	
		<-3.2>	<-1.2>		<-0.6>	<-0.5>	<-0.3>	
					[-1.2]	[-1.3]	[-1.3]	
CSP I 総平均	(-0.6)	(-2.4)	(-2.9)		(-2.4)	(-3.0)	(-3.2)	
総平均 除く海外要因	(-0.1)	(-0.4)	(-0.4)		(-0.3)	(-0.5)	(-0.5)	
全国CPI 総合	(1.1)	(-0.1)	(-1.0)		(-0.1)	(-1.1)	(-1.8)	
総合 除く生鮮食品 [9588]	(1.2)	(-0.1)	(-1.0)		(-0.1)	(-1.1)	(-1.7)	
うち								
財 除く農水畜産物 [3731]	(1.8)	(-1.5)	(-2.5)		(-1.1)	(-2.7)	(-3.9)	
一般サービス [3775]	(0.7)	(0.4)	(-0.1)		(0.1)	(-0.1)	(-0.2)	
公共料金 [1778]	(1.0)	(1.5)	(0.4)		(1.4)	(0.2)	(-0.3)	
東京CPI 総合	(1.0)	(0.4)	(-0.8)	(-1.8)	(-0.1)	(-0.8)	(-1.5)	(-1.8)
総合 除く生鮮食品 [9600]	(1.1)	(0.5)	(-0.6)	(-1.7)	(0.0)	(-0.7)	(-1.3)	(-1.7)
うち								
財 除く農水畜産物 [3023]	(1.2)	(-0.3)	(-1.6)	(-2.9)	(-0.6)	(-1.6)	(-2.7)	(-2.9)
一般サービス [4507]	(0.7)	(0.3)	(-0.4)	(-0.6)	(-0.2)	(-0.3)	(-0.5)	(-0.6)
公共料金 [1806]	(1.7)	(2.5)	(0.4)	(-2.0)	(1.8)	(-0.1)	(-0.7)	(-2.0)

- (注) 1. 国内企業物価の前期(月)比、3か月前比は夏季電力料金を調整。  
 2. CSP Iの海外要因とは、国際航空貨物輸送、外航貨物用船料、外航タンカー、不定期船、定期船、国際航空旅客輸送。  
 3. CPIの内訳[ ]内は、構成比(万分比)。  
 4. 東京CPIの2009年7月のデータは中旬速報値。  
 5. 2009年7~9月の日本銀行国際商品指数、日経商品指数、東京CPIは7月のデータを使用。

(資料) 総務省「消費者物価指数」、日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」  
 「日本銀行国際商品指数」、日本経済新聞社「日経主要商品価格指数」

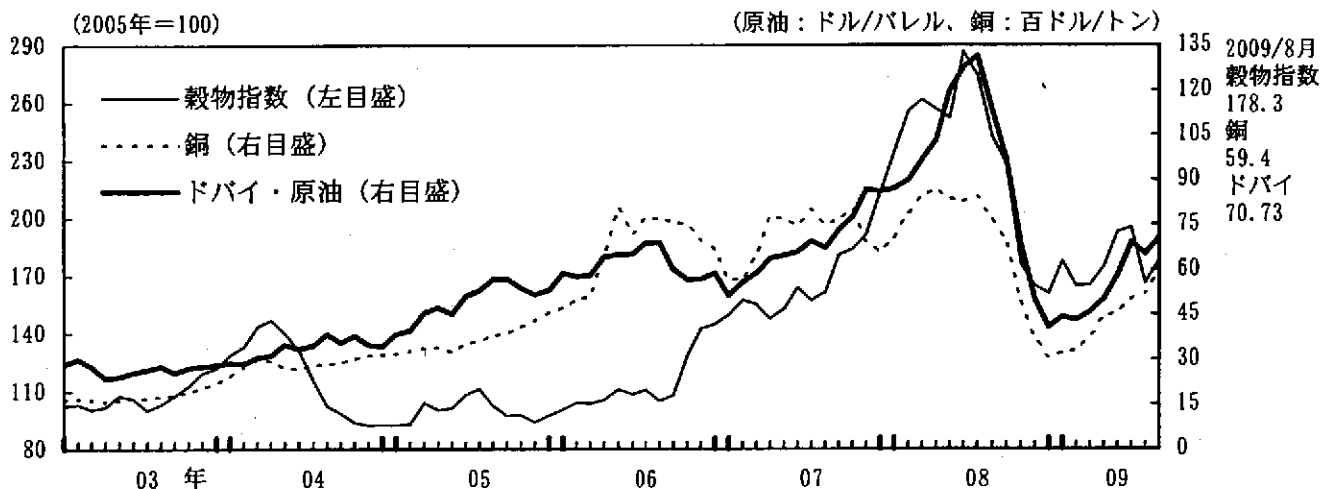
## 国際商品市況と輸入物価

### (1) 輸入物価 (契約通貨ベース、円ベース)



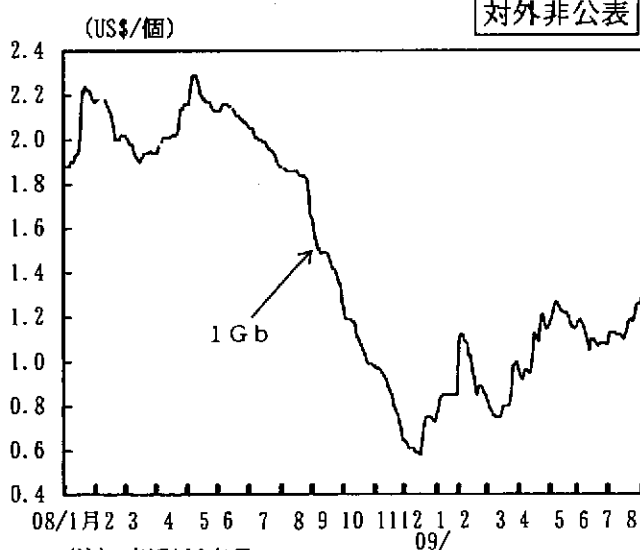
(注) 日本銀行国際商品指数の2009/8月は4日までの平均値。

### (2) 原油・非鉄金属・穀物

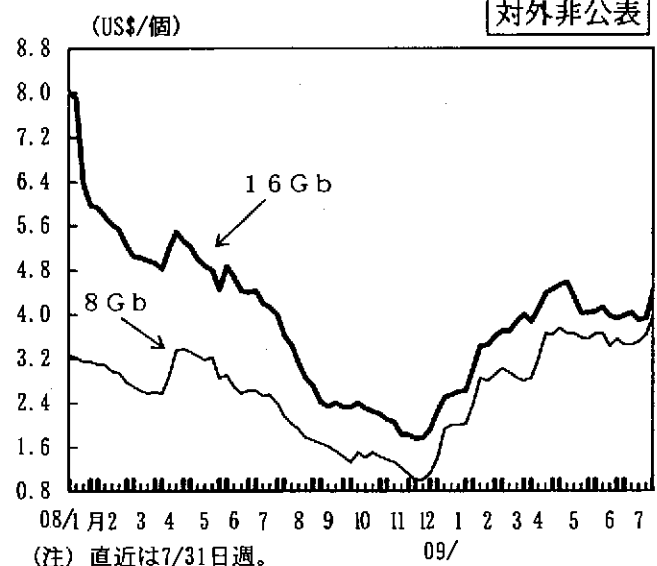


(注) 1. 穀物指数は、穀物 (小麦・大豆・トウモロコシ) の国際商品市況を加重平均したもの。  
加重平均に用いるウエイトは貿易統計の輸入金額から算出。  
2. 計数は月中平均。なお、2009/8月は4日までの平均値。

### (3) DRAM



### (4) NANDフラッシュメモリ



(資料) 日本銀行「企業物価指数」「日本銀行国際商品指数」、日本経済新聞社、Bloomberg、Gartner 等

(図表37)

## 輸入物価

(円ベース)

(1) 前年比

&lt;四半期&gt;

&lt;月次&gt;

	[ ]はウェイト (%)	(前年比, %)				(前年比, %)			
		08/3Q	4Q	09/1Q	2Q	09/3月	4	5	6
輸入物価	[100.0]	23.5	-9.5	-22.9	-28.6	-19.5	-24.1	-29.1	-32.2
機械器具	[31.8]	-7.0	-12.0	-11.2	-8.7	-6.8	-7.5	-8.7	-10.0
金属・同製品	[9.5]	9.1	-20.1	-29.4	-41.0	-29.5	-39.9	-41.7	-41.2
石油・石炭・天然ガス	[27.6]	70.2	-4.3	-35.2	-44.9	-31.3	-37.7	-45.9	-49.8
化学製品	[6.9]	14.6	-5.6	-18.0	-18.2	-13.4	-14.5	-18.3	-21.5
食料品・飼料	[8.2]	13.9	-13.9	-23.4	-23.4	-20.6	-21.4	-23.5	-25.2
その他	[16.1]	1.6	-7.0	-8.3	-8.4	-4.3	-5.2	-8.8	-10.9

— [ ]はウェイト (%)

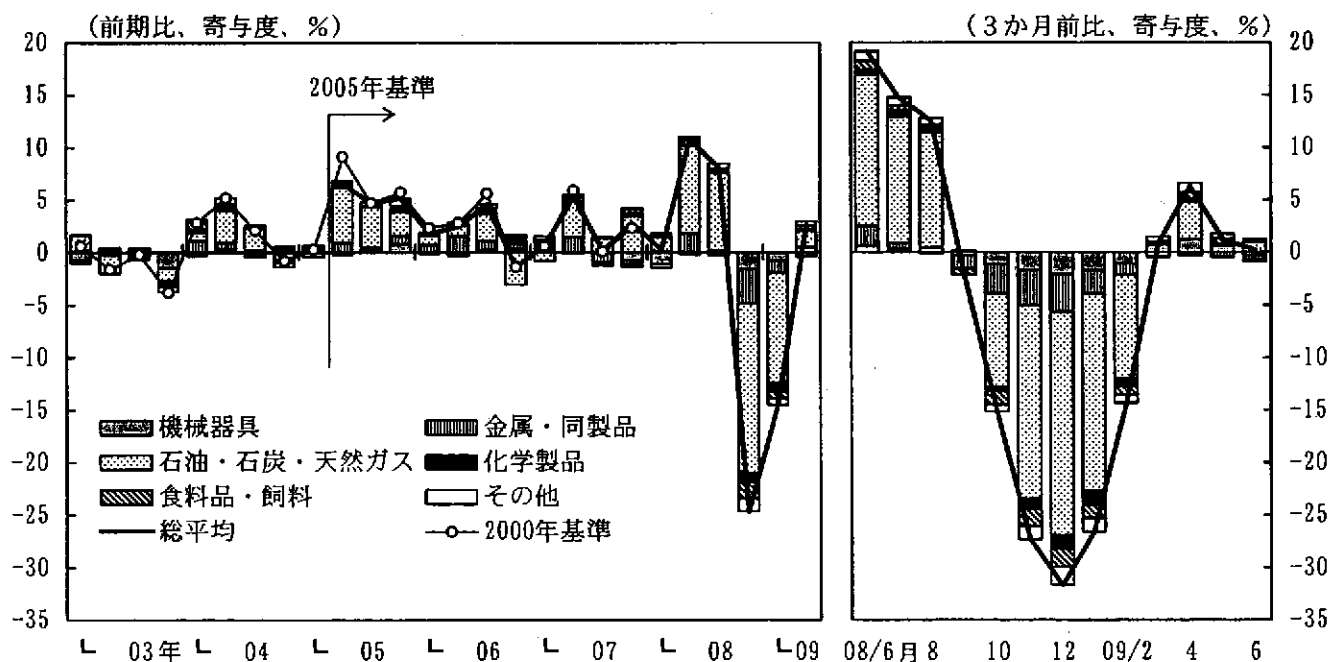
(2) 前期比、3か月前比

&lt;四半期&gt;

&lt;月次&gt;

	[ ]はウェイト (%)	(前期比, %)				(3か月前比, %)			
		08/3Q	4Q	09/1Q	2Q	09/3月	4	5	6
輸入物価	[100.0]	8.1	-24.7	-14.6	2.6	0.9	6.3	1.2	0.3
機械器具	[31.8]	0.6	-7.9	-3.3	1.9	2.6	4.4	2.2	-1.0
金属・同製品	[9.5]	-2.6	-29.3	-11.0	-3.8	1.7	-3.3	-4.4	-3.7
石油・石炭・天然ガス	[27.6]	19.0	-37.6	-29.5	5.3	-1.5	12.4	0.4	3.3
化学製品	[6.9]	7.1	-14.0	-12.2	1.1	-1.5	4.7	0.8	-2.1
食料品・飼料	[8.2]	0.1	-20.3	-8.5	4.9	1.0	6.5	5.7	2.5
その他	[16.1]	3.7	-10.0	-4.2	2.5	3.0	5.3	2.8	-0.4

— [ ]はウェイト (%)



(注) 1. 機械器具：一般機器、電気・電子機器、輸送用機器、精密機器  
 2. 2000年基準の2007/4Qは10月の値。

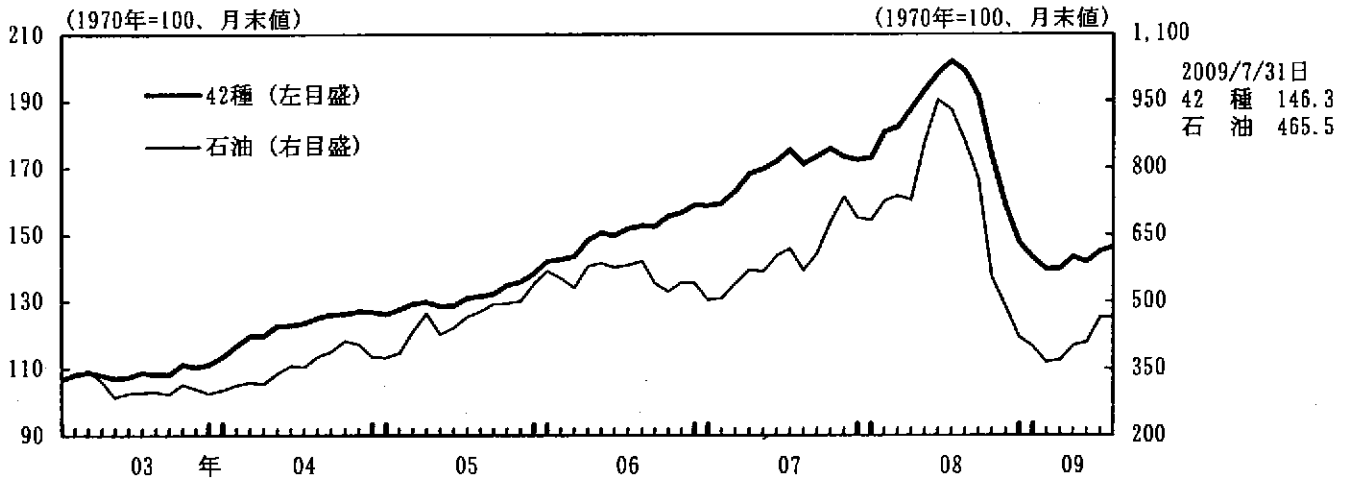
(資料) 日本銀行「企業物価指数」



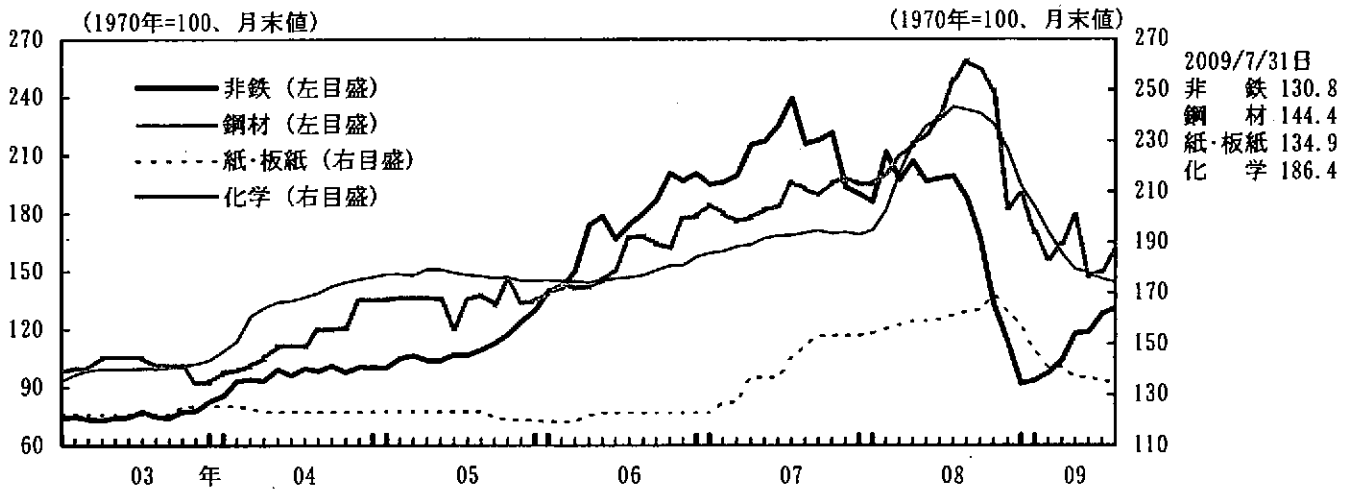
# 国内商品市況

## (1) 日経商品指数

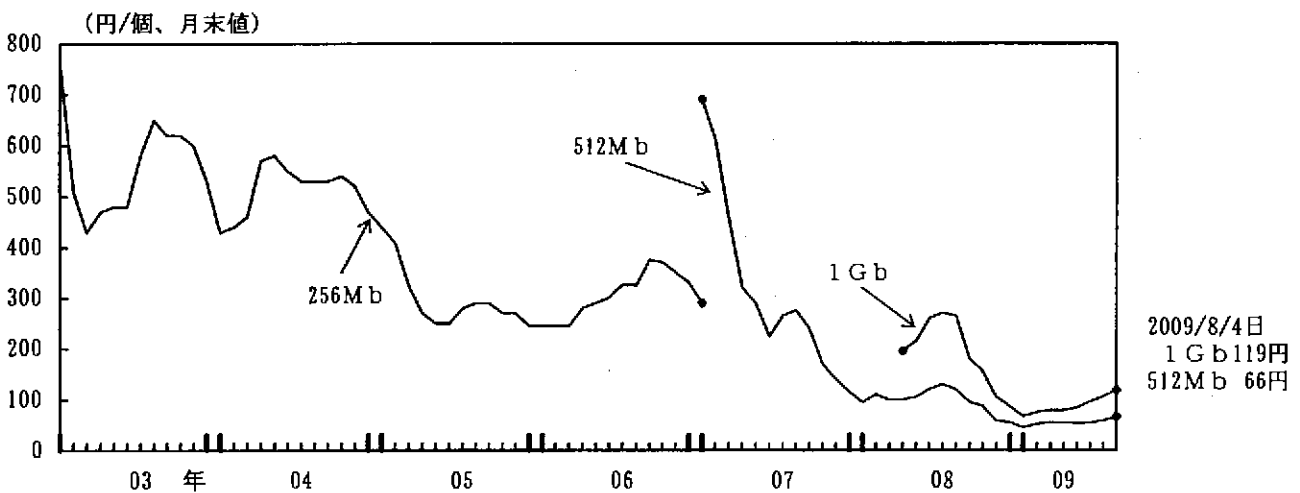
### ① 全体(42種)、石油



### ② 非鉄、鋼材、紙・板紙、化学



## (2) 半導体市況



(注) 1. 半導体市況は、大口需要家渡し。月次計数は、各月最終週の火曜日の価格。  
 2. 半導体市況は、世代交代を反映し、2007年1月に256Mb(DDR型)→512Mb(DDR2型)へと、系列の切り替えを行っている。  
 なお、2006年2月14日より、データがドル建てに変更されたため、直前1週間の平均レートで円換算している。

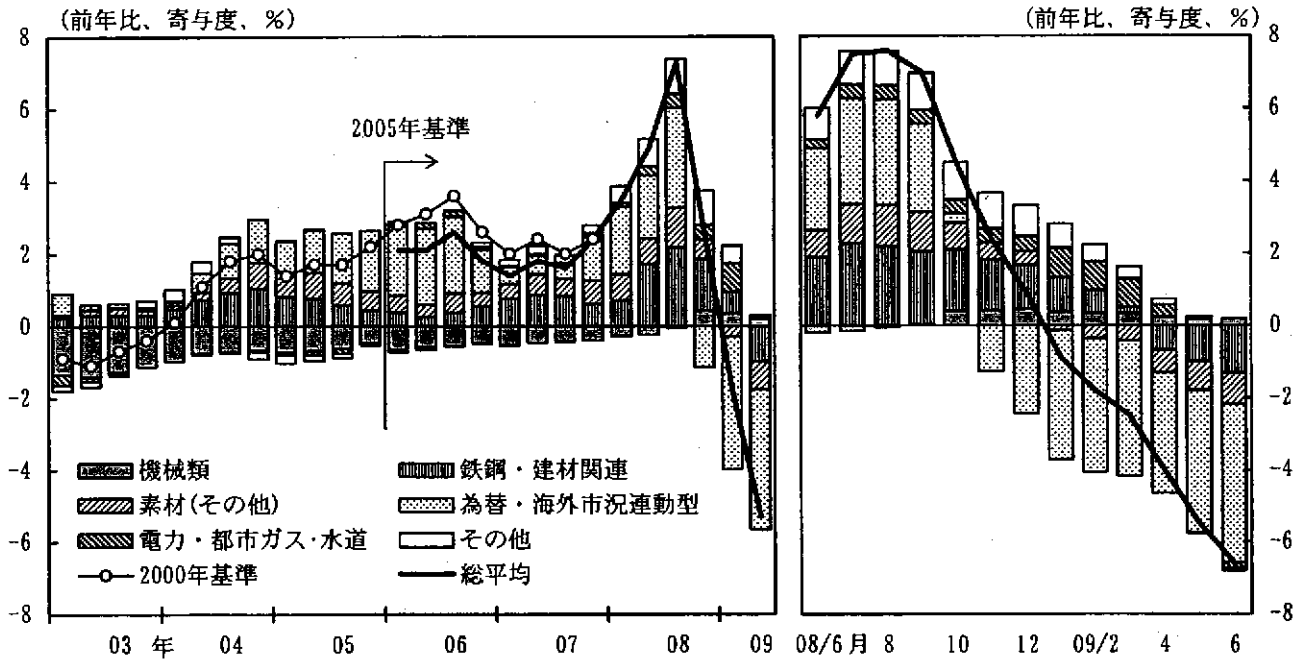
(資料) 日本経済新聞社「日経主要商品価格指数」等

# 国内企業物価

## (1) 前年比

<四半期>

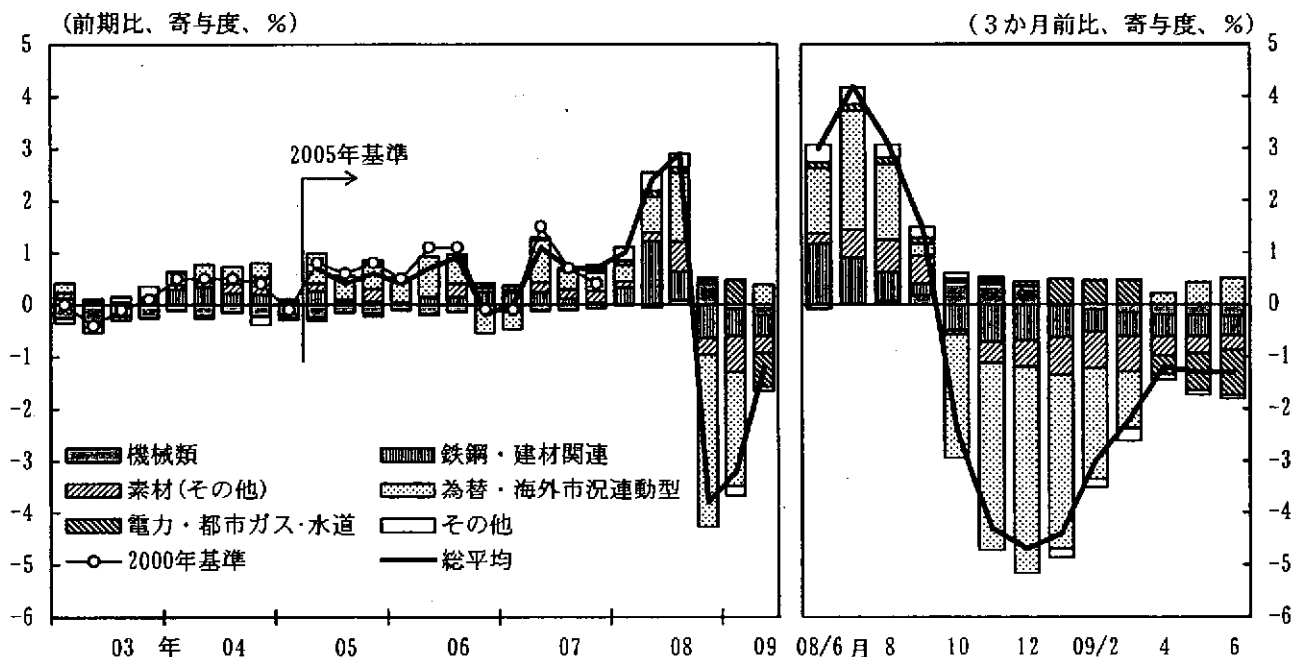
<月次>



## (2) 前期比、3か月前比 (夏季電力料金調整後)

<四半期>

<月次>

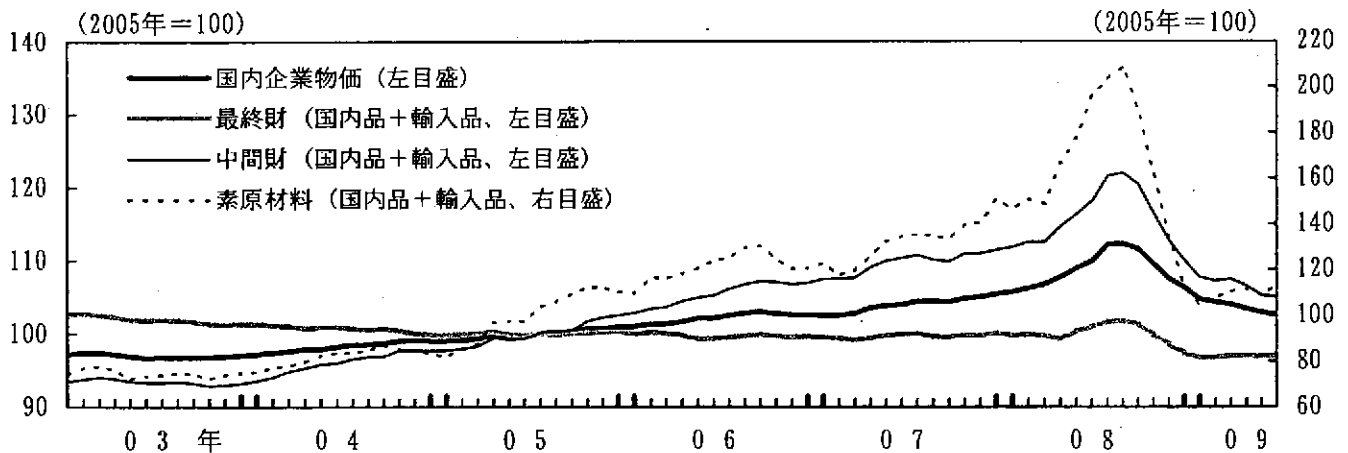


- (注)
1. 機械類：電気機器、情報通信機器、電子部品・デバイス、一般機器、輸送用機器、精密機器
  2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
  3. 素材(その他)：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
  4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
  5. その他：加工食品、その他工業製品、農林水産物、鉱産物
  6. (2)は、毎年7~9月にかけて適用される夏季割り増し電力料金の影響(国内企業物価に対する寄与度は0.2%程度)を除いて算出。
  7. 2000年基準の2007/4Qは、10月の値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

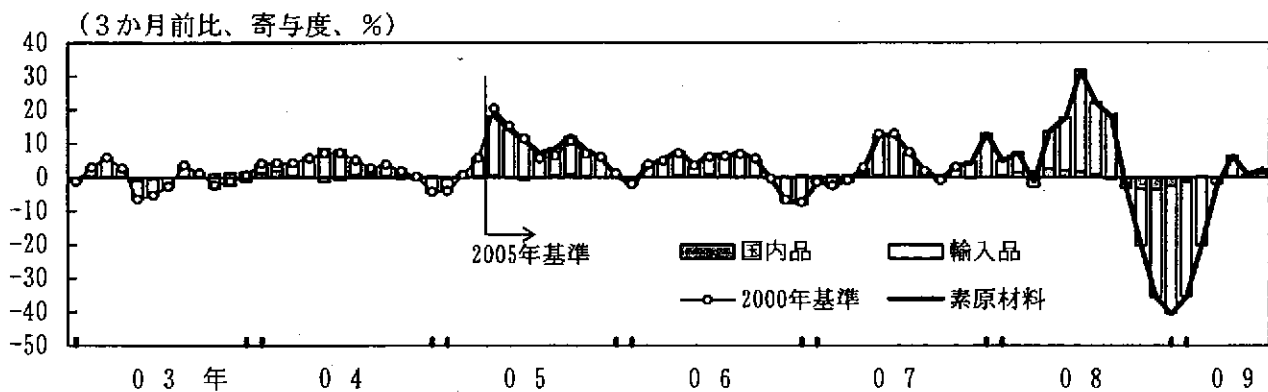
# 企業物価指数の需要段階別推移

## (1) 需要段階別にみた企業物価

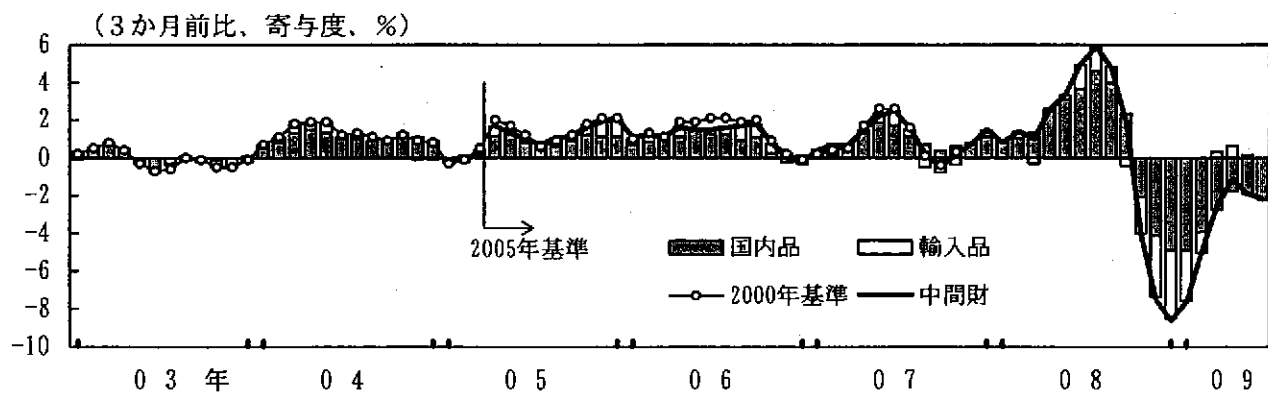


## (2) 各需要段階別指数の推移 (国内品+輸入品)

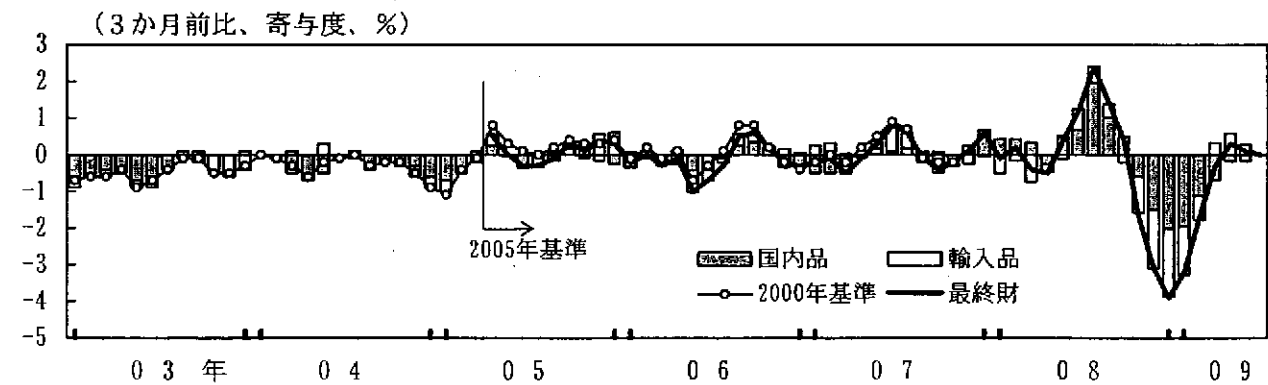
### ① 素原材料



### ② 中間財



### ③ 最終財



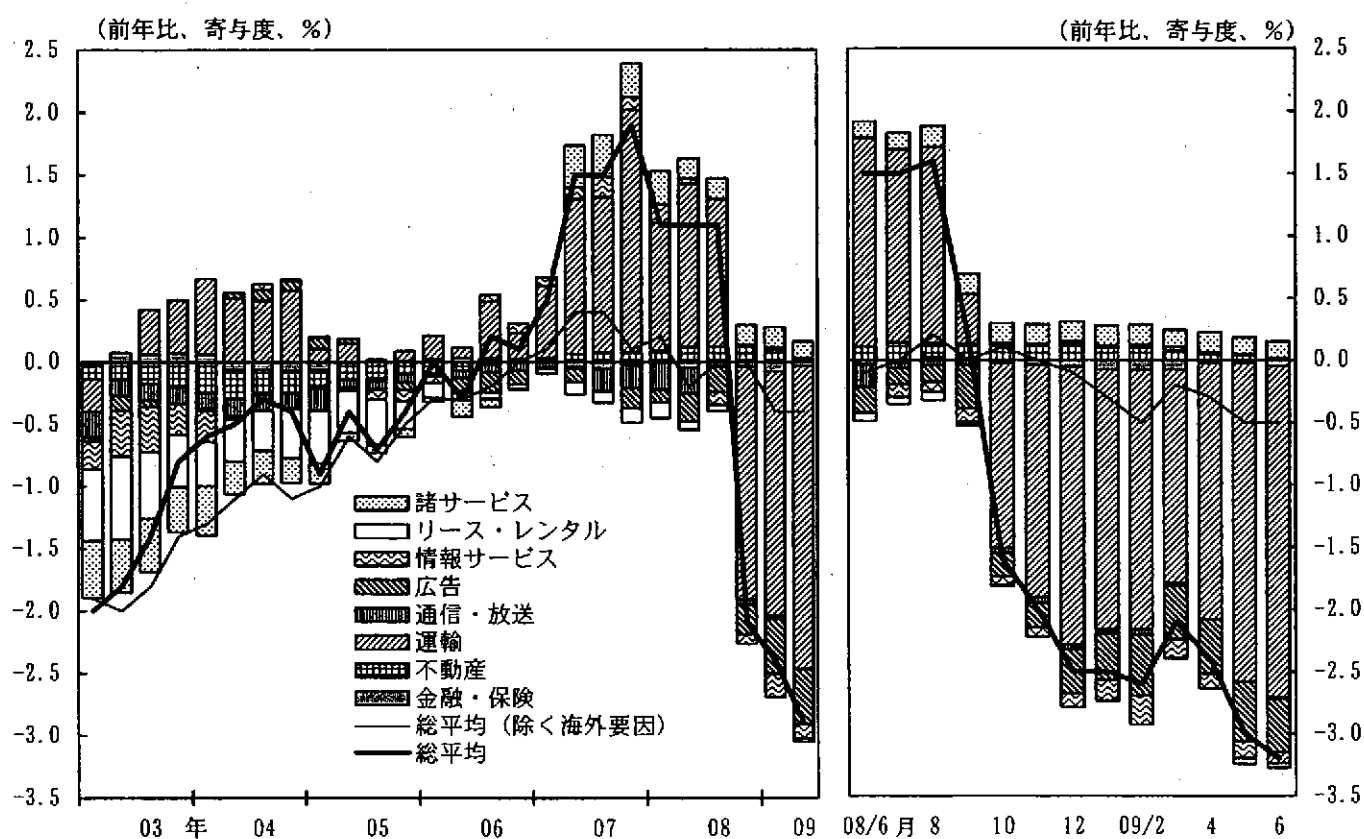
(注) 国内企業物価および中間財については、夏季電力料金を調整。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

## 企業向けサービス価格

		<四半期>				<月次>			
		08/3Q	4Q	09/1Q	2Q	09/3月	4	5	6
総平均	[100.0]	1.1	-2.1	-2.4	-2.9	-2.1	-2.4	-3.0	-3.2
金融・保険	[5.0]	0.1	-0.7	-1.4	-0.6	-1.4	-0.5	-0.5	-0.9
不動産	[7.3]	1.6	1.8	1.3	0.4	1.1	0.7	0.5	0.2
運輸	[19.3]	5.2	-8.0	-8.6	-10.3	-7.5	-8.9	-10.8	-11.2
通信・放送	[9.6]	-0.5	-0.5	-0.4	0.0	-0.2	0.1	0.1	-0.1
広告	[7.5]	-2.8	-3.2	-5.8	-6.0	-5.5	-5.7	-6.6	-5.7
情報サービス	[10.6]	-0.9	-0.7	-1.8	-1.1	-1.5	-1.2	-1.3	-0.9
リース・レンタル	[9.3]	-0.8	0.2	0.3	-0.5	0.5	0.0	-0.8	-0.6
諸サービス	[31.3]	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4
総平均(除く海外要因)	[96.3]	0.0	0.0	-0.4	-0.4	-0.2	-0.3	-0.5	-0.5

—— [ ]はウェイト(%)

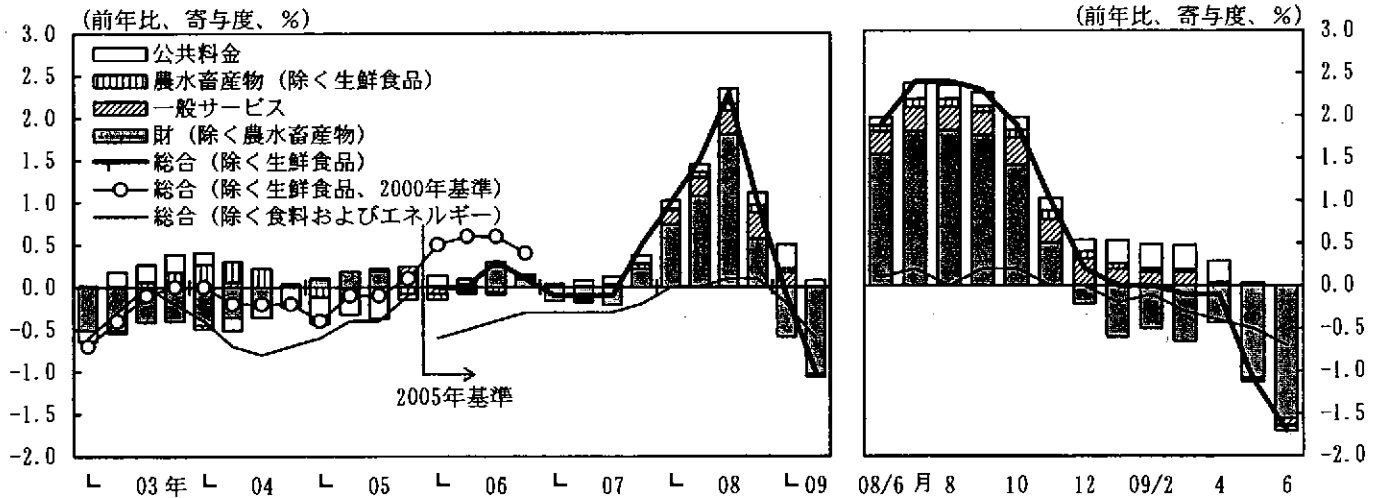


(注) 1. 海外要因：国際航空旅客輸送、定期船、不定期船、外航タンカー、外航貨物用船料、国際航空貨物輸送  
2. 内訳は、総平均に対する寄与度。

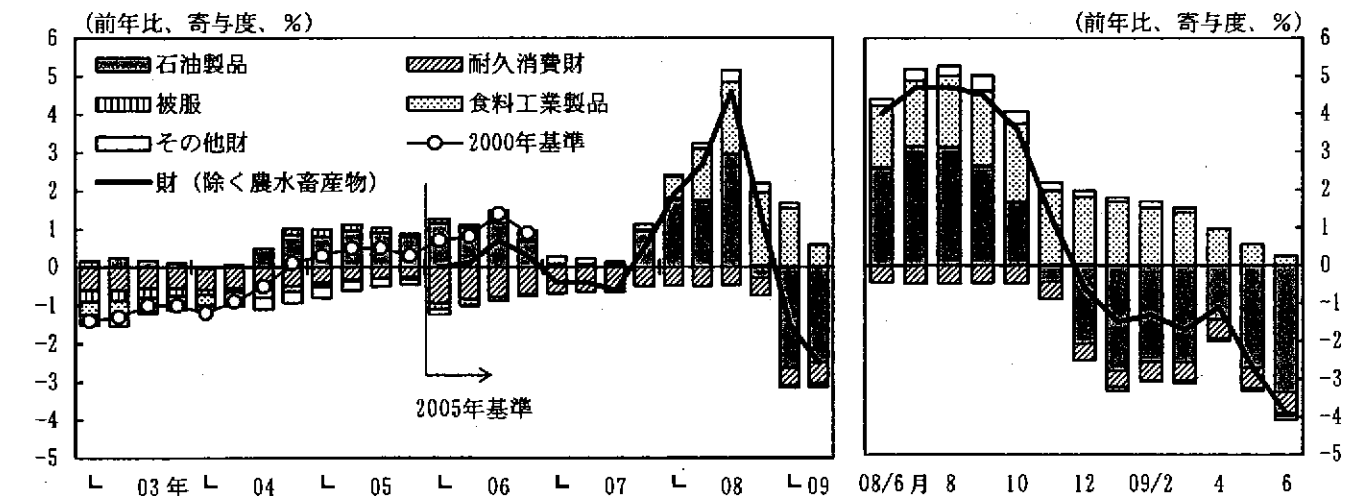
(資料) 日本銀行「企業向けサービス価格指数」

# 消費者物価 (全国)

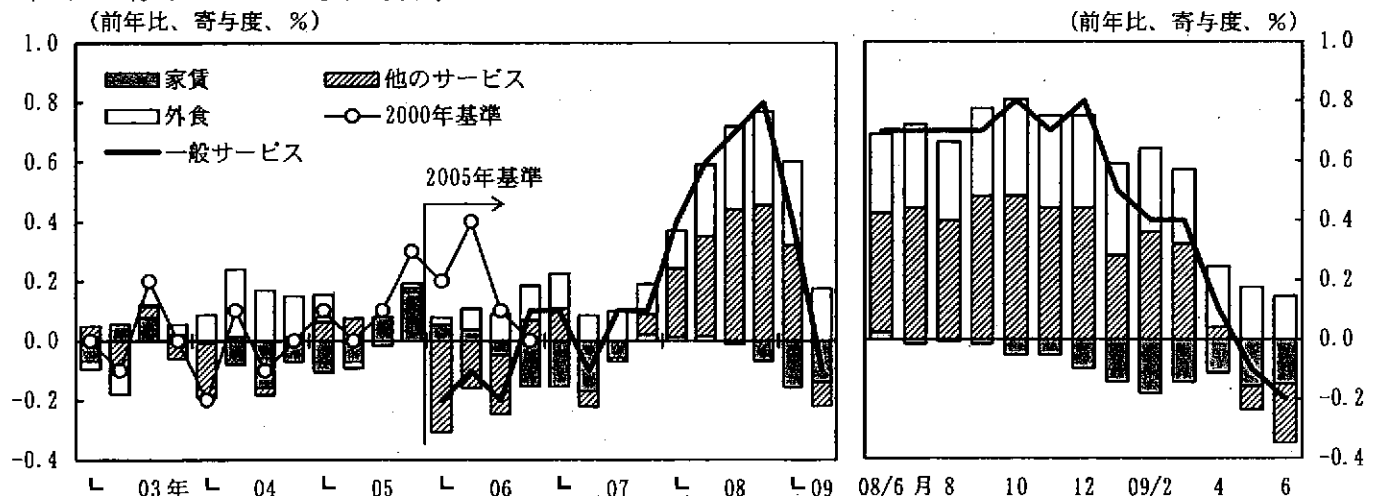
## (1) 総合 (除く生鮮食品)



## (2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



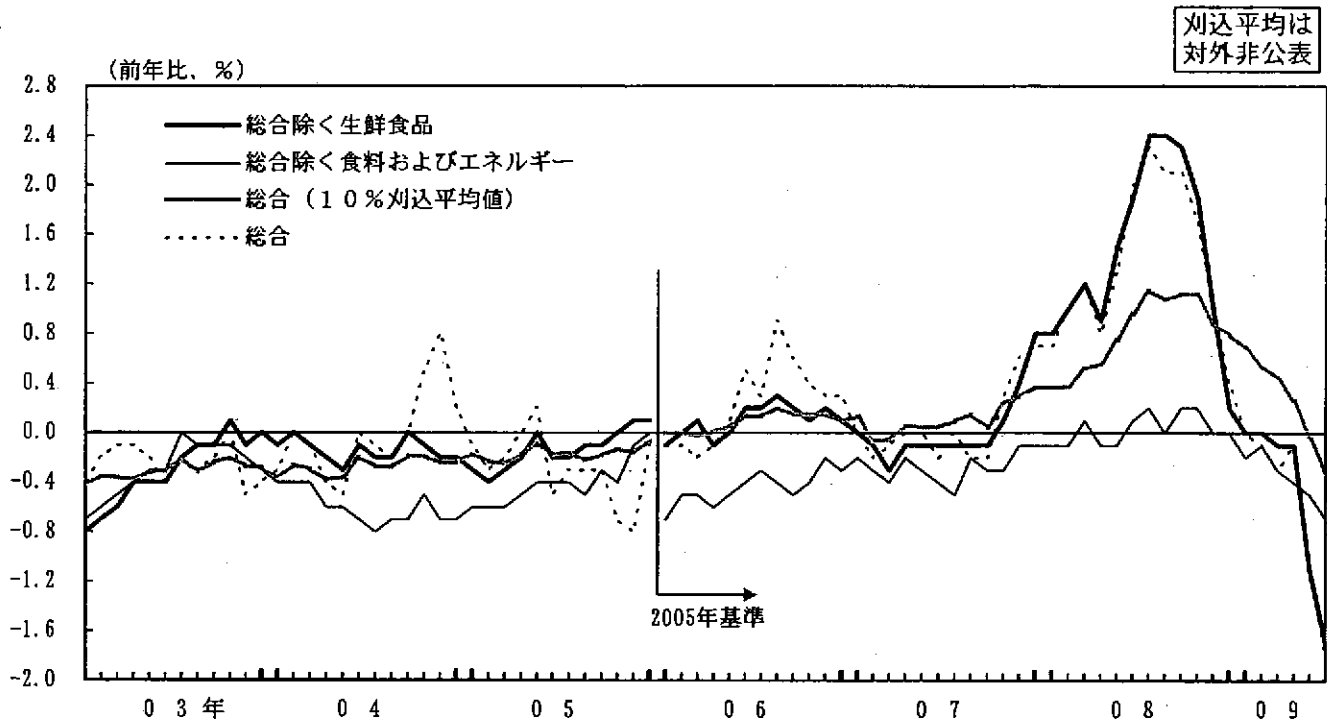
## (3) 一般サービスの要因分解



- (注) 1. 分類は、原則、総務省に則している。  
 ただし、以下の分類については、組み替えて定義している（「」内は総務省公表ベース）。  
 財 = 「財」 - 「電気・都市ガス・水道」  
 公共料金 = 「公共サービス」 + 「電気・都市ガス・水道」  
 被服 = 「衣料」 + 「シャツ・セーター・下着類」  
 家賃 = 「民営家賃」 + 「持家の帰属家賃」
2. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。

(資料) 総務省「消費者物価指数」

## 消費者物価における食料・エネルギーの影響



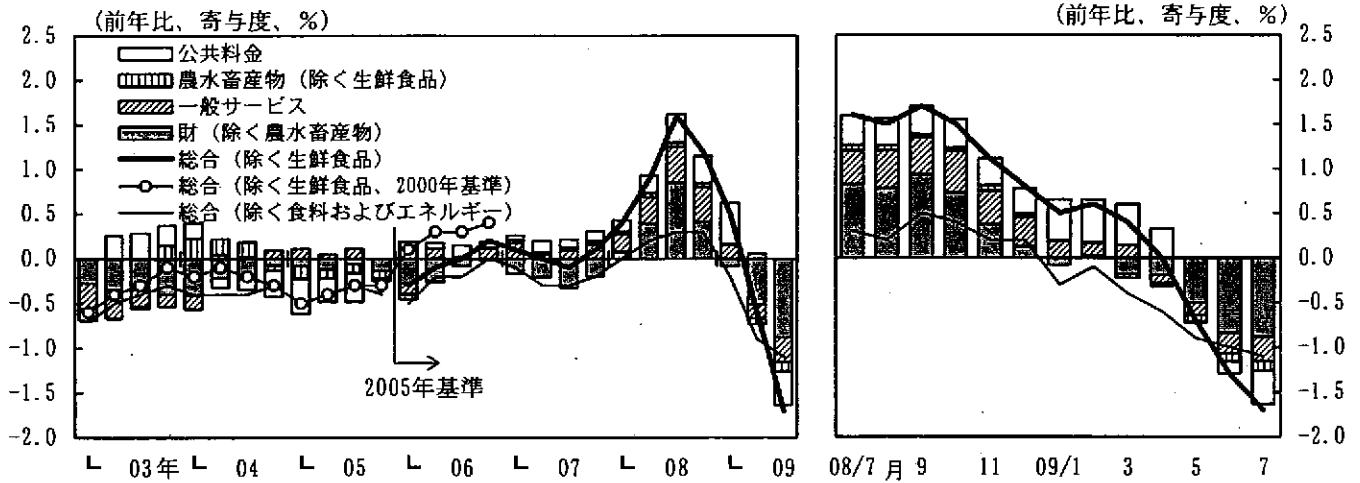
	前年比		総合除く生鮮食品に対する寄与度							前年比	
	総合除く 生鮮食品	総合除く 食料および エネルギー	① 食料 工業製品	② 外食	③ 農水畜産物	④ 石油製品	⑤ 電気代	⑥ 都市 ガス代	食料・ エネルギー (①~⑥) 計	総合	生鮮食品
対込(総合 =10000)	9588	6809	1214	555	269	355	292	93	2778	10000	412
08/3Q	2.3	0.1	0.70	0.11	0.09	1.14	0.16	0.06	2.26	2.2	▲1.5
4Q	1.0	0.1	0.72	0.12	0.10	▲0.11	0.14	0.07	1.04	1.1	▲0.7
09/1Q	▲0.1	▲0.2	0.58	0.11	0.05	▲1.03	0.25	0.10	0.07	▲0.1	▲0.5
2Q	▲1.0	▲0.6	0.23	0.07	▲0.01	▲0.98	0.04	0.05	▲0.60	▲1.0	▲1.6
09/1月	0.0	▲0.2	0.62	0.12	0.07	▲1.08	0.25	0.10	0.08	0.0	1.8
2月	0.0	▲0.1	0.56	0.11	0.06	▲0.99	0.25	0.10	0.09	▲0.1	▲1.2
3月	▲0.1	▲0.3	0.53	0.10	0.04	▲1.00	0.25	0.11	0.02	▲0.3	▲2.1
4月	▲0.1	▲0.4	0.38	0.08	0.01	▲0.55	0.18	0.08	0.17	▲0.1	▲0.9
5月	▲1.1	▲0.5	0.23	0.07	▲0.01	▲1.07	▲0.00	0.04	▲0.73	▲1.1	▲0.5
6月	▲1.7	▲0.7	0.11	0.06	▲0.03	▲1.33	▲0.05	0.02	▲1.22	▲1.8	▲3.6

- (注) 1. 食料は酒類を除く。  
 2. ①の食料工業製品は、酒類を除く。  
 3. ③の農水畜産物は、生鮮食品および切り花（カーネーション、きく、バラ）を除く。  
 4. ④の石油製品はプロパンガス、灯油、ガソリンからなる。  
 5. 食料は食料工業製品（除く酒類）、外食、農水畜産物（除く生鮮食品および切り花）から、エネルギーは石油製品、電気代、都市ガス代からなる。

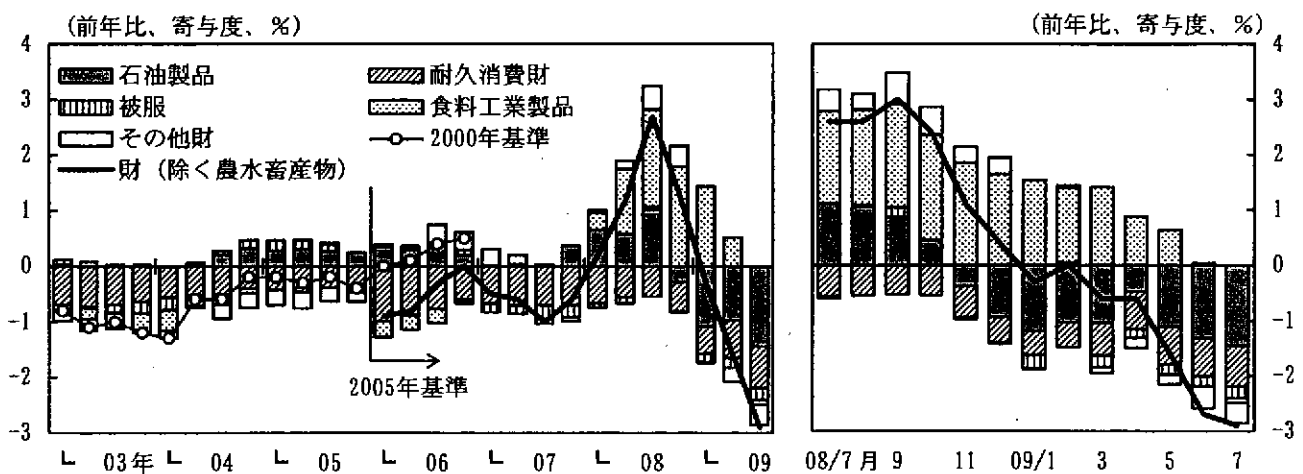
(資料) 総務省「消費者物価指数」

## 消費者物価 (東京)

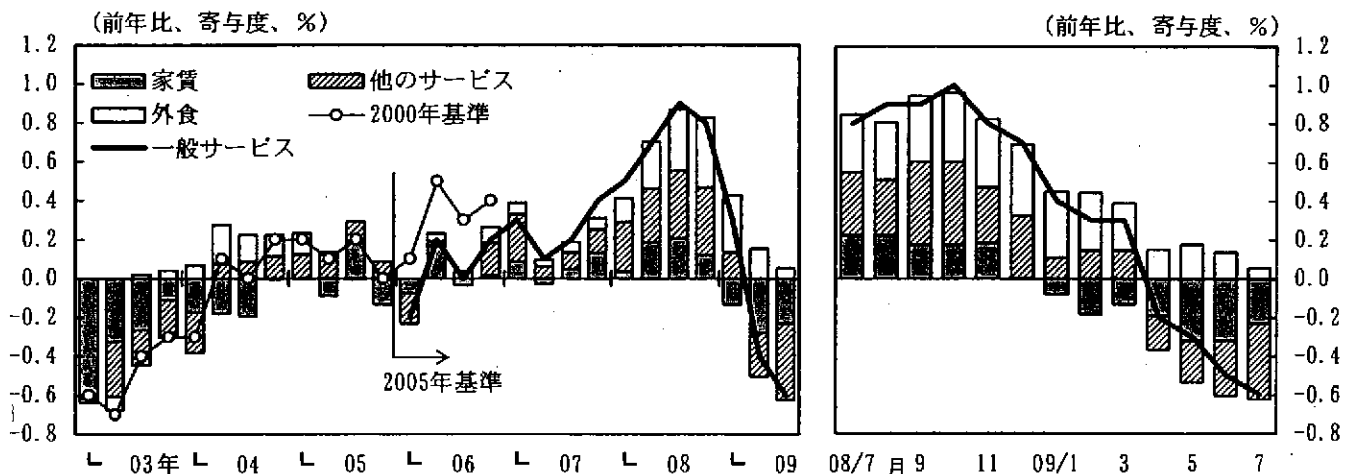
### (1) 総合 (除く生鮮食品)



### (2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



### (3) 一般サービスの要因分解



- (注) 1. 分類は、原則、総務省に則している。  
 ただし、以下の分類については、組み替えて定義している(「」内は総務省公表ベース)。  
 財＝「財」－「電気・都市ガス・水道」  
 公共料金＝「公共サービス」＋「電気・都市ガス・水道」  
 被服＝「衣料」＋「シャツ・セーター・下着類」  
 家賃＝「民営家賃」＋「持家の帰属家賃」
2. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。
3. 2009/7月のデータは中旬速報値。
4. 2009/3Qは、7月の値を用いて算出。

(資料) 総務省「消費者物価指数」

## 地 価 関 連 指 標

## &lt;市街地価格指数&gt;

		— 半年前比：%				
		07/3月末	9月末	08/3月末	9月末	09/3月末
六大都市	商業地	9.8	8.5	3.2	-4.2	-10.8
	住宅地	4.7	3.4	0.7	-2.5	-5.4
六大都市以外	商業地	-0.9	-0.5	-0.6	-1.7	-2.8
	住宅地	-0.6	-0.3	-0.5	-1.3	-2.0

## &lt;地価公示(1月1日時点)・都道府県地価調査(7月1日時点)&gt;

		— 前年比：%						
		06/1月時点	7	07/1	7	08/1	7	09/1
住宅地	東京圏	-0.9	0.7	3.6	4.8	5.5	1.6	-4.4
	大阪圏	-1.6	0.0	1.8	2.9	2.7	1.0	-2.0
	名古屋圏	-1.3	-0.1	1.7	2.4	2.8	1.5	-2.8
	三大都市圏	-1.2	0.4	2.8	4.0	4.3	1.4	-3.5
	地方平均	-4.2	—	-2.7	—	-1.8	—	-2.8
商業地	東京圏	1.0	3.9	9.4	12.1	12.2	4.0	-6.1
	大阪圏	0.8	3.6	8.3	8.0	7.2	2.8	-3.3
	名古屋圏	0.9	2.4	7.8	7.2	8.4	1.9	-5.9
	三大都市圏	1.0	3.6	8.9	10.4	10.4	3.3	-5.4
	地方平均	-5.5	—	-2.8	—	-1.4	—	-4.2

## &lt;オフィスビル空室率等

&gt;

## &lt;土地取引件数(法務統計「売買による土地所有権の移転登記件数」)&gt;

		— 千件、( )内は前年比：%					
07年	08年	08/3Q	4Q	09/1Q	09/3月	4	5
1,440	1,294	306	320	297	124	114	85
(-6.9)	(-10.1)	(-4.5)	(-14.8)	(-10.7)	(-14.1)	(-14.5)	(-16.6)

(資料) 日本不動産研究所「市街地価格指数」、国土交通省「地価公示」「都道府県地価調査」、  
法務省「登記統計調査」



2009.8.10  
調査統計局

（図表13） 設備投資関連指標

（図表14） 設備投資一致指標

（図表15） 設備投資先行指標

（図表16） 中小企業の設備投資実施企業割合

## 設備投資関連指標

## 〈先行指標等〉

— 〈 〉内は季調済前期(月)比、( )内は前年比: %

	08年度	08/10~12月	09/1~3	4~6	09/4月	5	6
機械受注	(-14.1)	<-15.1>	<-9.9>	<-4.9>	<-5.4>	<-3.0>	<-9.7>
〔民需、除く船舶・電力〕		(-23.7)	(-29.4)	(-33.4)	(-32.8)	(-38.3)	(-29.7)
製造業	(-22.4)	<-22.4>	<-31.1>	<10.8>	<-9.4>	<5.4>	<14.6>
非製造業(除く船舶・電力)	(-6.8)	<-10.0>	<4.9>	<-12.1>	<-8.8>	<-6.9>	<7.3>
建築着工床面積	(-7.6)	<-10.6>	<-1.1>	<-34.9>	<-27.3>	<-9.6>	<23.5>
〔民間非居住用〕		(-8.4)	(-11.3)	(-41.2)	(-38.8)	(-49.7)	(-35.3)
うち鉱工業	(4.0)	<-0.2>	<-25.8>	<-41.0>	<-32.5>	<-29.0>	<35.3>
うち非製造業	(-11.6)	<-8.9>	<7.5>	<-34.5>	<-24.8>	<-8.7>	<20.6>
資本財総供給	<-15.1>	<-5.8>	<-19.8>	<-13.5>	<-11.6>	<-4.7>	<8.2>
資本財総供給(除く輸送機械)	<-15.8>	<-4.9>	<-13.3>	<-18.7>	<-19.1>	<-1.5>	<4.3>

- (注) 1. 機械受注の2009/7~9月の見通し(季調済前期比)は、民需(除く船舶・電力)-8.6%、製造業-15.0%、非製造業(除く船舶・電力)-4.7%となっている。  
 2. 建築着工床面積は、X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 3. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。また、年度の値は季調済前年比。

## 〈法人企業統計・設備投資〉

— 〈 〉内は季調済前期比、( )内は前年比: %

	06年度	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	09/1~3
全産業	(13.5)	(1.2)	<-7.1>	<-5.3>	<-7.4>	<-8.6>
うち製造業	(9.8)	(11.1)	<-1.0>	<-4.1>	<-9.3>	<-9.4>
うち非製造業	(15.7)	(-4.3)	<-10.9>	<-6.1>	<-6.0>	<-8.0>

- (注) 年度の計数は、法人企業統計年報(資本金1千万円未満を含む)、四半期の計数は、法人企業統計季報(資本金1千万円以上)を使用。金融業、保険業を除く。

## 〈設備投資アンケート調査〉

— 前年比: %、( )内は2009年3月調査時点

	2008年度実績	2009年度計画		
		修正率	修正率	
全国短観(6月調査)	全産業	-6.4 (-5.4)	-17.1 (-14.3)	-4.2 ( - )
	製造業	-7.4 (-4.3)	-28.0 (-20.0)	-12.9 ( - )
	非製造業	-5.8 (-6.0)	-11.2 (-11.2)	0.1 ( - )
うち大企業・全産業	全産業	-6.6 (-3.3)	-9.4 (-6.6)	-6.3 ( - )
	製造業	-7.2 (-2.4)	-24.3 (-13.2)	-17.1 ( - )
	非製造業	-6.2 (-3.8)	-0.8 (-2.7)	-0.6 ( - )
うち中小企業・全産業	全産業	-9.8 (-12.0)	-36.6 (-35.6)	0.9 ( - )
	製造業	-7.7 (-8.5)	-41.5 (-42.2)	2.2 ( - )
	非製造業	-10.8 (-13.7)	-34.1 (-32.1)	0.4 ( - )

- (注) 土地投資額を含み、ソフトウェア投資額は含まない。

— 前年比: %、( )内は2008年6月調査時点

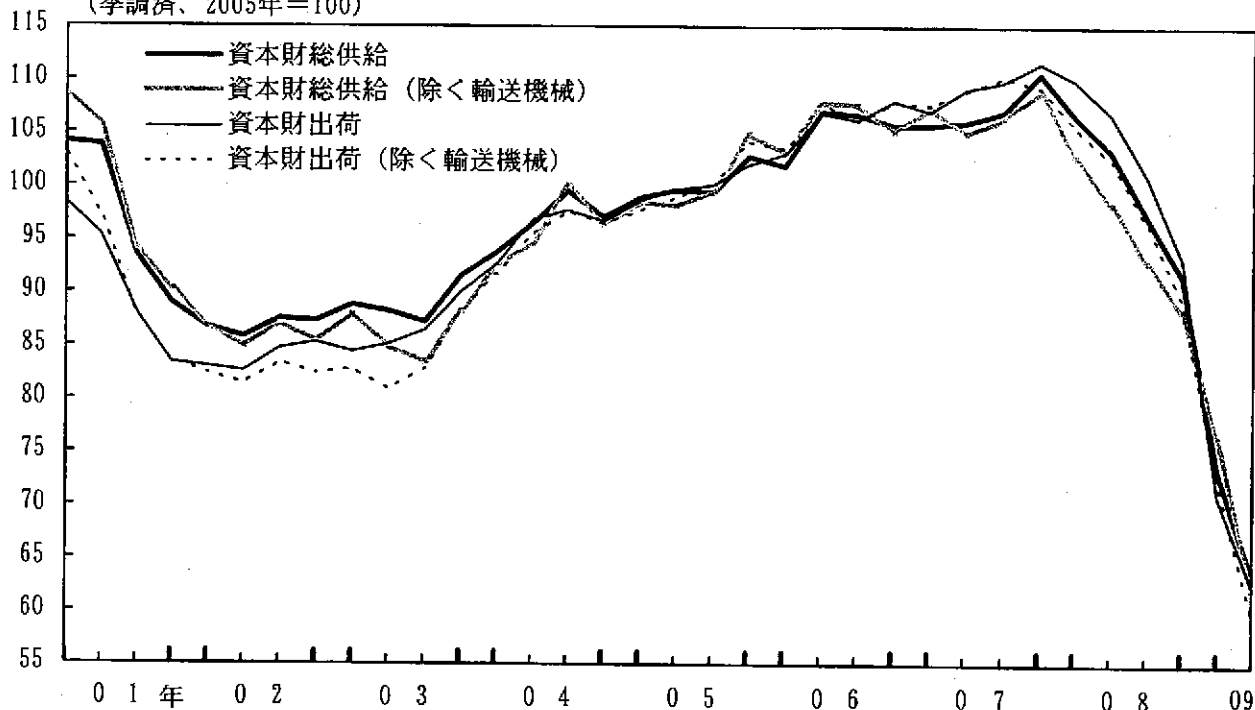
	2007年度実績	2008年度実績	2009年度計画	2010年度計画
日本政策投資銀行(2009年6月調査)	7.7	-7.1 (4.1)	-9.2 (-0.9)	-3.7
うち製造業	6.6	-9.7 (6.8)	-20.7 (-8.6)	-12.2
うち非製造業	8.5	-5.6 (2.4)	-0.1 (1.4)	-1.5

- (資料) 経済産業省「鉱工業総供給表」、内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」、財務省「法人企業統計季報」「法人企業統計年報」、日本政策投資銀行「設備投資計画調査」、日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

# 設備投資一致指標

## (1) 資本財の総供給・出荷

(季調済、2005年=100)

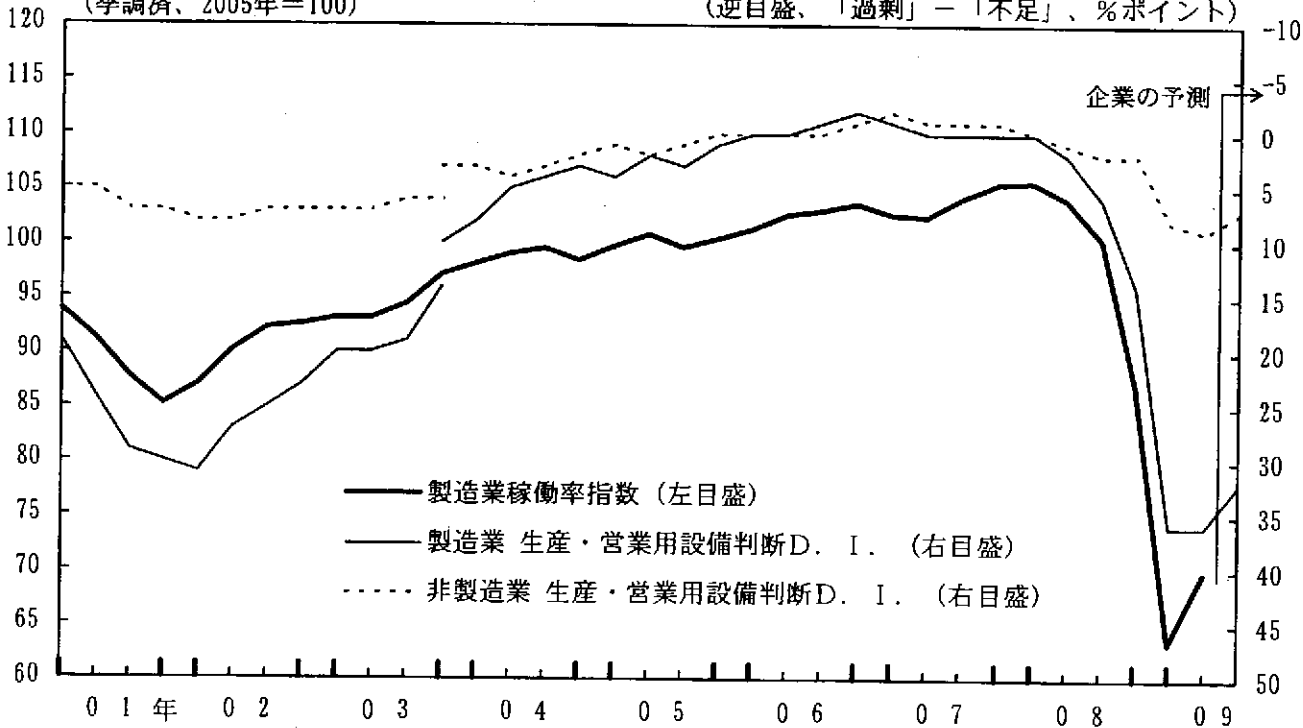


(注) 1. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。  
 2. 資本財出荷は、国内向けの国産品と輸出品を合わせたもの。

## (2) 稼働率と設備判断D. I.

(季調済、2005年=100)

(逆目盛、「過剰」-「不足」、%ポイント)

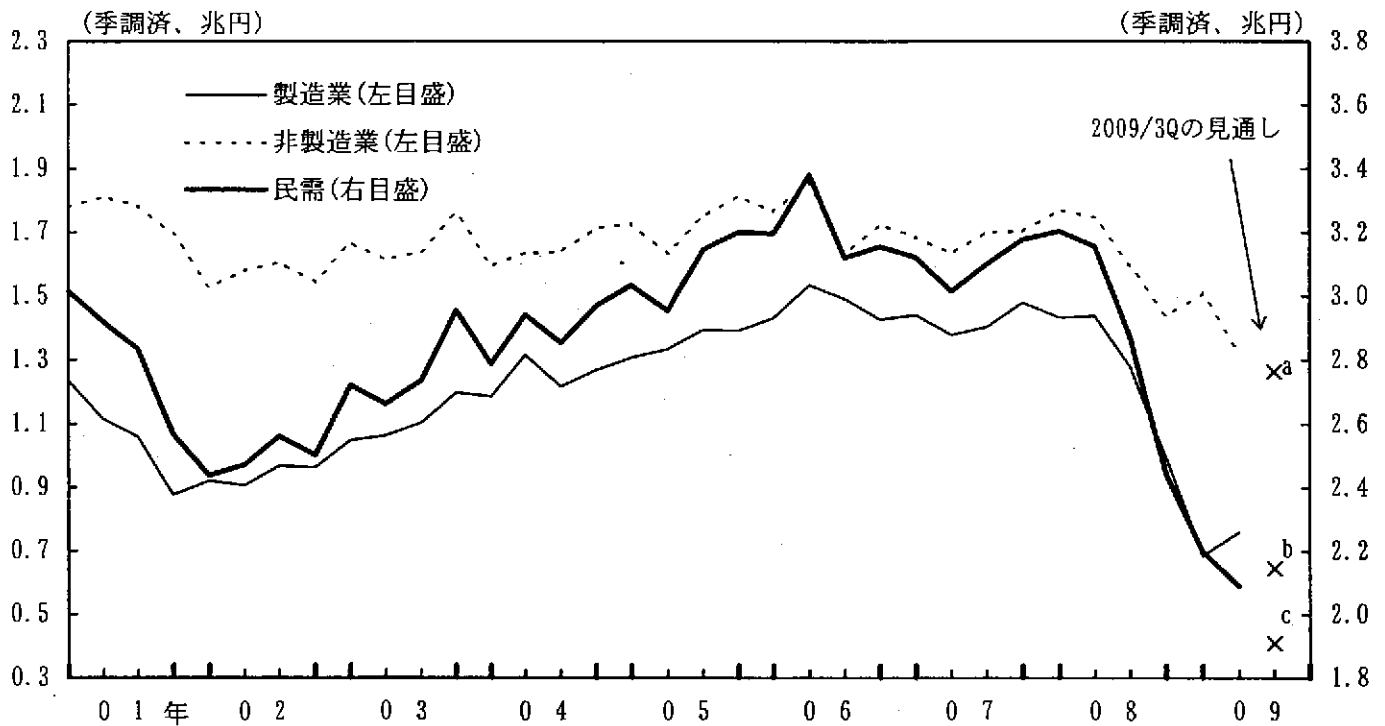


(注) 1. 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。  
 2. 生産・営業用設備判断D. I. は、2004/3月調査より見直しを実施。  
 旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から。  
 3. 製造業稼働率指数の2009/2Qは4~5月の計数。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、  
 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

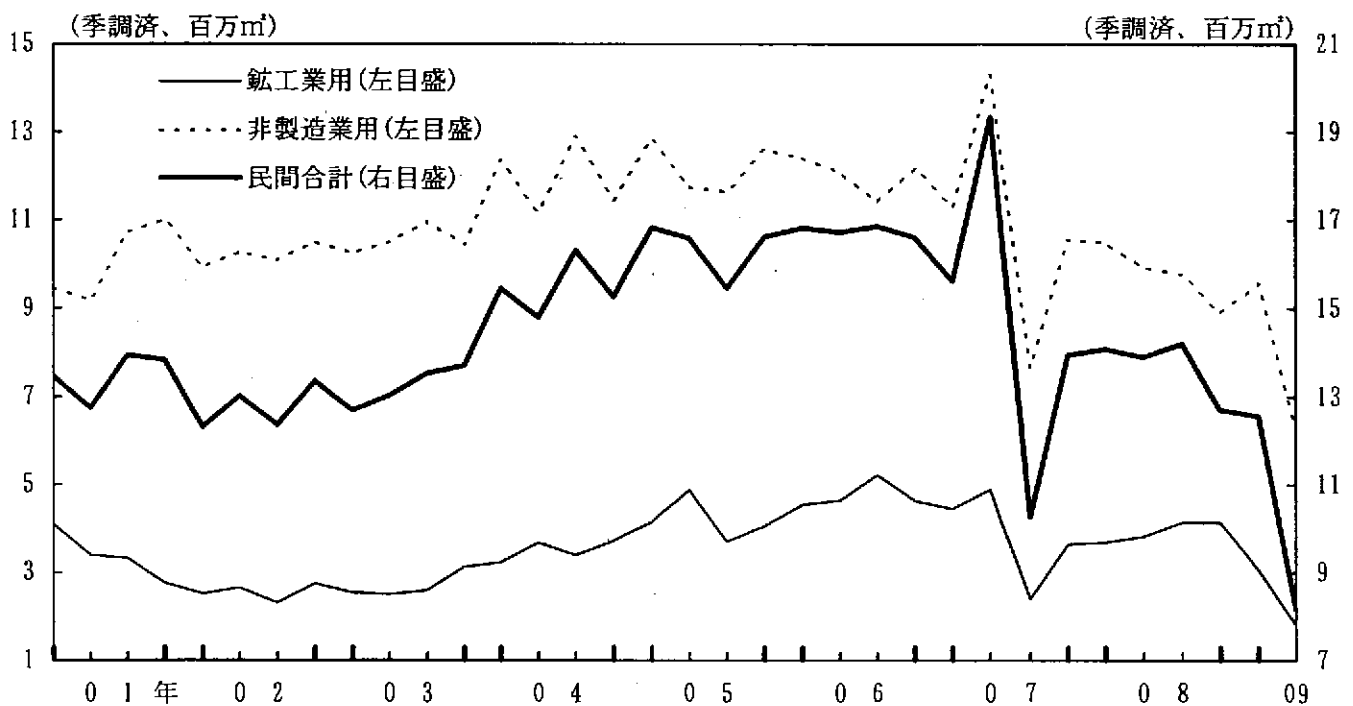
## 設備投資先行指標

### (1) 機械受注



- (注) 1. 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。  
 2. 2009/3Qの見通しは、aは非製造業、bは製造業、cは民需の見通し。

### (2) 建築着工床面積(民間非居住用)



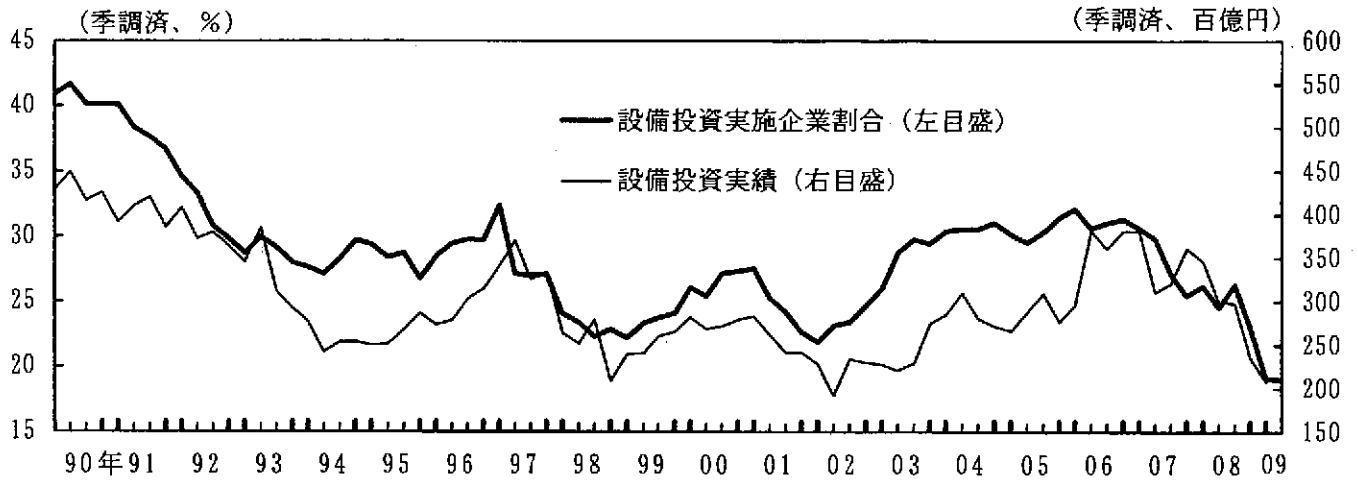
- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。  
 2. 新産業分類に対応し、2003年度以降、新聞・出版業が鉱工業から非製造業に分類変更となった。そのため、リンク係数を算出のうえ、2002年度以前を水準調整している。

(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

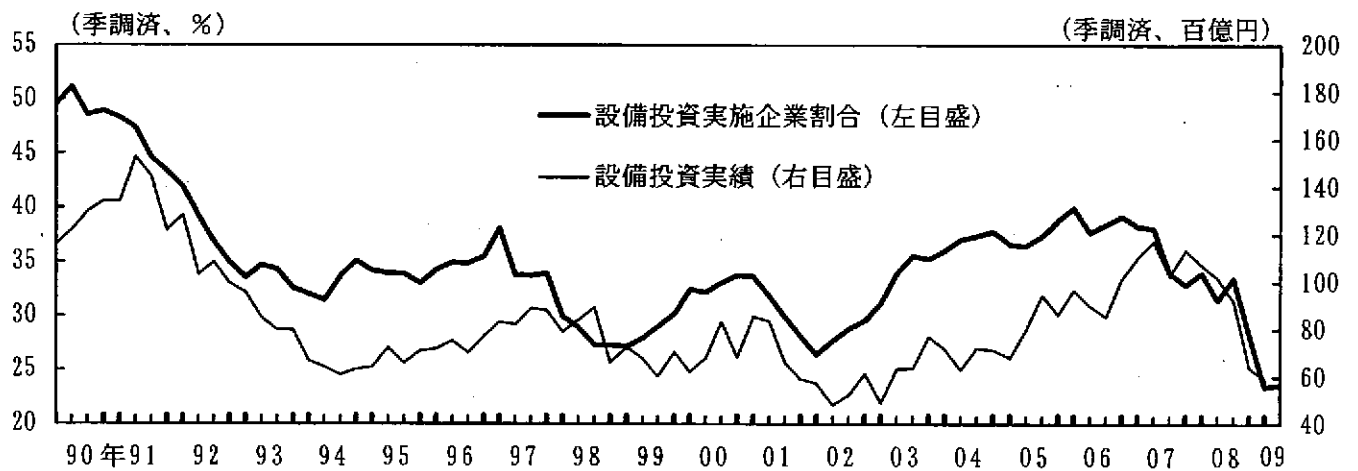
# 中小企業の設備投資実施企業割合

—日本政策金融公庫 6月中・下旬調査—

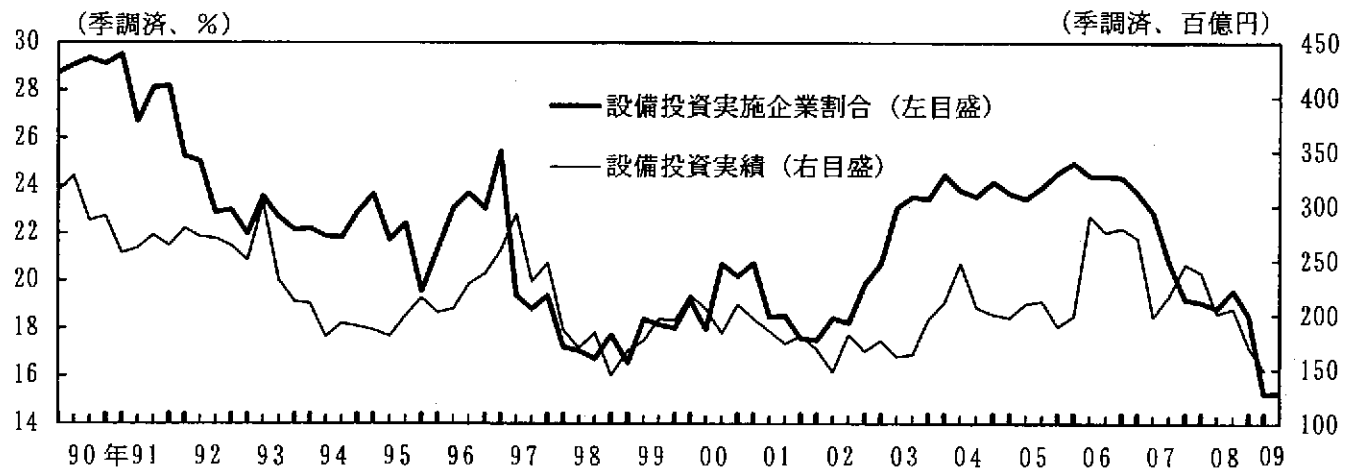
## (1) 全産業



## (2) 製造業



## (3) 非製造業



(注) 1. 設備投資実施企業割合は全国中小企業動向調査ベース (調査対象:13,229社、有効回答企業数:6,755社)。  
2. 設備投資実績は法人季報ベース (資本金1千万円～1億円未満)。X-11による季節調整値。

(資料) 日本政策金融公庫「全国中小企業動向調査」、財務省「法人企業統計季報」